沖縄県文化財調査報告書第84集

石　川　市

古我地原貝塚

――沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（6）――

本　文　編

1987年12月

沖縄県教育委員会

沖縄県文化財調査報告書第84集

石　川　市

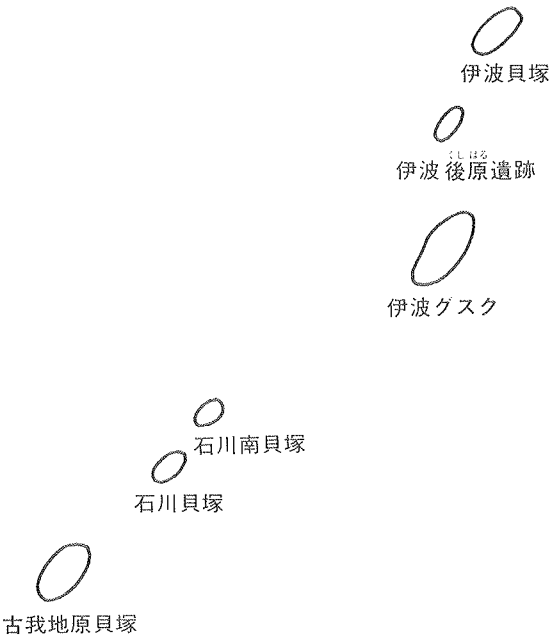
古我地原貝塚

——沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（6）——

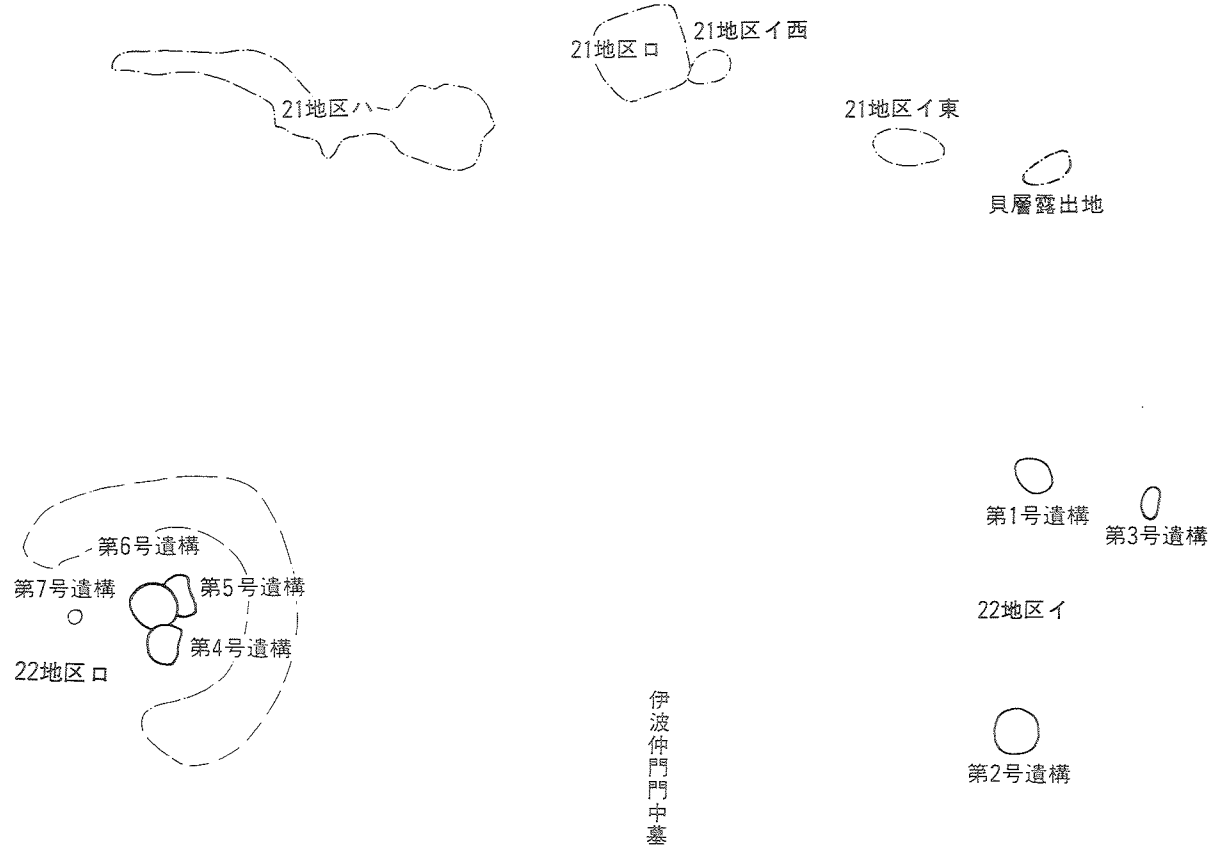
本　文　編

1987年12月

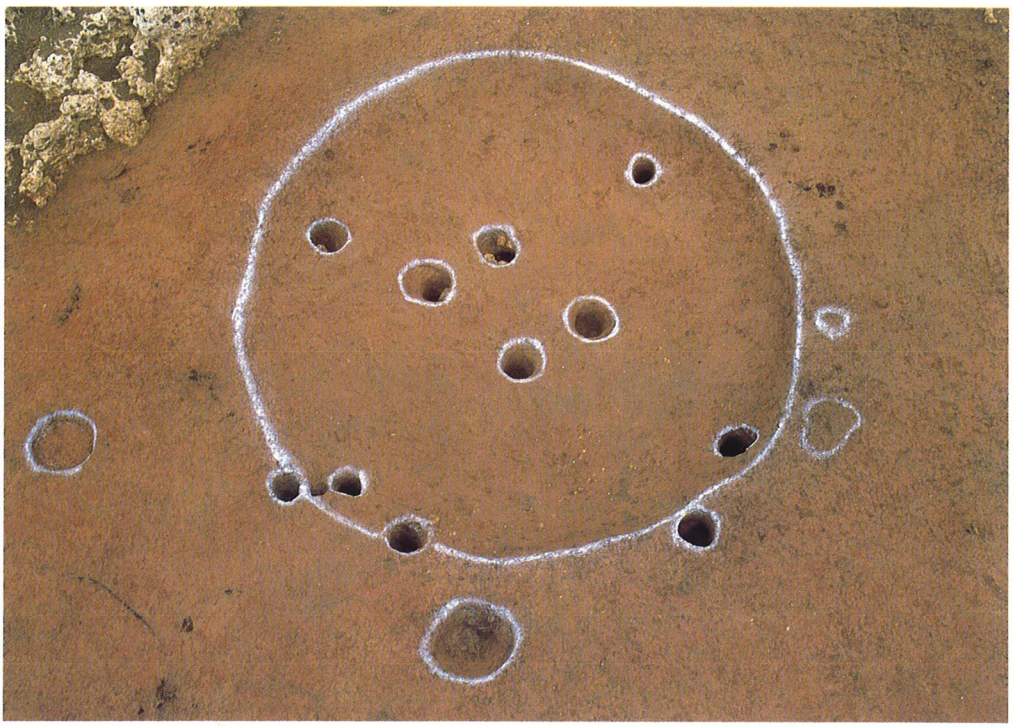
沖縄県教育委員会


伊波貝塚
伊波後原遺跡
伊波グスク
石川南貝塚
石川貝塚
古我地原貝塚

古我地原貝塚周辺の空中写真


21地区ハ
21地区ロ
21地区イ西
21地区イ東
貝層露出地
第6号遺構
第7号遺構
第5号遺構
第4号遺構
22地区ロ
伊波仲門門中墓
第1号遺構
第3号遺構
22地区イ
第2号遺構

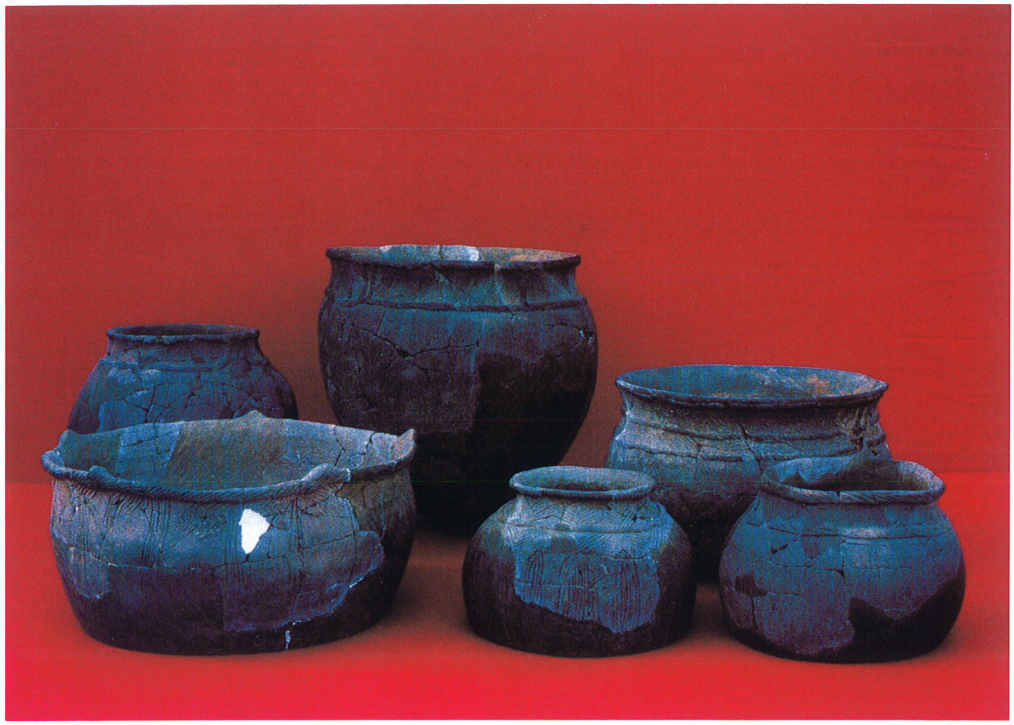
遺構全景



上：22地区イ第１号遺構　下：22地区イ第２号遺構

上：22地区ロ遺構全景　下：22地区ロ第４号遺構

上：21地区イ焼土　下：21地区ハの貝層



上：第１群土器　下：第２群土器

貝・骨・石製品

序

本調査報告書は石川市字伊波古我地原所在の古我地原貝塚発掘調査の成果を記録したものであります。

さて、沖縄の復帰記念事業として開催された沖縄国際海洋博覧会に関連して、日本道路公団により石川～許田間に自動車道が開設されたのは周知の通りであります。その後、石川～那覇間の延長計画が策定されたのでありますが、同公団と当委員会との間では早い時期から、当該区間の文化財の取り扱いに関する照会、協議、調整に取り組んでまいりました。

当委員会としましても独自に分布調査事業を実施し、埋蔵文化財の適切な保存に配慮してきたところであります。

最終的に確定した予定路線内における埋蔵文化財は７件で、このうち６件については現状保存がきわめて困難であるということで、やむをえず記録保存の措置をとることとなった次第であります。当遺跡はそのひとつであります。

発掘調査についてはその経費を同公団が負担し、沖縄県がこれを受託して当委員会が担当するということで協議が成立し、昭和57年度から実施してまいりました。この間、日本道路公団沖縄建設所の文化財に対する御理解と御協力をいただき、円滑に発掘調査が推進できたことを喜びとするものであります。

発掘調査の結果、当遺跡から原始時代の土器、石器、骨器、貝器、料糧残滓（貝殻・動物骨）などの埋蔵文化財が豊富に出土しました。これらを記録した本報告書は、沖縄の原始時代の生活と社会の様相を知る資料として、大いに役立つものと確信するものであります。

本書が文化財についての知識の普及ならびに文化財愛護思想の高揚、さらには歴史学習教材および学術研究などの資料として、今後各方面に活用されることを期待するものであります。

昭和62年12月25日

沖縄県教育委員会

教育長　池　田　光　男

例　言

1．　本報告書は昭和58、59年度に実施した、石川市古我地原貝塚緊急発掘調査の成果をまとめたもので、本文編、図版編からなる。

2．　調査は、「沖縄自動車道建設工事」に伴うもので、日本道路公団沖縄建設事務所の委託を受けて、沖縄県教育委員会が実施した。

3．　発掘調査及び資料整理にあたっては、下記の方々の指導、助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

高宮廣衛（沖縄国際大学学長）、河口貞徳（鹿児島県考古学会会長）、長野真一（鹿児島県文化課）、知念勇（沖縄県立博物館）大城逸朗（県立教育センター）、日越国昭（沖縄県立博物館）、宮城康一（琉球大学理学部生物学科講師）、松井章（奈良国立文化財研究所）、石川市教育委員会。

4．　獣骨、石質、貝類の同定は、下記の方々による。記して謝意を表する次第である。

- 獣骨・骨製品－金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）
- 人骨－内藤芳篤（長崎大学人類学教室）
- 石質－神谷厚昭（南風原高校）
- 貝類・貝製品－黒住耐二（沖縄生物学会）
- 植生－島袋守成、仲田栄二

5．　本書に使用した航空写真は国土地理院発行のものを使用した。

6．　本報告書の執筆は、次の通りである。なお、編集は島袋があたった。

第１章・第１節、第２節……安里　嗣淳
第３章、第４章、第５章・第２節、第６章・第１節、第７章……島袋　洋
第２章・第２節……座間味政光
第５章・第１節・１、第６章・第３節、第４節、第５節……島袋　春美
第５章・第１節・２、第６章・第１節……島　弘
第６章・第２節……岸本　義彦
第６章・第６節１……花城　潤子
第６章・第６節２、３……黒住　耐二
第６章・第７節……金子　浩昌
第６章・第８節……大田　宏好

7．　資料整理は下記のメンバーでおこなった。

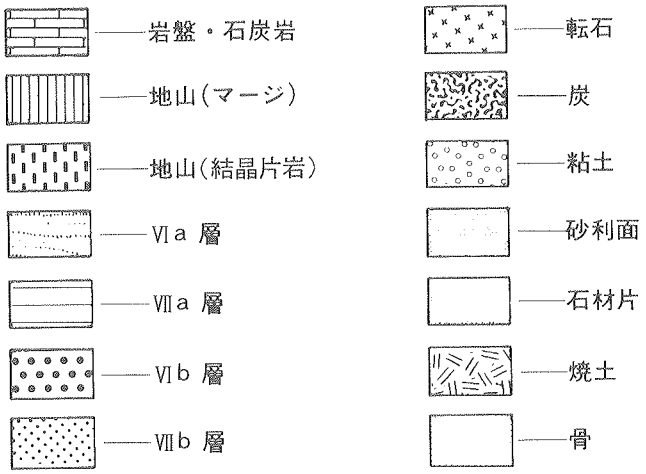
洗浄・注記・分類　瑞慶覧尚美、平良利江、中村洋子、大嶺みな子、大城勝江、伊集恵子、下地洋子、田中寿賀子、赤嶺京美、大城千夏、大城直子、大浜

正子、城間光子、高良末子、玉城貴美枝、当真須賀子、友寄秀子、仲里かおり、野村由起子、松田清美。

実測・トレース　渡慶次純子、高良三千代、上地千賀子、大城秀子、大城ますみ、松川朝子、池原直美、大城聖子、比嘉優子、城間千栄子。

写真撮影　座間味政光、島袋洋、岸本義彦、金城亀信、大田宏好、島袋春美。

8．本書の層序、及び平面図の凡例は次の通りである。



9．調査で得られた遺物はすべて沖縄県教育庁文化課資料室に保管してある。

本　文　目　次

序
例言
第１章　調査に至る経緯…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査組織…… 3
第２章　位置と環境…… 5
　第１節　貝塚の位置と自然環境…… 5
　第２節　周辺の遺跡…… 7
第３章　調査の経過…… 9
第４章　遺跡の概要…… 14
第５章　層序と遺構…… 15
　第１節　崖上地区（22地区）…… 15
　　１．22地区イ…… 15
　　２．22地区ロ…… 30
　第２節　崖下地区（21地区）…… 45
　　１．21地区イ…… 45
　　２．21地区ロ…… 49
　　３．21地区ハ…… 53
第６章　出土遺物…… 66
　第１節　土器…… 66
　第２節　石器…… 214
　第３節　貝製品…… 278
　第４節　骨製品…… 302
　第５節　石製品…… 324
　第６節　軟体動物遺存体…… 327
　　１．貝類遺存体…… 327
　　２．出土したキバウミニナ類の特徴、特に破損形態について…… 346
　　３．遺跡出土貝類の生息場所類型化の試み…… 359
　第７節　節足・脊椎動物遺存体…… 363
　第８節　貝塚出土のグスク時代・近世遺物…… 388
　第９節　古我地原貝塚の人骨…… 391
第７章　収束…… 392

挿　図　目　次

図1　石川市の位置…… 2
図2　古我地原貝塚の位置及び石川市の遺跡分布…… 6
図3　地形図及びグリッド設定…… 11
図4　22地区イ層序…… 17
図5　22地区イ遺構の配置…… 19
図6　22地区イ第1号遺構上面…… 21
図7　22地区イ第1号遺構集石露出状況（赤は石上面取り上げ後）…… 22
図8　22地区イ第1号遺構焼土面と掘り下げ後の状況…… 23
図9　22地区イ第2号遺構上部の遺物出土状況…… 25
図10　22地区イ第2号遺構（竪穴遺構）…… 26
図11　22地区イ第3号遺構の層序…… 27
図12　22地区イ第3号遺構上部の遺物出土状況…… 28
図13　22地区イ第3号遺構の掘り下げ後の状況…… 29
図14　22地区ロの層序…… 31
図15　22地区ロ遺構断面…… 32
図16　22地区ロ遺構配置…… 33
図17　22地区ロ第5、6号遺構上部第Ⅳ層面の遺物出土状況…… 35
図18　22地区ロ第4号遺構第Ⅴ層0／5.10／15cmの遺物出土状況…… 36
図19　22地区ロ第4号遺構の掘り下げ状況…… 37
図20　22地区ロ第5、6号遺構掘り下げ後の状況…… 38
図21　22地区ロ第6号遺構内炉跡、第7号遺構…… 40
図22　22地区ロ第8号遺構、焼土NO,1、焼土NO,2、焼土NO,6の状況… 44
図23　21地区イ西区の層序…… 46
図24　21地区イ東区貝溜まりの状況と層序…… 47
図25　21地区イ西区の焼土の状況…… 49
図26　21地区イ西区、21地区の平面（包含層の状況）…… 50
図27　21地区ロ貝だまりと焼土の状況…… 51
図28　21地区ロ層序…… 52
図29　21地区ハ第Ⅵb層と第Ⅶ層の範囲…… 55
図30　21地区ハ層序（1）…… 57
図31　21地区ハ層序（2）…… 59
図32　21地区ハ第Ⅳ層面の焼土の状況…… 61
図33　21地区ハ第Ⅶ層下部の焼土の状況…… 62
図34　21地区ハ西区第Ⅵb層下部の炭集中部と犬骨集中部…… 63
図35　21地区ハ西区犬骨出土状況…… 65
図36　22地区イ遺構外（1～3）及び第2号遺構（4～17）出土土器…… 69
図37　22地区イ第2号遺構出土土器…… 70
図38　22地区イ第3号遺構出土土器…… 73
図39　22地区イ第3号遺構出土土器…… 74
図40　22地区ロ遺構外出土土器第1群… 79
図41　22地区ロ遺構外出土土器第1群… 81
図42　22地区ロ遺構外出土土器第2群… 83

図43　22地区ロ遺構外出土土器第２群…　85
図44　22地区ロ遺構外出土土器第２群…　87
図45　22地区ロ遺構外出土土器第２群…　89
図46　22地区ロ遺構外出土土器底部……　90
図47　22地区ロ遺構外出土土器底部……　91
図48　22地区ロ第１号遺構出土土器……　93
図49　22地区ロ第５号遺構出土土器……　96
図50　22地区ロ第６号遺構出土土器……　99
図51　21地区イ出土土器第１群（１～９）
第２群（10～11）…… 102
図52　21地区イ出土土器第２群(12～19)
その他（20）底部（21～28）…… 104
図53　21地区ロ出土土器第１群…… 107
図54　21地区ロ第２群（16～30）、その
他（31、32）底部（33～39）…… 109
図55　凸帯上文様の模式図…… 111
図56　壺形土器面縄前庭式（１～５）、
その他の資料(6)…… 114
図57　壺形土器…… 115
図58　壺形土器…… 116
図59　壺形土器…… 117
図60　ａ：弧状文グループ…… 119
図61　ｂ：叉状刺突文グループ…… 120
図62　ｃ：叉状刻目文グループ…… 122
図63　ｄ：ハの字状文グループ…… 123
図64　ｅ：斜位の刻目文グループ…… 125
図65　ｅ：斜位の刻目文（117)、ｈ、横
撚刻文（118）Ｂ、仲泊式の要素
の多いもの（119）…… 126
図66　ｃ：叉状刻目文（121）ｅ：斜位
の刻目文（120、122、123）…… 127
図67　ｅ：斜位の刻目文グループ（124）
底部資料（125）…… 128
図68　ｂ：叉状刺突文グループ（128）
ｅ：斜位の刻目文グループ（126、127、
129）…… 129
図69　ｆ：縦位の刻目文グループ…… 130
図70　ｇ：貝殻文グループ…… 132
図71　ｈ：横撚刻文グループ…… 133
図72　特殊土器…… 134
図73　仲泊Ａ式…… 137
図74　仲泊Ｂ式…… 138
図75　Ａ：面縄前庭式の要素が多いもの
…… 141
図76　Ｂ：仲泊式の要素が多いもの…… 142
図77　Ａ：面縄前庭式の要素が多いもの
（247、248）　Ｂ：仲泊式の要素
が多いもの（249～252）…… 143
図78　底部資料…… 144
図79　21地区ハ第２群面縄東洞式土器
（皿形）…… 159
図80　21地区ハ第２群面縄東洞式土器
（壺形）…… 161
図81　21地区ハ第２群面縄東洞式…… 165
図82　21地区ハ第２群面縄東洞式…… 166
図83　21地区ハ第２群面縄東洞式…… 168
図84　21地区ハ第２群面縄東洞式…… 169
図85　21地区ハ第２群面縄東洞式…… 171
図86　21地区ハ第２群面縄東洞式…… 172
図87　21地区ハ第２群面縄東洞式…… 174
図88　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 180
図89　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 182
図90　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 183
図91　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 184
図92　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 185
図93　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 186
図94　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 187
図95　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 189

図96　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 191
図97　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式…… 192
図98　21地区ハ第２群嘉徳Ⅱ式…… 197
図99　21地区ハ第２群嘉徳Ⅱ式…… 198
図100 21地区ハ第２群嘉徳Ⅱ式…… 200
図101 21地区ハ第２群神野Ｅ式、伊波式
…… 202
図102 21地区ハ第２群神野Ｅ式、伊波式
…… 204
図103 21地区ハ第２群無文の資料…… 206
図104 21地区ハ第２群無文の資料…… 207
図105 21地区ハ第２群無文の資料…… 208
図106 21地区ハ第２群底部…… 209
図107 21地区ハ第２群底部…… 210
図108 21地区ハ第２群底部…… 212
図109 21地区その他の資料…… 213
図110 石斧（１）…… 217
図111 石斧（２）…… 219
図112 石斧（３）…… 221
図113 石斧（４）…… 223
図114 石斧（５）…… 225
図115 石斧（６）…… 227
図116 石斧（７）、ノミ状工具…… 229
図117 敲打器（１）…… 233
図118 敲打器（２）…… 235
図119 敲打器（３）…… 237
図120 敲打器（４）…… 239
図121 敲打器（５）…… 241
図122 敲打器（６）…… 243
図123 敲打器（７）…… 245
図124 敲打器（８）…… 247
図125 敲打器（９）…… 249
図126 敲打器（10）…… 251
図127 敲打器（11）…… 253
図128 敲打器（12）…… 255
図129 敲打器（13）…… 257
図130 敲打器（14）…… 259
図131 敲打器（15）…… 261
図132 敲打器（16）…… 263
図133 敲打器（17）…… 265
図134 敲打器（18）…… 267
図135 すり石（１）…… 269
図136 すり石（２）…… 270
図137 石皿…… 272
図138 砥石（１）…… 274
図139 砥石（２）…… 275
図140 器台状石器…… 276
図141 チャート製石器…… 277
図142 附刃範囲模式…… 279
図143 貝刃、螺蓋製貝斧…… 281
図144 ホラガイ有孔製品…… 283
図145 スイジガイ製品、貝匙、二枚貝有
孔製品…… 284
図146 貝輪、その他…… 286
図147 貝製小玉（１）…… 287
図148 貝製小玉（２）…… 288
図149 貝製小玉（３）…… 289
図150 貝製小玉（４）…… 290
図151 貝製小玉（５）…… 291
図152 貝製小玉 長径、短径分布…… 294
図153 イモガイ、ノシガイ、トミガイ、
タカラガイ製品…… 295
図154 タカラガイの部位名と製品の取り
方…… 297
図155 タカラガイ、イモガイ札状製品… 299
図156 骨針、骨錐…… 304
図157 ヤス状刺突具、ヘラ状製品、ナイ
フ状製品…… 307

図158 骨輪結合図…… 308
図159 骨輪…… 309
図160 垂飾品（サメ、イルカ、イノシシ）、サメ脊椎…… 311
図161 イノシシ牙加工品…… 313
図162 かんざし、ジュゴン・シカ製品…… 317
図163 ジュゴン棒状製品、ジュゴン不明、その他…… 319
図164 クジラ製品…… 321
図165 勾玉状石製品…… 324
図166 石製品…… 325
図167 彫刻石製品…… 326
図168 生息地別構成比較…… 340
図169 生息地別構成比較…… 343
図170 キバウミニナ類の各部の名称と測定部位…… 346
図171 出土したキバウミニナ類…… 348
図172 各区分におけるキバウミニナ類の殻径組成…… 351
図173 キバウミニナ類の殻径と殻長の相関関係…… 352
図174 摩滅度による破損角度の相違…… 353
図175 殻径による破損角度の相違…… 353
図176 キバウミニナの各区分における破損角度の頻度分布…… 354
図177 キバウミニナ類の歯状突起…… 355
図178 幼貝と成貝の破損角度の比較…… 356
図179 波浪の変化に基づく海洋地形の3タイプ模式図…… 360
図180 出土魚類の構成比較…… 373
図181 イヌ計測部位…… 377
図182 イノシシ歯の咬耗度分布…… 385
図183 須恵器・陶質土器・陶磁器…… 389
図184 簪・煙管・古銭…… 391
図185 奄美系土器出土分布…… 394

表　目　次

表1 炭化物出土状況…… 16
表2 第2号遺構柱穴観察一覧…… 24
表3 崖上地区遺構比較一覧…… 41
表4 22地区ロピット群出土一覧（1～2）…… 42
表5 沖縄・奄美諸島の土器編年…… 67
表6 22地区イ土器出土状況…… 68
表7 22地区ロ土器出土状況…… 76
表8 種別底径…… 88
表9 21地区イ土器出土状況…… 100
表10 21地区ロ土器出土状況…… 105
表11 21地区ハ土器出土状況…… 110
表12 壺形と凸帯上文様の関係…… 113
表13 文様別出土状況…… 135
表14 第Ⅰ群復元及び図上復元観察一覧（1～3）…… 145
表15 第Ⅰ群土器出土一覧(1～11)…… 148
表16 種と肥厚帯の幅…… 162
表17 種別出土状況…… 164
表18 復元土器観察一覧（1～2）…… 175
表19 種別出土状況…… 179
表20 復元土器観察一覧（1～2）…… 193
表21 口縁部と口唇部の文様関係…… 196
表22 復元土器観察一覧…… 199
表23 器種と石質の相関…… 214
表24 類別と出土地区の相関…… 215

表25　石斧観察一覧（1～7）…… 216
表26　類別と出土地区の相関…… 231
表27　敲打器観察一覧（1～18）…… 232
表28　すり石観察一覧…… 268
表29　砥石観察一覧…… 273
表30　チャートの地区別出土状況…… 277
表31　貝製品出土状況…… 278
表32　螺蓋製貝斧出土一覧…… 280
表33　貝刃出土一覧…… 280
表34　ホラガイ有孔製品出土一覧…… 282
表35　二枚貝有孔製品（貝錘）…… 282
表36　貝輪出土一覧…… 285
表37　部位出土状況　…… 285
表38　貝製小玉出土一覧（1～2）…… 292
表39　イモガイ・マクラガイ製品出土一覧…… 294
表40　タマガイ有孔製品出土一覧…… 296
表41　ノシガイ製品出土一覧…… 296
表42　タカラガイ製品出土一覧…… 297
表43　タカラガイ札状製品出土一覧…… 298
表44　イモガイ札状製品出土一覧…… 298
表45　スイジガイ加工品出土一覧…… 300
表46　二枚貝研磨有孔製品出土一覧…… 300
表47　その他の加工品出土一覧…… 300
表48　骨製品出土状況…… 302
表49　骨針出土一覧…… 303
表50　骨錐出土一覧…… 303
表51　ヤス状刺突具（トリ）出土一覧…… 305
表52　ヤス状刺突具（エイ）出土一覧…… 305
表53　ヤス状刺突具（クジラ）出土一覧…… 306
表54　クジラヘラ状製品出土一覧…… 306
表55　ナイフ状製品出土一覧…… 308
表56　骨輪出土一覧…… 310
表57　サメ歯有孔製品出土一覧…… 310
表58　イルカ、イノシシ有孔製品出土一覧…… 312
表59　イノシシ加工別出土状況…… 312
表60　イノシシ牙加工品出土一覧…… 314
表61　サメ脊椎有孔製品出土一覧…… 315
表62　骨製かんざし出土一覧　…… 315
表63　ジュゴン札状製品出土一覧…… 316
表64　札状製品出土一覧…… 316
表65　シカ棒状加工品出土一覧…… 318
表66　ジュゴン棒状加工品出土一覧…… 318
表67　クジラ加工品出土一覧…… 320
表68　ジュゴン棒状製品不明出土一覧… 320
表69　不明出土一覧…… 322
表70　有孔石刃出土一覧…… 324
表71　シレナシジミガイ計測相関…… 328
表72　アラスジケマンガイの計測相関…… 329
表73　主体貝構成比較…… 329
表74　21地区イ区の貝類出土状況…… 330
表75　21地区ロ区の貝類出土状況…… 332
表76　主体貝構成比較…… 334
表77　主体貝構成比較…… 335
表78　シレナシジミガイ計測相関…… 337
表79　アラスジケマンガイの計測相関… 337
表80　21地区ハ区の貝類出土状況…… 338
表81　22地区イ　遺構別主体貝構成比較…… 342
表82　22地区イ区の貝類出土状況…… 344
表83　キバウミニナ類の部位別出土状況…… 347
表84　各区分ごとのキバウミニナ類の種

類組成…… 349
表85 キバウミニナ類の貝殻中の土壌から得られた陸産貝類の種類組成… 358
表86 沖縄における貝類の生息場所類系…… 361
表87 サメ脊椎計測一覧…… 366
表88 サメ目・エイ目の出土状況…… 366
表89 魚骨の出土状況（1～2）…… 369
表90 カエル類骨片の出土状況…… 374
表91 爬虫類（リクガメ、ウミガメ、ヘビ類）の出土状況…… 374
表92 鳥類骨の出土状況…… 375
表93 コウモリの出土状況…… 376
表94 ネズミ類、ケナガネズミの出土状況…… 376
表95 クジラ目の出土状況…… 377
表96 イヌの出土状況…… 378
表97 ジュゴン骨の出土状況…… 379
表98 イヌ下顎骨・後臼歯計測一覧…… 380
表99 イヌの尺骨計測一覧…… 380
表100 イヌ歯牙の出土状況…… 380
表101 イノシシの出土状況…… 381
表102 イノシシ歯牙の出土状況…… 383
表103 年齢段階別イノシシの最少推定固体数…… 385
表104 ウシ骨の出土状況…… 386
表105 近世遺物の出土状況…… 388
表106 古銭観察一覧…… 391

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景（北側から）
図版2 遺跡全景
図版3 遺跡近景（南側から）
図版4 遺跡近景北から（上－伐採前、下－伐採後）
図版5 22地区イ（上－伐採状況、下－発掘後）
図版6 22地区イ（上－発掘状況、下－完掘状況）
図版7 22地区イの層序
図版8 22地区イ（上－第1号遺構とフィッシャー、下－フィッシャー）
図版9 22地区イ　フィッシャー内遺物出土状況
図版10 22地区イ第1号遺構（上－検出状況、下－第Ⅱ層途中）
図版11 22地区イ第1号遺構（上－石灰岩礫露出状況、下－下部の木炭露出状況）
図版12 22地区イ第1号遺構（上－木の実？出土状況、下－完掘状況）
図版13 22地区イ第2号遺構（上－検出状況、下－第Ⅱ層0～5cm掘り下げ状況）
図版14 22地区イ第2号遺構（上－埋土の状況、下－第Ⅱ、Ⅲ層完掘状況）
図版15 22地区イ第3号遺構（上－検出状況、下－第Ⅱ層途中）
図版16 22地区イ第2号遺構の発掘風景
図版17 22地区イ第3号遺構（上－発掘風景、下－実測風景）
図版18 22地区ロ発掘風景
図版19 22地区ロ発掘風景（表土剥ぎ）
図版20 22地区ロ発掘風景（遺構の検出）

図版21　上－22地区ロ103～107ライン層序、下－22地区ハの表土及び地山の状況
図版22　22地区ロ109ライン第Ⅲ・Ⅳ層の状況
図版23　22地区ロ109ライン第Ⅲ・Ⅳ層の状況
図版24　22地区ロ（上－107ライン第Ⅱ・Ⅲ層、下－けライン第Ⅱ・Ⅳ層）の状況
図版25　22地区ロ（上－お－108北壁、下－試掘トレンチの状況）
図版26　22地区ロ（上－第Ⅱ層の検出状況、下－第Ⅴ層面の露出状況）
図版27　22地区ロ遺構検出状況（第Ⅴ層面）
図版28　22地区ロ第Ⅴ層面露出状況
図版29　22地区ロ第４号遺構（上－検出状況、下－発掘途中）
図版30　22地区ロ第４号遺構上－半裁状況、下－焼土と石皿の状況（西北側）
図版31　22地区ロ（上－第４号・第８号遺構完掘状況、下－第６号遺構完掘状況）
図版32　22地区ロ第６号遺構（上－埋土の状況、下－炉跡の半裁状況）
図版33　22地区ロ　ピット群の検出状況（上－南東から、下－南側から）
図版34　22地区ロ　ピットの状況
図版35　22地区ロ上－遺構全景、下－竪穴遺構の全景
図版36　22地区ロ第７号遺構（上－発掘途中、下－完掘状況）
図版37　21地区イ東区（上－全景、下－掘り下げ後）
図版38　21地区イ西区岩陰（上－露出した貝、下－焼土の露出状況）
図版39　21地区イ西区貝層断面
図版40　21地区ロ層序（上－南壁、下－西壁）
図版41　21地区ロ層序（上－按司墓内、下－第Ⅳ層断面）
図版42　21地区ハ西区（上－伐採後、下－発掘風景）
図版43　21地区ハ東区（上－発掘風景、下－第Ⅵ・Ⅶ層の広がり）
図版44　21地区ハ西区　上－発掘風景、下－層序（Ａ－95西壁）
図版45　21地区ハ西区層序（上－き－94西壁・94ライン北壁、下－いライン東壁）
図版46　21地区ハ東区層序（上－94ライン南壁、下－95ライン南壁）
図版47　21地区ハ東区第Ⅶ層（上－露出状況、下－ウミニナの集中と焼土）
図版48　21地区ハ東区(Ｅ－95東壁の第Ⅶ層）
図版49　21地区ハ（上――Ｆ－95の大型貝の露出状況、下――き－94第Ⅵ層面の状況）
図版50　水洗い風景
図版51　上－植生の調査、下－見学風景
図版52　22地区イ遺物の出土状況－第１号（１、２）第２号（３、４、５）第３号（６、７、８）
図版53　22地区ロ遺物の出土状況－土器（１～４）、石製品（５）、石器（６）、チャート（７）
図版54　21地区遺物の出土状況－ヤス状製品（１）、サメ歯製品（２）、石器（３～５）チャート石核（６）
図版55　21地区ハ遺物の出土状況－面縄東洞式（１、２、５、６）、嘉徳Ⅰ式（４）、嘉徳Ⅱ式（３）底部（７、８）

図版56　21地区ハ遺物の出土状況－面縄前庭式、仲泊式
図版57　21地区ハ遺物の出土状況－壺形土器（1）、骨製品（2、3、4、5）、犬骨（6）、ジュゴン（7）、チャートとクジラ（8）
図版58　22地区イ遺構外（1～3）及び第2号遺構（4～17）出土の土器
図版59　22地区イ第2号・第3号遺構出土土器
図版60　22地区イ第3号遺構出土土器
図版61　22地区ロ遺構外出土土器（第1群）
図版62　22地区ロ遺構外出土土器（第1群）
図版63　22地区ロ遺構外出土土器（第2群）
図版64　22地区ロ遺構外出土土器（第2群）
図版65　22地区ロ遺構外出土土器（第2群）
図版66　22地区ロ遺構外出土土器（第2群）
図版67　22地区ロ遺構外出土土器（底　部）
図版68　22地区ロ遺構外出土土器（底　部）
図版69　22地区ロ第4号遺構出土土器
図版70　22地区ロ第5号遺構出土土器
図版71　22地区ロ第6号遺構出土土器
図版72　21地区イ第1群（1～9）第2群（10・11）
図版73　21地区イ第2群（12～19）その他（20）底部（21～28）
図版74　21地区ロ（第1群）
図版75　21地区ロ第2群（16～30）、その他（31、32）底部（33～39）
図版76　21地区ハ（第1群）面縄前庭式－壺形（1～5）、その他資料（6）
図版77　21地区ハ(第1群)面縄前庭式－壺形
図版78　21地区ハ(第1群)面縄前庭式－壺形
図版79　21地区ハ(第1群)面縄前庭式－壺形
図版80　21地区ハ（第1群）面縄前庭式a
図版81　21地区ハ（第1群）面縄前庭式b
図版82　21地区ハ（第1群）面縄前庭式c
図版83　21地区ハ（第1群）面縄前庭式d
図版84　21地区ハ（第1群）面縄前庭式e
図版85　21地区ハ（第1群）面縄前庭式e（117）、h（118）、その他B（119）
図版86　21地区ハ（第1群）面縄前庭式c（121）、e（120、122、123）
図版87　21地区ハ（第1群）面縄前庭式e（124）、底部（125）
図版88　21地区ハ（第1群）面縄前庭式b（128）、e（126、127、129）
図版89　21地区ハ（第1群）面縄前庭式f
図版90　21地区ハ（第1群）面縄前庭式g
図版91　21地区ハ（第1群）面縄前庭式h
図版92　21地区ハ（第1群）面縄前庭式：特殊
図版93　21地区ハ（第1群）仲泊A式
図版94　21地区ハ（第1群）仲泊B式
図版95　21地区ハ（第1群）その他A
図版96　21地区ハ（第1群）その他B
図版97　21地区ハ（第1群）その他A（247、248）その他B（249～252）
図版98　21地区ハ（第1群）底部資料
図版99　21地区ハ（第2群）面縄東洞式
図版100　21地区ハ（第2群）面縄東洞式
図版101　21地区ハ（第2群）面縄東洞式
図版102　21地区ハ（第2群）面縄東洞式
図版103　21地区ハ（第2群）面縄東洞式
図版104　21地区ハ（第2群）面縄東洞式
図版105　21地区ハ（第2群）面縄東洞式
図版106　21地区ハ（第2群）面縄東洞式
図版107　21地区ハ（第2群）嘉徳Ⅰ式
図版108　21地区ハ（第2群）嘉徳Ⅰ式

図版109 21地区ハ（第２群）嘉徳Ⅰ式
図版110 21地区ハ（第２群）嘉徳Ⅰ式
図版111 21地区ハ（第２群）嘉徳Ⅰ式
図版112 21地区ハ（第２群）嘉徳Ⅰ式
図版113 21地区ハ（第２群）嘉徳Ⅰ式
図版114 21地区ハ（第２群）嘉徳Ⅰ式
図版115 21地区ハ（第２群）嘉徳Ⅱ式
図版116 21地区ハ（第２群）嘉徳Ⅱ式
図版117 21地区ハ（第２群）嘉徳Ⅱ式
図版118 21地区ハ（第２群）神野E式、伊波式
図版119 21地区ハ（第２群）神野E式、伊波式
図版120 21地区ハ（第２群）無文の資料
図版121 21地区ハ（第２群）無文の資料
図版122 21地区ハ（第２群）無文の資料
図版123 21地区ハ（第２群）底部
図版124 21地区ハ（第２群）底部
図版125 21地区　その他の資料
図版126 石斧（１）
図版127 石斧（２）
図版128 石斧（３）
図版129 石斧（４）
図版130 石斧（５）
図版131 石斧（６）
図版132 石斧（７）、ノミ状工具
図版133 敲打器（１）
図版134 敲打器（２）
図版135 敲打器（３）
図版136 敲打器（４）
図版137 敲打器（５）
図版138 敲打器（６）
図版139 敲打器（７）
図版140 敲打器（８）
図版141 敲打器（９）
図版142 敲打器（10）
図版143 敲打器（11）
図版144 敲打器（12）
図版145 敲打器（13）
図版146 敲打器（14）
図版147 敲打器（15）
図版148 敲打器（16）
図版149 敲打器（17）
図版150 敲打器（18）
図版151 すり石（１）
図版152 すり石（２）
図版153 石皿
図版154 砥石（１）
図版155 砥石（２）・器台状石器
図版156 チャート製石器、石核
図版157 貝刃、螺蓋製貝斧
図版158 ホラガイ有孔製品
図版159 スイジガイ製品、貝匙、二枚貝有孔製品
図版160 貝輪、その他
図版161 貝製小玉（１）
図版162 貝製小玉（２）
図版163 貝製小玉（３）
図版164 貝製小玉（４）
図版165 貝製小玉（５）
図版166 イモガイ、ノシガイ、トミガイ、タカラガイ有孔製品
図版167 タカラガイ、イモガイ札状製品
図版168 骨針、骨錐
図版169 ヤス状刺突具、ヘラ状製品、ナイフ状製品
図版170 骨輪
図版171 イノシシ牙加工品

図版172 垂飾品（サメ、イルカ、イノシシ）、サメ脊椎
図版173 かんざし、ジュゴン製品、シカ製品
図版174 ジュゴン棒状製品、ジュゴン不明、その他
図版175 クジラ製品
図版176 石製品
図版177 炭化物
図版178 貝類
図版179 貝類
図版180 貝類
図版181 魚類
図版182 上－カエル、リクガメ、トリ、下－ウミガメ
図版183 上－ジュゴン、クジラ、下－コウモリ、イルカ、ネズミ
図版184 上－イヌ、下－イノシシ（1）
図版185 上－イノシシ（2）、下－ネコ、ウシ、ヒト
図版186 クジラ
図版187 近世遺物（1）
図版188 近世遺物（2）
図版189 発掘参加者

第１章　　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

沖縄の日本復帰記念事業のひとつ、沖縄国際海洋博覧会が1975年に沖縄本島北部の本部（もとぶ）において開催された。

このとき中南部からの観客輸送対策として、日本道路公団によって沖縄自動車道が石川～名護間に開通した。その後、石川－那覇間の路線延長が計画され、いくつかの路線案が出されたが、その中から石川市伊波～沖縄市～北中城村～宜野湾市～中城村～浦添市～西原町～那覇市首里間の本島脊梁部を通過する設計案が採択された。

日本道路公団沖縄建設所は、当該地域に関する独自の環境アセスメントを作成[註1]すると共に沖縄県教育委員会（教育庁文化課）に対して文化財についての照会を求めてきた。そこで当教育委員会は、文化庁と日本道路公団との「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」（昭和42年９月30日）の３に基づいて事前の分布調査を実施し、その報告書を昭和57年３月[註2]に刊行した。

この分布調査の結果、当該計画線内には古我地原貝塚（石川市）、知花遺跡、竹下遺跡（沖縄市）、ヒニグスク（北中城村）、石嶺坂石敷道（中城村）、イシグスク（西原町）、拝山遺跡（浦添市）の７ケ所の埋蔵文化財包蔵地が存在することが判明した。

その後この７カ所の遺跡の取り扱いに関する協議が続けられた。その結果、上＝グスクはトンネル工法によるので埋蔵文化財は保存されること、他の６遺跡は線形上および工法上保存は困難であるので、同覚書１の(3)「発掘調査を行なって記録をのこすもの」として取扱うこととなった。

発掘調査事業は同覚書４の(1)「……埋蔵文化財包蔵地の発掘調査が必要となった場合、公団は都道府県教育委員会に委託して実施するものとし……」に基づき、日本道路公団沖縄建設事務所はその費用を負担し、沖縄県教育委員会（所管教育庁文化課）がその委託を受けて実施することで協議が成立した。

発掘調査事業委託契約は昭和58年４月１日に締結され、最初に本貝塚から着手することになり、昭和58年６月１日から調査開始した。

註

註１　日本道路公団事務所　沖縄自動車道（南部区間）石川、那覇間環境影響調査報告書　1978年６月

註２　金武正紀、大城懋『沖縄自動車道埋蔵文化財分布調査報告』沖縄県教育委員会　1980年３月

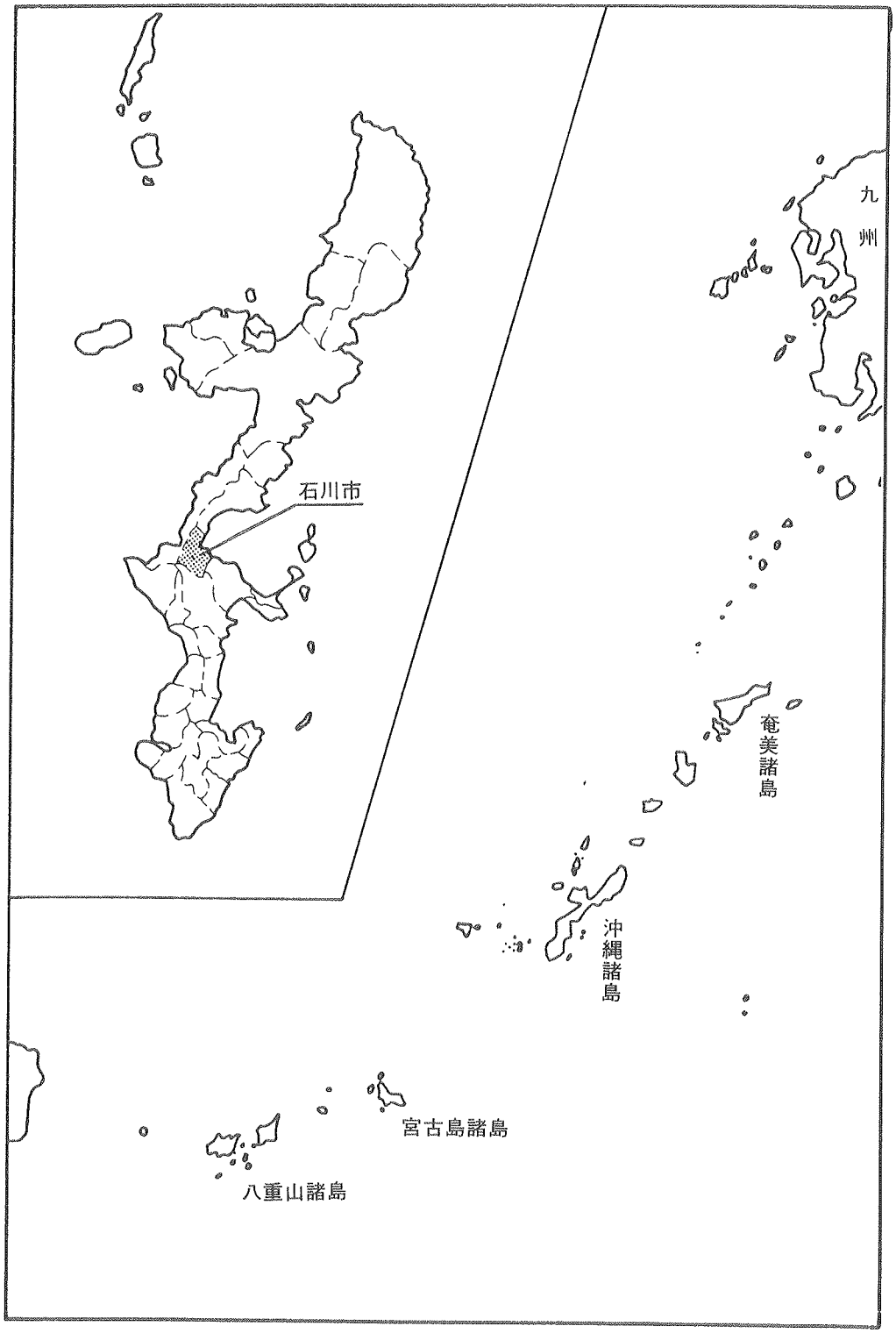


図1 石川市の位置

第2節　調査組織

この事業は次の体制により実施した。

事業主体	沖縄県教育委員会		教育長	新垣雄久（昭和58年度）
			〃	米村幸政（昭和59年度）
			課長	城間茂松（昭和58年度）
事業所管	沖縄県教育庁文化課		〃	比嘉賀幸（昭和59年度）
			課長補佐	西平守勝（昭和58・59年度）
事業総括	〃	埋蔵文化財係	係長	安里嗣淳（昭和58・59年度）
事業事務	〃	文化振興係	〃	山根義治（昭和58・59年度）
	〃		主事	高嶺正司（昭和58年度）
	〃		〃	大村光仁（昭和59年度）
	〃		〃	新垣政子（昭和58・59年度）
発掘調査員	〃		指導主事	座間味政光
	〃		主任専門員	金武正紀
	〃		専門員	島袋　洋
	〃		〃	岸本義彦
	〃		〃	大城　慧
	〃		〃	玉城朝健
	〃		〃	島　弘
	〃		〃	大城　剛
	〃		〃	松川　章
	〃		〃	大田宏好
	〃		〃	島袋春美
	〃		〃	花城潤子
	〃		〃	大城秀子
			補助員	田中寿賀子
			〃	上地千賀子

（発掘作業員）

＊昭和58年度

山城春子、山城静子、山城春代、山城重子、山城初子、山城ヒデ、山城康子、伊波トミ、安慶名春、山城美津子、池原ミヨ、池原時、登川トミ、池原ヨシエ、伊波シズ子、伊波江美、伊波芳子、安里春子、伊波トヨ、伊波恵美、伊波久子、上運天ヒデ、阿嘉静子、祖慶敏子、長浜勝代、新垣健一、新垣トミ子、伊波和子、伊波カナ、伊波キク、伊波研一郎、伊波ツル子、伊波トシ、伊波トヨ子、伊波久子、伊波ハル、伊波フミ、伊波美江、伊波ミツ子、伊波

八重、伊波律子、池原カナ、池原タケ、石川敦、石川シゲ、石川シズ、石川ヒデ、石川ヨシ、稲福千枝子、大城章、漢那宗雅、金城利枝、金城陸昭、呉屋啓子、呉屋正一、呉屋正光、米吉ちあき、米吉つやき、佐久川カナ、塩浜トシ、島袋ツエ子、島袋ヒデ、瀬良垣タケ、多和田真喜、平良トヨ子、平良春江、平良俊、平良ヨシ、高良千代子、玉城善徳、玉城富子、玉城藤子、早瀬川直充、比嘉マサエ、宮里実雄、宮平繁、森川利恵、山城カナ、山城幸子、山城スミ子、山城たけ、山城信子、山城初子、山城マス、山城満志、与古田世功、吉浜朝昌、山城トミ

＊昭和59年度

山城春子、山城静子、山城春代、山城重子、山城初子、山城ヒデ、山城康子、伊波トミ、安慶名春、池原ミヨ、池原時、登川トミ、池原ヨシエ、伊波シズ子、伊波江美、伊波芳子、安里春子、伊波トヨ、伊波恵美、伊波久子、上運天ヒデ、阿嘉静子、長浜勝代、新垣トミ子、伊波和子、伊波カナ、伊波キク、伊波ツル子、伊波トシ、伊波トヨ子、伊波久子、伊波ハル、伊波フミ、伊波美江、伊波ミツ子、伊波八重、池原カナ、池原タケ、石川シゲ、石川シズ、石川ヨシ、稲福千枝子、塩浜トシ、島袋ツエ子、島袋ヒデ、瀬良垣タケ、平良春江、高良千代子、玉城藤子、山城カナ、山城幸子、山城スミ子、山城たけ、山城信子、山城初子、山城マス、山城満志、与古田世功、吉浜朝昌、山城トミ

第２章　　位置と環境

第１節　貝塚の位置と自然環境

古我地原貝塚の所在する石川市は、沖縄本島中部の東海岸に位置し、那覇市からは北東約38km離れた所にある。

同市は海岸砂丘上に立地した東側と南側の発達した石灰岩丘陵に大別される。

現在、砂丘地は市街地となり海岸に沿うように国道329号線が通り、沖縄本島東側の主要交通路となっている。また、先述の石灰岩丘陵の南縁を県道６号線が通り、沖縄本島で最も幅の狭い所である石川～恩納村仲泊間を結ぶと同時に東西の主要道路を継いでいる。

古我地原貝塚は前述したように東西に発達した琉球石灰岩丘陵のほぼ中央にあり、伊波部落の北西約500mに位置する。本貝塚は丘陵台地とその崖下に形成されている。貝塚の北側は急傾斜をなして、下方の低湿地帯に至り、南側は緩傾斜を示しながら後方の石川高原につながる。

周囲を見渡せば北側には恩納岳から連なる北部の山々が、また、眼前の海には平安座、宮城、伊計の島々を望むことができる。

このような自然環境は、古我地原貝塚で生活を営んでいた人々にとって、山の幸、海の幸を多く与えたことであろう。又、貝塚の南側を流れる小川は貝塚人達の生活を潤したにちがいない。

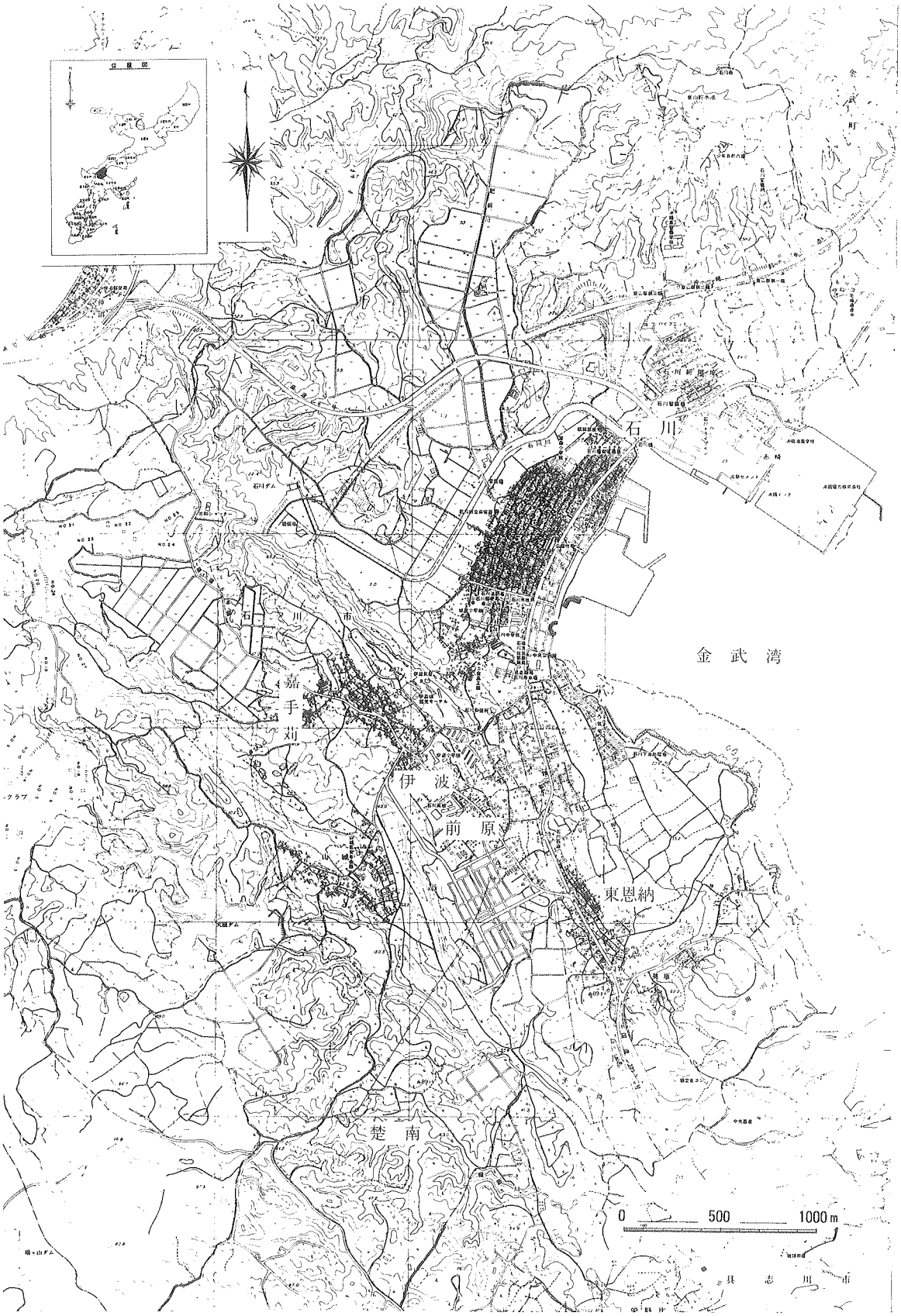


図2　古我地原貝塚の位置及び石川市の遺跡分布

第２節　　周辺の遺跡

東海岸の同市字三原から西海岸の字仲泊の間およそ６kmは、琉球石灰岩の断層が続いている。遺跡は主にこの丘陵沿に集中して分布している（図２）。今回調査を実施した古我地原貝塚もその一つで、ほぼその中間地点に立地している。

丘陵台地上、斜面に分布する遺跡を拾いあげてみたい。

１伊波貝塚

古我地原貝塚から東へ約800m、石灰岩の斜面に形成された遺跡である。1920年（大正９年）大山柏によって発掘調査が実施され、多数の土器、石斧等の石器類、貝製、骨製の装身具が出土した。特に土器は、平底の深鉢形で山形口縁を有し、口縁から頸部にかけて叉状工具による連点文・列点文が施され、「伊波式土器」と型式設定がなされている。沖縄貝塚時代前期（前Ⅳ期）の代表的遺跡である。

２石川貝塚

古我地原貝塚から東へ約250m、断崖の淵部及び斜面に形成された遺跡である。1975年の県が実施した分布調査で発見された。当時、台風通過後に崖の一部で崩壊があり、遺物を含んだ黒褐色土層が確認されている。採集された土器を見ると前述した伊波式土器が主で、沖縄貝塚時代前期（前Ⅳ期）に属する遺跡である。

３石川南貝塚

石川貝塚から南へ約100m、断崖の崖下に形成された遺跡である。本格的な調査は実施されていないが、表面採集では伊波式土器・石斧などが得られている。沖縄貝塚時代前期前半（前Ⅳ期）に属すかと考えられる。

４伊波後原遺跡

伊波グスクの北方約150mの斜面に形成された遺跡である。1971年宅地開発の途中発見され緊急調査が実施された。出土遺物はグスク式土器、類須恵器、磁器、鉄滓、炭化米などで、沖縄貝塚時代後期からグスク時代初期に位置付けられる。完全な形で人骨も一体が検出されている。

5 伊波グスク

石川市字伊波の北端・琉球石灰岩の微高地に築かれている。グスクは北側が断層になる。更に近年砕石で削られて断崖となっている。グスクは南に全体的に緩やかな傾斜を見せながら、野面式の石積を廻らし、菱形に近い形となる。調査は実施されてないが、グスクの東側の石垣下にはグスク式土器を主とした貝層が認められる。

6 伊波東遺跡

伊波貝塚のやや南側丘陵上に形成された遺跡であるが、既に大部分が道路・住宅建設などにより破壊されていた。わずかに残されていた遺跡の端部も道路工事のため破壊され完全に消滅した。調査が実施されたが、遺跡の端部で遺物も少なく性格は判然としない。

7 伊波原遺跡

伊波東遺跡の西側約200mに位置する。数明親雲上の墓を中心に土器片やウミニナなどの貝類が散布しているが、詳細は不明である。

第３章　　調査の経過

第１次調査

1983年６月１日から1984年３月30日まで実施した。

本貝塚は当初から崖下に形成されている貝層が注目されるとともに、崖上に遺構の可能性が指摘されていた。調査の結果、崖上で竪穴遺構や炉跡、焼土及びピット群などが検出され、予想していた通りであることが判明した。

崖上・崖下と地形的に大きな変化がみられることから、調査に際して地区設定を行った。即ち、道路公団により打ち込まれているセンター杭のNo.22＋０～No.23＋０の間にある崖上を22地区、No.21＋０～No.22＋０までの崖下を21地区と呼んだ。

調査は諸々の情勢により崖上の22地区から始め、まず、道路予定路線内の伐採作業（雑草を苅り取り大木は残す）を行い、大部分の伐採が終った所でグリッド設定を行う。崖上はNo.22＋０とNo.23＋０、崖下はNo.21＋０とNo.22＋０のセンター杭を結ぶ直線を基準ラインとし、２ｍ×２ｍを単位とする方眼を調査区全体に組んだ（図３）。

基準ラインから東側へアルファベット、西側へ五十音を付し、北から南へは算用数字で示した（基準点の22＋０の杭を100とした）。グリッドは南東隅の杭を示準しＡ－100、あ－101……と呼称した。

本地区は若干の地形的な差異を考慮しイ～ニの小区に分け、22地区イ、22地区ロと表記した。

発掘は所々に琉球石灰岩の岩盤が露頭するイ区から着手し、順次ロ、ハ、ニの各区へ拡げていった。その結果、本地区の大部分が表土下は直ぐ赤褐色のマージ（地山）になった。

ただ、ロ区南側の106ラインに至って一部に黒褐色を呈す所が見られ、イ区東側では岩盤の間にみられるマージ（地山）面に遺構が確認された。これにより本地区の調査はイ区の遺構、ロ区の黒褐色土という２ケ所にしぼられた。

イ区の遺構は第１号～第３号としたもので、調査の結果、第１号は地山面をナベ底状に掘り込み集石した炉（下部において焼土面や炭が検出）であること、第２号は地山面を円形に掘り込み底面がやや平坦になる住居址（方形状に配置された柱穴）、及び第３号は琉球石灰岩が洞穴状の凹部を形成している場所に貝殻や土器・石器などを投棄した場所であることか判明した。

第３号はかなり深く、２m以上も石灰岩の下部へもぐり込んでいくので危険であり、以下の発掘を中止した。それぞれの遺構の実測及び写真撮影を行い、幅杭（予定路線の境界）まで全面赤褐色のマージを確認して本区の調査を完了した。

ロ区の黒褐色土はお～さの106～112の広さになった所で下部の様相をつかむため掘り下げを開始した。発掘の結果、本層以下はオリジナルな遺物包含層で下層に行くにつれその範囲をせばめ、黒褐色土（第Ⅱ・第Ⅳ層）と黄褐色土（第Ⅳ・第Ⅴ層）が互層をなしていることが判明した。第Ⅴ層面を露出させた時点ですり鉢状の凹部を形成し、その下部において予想もしない

遺構群が検出された。第Ⅱ層上面から遺構検出面までの深さは２m前後である。

検出された遺構の調査がメインになってきたので、21地区の調査も開始する。本地区は地形的な面を考慮し、伐採作業は業者に委託。地表面のそうじなどの細かい作業になったところで現場の作業員を投入した。

まず、本地区の遺物包含層の広がりをつかむため、最初のフラット面と斜面下方の調査から始めた。斜面下方では図３に示したように26ケ所のグリッドを発掘したが、未撹乱の遺物包含層はなく、表土下は直接基盤の結晶片岩が露出した。そのため、発掘調査は１番目のフラット面にしぼり込まれた。その箇所を22地区と同様イ～ハに小区分し、21地区イなどと表記した。

イ区は数ケ所ある岩陰部の中に貝層や焼土面が露出している所が３ケ所あり、その掘り下げを行った。貝層は薄く、人工遺物もほとんど出土しない。焼土は最も東寄りの岩陰前面部にあり、上部には灰層もみられた。これら岩陰の前庭部は急斜をなして、発掘の結果、表土下に直接基盤の結晶片岩が露出することが判り、調査を終了した。

ロ区、ハ区は地表面のそうじや表土剝ぎを行った所で期間がせまり、本格的な調査は次回に持ち込すことになった。

22地区ロは今回の調査で終了しようと懸命の作業が続けられたが、すり鉢状の凹部の底面近くで検出された遺構群は予想をはるかに上回り途中で終了せざるを得なくなった。現況の写真、図面などを作成し、上面をカバーして今回の調査を終了した。

並行して行った西側幅杭までの試掘は15ケ所行った（図３）が、いずれも表土下は直接マージ（地山）になり、遺物包含層はないことが判明した。

なお、今回の発掘調査に入る前に本貝塚一帯の植生調査も行った。

第２次調査

1984年４月23日から同年９月11日まで実施した。

今回の調査は前回終了できなかった22地区ロ及び21地区の発掘と各区の包含層や遺構の覆土の水洗い選別を行った。土洗いには３mm、１mmのフルイを用いた。

まず、22地区ロの発掘と土洗いから始め、作業員の増加に伴い21地区の調査も開始した。22地区ロは掘り残した遺構の発掘と南側への第Ⅱ層の延びの確認を行う。発掘の結果、第Ⅱ層は114ラインまで延び、掘り下げると地山のマージが露出。その面においてピットが検出され、その掘り下げと図面・写真等を追加して終了した。すり鉢状の凹部底面付近の遺構は、第４号が第６号と接し、第６号が第５号を切っていることが判明した。

第４号は壁面に幅約20cmで焼土が廻ること、下部は灰層を有し数ケ所で粘土塊が検出され、第５号は浅く、第６号は北西側に径約１mの炉を伴うことが判明した。第７号は径約75cm、深さ約40cmの掘込み部に焼土・灰層の堆積が見られた。その他にも焼土が部分的に数ケ所検出され東南側に集中的にみられるピット群と合わせ、火を使う場の可能性が想定された。

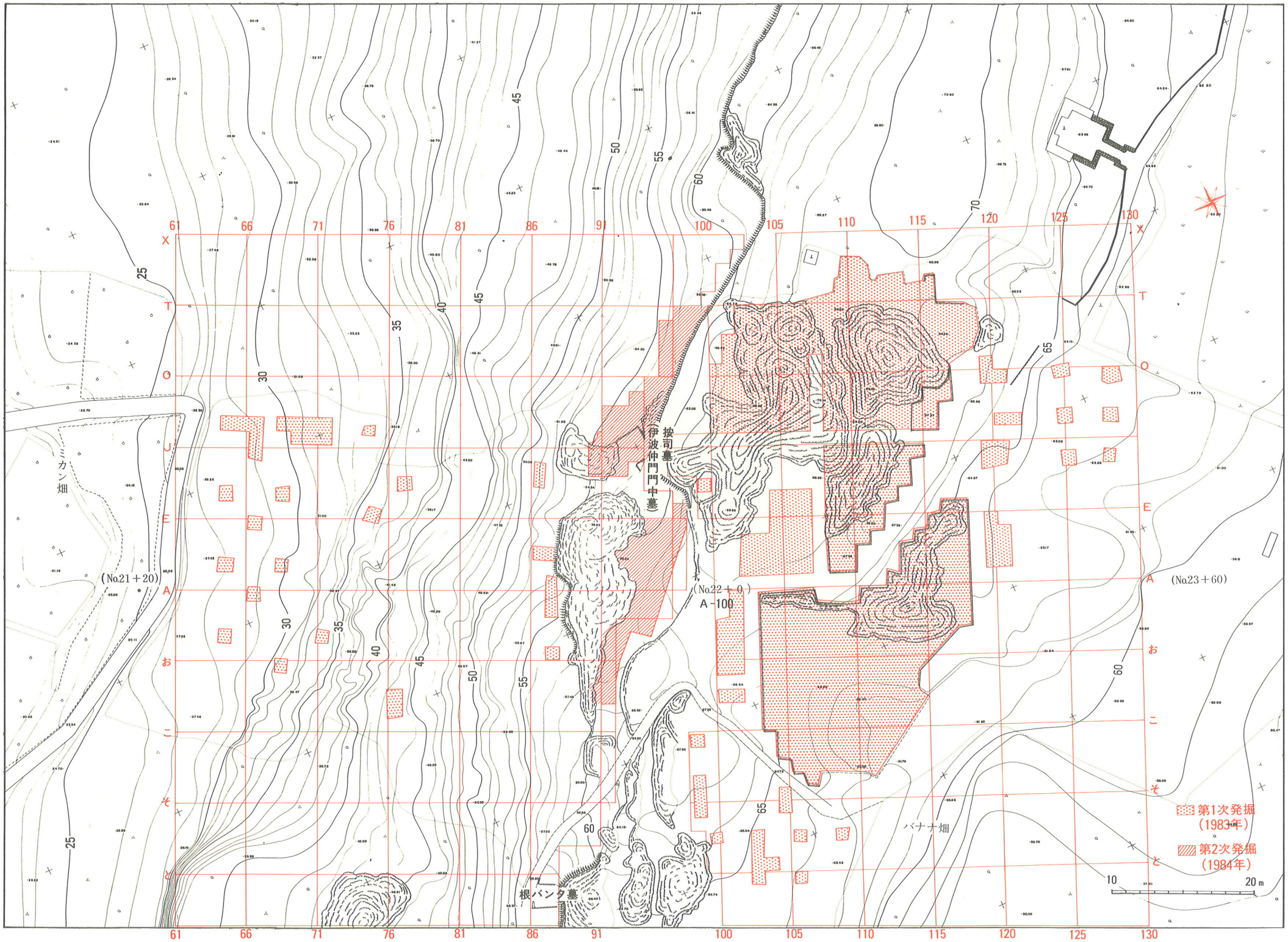


図3　地形図及びグリッド設定

これらの遺構は随時図面・写真撮影を行いながら掘り下げ完掘した。その後に第Ⅴ層面を掘り下げほとんど遺物の出土しない第Ⅵ層面に達したので、東西・南北にトレンチを設け下層の確認を行った。第Ⅵ層の下は直接マージ（地山）になることが判ったので、トレンチの断面図と完了の写真撮影を行い本区の発掘調査を終了した。南側のバナナ畑の部分も試掘したが、表土下は直接マージになった。

21地区は前回の調査においてイ区の調査は終了しており（按司墓に東接する部分を除く）、今回はロ・ハ区の調査がメインとなった。ロ区については按司墓の調査が終了した後に行うことにし、まず、一部の表土剝ぎだけしかできなかったハ区の発掘から行った。

調査の結果、全体として8枚（地山含む）の層を確認できたが、本区全面に及ぶ層は第Ⅰ・第Ⅲ・第Ⅵ層で、他は全面には及んでいない。第Ⅳ層以下が未撹乱の遺物包含層で、西側では水平に近い堆積であるが、東側では急斜を示すとともに50cmを越すような琉球石灰岩も散在し複雑な堆積を呈していた。また、東側では第Ⅵb層の上面（D・E－94・95）、第Ⅶb層（D－94・95）において焼土も見受けられたが、いずれも上から投棄されたものと解された。

西側では第Ⅵb層下はマージ（地山）になるが、その上面において炭の集中部が数ケ所、犬骨の集中部なども見られたが性格は判然としなかった。第Ⅵb層・第Ⅶb層に遺物は集中しており、特に骨・貝製品において顕著であった。これらの状況をその都度、実測・写真撮影を行い全面マージ（地山）を露出させ本区の発掘を終了した。しかし、北側・東側は琉球石灰岩の下部に包含層が潜り込んで残り、その部分については安全面を考慮し、後日改めて行うことにした。

また、E－93・94東壁の第Ⅵ層以下の土層剝ぎ取りも行った。

ロ区は墓の前庭部を4分割りし発掘を開始するとともに、墓そのものも石積みを除去し掘り下げた。本区はマージ土はなく、最下層は基盤の結晶片岩である。最下層を除き4枚の層が認められ、第Ⅲ・第Ⅳ層が未撹乱の遺物包含層であるが遺物の量はそれほど多くない。南西隅では結晶片岩の凹部に焼土・貝溜りが見られたが、性格などは判然としなかった。

これと並行するかたちで行った墓の発掘では、入口部付近においてブタの頭骨が検出され、墓に伴うものと解された。墓内はほとんど結晶片岩が露出していたが、東側で貝層が確認された（21地区イ）。上部は墓をつくるときに撹乱を受けているが、下部は未撹乱である。貝種はハ区の貝層と同様で、遺物はそれほど多くない。本層を掘り下げると結晶片岩を掘り込んだ所が見られ、底面では焼土が検出された。火を使用した場所であることが判明した。

これらの写真・実測を行い、全面結晶片岩を露出させ本区の発掘を終了した。

ロ・ハ区の発掘と並行して実施した西側の墓（1～3号墓・根バンタ墓）の実測・写真撮影を行い本地区の調査を終了し、若干残ったハ区の土洗いを実施して調査を終了した。

なお、ハ区の琉球石灰岩の下部に潜り込んだ包含層については、1985年3月末に2週間の調査を実施し、本貝塚の発掘調査をすべて完了した。

第4章　遺跡の概要

本貝塚は石川市の中央部付近を東西に走る丘陵のほぼ中央部に位置しており、当初、崖下に形成されている保存良好な貝塚が注目された。調査の結果、その貝塚の直ぐ上の台地上に遺構が検出され（22地区イ）、また、南西側では台地縁辺から約20m南側で遺構群が検出された（22地区ロ）。さらに後者の北側崖下（21地区ハ）では保存良好な貝層の堆積がみられた。

台地上、崖下とも出土遺物はほとんど同様で（土器をみると同様な型式のものが得られている）、これにより本貝塚は台地上に居住空間、崖下に捨て場を有することが判明した。ここでもう少し細かくみると、台地上の遺構は約50m離れた2ケ所で集中的に検出されたが、異なる性格のものであることが考えられた。即ち、東側で検出された遺構は高所の比較的平坦な場所にあり、地山（マージ）を掘り込んだ竪穴住居跡、集石炉及び石灰岩の隙間に遺物を投棄した場所が近接してみられ、これらが1組のセットになるかのような状況であった。

これに対し南西側で検出された遺構群は、すり鉢状の凹部（14×16m）の底面で幅約20cmの焼土が壁面を廻る竪穴遺構や掘り込みの炉跡を有す竪穴遺構及びその西側に数ケ所の焼土、東側に多数のピット群という配置を呈していた。この場所は焼土が目立ち、頻繁に火を使用した場所かと想定され、ピット群はこれに伴う設備であった可能性が強いように思われた。

検出された2ケ所の遺構はそれぞれ性格が異っており、生活空間の場の利用を窺わしめる。

一方、崖下に目を転じると、21地区ハの東側でみられた貝層及び部分的な焼土は赤褐色の地山（マージ）の傾斜に沿って堆積し、北側の琉球石灰岩の下部にまでもぐり込んでいた。焼土も上に乗っているだけで、そこで火を使用した状況ではなかった。しかし、21地区イの岩陰部にはそこで火を使用したと考えられる焼土の部分がみられ、岩陰部も何らかの形で利用されていたものと推察される。

このように本貝塚は丘陵台地及び崖下をうまく利用して生活の場を形成していることが判る。

ここで貝塚の周辺に目を向けてみよう。北側は急傾斜を示し下方の低地へ至り、眼前までせまる海は貝類などの格好の採集場所であるとともに、交通路としても大いに利用されたであろう。南側はゆるやかな傾斜を示しながら石川高原に続き、植物性食料を多く供給したと思われ、また、貝塚の南側を流れる小川や湧き水など水の便もあり、夏は南風が涼をもたらし、冬は斜面部に茂る木々が北風をさえぎったものと想像される。

生活を営む場所としては格好の場所に位置していたことが窺える。

第５章　　層序と遺構

本貝塚は前章にも記したように丘陵台地上及び崖下に占地している貝塚である。ここでは崖上地区（22地区）と崖下地区（21地区）に分けて記述する。

第１節　崖上地区（22地区）

本地区はその地形的な面からイ～ニの４カ所に小区分した。イ・ロの２カ所においては一部で遺物包含層及び遺構が検出された。しかし、ハ・ニの箇所は表土の耕作土下は直接石灰岩風化土のマージ（地山）で遺物包含層は認められず、表土から青銅製のかんざしや沖縄産の陶器片が数点出土しただけである。

以下、イ・ロの層序及び遺構について記述する。

1.　22地区イ

a.　層序（図４、図版７）

本地区は崖上地区の東側にあり、その中でもさらに、東側（Ｓ～Ｚ、109～116）の石灰岩の岩盤の露出しない地域で遺構及び遺物の出土がみられた。この地区の層を図にＶ・Ｔライン東壁、108ライン南壁、115ライン北壁の断面図を示した。

土層は基本的には、４層に大別でき、文化層としては、第Ⅱ・Ⅲ層の単一文化層である。第Ⅰ層は表土層であるが、色の違いからa，bに区分した。

第Ⅰa層は墓を造成する時に持ち込んだもので、赤褐色土層の中に10cm前後の石灰岩礫を含むもので、遺物は含まれてない。Ｖ－114から南東側に広がるものでＶ－118で薄くなり、徐々に消える。層の厚さは最も厚いところで50cmを測る。

第Ⅰb層は本来の表土（腐食土）である。石灰岩の露出しないＴ・Ｕ－107から南側に広がる。茶褐色を呈し、締まりの強い土である。厚さは、10～20cmで石灰岩塊の周辺では薄くなる。遺物は、グスク系土器、須恵器、青磁、古銭等のグスク時代の遺物が散在する。

第Ⅱ層は、黒褐色を呈する。第１号、第２号、第３号遺構とＲ－109、Ｕ－107に部分的にみられる。遺物包含層で土器、石器、貝殻、獣・魚骨などが出土する。前述したごとく主として遺構に見られ、層の厚さは第１号－35cm、第２号－15cm、第３号－40ｃｍである。但し、遺構以外では遺物は僅少である。（詳細は遺構の項を参照）

第Ⅲ層は茶褐色を呈し、粘質の土である。第２号、第３号の最下部に見られ、前者が15cm、後者が10～35cmをはかる。若干、遺物を包含する。本層は第Ⅱ層から地山に移る漸移層である。

第Ⅳ層は赤褐色を呈す石灰岩の風化したマージ土である。いわゆる地山で無遺物層。

b.　遺構（図５）

本地区は層序でも記述したように、包含層は遺構で主に見られた。３つの遺構が確認された

が、それ以外にS－110グリッドの石灰岩の割れ目から石斧、貝殻、獣・魚骨、土器（嘉徳Ⅰ式、面縄東洞式）が検出された（図版８）。単発的に遺物を捨てたものとおもわれる。以下、それぞれの遺構について記述する。

第１号遺構

22地区イの北側（図５）に形成された遺構である。第Ⅰ層を剥ぎとった段階で280cm×190cmの楕円の落ち込みが検出され（図６）、北側半分にわずかに石灰岩礫が露出した。さらに、黒褐色土を取り除くと石灰岩岩盤に縁を接するように石灰岩礫が180cm×170cmの楕円状に凝集して検出された（図７）。礫は主に石灰岩礫で希に千枚岩が含まれる。大きさは図７に示したように５cm～30cm大のものが多い。周縁に大型の礫を中に中～小の礫を配する。

さらに、この礫を取り除くと図８のように焼土が検出された。焼土の厚さは５cm程である。

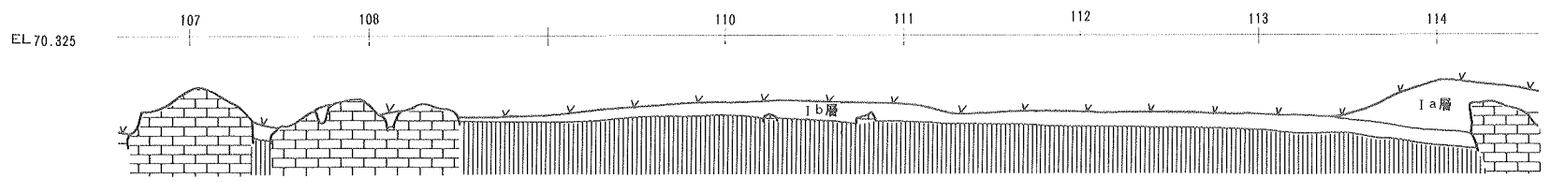
焼土を取り除くと地山（マージ）で、石灰岩の岩盤が露出した。

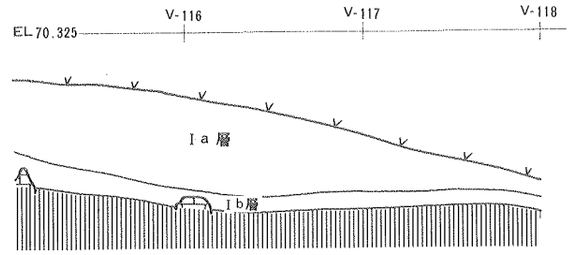
出土遺物をみると第Ⅱ層上面で伊波式土器の細片、石斧、磨り石、石材が出土した。礫集中部からは、20cm×７cmの木炭片（図版11）、木の実？が検出されたが、人工遺物は検出されなかった。木の実？については比較資料がなく、種類を同定するのは困難であった。ここでは、サンプル資料（図版188）をかかげて集計（表１）のみにとどめた。出土量は本遺構が最も多く、全体の89.0%をしめる。なお、木の実の炭化物は苦増原遺跡（1977）に報告例がある。

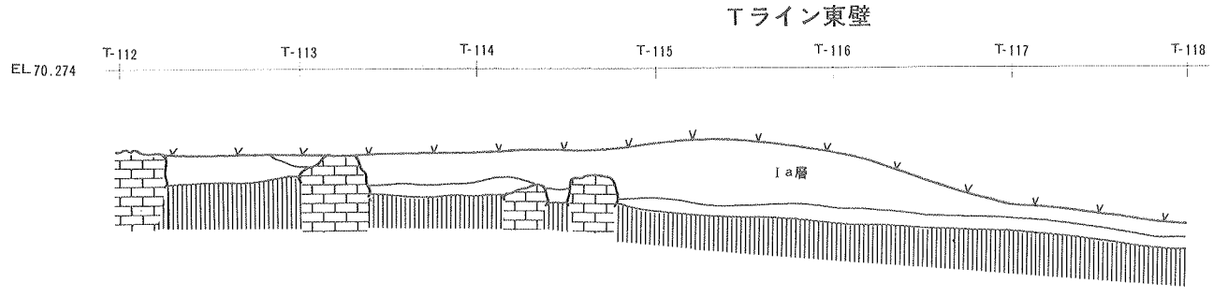
表１　炭化物出土状況

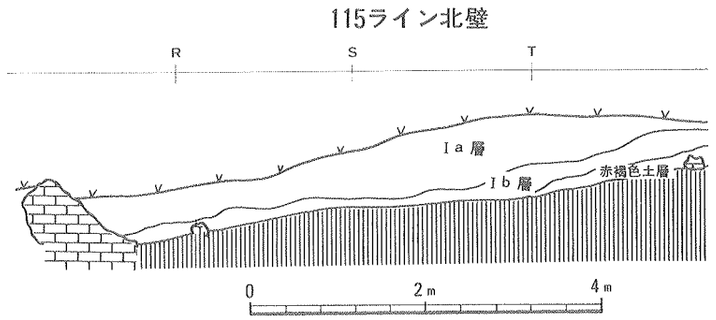
出土地			sp.1	sp.2	sp.3	sp.4	sp.5	sp.6	sp.7	sp.8	合計
22－イ	第１号	Ⅱ	684								684
		Ⅲ	103								103
		小計	787								787
	第２号	Ⅲ	2								2
		no,4		1							1
		no,6	1								1
		小計	3	1							4
	第３号	Ⅱ	2							1	3
	小計		792	1						1	794
22－ロ		Ⅱ	3					2			5
		Ⅲ	5				1	1			7
		Ⅳ	30		1	1		1	1		34
		Ⅴ	3								3
	第４号		3								3
	第６号		34								34
	小計		78		1	1	1	4	1		86
21－ハ		Ⅵ	3								3
不明			1								1
合計			874	1	1	1	1	4	1	1	884

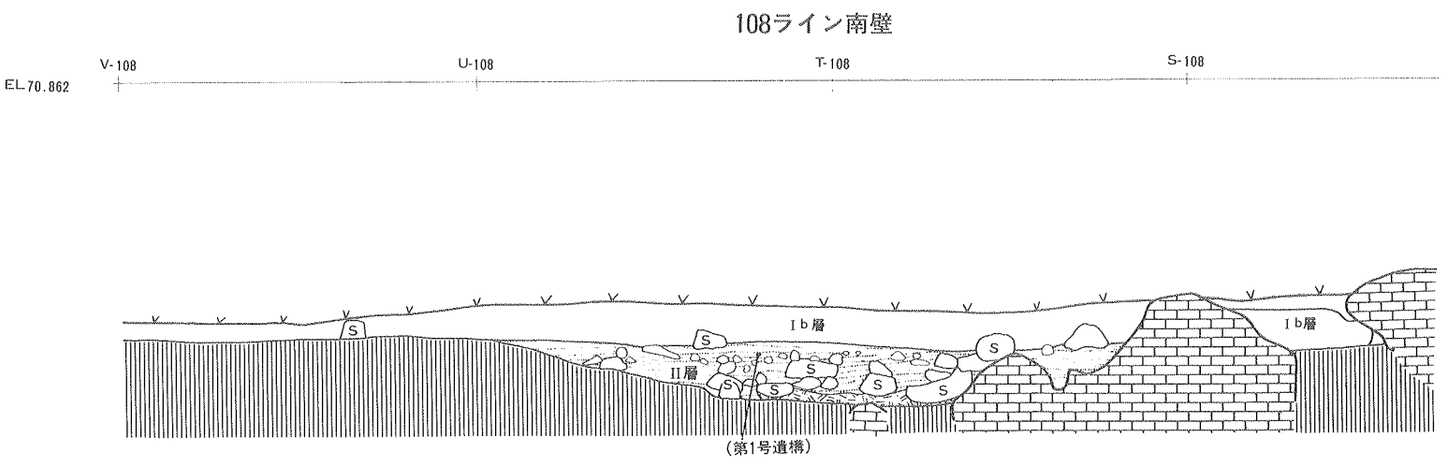
用途について見ると検出された石灰岩礫はほとんど風化しており、また、下部から焼土がほぼ全面に検出されていることから火を使う施設の可能性が考えられる。石灰岩の凹地を利用したかあるいは掘り込んで使用したものと考えられるが、発掘時の状況から後者の可能性が高い。


Vライン東壁
EL 70.325
107
108
110
111
112
113
114
Ib層
Ia層


EL 70.325
V-116
V-117
V-118
Ia層
Ib層


Tライン東壁
EL 70.274
T-112
T-113
T-114
T-115
T-116
T-117
T-118
Ia層


115ライン北壁
R
S
T
Ia層
Ib層
赤褐色土層
0
2m
4m


108ライン南壁
EL 70.862
V-108
U-108
T-108
S-108
S
Ib層
II層
(第1号遺構)

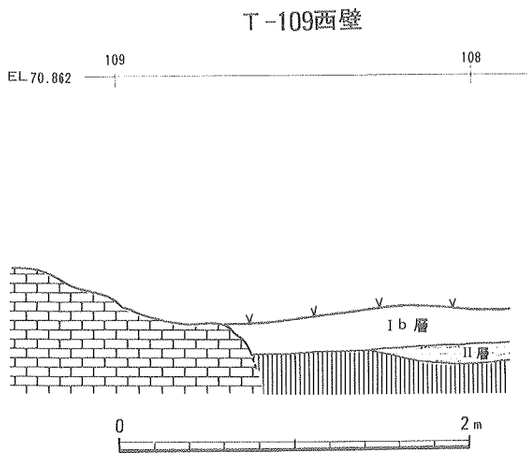

T-109西壁
EL 70.862
109
108
Ib層
II層
0
2m

図4　22地区イ層序

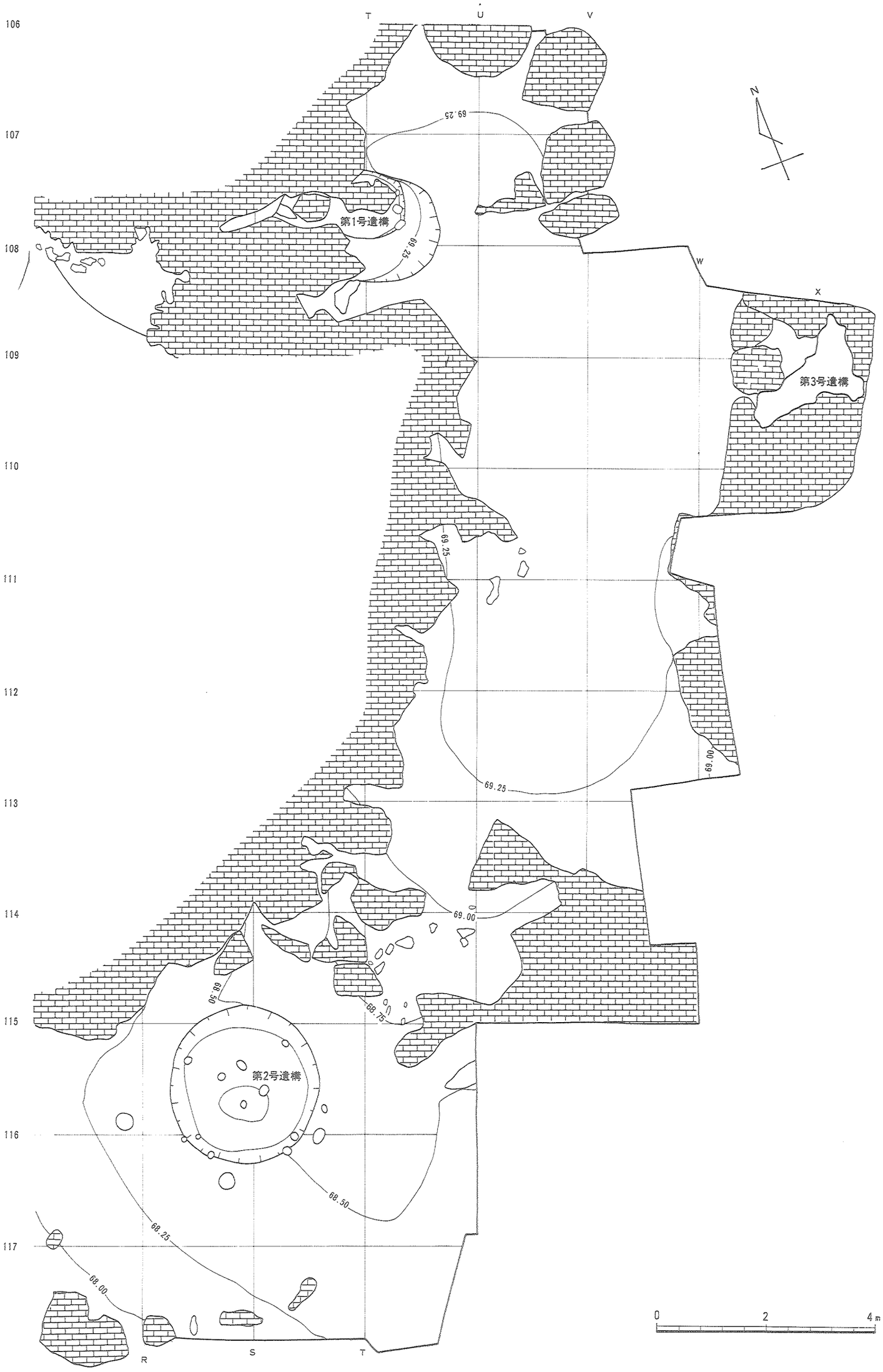


図5　22地区イ遺構の配置

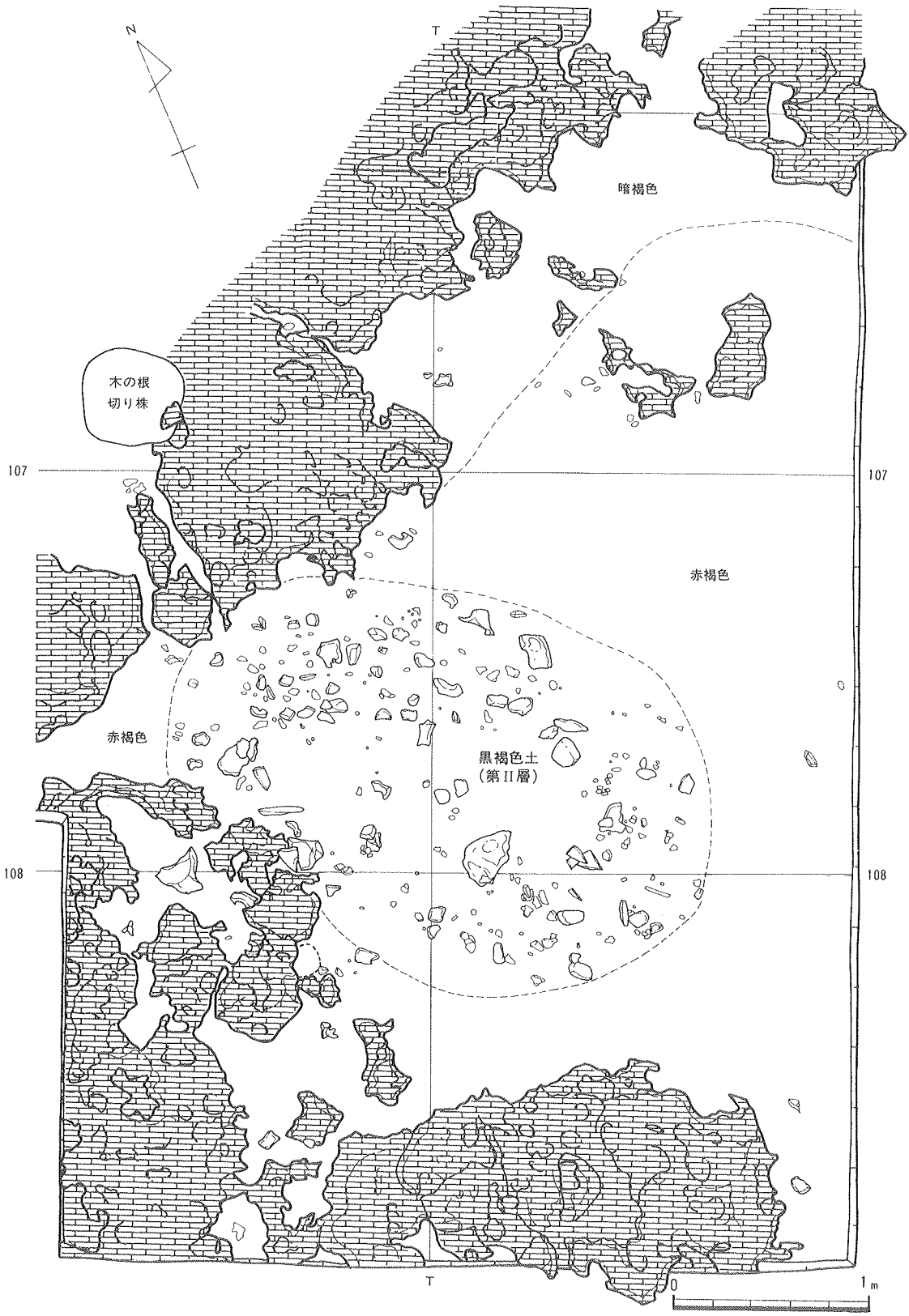


図6　22地区イ第1号遺構上面

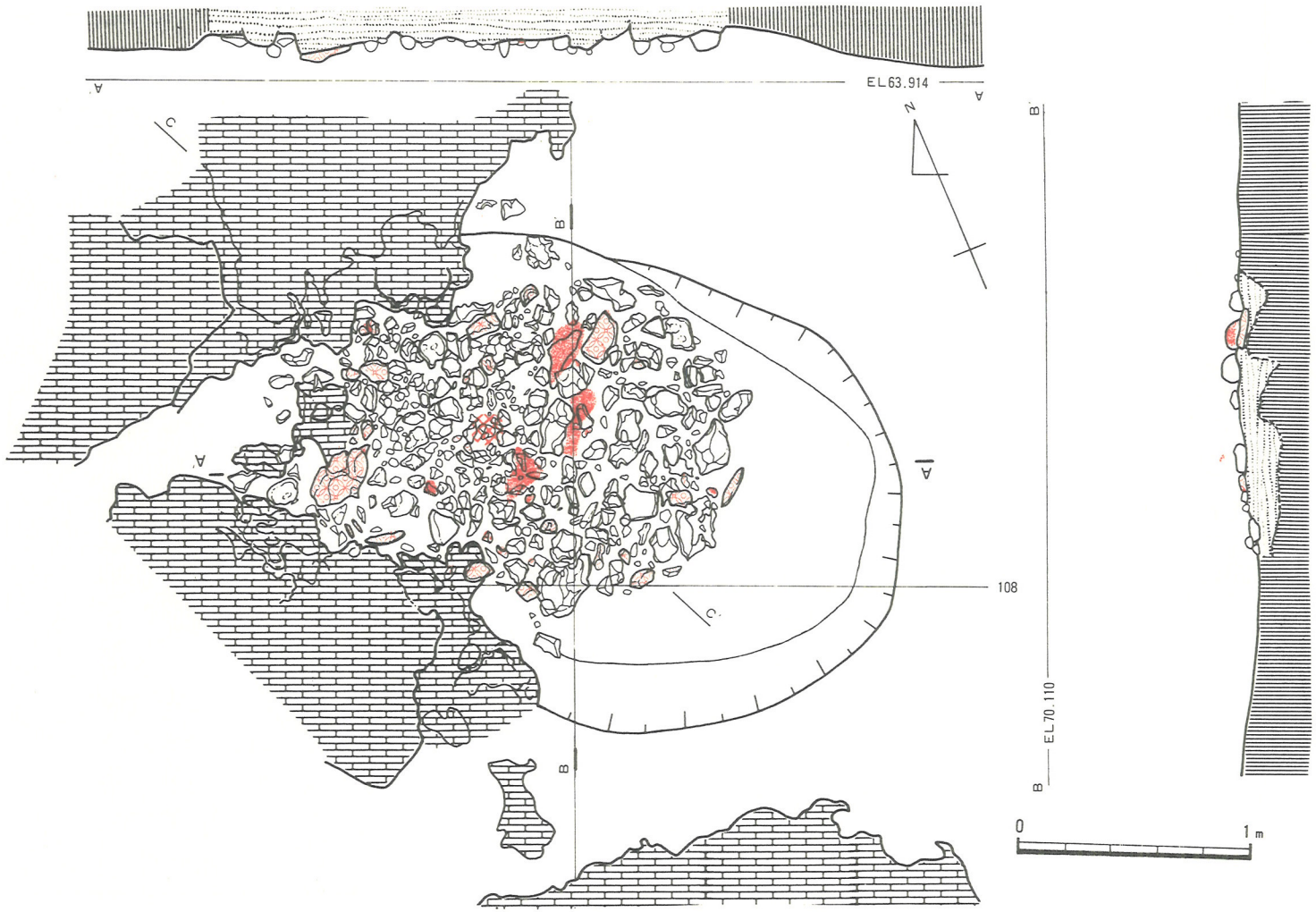


図7 22地区イ第1号遺構の集石露出状況(赤は石上面取り上げ後)

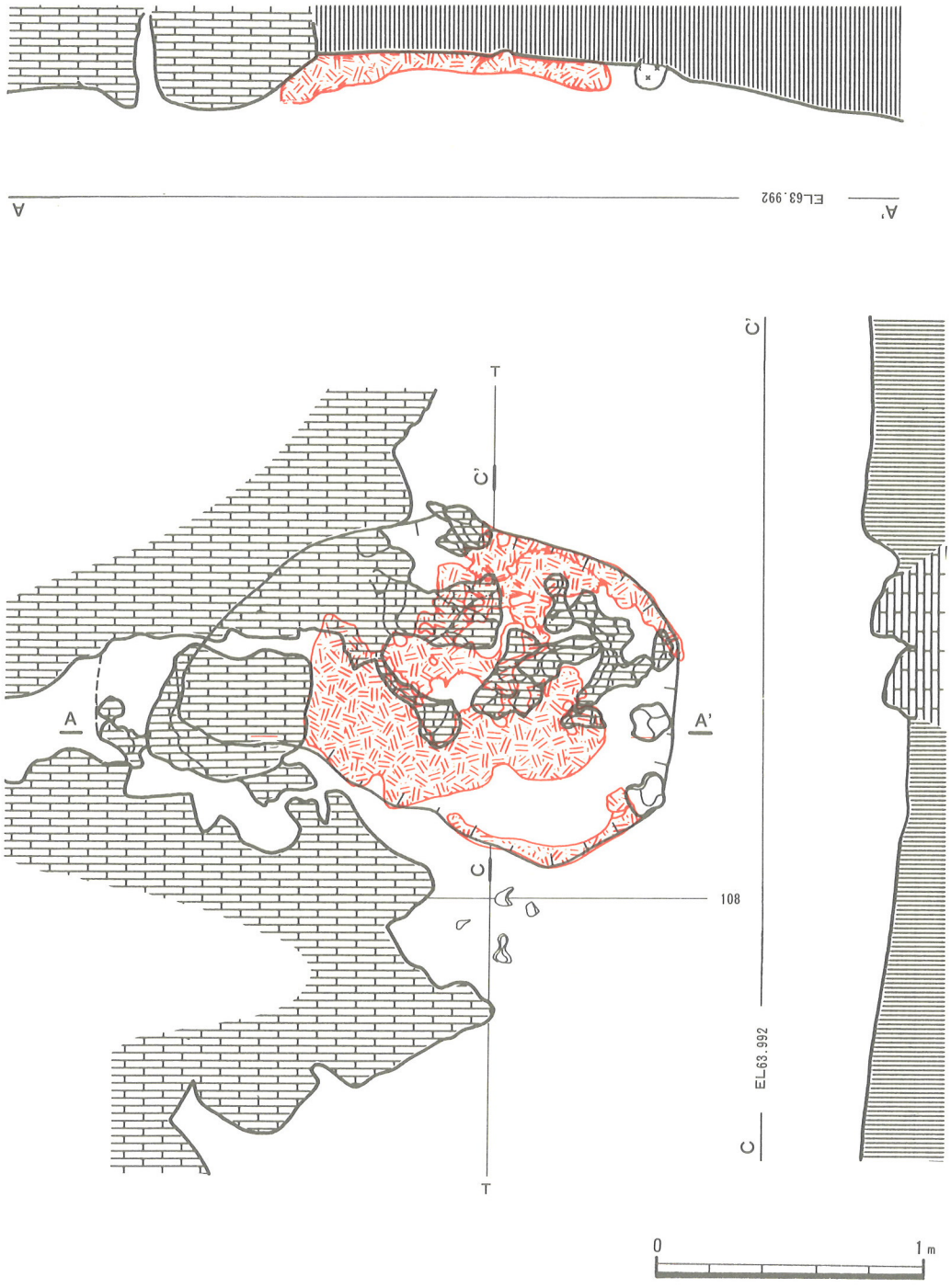


図8　22地区イ第1号遺構の焼土面と掘り下げ後の状況

第２号遺構

S，T－115、116で検出された295cm×270cm、深さ30cmの竪穴遺構である。

第Ⅰ層を除去すると235cm×305cmの東西に長い楕円の黒褐色（第Ⅱ層）の落ち込みが露出した（図９）。この上面にはわずかに土器、骨片が検出された。第Ⅱ層を０～５cm掘り下げると西側に140cm×60cmの範囲に貝が集中（貝だまり）して露出した。また、中央から東側にかけては１cm前後の川砂利？を混入した土が165cm×100cmの範囲で広がっている。

さらに、第Ⅱ層を掘り進むと第Ⅲ層（暗褐色土）が検出された。厚さ15cmの第Ⅲ層を除去すると地山面に14か所の落ち込みが検出された（図版14）。これらを掘り下げると図10にしめしたように竪穴内のほぼ中央に４個、端に６個、竪穴外に４個の柱穴が検出された。柱穴は最も深いもので43.0cm（no，３）を計り、中からは土器、木の実？、石材片等が検出された。詳細は表２に示した。

表２　第２号遺構柱穴観察一覧

No.	法量		方向	色	出土遺物	備考
	直径	深さ				
1	33×32 (21.5×19.5)	15.5	ほぼ直交	黒褐色	沈線文、石材片	焼土と黒褐色土が混合　No.２に比して多い。
2	34×29 (27.5×25)	8.0	直交	〃	焼土	上に同じ
3	16.5×16.5 (14.5×13.5)	43.0	ほぼ垂直	〃	上部に石材片	竪穴の斜面にあり、傾斜が急である。
4	17×20 (8.5×10.5)	30.0	〃	〃	石材片　２個 木の実	石材はほぼ中央の上部にある。柱穴は竪穴の端にあり北側が低い。
5	11.5×13 (10.5×9.5)	24.0	〃	〃	な　し	竪穴の斜面部に位置する。割と小さい。
6	10.5×5.5	10.0	－	〃	な　し	不定形である。柱穴の可能性は薄い。
7	９×９	19.5	ほぼ垂直	〃	木の実　２個	竪穴の端に位置する。
8	20×17.5 (10.5×12.5)	20	東南東	〃	炭少々、 石灰岩礫	上部に10cm大の石灰岩礫。No.９と同じく竪穴の下場に位置する。
9	12×15 (8.5×10)	24.5	南南西	〃	焼土　２個 木の実	竪穴内の端の落ち込んだ部分にある。
10	16.5×16 (10×10)	30.8	やや北西側に向く	〃	土器胴部 ５cm大の炭	竪穴の縁の外にある。内側は竪穴に接する。
11	23.0×21.0 (15.0×14.0)	26.0	やや北東かたむく	〃	な　し	上部に貝だまりの残りがみられる。
12	25.0×24.0 (12.0×11.0)	26.0	やや北西に傾く	〃	木の実、木炭 魚骨（脊椎）	くさび石（５個）
13	25.0×22.0 (12.0×12.0)	30.0	やや北西にかたむく	〃	石材片 木の実	中央に石材片
14	28.0×24.0 (12.0×12.0)	20.0	南西方向	黒褐色	木の実	

注（　）→下場、単位→cm

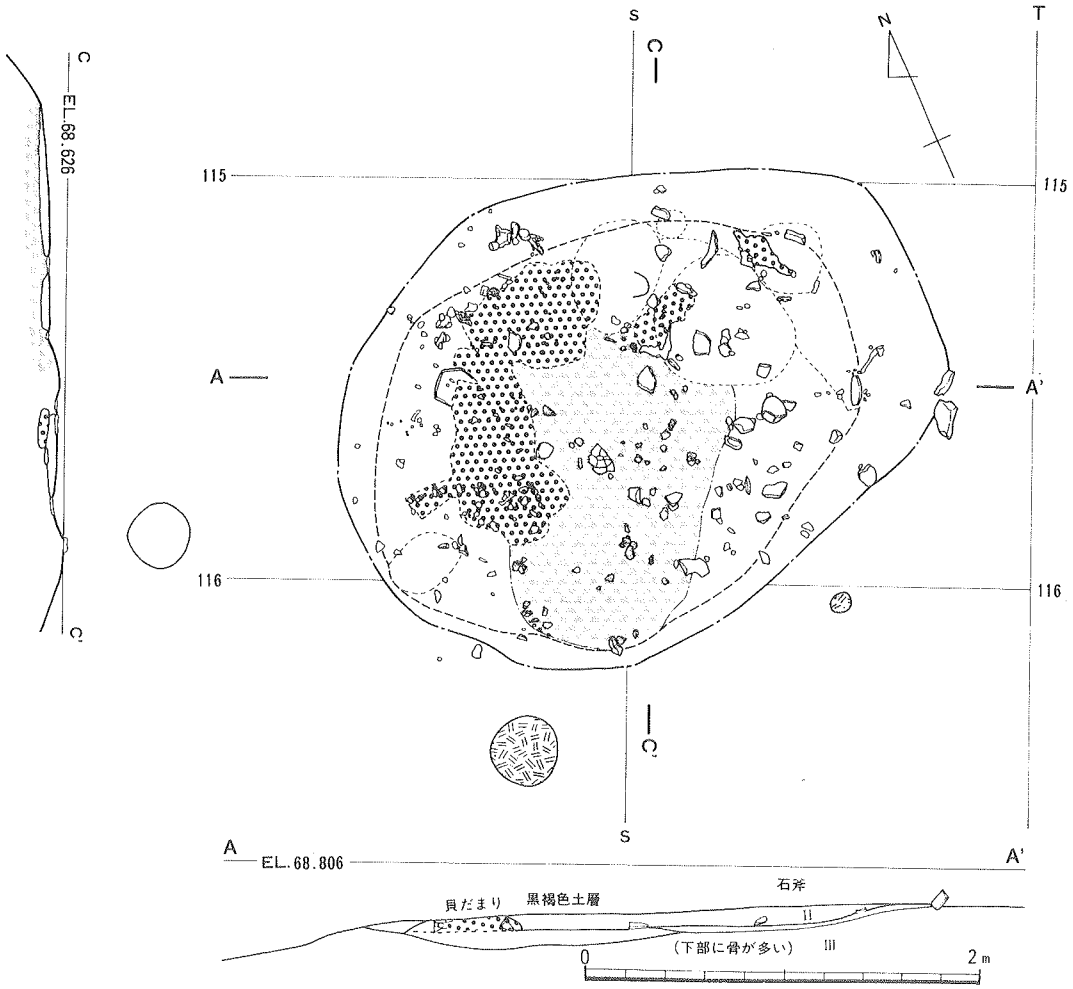


図9 22地区イ第2号遺構の上部の遺物出土状況

竪穴の南東側に2箇所、焼土が確認された。焼土no. 1は19.5cm×28.0cm、厚さ2cm、焼土no, 2は10cm×11.5cmで両者は接近していることから1つの焼土で、地床炉と考えられる。第Ⅰ層直下で検出されており、上部は削られた可能性が高い。

貝だまりは厚さ10cmのレンズ状になり、貝種は発掘時にサラサバティ、リュウキュウサルボウ、シレナシジミ、シャコガイ等の大型貝が目に付いたが主体はやはりキバウミニナである。また、貝だまりの中からは石皿も出土した。

遺物は主に第Ⅱ層から検出され、土器（仲泊式、面縄前庭式土器）、石器（ノミ状石斧、石皿）、貝・骨製品（骨製かんざし、貝製小玉、ノシガイ製品）、イノシシ下顎骨、大型の魚骨などが検出された。

以上の状況から本遺構は、295cm×265cmの鍋底状の竪穴住居跡で、柱穴の配置から見ると、入口はほぼ南側に向いていたと考えられる。貝だまりの貝は第Ⅱ層に含まれることから住居廃棄後のものと考えられる。

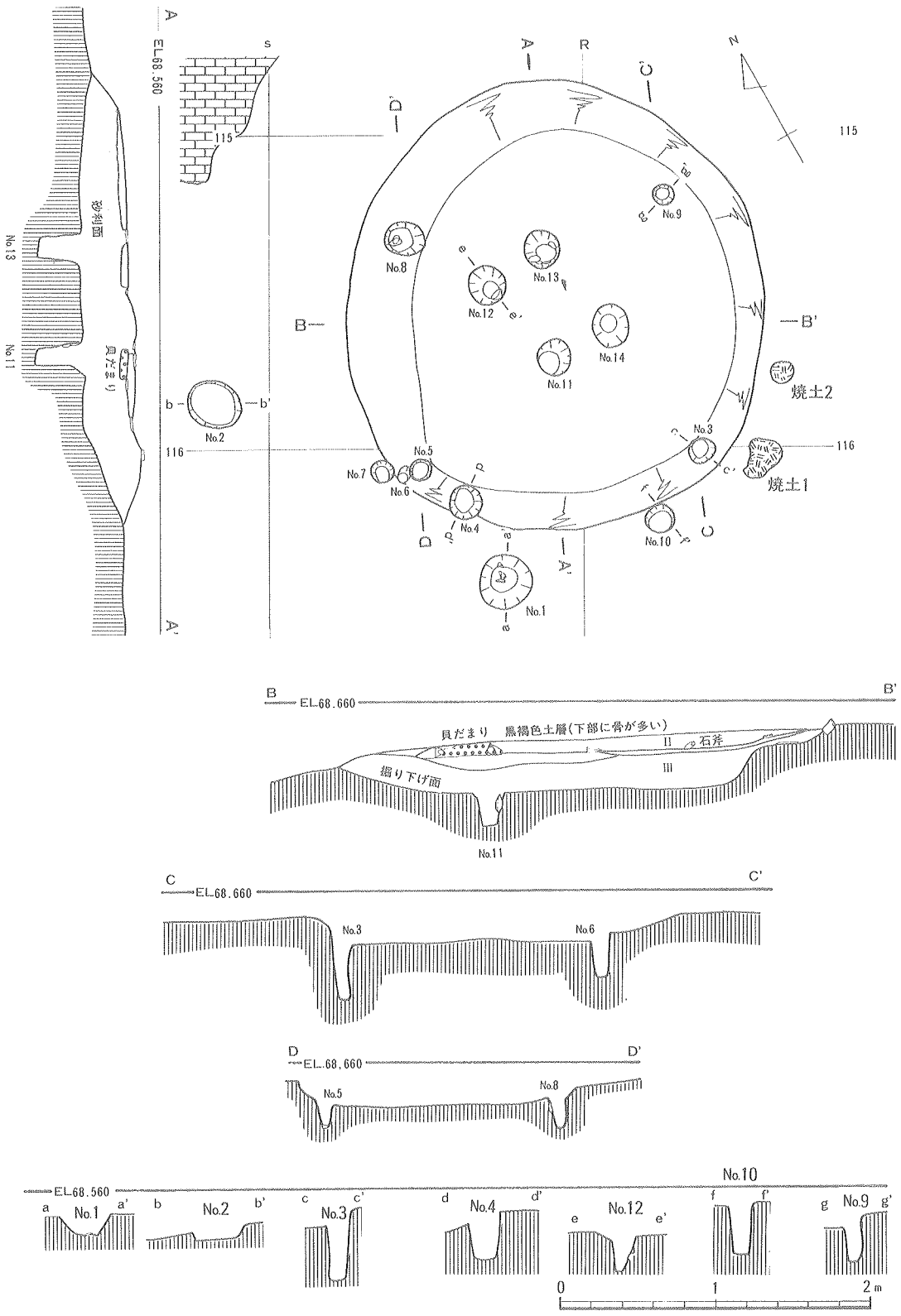


図10　22地区イ第2号遺構(竪穴遺構)

第３号遺構

x，w－111、110の石灰岩の洞窟に遺物を廃棄したものである。

厚さ10cmの第Ⅰ層を取り除くと石灰岩礫に囲まれて115cm×190cmの「貝だまり」が露出した。これをさらに掘り下げると大型の石灰岩礫に囲まれた部分だけ遺物が多量検出される（図12）。完掘した結果、入口は西側に向き、間口170cm×150cm奥行450cm、の斜洞であることがわかった（図13）。図11によると第Ⅱ層は厚さ40cm、第Ⅲ層は10～35cm計り、第Ⅲ層は奥に厚くなる。また、洞窟の奥では、第Ⅱ層で陸産マイマイが集中して出土した。これは、食用との関連を考える上で興味深い事象である。

出土遺物は主に第Ⅱ層で得られた。人工遺物は土器（面縄前庭式、面縄東洞式）、石器（小型凹み石、石皿、偏平石斧）貝製品（螺蓋製貝斧）等で特に、螺蓋製貝斧は総数14点のうち13点が本遺構から出土した。

自然遺物は貝殻が最も多く、発掘時はサラサバティが目に付いたが、集計を取ってみると、キバウミニナー9790個（74.8%）、で次ぎにシレナシジミが多いことからマングローブ域の貝が主体である。獣・魚骨もかなり得られた。（詳細は自然遺物の項）

以上の状況からすると、崖下の21地区ハと遺物の出土状況、包含量が似ていることから、21地区ハと同様、本遺構は小規模のチリ捨て場（貝塚）と考える。

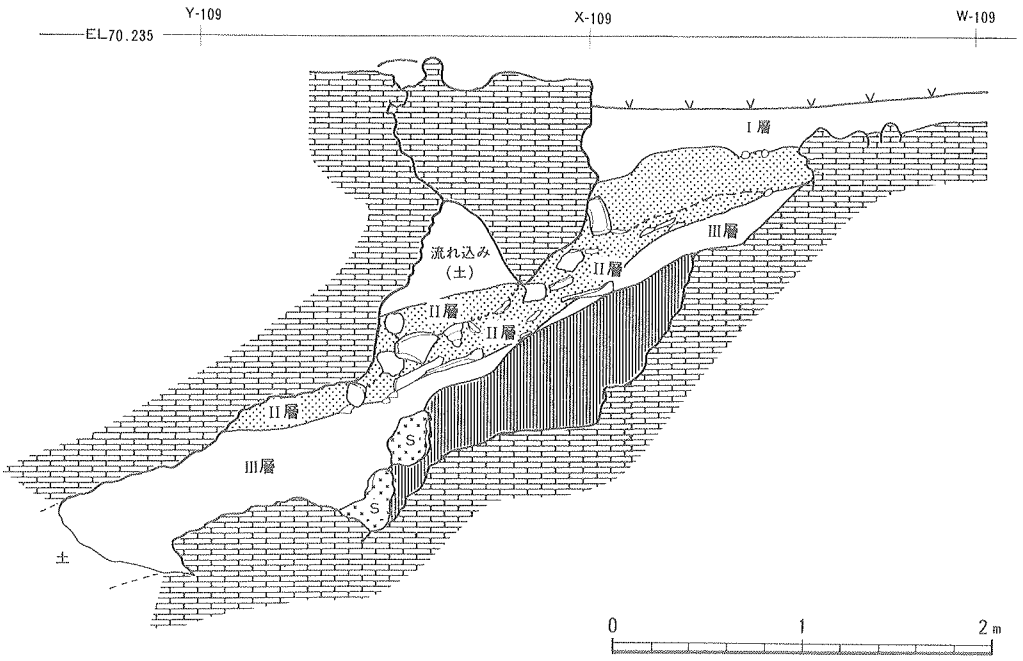


図11　22地区イ第3号遺構の層序

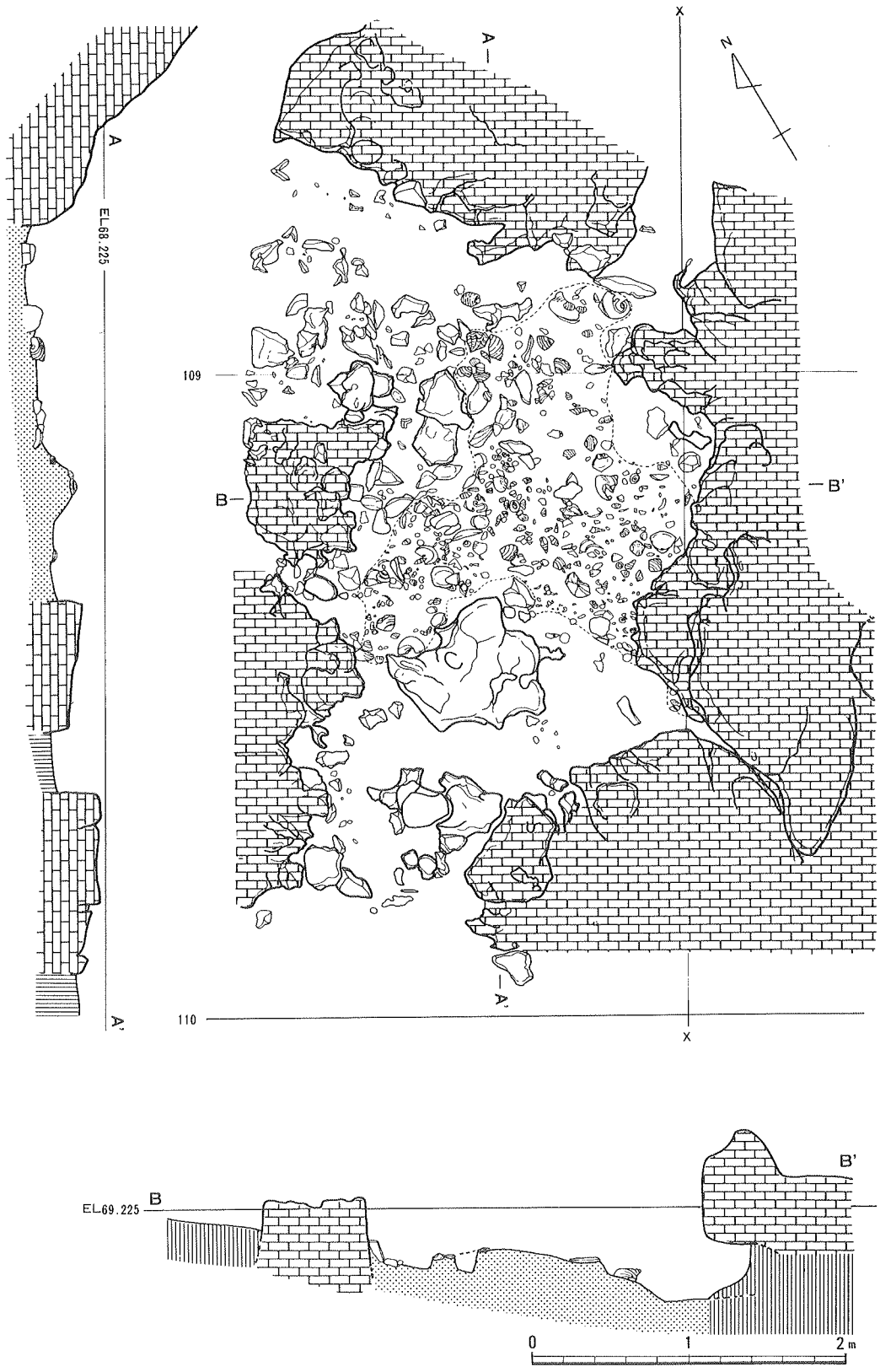


図12　22地区イ第3号遺構の上部の遺物出土状況

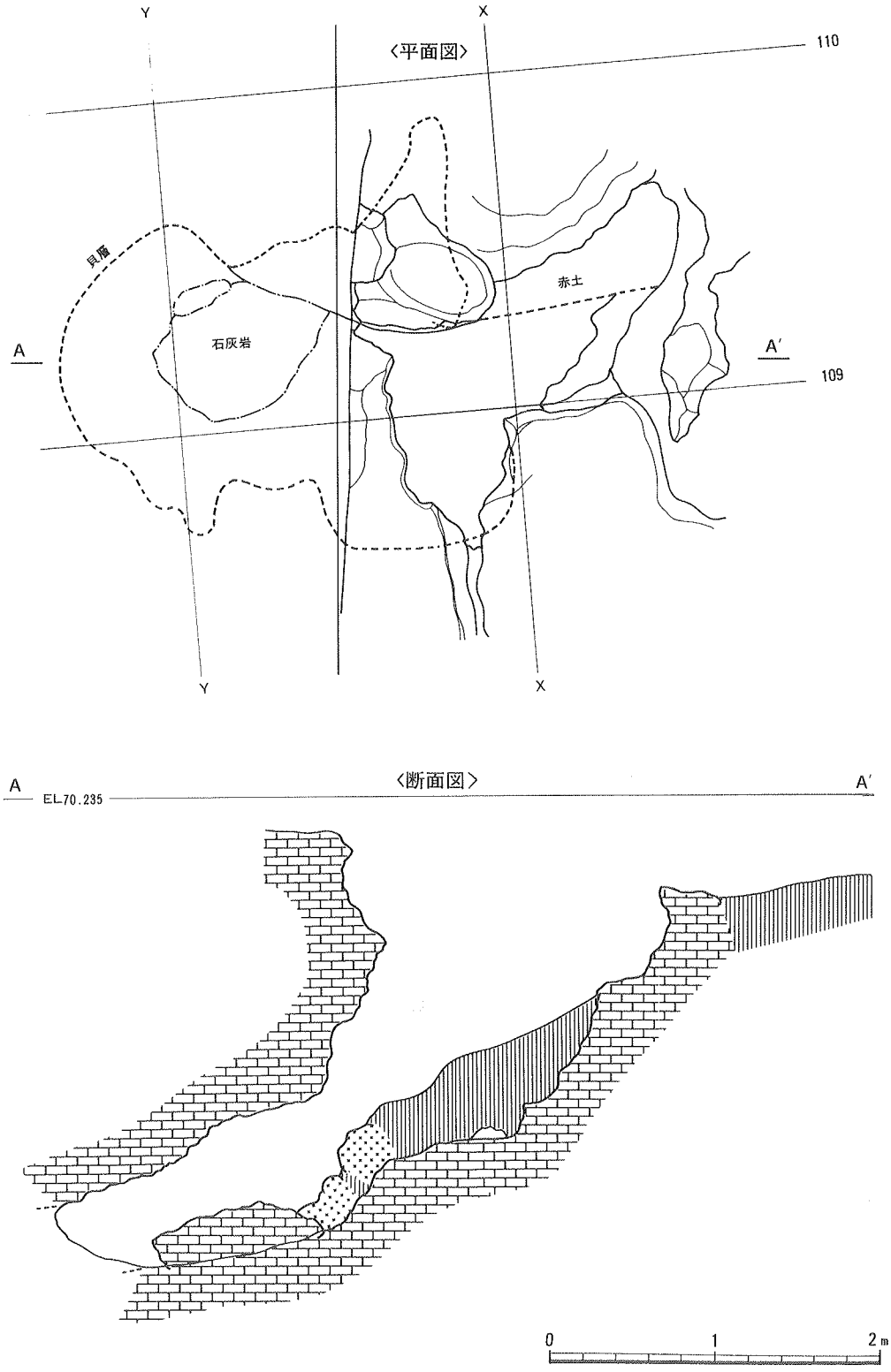


図13　22地区イ第3号遺構の掘り下げ後の状況

2. 22地区ロ

a. 層序

本地区の層序は、前章でも記したように南西側の一部（14m×16m）にほぼ円形状に暗褐色土層（Ⅱ層）が認められただけで、それ以外の場所では赤褐色の地山（マージ）の上を直接表土（耕作土）が覆っている。

暗褐色土層の下位の層は漸次その範囲が狭まり、この部分は南西側に向けて開口する形ですりばち状の凹地となる。表土から下部の層（無遺物層）まで約2mの厚さを有していた。

第Ⅱ～第Ⅴ層が未撹乱の遺物包含層であるが、遺物の保存状態は悪く、特に土器はボロボロで脆弱なものが多い。土器は面縄前庭式・面縄東洞式・嘉徳Ⅰ・Ⅱ式などのいわゆる奄美系土器が主体をなす。そのほかには、チャート片や木炭片・木の実などが注意を引いた。また、全部の層を通じて貝類や獣・魚骨等のいわゆる食料残滓が皆無であったことが留意する点としてあげられる。

ところで、凹地のほぼ中心（第Ⅴ層面）には竪穴遺構・炉跡・焼土・ピット群等がほぼ全面に検出されており、さらに縁辺部にも地山（マージ）を掘り込んで焼土やピットがみられた。

以下、本区の層序について略述する。土層断面図は東西の109ライン・南北のき・けラインを掲載した（図14）。参照されたし。以下、第Ⅰ層より記述する。

第Ⅰ層（赤褐色土層）：国頭マージを利用した耕作土で、北側から南側にかけて堆積。層厚は最も厚い所で約1.1m、薄い所で約70cmを測る。また、遺物包含層の凹地以外は直接地山（第Ⅶ層）と接する。遺物は先史・現代遺物とも僅少であった。いわゆる撹乱層である。

第Ⅱ層（暗褐色土層）：レンズ状に堆積している暗褐色土層で、中央部が厚く両端へ行くにつれて薄くなる。本層以下は未撹乱層である。遺物は土器・石器などが得られているが、量的にはそれほど多くない。

第Ⅲ層（黄褐色土層）：約30cmの層厚を有す黄褐色土層で、南西側へ緩やかに傾斜している。遺物は中央部で多く端では少ない。量的には第Ⅳ層に次いで多く、土器・石器等が得られている。土器は小破片のものが多い。チャート片・炭の小粒が目立つ。

第Ⅳ層（黒褐色土層）：黒褐色土層で層厚は約20cmを有す。本層も南西側へ傾斜する。遺物の量は最も多く、上部では土器・石器・千枚岩質の礫・粘板岩などの出土が顕著であった。

第Ⅴ層（黄褐色土層）：地山への移行層である。黄褐色土層で遺物の量は少ない。土器が主で面縄前庭式・仲泊式が目につく。本層上面ですり鉢状の凹地のほぼ全面に竪穴遺構・ピット群が検出された。

第Ⅵ層（黄褐色土層）：第Ⅲ・Ⅴ層と殆ど変わらず凹地の最下層である。発掘終了後東西

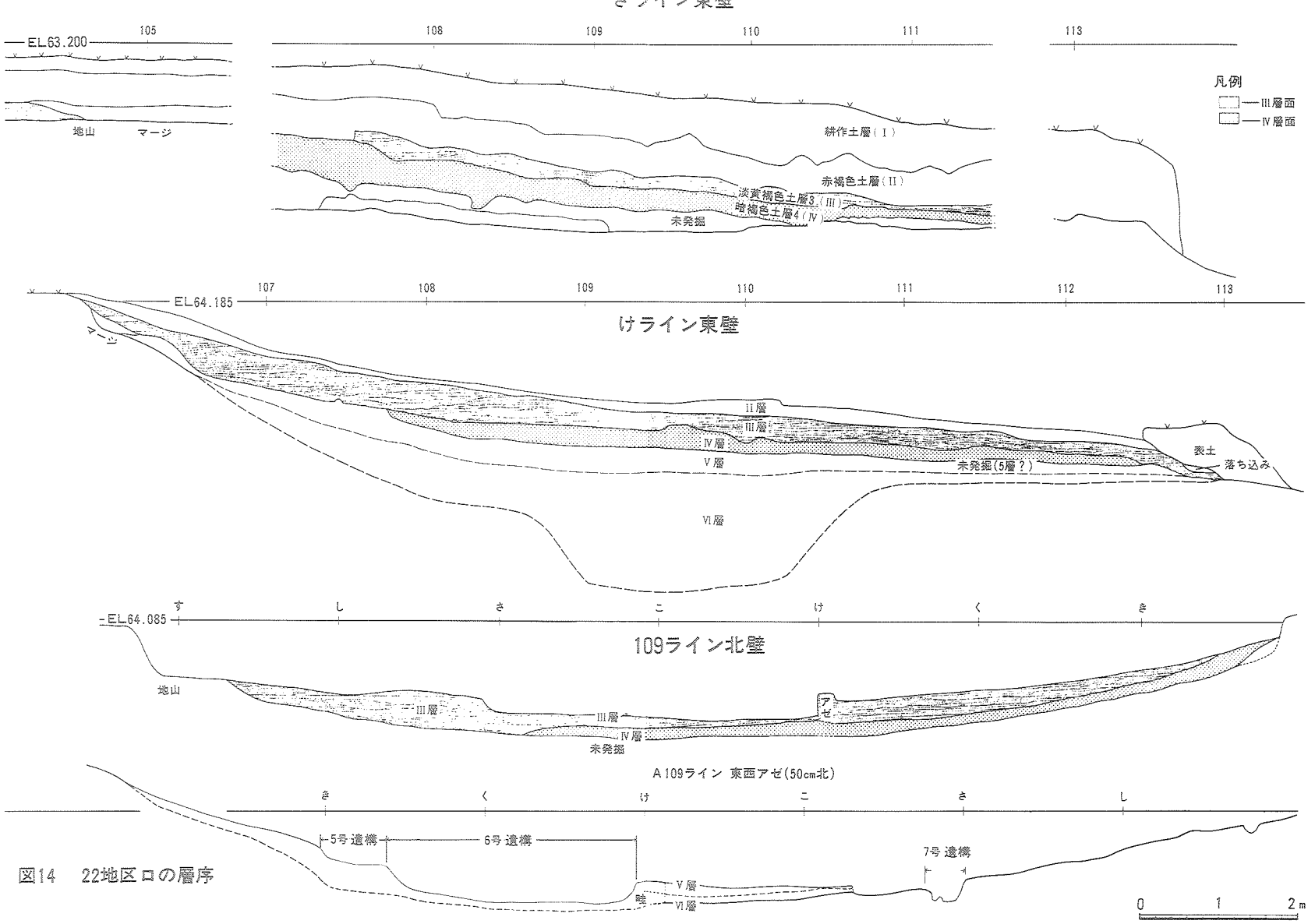


図14　22地区ロの層序

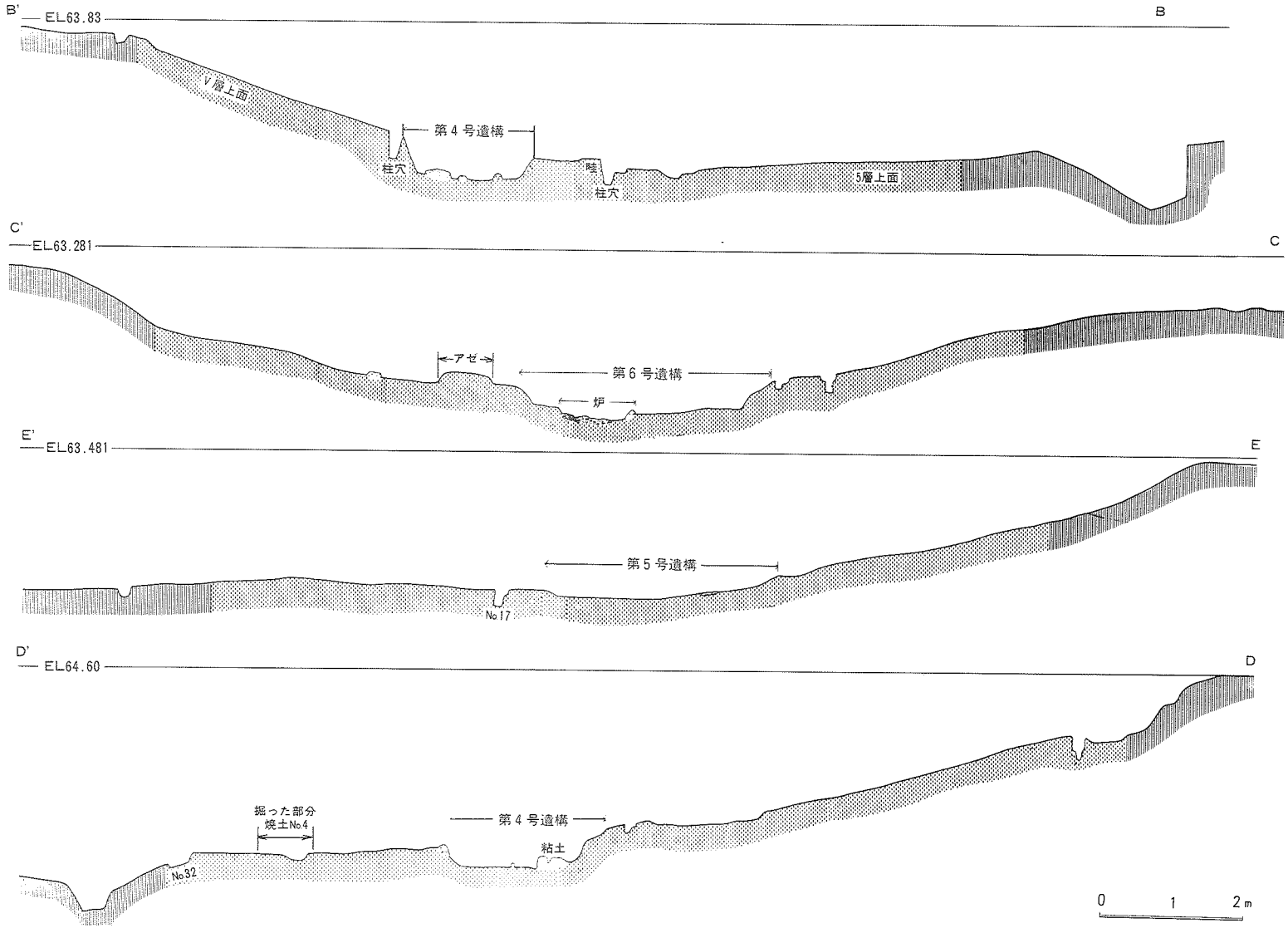


図15 22地区ロ遺構断面

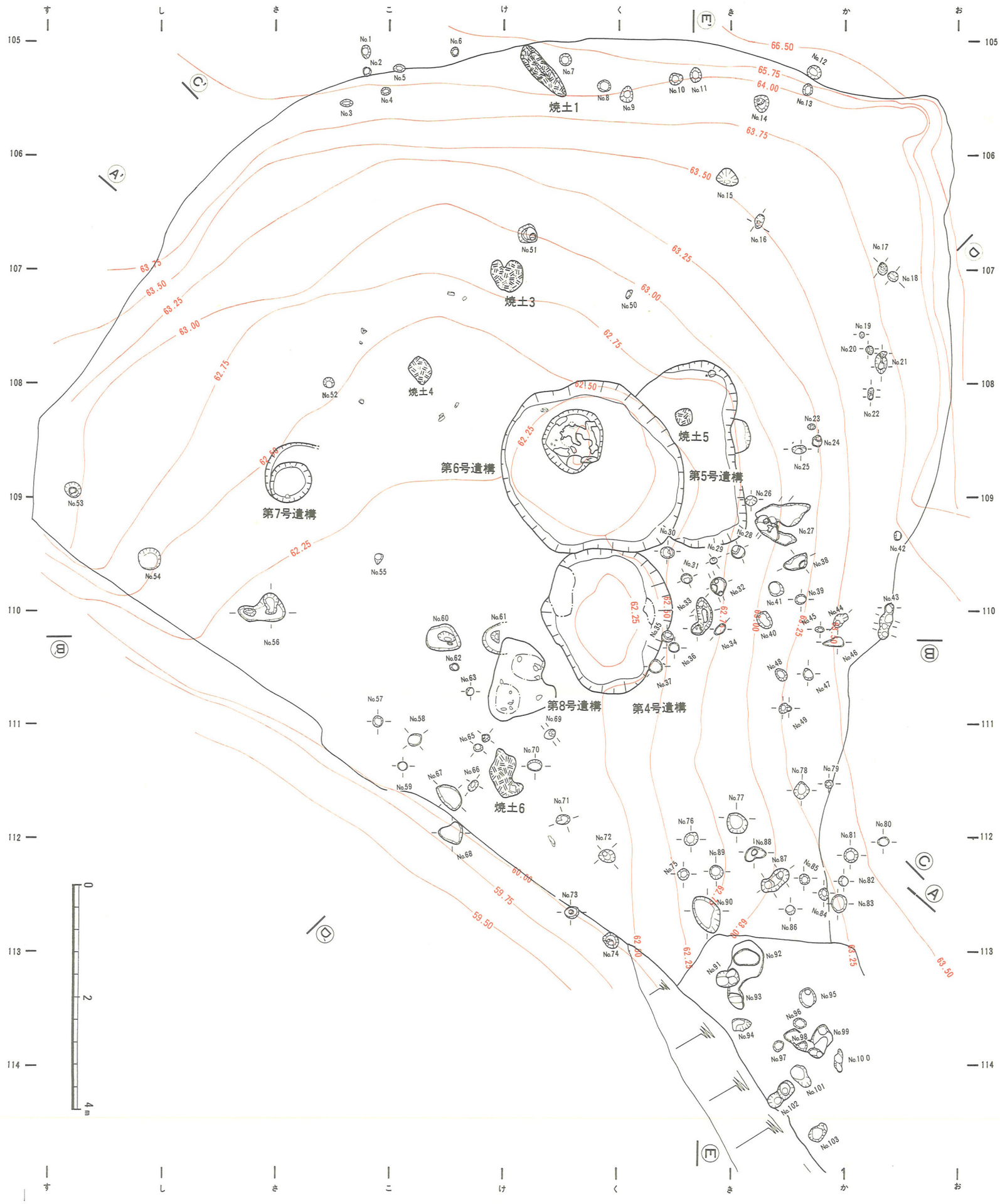


図16　22地区ロ遺構配置

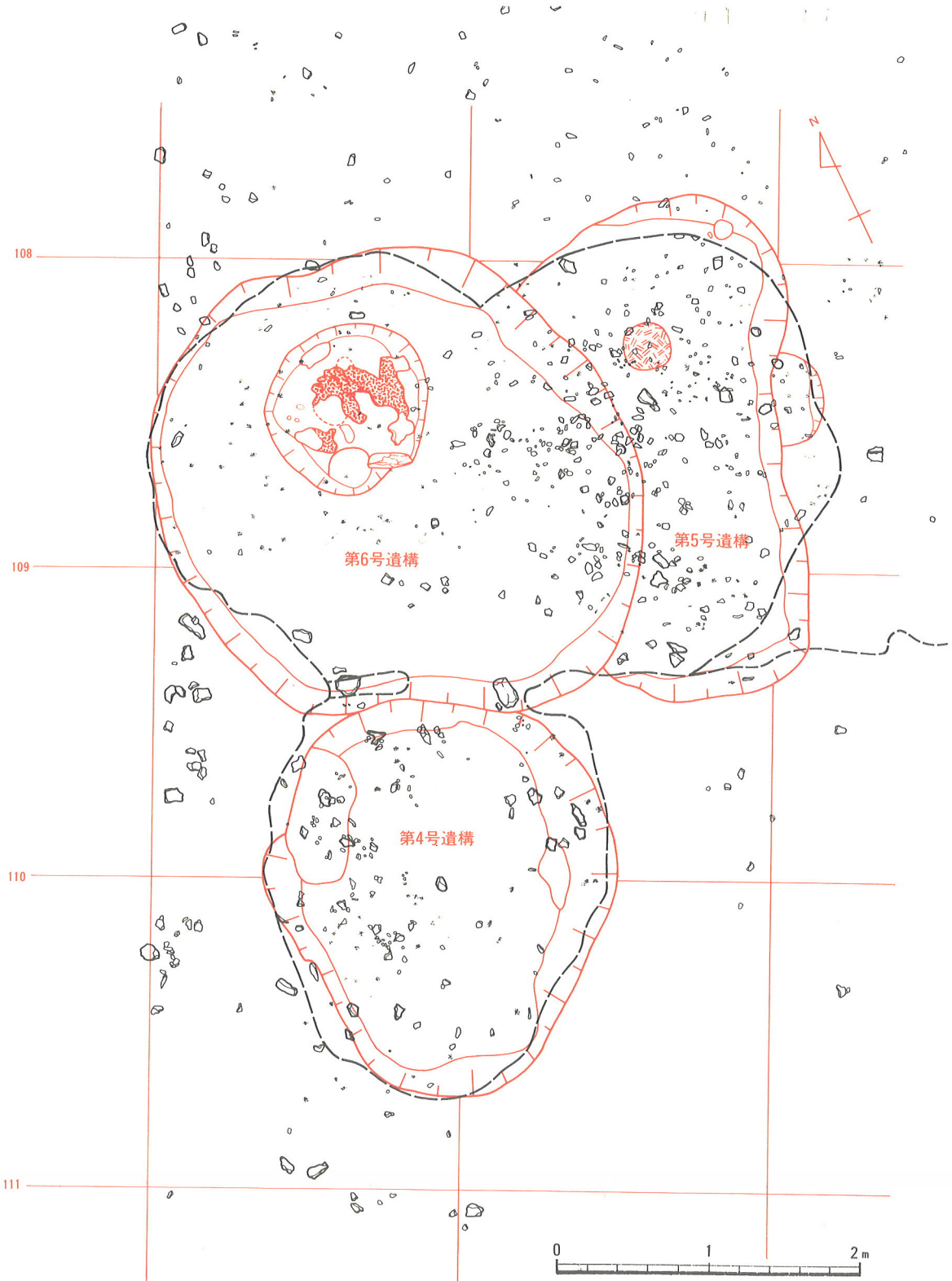


図17　22地区ロ　第5、第6号遺構上部第Ⅳ層面の遺物出土状況

南北に十字に切り試掘を試みたが凹地の斜面地から徐々に下層の第Ⅶ層が露呈した。中心部は約２ｍ落としても延々と続くのみであった。

第Ⅶ層（赤褐色土層）：地山の国頭マージで遺物包含層の凹地以外では、表土層が直接被さっている。凹地に沿うように急傾斜を示すが、凹地の中央部では未確認である。

b. 遺構

本区における遺構の検出状況をみるとすり鉢状になった地形をうまく取り込んだものと解された。すなわち、すり鉢状になった底面（第Ⅴ層面）を中心として、竪穴遺構（３基）・屋外炉？（５基）及びピット群などが検出された。また、ピット群はすり鉢状の凹地の縁辺部（東南側）の地山面にもみられた（図15、図16）。

以下、遺構別に簡記する。

＜竪穴遺構＞

すり鉢状になった凹地の底面付近に集中して３基検出された（図17）。

第４号遺構（図18、図19）

図19に示すとおり東西約2.2ｍ×南北約2.6ｍで第６号遺構の南側に接する。長楕円形のプランである。本遺構は斜面地にあるため、東壁側を深く掘り込んで床面の高さを調整している。壁面はやや斜めに立ち上がっている。その壁面には上面から約20cmの所に焼土（幅約20cm）が一様に貼りついており下端部はほぼ水平のラインを示している。焼土はそれ以下に及ばない。北西側の焼土は約10cmと厚くなっており、かなり火を受けたものと思われ表面の凹凸が顕著であったことは注意される。床面には炭層が約７cm見られた。

また、遺構内には粘土の塊（高さ約20cm×幅20cm）がブロック状に８ケ所

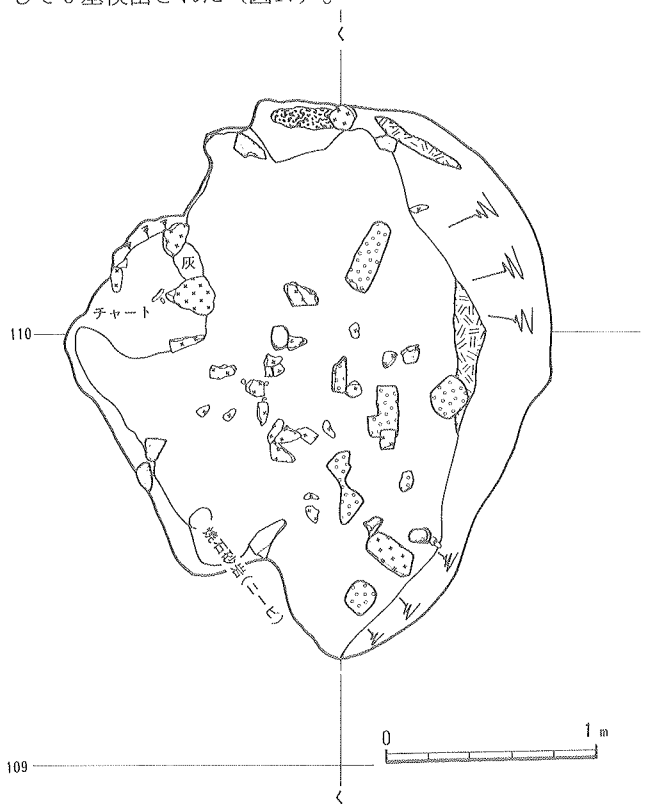


図18　22地区ロ第4号遺構第Ⅴ層0/5,10/15cmの遺物出土状況

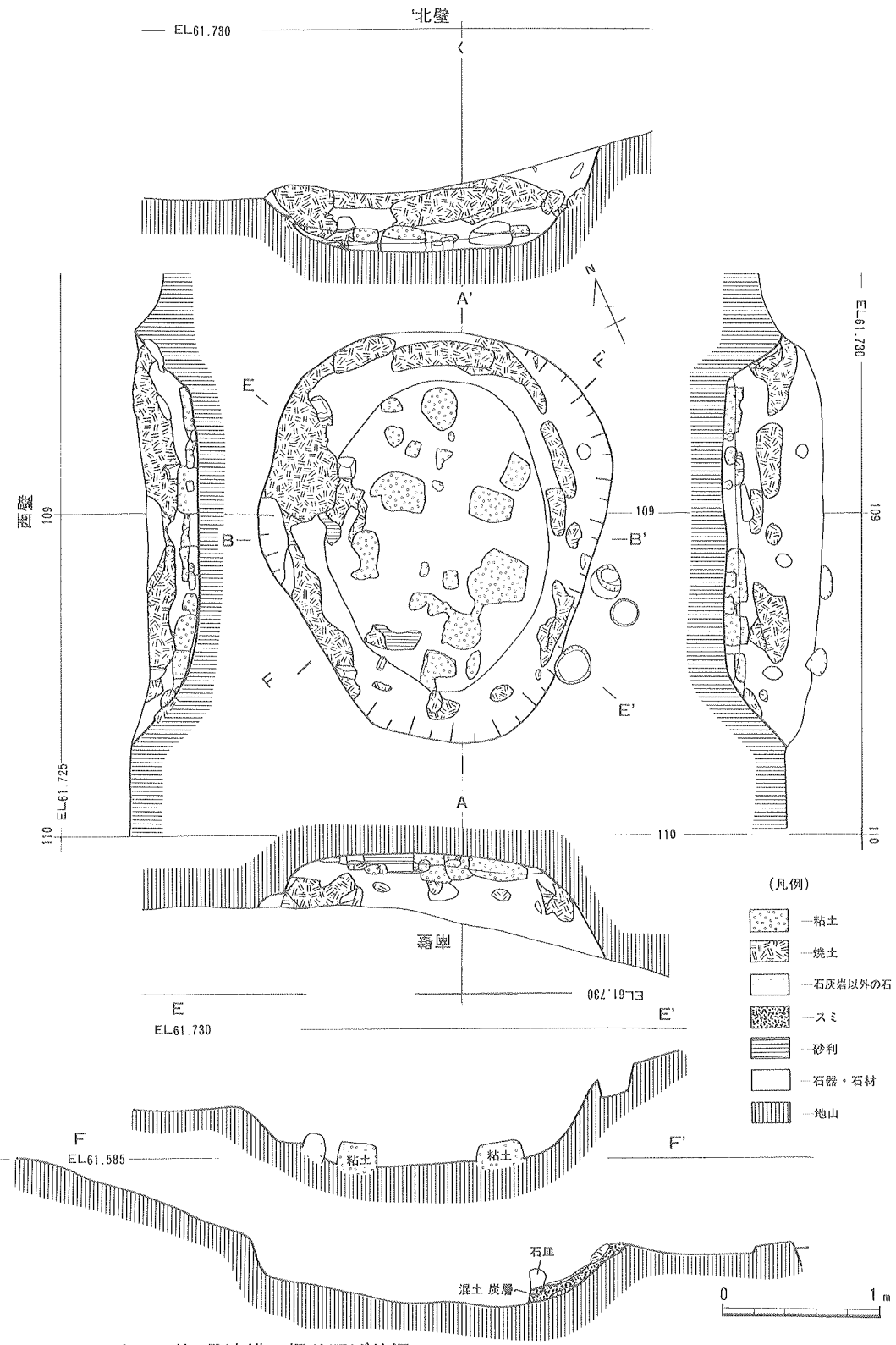


図19　22地区ロ第4号遺構の掘り下げ状況

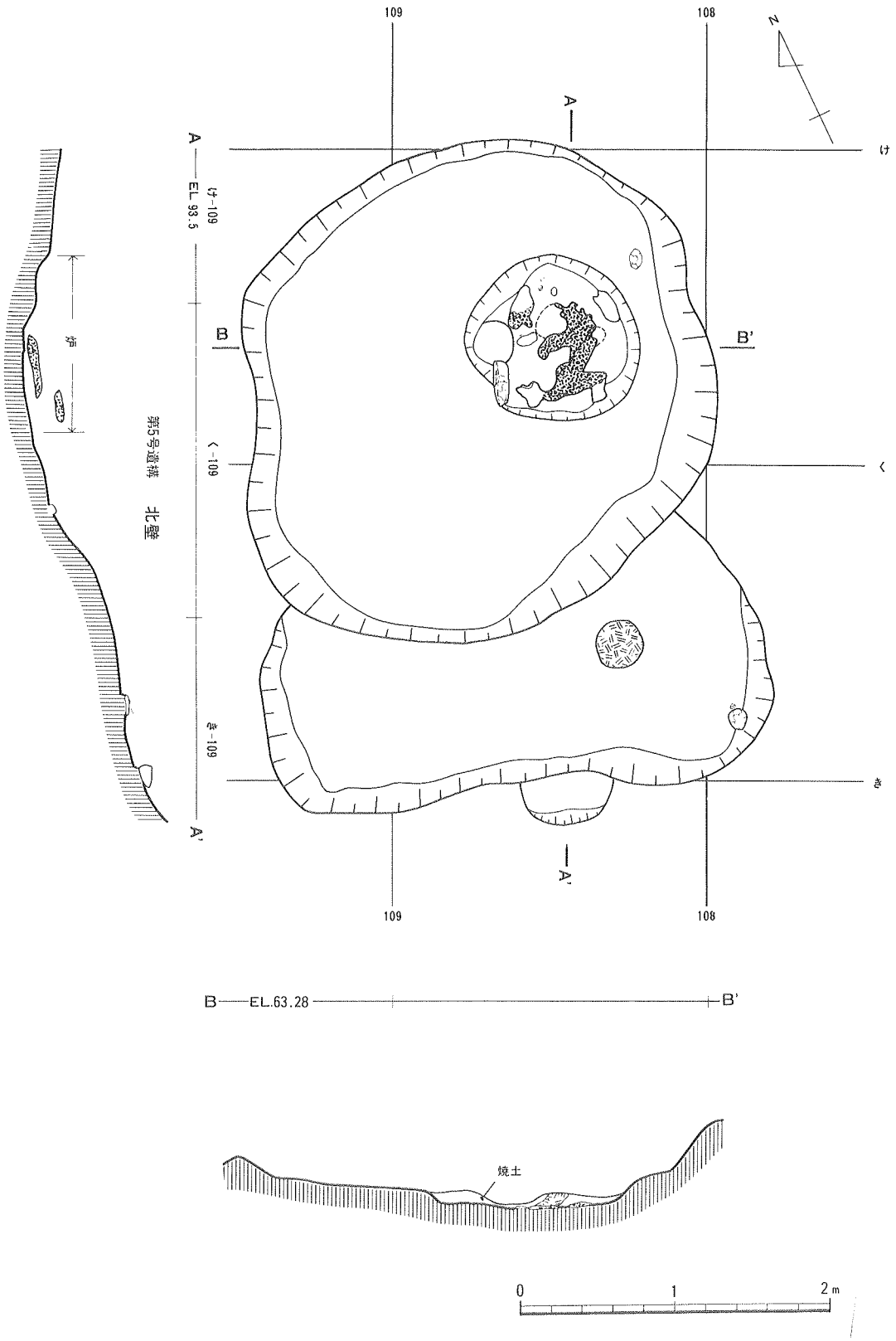


図20　22地区ロ第5、6号遺構掘り下げ後の状況

みられた。粘土の上部表面は焼けているものと焼けていないものの２種見られ、前者は焼土のレベルに達している。それらの状況より粘土は焼ける前から、既に置かれていたようである。本遺構からは面縄前庭式・嘉徳Ⅰ式などの土器の他に有孔石製品や石皿等が出土している。土器については図48に示した。

第５号遺構（図17）

本遺構も斜面地をとりこんだ約2.5ｍのやや楕円形に近いプランであるが、西側を第６号遺構により切られている。覆土の上面は土器・石器・千枚岩質礫等の細片が密に分布して検出された。深さは、他の竪穴遺構と比較して浅く約15cmを測る。床面には径約30cm、厚さ約５cmの焼土が北側で検出された。土器は面縄前庭式や嘉徳Ⅰ・Ⅱ式などが得られている。

第６号遺構（図20）

本遺構はすり鉢状の凹地のほぼ中心に位置し、東西約3.2ｍ×南北約３ｍの円形プランで深さ約30ｍを測る。３基の竪穴遺構のなかでは最も大きく壁面は床面からほぼ垂直に立ち上がっていく。北側～東側にかけては深く掘り込み床面を平坦に成形している。

また、遺構内の北西側には径約1.1ｍの炉跡が検出された（図21）。炉は鍋底状に掘り込まれ深さ約15cmを測り、炉内には炭化した樹木（マキ？）が検出された。炉跡の縁辺にはやや大型の長方形の千枚岩質の礫が３ケ所で確認された。土器は面縄前庭式・仲泊式などが得られている。

＜屋外炉＞

第７号遺構（図21）

本遺構は凹地の西側に位置し、第３号遺構から西へ約3.2ｍ離れた地点でもある。緩やかに立ち上がる斜面を『の』字状に掘り込んで露呈した。遺構は円形と袖の２つに分けられ、円形の部分は径75cm、深さ40cmを測り、それに沿う形で袖が北側へ弧状を描くように浅く掘り込まれている。円形内には上部に木炭層が下部に灰層が見られた。また、壁面には焼土が貼り付いた状況が観察された。

第８号遺構（図22）

本遺構は不定形の広がりをもち、千枚質の礫の集中が見られ、第４号遺構の南西側に隣接して検出された。遺構内からは径約45cmの円形の落ち込み２ケ所とジャリの集中した落ち込みの計３カ所確認された。落ち込みは第４号遺構寄りは浅く、もう一方は深度約25cmを測りかなり深かった。第４号遺構と何らかの関わりがあったかと思われるが判然としない。

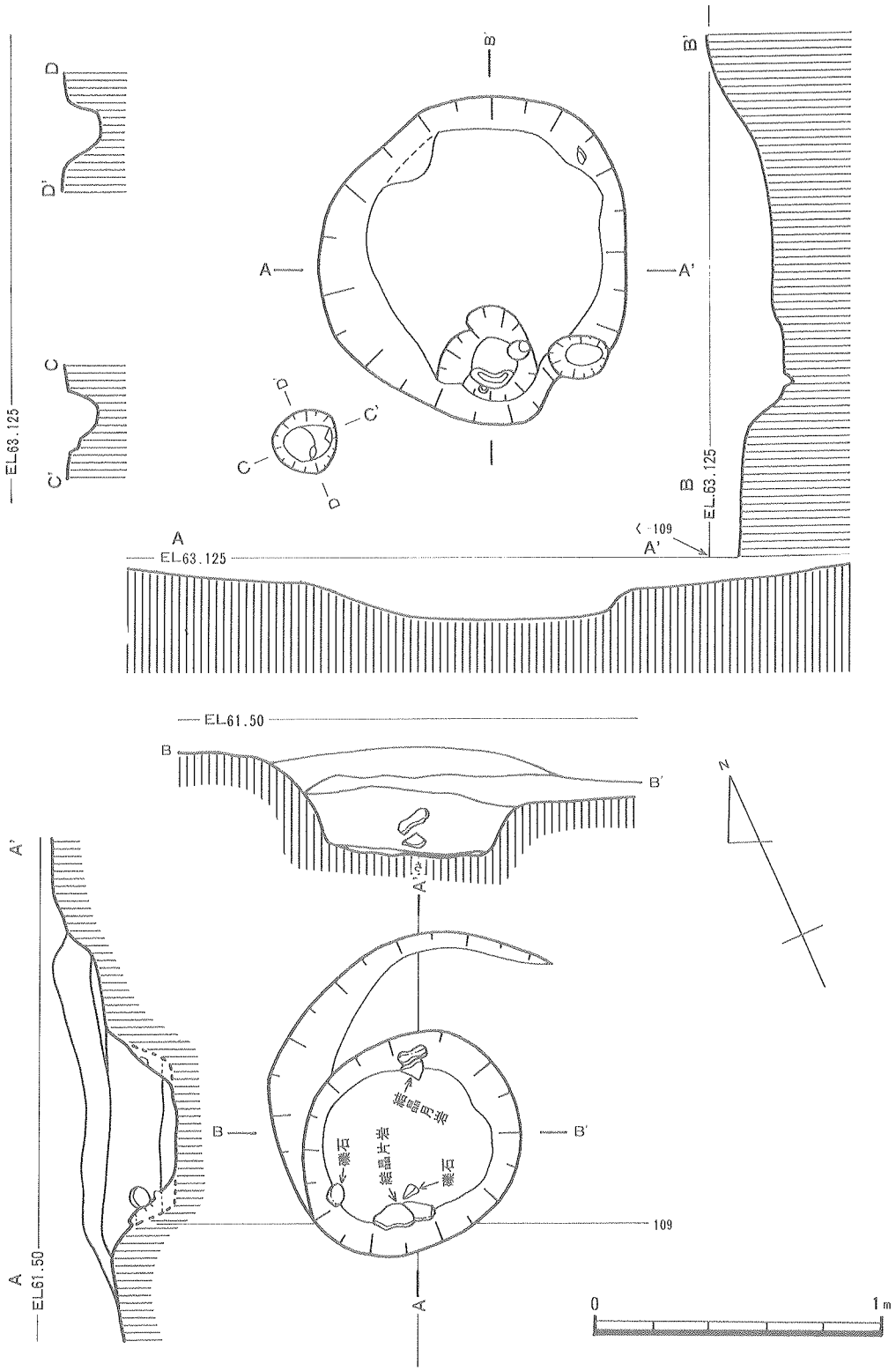


図21　22地区ロ第6号遺構内炉跡、第7号遺構

＜焼土群＞（図22）

焼土群は竪穴遺構の北～西側に４ケ所確認された。焼土は概して厚さ約10cmで第Ⅴ・Ⅵ層面に貼り付いた状況を示していた。灰層は見られなかった。

No.１の焼土は凹地の北側縁辺にあり、最も焼土粒の範囲が広くやや細長い形状を示していた。No.２の例はNo.１の下位の斜面で検出された。径約50cmの円形である。No.３は第２号遺構内より不定形に検出され、No.３は第１号遺構の西側に隣接して見られた。これらの焼土群は炉跡としての可能性を持つが、今後、類例資料の追加をまち検討したい。

＜ピット群＞（図16）

図16に示したとおり、凹地の北側から東側にかけての縁辺部や斜面地で顕著にみられた。ピットは第Ⅴ層と地山面でそれぞれ検出され、縁辺部ではピットの位置が重複する例も一部確認された。ピットの平面形は円形・楕円形が殆どである。大きさは最大のもので約70.0cm、最小約8.0cmで平均すると約26.0cmである。個々のサイズについては表４に示している。

表３　崖上地区遺構比較一覧

出表	項目	法量 長径	法量 短径	法量 深さ	長軸方向	出土遺物 土器	出土遺物 その他の人工遺物	出土遺物 食料残滓	状況	形状
22地区イ	第1号	180 cm	115 cm	30 cm	北西－南東	伊波式？僅少	なし	・木の実？ ・炭化物（20×7 cm）	10cm～20cm大の石灰岩礫、その下部焼土面	楕円形
	第2号	285 cm	265 cm	30 cm	北－南	仲泊式	骨製かんざし ノミ状工具、石皿、石斧	木の実？少量 貝殻 イノシン下顎大型の魚骨、リクガメ チャート片	遺構周辺及び内に柱穴	円形
	第3号	150 cm	117 cm	250 以上	北－南	面縄東洞式	螺蓋製貝斧（13点） 二枚貝有孔製品（リュウキュウサルボウ）ホラガイ有孔製品、メンガイ有孔（４個）痕打器、石皿 チャート石核、ニービ、扁平石斧	貝類、魚、獣骨多量	石灰岩のたて穴状凹穴に自然貝を中心に多量出土する。	長方形
22地区ロ	第4号	260 cm	220 cm	30 cm	北－南	面縄前庭嘉徳Ⅰ式	勾形状石製品 石皿	なし	第６号遺構に接する。すり鉢状	楕円形
	第5号	250 cm	－	15 cm	南東－北西	面縄前庭式嘉徳Ⅰ、Ⅱ式	石器	なし	第４号遺構によって切られる。	楕円形
	第6号	320 cm	320 cm	30 cm	南東－北西	面縄前庭式仲泊式	凹石	炭化した樹木	垂直に立ち上かる。 遺構内に炉跡	円形
	第7号	80 cm	70 cm	40 cm	西－東		凹石	なし	灰層、壁面に焼土かはりつく。	円形
	第8号	63 cm	65 cm	30 cm	西－東		なし	なし	不定形の広がり、円形落ち込み２か所、ジャリ集中した落ち込み	不安定

表4－1　22地区ロ　ピット群出土一覧

（　）内は内側の柱穴　単位：cm

柱穴	位置	a－a′ 短径	長径	深さ	絶対高		形態		b－b′ 短径	長径	深さ	絶対高	備考
1	こ－さ105	16.0	24.0				楕円						
2	こ－さ105	14.0	16.0				円						
3	こ－さ105	12.0	24.0				楕円						
4	こ－さ105	14.0	16.0				〃						
5	こ105	16.0	20.0				〃						
6	け－こ105	14.0	16.0				〃						
7	く－け105	22.0	22.0				円						
8	く－け105	20.0	24.0				楕円						
9	く105	22.0	28.0				〃						
10	き－く105	20.0	24.0				〃						
11	き－く105	20.0	26.0				〃						
12	か－き105	22.0	28.0				〃						
13	か－き105	18.0	22.0				〃						
14	か－き105	(14.0) 26.0	(20.0) 30.0				〃						柱穴が2つ重なっている
(S－N) 16	き106	30.0	35.0	22.0	64,681	11.0	〃	W－E	30.0	35.0	23.0	64,681	
(W－E) 16	か－き106	(6.0) 11.0	(13.0) 25.0	39.0	60.32		〃	b－b′	11.0	25.0	40.0	60.32	柱穴が2つ重なっている
(北 17 南)	お－か107	16.0	19.0	(36.0) 27.0	(62.428) 63.58	13.0	円	東西	16.0	19.0	26.0	63.53	
(北 18 南)	お－か107	19.0	23.0	(25.0) 36.0	(62.628) 63.42	15.0	楕円	東西	19.0	23.0	35.0	63.42	
19	お－か107	8.0	10.0	10.0	63.51	5.0	〃		8.0	10.0	15.0	63.51	
20	お－か107	11.0	20.0	34.0	63.39	10.0	〃		11.0	20.0	25.0	63.39	
21 a－a′		20.0	40.0	33.0	62,293	(9.0) 19.0							
21 b－b′	お－か107	10.0	15.0	15.0	62,473	8.0	〃						柱穴が2つ接する
21 c－c′		20.0	35.0	30.0	62,303	14.0							
22	お－か107	8.0	20.0	14.0	63,430	3.0							柱穴が3つ接する
23	か－き108	8.0	10.0	14.0	60.913	6.0	楕円		8.0	10.0	9.0	60.913	
24	か－き108	(10.0) 16.0	(12.0) 20.0	19.0	63.00		〃						柱穴が2つ重なっている
25	か－き108	14.0	24.0	8.0	63.07	20.0	〃	b－b′	14.0	24.0	20.0	62,874	柱穴が2つ重なっている
(W－E) 26	き－く109	19.0	19.0	14.0	61.04	12.0	円						
(a－a′) 27	か－き109		20.0 18.0	62.75 62.83									柱穴がいくつか重なり接する
28	か－き109	(9.0) 21.0	(17.0) 23.0	8.0	62.71	(2.0) 20.0	楕円						柱穴が2つ重なっている
29	き－く109	(6.0) 12.0	(6.0) 13.0	10.0	62.61	(8.0) 9.0	円		12.0	13.0	10.0	62.61	柱穴が2つ重なっている
30	き－く109	19.0	24.0	12.0	62.38	18.0	楕円		19.0	24.0	15.0	62.38	柱穴が2つ重なっている
31	き－く109	17.0	20.0	12.0	62.41	15.0	〃		17.0	20.0	17.0	62.41	柱穴が2つ重なっている
32	き－く109	29.0	31.0	9.0	62.61	25.0	〃	a－a′					柱穴が3つ重なっている
〃								b－b′			9.0	60,593	
33 a－a′	き－く110、111	7.0	24.0	14.0	62.62	23.0			7.0	24.0	16.0	62.62	柱穴がいくつか重なり接する
33 b－b′	〃	8.0	13.0	9.0	62.58	13.0			8.0	13.0	13.0	62.58	
33 c－c′	〃	10.0	18.0	21.0	62.51	15.0			10.0	18.0	18.0	62.51	
34	き－く110	15.0	25.0	10.0	62.71	20.0	楕円		15.0	25.0	10.0	62.71	
35	き－く110	(13.0) 20.0	(20.0) 22.0	34.0	62.37	(10.0) 16.0	〃		20.0	22.0	30.0	62.37	柱穴が2つ重なっている
36	き－く110	17.0	17.0	16.0	62.61	15.0	円		17.0	17.0	11.0	62.61	
37	き－く110	22.0	24.0	16.0	62.53	19.0	楕円		22.0	24.0	9.0	62.53	
38	か－き109	(10.0) 25.0	16.0 42.0	10.0	63.05	(12.0) 88.0	〃		25.0	42.0	12.0	63.05	
39	か－き109	17.0 18.0	19.0 19.0	7.0 10.0	63.104 63.13		円		18.0	19.0	10.0	63.13	
40	か－き110	24.0	34.0				楕円						
41	か－き109	24.0	28.0				〃						
42	お－か109	14.0	17.0	9.0	63.78	11.0	楕円						
43	お－か110	15.0	64.0	14.0	63,79	60.0		a－a′	10.0	16.0	18.0	63,694	柱穴が4つ接する
〃								b－b′	13.0	21.0	17.0	63,704	
〃								c－c′	9.0	16.0	15:0	63,684	
〃								D－D′	9.0	19.0	12.0	63,694	
44	か－き110	20.0	30.0	17.0	63.37	10.0	楕円		20.0	30.0	16.0	63.37	
45	か－き110	10.0	15.0	10.0	63,32	10.0	〃		10.0	15.0	8.0	63.32	
46	か－き110	20.0	36.0	8.0	63.48 63.48	33.0	〃		20.0	36.0	6.0	63.48	
47	か－き110	12.0	23.0	25.0	63.28	20.0	〃		12.0	23.0	10.0	63.28	
48	か－き110	14.0	24.0				〃						
49	か－き110	15.0	21.0	4.0	63.88	20.0	〃	a－a′	15.0	18.0	12.0	63,174	柱穴が2つ接する
				15.0				b－b′	9.0	9.0	3.0	63,244	
50	き－く107	8.0	16.0	18.0	62.04	8.0	〃		8.0	16.0	18.0	62.06	
51	く－け106	34.0	34.0	12.0	62.8	35.0	〃	b－b′	34.0	34.0	10.0	62.8	
	こ－さ108	18.0	20.0	15.0	61.45	13.0	円						
53	し－す108	(10.0) 27.8	(12.0) 27.0	14.0	62,995	(12.0) 16.0	円	SW－NE	27.0	27.0	14.0	61,933	柱穴が2つ重なっている
54	し－す109	40.0	40.0				円						
55	け－こ109	16.0	24.0	14.0	61.8	20.0	楕円	b－b′	16.0	24.0	12.0	61.8	
56	さ－110	14.0	24.0	16.0	62,055	18.0	楕円	b－b′	16.0	38.0	15.0	62,085	柱穴が3つ重なっている
57	け－こ111	18.0	20.0	11.0	62,085	15.0	円	b－b′	18.0	20.0	9.0	62,085	
58	け－こ111	21.0	25.0	11.0	62,055	22.0	楕円	b－b′	21.0	25.0	9.0	62,055	石が露出
59	こ－さ111	15.0	17.0	14.0	62,005	15.0	円		15.0	17.0	8.0	62,005	

表4－2　22地区ロ　ピット群出土一覧

（　）内は内側の柱穴　単位：cm

柱穴 No.	位置	a－a′ 短径	a－a′ 長径	a－a′ 深さ	a－a′ 絶対高	a－a′ (最大径)底径	a－a′ 形態		b－b′ 短径	b－b′ 長径	b－b′ 深さ	b－b′ 絶対高	備考
60	けーこ110	(17.0) 48.0	(30.0) 58.0	24.0 30.0	62.724 62.794	(11.0) 45.0	楕円	b－b′	48.0	58.0	(7.0) 28.0	62.994 62.744	柱穴が２つ重なっている
61	けー110		(20.0) 52.0	25.0	60.95								平面図が半分しか書かれていない
62	けーこ110	13.0	16.0	8.0	62.12	14.0	楕円						
63	けーこ110	14.0	17.0	22.0	62,413		楕円		14.0	17.0	6.0	62,603	
64	けーこ111	14.0	16.0	4.0	62,623		〃		14.0	16.0	18.0	62,493	
65	けーこ111	14.0	15.0	15.0	62,493		円		14.0	15.0	6.0	62,613	
66	けーこ111	14.0	22.0	14.0	62,085	12.0	楕円		14.0	22.0	15.0	62,085	
67	けーこ111	33.0	52.0	8.0	62,065	45.0	〃	b－b′	33.0	52.0	4.0	62,065	
68	けーこ111	30.0	42.0	8.0	61,905	35.0	〃		30.0	42.0	7.0	61,905	
69	くーけ111	(11.0) 15.0	(12.0) 22.0	30.0	61,905	(7.0) 21.0	〃	a－a′	10.0	11.0	16.0	61,905	柱穴が２つ重なっている
〃								b－b′	15.0	22.0	28.0	61,905	
70	くーけ111	20.0	26.0	14.0	60,923	22.0	〃	b－b′	20.0	26.0	14.0	60,923	
71	くーけ111	17.0	23.0	8.0	61,003	19.0	〃	b－b′	17.0	23.0	8.0	61,003	
72	くーけ111	(9.0) 23.0	(10.0) 28.0	17.0	61,073	(9.0) 14.0	〃	b－b′	23.0	28.0	17.0	61,073	柱穴が２つ重なっている
73	くーけー112	(8.0) 20.0	(9.0) 25.0	32.0	62,065	(8.0) 20.0	〃		20.0	25.0	8.0	62,065	
74	くー112	(10.0) 22.0	(13.0) 29.0	13.0	61,975	(9.0) 20.0	〃						〃
75	きーく112	19.0	21.0	11.0	62,434	12.0	円	b－b′	19.0	21.0	11.0	62,454	
76	きーく112	23.0	26.0	8.0	62,484	15.0	楕円	b－b′	23.0	26.0	10.0	62,544	
77	かーき112	35.0	38.0	15.0	62,774	28.0	〃	b－b′	35.0	38.0	15.0	62,764	
78	かーき111	26.0	30.0			20.0	〃	b－b′	26.0	30.0	18.0	63,124	
79	かーき111	15.0	15.0			8.0	円	b－b′	15.0	15.0	7.0	63,374	
80	おーか112	15.0	19.0	11.0	63,434	17.0	楕円	b－b′	15.0	19.0	11.0	63,394	
81	おーか112	25.0	25.0			15.0	円	b－b′	25.0	25.0	8.0	63,304	
82	か112	18.0	19.0			20.5	〃	b－b′	18.0	19.0	14.0	63,184	
83	かーき112	(17.0) 27.0	(19.0) 33.0	11.0	63,265	(20.0) 25.0	楕円	b－b′	27.0	33.0	13.0	63,265	
84	かーき112	18.0	24.0			13.0	〃	b－b′	18.0	24.0	7.0	63,154	
85	かーき112	16.0	20.0			14.0	〃	b－b′	16.0	20.0	7.0	63,094	
86	かーき112	17.0	17.0	12.0	62,944	13.0	円	b－b′	17.0	17.0	12.0	62,954	
87	かーき112	23.0	56.0	12.0	62,965	30.0		a－a′	14.0	17.0		62,985	柱穴が３つ重なっている
〃								b－b′	23.0		14.0	63,005	
〃								c－c′	11.0	14.0		63,025	
88	かーき112	(9.0) 18.0	(12.0) 35.0	14.0	62,915	(10.0) 35.0	楕円		18.0	35.0	14.0	62,915	柱穴が２つ重なっている
89	かーき112	25.0	25.0	12.0	62,694	15.0	円	b－b′	25.0	25.0	12.0	62,694	
90	きーく112	41.0	70.0	15.0	62,534	57.0	楕円	b－b′	41.0	70.0	15.0	62,504	
91	きー113	(10.0) 31.0	(13.0) 40.0				楕円						柱穴が３つ接する
92	きー113	30.0	40.0				〃						
93	かーき112	25.0	40.0			23.0	楕円						
94	きー112	20.0	33.0			34.0	〃						
95	かーき113	(10.0) 28.0	(11.0) 35.0				〃						柱穴が２つ重なっている
96	かーき112	20.0	22.0	6.0	62,714	11.0	円						
97	かーき112	17.0	22.0	15.0	62,524	15.0	〃		17.0	22.0	10.0	62,654	
98	かーき112	24.0	58.0	6.0	62,794	13.0	楕円						
99	かーき112	30.0	(12.0) 25.0	11.0	62,784	15.0	〃						
100	かー113	(17.0) 19.0	22.0 40.0	5.0	62,924	20.0	〃		19.0	40.0	10.0	61,724	柱穴が２つ接する
101	かーき113	(17.0) 22.0	(22.0) 53.0	20.0	62,454	(17.0) 20.0	〃						
102	かーき113			10.0	62,434	(10.0) 19.0	〃						柱穴が２つ接する
〃				14.0	62,474	(12.0) 14.0	〃						
103	かーき113	27.0	46.0	10.0	62,574	20.0	〃	W－E	27.0	46.0	17.0	62,454	

焼　土

焼土1	くーけ105	(27.0) 35.0	104.0 114.0	7.0			(木の葉)形状、楕円	b－b′	35.0	114.0	20.0		
〃 2	くー106												
〃 3	けー107	40.0	51.0		62,655								
〃 4	けーこ107	35.0	51.0				ひし形						
〃 5	きーく108	30.0	30.0	7.7	60.73		円						
〃 6	けー111	35.0	82.0	5.0	60,990	7.5	楕円						

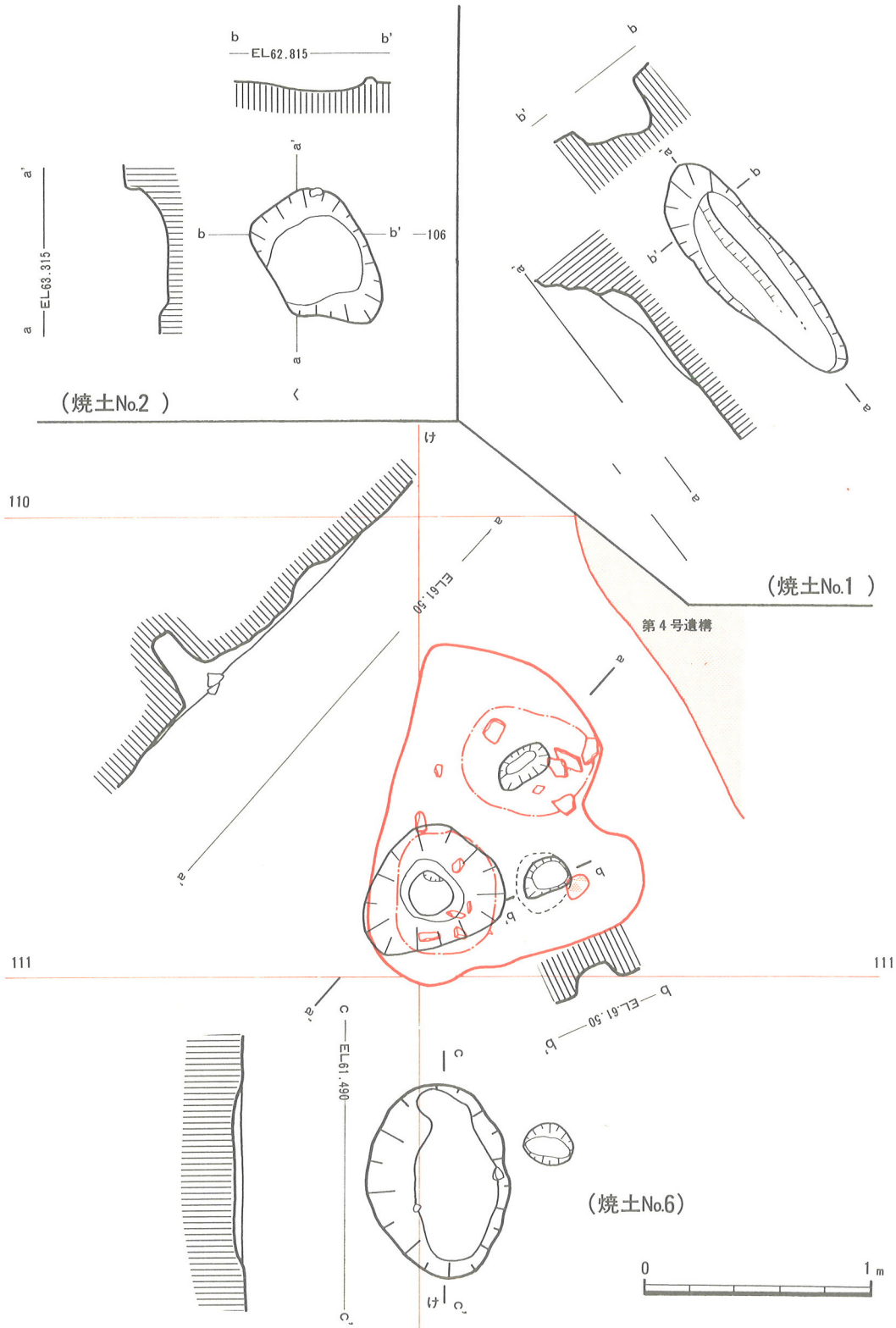


図22　22地区ロ第8号遺構、焼土No.1 焼土No.2 焼土No.6 の状況

第２節　崖下地区（21地区）

本地区は22地区の東及び北側の崖下一帯で、北東側の岩陰を利用している按司墓を境に東側へ傾斜する面と北側へ傾斜する面がみられる。東側の面では小岩陰が点々とみられ、北側はゆるやかに北側に傾斜する按司墓（伊波仲間門中墓）の前庭部と崖上（西側）から傾斜して按司墓に至る所（通路として利用）がある。このような若干の地形的な違いを考慮して、東側の面をイ区、按司墓前庭部をロ区、按司墓への通路として利用されている所をハ区と細区分した。

上記３区から下方へは急傾斜を示し、表面に堆積する腐植土は薄く、基盤の結晶片岩がみえかくれしながら畑地へ至る。北側斜面下方においては数ケ所の試掘グリッド（図３）を設けて調査を実施した結果、表土層（厚さ約80cm）から若干の陶器片・土器片が採集されたものの、オリジナルな遺物包含層はなく、表土下は直接基盤の結晶片岩が露出した。

以下、イ、ロ、ハの各区の状況について概略を述べる。

1.21地区イ

前記の通り点在する小岩陰の３ケ所（図23）と按司墓に利用されている岩陰の東部（図24）に貝層や焼土面が検出されただけである。

最も東側にある岩陰では前面に近い部分で貝溜りが露出していた。奥の方は厚さ約15cmあり、それを除去すると貝の部分がさらに奥側へ延びており、全体として約80cm×150cmの範囲になった。やや三日月状の広がりをみせ、厚さは約５cmと薄く、土器などの人工遺物はほとんど得られていない。

この貝溜りを掘り下げると基盤の結晶片岩が露出する。この結晶片岩の直上で約40cm×70cmの範囲に焼土が検出された。厚さは約２cmで遺物は含まず、性格は判然としない。

２番目の岩陰にみられる貝溜りは表面に露出しており、範囲は約40cm×50cmである。雑然とみられる琉球石灰岩の間（前面に近い部分）に堆積しており、厚さは約15cmである。下部は基盤の結晶片岩が露出。

３番目の岩陰にみられる貝溜りも表面に露出している。奥の方から前面部へかけて堆積しており、岩陰のほぼ全面を覆う。奥から前面へゆるやかに傾斜し、厚さは10cm前後でそれほど厚くはない。土器片が若干得られただけである。下部は基盤の結晶片岩が露出するが、前面近くでは径が約10cm、深さ約10cmの落ち込み部が１ケ所検出された。

按司墓として利用されている岩陰の東部では３枚の層がみられた。表土は岩陰部では比較的水平の堆積を示し、前庭部から下方へ傾斜する。厚さは岩陰部で約15cmであるが、前庭部では40cm近くの厚さを有す。墓に関連する遺物や先史遺物（土器など）が得られている。第Ⅱ層は前庭斜面部にみられる小骨を密に混入した層である。その斜面に沿って10cm前後の厚さを有して堆積している。人工遺物はほとんど出土していない。

第Ⅲ層は岩陰部に堆積した貝層で東側へ傾斜している。含まれる貝の量により上、下部に分けられる。上部は多量の貝を含み、一部において按司墓をつくる際に撹乱を受けたと思われ

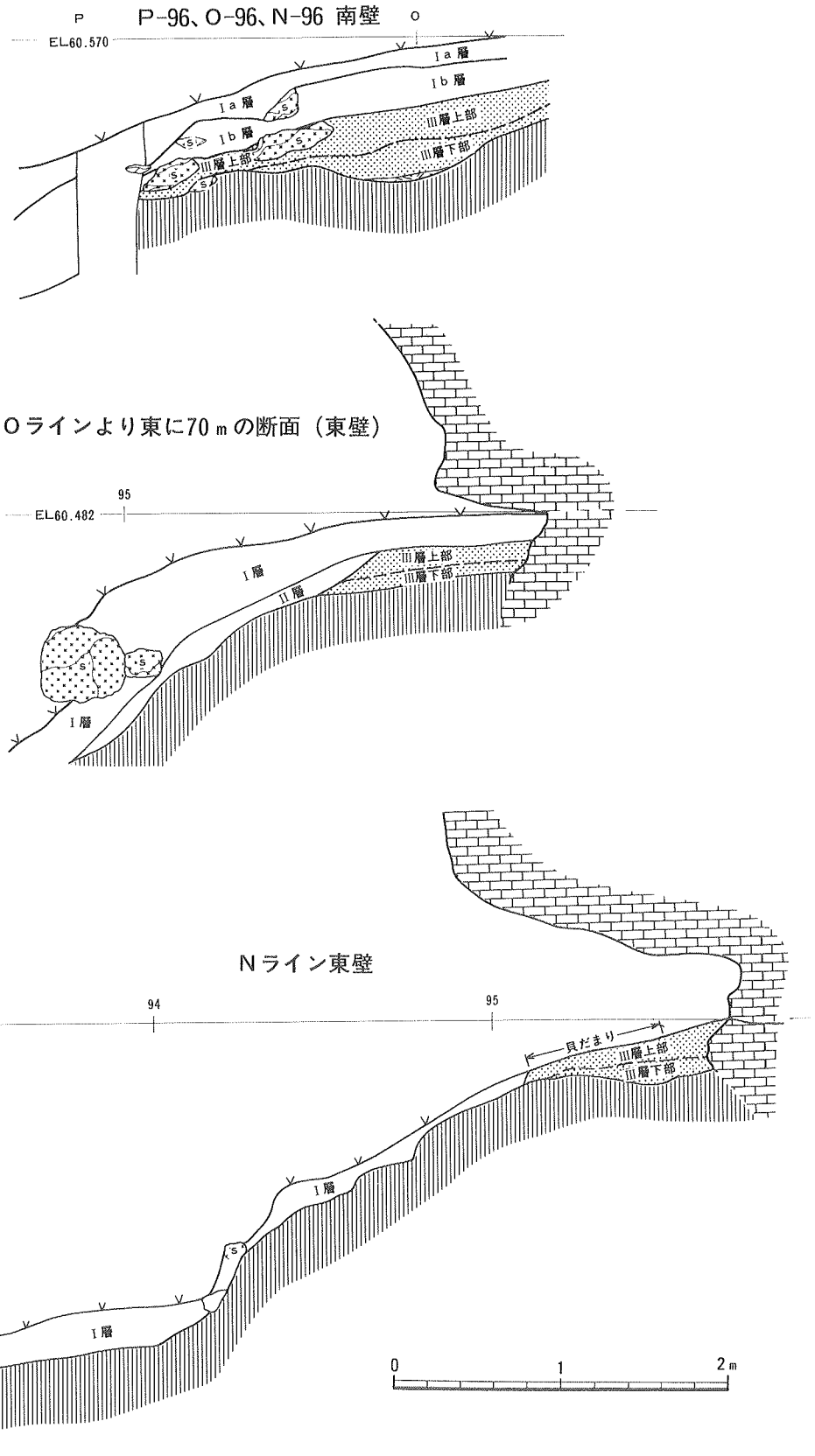
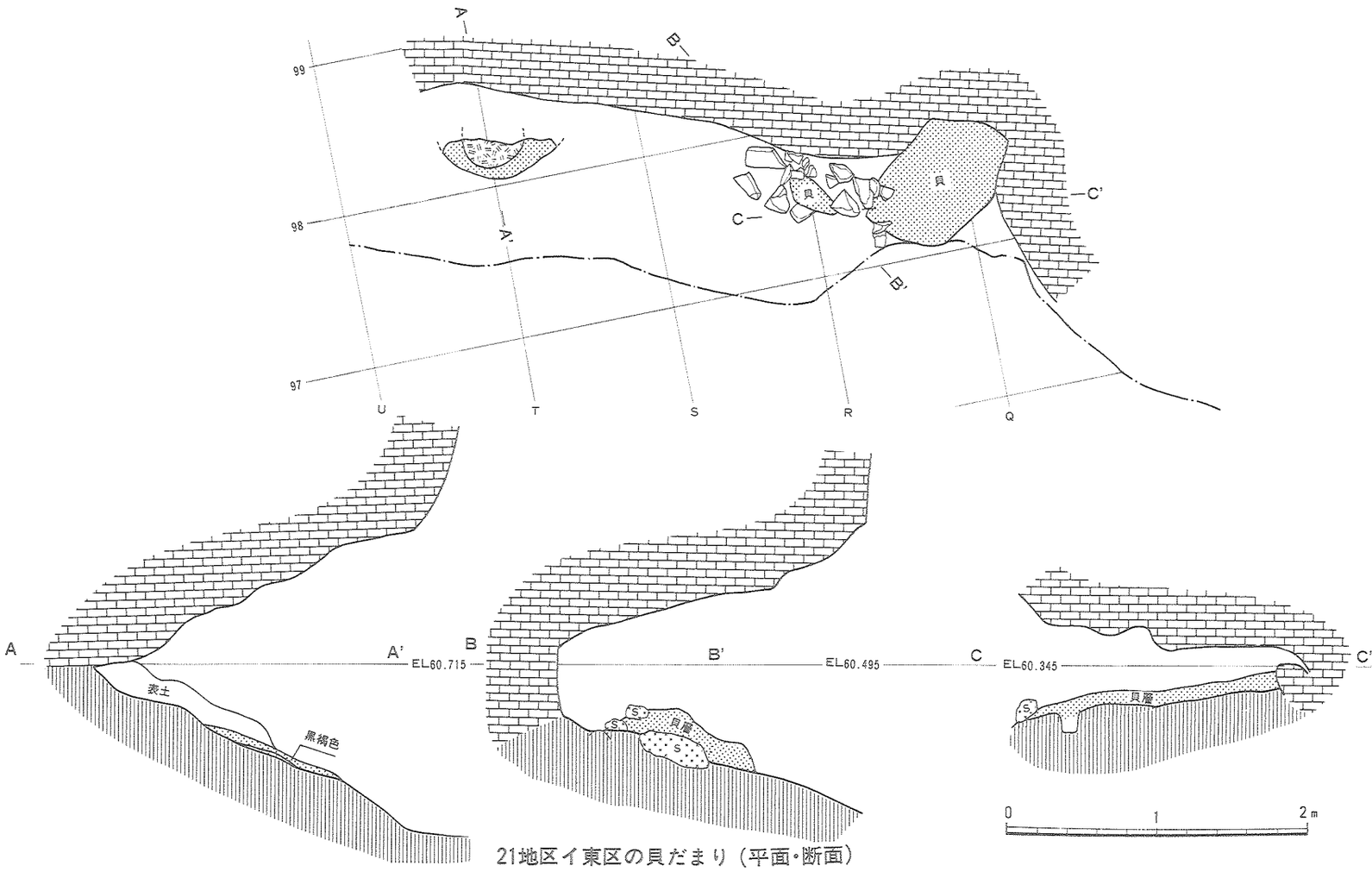


図23　21地区イ西区層序



21地区イ東区の貝だまり（平面・断面）

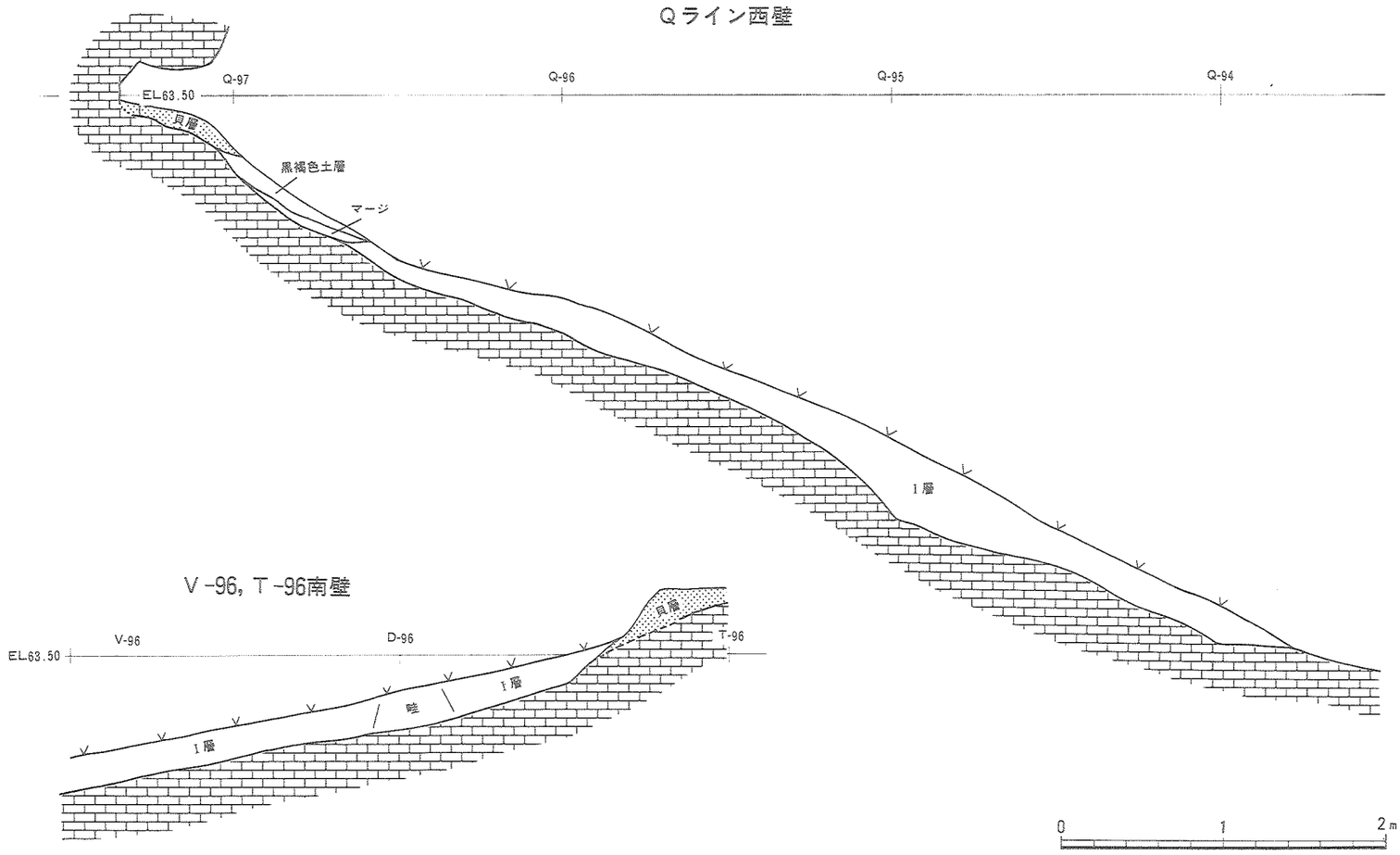


図24　21地区イ東区の貝だまりの状況と層序

る部分も見受けられた。10cm～15cmの厚さを有し、先史遺物のほか陶磁器なども得られている。量的にはそれほど多くなく、土器は第1群・第2群とも出土しているが1群が若干多い。第2群に属する脚台が1点(図52の23)得られており注目される。主体貝はウミニナで、その他にチョウセンサザエ、シレナシジミ、陸産マイマイなどが見られた。

下部は上部よりもその範囲が狭くなる。厚さは約10cmで貝の量が少なくなる。特に陸産マイマイはほとんど出土しない。未撹乱の層で人工遺物は少ない。土器では平底が1点出土しているが、口縁部で型式名の判別出来るものは第1群土器だけであった。

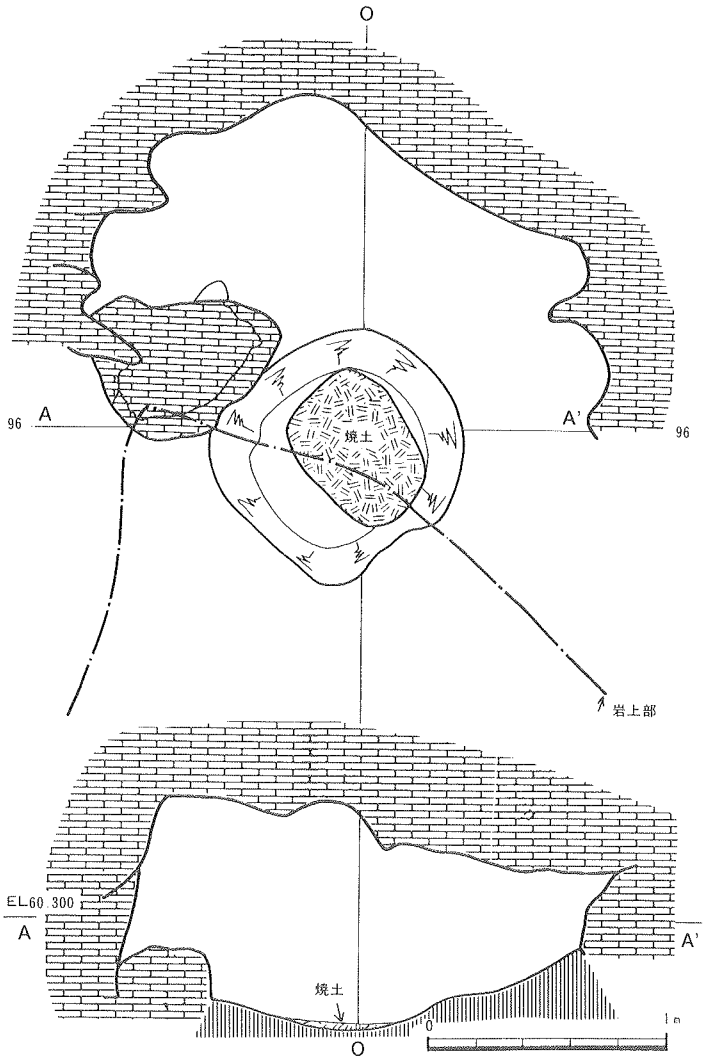


図25　21地区イ西区の焼土の状況

本層を掘り下げると基盤の結晶片岩に達するが、岩陰のほぼ中央付近でその結晶片岩を径約100cmの略円形状に掘り込んだ所がみられた。その掘り込みはナベ底状になっており、底面の奥寄りで約60cm×50cmの略長方形状に焼土面が検出された（図25）。ナベ底状になった最深部は約10cmで、焼土の厚さは約5cmである。このような状況からすれば、本貝塚が形成された当時既にこの岩陰部は何らかの形で利用されていたと推察される。尚、第Ⅱ・第Ⅲ層の範囲を図26に示した。

2.　21地区ロ

按司墓の前庭部で全体的に北側へゆるやかに傾斜する。特に墓の前面約2mまでは非常にゆるやかなスロープとなっている。調査の結果、墓の手前約2mまでは表土と同じように基盤の結晶片岩もゆるやかな傾斜であるが、そこから以北へは急斜をなしており、その箇所で未撹乱の遺物包含層や貝溜り及び焼土などが確認された。

以下、本区の層序、検出された貝溜り、焼土について簡記する。

a.層序

本区の東西、南北のラインの土層断面図を図28に掲載した。基盤を含め5枚の層がみられ

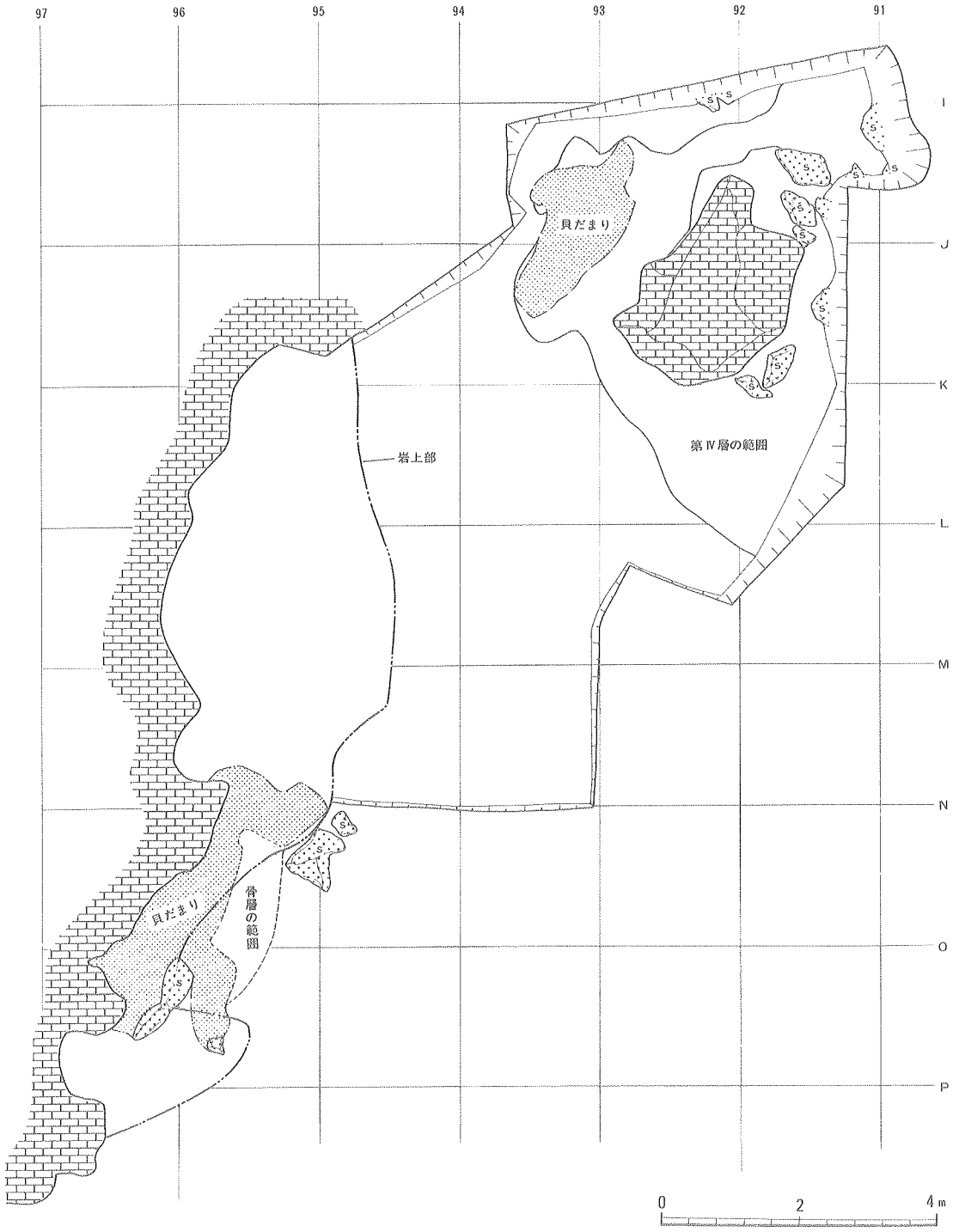


図26　21地区イ西区、21地区の平面(包含層の状況)

た。

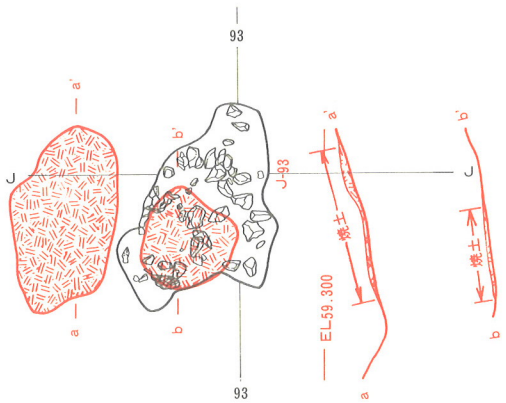
第Ⅰ層：表土撹乱層で本区のほぼ全面にみられ、南側から北側へ傾斜しながら漸次厚くなる。最も厚い所で約90cmの層厚を有し、結晶片岩の砕片が多く見受けられる。陶磁器などとともに先史遺物も得られている。按司墓周辺（94ライン以南）では直接基盤の結晶片岩の上に乗る。北西隅では20～60cm大の琉球石灰岩が多い。

第Ⅱ層：本区の北西側にみられる黒褐色土層で、撹乱層である。本層も南側から北側へ傾斜しており、最も厚い北西隅の箇所で約60cmの厚さを測る。結晶片岩の砕片が散見され、北西隅では大・小の琉球石灰岩が多く見られる。先史遺物もわずかに出土している。

第Ⅲ層：北東隅では見られないものの、本区のほぼ全面（94ライン以北）でみられる茶褐色土層である。南側から北側へ傾斜し、最も厚い所は約60cmを測る。南西側では本層の上部を表土層が覆う。本層以下は未撹乱の遺物包含層であるが、出土量はそれほど多くはない。

第Ⅳ層：本区のほぼ全面にみられる暗褐色土層で、南西側で厚く北側へ薄くなる。本層も南側から北側へ傾斜し、最も厚い南西側で約60cmの厚さを有す。遺物の出土量はそれほど多くなく、土器では第２群土器の出土が若干多い。注意される遺物として、サメ歯製有孔製品（図160の72）が１点得られている。

第Ⅴ層：基盤をなす結晶片岩である。全体的に南側から北側へ傾斜するが、特に94ライン以北においては急斜をなす。上面は凹凸が見受けられる。



b.貝溜り

本区の南西隅Ｊ・Ｋ－93・94にまたがって検出された（図27）。その部分は基盤の結晶片岩が凹部を形成しており、その結晶片岩に沿うように第Ⅳ層の下方より露出した。平面的な範囲は約140cm×280cmで不定形である。厚さは約20cmを測る。主体貝はウミニナで、その他にサラサバティ・チョウセンサザエなどが見受けられる。貝種など

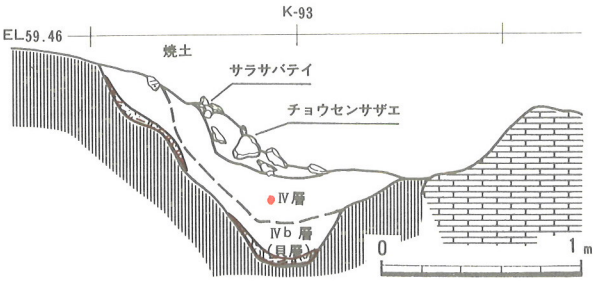


図27　21地区ロの貝だまりと焼土の状況

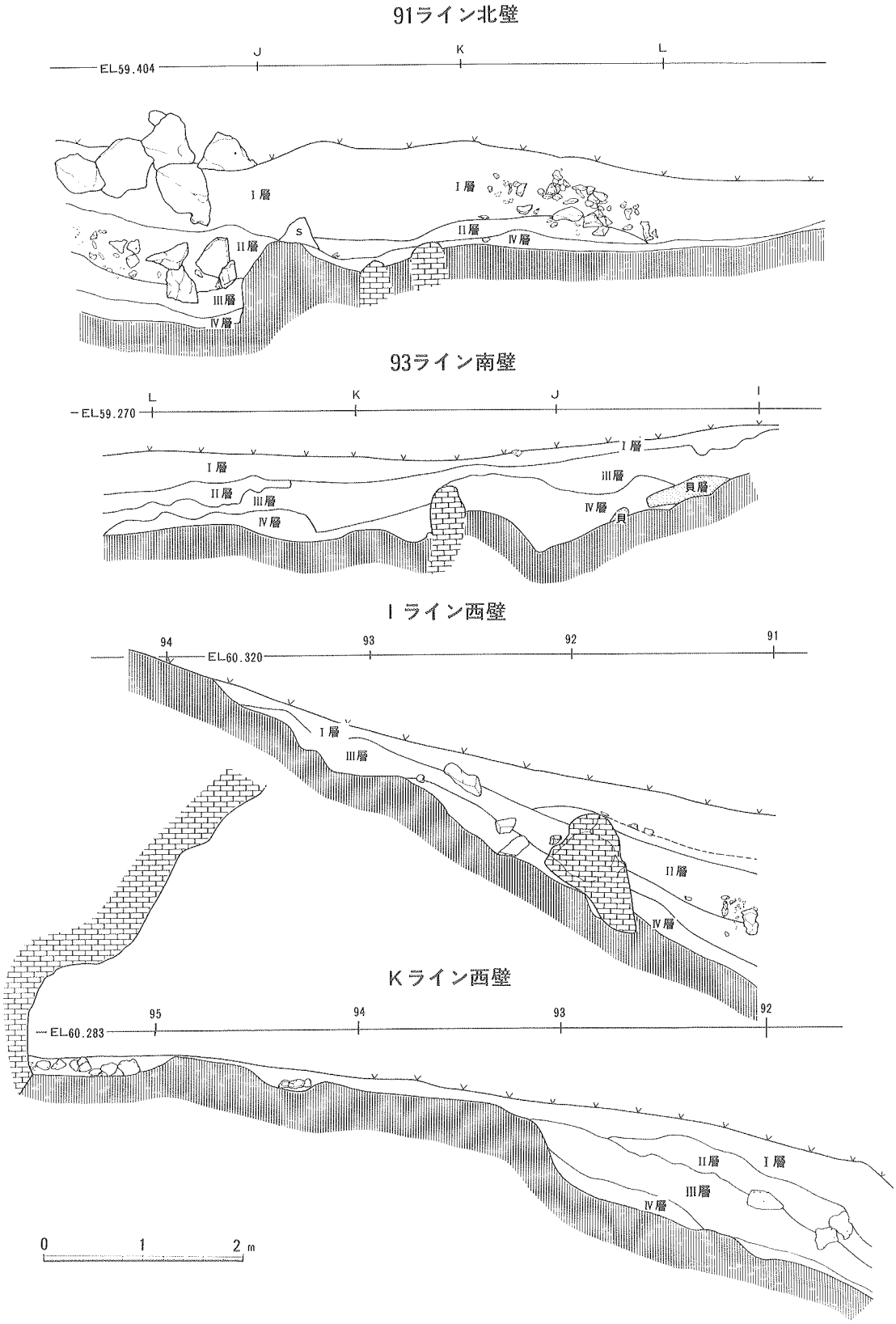

91ライン北壁
J
K
L
EL.59.404
I層
II層
III層
IV層
S
93ライン南壁
L
K
J
I
EL.59.270
貝層
貝
Iラインン西壁
94
93
92
91
EL.60.320
Kライン西壁
95
94
93
92
EL.60.283
0
1
2 m

図28　21地区ロ層序

は前述のイ区の貝層や後述するハ区の貝層とあまり違いは見られない。

土器などの遺物が少量得られており、第1群土器が僅かに多いようである。

c.焼土

図27に示すように前記した貝溜りの下部で確認された。貝溜りの見られる凹部の東側部分の傾斜に沿って、途中で一端途切れるものの上方から底面にかけて検出された。上方の焼土が約50cm×80cmの範囲で、底面の焼土が約50cm×50cmの範囲で認められた。厚さは5cm前後で、基盤の結晶片岩に貼り付くように検出され遺物は含まない。

3. 21地区ハ

本地区のメインになった区で、台地上から崖下東側にある按司墓への通路として利用されていた場所である。南北約4m（東側では6m）、東西約30mの広さで、南側は琉球石灰岩の岩盤がせまり、北側は大きな琉球石灰岩により堆積土がせきとめられる形となっている。南北の傾斜は急で、東西の傾斜はゆるやかである。

当初、本区はそれほど注目された場所ではなかったが、調査が進むにつれ下部において保存の良好な遺物包含層が確認され、遺物も多量出土した。特に東側では厚い所で80cmを越す貝層があり、土器、石器、骨・貝製品が質・量とも豊富に出土した。この貝層の南側では焼土を伴い、その部分では貝も焼けているものが多かった。また、Ⅳ層面では一部に焼土（図32）なども見受けられた。

前述の貝層は本区の西側では見られず（図29）、炭の集中する部分や犬の骨の集中部（図34）などが見受けられた。東側の層相とは若干の差異がみられた。

本区は基盤の結晶片岩の上を石灰岩風化土のマージが覆い、その上に遺物包含層が堆積している。そのため1部マージを掘り下げ結晶片岩の確認を行い、全体としてはマージを露出させて発掘を終了した。地山のマージを含め8枚の層が確認出来た。以下、本区の状況についてその概略を述べる。

a.層序

本区のほぼ中央にある琉球石灰岩を境に、東、西で若干の相違が見られた。東部は南から北へ傾斜するが、西部は南から急傾斜を示す地山が、ゆるやかな弧を描きながら上方へ向い、そこではゆるやかな底面を有す凹部を形成している。図30及び図31に土層断面図を示した。96ライン以南は地山のマージが露出している。以下、第Ⅰ層より記す。

第Ⅰ層：表土層で本区のほぼ全面を覆う。南から北への傾斜は比較的急で、西から東への傾斜はゆるやかである。層厚は厚い所で約80cmを測る。琉球石灰岩の大きなものが散在している。遺物は先史遺物やグスク、近世の遺物が若干得られている。

第Ⅱ層：茶褐色混礫土層でC－93を中心にみられたもので、部分的な層である。4～5cm大の小礫を密に混入している撹乱層である。遺物は若干の土器片が得られただけ

である。南から北へ傾斜しており、厚い所で約30cmである。

第Ⅲ層：黒色の腐植土層で本区の中央部付近ではみられず、東側・西側において認められた。西側では西から東へ傾斜を示すが、東側では比較的水平な堆積を示す。20～40cmの厚さを有し、ややしまった感じの土層である。若干の土器片が得られただけである。旧表土と考えられる。

第Ⅳ層：暗黄色土層で本区東側にのみ見られた。南から北へ傾斜しており、直接表土層と接している。C－94付近では下部が北側へ急傾斜を示し、そこが本層の最も厚く（約80cm）堆積した所となっている。琉球石灰岩の大きなものが所々にみられる。未撹乱層で遺物は土器が割り合い多く得られている。

第Ⅴ層：黄褐色土層で本区西側にのみ堆積している。ほぼ水平方向の堆積を示しており、層厚は約50cmである。土は若干しまっており、やや堅い。未撹乱層で、遺物はそれほど多くはない。ただ、図109の614に示した底部資料は、本貝塚から出土している土器とは趣きを異にしており注意される。

第Ⅵ層：暗褐色土層で本区のほぼ全面にみられるが、下部では小骨が密に混じる。層色の変化はみられないものの、その状況により上部をⅥａ層、下部をⅥb層とした。

ａ層：変化に富んだ堆積の状況を呈す。本区のほぼ中央にある大きな琉球石灰岩により、東西に分離される。東側では南西側から北東側へ急傾斜を示す。最も厚く堆積した北西側で約50cm、最も薄いC－94付近で約10cmを測る。図30のCライン東壁の断面図をみると、北側では大きな琉球石灰岩の下方へも潜り込む。本層上面では焼土も見受けられた。

遺物は割り合い多い。土器・石器などが得られており、土器は１群よりも２群が多く、石器は敲打器類が多かった。

ｂ層：本層もⅥa層と同様比較的変化のある堆積の仕方である。西側ではゆるやかな凹部を形成する地山面に沿った堆積をみせる。本層の下部は次第に色が薄くなり地山へ移行する。その面において数ケ所の炭集中部や犬骨の集中などが見られた。凹部の底面付近で厚く約30cmを測り、南北へ薄くなっていく。

東側では一面にみられるわけではなく、途切れ途切れに急傾斜を示して確認された。厚い所で約40cmを測る。小骨を密に含んでいる本層は注目される層であり、遺物の量も多くなる。土器は大型の破片が多くなり、石器・骨製品も多くなる。また、土器では第１群土器が第２群土器より多く出土している。

第Ⅶ層：本区の東側に見られる貝層で、一部西側まで及ぶ。主体貝の違いによりa・bに分けられる。本層の平面的な広がりを図29に示した。

ａ層：東部の北側にのみ認められ、層厚もそれほど厚くない（約20cm）。主体貝がサラサバテイ・シャコ貝などの比較的大型の貝である。遺物の量は多くない。

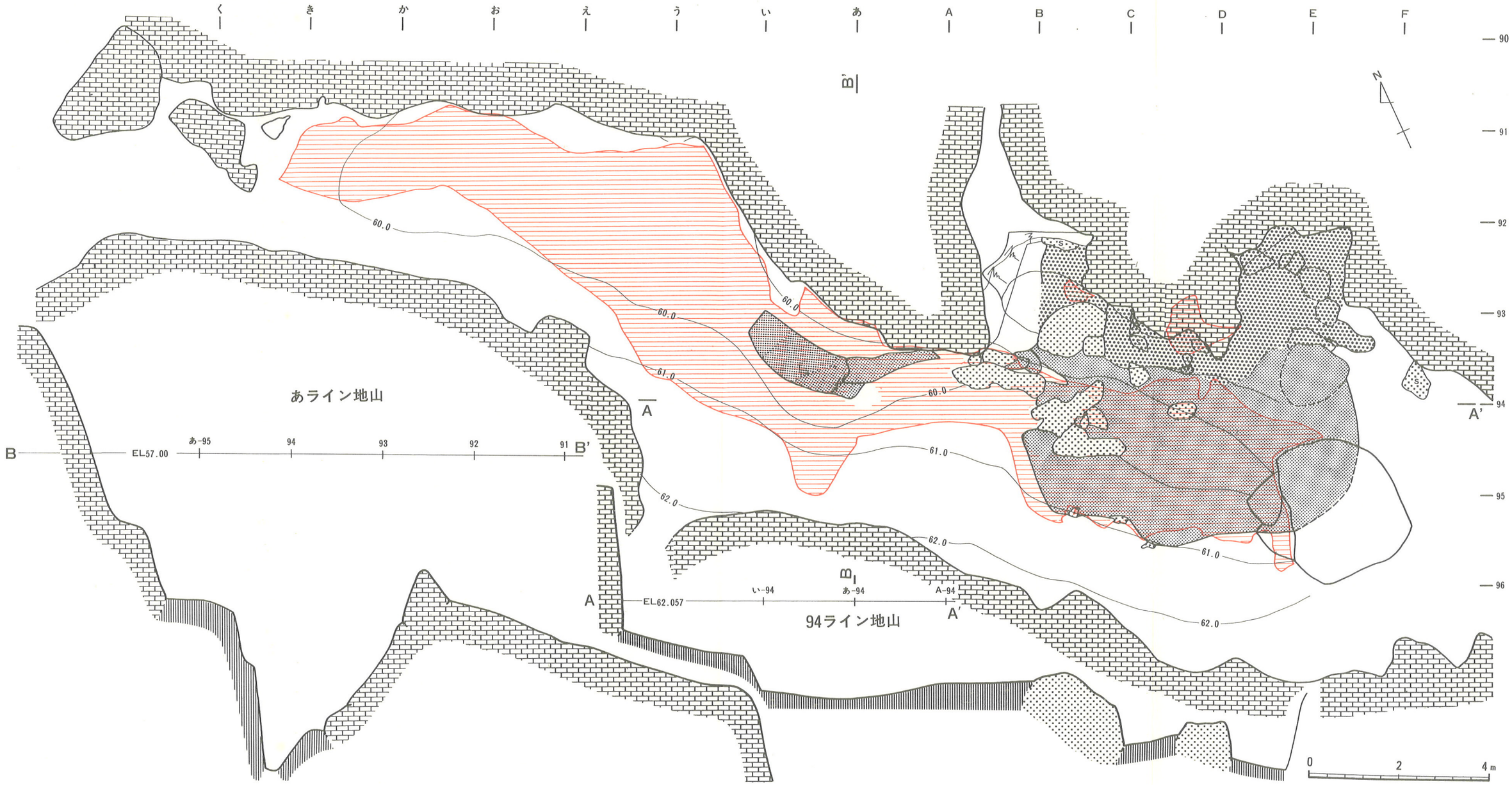


図29　21地区ハ第Ⅵb 層と第Ⅶ層の範囲

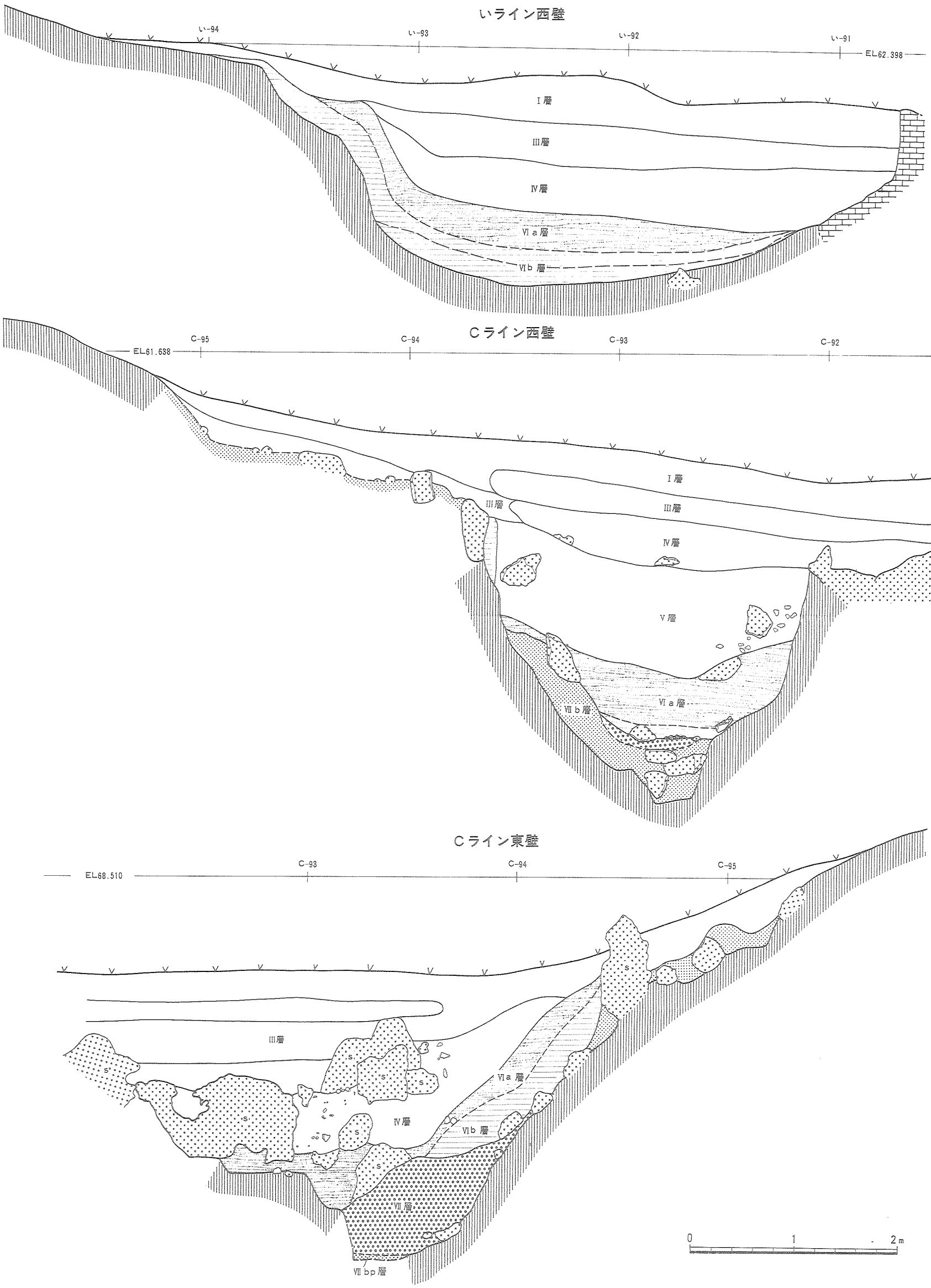


図30　21地区ハ層序(1)

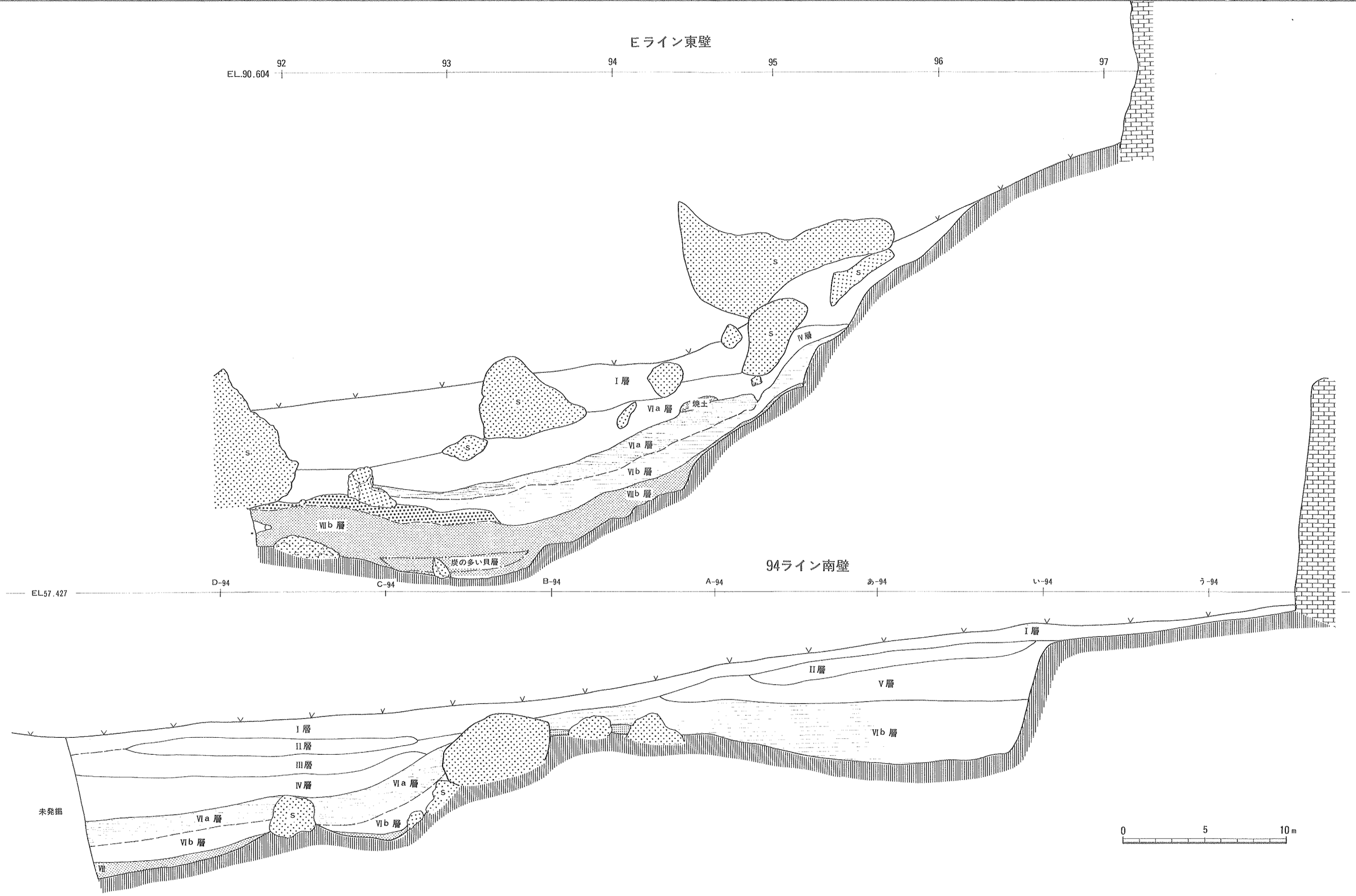


図31　21地区ハ層序(2)

b層：東部のほぼ全面にみられ、南から北へ急傾斜を示しながら厚くなる。最も厚い所で約60cmである。ウミニナ・センニンガイなどの小型貝が主体である。遺物の量はVIb層に次いで多く、特に貝・骨製品は質・量とも豊富である。土器では図80に示した面縄東洞式の壺形など注目される資料が得られている。

本層は北側では琉球石灰岩の下方にも潜り込んでいる。又、南側では表土下直ぐに露出する所もみられた。そこでは薄く地山面に沿うように焼土を伴い、焼けた貝なども見受けられた。

第Ⅷ層：琉球石灰岩の風化土でいわゆるマージ（地山）である。本区の南にせまる琉球石灰岩の下方から、急傾斜をなして北へ向う。南側では表面に露出していた。

b.焼土

第Ⅳ層：図32はE－95グリット西側に検出されたもので、略三角形状に1.0m＊1.2mの範囲にみられる。厚さは約10cmである。焼土は30～40cm大の石灰岩礫の中に粒状の焼け土が集中してみられた。転石の間にあることから上方から投棄された可能性が高い。

第Ⅶ層：図33はD、Eライン第Ⅶ層下部に表れたものである。同ラインの斜面部に厚さ約5cmで貼りつくように検出され、E－95グリットでは1.5m×1.5mの面的広がりを持つがD・E－93、94では部分的に検出される。同図でもわかるように地山面が不安定であり、ここに形成された遺構というより上方から投棄された可能性が高い。

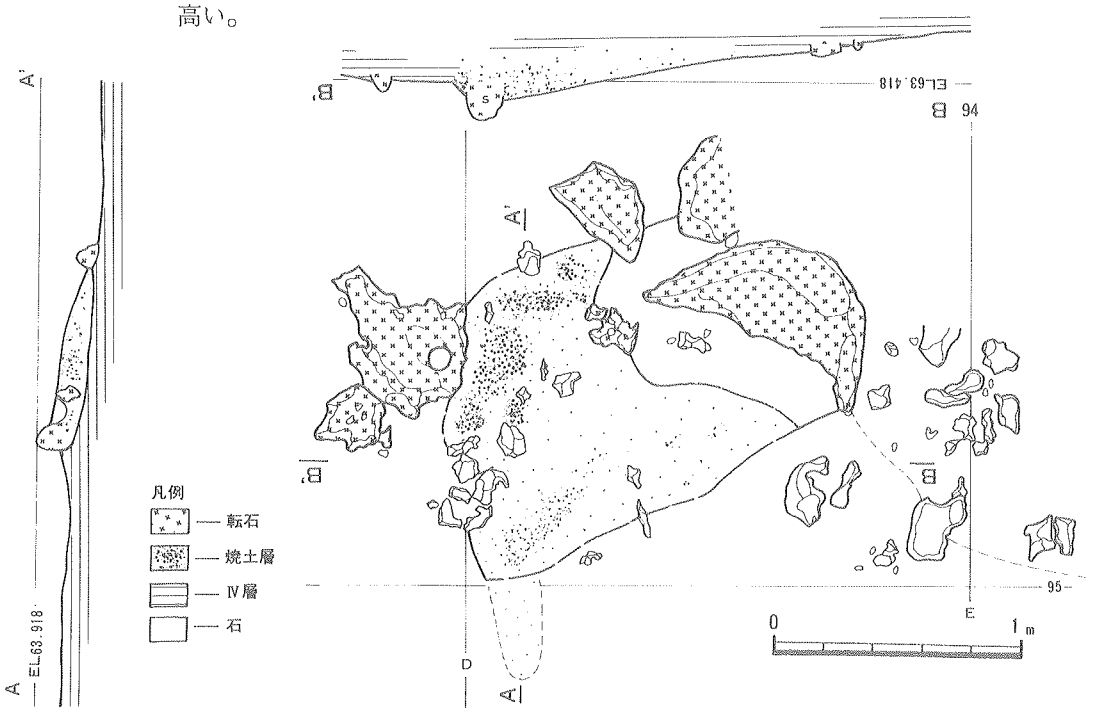


図32　21地区ハ第Ⅳ層面の焼土の状況

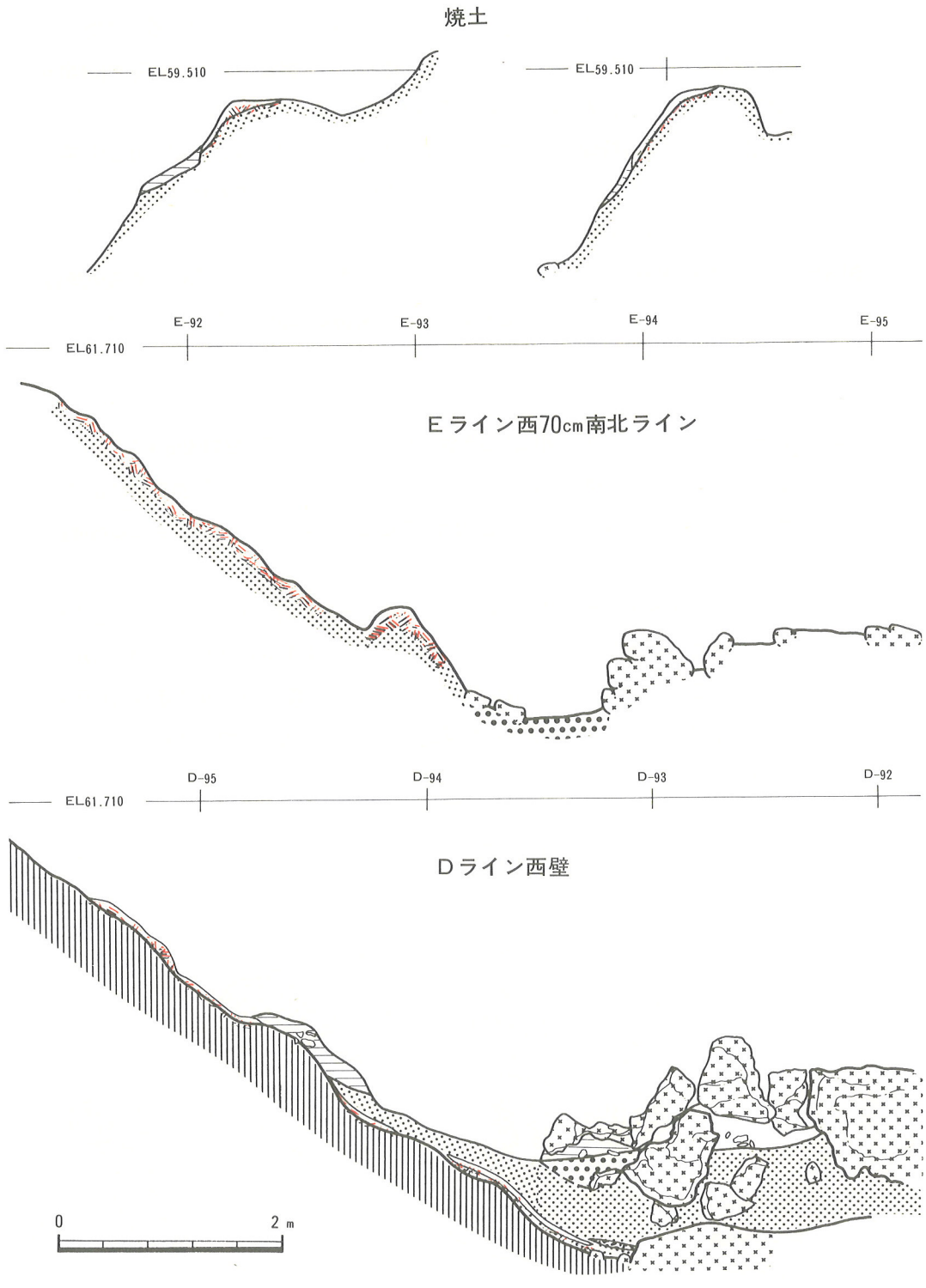


図33　21地区ハ第Ⅶ層下部の焼土の状況

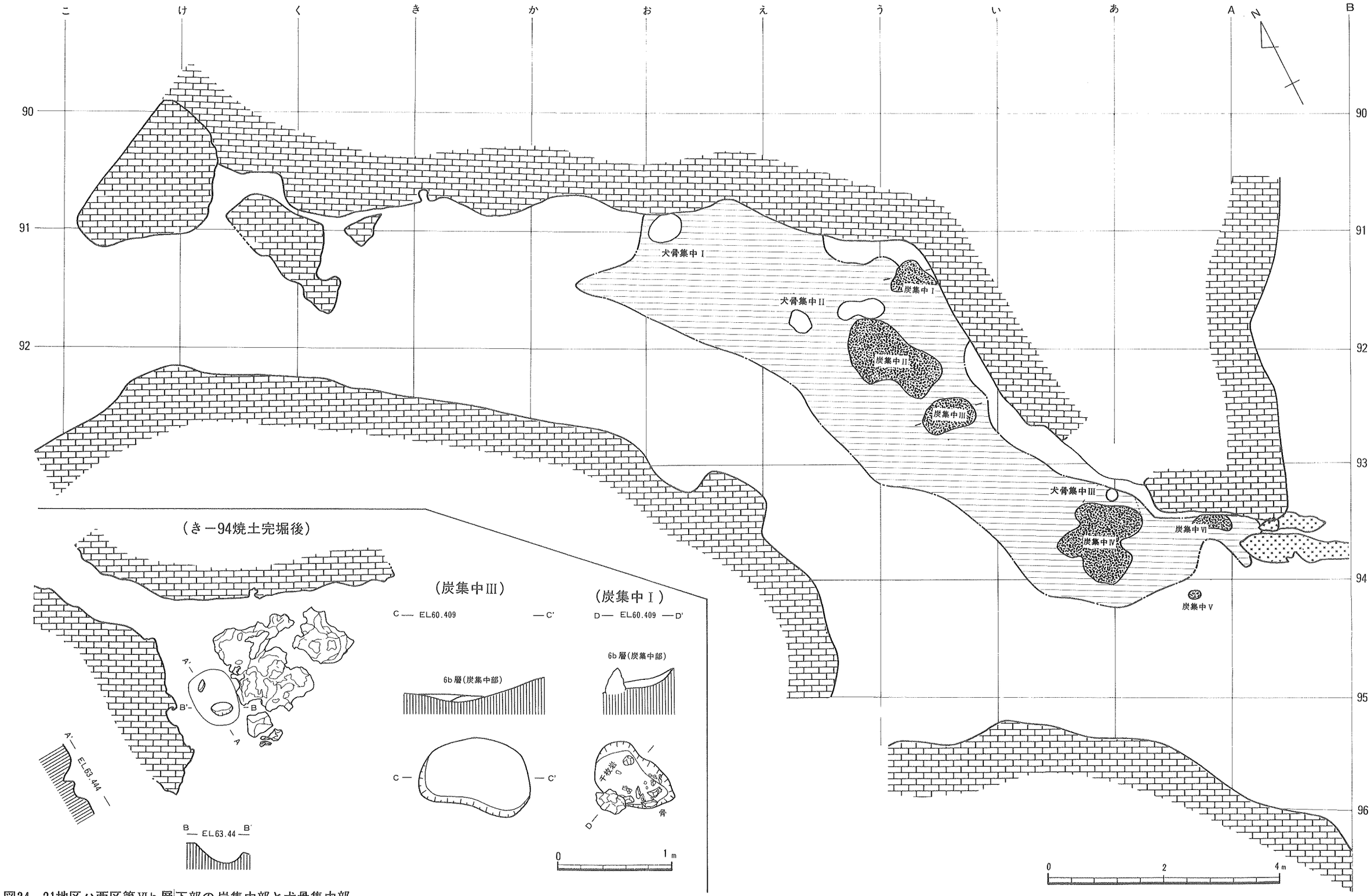


図34　21地区ハ西区第Ⅵb層下部の炭集中部と犬骨集中部

c.炭集中部

図34に示したように21地区ハ西側に石灰岩塊を取り巻くように６箇所に検出された。第VIb層下部の地山に移行していくときに粒状の炭が集中したところが検出されたが、大きさはまちまちである。同図に示したように多少の落ち込み、遺物も見られるが、性格は判然としない。

d.犬骨集中部

図35に示したように「炭集中部」に近接して検出された。大きなものは３カ所である。主に顎骨等がおおく、骨は少ない。第35図に示したように他の遺物と混在して出土することからまとまりがなく、遺構の可能性はうすい。しかし、県内でこのように犬骨が出土した例はなく、今後の検討課題の一つである。

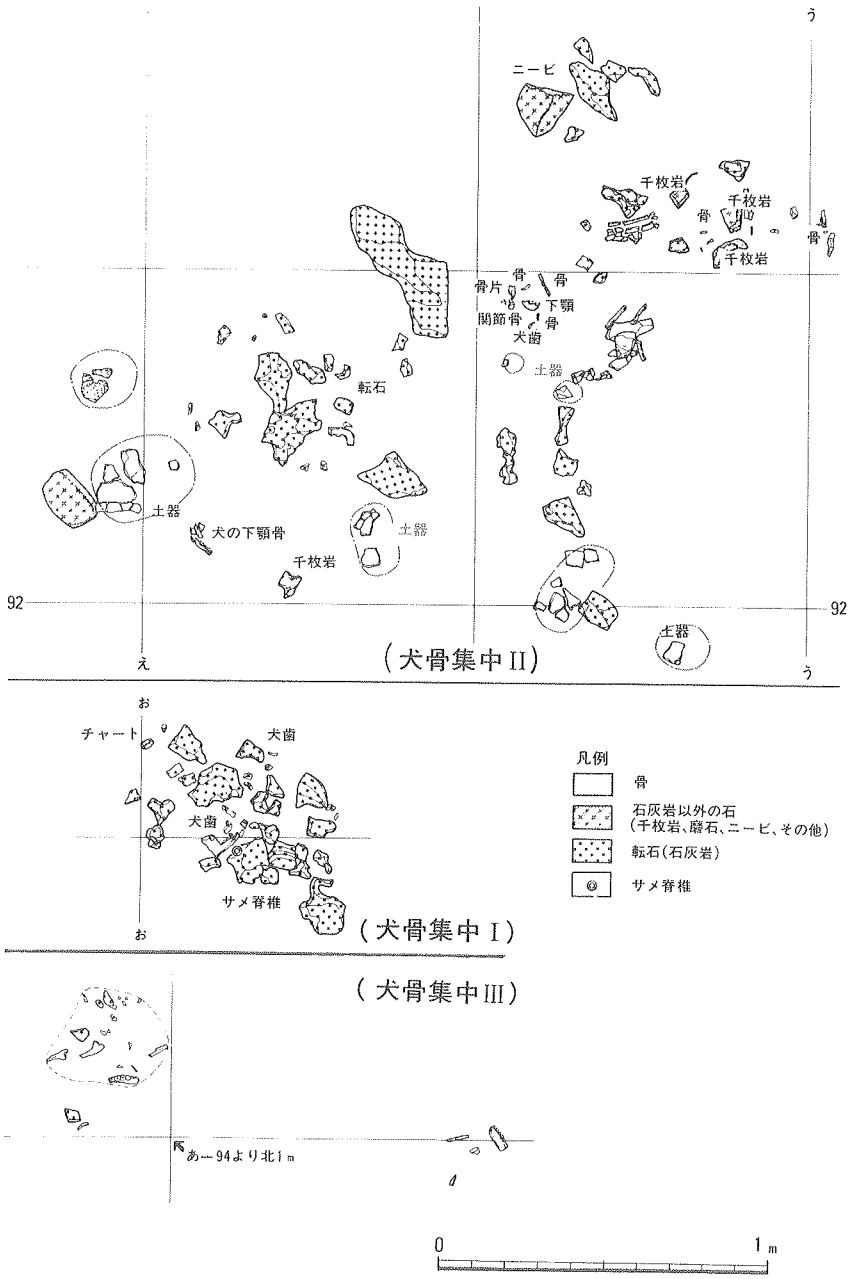


図35　21地区ハ西区犬骨出土状況

第6章　出　土　遺　物

今回の調査により膨大な量の遺物が出土している。それらは土器、石器、貝・骨・石製品などの人工遺物と、貝類（軟体動物）、獣魚骨（脊椎動物）、炭化物（植物遺存体）などの自然遺物に分けられる。人工遺物をみると土器はその大半がいわゆる奄美系土器と呼称されているもので占められていること、石器では6面に凹部を有する敲打器、貝・骨製品では実用品や装飾品のバリエーションの豊富さとその出土量に本貝塚の特色をみる思いである。

また、自然遺物をみると地区ごとの出土状況の違いがまず注目される。さらに、膨大な量の自然貝の主体が、現在は沖縄本島に生息していないキバウミニナであることやセンニンガイがかなり見受けられることなど貝種組成からも注意される。

その他集中的な出土状況をみせた犬の骨や遺構などから検出された炭化物なども留意される。

以下、それぞれの遺物について概略を述べる。

第1節　土　器

2次に亘る本調査により総数23,400点余りという多量の土器片が得られている。これらの大半が奄美系土器と呼称されているもので占められる。出土状況をみると21地区ハで最も多く得られ、次いで22地区ロが多く、この両区で全体の90%以上を占める。

ほとんど小破片の資料であるが、21地区ハにおいては口縁部から底部まで接合できたものや器形のある程度窺える資料が50点余り得られており、それらを中心に器形・文様に注目し下記のように2群に大別した。2群とも既に型式設定がなされているもの数種を含んでおり、ここで用いた型式名については高宮廣衛氏[註1]、河口貞徳氏[註2]のものを主に採用した。

第1群 ― 口縁部が若干外反し頸部でしまり、胴部が膨らむ深鉢形尖底を主とするグループで、文様は凸帯及び肥厚帯と種々の沈線を組合わせるものが主流をなし、肥厚帯の下方や胴部下半まで施文するのが普通である。

面縄前庭式　仲泊A・B式及び両者の典型的なものからはずれるものがみられた。

第2群 ― 底部から開き気味に口縁部へ向かうもので、口縁部が外反し頸部で若干しまり、胴部のあまり膨らまない深鉢形平底を基本的な器形とするグループ。文様は一般的に口縁肥厚部、口唇部に押し引き文や沈線文を主として施し、肥厚帯下及び胴下半部に施文するのは希れである。面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式・嘉徳Ⅱ式・神野E式、伊波式、荻堂式のほか無文の資料も見受けられた。

2群とも高宮氏の前Ⅳ期前半（縄文後期前半）に属すものであり（表5）、量的には第2群

表5　沖縄・奄美諸島の土器編年

本土編年		暫定編年	沖縄諸島の土器型式	奄美諸島の土器型式
縄文	草創期	I		南九州系統、南島系統、薩南系統
			爪形文 {ヤブチ式 東原式	爪形文
	早期			
	前期	II	室川下層式 神野A式（仮称） 曽畑式 神野B式（仮称）	・（羽状連点文） ・（連点、波状文） 轟式 ・（横位沈線文） 曽畑式 ・（櫛描連点文） 阿多V式
	中期	III	面縄前庭様式 1.具志川式（仮称） 2.神野C式（仮称） 3.面縄前庭式	赤連系 凸帯爪形文
	後期	IV	神野D式（仮称） 神野E式（仮称） 伊波式 荻堂式 大山式 室川式	松山式 市来I式 ・（面縄東洞式） 市来II式 一湊式 草野式 ・（嘉徳I式A） ・（嘉徳I式B） ・（嘉徳II式） ・（面縄西洞式）
	晩期	V	室川上層式 宇佐浜式	黒川式 ・（犬田布式）

◎本表は『沖国大考古』第7・9号の高宮試案の編年表の縄文時代について合わせたものである。

が多かった。また、各型式別にみると面縄前庭式が下層からより多く出土する傾向を示し、近年の成果と同様な状況を示す。第１・第２群とも新資料の追加があり、該時期の沖縄・奄美間の土器文化を解明していく上で注目される。

以下、各区ごとに概略を述べるが、各型式の細分は21地区ハの分類に従った。

１．22地区イ

本区での出土量はそれほど多くはない（表６）。ほとんど第２・第３号遺構からの出土で、前者は第１群が、後者は第２群が多く得られている。

遺構外・第２号遺構・第３号遺構の順に述べる。

ａ．遺構外

表６　22地区イ土器出土状況

群 / 型式 / 層序		第１群 面縄前庭式	第１群 仲泊A式	第１群 仲泊B式	第１群 その他の資料	第１群 底部	第２群 面縄東洞式	第２群 神野E式	第２群 伊波式	第２群 底部	不明	無文胴部	合計
Ⅰ								1			1		2
Ⅱ				1			2		2				5
第２号	Ⅱ	3	8	4	2	2	1				14	31	65
	Ⅲ	2		1									3
第３号	Ⅱ	3	2				19				1	13	38
	Ⅲ		1				4			1	2		8
合計		8	11	6	2	2	26	1	2	1	18	44	121

第Ⅰ・第Ⅱ層から出土している資料で、そのうち３点を図36の１～３に示した。３点とも第２群に属す。１は面縄東洞式で、先端の尖がった工具による押し引き文が４条施され、籠編み状の構図を示す。

口唇部にはハ字状の押し引き文を施す。石灰分が付着しており、器面の状況など判然としない。

２は神野E式に属すもので、中段を無文空白部としている。文様帯の幅は約６㎝で、口唇部にも刺突文を施す。器面の保持は悪く、暗褐色を呈す。チャート・石英の粗砂粒を多量混入する。

３は伊波式に属すかと考えられるもので、又状工具による押し引き文が４組縦位に見られる。押し引きは引きが浅く、点刻文をイメージさせる。山形へ移行する部分の資料で、この縦位文は山形直下に配されるものと考えられる。横位文は同様な工具により点刻文を４組密に施す。口唇部の文様は判然としない。暗褐色を呈し、石英・チャートの粗砂粒を多量混入する。

ｂ．第２号遺構

第１群土器に含まれるものが多く、特徴的なものを図36の４～17、図37に示した。

４～８の５点は面縄前庭式の資料で、４～６は口縁部、７・８は胴部である。いずれも片方の凸帯を有す。小破片のため全体的な状況はつかめない。凸帯に配された文様からすれば、４はｈ、５・７はｅ、６はａに属するが、８は器面の剥落が著しく判然としない。７は赤褐色を呈し、他の４点は暗褐色を呈す。５点とも石英・チャートの粗砂粒を多量混入し、４～６の３点はその他に雲母片も少量混入している。

９～15は仲泊式の資料で、９～12はA式、13～15はB式に属す。９～11は口唇部を平担に成形するもので、口縁部上端が若干外反する。９・10は低平な山形を有しており、２点とも山形頂部は押しつぶされた形で若干の凹部を形成する。10は約３㎝幅の肥厚帯を有すが微弱である。文様は約2.5㎝の長さを単位とする貝殻刺突文を、間隔をあけて概ね３段に配している。胴部

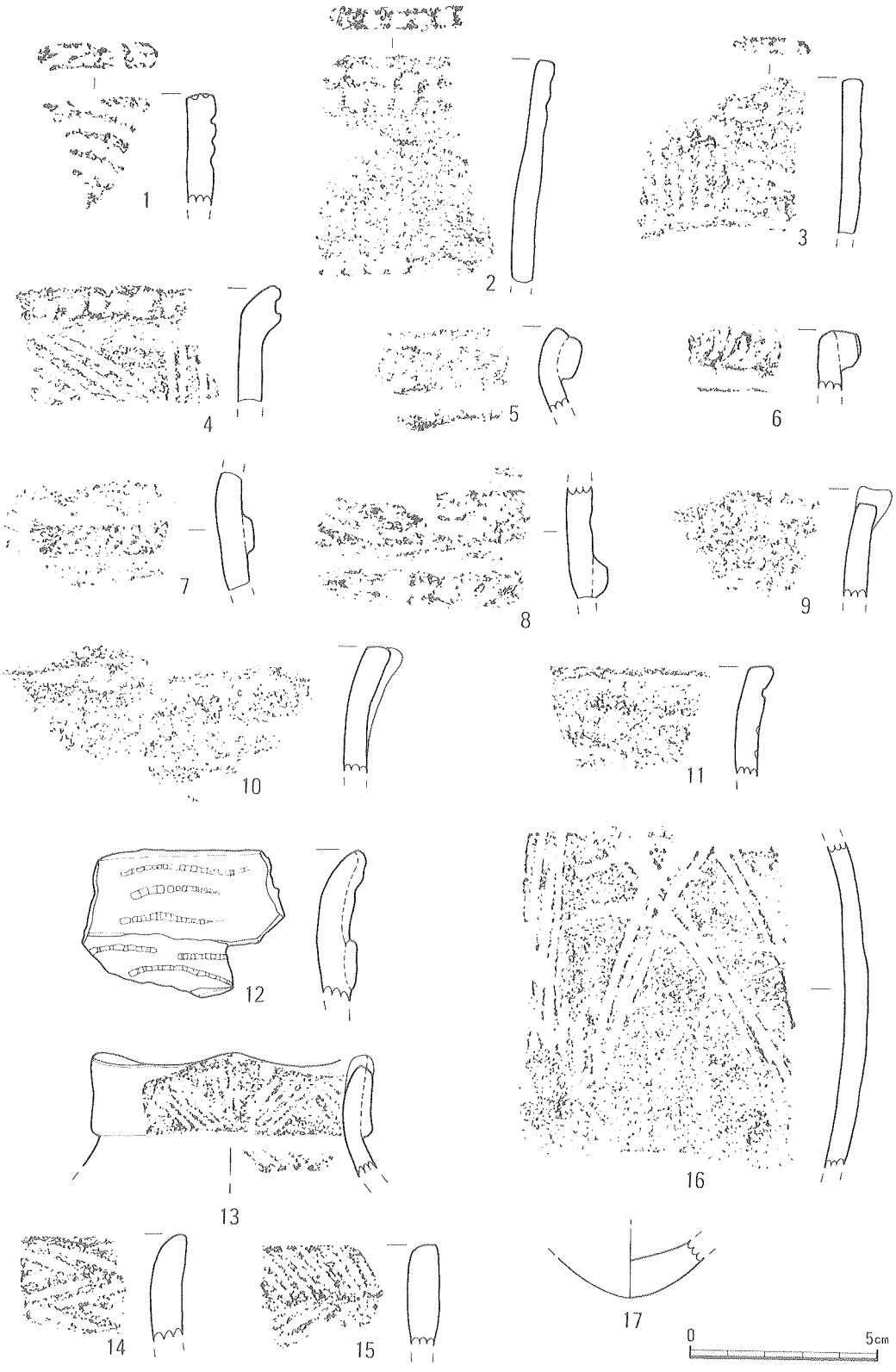


図36　22地区イ遺構外（１～３）及び第２号遺構（４～17）出土土器

文様については不明。

器色は表面をみると9・10は暗褐色、11は黒褐色であるが、裏面は3点とも黄褐色を呈す。混入物はチャート片を多量含んでおり、比較的粗粒のものをみると角を有している。

図36の12は口唇部が尖がる資料で、口縁部上端は外反する。口唇下約2cmの箇所に幅約1cmの扁平な凸帯を廻らす。文様は口唇部と凸帯間及び凸帯上に貝殻刺突文を施す。本資料の場合も約2.5cm幅が単位となっているが、9～11の文様に比べやや弧状を呈す。器面の保持が悪く器表面の状況については不明。器色は黄褐色を呈し、チャート片を多量混入する。粗い粒のチャート片をみると角張っている。

13～15に示したものはB式に属すかと考えられる。13は口縁部だけの復元図を示したもので、口縁部が肥厚し頸部で若干しまり、胴部が張る器形のようである。低平な山形を有しており、図では4個で復元した。肥厚部の幅は山形直下で約2cm、低い所で約1.5cmを測る。推定口径は約7.5cmと小型である。

文様は口唇部・口縁部・胴部に施している。口縁肥厚部の外面に4～5条を1組とする斜沈線を鋸歯状に配し、山形直下では縦位沈線を施す。口唇部には刻目文を施している。肥厚帯下部にも斜沈線が認められるものの、どのような文様か不明。器色は赤褐色を呈し、胎土にはチャート片を多量混入する。

14・15は方向の異なる斜沈線を施し羽状構成をつくるもので、14は整然とし15はラフな沈線が密に施される。器色は14が表面暗褐色、裏面黒褐色を呈し、15は黒褐色となっている。胎土にはチャート片を多量混入している。

図37の18に示したものは面縄前庭式と仲泊式の両方の要素がみられるもので、口縁部だけの復元図を示した。推定口径は約30cmと本貝塚出土土器の中では大型の部類に入る。器形は口縁部が肥厚し頸部でしまり、胴部が張る器形を呈す。山形を有すものと平口縁の資料があり、同一個体と解されたので図は山形を4個配置して示した。

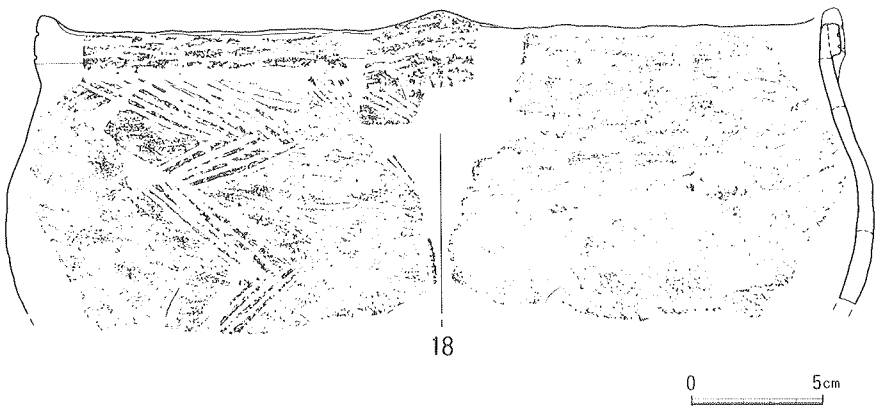


図37　22地区 イ第2号遺構出土土器

山は平口縁に突起を貼り付けたようなもので低平である。肥厚部の幅は山形直下で約2㎝低い所で約1㎝を測る。

文様は肥厚部外面に水平方向の弧状を呈す沈線を施し、肥厚部以下は沈線による鋸歯状文を間隔をあけて縦位に配す。山形直下など部分的には縦位沈線など別の文様も見られる。肥厚部外面の弧状を呈す沈線は1㎝～2㎝を単位として施される。胴部の縦位に配される鋸歯文はどの辺まで施されたか不明。

器色は表面の口縁部と胴部は黒褐色で、表面の頸部と裏面は赤褐色を呈す。器表面には擦痕が残り、胎土にはチャート片を多量混入する。

図36の16も同様な資料で胴部の破片である。文様帯の最下部の状況を呈しているが、全体的な構図は不明。現資料をみると左端に縦位沈線、中央部に「×」字状の沈線、右上端に斜沈線がみられる。左端の縦位沈線の先端と「×」字構成の左傾の斜沈線の先端は、2本の縦位短沈線により継がれている。

器面の調整は比較的よく、器色は暗褐色を呈す。胎土は精選されており、チャート片を多量に混入しまれに雲母片もみられる。

17は底部資料で第1群に属する尖底である。外面は比較的よく調整されるが、内面には粘土の積み痕が残る。胎土は細かく、チャート片を多量混入する。器色は外面が黒褐色で、内面は暗褐色を呈す。

c．第3号遺構

本遺構は前述の第2号遺構と様相が異なり、第2群土器が目立つ。特に図39に示した面縄東洞式の壺形土器は注目される。以下に記述する。

第1群土器は6点の出土で、面縄前庭式、仲泊式がそれぞれ3点づつである。その中の4点を図示した。図38の19～22がそうで、19は面縄前庭式、20～22は仲泊A式の資料である。

19は外反する口縁部の資料で上端に扁平の凸帯を配し、その下方にラフな斜沈線を4本施す。凸帯上の文様からすれば21地区ハのbタイプに近い。器色は黄褐色を呈し、表・裏面とも若干、擦痕が残る。胎土は細かく、石英・チャートの砂粒を多く含む。

20～22は口縁部の資料で、20は1方の山の部分で欠けているものの対をなす山形を呈す。20～21の口唇部は丸味を帯びるが、22は尖がり気味である。3点とも肥厚するが、22は肥厚部上端が口唇部より若干下がる。肥厚帯の幅は20が約2.5㎝、21・22が約2㎝である。

文様は肥厚部とその下部にみられ、口唇部は施文していない。肥厚部の貝殻刺突文をみると20はやや斜め方向へ密に施し、21・22は上・下の間隔を若干あけて、水平方向に施文している。肥厚帯下の文様については判然としないが、20・22のわずかに残った部分をみると20は斜位方向の沈線文、22は貝殻刺突文が認められる。

器面は比較的よくナデられており、3点とも擦痕はみられない。器色は20・22が赤褐色で、21は黒褐色を呈すが、裏面は3点とも黄褐色の部分が見受けられる。胎土は細かく、石英・チャ

ートの砂粒が多く含まれる。

第2群土器は本遺構の主体をなすもので、面縄東洞式が圧倒的である。特徴的ものを図38の23～36及び図39の41に示した。全て破片の資料で全形の窺えるものは得られていないが、図39の41に示した壺形の資料以外はほとんど深鉢形に属すかと考えられる。

図38の30は胴部までの推定復元図を示した。それをみると口縁部がゆるやかに外反し、頸部でしまり、胴部が若干膨らむ。

得られた資料で明確に山形をなすものは見受けられない。また、口唇部を有する資料をみると、平坦に成形するものと尖がり気味あるいは丸味を帯びるものがほぼ同数得られている。これを肥厚の形態との関連でみると、前者に属するものはわずかな肥厚を示すだけで不明瞭であるが、後者のものは断面が三角形状のはっきりとした肥厚を示す。また、肥厚帯の幅は前者に属する30・34が約3.5*cm*で、後者に属するものは33が約3.5*cm*を測る以外は2*cm*～3*cm*の間に納まる。

文様は肥厚帯に主に施され、まれに肥厚帯の直下に施文するもの（30）や裏面に施すもの（36）などがある。口唇部に施すものは見受けられない。口縁部の文様を21地区ハの分類に従ってみれば、a・d・fの3タイプみられる。

aタイプに属すものは図38の23～27に示すもので、23～25は口唇部を欠失している。23・24はヘラ状工具、25～27は先端の分岐した工具を使用している。23～25は表・裏面に擦痕を残すが、26・27はナデられている。器色は23・26が暗褐色、24は表面が暗褐色で裏面が赤褐色、25は赤褐色、 27は黒褐色である。胎土は細かく、石英・チャートの微砂粒を混入する。

dタイプに属するものは、28～32に示したもので施文は深く、若干凹部となった部分に先端の尖がった工具による押し引き文がみられる。28～30はやや幅の狭い工具（2～3㎜）が使用され、31・32は工具の幅がやや広い（4～5㎜）。

器面の状況をみると、28・29はナデ調整が施される。30は文様帯の部分はよくナデているものの、胴部及び裏面は擦痕が残る。31・32の裏面も明瞭な擦痕が認められる。器色は30・32が赤褐色、28・29は黒褐色を呈す。胎土は細かで、混入物に石英・チャートの砂粒を含む。28・29はそれ以外に雲母片の混入も見受けられる。

fタイプに含まれるものは33～35に示したもので、33は横位押し引き文が器面を廻るが、破片の右端に見られる縦位凸帯により何ケ所かで切られているものと考えられる。34・35は水平方向の押し引き文を途切れ途切れに施すものであるが、どの長さを単位としたか不明。又、33は押し引き文の施された縦位凸帯や口縁部の裏面にも横位押し引き文を1条配す（縦位凸帯の箇所で一端途切れる）という他と異なる要素をもち、注意される。

33・35は先端の尖がった工具が使用され、34は先の平坦な工具を用いている。35は上・下段の押し引き文は同一方向へ施すが、中段の押し引き文は逆方向へ施文している。また、資料の左端では先端をわずかに分岐させたヘラ状工具を使用して施した文様も見受けられる。

図38　22地区イ第３号遺構出土土器

器表面をみると、33・34は裏面に明瞭な擦痕を有すものの、35は両面ともよくナデられている。器色は33が暗褐色を呈し、34・35は赤褐色を呈す。胎土は細かく、混入物として石英・チャートの砂粒を含む。

36に示す1点は肥厚部外面に羽状構成の押し引き文を深く施すもので、拓影では凹線のようになっている。表・裏面ともナデ調整が施され、器色は暗褐色を呈す。胎土は精選され、石英・チャート砂粒を多量混入するほか雲母片も目立つ。

図38の37に示したものは種不明の山形頂部の資料で、裏面に一部先端の尖がった工具による押し引き文が見られることによりここに示した。横位凸帯を1条下端に廻らし、斜位の凸帯で山形部をつくる。凸帯上には沈線が1条施される。また、裏面に施される押し引き文は、山の頂部付近でUターンするように施文される。小破片のため全体の様相はつかめないが、他の資料とは異なった装飾を施す。

器色は黄褐色を呈し、胎土は細かい。混入物として石英・チャートの砂粒及び石灰質砂粒のほか、雲母片も散見される。

図39の40に示したものは壺形と思われる唯一の口縁部資料である。頸部の下端で破損しているため、以下の状況を知り得ないのは残念である。口縁部は断面が三角形状の肥厚を示し、口唇部は尖がる。片側が船の帆先のように突出し、その部分は肥厚部の幅も広く誇張されている。

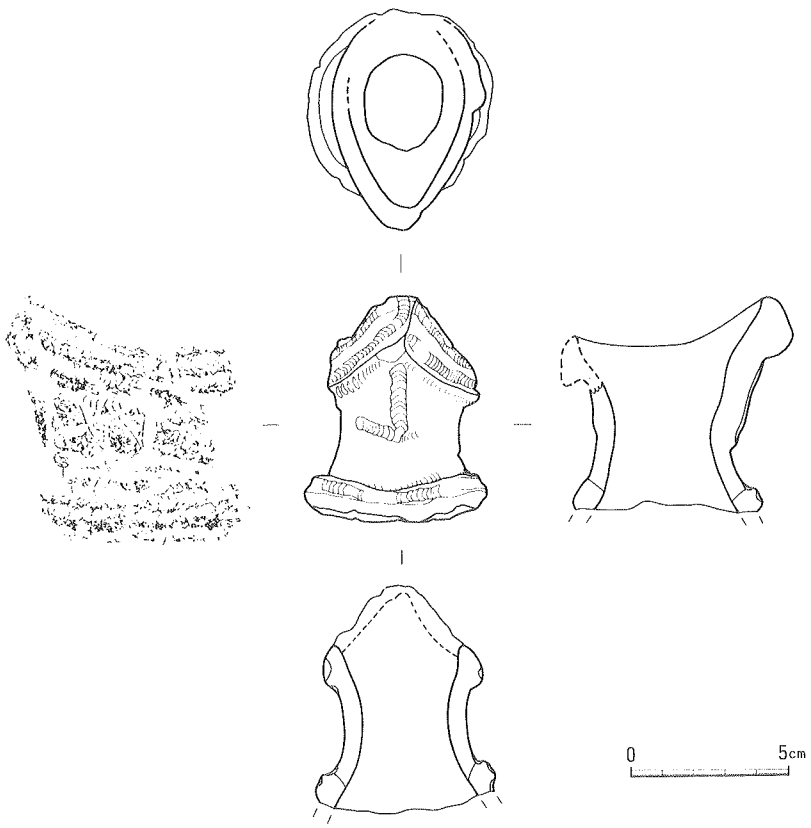


図39　22地区イ第3号遺構出土土器　　41

反対側はゆるやかにせり上がり肥厚部の幅は狭い。いわゆる片口注口の形状を示し、液体を注ぎやすいようにしている。

また、頸部と胴部の境い目（口唇下約4㎝）にも断面が方形状の凸帯（幅約6㎜）を1条廻らす。長径は約7㎝、短径が約5㎝を測る。

文様は肥厚部及びその直下、頸部の凸帯の上・下端と凸帯上に、先端の尖がった工具による押し引き文を横位に配す。この横位押し引き文は上から順に左→右、右→左と方向を変えて施文している。頸部は無文のままであるが、突出した側の直下に施文している。約2㎝までは縦位に施し、その部分で左右へ折れそのまま約1㎝水平方向へ施す。逆T字を描出している。

器面は丁寧なナデ調整が施されており、器色は赤褐色を呈す。胎土は精選され細かく、混入物として石英・チャートの微砂粒が多量含まれる。器表面にはチャートの粗砂粒が露出しているのも目につく。非常に特徴的な資料であり注目される。

図38の38に示したものは伊波式に属するものである。文様帯の下端部を有する資料で叉状工具による点刻文が2組横位に施されている。その点刻文の上分に文様がみられないことから、中段を無文のまま放置するタイプかと考えられる。器面はナデ調整が施され、器色は黒褐色を呈す。胎土は細かく、混入物としてチャートの粗砂粒を密に含む。

39は口縁部が外反し胴部のあまり張らない資料で口縁部上端を欠失する。沈線文が4条認められるが全体的な構図は不明。第2群に属するものと考えられるが、型式名は不明である。器色は赤褐色を呈し、表・裏面ともナデ調整が施される。胎土は細かく、石英・チャートの粗砂粒を多量混入する。

40は平底の資料で第2群に伴うものかと考えられる。底面から約1㎝まではほぼ垂直に立ち上がり、そこからゆるやかに外側へ開く。破片の上端は粘土の積み痕から破損しているが、底面の半分以上が残る。底径は約6.7㎝を測る。底面の中央部付近は若干凹み、上げ底状を呈す。器表面は擦痕をかるくナデ調整しているが、裏面はヘラ状工具による調整痕を明瞭に残す。器色は赤褐色で、胎土に石英・チャートの微砂粒を多量混入する。

2．22地区ロ

本区は21地区ハに次いで2番目に多くの土器片が得られている。しかし、ほとんど小破片の資料で全形の窺えるような大型の資料には恵まれなかった。出土状況は表7に示した通りで、種類的には21地区ハと大差ない。

本区では第2群が優勢であるが、型式別にみれば面縄前庭式が最も多く得られている。層位別にみると第Ⅳ層までは第2群が多く得られているものの、第Ⅴ層では第1群が目立つ。各遺構とも第2群が優位である。

また、土器そのものの状況をみると、他地区のものに比べ非常にもろく、そのため器面の保持も悪い。以下、遺構外と遺構出土のものに分けてその特徴を略述する。

表7　22地区ロ土器出土状況

群 / 型式 / 層序	第1群土器					第2群土器									不明	無文胴部	合計
	面縄前庭式	仲泊A式	仲泊B式	その他	底部	面縄東洞式	嘉徳I式	嘉徳II式	神野D式	神野E式	伊波式	萩堂式？	無文の資料	底部			
I						3	1									8	12
II	4			1		6	5							8	16	324	364
III	28	6	2	1	6	34	19	9			3			28	91	1,563	1,790
IV	63	8	20	16	9	60	118	53			21	3	1	76	212	2,470	3,130
V	43	5	8	11	1	6	11	1	1	1				1	69	317	475
VI															2	1	3
第4号	5	1		1		7	6	2	1				1	7	4	397	432
第5号	2		1	6		2	5	7	1		1			8	7	372	412
第6号	16	3	6	3	1	10	14	4						9	15	251	332
合計	161	23	37	39	17	128	179	76	3	1	25	3	2	137	416	5,703	6,950

a．遺構外

5,700点余りの資料が得られている。型式の判明するものは500点余りで、第1群が200点余、第2群が350点余である。以下、群別に述べるが底部については後に一括した。

第1群土器

面縄前庭式、仲泊式及びこの両者の要素を合わせ持つタイプに分けられる。量的には面縄前庭式が圧倒的に多かった。

① 面縄前庭式

総数130点余り出土している。全て小破片の資料で全形の窺えるものは得られていない。ほとんどが深鉢形に属す資料であり、21地区ハで出土しているような明確に壺形を示すものは得られていない。特徴的なものを図40の1～15に示した。

1は凸帯を口縁部上端と頸・胴部の境い目に1条づつ横位に配するもので、2～8もこれに類する資料と考えられる。

文様は凸帯上及び凸帯間にみられるものがほとんどであるが、1は、凸帯の上・下部、4は口唇部も施文の対象となっている。凸帯上の文様をみると、1は横擦刻文のグループに属すると考えられるが、形状に若干の差異がみられ凸帯の上方・下方にも同様な文様を配す点でも違いがみられる。2は叉状刺突文がみられbに属し、3・4は縦位刻目文のf、5～8は斜位刻目文のeに属している。

凸帯間の文様は沈線の条数が判明する1（4条1組）、5（8条1組）の2点からすれば、4～8条1組の斜沈線による鋸歯状文が配されていたかと推察される。

器面はナデ調整が施され、擦痕の残るものはみられない。器色は4が赤褐色を呈し、他は暗～黒褐色を呈す。胎土は細かく、混入物はチャート・石英・ 石灰質の砂粒が多量にみられ、4以外の7点は雲母片を含む。

9・10の2点は凸帯間の幅が狭く、21地区ハのものを参考にすれば凸帯を3条配している資料かと推察される。凸帯上の文様をみると、9は叉状刻目でc、10は横捺刻文でhに属すものである。9は凸帯間にも凸帯上と同様な文様を施しているが、10は4条1組の斜沈線による鋸歯状文を配す。2点とも器面の保持が悪く、文様の判然としない部分が見受けられる。器表面の状況もつかめない。

9が赤褐色、10は暗褐色を呈す。胎土は細かく、石英・チャート・石灰質の砂粒を含む。

11～15は縦位にも凸帯を配すもので、11～13が2条、14・15が1条認められる。11の資料は2条の縦位凸帯がほぼ平行に配されるが、12は上部（口縁上端の横位凸帯）で接して頂点をつくるような山形状の貼り付け方となっている。13も横位凸帯の上・下に2条の凸帯が配されるが平行にはならない。凸帯上の文様をみると、11は縦位刻目（f）であるが、12・13は不明。

凸帯間の文様は11が縦位凸帯間は無文だが、両サイドには斜沈線が認められる。条数や全体的な構図は不明。12・13は不明。

11が赤褐色、12が暗褐色、13が黄褐色を呈す。器表面の状況はあまり判然としない。胎土は細かく、チャート・石英・石灰質の砂粒を多く含み、12・13は雲母片も目立つ。

14・15は現資料においては縦位の凸帯は1条だが、実際の条数は知り得ない。凸帯上の文様は14は斜位の刻目（e）が認められるものの、15は不明。凸帯間の文様は15が斜位沈線を4条施すが全体的な構図は不明。14は現資料では文様はみられない。

14は暗褐色、15は赤褐色を呈すが、15の裏面は黒褐色である。15の裏面には擦痕が見られる。胎土は細かく、チャート・石英・石灰質の砂粒が多く見られる他、14は雲母片もみられる。

② 仲泊式

50点余りの出土で、B式が若干多く得られている。器形の窺えるようなものはなく、すべて小破片である。明確に壺形を示す資料は得られていない。特徴的なものを図40の16～24及び図41の25～30に示した。

図40の16～20に示した5点はA式の資料である。5点とも口縁部の資料で、19・20は山形を示す。平口縁の1部に突起を貼り付けて山形をつくっており、19はその頂部を押し凹めM字状の形にしている。20はゆるやかな均整のとれた山である。ただ、20の資料は山形頂部が約2㎝上方へ出たため、山形口縁に凸帯を配した形となり他の資料と異なるイメージを抱かせる。

16以外は肥厚部直下で破損している。肥厚帯の幅は17が約3㎝で、他の4点は1.5～2㎝の範囲内にある。

文様は肥厚部に貝殻による刺突文を施し、20は上方に突出した山の部分にも同様に施文している。肥厚部の下方を有す16の資料は、肥厚帯下部に斜沈線による羽状文を施す。

肥厚部の文様は17がやや斜位方向にみられるが、他の4点はほぼ水平方向に施している。また、刺突文も直線的である。

器表面の保持が非常に悪く、状況を窺い得ない。17はわずかに残った器表面に擦痕が認められる。器色は16・18・19が暗褐色、17・20が黒褐色を呈す。チャート・石英砂粒を多量混入し、粒の粗いものも散見される。

B式に属するものを図40の21～24、図41の25～30に示した。いずれも口縁部の資料で、21～25は山形を示すものである。21は前記20の形状と同様で口唇部から約2㎝上方へ突出する。24も同様な形状を示すかと考えられる。他の3点は低平な山を形成する。

肥厚帯の幅が判明するものは23・25・27～30の6点で、27・28が2㎝前後、他の4点は1㎝前後を測る。

文様は斜沈線による羽状文が施されるが、肥厚部の幅が1㎝前後の4点は肥厚部に右傾の斜沈線を施し、その直下の左傾の斜沈線と合わせて羽状文を示す。27は肥厚部に1組の、28は2組の羽状文を配している。肥厚帯以下については不明。また、22は唯一口唇部にも施文する資料で、山の右側に横位の長沈線、左側に斜位の刻目文がみられる。

器色は21が黒褐色、22・24・26・30が赤褐色、23・28・29が灰褐色、25・27が暗褐色を呈す。器面の状況についてはその保持が悪く判然としないが、器面を残すものをみると擦痕はみられない。胎土は細かく、特に23・27は精選されきめ細かい。混入物は石英・チャートの砂粒を多く含むが、23・27は微砂粒を混入している。

③ その他の資料

21地区ハでも述べているように、前記した2型式のいずれにも属せしめ得ないものである。特徴的なものを図41の31～50に示した。31～33の資料は凸帯を口唇上へ突出させ山を形成するもので、31は左右の横位凸帯がくっつくようにせり上り山をつくる。32は縦位凸帯を突出させる。33は口唇上に横方向のブリッジ状凸帯を配し、それを上から巻き込むように器表面から裏面にかけて凸帯を配している。装飾的な色彩の濃い山を形づくっている。

34～41までは凸帯がその痕跡を留めるだけになる。34・35は凸帯上に施されていた文様を器面にそのまま施し、36は口縁上端の凸帯が完全に消失している。37は口縁上端が丸く肥厚し、刺突文を施している。いずれも頸部の文様は斜沈線文を何条か1組とする鋸歯状文であり、面縄前庭式の要素を残している。

38～40は口縁上端を丸味を帯びて若干肥厚させ、その部分に貝殻刺突文を配している。頸部の文様は器面の保持が悪く判然としない。

41は部分的に若干の肥厚箇所をつくり、その外面に斜位の刻目文を配す。破片左端で羽状文が確認出来る。42～47は仲泊式の要素が目立つようになるものである。42は山形頂部の凹点、

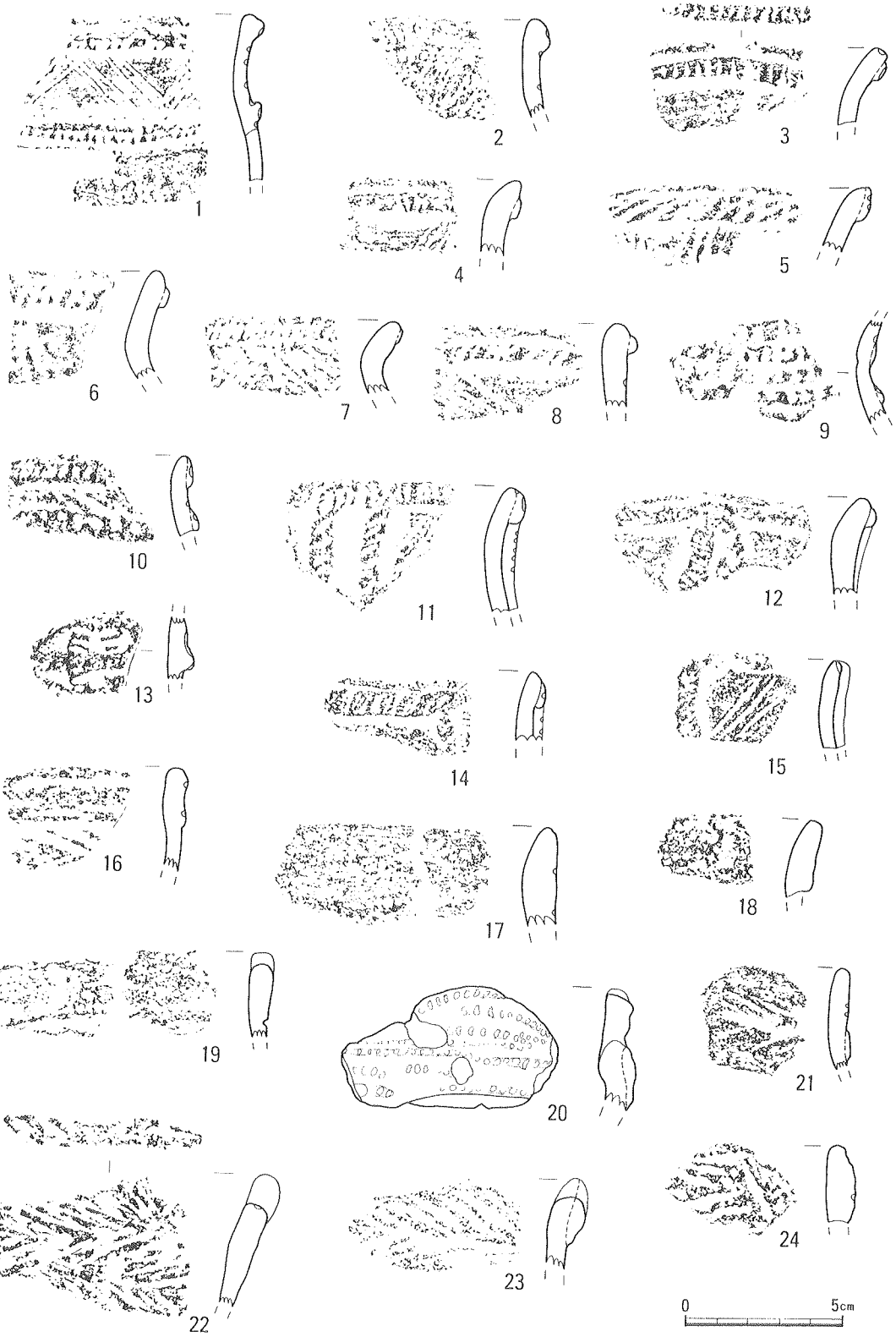


図40　22地区ロ遺構外出土土器(第1群)

43は肥厚部の貝殻刺突文、他は肥厚部に施される沈線や頸部の羽状文にそれがみられる。

48～50の資料は48が肥厚帯とその下部にみられる羽状構成の沈線、49は口縁部上端の山形になる凸帯、50は山形頂部にみられる深い凹点によりここに示した。

器色は39が赤褐色、37・41・42・49が黒褐色、他は暗褐色を呈す。ほとんどの資料が器面の保持が悪く、器面の状況は判然としない。胎土は比較的細かなものが多い。混入物は主体となるものは石英・チャートの砂粒であるが、31・38～40・43の5点以外は雲母片も多量混入する。

第2群土器

嘉徳Ⅰ式が最も多く得られ面縄東洞式がこれに次ぎ、この2型式で本群の70%以上を占める。伊波式・荻堂式などは僅少であり、無文口縁の資料も1点出土している。

以下、各型式ごとに述べる。

① 面縄東洞式

総数109点得られているが総て小破片で器形の窺えるような資料は得られていない。ほとんどが深鉢形の資料のようである。

特徴的なものを図42に示した。51は山形を呈す口縁部の資料であるが、山形頂部を欠失する。山形直下では明瞭なコーナーを示し、破片の下端では肥厚を示す段も見られる。口唇部は尖がり気味である。口縁部上端には先端の尖った工具による押し引き文がかすかにみられ、肥厚部外面には凹点を有す凹線が左側へ2条、右側へ1条認められる。これらの文様からすれば、市来式に属す資料かと考えられるが、器面の剝落が著しく判然としない。

暗褐色を呈し、きめ細かい胎土である。混入物は石英・チャートの微砂粒を多量含んでいる。上層（第Ⅱ層）から得られている。

52～54は押し引き文が1部で折れ曲がり弧状を呈すものでａタイプに属する。52は先端の分岐した工具が使用されているが、53は先端の丸味を帯びた工具が用いられている。54は器面の保持が非常に悪く、施文具は判然としない。肥厚帯の幅が約4㎝で、肥厚部直下にも押し引き文を配している。

55～57は籠編み状の構成をなす押し引き文を配しており、ｂタイプに属する。55は押し引きがやや深く、拓影では凹線状になる。56は先端の尖がった工具を採用しているが、55・57はやや平坦なものを利用して施文する。55・56は口唇部にも押し引き文を施している。

58～61は一部にステップ状の文様が配されるものでｄタイプに含まれる。61だけが先端の平坦な工具を用い、他の3点は尖がった工具を使用している。方向は4点とも左から右である。

62～66は水平方向の文様だけでｆタイプに分類される。66は肥厚帯の幅が約2.5㎝である。62～64は先端のやや丸味を帯びた工具が使われ、65は尖がっている工具を66は平坦な工具を用いている。62の2段目の押し引き文は途中で切れており、器面を囲繞しない。施文方向は62・64が右から左へ施し、他は左から右方向へ施している。64・65は口唇部にも押し引き文を施す。

67は上から下へ施文する3条の縦位押し引き文がみられ、破片の左上端には横位文の1部が

図41　22地区ロ遺構外出土土器(第1群)

認められるものの、全体の構図は不明。先端の尖がった幅約1㎝の工具が使用されている。口唇部にも施文しているが、器面が剥落し判然としない。

68は山形口縁の資料である。口縁上端の押し引き文は山形直下で切れている。また、下方ではその部分で押し引きが縦方向に施される。全体的な状況はつかめない。先端の尖がった工具が利用されている。

69は山形直下でコーナーを有す資料で、51に類似するようなものかと考えられるが器面の磨耗が著しく判然としない。

これらの資料も器面の保持は悪く、器面調整についてはよくつかめない。器色は赤褐色のものが多く、暗褐色や黒褐色を呈すものも見受けられる。63の資料が石英・チャート砂粒のほか雲母片を多く混入するが、他は雲母片を含まない。

② 嘉徳Ⅰ式

本群で最も多く得られており、特徴的なものを図43及び図44の90～101に示した。全て深鉢形の資料である。

口縁部の形状をみると明確な山形を示すものが数点得られている。図43の75・84・85はなだらかな低い山を形成するもので、77はなだらかな山を形成するが、前記の資料より高くなるようである。83は口縁部の一部を盛り上げて山を形成しており、高くなった部分が平坦な台形状の山形をなす。図44の100も一段高くなった場所がみられるが、全体の形状は判然としない。

文様は口唇部と口縁部に施される。口唇部の文様は口唇部の器面が剥がれ状況が判然としないものを除けば、ほとんどが先端の尖がったヘラ状工具による押し引き文を施す。

押し引き文を施す際の工具は先端の尖がったものを多く採用しているが、図43の88のように先端のやや丸味を帯びるものも利用されている。また、沈線文による区画内には1～3条の押し引き文を配しており、2条配するものが多かった。1条施すものは2～3条のものに比べゆとりがみられる。しかし図43の79は区画内ぎりぎりの幅広の工具を用いて施文している。

口縁部の文様は数種あり、21地区ハの分類からすれば図43の70～83はaタイプ、84～89はbタイプに属す。図44の93・94及び101はfタイプに入り、95～99はdタイプに属するものである。

図43の70～83に示した籠編み状の構図を示すものは、76の1点だけが上・下方の文様の交点で無文空白部を形成する。押し引き文は左から右へ施している。70の1点だけが押し引き文を凹線状に施す。また、押し引きの間隔は密なものが普通であるが、75は押し引きの間隔が広い。

ステップ文を配す84～89は全て一区画内に左から右への押し引き文を2条配している。使用されている工具の幅は86だけが約3㎜で、他は6～8㎜である。

fタイプとした3点は上・下の横位押し引きの間に斜沈線文を配すものであるが、図44の93・94の2点は綾杉状文となっている。101のものは全体的な構図が不明である。

沈線文を主体として部分的に押し引き文を配すdタイプの5点（95～99）は、いずれも綾杉状文に配す沈線間の1部に押し引き文を施している。

図42　22地区ロ遺構外出土土器(第２群)

図44の91は方向の異なる斜位の押し引き文を配し、その下方に横位の沈線文を1条施す。やや内湾気味の器形を示すこととあいまって注意されるが、破片であり判然としない。

器面の磨耗が著しく状況はつかめない。ただ、図43の95は器表面に擦痕が認められる。器色は暗褐色・赤褐色を呈すものがほとんどで、稀に黒褐色のものが見受けられる。胎土は細かく混入物は石英・チャートの砂粒を密に混入する。そのほかに図43の83は雲母片も多く含む。

③ 嘉徳Ⅱ式

63点と量的にはそれほど多くない。特徴的なものを図44の102～109、図45の110～118に示した。

全形の推定出来るような資料は得られていないので口縁部の資料をみると、ほとんどが外反あるいは直口状のものであるが、図44の106は口縁部がやや内湾気味である。口縁部の形状をみると山形口縁を示すものが、5点得られている。図44の104・106は比較的大きく弧状に山を形成するもので、その頂部はやや平坦にしている。2点とも山形直下においてコーナーを有すまではいかないが、強く折れ曲がる。

図44の109は口縁部が1段盛り上がり、台形状の山を形成する。図45の110・113はなだらかな低い山を形成している。

文様は口唇部・口縁部に施す。口唇部を有する資料では図45の113だけが文様が認められず、他は全て施文している。118は口唇部が剝がれている。施される文様は斜位の刻目文が圧倒的に多く、その他に押し引き文、刻文がわずかに見られる。

口縁部の文様をみると、図44の102～105が籠編み状の構図で21地区ハのａタイプに属する。102・103は4条単位で105は条数に関係なくほぼ等間隔に整然と施すが、104は非常に雑な施文である。

ｃタイプに属す綾杉状文が施されるものを図44の106～109、図45の110～114に示した。いずれも無空白部を有しているもので、図44の106、図45の113は沈線間の間隔も広い。

ｃタイプに含まれるものは図45の114だけで、3組の羽状文が認められる。文様帯の途中で破損しており、以下は不明。

図45の115・116は折れ曲がるような沈線を施すものであるが、全体的な構図は不明。施文は深く明瞭である。

ｇタイプに属すものは図45の117・118に示すもので、118はほぼ同じような間隔で格子目が描き出されるが、117はやや不均一で雑な感じを受ける。118は施文が深く明瞭で力強いが、117は沈線も細く施文も浅い。

器色は暗褐色及び赤褐色を呈すものが一般的なようである。器面は保持の悪いものが多く判然としないが、器面の残るものをみるとほとんどナデ調整を施すものである。胎土は細かく泥質なものが多い。混入物は石英・チャートの砂粒を多量含む。117の資料はそのほかに多量の雲母片を混入している。

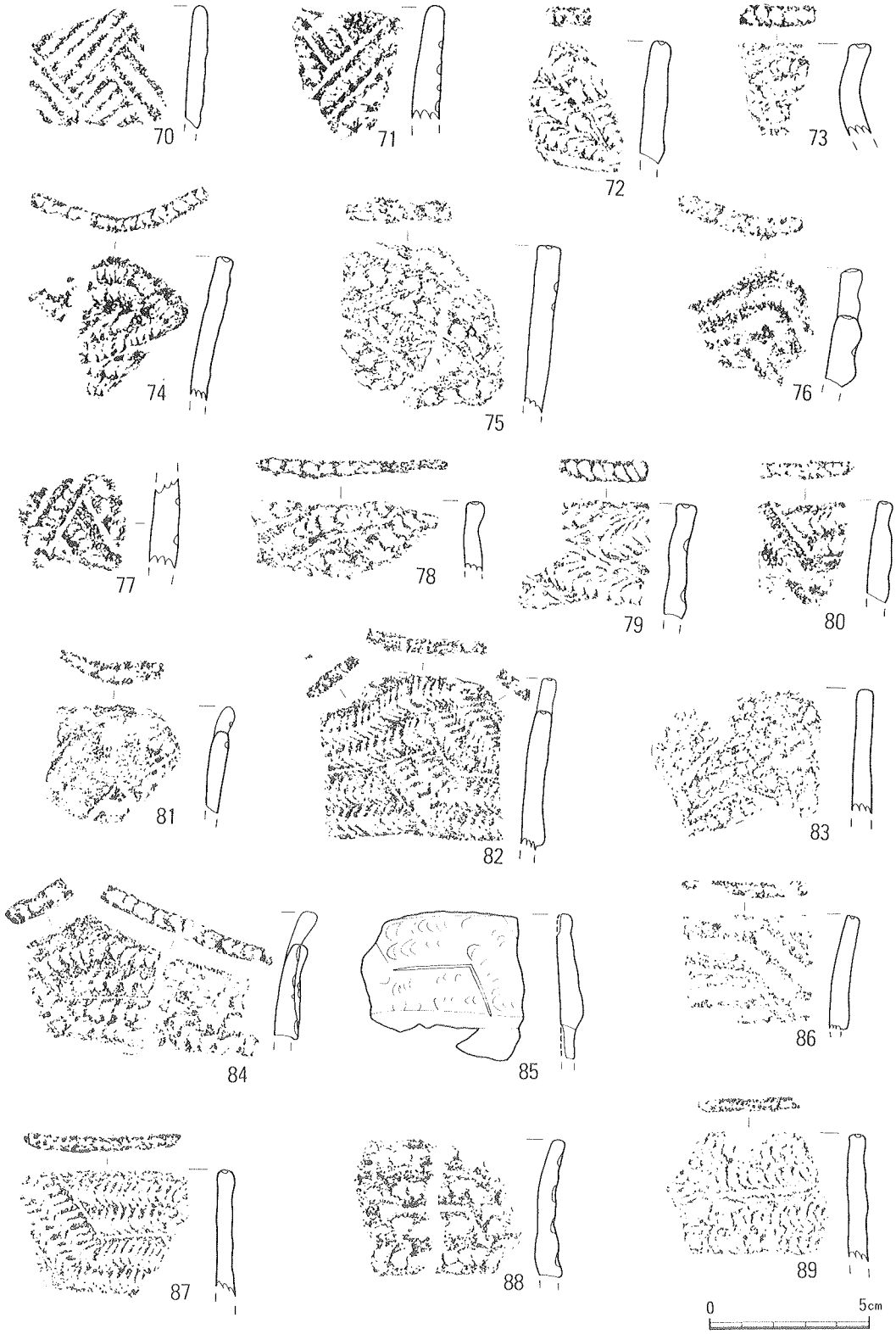


図43　22地区ロ遺構外出土土器(第２群)

図45の119に示したものは神野E式に属す資料かと考えられる。口縁部上端に先端のやや尖がり気味のヘラ状工具による押し引き文が2条施されている。押し・引きの強弱があり刻文的にみえ、2条の文様が同じように施されるため一見叉状工具を使用したものかと思わせる。口唇部に文様は認められない。文様帯の途中で破損しているため以下の状況は知り得ないが、中段を無文空白部にするタイプのようである。

表・裏面に横位の擦痕が消えきらずに残り、器色は暗褐色を呈す。胎土は比較的細かく、混入物として石英・チャートの微砂粒を多量含む。

120は伊波式の資料で山形を有す口縁である。山は均整のとれたもので、口縁部には2組の短沈線文が横位に施されているが、下方のものはそこで破損しており文様の一部が認められる。

器面の剝落が著しく器面の状況はつかめない。暗褐色を呈し、石英・チャートの微砂粒を密に混入する。

121は胴部の資料で破片の下端は肥厚を示す部分で破損している。その直上（肥厚帯の下端部）に先端のやや尖がるヘラ状工具による押し引き文を2条、左から右へ施している。中段を無文空白にする資料で、神野D式に属すかと考えられる。

暗褐色を呈し、器表面は擦痕がかすかに残る。裏面は剝落が著しく器面の状況はつかめない。混入物としてチャートの粗砂粒を多く混ぜる。

122～124に示したものは縦位押し引き文を密に施すもので、全体的な構図は不明である。122・124は押し引きの強弱がはっきりしているが、123は浅い凹線状に押し引きしている。122は大・小の工具が使用され、123は下端に横位文の一部がみられ、124は口唇部を欠失するもののコーナーを有す部分の資料である。

124は赤褐色、他の2点は暗褐色を示す。器面の状況は判然としない。3点とも石英・チャートの微砂粒を多く含む。

125・126は口縁上端に叉状工具による押し引き文を1組施すものと単ベラによる押し引き文を1条施すもので、中段には同様な文様による鋸歯状文を配す。口縁上端の文様からすれば神野E式かとも考えられるが、全体的な様相が判然としないのでここに示した。

2点とも器面の保持が悪く、器表面の状況は不明である。125が暗褐色、126は赤褐色を呈し、混入物に石英・チャートの微砂粒を密に含む。

127・128は口縁部の文様からすれば大山式に属すが、口唇部施文という点で違いがみられる。127は横捺刻文を、128は押し引きの間隔の違う押し引き文が認められる。2点とも5㎜幅の単ベラ工具を使用している。

2点とも器面の保持は悪く器面の状況は不明。127は赤褐色、128は暗褐色を呈し、石英・チャートの微砂粒を多量混入する。

129に示したものは、縦位の突帯状のものが破損し、凸起だけが残ったもので他に文様は認められない。破片のため全体の様相は不明である。器面は剝落が著しい。暗褐色を呈し、混入

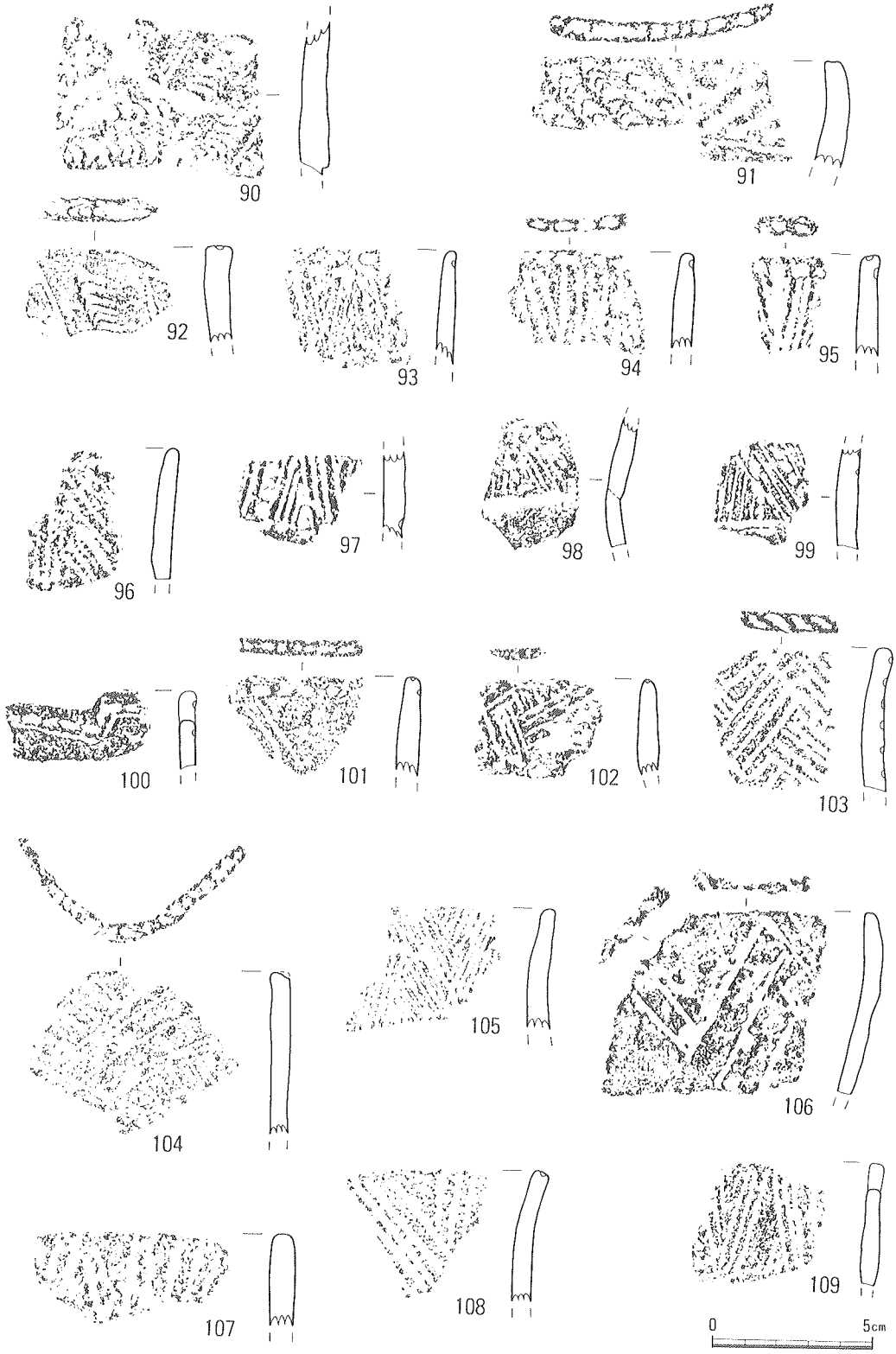


図44　22地区口遺構外出土土器(第２群)

物として石英・チャートの微砂粒を密に含むほか、雲母片も散見される。

130は口唇部にのみ施文しそこ以外は無文のまま放置するもので、山形口縁の資料である。裾部で破損しているため判然としないが、高い山を形成するようでその直下では強く折れ曲る。口縁部は山の頂部から5.5cmの箇所で非常に微弱な肥厚を示す。肥厚部外面では指ナデの痕跡が明瞭で凹凸がみられる。口唇部は刻文を施す。

器面は比較的よくナデられ、器色は暗褐色を呈す。石英・チャートの微砂粒を多量混入する。

底部資料

第1群に属する尖底と第2群に属する平底が得られており、後者の資料が圧倒的に多かった。図46・47に特徴的なものを示した。

図46の131～144に示したのが尖底の資料で、尖がり気味のもの（131～136）と丸味を帯びるもの（137～144）に細分できる。量的にはほとんど同様な出土である。これらの底部資料は第1群のどの型式に属するかは判然としない。

尖がり気味のものは暗褐色・赤褐色を呈すものが3点づつで、混入物に雲母片を含むものは132の1点だけである。丸味を帯びるものは全て暗褐色を呈し、5点が雲母片を混入する。

また、混入物の主体をなすものは石英・チャート砂粒だが、尖がり気味のものは若干粒の粗いものが多く含まれるようである。

図46の145～168及び図47に示したものは平底の資料で、図46の145は外面に先端の尖がった工具による押し引き文が認められる。器面の磨耗が著しく、条数や構図など全体的な様子はつかめない。器色は赤褐色を呈し、胎土はきめ細かく混入物も石英・チャートの微砂粒を多量混入する。他の資料に比べ底面が厚い（約1.5cm）。底径は不明。第Ⅳ層の出土である。

他の資料を底面からの立ち上がり部の状況により次の3種に分けた。

イ―底面からほぼ直線的に立ち上がるもの（図46の146～154）

ロ―底面から直線的に開きながら立ち上がるもの（図46の155～168）

ハ―底面からの立ち上がりは若干くびれたり直線的になったりするが、その上方からは開き気味になるもの（図47）

で、今回得られたものをみるとハに属するものが圧倒的に多く、ロ・イの順に少なかった。総て底径の推算の可能な資料で、種別の底径を表8に示した。それからすると4～6cmのものが一般的な底径であったかと推察される。

表8　種別底径

種 / 大きさ	イ	ロ	ハ
3cm以下			1
3.0～3.9	1	2	2
4.0～4.9	1	1	7
5.0～5.9	3	5	17
6.0～6.9	3	3	5
7cm以上	1	3	1

イタイプのものには上げ底的なものが多いようである。ほとんどの資料が器面の保持が悪く、器面の状況は判然としない。器色は暗褐色・赤褐色のものが普通で、稀に橙褐色のものが見受けられる。胎土は細かいものが多く、石英・チャートの微砂粒や粗砂粒を密に含む。図47の184はそのほかに雲母片を多量混入する。

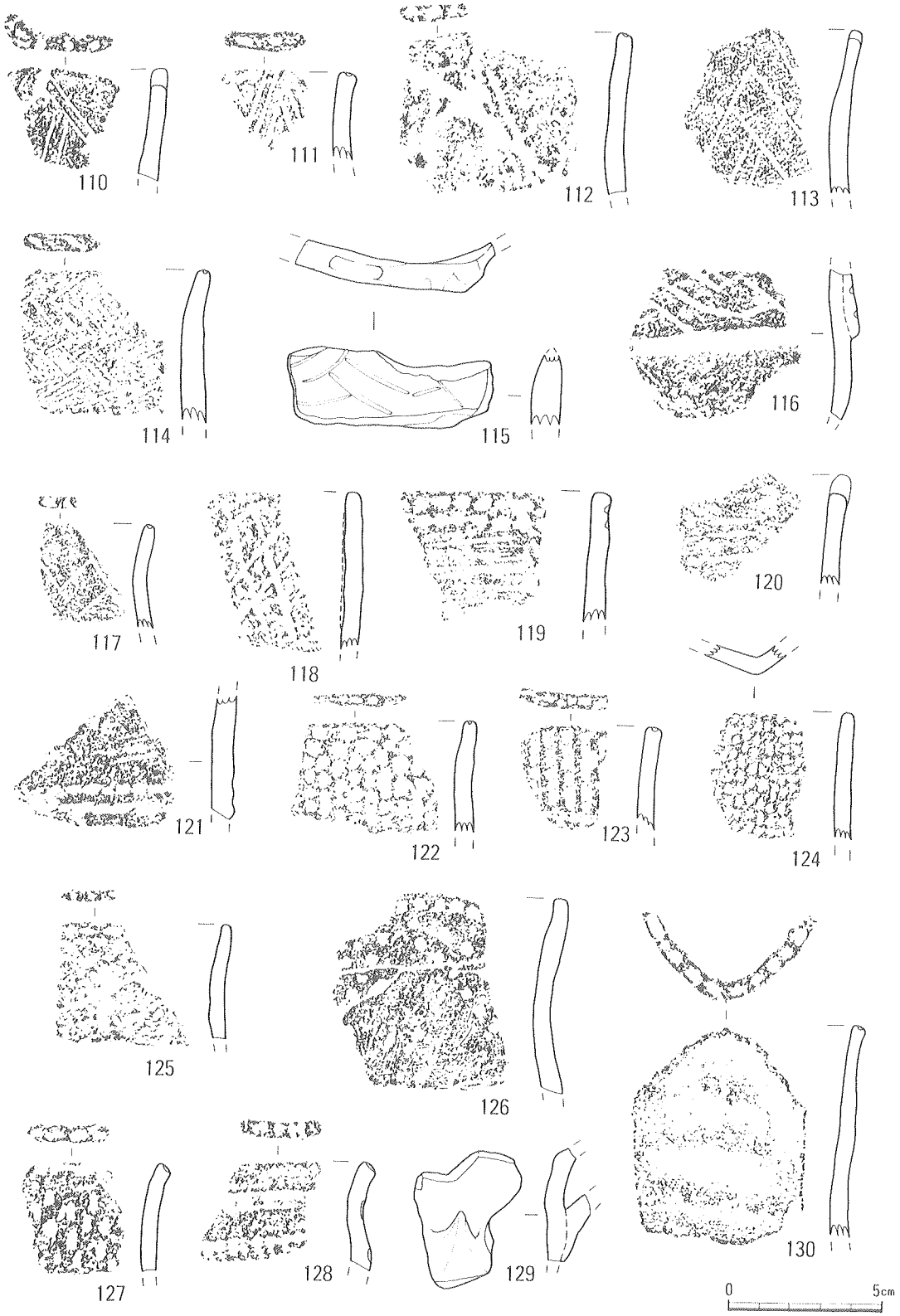


図45　22地区ロ遺構外出土土器(第２群)

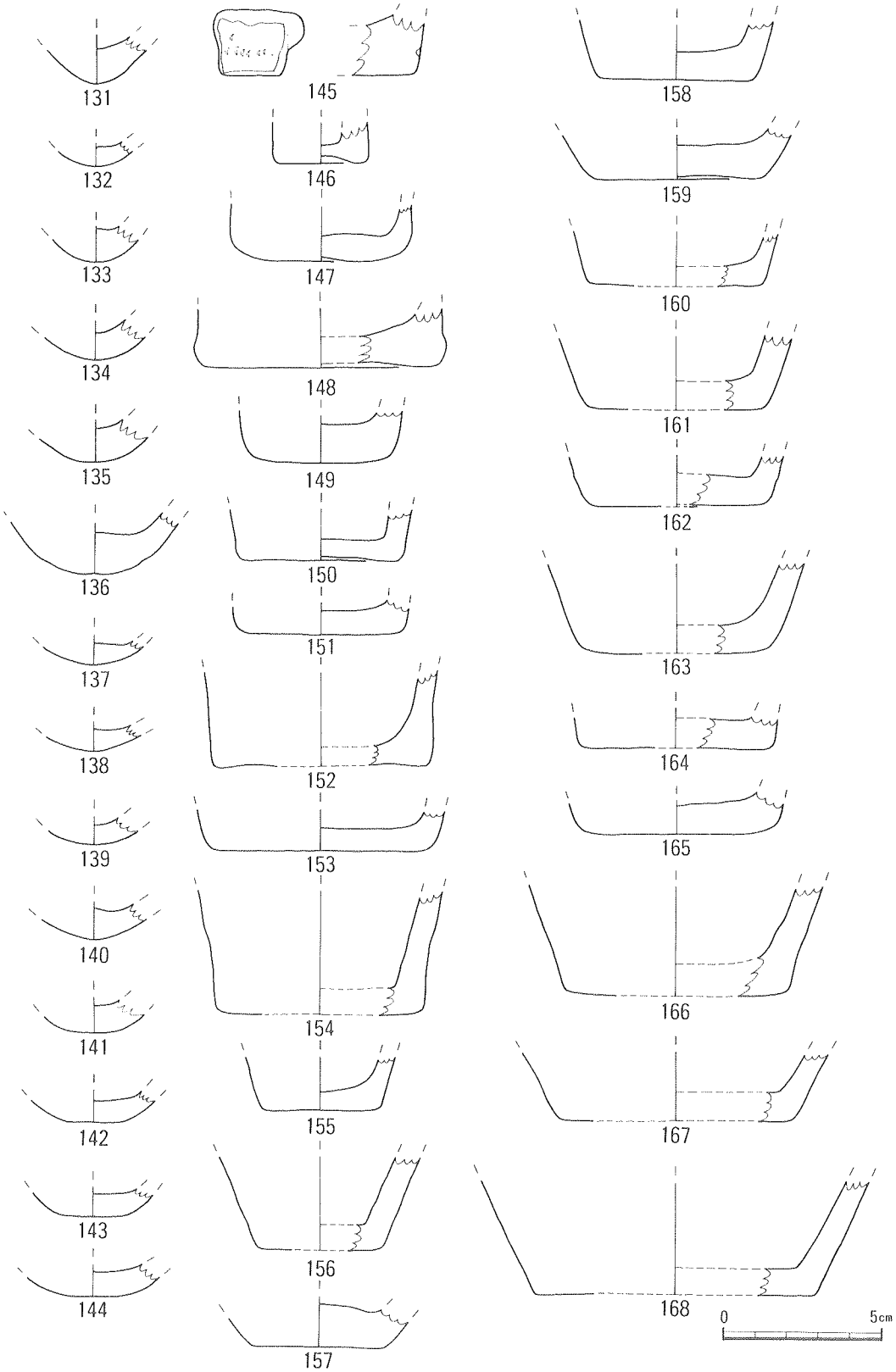


図46　22地区ロ遺構外出土土器(底部)

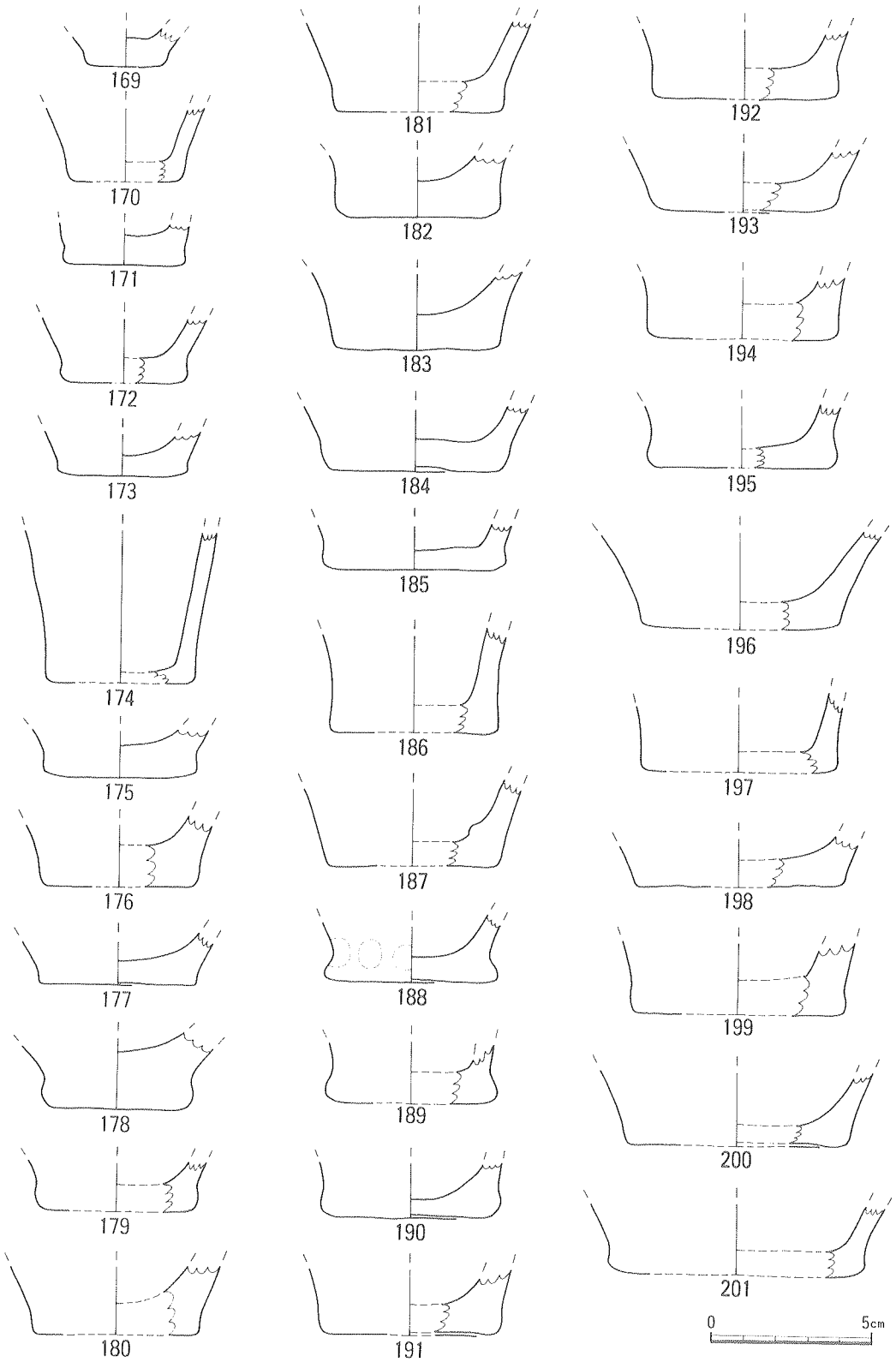


図47　22地区ロ遺構外出土土器(底部)

b．第４号遺構

量的にはそれほど多くない。第１群・第２群が得られており、図48に特徴的なものを示した。同図226は指跡が残る粘土塊で石英などの砂粒が少し混ざる。土器づくりの初段階の資料と思われここに図示した。

図48の202～207に示したものは第１群に属すかと考えられるもので、202～205は面縄前庭式・206は仲泊式、207はその他の資料である。

202～205は口縁部上端の凸帯と頸部の鋸歯状に配された沈線の１部がみられ、面縄前庭式の一般的なパターンを示す。205は唯一口径の推算可能なもので、約５cmを測る。小型の資料で注目される。凸帯上の文様をみると202・205は不明だが、203・204は叉状刻目（c）に属するようである。203は暗褐色、他は赤褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を多量混入する。

206は仲泊A式の口縁部の資料であるが、器面の剝落が著しく貝殻刺突文の１部が認められるだけで全体の状況は不明。暗褐色を呈し、石英・チャートの微砂粒を密に含む。

207は凸帯を意識しているような凹線の配置で、口唇部に単ベラ工具による幅広の刻目を施す。全体的な様子は不明。暗褐色を呈し、石英・チャートの砂粒のほか雲母片も密に含む。

208～223に示したものは第２群の資料で、208～212は面縄東洞式に属すものである。いずれも小破片のため全体的な構図がつかめない。ただ、209・210は押し引き文が途中で切れる。209だけが口唇部は尖がり気味である。211は橙褐色、212は赤褐色、他は黒褐色である。石英・チャートの微砂粒を多量混入するが、209は雲母片も多量に含む。

213～217は嘉徳Ⅰ式に属すもので、217は胴部、他の４点は口縁部の資料である。口縁部の形状は215だけが山形を呈す。急斜の山で頂部を平坦につくり、その山の部分で急に折れ曲がる。上面観が方形状を呈す資料かと考えられる。また、213・214は肥厚部下端で破損し、肥厚するのが確実であるが、他の２点は不明。肥厚部の幅は２点とも約3.5cmである。

文様は口唇部・口縁部に施されている。施文具は213・214のような先端の平坦な工具を使用したもの、215・216のような先端の尖がった工具を使用したものがみられる。口唇部は同種工具による押し引き文を施し、口縁部は213～215をみると籠編み構成をモチーフとするが、213・214はそれがかなりくずれている。216は全体の構図が不明。217は上・下の横位押し引き文の間に綾杉状の沈線を配すものである。

５点とも暗褐色を呈し、石英・チャートの微砂粒を密に含む。

218・219は嘉徳Ⅱ式に属すかと思われるもので、218は胴部・219は口縁部の資料である。219は山へ移行する部分の破片である。218は斜位の219は縦位の沈線が認められるが、全体的な構図は不明。218が暗褐色、219が赤褐色を呈す。２点とも石英・チャートの砂粒を多量含むが、219はやや粒が粗い。

220に示したものは神野D式に属する胴部破片かと考えられるが、全体的な様子がつかめない。肥厚帯を有し、その外面下端に先端が尖がり気味の工具による横位押引き文が１条認めら

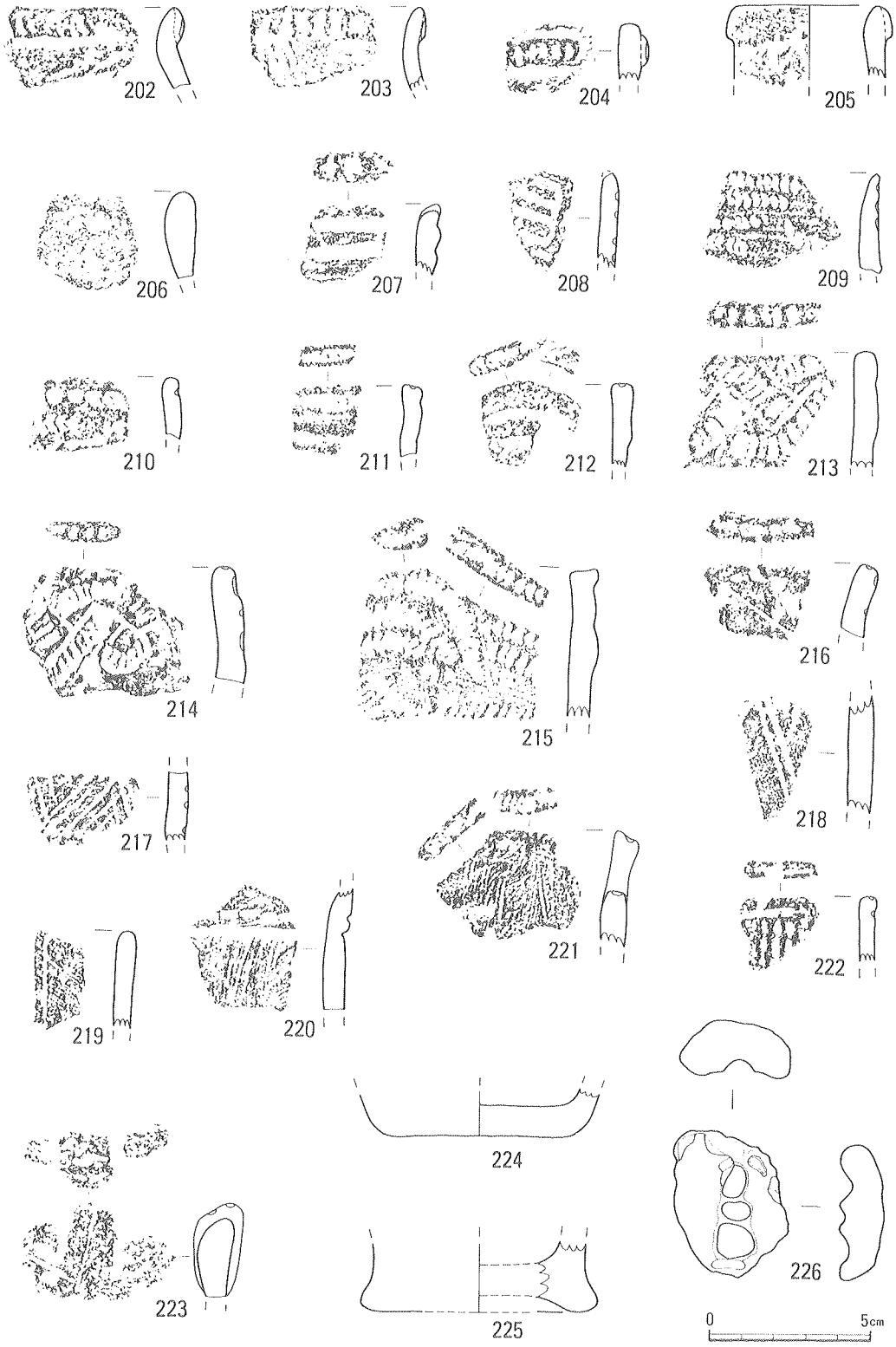


図48　22地区ロ第１号遺構出土土器

れる。暗褐色を呈し、表・裏面に擦痕が顕著に残る。石英・チャートの砂粒を密に含む。

221は無文口縁の資料で、山形頂部を平坦につくる。口唇部には先端の尖がった工具による押し引き文を配す、表面には縦方向の擦痕が著しい。暗褐色を呈し、石英・チャートの微砂粒を多量混入する。

222・223は小破片のため型式が判然としないもので、222は口縁上端に横位押し引き文が1条、縦位押し引き文が5条認められる。先端の尖がった工具が使用されており、口唇部にも押し引き文を配す。223は表面から裏面にかけて縦位凸帯が1条認められ（幅約1.5cm）、その部分は凸帯の厚さだけ口唇から突出する。突出部には先端の丸味を帯びた工具による刺突文が2本・2列になって見られる。器面の保持が悪く、全体的な状況は不明。

222が暗褐色・223が黒褐色を呈し、チャートの砂粒を多量混入する。

224・225は底部の資料で第2群に属するものである。224は底面からやや開き気味に立ち上がるもので、225は底面からの立ち上がりで若干くびれる。また、225は上げ底状の形状を示す。224は外面が暗褐色で内面が黒褐色、225は暗褐色を呈す。2点とも石英・チャートの砂粒を多量に含む。

c．第5号遺構

本遺構も量的にはそれほど多くない。第1群、第2群が得られており、第2群が多かった。総て小破片の資料で全形の窺えるようなものは得られていない。特徴的なものを図49に示した。

同図227～235は第1群に属す資料である。227・234の2点は面縄前庭式の資料で、227は口縁部、234は胴部である。2点とも典型的な施文のパターンで、口縁上端の凸帯と頸部の鋸歯状の斜沈線、下端の凸帯とその上方の斜沈線及び下方の縦位沈線がそれぞれ認められる。2点とも凸帯上の文様は斜位の刻目文が施されている。

暗褐色を呈し、器面はよくナデられている。胎土は細かく石英・チャートの砂粒及び石灰質の砂粒を多く混ぜるほか、雲母片も多量に含む。

235に示したものは仲泊B式の口縁部である。口唇部は尖がる。内面は器面の保持が良いものの、表面は剝落が著しい。羽状文が1回半みられるが実際に何回施文されたか不明。暗褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を密に混入する。

228～233に示したものは典型的なものからはずれるもので、21地区ハ出土の第1群の中でその他の資料とされたグループである。228は叉状工具による刻目文を施した扁平な凸帯が横位に1条、その上方に2ケ所V字状に配しているのが認められる。全体的な様子は不明。

229・230も小破片で全体的な様子がつかめない。229は縦位凸帯が口唇上に突出する部分が認められ、230は口唇部に凹線が1条廻る。231は縦位刻目を施した凸帯を口縁上端に1条横位に配し、その直下に斜位の短線（長さ約1cm）を密に施している。また、裏面にも斜沈線が認められるものの、全体的な構図が判然としない。

232は口縁部を肥厚させその上部に低平な山を配している。山の頂部には直径が6㎜ほどの

凹点を施す。全体としてこの山が何個配されたか不明。肥厚部には5㎜幅のヘラ状工具による刻文が1条配される。233は口縁部上端に僅かに肥厚気味の部分がみられ、そこに文様を施すが器面の保持が悪く判然としない。口唇部は丸味を帯びる。頸部は無文のようである。

229が赤褐色で、他は暗褐色を呈す。器表面に擦痕を残すものはみられない。胎土は細かく、混入物は石英・チャートの砂粒を多量含むほか、228・230は石灰質の砂粒と雲母片を231・232は雲母片を多量混入する。

236～251に示したものは第2群に属すもので、236は面縄東洞式である。小破片のため全体の構図は不明。暗褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を多量混入する。

237～240は嘉徳Ⅰ式に属すかと考えられるもので、237は口縁部、他は頸・胴部の資料である。237は籠編み状の構図をなすもので、口唇部にも押し引き文を施す。押し引き文は先端の尖がった工具による。239は上・下の横位押し引き文の間を縦位・斜位の沈線を組合わせて埋めている。他の2点は全体的な構図は不明。238が先端の平坦な工具を用い、240は先端の尖がった工具を使用している。

237・238は赤褐色、239・240は暗褐色を呈す。器面はナデ調整を施す。4点とも石英・チャートの微砂粒を密に含む。

241～246に示したものは嘉徳Ⅱ式の資料で、242以外は口縁部の破片である。241以外は口唇部にも施文する。243が方向の異なる斜位の刻目、244が縦位の刻目、245・246は先端の尖がった工具による押し引き文を施している。

口縁部の文様は241～243が綾杉状の構成、244～246が鋸歯状の構図を示す。無文空白部をつくる242・245・246の3点をみると、3本の斜沈線を1組として施文している。沈線は深く鮮明に施すが、243は器面の保持が悪く、文様の消える所もみられる。

241・244は赤褐色、242・243は黒褐色、245・246は暗褐色を呈し、245・246は表面に擦痕がわずかに残り、243は裏面で擦痕が著しい。胎土は割り合い細かく、石英・チャートの微砂粒を多量混入する。

247は神野D式に属すかと思われる胴部破片である。非常に微弱な肥厚帯の下端部を有し、その上部に棒状工具による刺突文が2点1組になるように意識されて施されている。暗褐色を呈し、表面に擦痕がわずかに見受けられる。

248は伊波式に含まれるかと思われるもので、刻文をペアになるように施すが、ならない所もみられる。暗褐色を呈し、石英・チャートの微砂粒を密に含む。擦痕は見受けられない。

249はペアにならない2条の刻文を配すもので、神野D・E、伊波式のいずれになるか不明のものである。中段は無文のまま放置する。暗褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を多量含む。

250・251は型式の判明しないもので、250は口縁上端に1条の横位押し引き文を配すが、器面の磨耗が著しく判然としない。頸部には文様は認められない。

251は棒状工具による刺突文を施すが、全体の様子は不明である。口唇部も剝落が著しく状

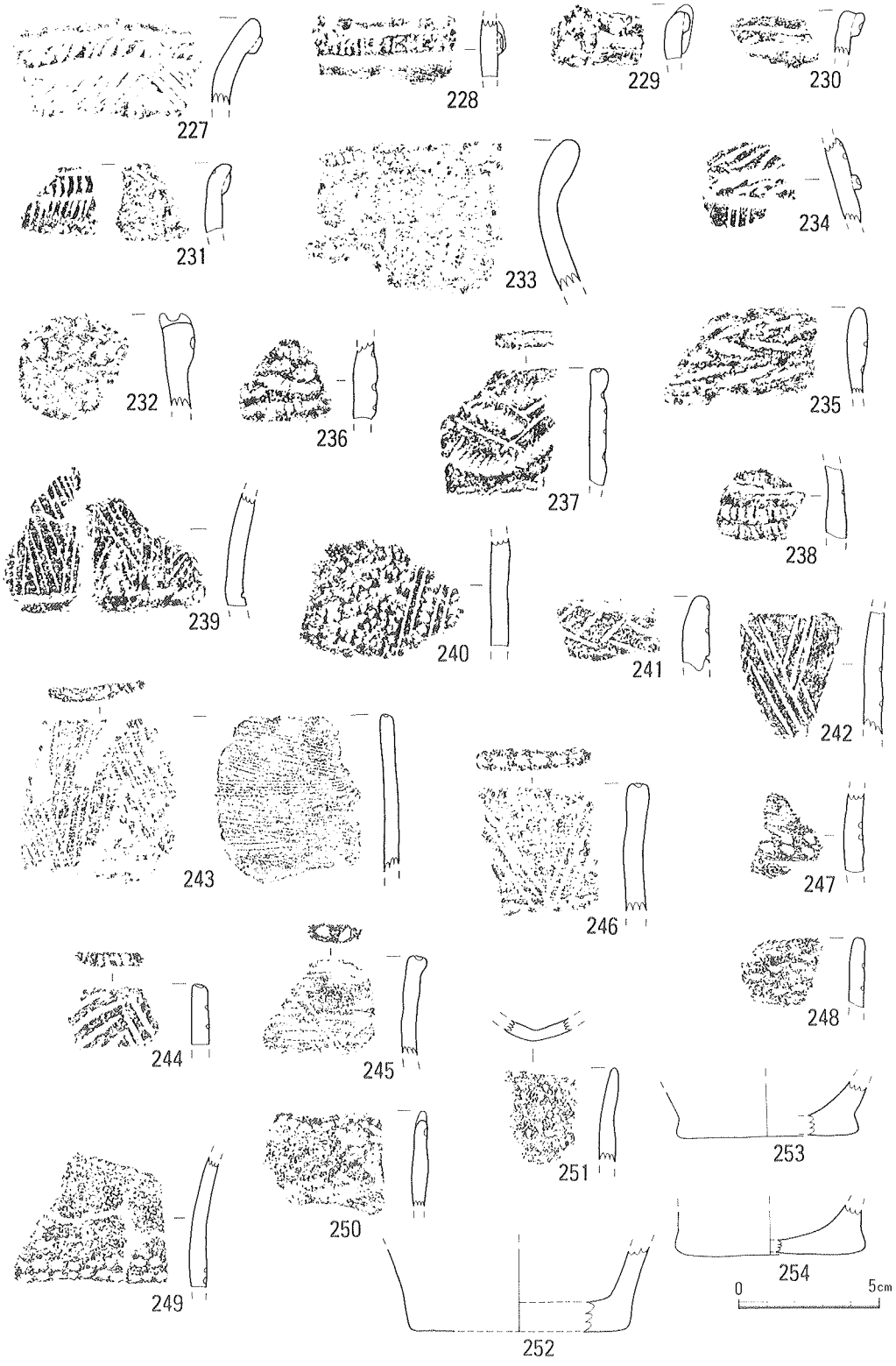


図49　22地区ロ第5号遺構出土土器

況は判然としない。口縁部が割りと強く折れ曲がる所が見られることから、上面観が方形状になる資料かと考えられる。

250が赤褐色、251が暗褐色を呈す。擦痕は見受けられない。石英・チャートの微砂粒を多量混入する。

252～254の3点は平底の資料で第2群に属す。252は底面から約1cmはほぼ垂直に立ち上がりそこから開きながら胴部へ移行するものである。253・254は底面からの立ち上がり部でくびれ、そこから開き気味に胴部へ移行する。3点とも底径の推算が可能で、約7.5cm、約6.5cm、約7cmを測る。

252は赤褐色、253・254は暗褐色を呈す。混入物は石英・チャートの砂粒を多量含むが、252は粒が粗く253・254は粒が細かい。

d．第6号遺構

本区の遺構の中では出土量が最も少かった。第1群が比較的多く得られたが、全体としては第2群より少なかった。外面に沈線文を施す平底（図50の293）は注目される。特徴的なものを図50に示した。

255～270に示したものは第1群の資料である。255～261に示したものは面縄前庭式に属する。260は横位・縦位に凸帯を配す胴部資料であるが、他は口縁上端の横位に凸帯だけがみられる資料である。口唇部の形状は258・261がやや丸味を帯び、他は尖がり気味である。また、259は口縁部上端で膨らみ厚くなる。凸帯上の文様をみると、255～259は斜位の刻目が、260は弧文、261は横捺刻文が施される。261の1点だけが口唇に施文し、引きの長い押し引き文が施される。器面はナデ調整が施され、器色は258だけが赤褐色を呈し、他は暗褐色を呈す。混入物をみると、258・261は石英・チャート砂粒のみを混ぜるが、他の5点はそれ以外に石灰質の砂粒及び雲母片を含む。

262～267は仲泊式の資料で、262だけがA式、他はB式である。262は山形を有す口縁部で、山の頂部には凹点を配す。裏面の剥落が著しい。表面はナデられ器面の保持がよく、水平方向に施された貝殻による刺突文が2条、明瞭に認められる。暗褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を多く含む。

263～267はB式に含まれるもので、263・264は低平な山形を形成する。口唇部は267がやや平坦をなすが、他は尖がり気味である。肥厚を示すものは263～265の3点で、263は約2.5cm、264は約1cmと1.5cmの2段肥厚。265は約1.5cmの幅である。

文様は5点とも羽状文を施している。263は肥厚部外面に羽状文を1回施文するが、山の直下において方向が変わる。肥厚帯下にも斜沈線がみられるが、全体の様子はつかめない。264は1段目、2段目の肥厚部外面にそれぞれ方向の異なる斜沈線を施し羽状文をつくるものである。265は肥厚部を気にせずに羽状文を施しており、肥厚帯は文様帯としての意識がほとんど消えてしまったものかと考えられる。また、267の1点は口唇部にも施文する。

263・264が暗褐色、265が黒褐色、266・267が赤褐色を呈す。器面の保持は悪く状況は判然としない。胎土は細かく、特に264は精選されきめ細かい。石英・チャートの微砂粒を多く混入する。他の4点も石英・チャートの砂粒であるが、264に比べると粒が粗い。

268～270は第1群のその他の資料に含まれるもので、268・270は低平な山形を有す口縁部である。268は山形部が厚くなる。268・269は間隔をあけて沈線文が配されるが、全体的な構図は不明。270は口縁上端に偏平な凸帯を1条配し、凸帯上、頸部及び山形部の裏面に施文する。凸帯上には貝殻を使用したかと考えられるやや波状を呈す縦位の刻目文を施し、頸部には長さ・角度・方向の異なる沈線を施す。山形部の裏面には斜位の沈線が施される。

頸部文様は破片の右側に無文空白部がみられることからすれば、間隔をあけて施されたものと考えられる。また、胴部のどのあたりまで施文されたかは不明。

3点とも暗褐色を呈し、混入物として石英・チャート・石灰質の砂粒及び雲母片を多量含む。

271～287は第2群に属すものである。271～276に示したものは面縄東洞式の口縁部資料で、273・274は口唇部が尖がり、他はやや平坦になる。273だけが肥厚の有無が判明し、幅約2cmの肥厚帯を有す。文様は275だけが口唇部にも押し引き文を施す。口縁部の文様をみると、271・272は籠編み状構成のものかと考えられるが、他の4点は判然としない。

273は黒褐色、271・274は赤褐色、他の3点は暗褐色を呈す。器面は残った部分には擦痕は見受けられない。石英・チャートの砂粒を多量混入するが、273は粒が粗くなり雲母片も多量に含む。

277～283は嘉徳Ⅰ式に属すと考えられるものである。281は低平な山形を形成し、口唇部は平坦で押し引き文を施す。277は口唇部が丸味を帯び、278は口唇部をやや平坦にする。前者は口唇部に文様は認められないが、後者は押し引き文を施す。278は肥厚帯の幅が判り、約3.5cmである。口縁部の文様は277～282が籠編み構成を示すと考えられ、283は綾杉状に配された沈線の1部に押し引き文を施す。また、282は外面から内面へ向け小孔を穿つ。

277・281は黒褐色、281・282は赤褐色、他は暗褐色を呈す。石英・チャートの砂粒を密に混入するが、280は雲母片も多量に含む。

285～287は嘉徳Ⅱ式の資料で、285は格子目状の文様を、287は押し引き文を口唇部に施す。口縁部は285が方向の異なる斜沈線、286・287は羽状文を配している。286は破片の左側に無文空白部をつくり、287は口縁端に横位押し引き文を1条施す。286は赤褐色、他の2点は暗褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を多量混入する。

284は肥厚部に叉状工具による連点文を施すものであるが、全体の様子は判然としない。

288～294は底部の資料で、288は唯一第1群に属す尖底である。黒褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を密に含む。他は第2群に属すもので、遺構外から出土しているものと大差ない。いずれも底径の推算が可能で、289の約3.5cmを除けば大体5～7cmの範囲である。注目されるのは293の資料で、外面に沈線文が認められることから嘉徳Ⅱ式に属すかと考えられる。

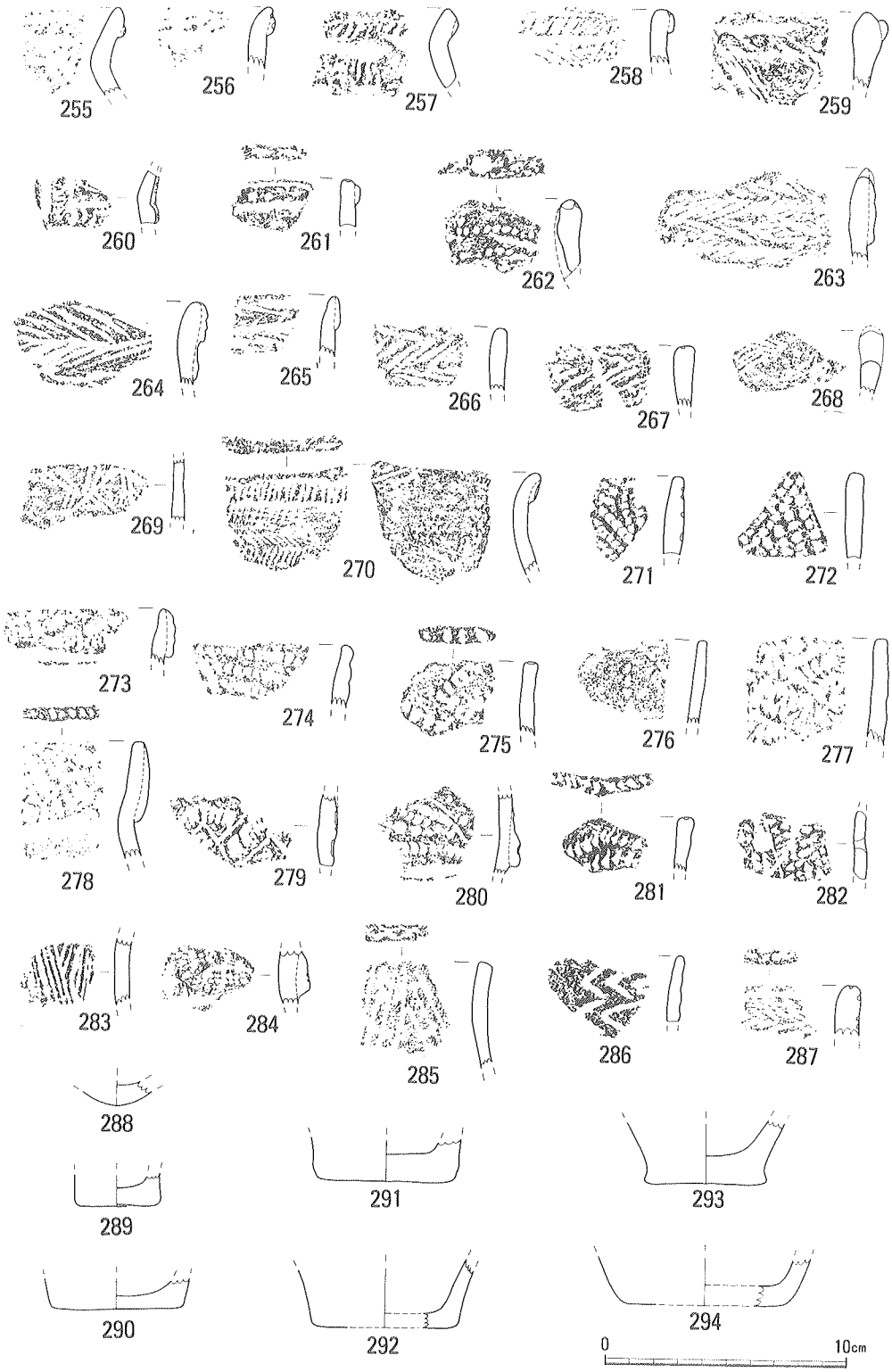


図50　22地区ロ第６号遺構出土土器

3．21地区イ

本区は小岩陰の3ケ所に貝層がみられ、その中でも広い範囲に厚く堆積した貝層（北側の按司墓に接する）からの出土がほとんどである。総数180点余で、第1群－30点、第2群－21点の出土である（表9）。以下、群別に記すが、底部資料は最後に一括して扱う。

第1群土器

特徴的なものを図51の1～9に示した。　1～3は面縄前庭式の資料で、1・2は口縁部、3は胴部である。1は口縁上端と頸・胴部の境い目に1条づつ凸帯を配し、その間に斜沈線による鋸歯状文を施すもので、本型式の典型的なパターンを有している。しかし、下方の凸帯以下は欠失しており、状況を明確にし得ない。

凸帯上には斜位の刻目文が施されており、21地区ハの分類でいえばeタイプに属する。凸帯間の鋸歯状文は10条1組みでラフなタッチで描かれている。

器表面はナデ調整によるが、表面は約半分が剝がれ落ちもとの器面を有さない。器色は表面が黒褐色・裏面が暗褐色を呈す。胎土は細かく、チャート・石英・石灰質の粗砂粒のほか雲母片も多量混入する。

2は口縁上端に1よりも幅広の扁平な凸帯を1条施す。破片のため以下は不明。凸帯上には弧状を呈す刺突文が見られ、aタイプに属す資料である。口唇部は平坦に成形する。

表・裏面はわずかに擦痕が残る。器色は赤褐色を呈し、チャート・石英・石灰質の砂粒を混入する。

3は下方の凸帯を有す胴部である。凸帯は1・2よりやや厚味があり、貝殻文が施されている。gタイプに属すもので、凸帯下方に右傾の斜沈線が6本みられるが全体的な状況はつかめない。

暗褐色を呈すが、表面の下部は黒褐色となっている。胎土は細かく、チャート・石英の微砂粒を多量混入する。

4は仲泊A式の資料で微弱な肥厚帯を有す。肥厚部の幅は約2.5cmで、そこに水平方向の貝殻文を施す。肥厚部直下には斜沈線がみられるものの状況は不明。表面は黒褐色を呈し、裏面は暗褐色を呈す。裏面には横位の擦痕が見受けられる。胎土は細かく、チャート・石英の微砂粒を多量混入する。

図51の5～9に示したものは面縄前庭式と仲泊式の要素がみられるものである。6・9は前者が幅広の縦位凸帯を、後者が羽状の沈線を有していることからとりあえずここに示した。

5は頸部に施されている斜沈線に面縄前庭式の、口縁部に配された肥厚帯とその上の斜沈線に仲泊式の要素がみられる。

7は全体的なイメージとしては仲泊式の要素が強い。

表9　21地区イ土器出土状況

群 / 型式 / 層序	第1群土器					第2群土器					不明	無文胴部	合計
	面縄前庭式	仲泊A式	仲泊B式	その他	底部	面縄東洞式	嘉徳I式	嘉徳II式	無文の資料	底部			
I		2	2		1	1	4			1	2	22	35
III 上	10		4	1	1	3	4	1	1	4		89	118
III 下	3		2	4			1			1	11	13	35
合計	13	2	8	5	2	4	9	1	1	6	13	124	188

8も全体的なイメージとしては仲泊式の要素が強い。口縁上端に配される凸帯から突出するように厚味をもってつくられる山、そして頸部にみられる羽状沈線に仲泊式の要素がみえ、偏平な横位凸帯とその上に施された刻文に面縄前庭式の要素がみえる。

5・7は裏面に擦痕がみられるが、他の3点はナデ調整を施す。9だけが赤褐色で、他は黒褐色を呈す。5点とも胎土は細かく、チャート・石英・石灰質砂粒が多量混入される。5・7は雲母片も多く含む。

第2群土器

特徴的なものを図51の10・11、図52の12～19に示した。

図51の10・11に示したものは面縄東洞式で、10は口縁部が1部段になるような山形になるかと思われるが、口唇部の保持が悪く判然としない。肥厚部下端で破損しており、肥厚帯の幅は約5㎝である。

文様は2点とも左から右へ施文し、籠編み状構成をなす。しかし、11は1条単位で配しているためか判然としない。両方ともナデ調整で、10は暗褐色、11は赤褐色を呈す。混入物としてチャート・石英砂粒を多量に含む。

図52の12～17に示すものは嘉徳Ⅰ式の資料である。12は器形もある程度窺えるような大型の資料で、推定復元図を示した。それからするとほとんど胴部の張りがなく、口縁部からストレートに胴部に至る。口径は約12㎝である。口縁部は約3.5㎝の肥厚帯を有す。

文様はその肥厚部の外面と口唇部に施す。肥厚部外面には先端の尖がった工具による押し引き文とそれを区画するような沈線文を施しているが、口縁部の破損が著しく全体的な構図は不明。押し引き文は右から左へ施され、2条単位で区画されるようである。口唇部は押し引き文が施されている。

表・裏面に擦痕が残る。器色は表面が黒褐色、裏面が赤褐色を呈す。胎土は精選されてきめ細かく、雲母粒を多く混入する。

13～15は籠編み状構成になると思われる資料で、14はゆるやかな山形を形成する。13は肥厚帯の幅が判明するもので、約4.5㎝を測る。

3点とも口唇部に施文しており、13・14は押し引き文、15は刻目文がみられる。口縁部の押し引き文は左から右へ施されている。13は押し引き文を2条で区画する所と、1条区画する所が見られる。

器面の状況をみると、13・14の裏面には比較的はっきりした擦痕が残る。13は横方向、14は縦・斜位方向である。器色は13・14が暗褐色、15が黒褐色を呈す。胎土は精選されて細かく、混入物としてチャート・石英の微砂粒のほか雲母粒も多く含む。

16は口縁部の資料で4条1組の右傾の斜沈線文とその下方に先端の尖った工具による刻文が横位に1条認められる。全体的な構図は不明。口唇部には沈線・刻目・刻文の3種みられるが、どのような配置になっていたか不明。

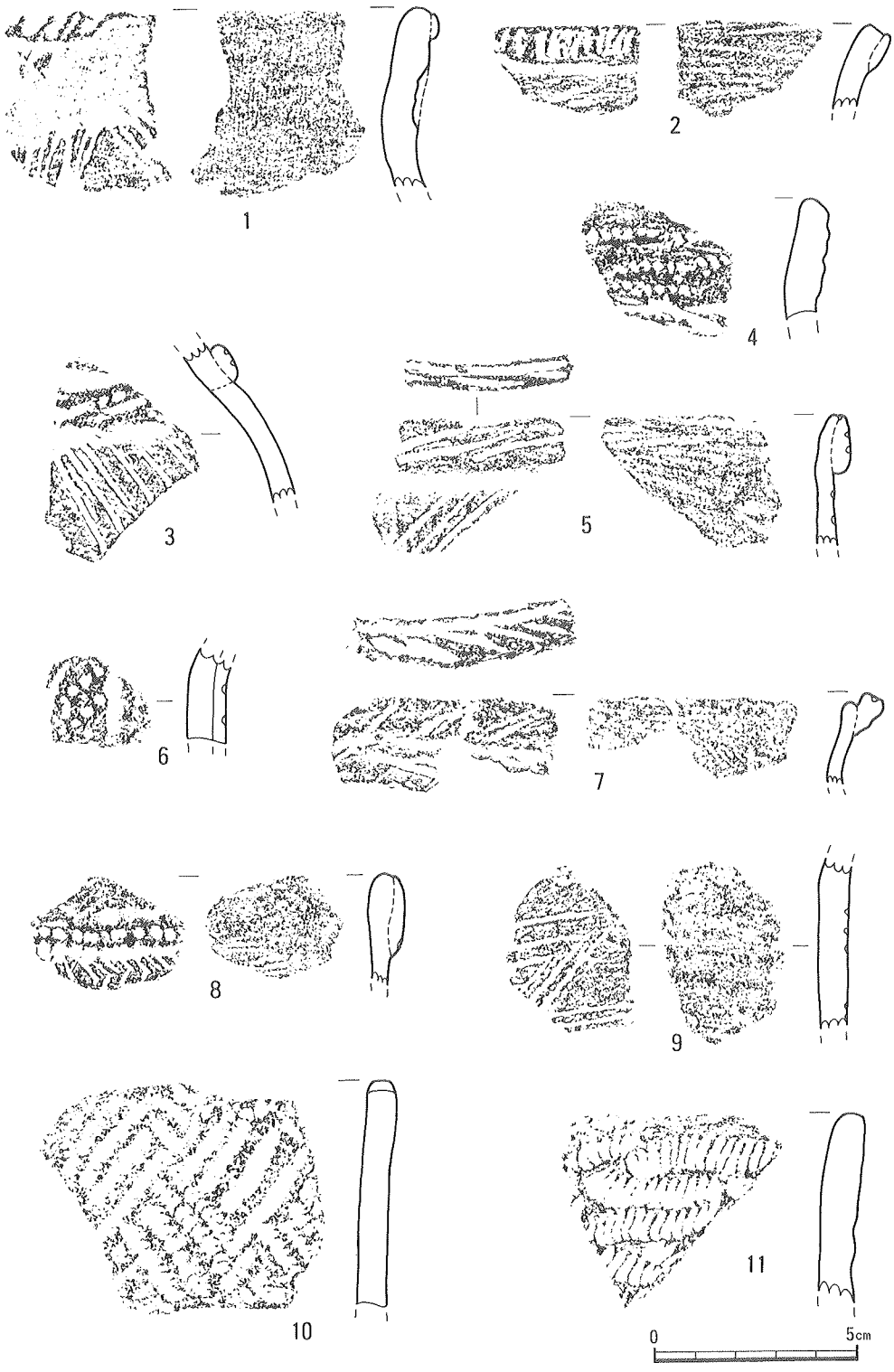


図51　21地区イ出土土器第１群(１～９) 第２群(10～11)

表・裏面に擦痕がみられ、器色は赤褐色を呈す。胎土は細かく、石英・チャートの微砂粒を多量混入する。

17は半截竹管状の工具による刻文を3条横位に施し、その上方には綾杉状の沈線がみられる胴部の資料である。刻文は上2条は左から右へ施文するが、下の1条は右から左へ施される。

両面とも丁寧にナデられ、器色は黒褐色を呈す。胎土はきめ細かく、石英・チャートの微砂粒を多く含む。

18は嘉徳Ⅱ式の口縁部で、右傾・左傾の斜沈線が鋸歯状に5組認められる。沈線はシャープなタッチで深く、右傾、左傾の順に施される。口唇部は平坦に形成され、先端の尖がった工具による押し引き文が施される。

表・裏面にわずかに擦痕が残る。器色は赤褐色を呈し、胎土は細かく、石英・チャートの砂粒を密に含む。

19は山形に移行する部分の資料で、口唇部にのみ先端の尖がった工具による押し引き文を配す。口縁部に文様はみられない。表・裏面に擦痕がみられ、裏面のものは明瞭である。赤褐色を呈し、粒の粗いチャート・石英の砂粒を多量混入する。

20に示したものは第1・第2群のいずれにも属さないものである。カヤウチバンタ式の口縁部で無文。口唇部は幅広くやや内傾する。肥厚部の幅は約1.5cmである。表面に擦痕が若干残る。暗褐色を呈し、胎土は細かい。石英・チャートの砂粒を多量混入し、粗粒のものも目立つ。岩陰前面の斜面部表土よりの出土である。

底部資料

図52の21～28に示したものである。本貝塚の資料や他遺跡の例を参考にすれば、21・22に示した尖底は第1群に、その他の資料は第2群に属するかと考えられる。今回得られた資料では23に示した脚台が注目される。

21・22は尖底の資料で21は底面がやや丸味を帯び、22は尖がる。2点とも積み跡の部分から破損している。外面は黒褐色、内面は暗褐色を呈す。胎土は細かく、石英・チャートの砂粒を密に混入する。

23は先端の尖がった工具による押し引き文と沈線の施される脚台の資料である。今回の調査では21地区ハでも同様なものが2点出土しており、同一個体の可能性もある。脚台部の破片でどういう器種・器形のものか不明。脚の径が約5cmで底面から約2.5cm下がる。内・外を継ぐように斜位の小孔を設けているが、その部分で破損しているため形状や配置された箇所の数については不明。

外面の文様は籠編み状の構図で3条を単位として区画しているようである。施文は右から左方向である。器色は黒褐色で、石英・チャートの砂粒を密に含むほか雲母粒も散見される。

24～28は底面からやや開き気味に立ち上がっていくもので、第2群のどの型式に属するか不明。28の底面は内側へ凹む。27・28は底径が推算出来、27が約7cm、28が約8.5cmである。

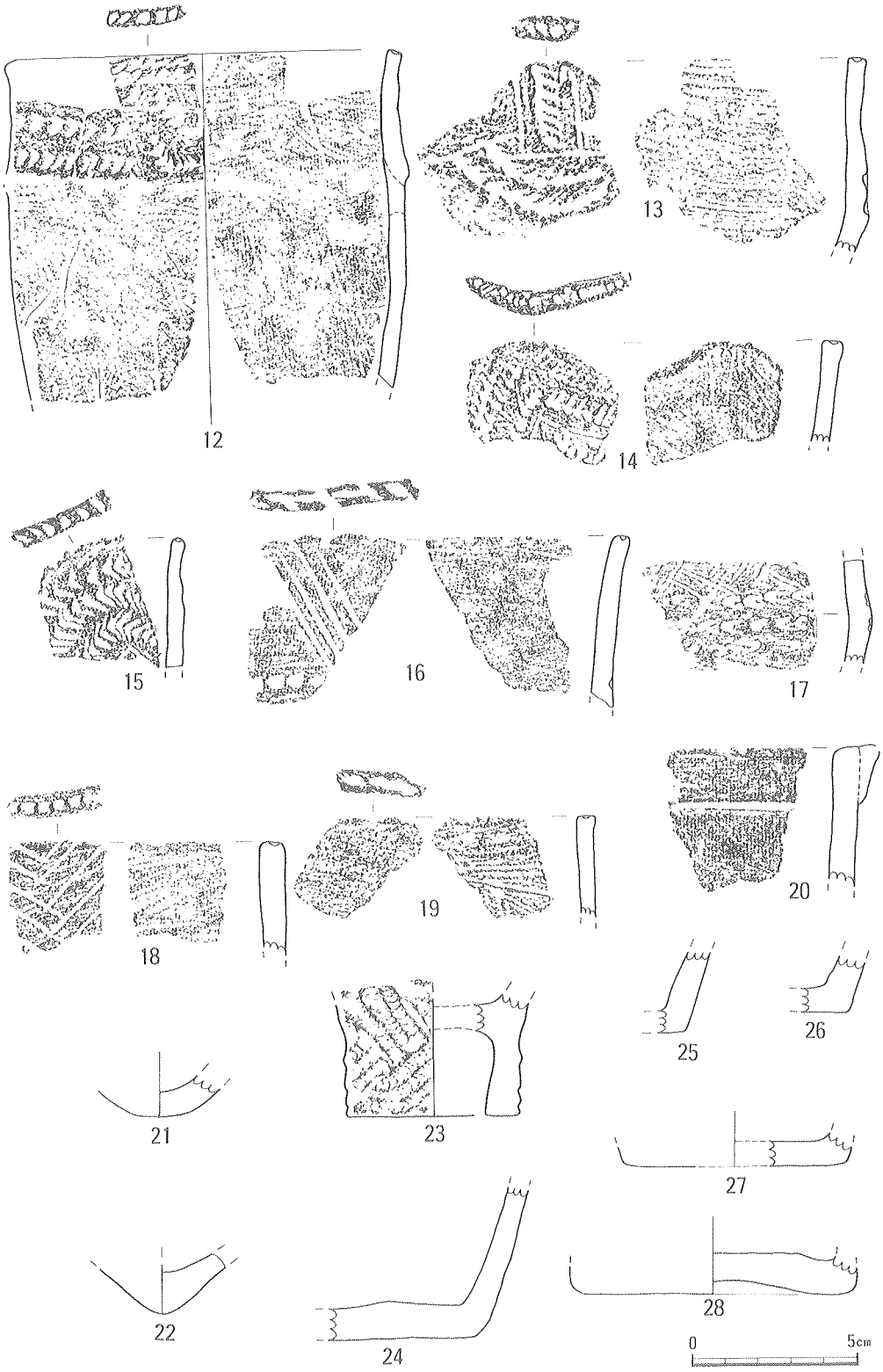


図52　21地区イ出土土器第２群(12～19) その他(20) 底部(21～28)

4．21地区ロ

本区では総数329点の土器片が出土している。総て小破片の資料で全形の窺えるような資料は得られない。出土状況は表10に示す通りで第Ⅲ層から多く得られ、群別にみると第2群が多い。以下、第1・第2群に分けて記述する。

第1群土器

図53に特徴的なものを示した。

1～8に示したものは面縄前庭式に属すかと考えられる資料で、1～5は口縁部、6～8は胴部である。4・5は本型式に特徴的にみられる扁平な凸帯を有さないものの、凸帯上に配される文様がそのままみられることからここに示した。

凸帯を付している1～3の口唇部は丸味を帯びたり、尖がり気味であるが、4・5は口唇部が平坦となっている。

1は幅約10㎜の扁平の凸帯を廻らし、その下方にはラフな斜沈線が6条認められるが全体的な様相はつかめない。2・3は幅が狭く、断面は丸味のある凸帯を配し、凸帯上にはヘラ状工具による刺突的な沈線を施す。1がeタイプに、2・3はfタイプに含まれる。

4は口縁部上端の凸帯はみられないが、その部分に刻文を施し、口唇部にも同様な文様を施文している。口縁上端の文様に縦位・斜位方向の沈線が3～5条みられるが、全体的な構図は不明。5も凸帯を有さず口縁部だけに横位文が配される。口縁部はすぐ斜位方向の沈線を施すが、どのような文様か不明。

6～8は下部の凸帯を有する資料で6は断面が半円形状をなし、7・8は断面が偏平なものである。凸帯上の文様は6が弧文を施し、7・8は器面の保持が悪く判然としない。6はaタイプに属す。

2が黄褐色、3・8が赤褐色を呈し、他は暗褐色を呈す。胎土は細かく、石英・チャートの粗砂粒を密に含む。そのため5～7の資料は器表面がザラつく。また、1・4～7の5点は雲母の小片も混入物として認められる。

9～12の4点は仲泊式の資料で9はA式、10～12はB式に属す。9は肥厚部直下で破損している口縁部の資料で、口唇は尖がる。口縁部に貝殻による刺突文が斜位方向に見られるが、器面の保持が非常に悪く判然としない。表面が黒褐色、裏面が赤褐色を呈し、混入物としてチャート・石英の粗砂粒を密に含む。

10は口唇部が丸味を帯び、口縁部は約1㎝の肥厚帯を有す。肥厚部外面及びその下方に右傾の斜沈線を施す。肥厚部外面の斜沈線は間隔が狭く、肥厚部下方のものは

表10　21地区ロ土器出土状況

群 / 型式 / 層序	第1群土器				第2群土器						不明	無文胴部	合計
	面縄前庭式	仲泊A式	仲泊B式	その他	面縄東洞式	嘉徳I式	嘉徳II式	神野E式	伊波式	底部			
Ⅰ	8		1		1					2	3	41	56
Ⅱ	1											10	11
Ⅲ	4		1		5	1		1	6	9	18	86	131
Ⅳ	7	1		3	7	4	5		4	7	2	66	106
貝だまり	5				3					1	1	15	25
合計	25	1	2	3	16	5	5	1	10	19	24	218	329

やや広い。

11は約2.5cmとやや幅広い肥厚帯を有すがそれほど明瞭ではない。口唇部は丸味を帯びる。肥厚部外面には斜沈線による羽状文を施し、肥厚部下方にも同様な文様を配したかと考えられるが、破損しており判然としない。12も斜沈線による羽状文を施す。

10は暗褐色、11は黄褐色、12は橙褐色を呈す。混入物は3点ともチャート・石英の粗砂粒を多く含むが、10はそのほかに雲母片も密に混ぜている。

13～15に示した3点は21地区ハのその他の資料に類するものである。14は口縁部の資料でほぼ直口状の器形を有す。口唇部の方へ次第に厚くなり、そのため口縁部上端は外側へ張り出す。

文様は口唇部・口縁部に施される。口唇部は先端の丸い工具による深い凹線が施されている。現在の資料からすれば、口唇部全面に施されるものと考えられる。

口縁部の文様は上段にラフな斜沈線による羽状文、その下方にやや立ち気味の羽状文を斜沈線により施す。下方の羽状文はどのあたりまで施文されていたか不明。上段の羽状文は器面を囲繞し、下方のものは間隔をあけて数ケ所に配されるものと考えられる。前者は仲泊式の後者は面縄前庭式の要素を示していると思われる。13も同様な資料の胴部であろう。

15は約1cmの扁平な横位凸帯を口唇部と同じ高さになるように配し、何ケ所かに縦位凸帯を施す資料であるが、破片のため全体的な状況は不明。口唇部は平坦である。文様は凸帯上にラフな刺突文を密に施し、縦位凸帯にも刻目文を配している。刺突文を密に施す横位の扁平な凸帯は仲泊式の縦位の凸帯は面縄前庭式の要素かと考えられる。

13・14は暗褐色・15は黒褐色を呈す。3点とも焼成がよく堅致で、器面の保持もよい。胎土は精選されており、チャート・石英の粗砂粒の他に雲母片を多量混入する。

第2群土器

図54の16～30に特徴的な資料を示した。

16～20に示したものは面縄東洞式に属するもので、16・17は口縁部、8～20は胴部の資料である。16は口唇部を平坦につくり、口縁部と同様な押し引き文を施す。口縁部は先端の尖がった工具による押し引き文が3条縦位に施されるが、全体の構図は不明。押し引きは下から上へ施す。

17は口縁部が弧状に肥厚するもので、幅は約3cmである。口唇部は尖がる。文様は肥厚部外面の上・下端に尖がった工具による押し引き文を左から右方向へ施し、その間に先端の平坦な工具による押し引き文を1条、右から左方向へ施す。21地区ハのfタイプに入る資料である。

18・19も先端の尖がった工具による押し引き文を配す。19は押し引きが深く密に施され、拓影では凹線となっている。文様が集まる1点に向かって施され、放射状を呈す。2点とも全体の構図はつかめない。

20は先端の分岐した工具が用いられ、1部で弧状に折れ曲がる。aタイプとされるものである。

器面をみると、20の資料だけが表・裏面に擦痕を残す。器色は18が黒褐色を呈し、他の4点

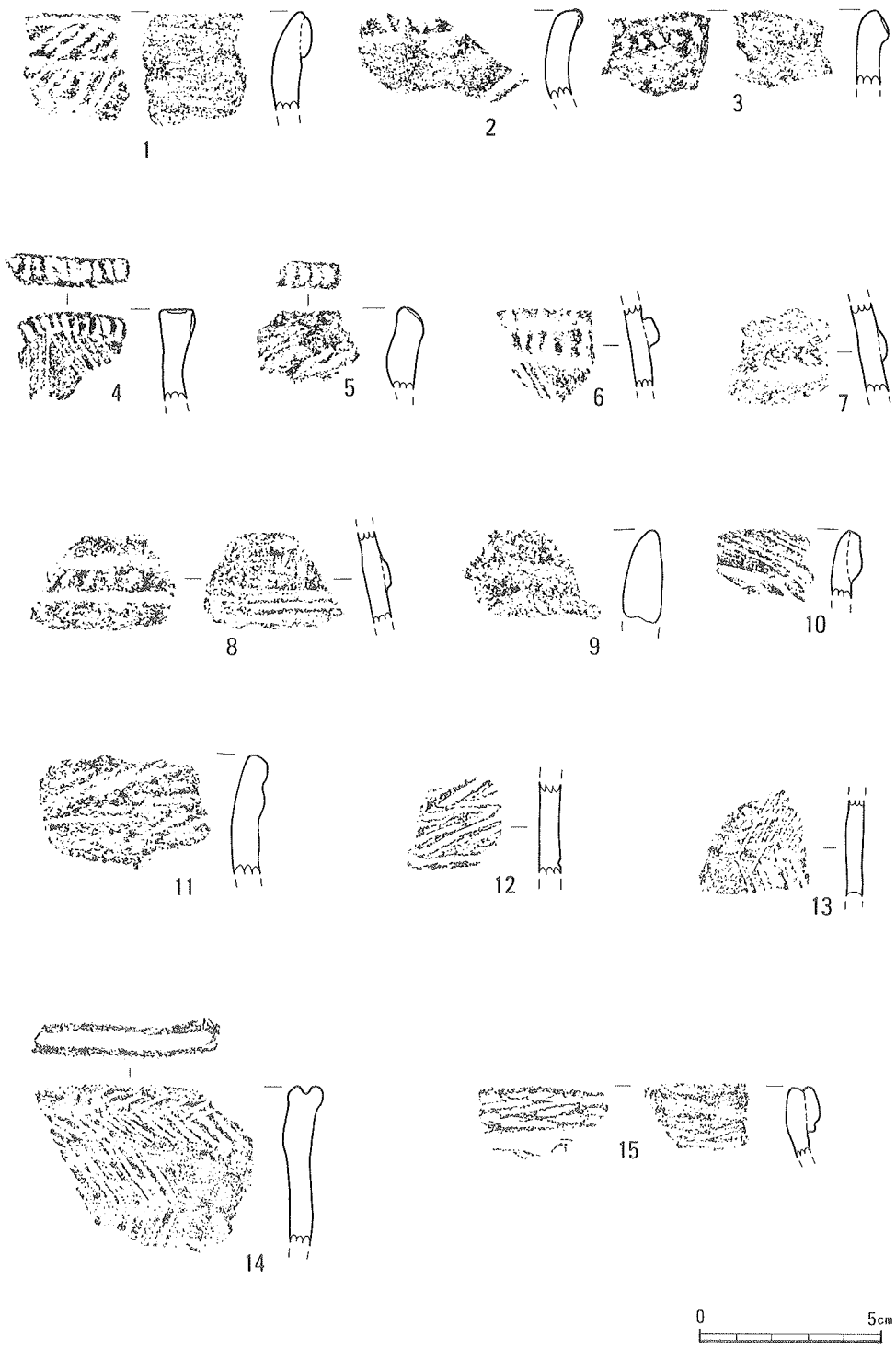


図53　21地区ロ出土土器(第1群)

は暗褐色を呈す。混入物は石英・チャートの砂粒を密に含み、18の資料は雲母も多く含む。

21～23は嘉徳Ⅰ式に属する胴部資料で、21は先端の尖がった工具による押し引き文を囲むように沈線がみられ、22は押し引き文を施した間に沈線が施文され、23は斜位の沈線による綾杉状文の1部を埋めるように押し引き文が配される。

21・22は赤褐色、23は赤褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を密に含む。

24～26は嘉徳Ⅱ式の口縁部資料で、25・26は口唇部にも施文する。24・25は直口気味であるが、26は口縁部上端が外反する。24は不明瞭な肥厚を示すが、25・26は肥厚の有無は不明。26は山形口縁である。

文様は24が肥厚部外面に羽状に配されるラフな沈線がみられ、25は鋸歯状文、26は全体的な構図が判然としない沈線文がみられる。24・25は施文が浅く、26は施文が深くシャープである。

26の裏面には明瞭な擦痕を残す。24が暗褐色で、25・26は赤褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を多量混入する。

27は神野E式に属すかと考えられる資料で、口縁部に先端が平坦なヘラ状工具による押し引き文を1条横位に配す。口唇部にも同様な文様を施文する。暗褐色を呈し、裏面にわずかに擦痕が残る。石英・チャートの砂粒を密に混入する。

28・29は伊波式の資料で29は山形を有す。28は口縁部に3条の押し引き文を配し、口唇部にも同じような文様を施す。29は山形に沿って叉状工具による短沈線文が2組認められる。28は中段を無文にするタイプであるが、29は不明。

28は黒褐色、29は暗褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を多量混入する。

30は棒状工具による刺突文を密に配すもので、暗褐色を呈し、石英・チャートの砂粒を密に含む。

31・32は群不明のものとしてここに示した。2点とも無文。31は口縁が丸く若干膨らみ、32は尖がる。31が黒褐色、32が赤褐色を呈す。31は石英・チャートの粗砂粒のほか雲母片を多量混入物として含む。32は精選された胎土に石英・チャートの微砂粒を多く混入する。これらの特徴からすれば、31は第1群の、32は第2群の要素をもつ。

底部資料

図54の33～39に示したもので全て平底の資料で、第2群に伴うものである。底面からの立ち上がりをみると、ほとんどが外側へ開き気味であるが、38はほぼ直線的に立ち上がっいく。また、33は若干くびれ気味になる。底径が判明するものは33の1点だけで、推算5.4cmである。

33・34は同一個体かと思われるもので胎土が精選され、混入物にチャート・石英・雲母の微砂粒を多量含み、つくりは丁寧である。35は石英・チャートの粗砂粒を密に含み、36～38は胎土が細かく、石英・チャートの微砂粒を混入する。33・34は赤褐色、他は暗褐色を呈す。

39は33～38とは異なる感を与えるもので胎土は粗く、混入物の石英・チャートも粗砂粒である。雲母片も多量混入する。外面は黒褐色で、内面は黄褐色を呈す。

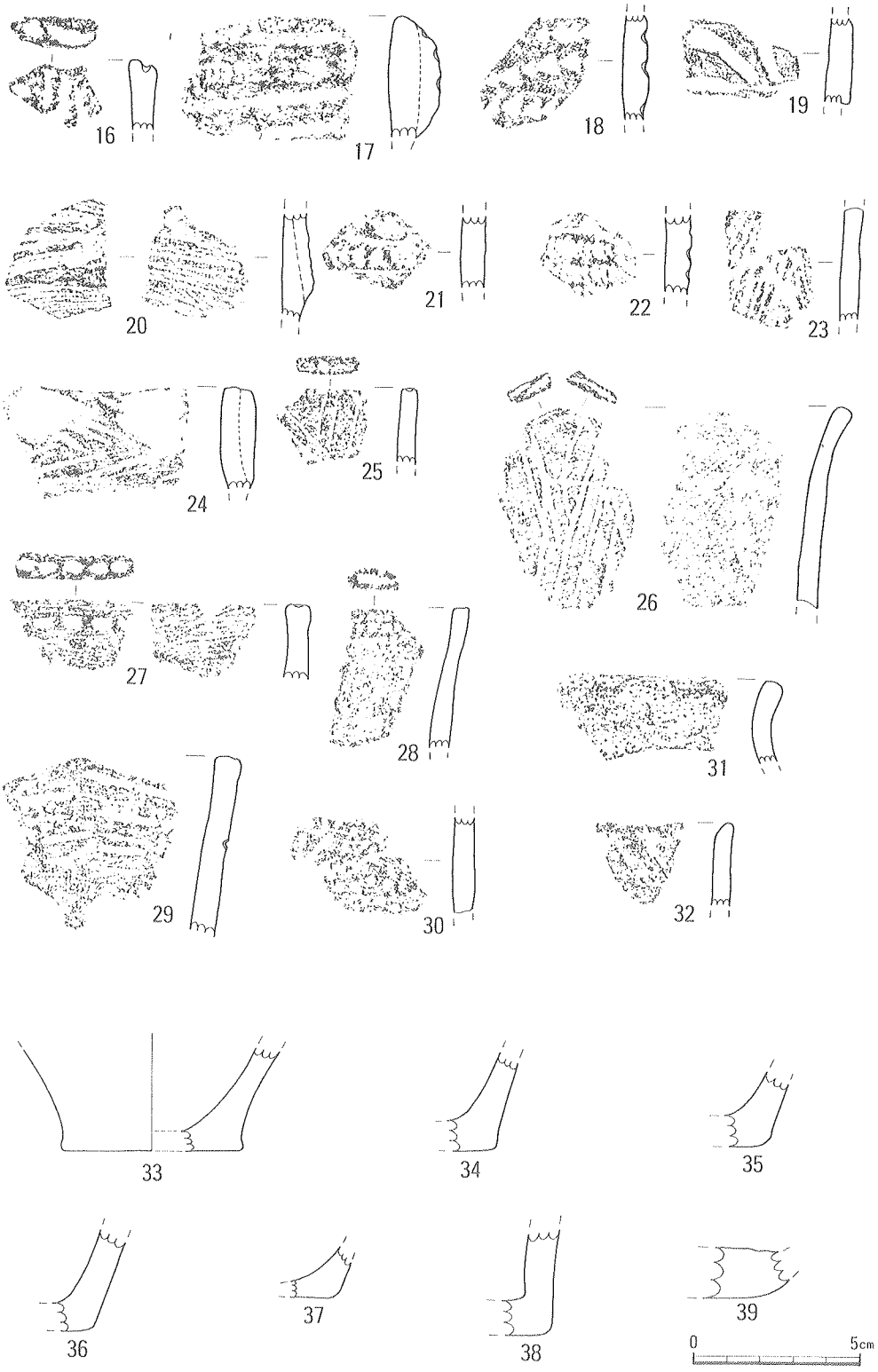


図54　21地区ロ第２群(16～30) その他(31、32) 底部(33～39)

5．21地区ハ

今回の調査で16,000点近くと最も多く得られている。量的には第1群が多く得られおり、型式別にみれば面縄前庭式が多かった。ほとんど小破片の資料であるが、前述した通り全形の窺えるものやある程度器形の推定できる大型の資料にも比較的恵まれた。これからの資料については推定復元を行うとともに図上復元を試みた。

第1群はほとんど面縄前庭式の資料で、本型式の特徴がより明確になった。また、図65の119に示した山を5ケ所に配す資料は注目されよう。

第2群も図39・図79・80に示す壺形・皿形の資料や図84の343に示す5ケ所に山を設けるもの、図106の底部資料などが注目され、各型式についてさらに明確にすることができ、沖縄・奄美間の土器文化の一端を窺い知る有力な手がかりとなった。

出土状況は表11に示した通りでほとんどの型式が第Ⅵb層に集中しているが、第Ⅶ層においては面縄前庭式が他の型式を圧倒的に凌賀し、最近の成果と符号する状況を示す。[註3][註4]

また、群内における型式の関係についてはかなり明瞭になりつつあるが、群間の関係についてはある時期において共存の可能性が想定されるものの、不明な点が多く今後の課題として残った。以下、群別に概略を述べる。

表11　21地区ハ土器出土状況

群 / 型式 / 層序		第1群					第2群									不明	無文胴部	合計
		面縄前庭式	仲泊A式	仲泊B式	その他の資料	底部	面縄東洞式	嘉徳Ⅰ式	嘉徳Ⅱ式	神野D式	神野E式	伊波式	荻堂式？	無文の資料	底部			
Ⅰ		28		1		1	3	1	1						2	13	134	184
Ⅱ		87			1	3	14	3	3			1			3	28	327	470
Ⅲ		108				6	26	6	3		1	13	1	2	12	62	834	1,074
Ⅳ		79	1	1	1	3	64	17	12		2	20	3	1	31	114	1,672	2,021
Ⅴ		27					2	1			1				2	24	118	175
Ⅵ	a	518	2	1		2	155	48	32		5	63	3	3	56	140	2,326	3,354
	b	916	25	13	25	20	254	126	44	1	25	23		18	84	228	4,101	5,903
Ⅶ	a	67					12	9	3		3	15		1	13	17	258	398
	b	829	5	9	8	12	68	34	16		1	5	1	4	22	81	1,221	2,316
合計		2,659	33	25	35	47	598	245	114	1	38	140	8	29	225	707	10,991	15,895

第１群土器

本遺跡で出土している土器の中、器形が深鉢形で丸底的尖底一群の土器をさす。本群には面縄前庭式・仲泊式が含まれる。その他に、両型式の特徴を合わせもつ土器群も得られ、本項では取り敢えず「その他の資料」として一括して扱う。以下、面縄前庭式より述べる。

① 面縄前庭式

本群で最も多く得られた、破片総数2,750点余その中に全形の窺える資料や図上復元可能な大型の破片も20数点出土し、本型式を考える上で重要な新知見が数多くえられた。

本型式は鹿児島県徳ノ島伊仙町の面縄第４貝塚前庭部において単独に出土した土器を標式としている[註2]。その特徴は「口縁部で外反し頸部でしまり丸底的尖底器形」にあり、その編年的位置付けは宇宿下層式と宇宿上層式の間をうめる土器として縄文後期後半に位置づけられていた。

ところが、本型式について近年沖縄県具志川島遺跡群[註5]・沖永良部島神野貝塚[註3]の発掘調査において現行編年よりも古く、少なくとも縄文後期初頭まで遡る成果が得られている。また、両遺跡からは本型式の祖型と考えられている土器群も検出されている。

さて、本遺跡の面縄前庭式は、壺形と深鉢形の２器種見られ後者が圧倒的に多く前者は稀少である。文様は凸帯を２条巡らし、その間を鋸歯文で埋める。凸帯下には縦位沈線文を施す。

さらに、凸帯上には弧文・叉状刺突文・叉状刻目文・ハの字状文・斜位の刻目文・刻目文・貝殻文・横捺刻文の８種類の文様が見られた。凸帯下は数条の縦位沈線を垂直ぎみ・もしくは、弧状に施す。縦位沈線は凸帯間の鋸歯文下位の頂点を基準に施文するが、全体にバランスが崩れた例も多く見られた。器面はナデ仕上げが基本であるが、擦痕が残るものも見られた。

胎土には雲母・石英・チャート・石灰岩を砕いた小礫・石灰質砂粒を含むものが一般的であるが、雲母を含まない土器群も得られた。色調は暗褐色の例が多いが、赤褐色のものも比較的見られた。赤褐色の土器は概して雲母を含まず、さらに、裏面に擦痕が顕著に残る傾向が見られた。

以上、本型式の一般的な特徴を述べたが、分類に際しては、器種により壺形と深鉢形の２種に大別した。器形は復元土器や口径推算可能な資料を参考に、壺形を３タイプ、深鉢形を４タイプに分けた。さらに、本型式の重要な要素である凸帯上の文様（下図の模式図55を参照）別

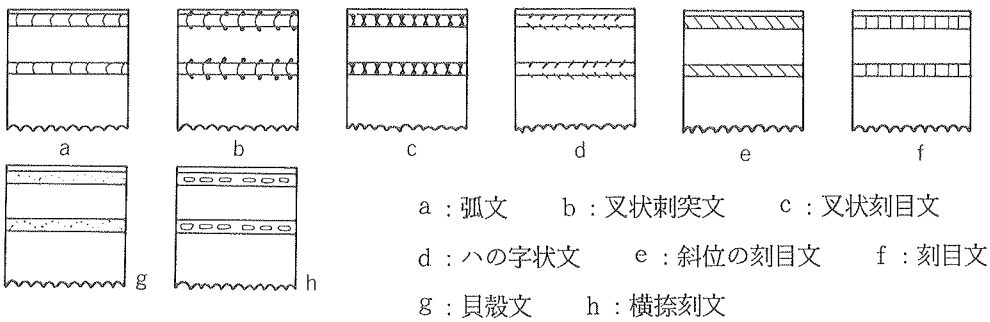


図55　凸帯上文様の模式図

にも細分した。以下、壺形より略記するが、図示した土器の出土グリッド・層位や諸特徴については表15に示し、口径推算可能なものや復元土器については別に表14を設けた。

・壺形

壺形は深鉢形に比べると量的に少ない。その器形・大きさ等により3種に細分できる。また、文様は器種が異なっても顕著な違いは見られなかった。ただ、凸帯を3条～4条施す例が深鉢形よりも比較的多い感を受けた。以下、分類基準を示し略記する。

Ⅰ：口径を約5㎝前後に納め長頸を有するもの

Ⅱ：口縁部をラッパ状に外反させるもの

Ⅲ：肩部の張り出しが著しいもの

Ⅰ類

図56に示したもので5例得られた。本タイプは従来知られている壺形土器と若干趣を異にするが、文様・構図・胎土・器面調整等より詳細に検討した結果本型式に帰属するものと解した。現資料では、文様は口唇部に凸帯を1条施しているが、頸部に後1条凸帯を巡らすものと思われる。また、頸部を無文のもの（1・2）と鋸歯文（3～4）で埋めるものの2種見られた。

ところで、5の例はほぼ口縁部の全形を知りえる好資料である。本標品は口唇部を欠失しているが、口縁部をほぼ完全に残しているものである。文様は口縁部に横位凸帯を2条、縦位に4本貼り付け十字を4組作る。凸帯上は斜位に刻目文を施す。凸帯間は空白を作る。色調は赤褐色で胎土に金雲母・石灰質砂粒・石英を含む。器面はナデ調整である。

Ⅱ類

図57に示したもので数少ない土器である。胴下半部は欠損しているが、現状から推すと口縁部をラッパ状に外反させ胴部の張る器形と思われる。文様は3条の凸帯を基調に凸帯上に叉状工具による刺突文やハの字状文、斜位の刻目文を施す。凸帯間は鋸歯文で埋める。さらに、凸帯下には縦位沈線文を施文。基本的には凸帯2条の文様構図と変わらない。器面調整はナデ仕上げであるが11・13の裏面は擦痕が消えきらず残っている。すべて胎土に金雲母を混入。

Ⅲ類

図58・59に示したものである。深鉢形の器形にやや類似するが、口径が胴径より極端に小さくなるものである。器の大きさにバリエーションが見られ、小型のもの（14～17）中型のもの（18～30）大型のもの（図59）がある。文様構図も深鉢形と基本的に変わらず凸帯を2条巡らし、その間を鋸歯文で埋め、胴下半部に縦位沈線文を垂らす。

14～17の資料は小型の部類に属し、16の例は凸帯間の幅約4㎜（成形時の粘土帯の厚さ）と狭く無文である。その下位は欠損しているが、凸帯をあと1～2条施すものと思われる。14・16は刻みの弧文、17・14は斜位の沈線を凸帯の上に弧文。

18～29に示した一群は中型の部類に含まれる資料である。18・19・24・26・29は図上復元を試みた資料で、特に前3者は本土器のグループの一般的な器形である。

ところで、27は肩の張りが弱いが器のサイズにより本類に含めたもので、口縁部に4条の凸帯を有する唯一の例である。文様は3段目の凸帯がはみ出て4段目と1カ所で重なり合っている。凸帯間には2段目と3段目の間に限り5本の沈線の鋸歯文が描かれている。胴下半部の鋸歯文は下位の接する箇所をめやすに9～13本の縦位沈線を5組施す。文様は全体的に凸帯上の刻目文と鋸歯文と組み合わせられ羽状文的な雰囲気を醸しだしている。器面はナデ調整で色調は橙褐色。胎土に金雲母・石英・石灰質砂粒を含む。

29は口唇部を欠失しているが裏面の輪積み痕よりかなり肩の張る器形と推察できる。縦位の凸帯を2本接合させ胴部の凸帯と結合させるものである。凸帯間の空白に鋸歯文の崩れた文様を全面に埋めるものであり、本遺跡では特異な文様である。胎土に金雲母を多量に含み、その他には石英・石灰質砂粒が散見される。

次に大型の部類に属するものであるが、図59に示した4例のみ得られた。特に、33は口縁部～胴上部まで復元できた資料である。器形は肩の張りが著しく口縁部ですぼまり、口唇部を著しく外反させる器形である。文様は口縁部に凸帯を2条巡らし斜位の刻目を密に施す。さらに、同様な文様を口唇部にも施し、それが、上位の凸帯の刻目と組み合わされハの字状にみえる。凸帯間は6本の沈線を1組とする鋸歯文をほどこす。肩部にも鋸歯文（5本）を同様に施文。それ以下は、下位の10組の鋸歯文の頂点にそって約13本の沈線を弧状に底部付近まで垂らす。その間も同じ文様を描く。

ところで、本土器はⅠ類の文様構図や凸帯2条を基本とするグループと比較すると3段目の凸帯を施していない事が良く理解できる資料である。このことは、凸帯間に鋸歯文を施す本型式の原則からもはずれた例であり、今後文様構図の内部変化を知る上で重要な標品である。

表12　壺形と凸帯上文様の関係

凸帯文文様 / 類	a	b	c	d	e	f	g	h	i	計
Ⅰ	1			1	2				1	5
Ⅱ	1	3		1	2					7
Ⅲ	3		1	1	8	3				16
計	5	3	1	3	12	3			1	28

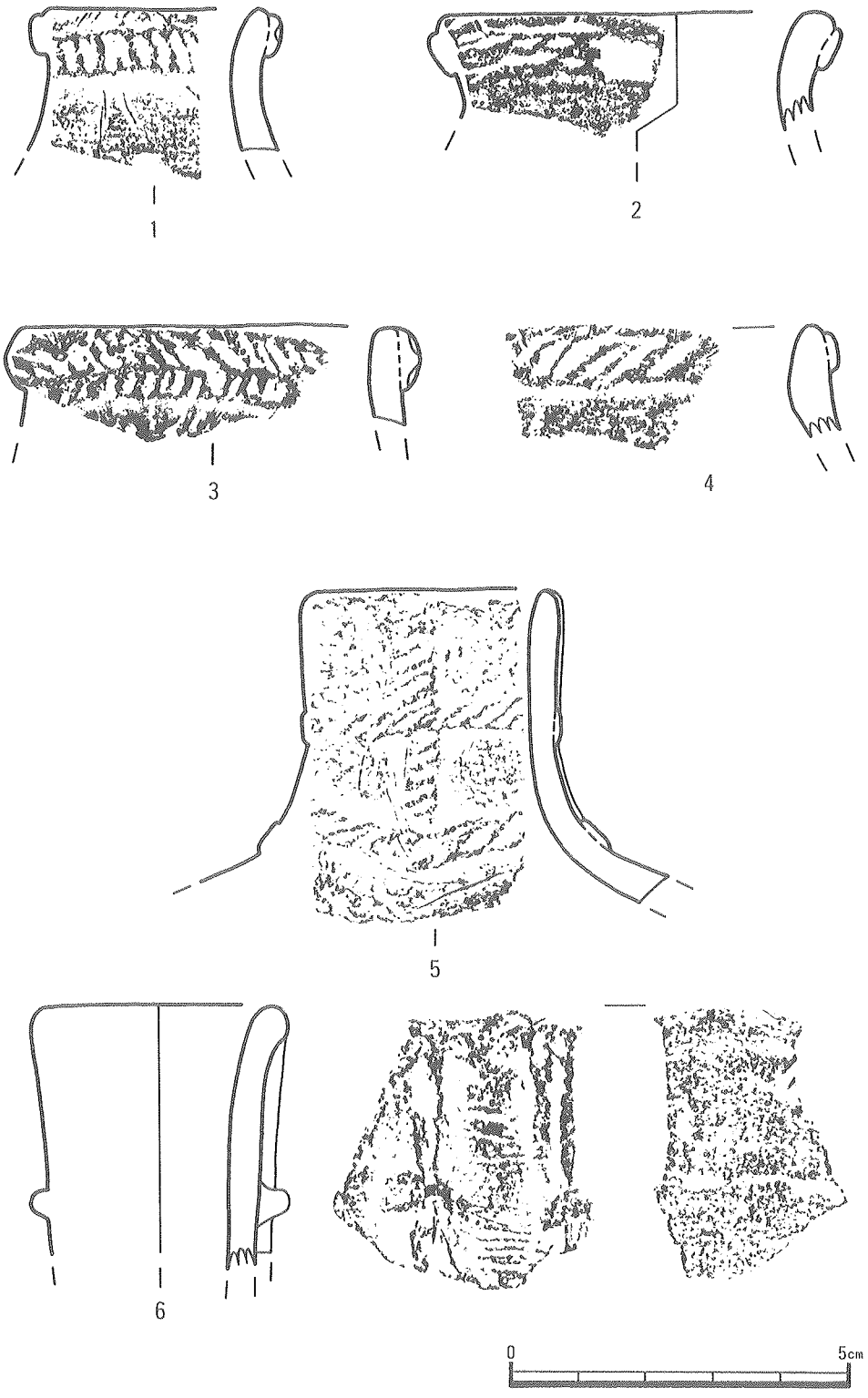


図56　壺形土器面縄前庭式（１～５）　その他の資料(6)

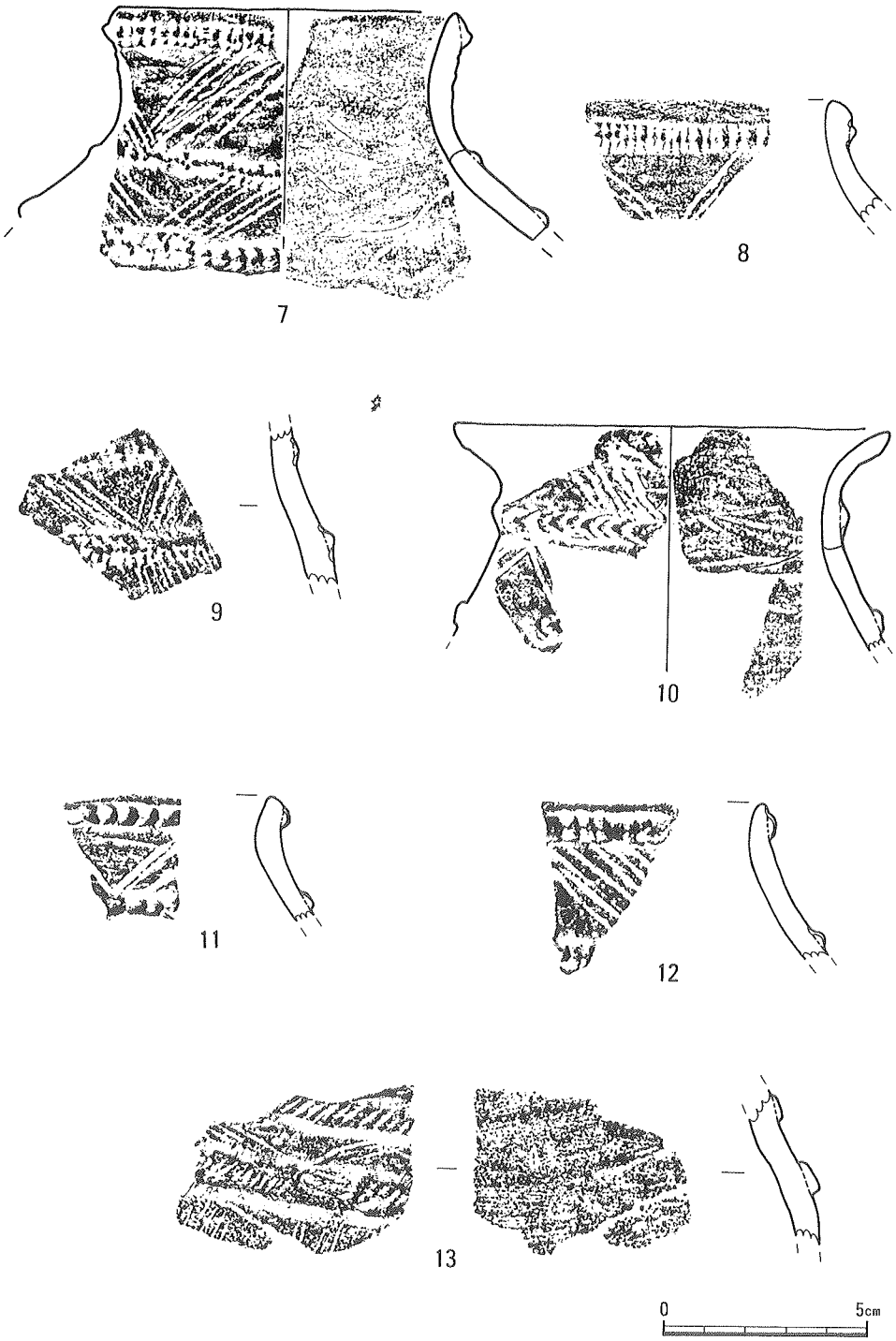


図57　壺形土器

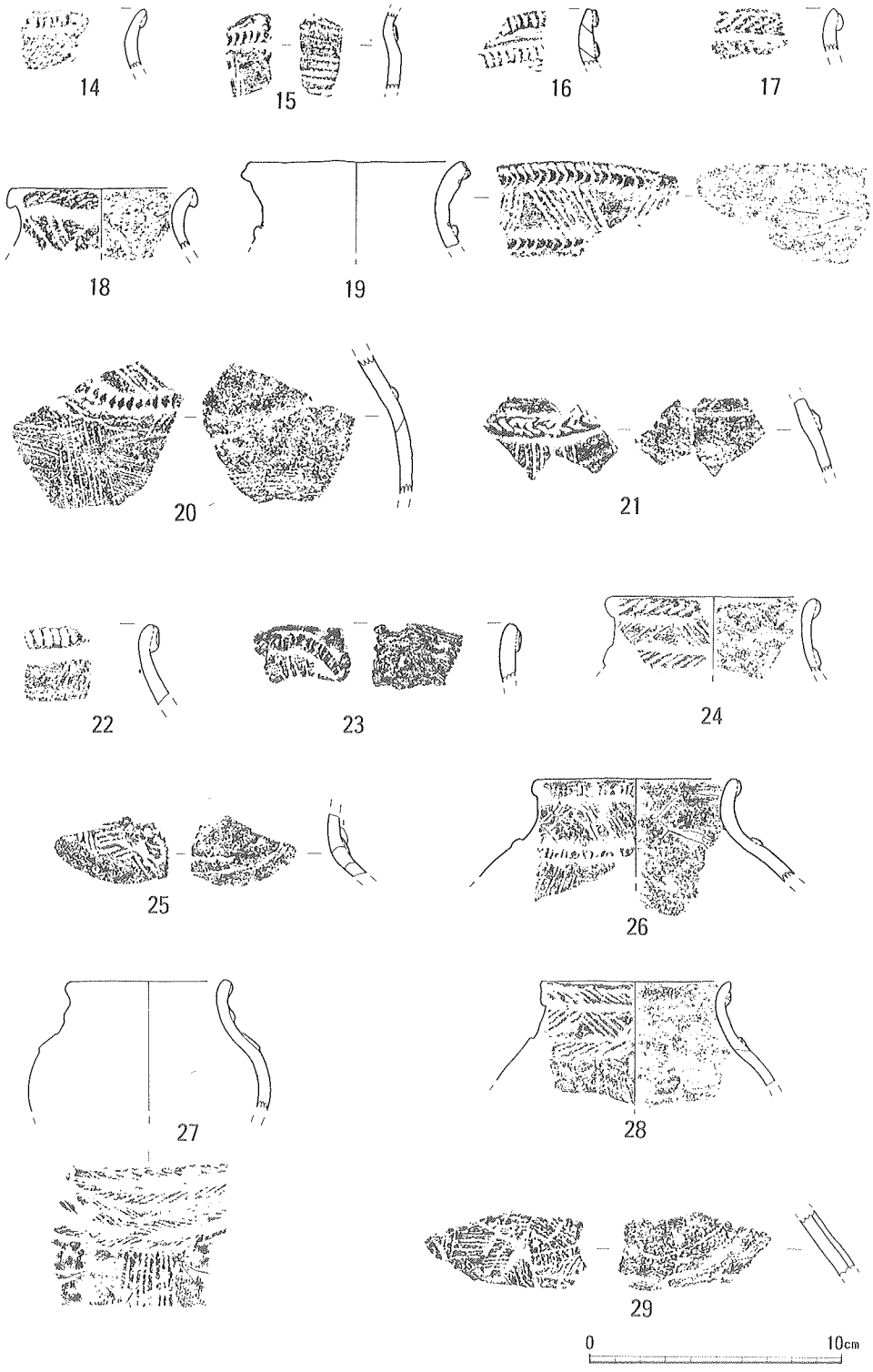


図58　壺形土器

図59　壺形土器

・深鉢形

本土器の主体を占める土器群で得られた資料のほとんどが本器種に属し、一般的な特徴は前述したとおりである。器形は下記の4タイプに分けられる。

Ⅰ：なで肩で口縁部がラッパ状になっているもの

Ⅱ：肩の張りが強く口縁部が外反するもの

Ⅲ：肩の張りが著しく口縁部がすぼまるもの

Ⅳ：肩の張りが弱く口縁部がやや直口ぎみに立ち上がるもの

以下、凸帯上の文様別に簡記するが、器形については記述のみにとどめる。

＜a：弧状文グループ＞

半截竹管状工具により施文された土器群で、図60に特徴的なものを示した。器形はⅡタイプの口縁部をやや外反させ、肩が張り胴部に最大径を持ち底部へすぼまるものが多い。文様は凸帯間にシャープな鋸歯文を施す例が一般的であるが、稀に38のように縦位沈線で埋めるものも見られる。また、50は凸帯間と胴部を空白にするもので注目される標品である。胎土は雲母・石英・石灰岩の小礫・石灰質砂粒を混入する例が多くみられる。器面調整は表裏ともナデ調整を行うが、裏面において擦痕が消えきらず残るものもある。

ところで、41は赤褐色の土器で具志川島遺跡群の上層の土器と酷似するものである[註8]。文様は凸帯を波状に貼り付け弧文を密に描く。弧文は口唇部にも同様に施文。胴下半は欠損しているが、弧状の沈線を施すものと思われる。また、35は口縁部下約3.5cm外面より2次穿孔（径約4㎜）された有孔土器である。いわゆる補修孔なのか判然としない。

ところで、本型式で見られる有孔土器の殆どが凸帯間に孔を有すが、本例は凸帯下に穿孔し土器容量（機能）との関係からも興味深い資料である。

＜b：叉状刺突文グループ＞

叉状工具により施文された土器群で、凸帯の両脇に凹点が残るものである。また、本型式の代表的な文様でもある。図61に特徴的なものを図示した。器形はⅠタイプの肩部の張りがやや弱くややなで肩のもの（51～59）とⅡタイプの肩の張り強いもの（60～67）の2種がみられた。Ⅱタイプの例が比較的多い。文様は凸帯を2条配しその間に鋸歯文を施す。凸帯下は縦位沈線文を描くものが基本的なパターンである。

56は凸帯を3条巡らし凸帯間に鋸歯文を施文せず凸帯上に用いた叉状刺突文を施す。胴部には縦位沈線文を底部近くまで施すものと思われる。67の例は図上復元を試みた標品で、全体的に赤褐色を呈するが口縁部付近では部分的に黒褐色である。凸帯間は鋸歯文と縦位沈線を組み合わせて施文。胴下半部は約9本の縦位沈線を何組か施すものと思われる。器表面は石灰質砂粒・石灰・チャートなどが露出し手触りはザラザラする。

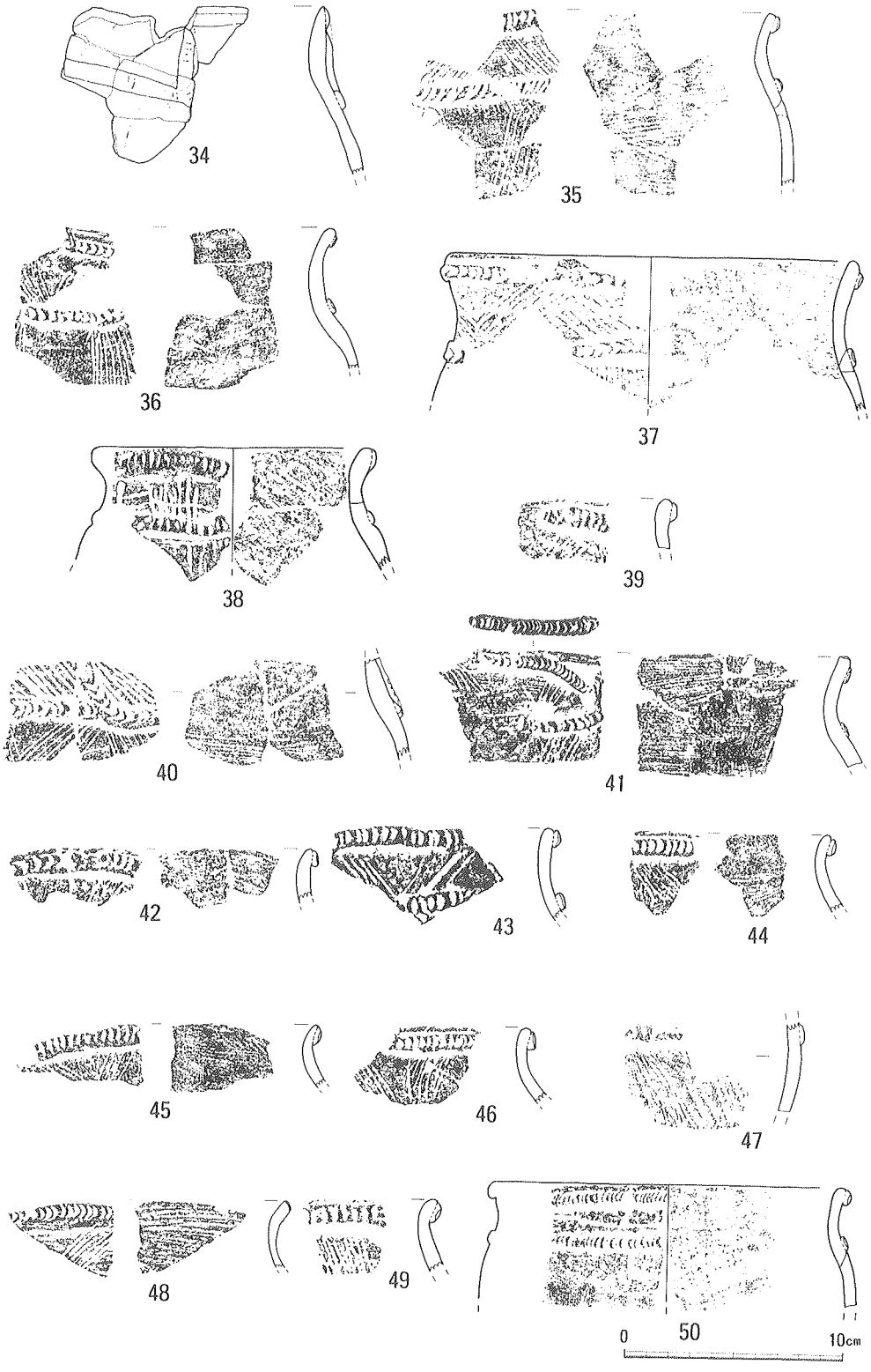


図60　a：弧状文グループ

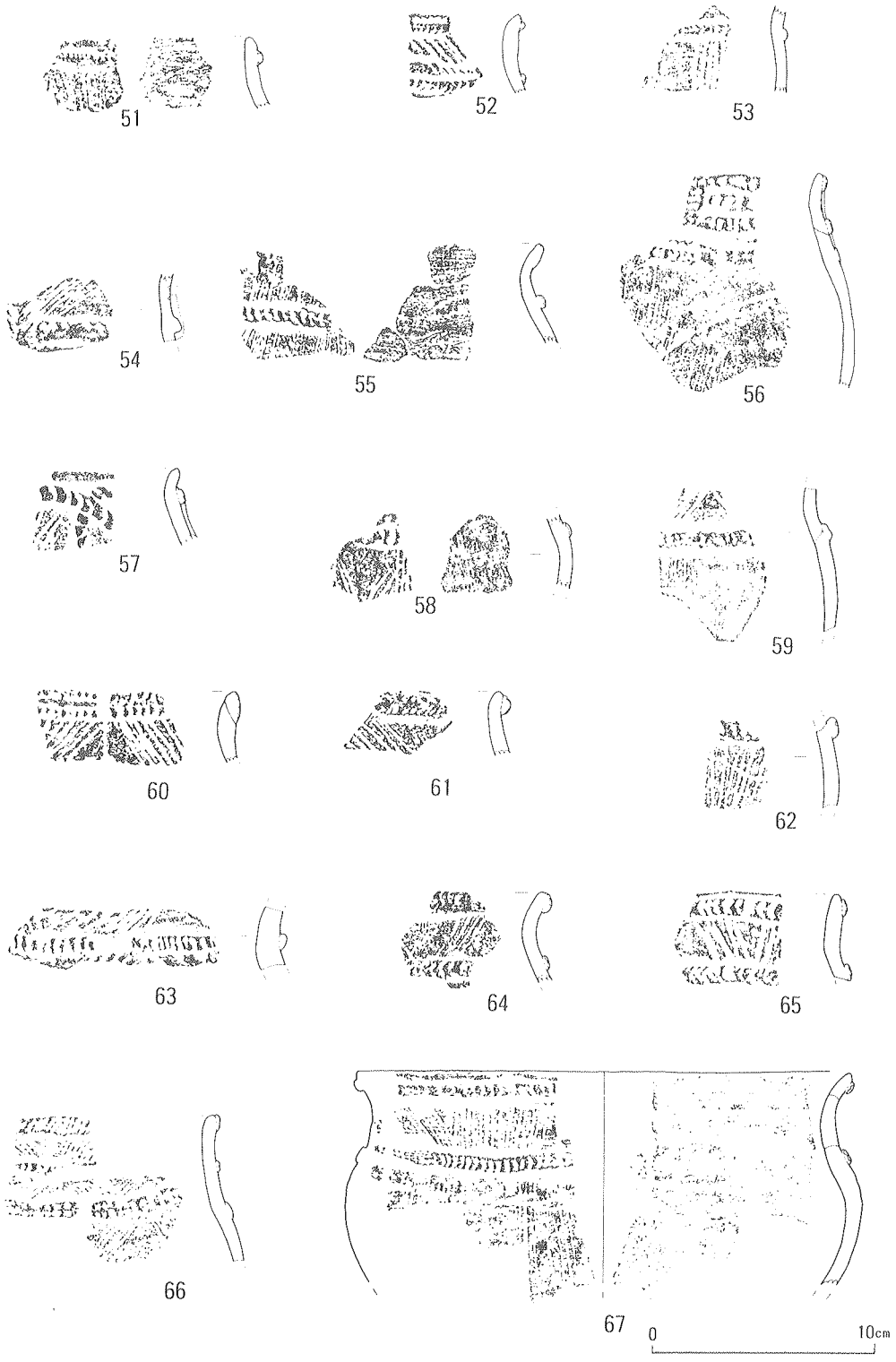


図61　b：叉状刺突文グループ

また、図68の128は胴下半部を欠失して不明であるが、Ⅲタイプの全形を窺える資料である。口径17.5cm、胴径21cmを測りやや肩が張り口縁部を内湾させる器形である。文様は1本の凸帯を口縁部と頸部に沿って巡らすが、一箇所でコの字形に対に設けている。その凸帯上に叉状刺突文、凸帯間に鋸歯文その下位に間延びした鋸歯状の沈線を描く。器面はナデ調整を施すが、裏面はナデが徹底せず擦痕が顕著にのこる。

＜c：叉状刻目文グループ＞

叉状工具による刻目文をほどこしたもので、図62に特徴的なものを図示した。前述したbの叉状刺突文との違いは施文が凸帯内に納まり個々の文様が太めになっていることが挙げられる。器形は82の図上復元した資料からみるとⅢタイプに含まれ肩部に対して口縁部がかなり小さく典型的な例である。

文様構図は2条の凸帯及び凸帯間の鋸歯文さらに胴部に沈線という基本的なパターンの域をでないが、69の例は扁平な凸帯を弧状にカーブさせ貼り付けている。凸帯と口唇に叉状刻目文を施す。また、72は他の土器と比較して口縁部のそりが弱く凸帯間の鋸歯文も4本と少なく立ちぎみで空白部が目につく。

ところで、拓影で見にくいが施文された個々の文様を詳細に観察してみると叉状工具に又の箇所が浅くなっている例が殆どである。その結果叉状刻目文が完成されるが、当初からの意図的な文様か、それとも使用された結果なのか、今後前記のb・dなどのグループとの関連からも重要な要素を持つグループである。

＜d：ハの字状文グループ＞

叉状工具と箆状工具を用いて「ハ」の字状に施文したもので、図63に特徴的な資料を示した。器形は小破片が多く全体像は不明であるが、82・88の図上復元したものから見ると、前者は口縁部の外反が弱く肩部もあまり張らずややストレートに立ち上がるⅣタイプの器形が想定される。一方、後者は外反が著しく肩部の張る器形と思われる。本型式の基本的な部分である文様構図・胎土・色調・器面調整等には変化は見られない。

ところで、ハの字状の文様は叉状工具（82～88）と箆状工具（89～92）の2種に分けられ施文されている。前者は斜めの方向より刺突してハの字状文を作り、両端の凹点が明瞭に残る。後者は斜位に切る形で文様を作る。施文技法の違いが窺える。92の例は凸帯間に鋸歯文でなく数条の斜沈線を羽状文的に何組か施文されている。

＜e：斜位の刻目文＞

箆状工具により施文されたもので、図64に典型的な標品を図示した。本遺跡で主体をなすグループである。斜位の刻目文は拓影でも観察されるように、その殆どが凸帯を深く切り縄目状

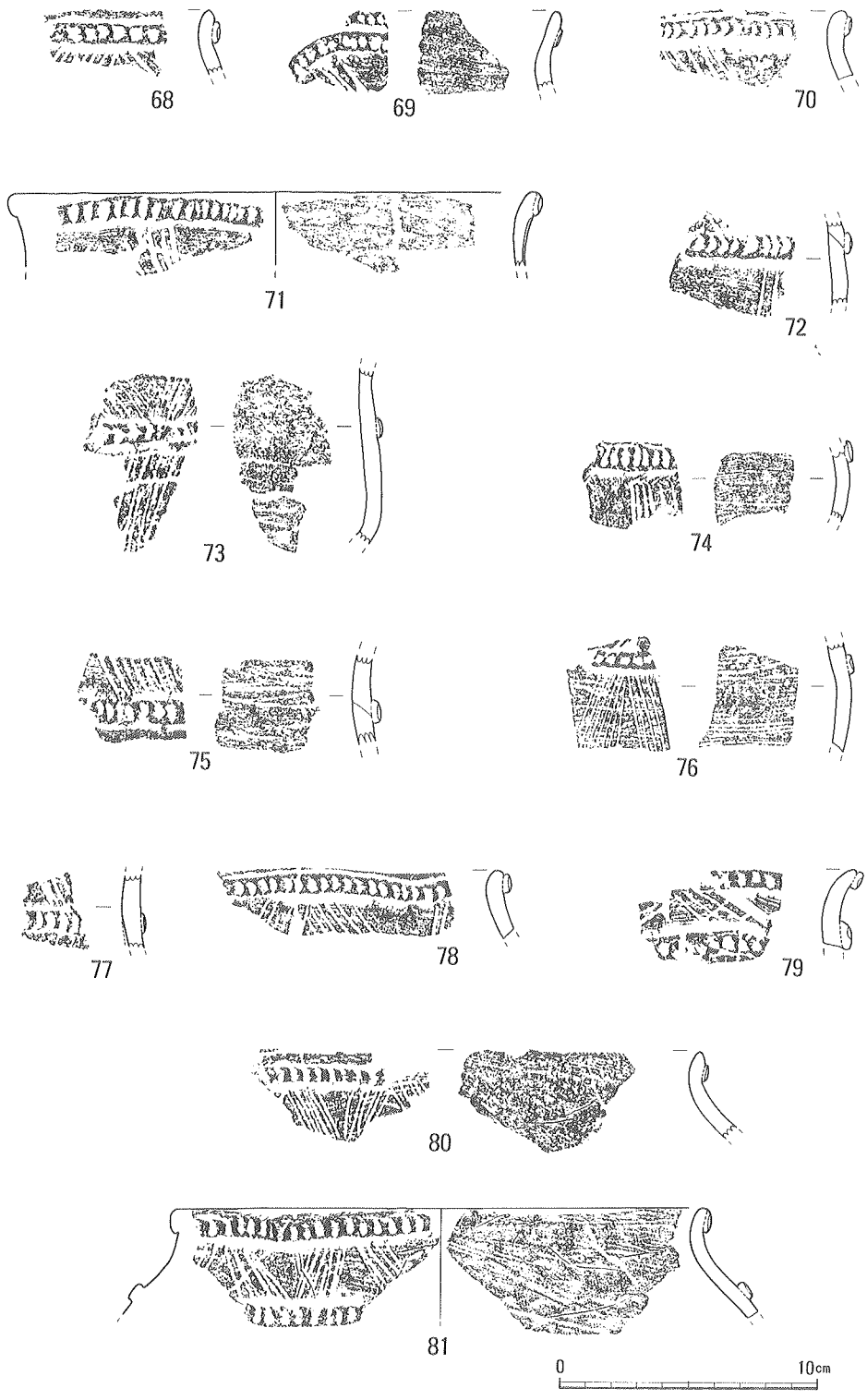


図62　c：叉状刻目文グループ

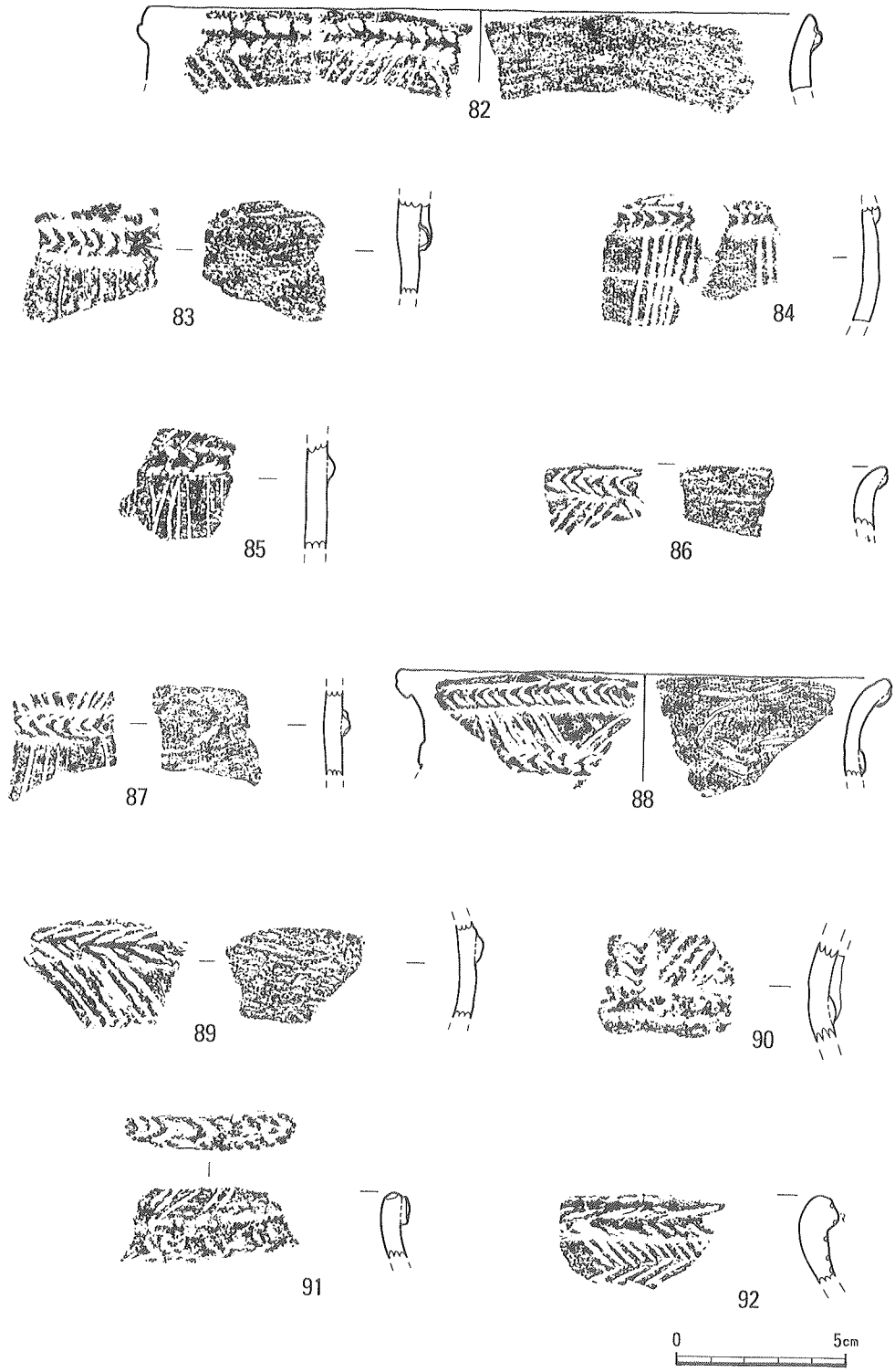


図63　d：ハの字状文グループ

に施されている。器形はⅠタイプのなで肩を有するもの（126）、Ⅱタイプの肩部が張るもの（127）、Ⅳタイプの肩部の張りが弱いもの（129）の3種みられた。

Ⅰタイプの例は126のみで頸部から口縁部にかけてややなだらかに立ち上がるもので、やや他の器形と趣を異にする。文様は扁平の凸帯を波状に貼り付け凸帯間が間延びした感を受ける。凸帯上は縄目状に斜位に刻目文を施す。127はⅡタイプの例で口縁部が外反し肩部の張る器形である。本型式のポピュラーな器形でもある。文様は凸帯を2条巡らし鋸歯文で埋める基本的なパターンである。その他の特徴もほぼ同じである。

117は復元を試みた資料で凸帯を3条巡らし、その間に鋸歯文を施し胴下半部には縦位沈線文を底部付近まで描く。ナデ調整であるが裏面は擦痕が顕著に見られる。また、124は口縁部から底部まで接合でき口径29.6cm、胴径27.6cm、器高29.3cmを知りえた好資料である。器形は口縁部でやや外反し肩部の張りの弱いⅣタイプである。上記の資料は本型式の中では勿論南島全域でもかなり大型の土器である。

105は凸帯上に斜位に2本刻目文が凸帯の脇に圧するように施文。凸帯間には6本の沈線を組み合わせ羽状文的な文様を施している。器面はナデが徹底して滑らかである。

ところで、本グループの土器は大きさにバリエーションを持つが、器形・文様構図・胎土等に規制されないことが知りえたことは成果である。

＜ｆ：縦位の刻目文グループ＞

ｅグループと同様に篦状工具を用いて縦に施文。本遺跡においては数少ない土器群である。図69に特徴的な例を示した。器形はⅣタイプが多く134の図上復元を試みた資料は口縁部と肩部の位置がほぼ平行で典型的な例である。また、口唇部付近は下位の凸帯付近と比べてやや厚手に成形される特徴を有している。

文様構図は基本的なパターンである凸帯間の鋸歯文を施文せず、縦位沈線を約6本施す。さらに、胴下半部にも縦位沈線が底部付近まで施される。その際、凸帯間の縦位沈線の直下より施文される。凸帯は幅広く扁平な作りである。刻目文はその凸帯を切る形で施されている。その他は、基本的には変わらないが裏面に擦痕を顕著に残す。

ところで、本グループは縦位に刻目文を施すが、134の例は中途より斜位の刻目文に変わっており、前記のｅグループとの関係を考える上で重要な標品である。資料の増加に伴ないｅ・ｆが一括して取り扱われる可能性も大である。今回は取りあえず別個に分類したが、今後の資料の増加を待ち検討したい。

＜ｇ：貝殻文グループ＞

2枚貝の周辺部を施文具として用いた土器群である。図70に特徴的なものを図示した。色調は茶褐色系で薄手（約5㎜）の土器である。凸帯上の文様は、その使用部位によって腹縁部の

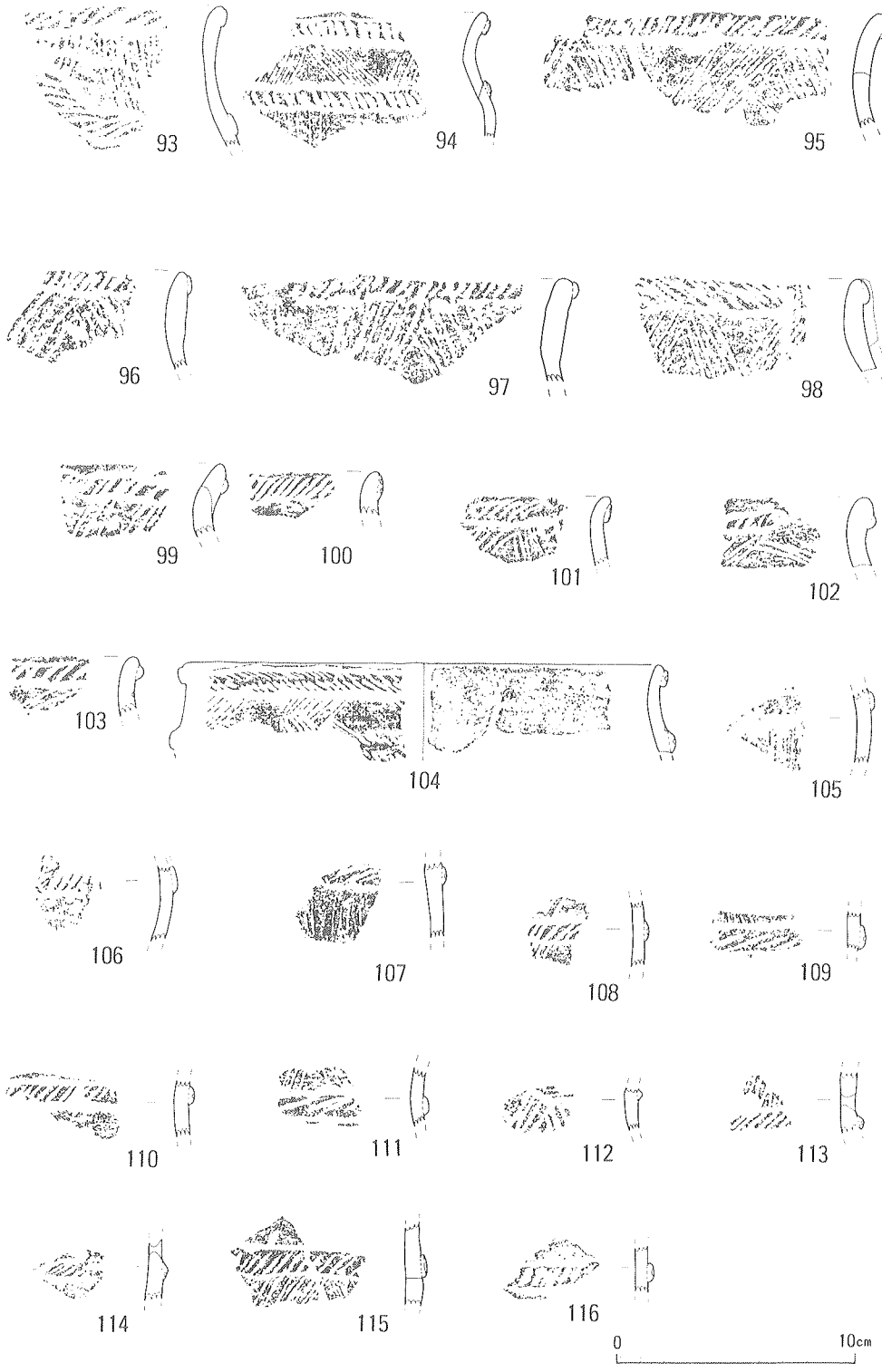
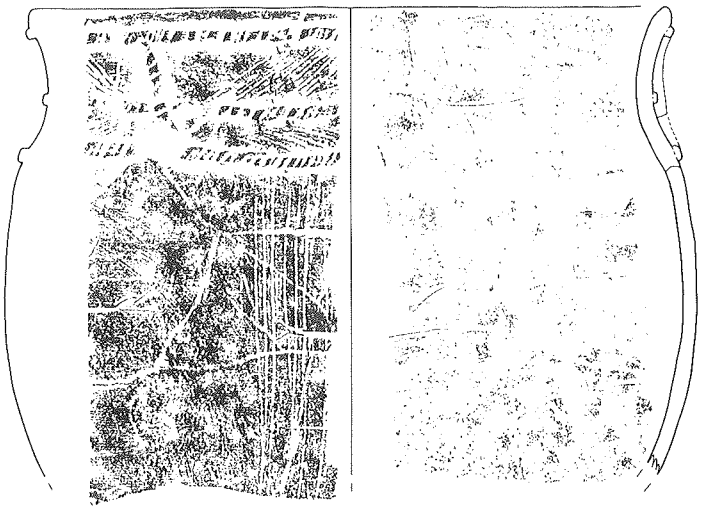
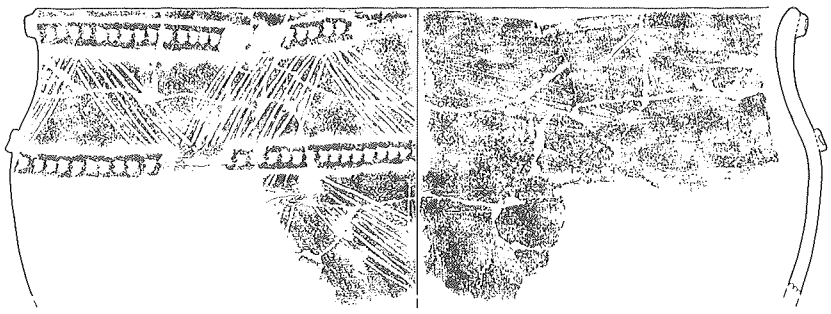


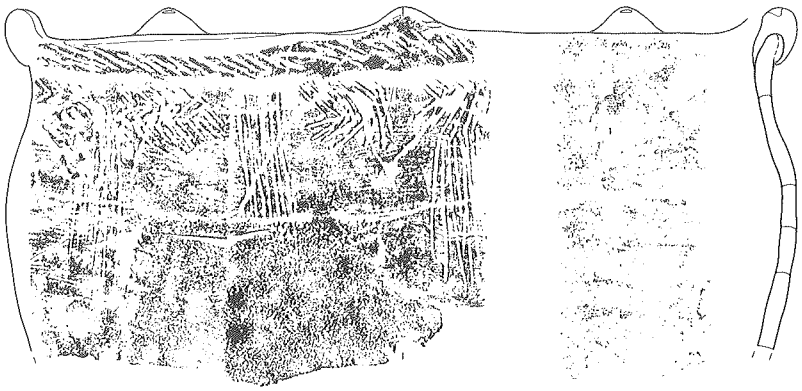
図64　e：斜位の刻目文グループ



117



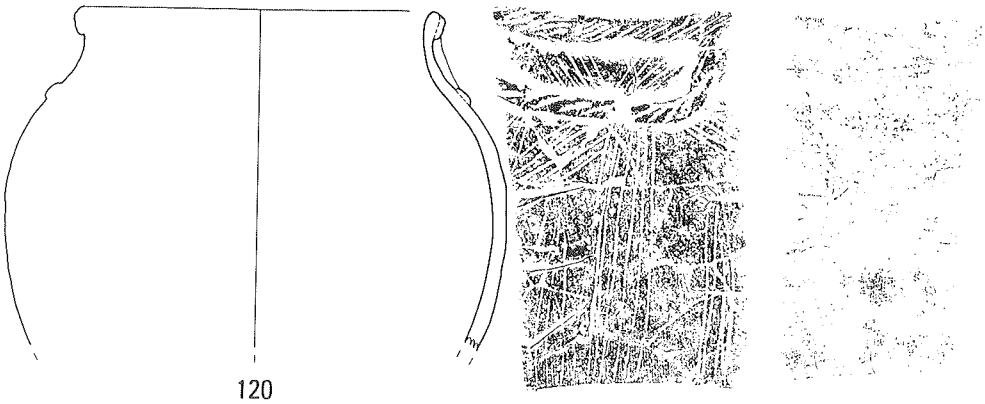
118

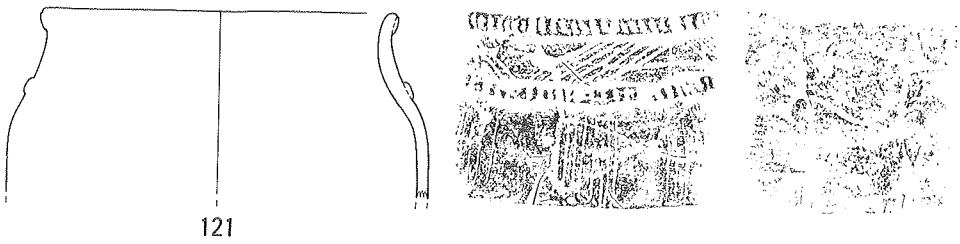


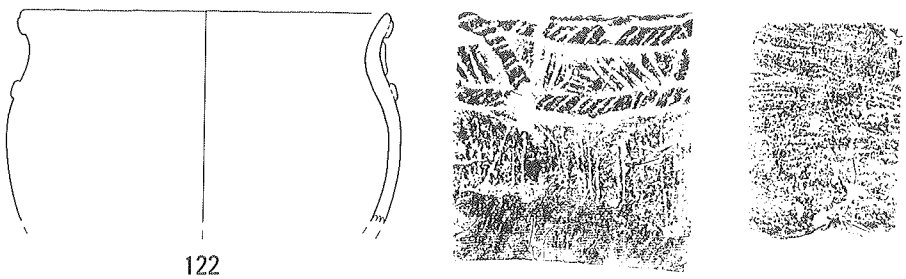
119

0 10cm

図65　e：斜位の刻目文(117)　h、横擦刻文(118)　B、仲泊式の要素の多いもの(119)







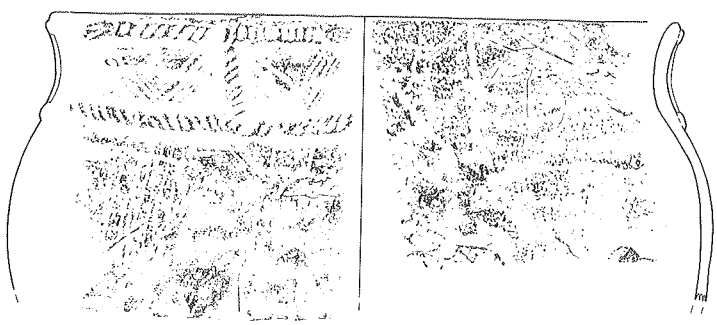


図66　c：叉状刻目文(121)　e：斜位の刻目文(120、122、123)

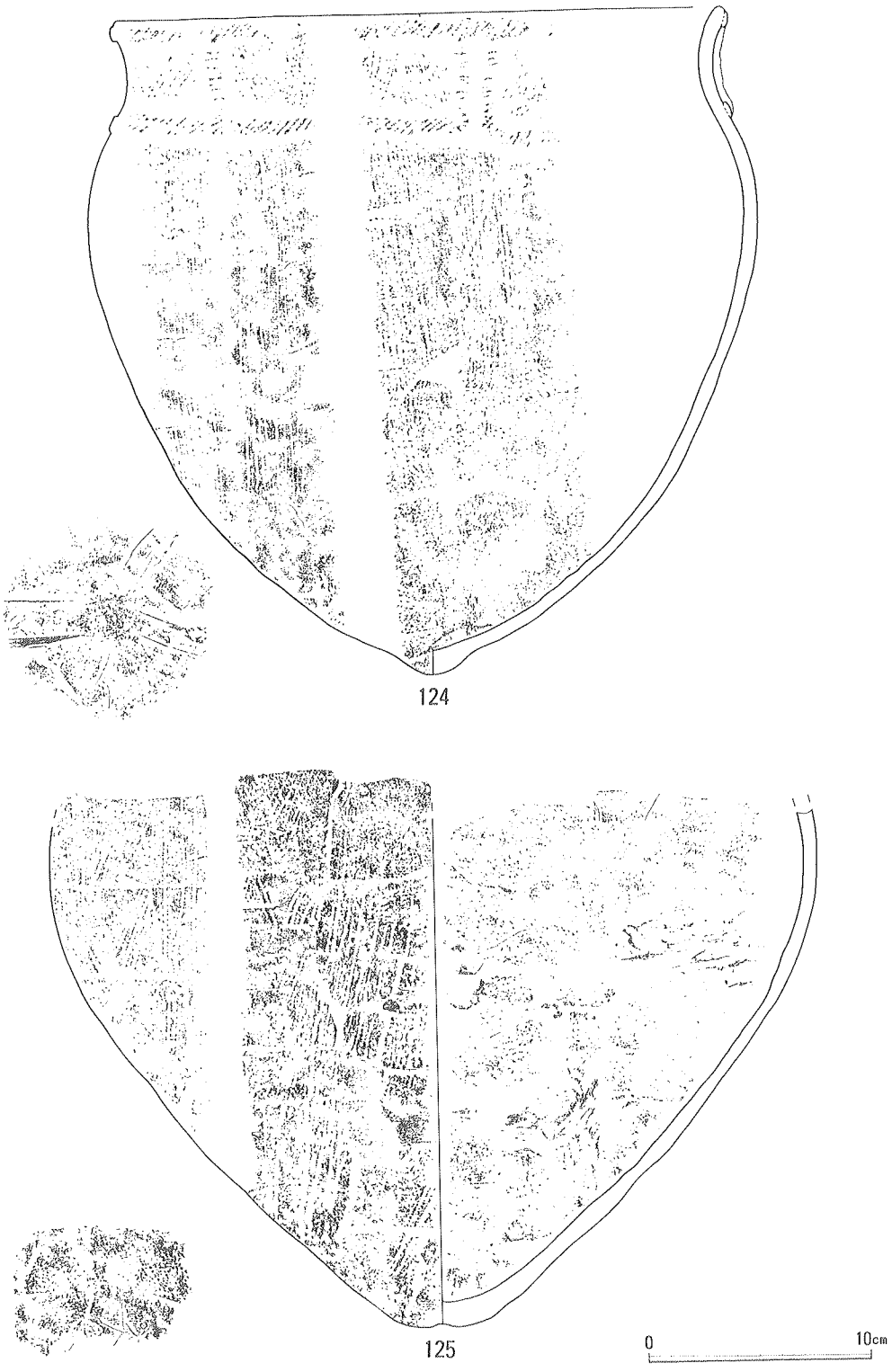


図67　e：斜位の刻目文グループ(124)　底部資料(125)

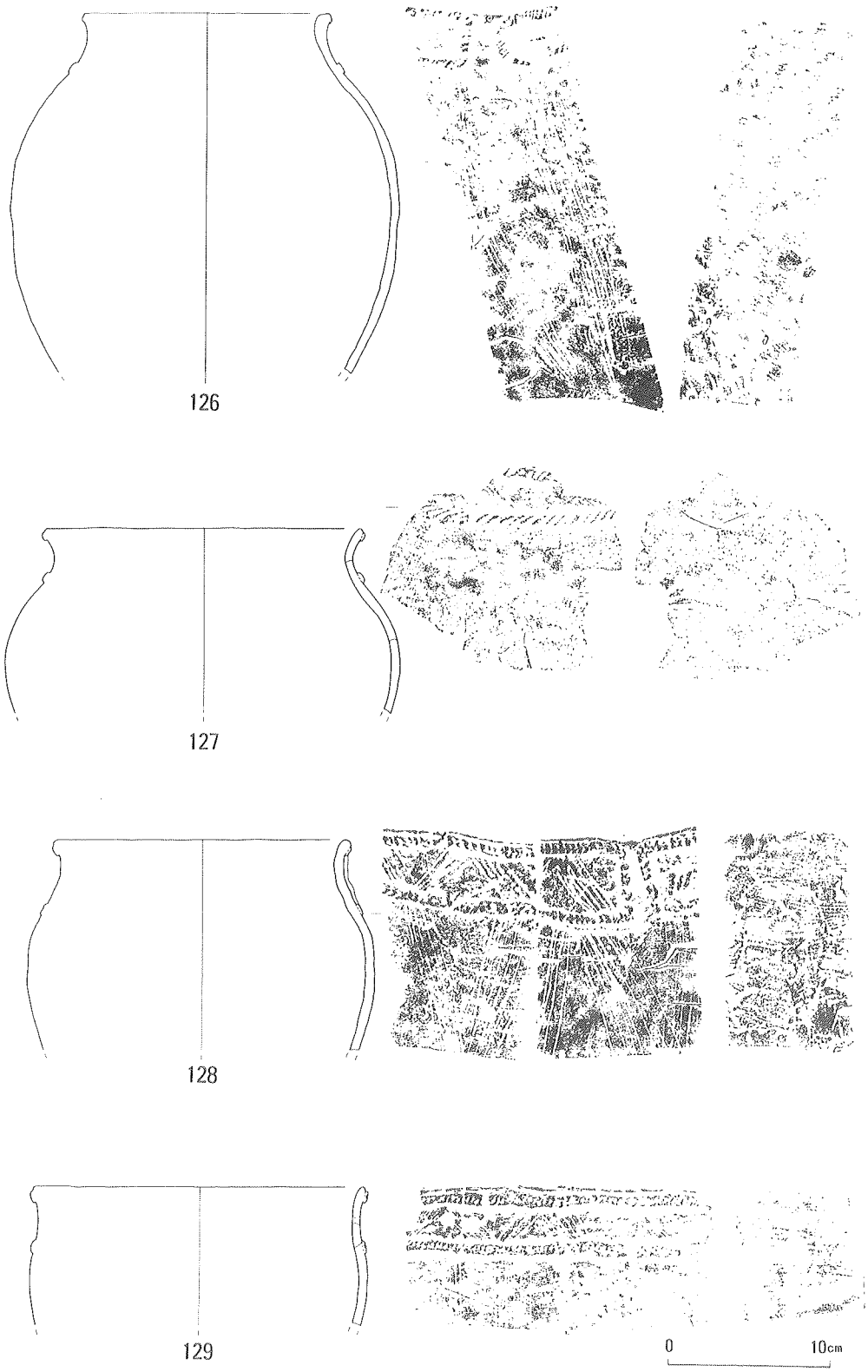


図68　b：叉状刺突文グループ(128)　e：斜位の刻目文グループ(126、127129)

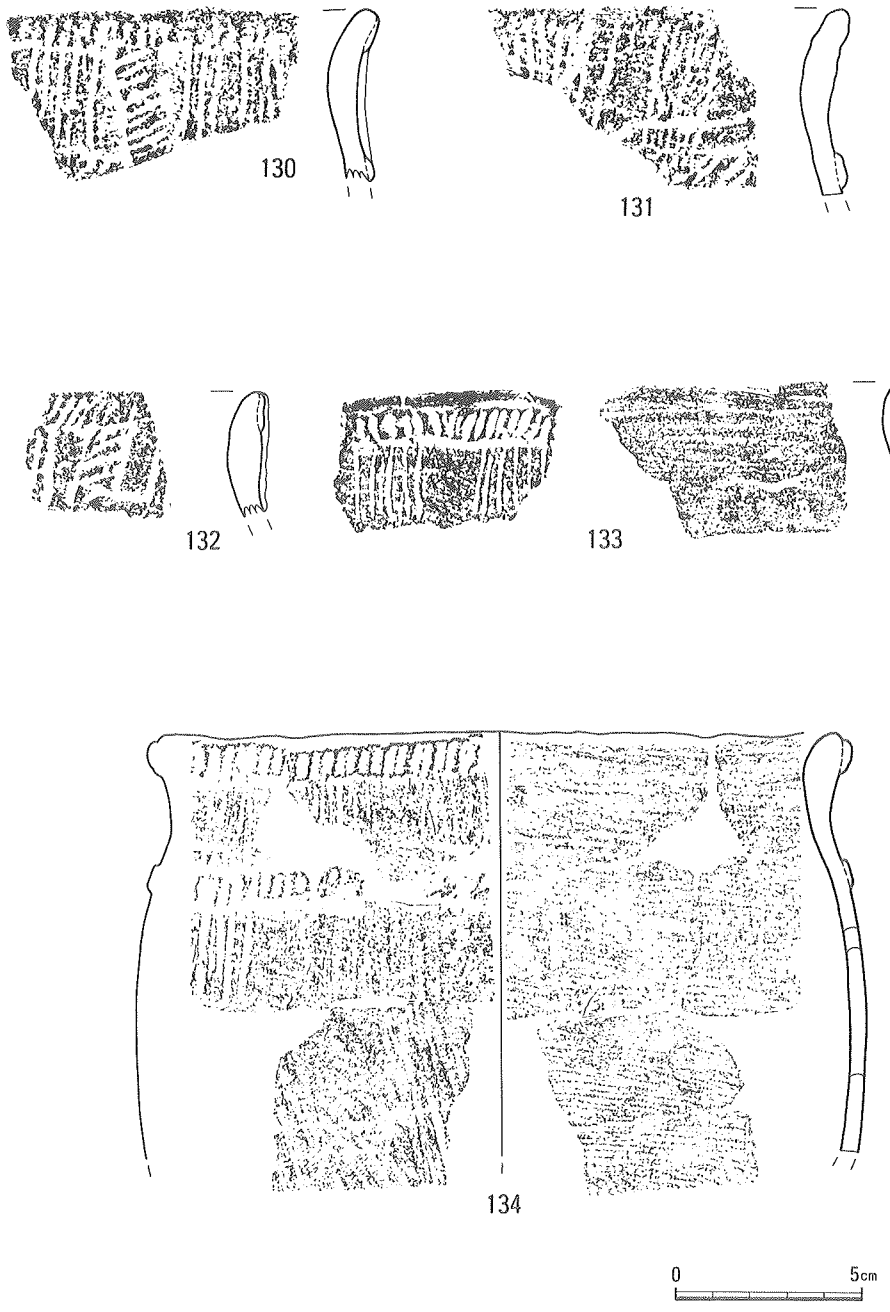


図69　f：縦位の刻目文グループ

もの（135～142）と後背部のもの（143～153）の2種に分けられる。器形は図上復元を試みた資料より推測すると、口縁部でやや外反し肩部が若干張るⅣタイプの器形が想定される。文様は凸帯を厚ぼったく成形し口頸部に2条巡らし、凸帯間は鋸歯文か無文である。胴下半部は約5本の沈線が観察される。基本的には本型式の構図に収まる。胎土には石英・チャート・石灰質砂粒・石灰岩の小礫を含む。雲母の混入は見られない。器面はナデ調整であるが、裏面はナデが徹底せず擦痕が顕著に見られる。

ところで、本土器は仲泊式との関連性を考える上でも注目される標品である。

＜h：横擦刻文グループ＞

篦状工具を用いて方形状に施文したもので、図71に典型的な例を図示した。色調の殆どは赤褐色を呈し、裏面に擦痕が顕著にみられる。さらに、胎土には雲母の混入は見られない。本型式の中で新たな土器群と思われる。器種は深鉢形は見られなかった。器形はⅣタイプが比較的に多く得られた。図169に示した図上復元土器は好例である。

文様構図はその他のグループの土器と変わらず凸帯を口頸部に2条巡らし、その間に数条の沈線で鋸歯文を描く。その下位の凸帯下には縦位沈線を何組か施す。また、凸帯間の幅の狭い例（155）も得られている。本例は3条の可能性を有している。器壁は他のグループと比べて比較的厚手に形成されている。器面はナデ調整であるが、裏面は徹底せず擦痕が顕著である。

特殊土器

ここで特殊土器として扱うのは、巨視的には面縄前庭式の範疇に含まれるもので、把手や瘤などを有するものである。以下、略記する。

173・174は同一個体の標品で、口縁部ですぼまり肩部の張る器形である。文様は凸帯を口頸部に2条巡らすが、コの字状に対になる箇所もある。その間に鋸歯文を施文。凸帯上は叉状刺突文を施す。胴下半部には縦位沈線文を鋸歯状に施すが欠損しているため全体の構図は判然としない。把手は上下の凸帯をつなぐかたちで貼り付けられ、叉状刺突文が施されている。

175～178の標品は同一個体で、口縁部を欠失した土器である。器形は現状から推察すると胴部のはるボール状の器形になるものと思われる。文様は凸帯と斜沈線を組み合わせている。凸帯は1条頸部に施され凸帯上には斜位の沈線を施文。口縁部が欠失しているため判然としないが僅かに沈線が4条観察され、鋸歯文になるものと思われる。凸帯下は無文である。本土器の把手は前述した例と比べて粘土帯を2本貼り合わせ力強く成形されている。その下位に瘤を設け頂部には叉状工具による刺突文が施されている。現行では4つの把手が確認されており、少なくとも4カ所あるものと思われる。

179～185も瘤を有する例であるが、179～182は小破片のため器形など判然としない。183～185は同一個体である。瘤の両サイド頸部に短沈線を交互に施し、羽状文的に施文されている。色調は明茶褐色で雲母が多量に混入されている。186・187の例は横位に把手を付したもので後

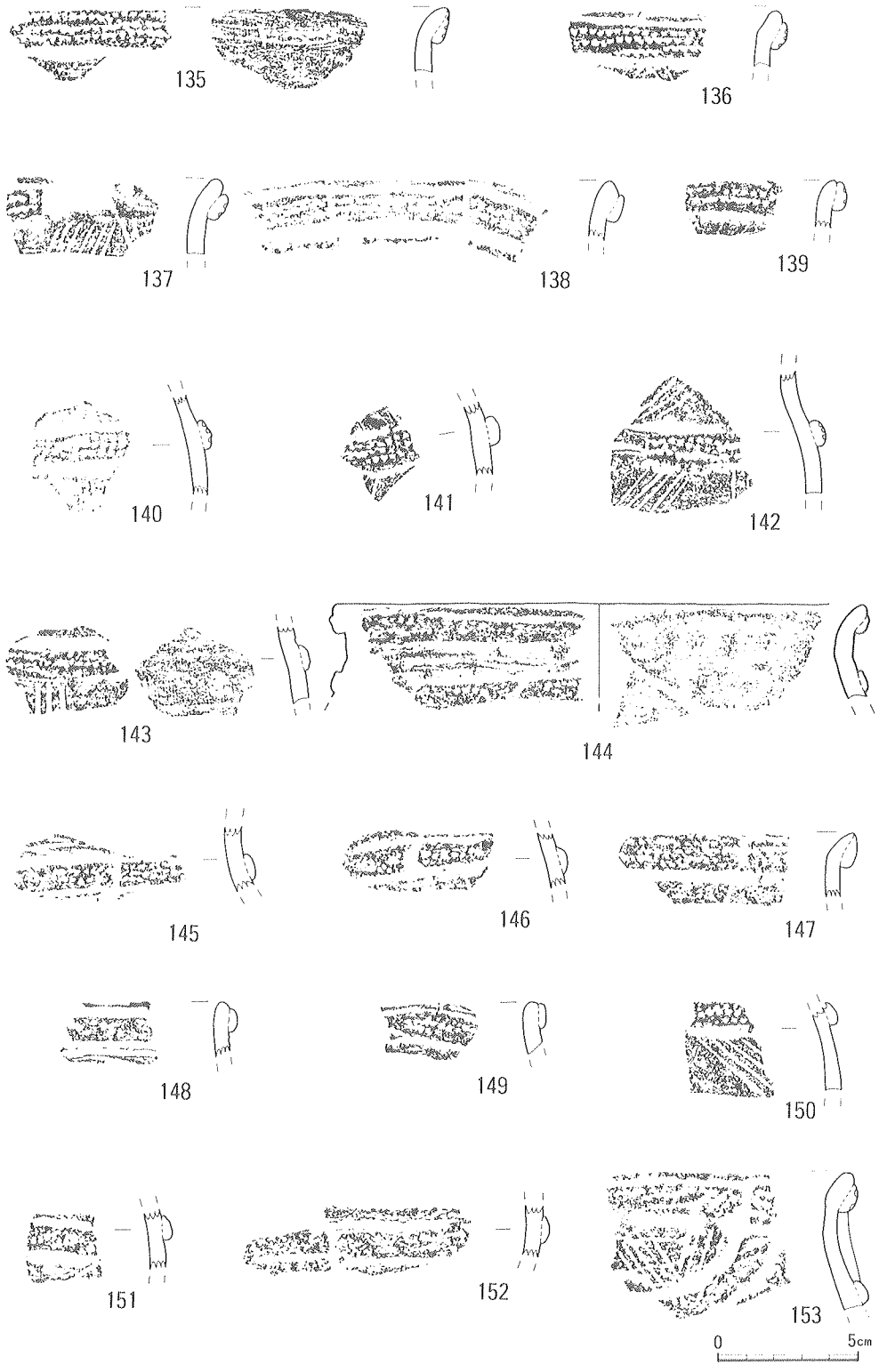


図70　g：貝殻文グループ

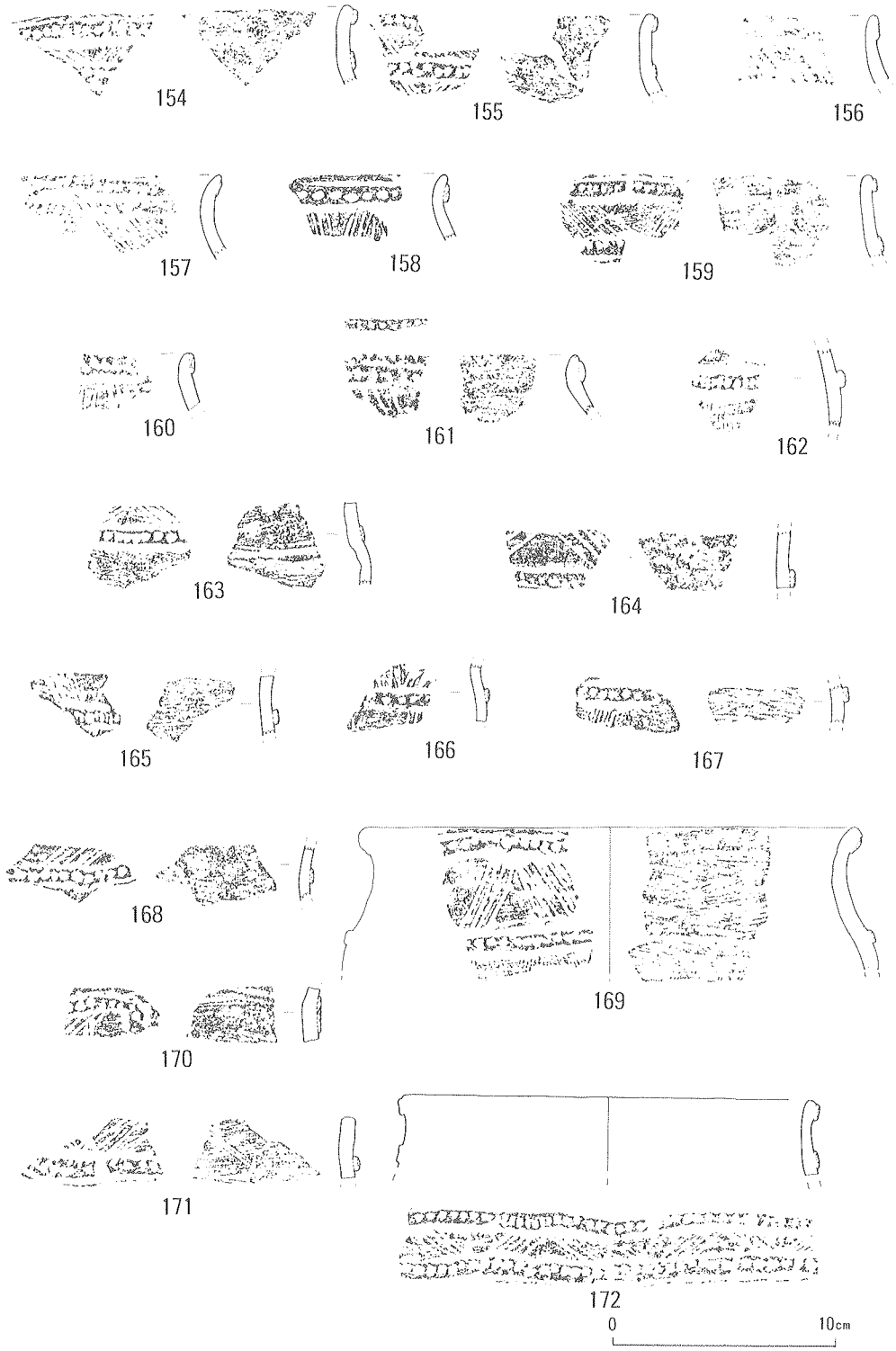


図71　h：横撫刻文グループ

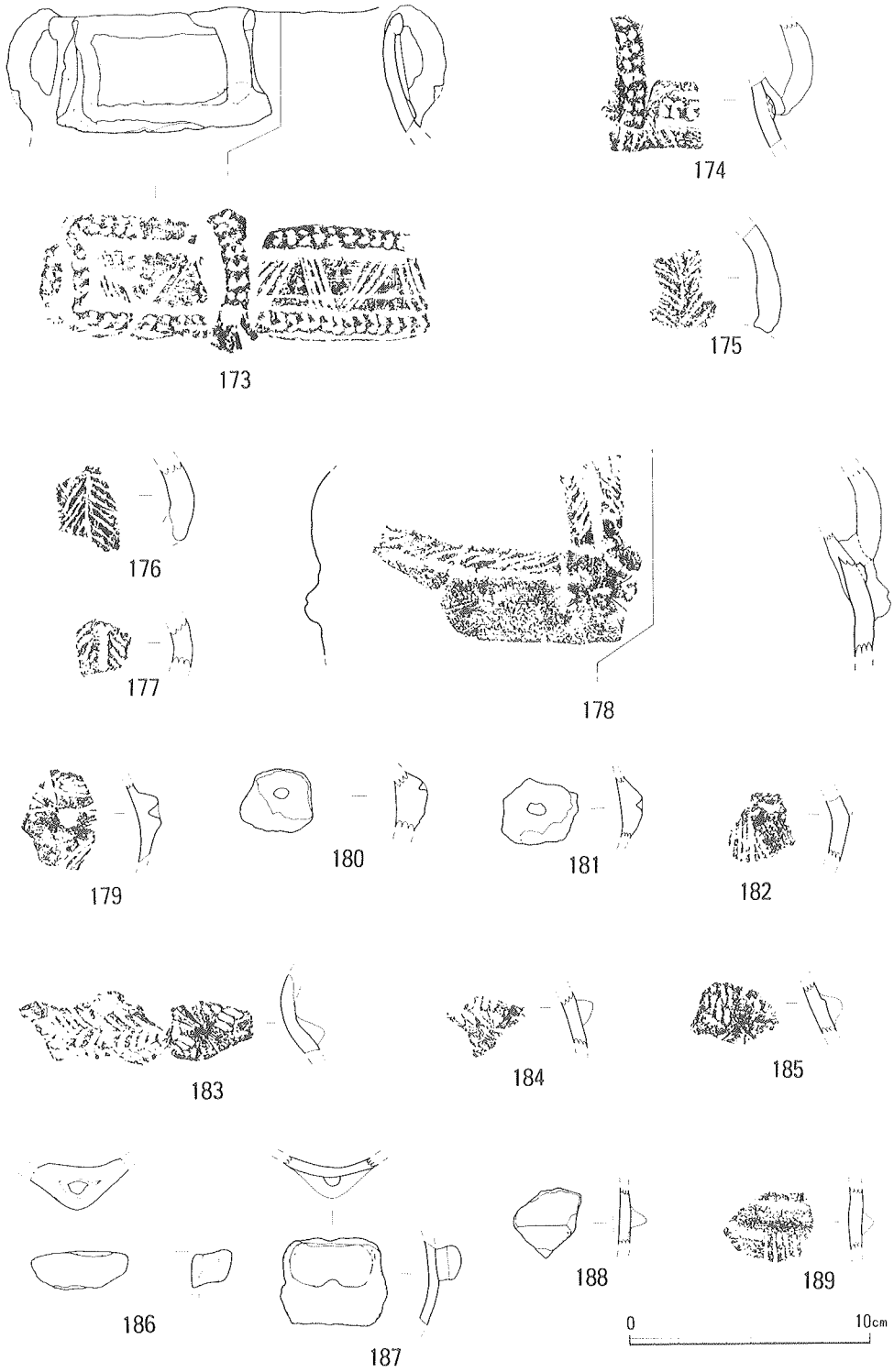

173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
0
10cm

図72　特殊土器

者の例は周辺に縦位沈線が鋸歯状に見られる。小破片のため器形などについては不明。188・189の例は頸部の凸帯が、本型式の一般的な凸帯と趣を異にし断面三角形の鍔状の凸帯を弧状に貼り付けている。その凸帯下に縦位沈線が数条施されている。小破片のため器形・文様構図などの詳細は不明。

表13　文様別出土状況

分類／層	a	b	c	d	e	f	g	h	i	計
Ⅰ				1	2			1	1	5
Ⅱ	1		4	3	3	3			4	18
Ⅲ	4	1	6	4	3	4		5	2	29
Ⅳ	2		1	3				1	2	9
Ⅴ							1	1	1	3
Ⅵa	2	3	5	3	7	4	4	4	4	36
Ⅵb	27	17	24	22	40	14	10	20	8	182
Ⅶa	2		2	1	1				1	7
Ⅶb	27		20	12	47	21	2	6	11	155
不明	7	4	6	12	24	10		4	6	73
計	72	34	68	61	127	56	17	42	40	517

② 仲泊式

本土器は仲泊第4貝塚出土の土器を標式とする[註6]。器種は胴部の張る深鉢形が一般的で稀に壺形もある。文様は口縁部の肥厚帯に貝殻文や沈線文、さらに胴部に沈線文を施す。その文様の要素によって、貝殻文をAタイプ、沈線文をBタイプの2種に細分されている。本地区においては、表8に示すとおり量的には少ないが両タイプが得られている。図示したものについてのグリッド・出土層位・器色・胎土・混入物・法量等は表15に示した。以下、タイプ別に記述する。

・仲泊A式

図73に示したもので、すべて深鉢形である。全形を窺える資料は得られていないが、図上復元を試みた200から推すと口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり肩部の張る器形と思われる。口唇部には凸起を作り、単独なもの（191～194・197～200）と双頭なもの（190）がある。その他の例は小破片のため不明であるが、凸起を有する可能性は十分にある。

また、凸起を口唇部にいくつ配するか他の遺跡の例を参考にすると3個ないし4個の例がみられ本遺跡の資料もこの範囲におさまるものと考える。

ところで、文様は肥厚帯に貝殻文、頸部にシャープな斜沈線を羽状的に施文する。貝殻文は二枚貝の周辺部を押圧するが、後背部を用いたもの（190～200）と腹縁部を用いたもの（201～204）の2種に分けらける。本タイプは前者が一般的で後者は稀である。ただ、施文具である貝殻が同一の貝を用いたのか、それとも異なる種なのか今後の課題である。

さらに、貝種の判定も急務である。

・仲泊B式

図74に示したもので、斜沈線のみに終始するもので、壺形は得られてなくすべて深鉢形である。全形を知りえる資料は得られていないが、仲泊A式とほぼ同様に内湾ぎみに立ち上がる器形と思われる。口縁部には肥厚帯を形成するもの（208～213・218）と形成しないもの（215）とに分けられる。また、肥厚帯は単独で成形するもの（208～210・212・213）と凸帯を2本重ね階段状に成形（207・211・218）するものがある。凸起を有するものが（205・206・218）の3例得られているが、本型式の特徴である凸起頂部の凹点は施されていない。

文様は口唇部～胴下半部が施文範囲であるが、その殆どが口唇部に描かれてなく口縁部から胴下半部が対象となっている。208は口唇部に施文する唯一の例で、短沈線（長さ2.5cm）が口縁部に沿って施されている。また、他の遺跡のものは口唇部文様は斜沈線や刻文等が一般的で、本資料は注目される資料である。文様はやや厚手の箆状工具で力強くシャープな斜沈線を交互に繰り返し羽状文的に施文している。217の胴部文様は前記の羽状的な文様が簡略化されて描かれたものと思われる。

③ その他の資料

ここで一括して取り扱うものは、面縄前庭式・仲泊式の両型式のどちらの要素（文様・器形）も持ち合わせた土器群である。両者の系統的なつながりや同時性を考える上で注意される資料である。分類に際しては、両型式の要素の多寡によって面縄前庭式に近似したものを「A」、仲泊式に近似したものを「B」の2タイプに分ける。以下、略記する。

A：面縄前庭式の要素が多いもの

図75に示したもので、面縄前庭式の要素を多く含んだものである。壺・深鉢形の2種みられた。後者が多く得られ前者は1例のみである。以下、壺形より記述する。

・壺形

図56の6に示したもので、胴下部は欠損しているが口縁部の全形を知りえる資料である。文様は頸部に耳状の凸起を2個設け、それを通すように微弱な凸帯を貼り付けている。その頂部にはシャープな深い沈線を施す。その間を数条の弧状の短沈線を浅く施文する。器面は丁寧にナデ仕上げを施している。

本標品は面縄前庭式の基本的文様パターンとは異なるが、本型式の壺形と近似しており、さらに胎土や凸帯を貼り付ける技法が類似しているため取り敢えず本項で扱うことにした。

・深鉢形

図75に示したものである。口唇部を山形に成形し、その形状より口唇部に縦位凸帯が突出したもの（219～221・223）と凸起を有するもの（233～236）に分けられる。前者に属す219～221は現状では凸帯を口唇部に1条巡らしているが、面縄前庭式の例からすると下位にも凸帯があるものと思われる。凸帯上には、220が貝殻文、219が斜位の短沈線、221は文様は施されてない。223は凸帯間を空白、斜位沈線を施文。

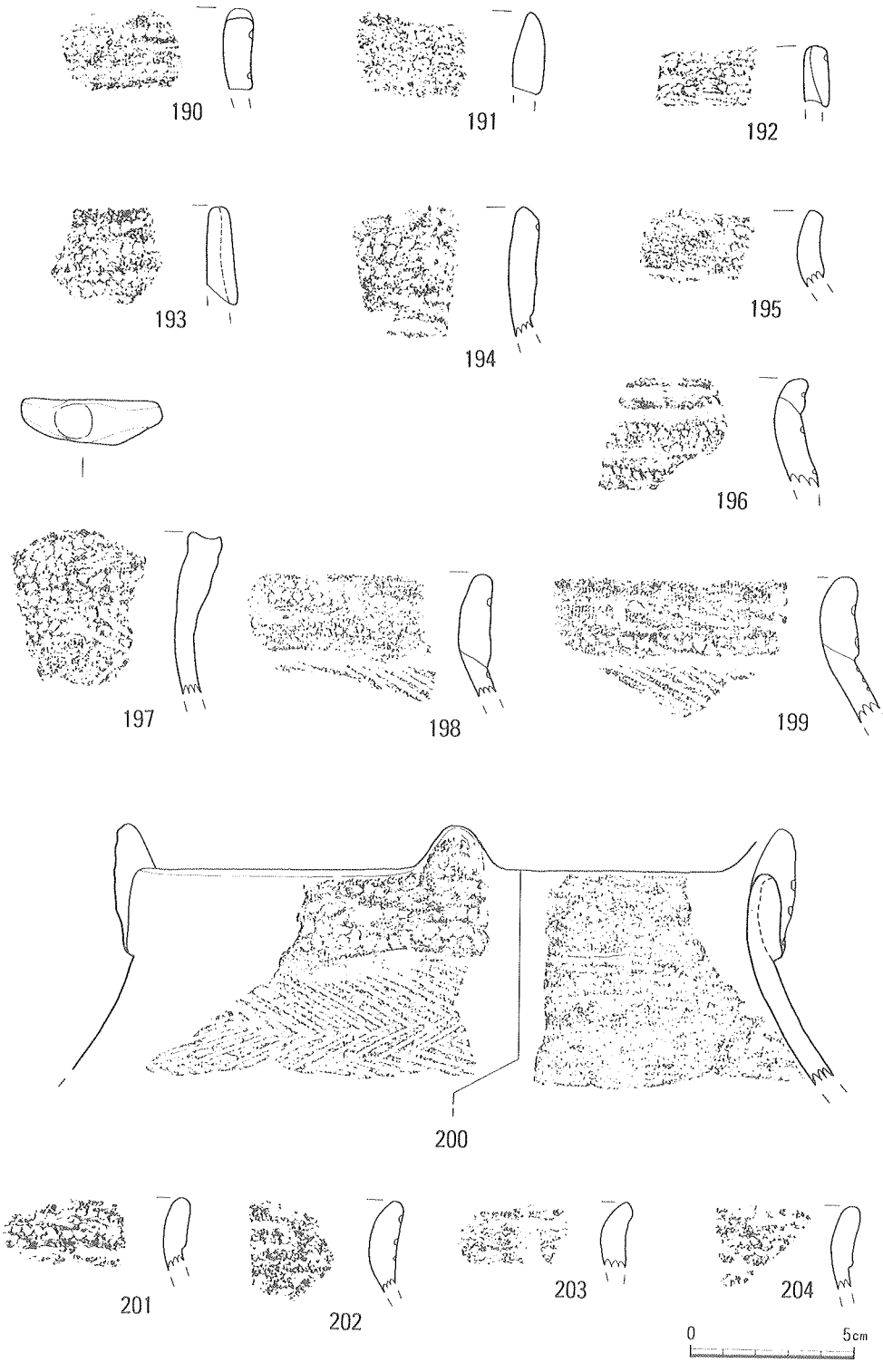


図73　仲泊Ａ式

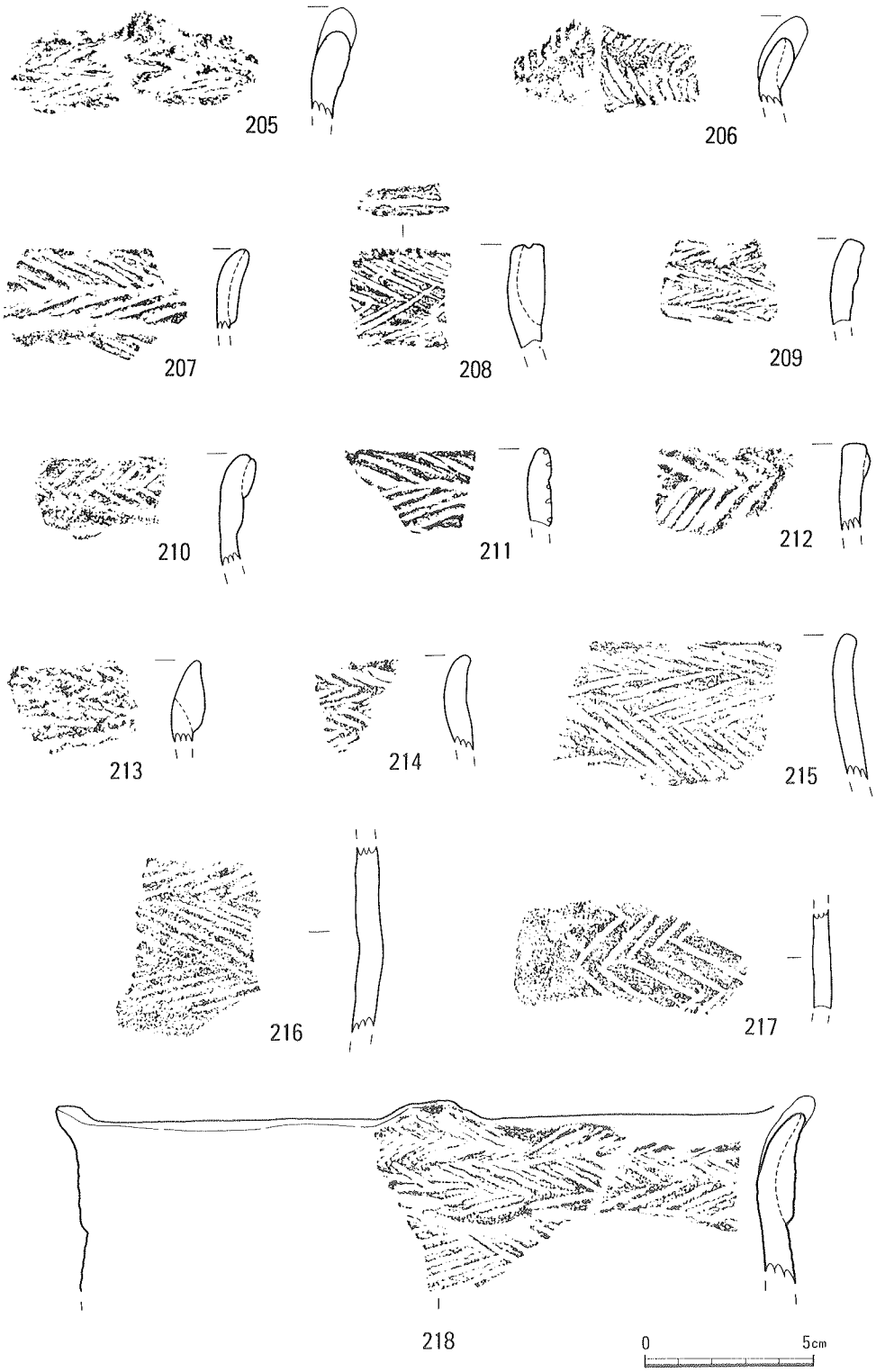


図74　仲泊B式

後者に含まれる222・225～227は文様の施文範囲が口唇部～胴下半部を対象にしている。222は凸帯に面縄前庭式の文様の特徴である叉状刺突文を施文。凸帯下に斜位の沈線が観察できる。ところで、凸起の頂部には仲泊式の特徴である凹点様の刺突文が施文されている。

225・226の例は比較的大型の破片で赤褐色の土器である。頸部を極端に屈曲させ外反のきつい口縁部を有する標品である。文様は凸帯を頸部から山の頂部に向かって合わせている。凸帯上には叉状工具による刺突文を施す。口唇部と凸帯の間には押し引き文が見られ、胴下半部は沈線による鋸歯状文・三角文的な文様が施されている。さらに、山の後背には叉状工具による短沈線が施文され、口唇部にも斜位の短沈線が描かれるが。文様の構図には規格性が見られない。

228は興味深い標品である。文様の構図から網篭を想起させるもので、口唇部と一体化した凸帯を巡らし、さらに十字に組み合わせた凸帯を口唇部に貼りつけている。現状では、2ケ所確認されているが、4ケ所に付くものと思われる。凸帯上には斜位の刻目文をシャープに施こし、その下位には幅約4㎜の輪積み痕がみられ沈線文のような感じを受ける。

ところで、247・248の資料は文様の構図が類似したもので、前者は色調・胎土・混入物など面縄前庭式に酷似している。器形はなで肩の胴の張るものと推察できる。文様は凸帯を1条巡らし叉状工具によるハの字状文を施す。頸部には斜位の沈線を交互に描く。さらに、約13本の縦位沈線を何組か垂らす。後者は赤褐色の薄手の土器である。口縁部をやや外反させ肩部の張る器形である。文様は沈線のみで施文されている。凸帯は施されてなく、頸部に2条の沈線を巡らす。口縁部・胴下半部の沈線は前者と比べてシャープさに欠ける。

B：仲泊式の要素が多いもの

図76に示したもので、仲泊式の要素を多く含んだものである。口唇部直下もしくは下位に凸帯とも肥厚帯ともとれる粘土帯を口唇部に沿って1枚巡らす。粘土帯の上には斜位の短沈線・弧状の沈線・羽状文などの文様を施文。胴下半部は欠損して詳細は不明であるが、鋸歯状や羽状的な沈線を施す。色調は仲泊式特有の淡い黄褐色系と茶褐色系の2種みられた。

器形は口縁部が直口ぎみに立ち上がり肩部の張るもの（229・230）と口縁部をやや外反させ肩部の張る（231～237）ものが2個体みられた。前者は仲泊式に良く見られる。後者は面縄前庭式の一般的な器形である。口唇部に凸起を有するものもある（242～244）。特に244は凸起の頂部に凸点が施されている。また、238～240は口唇部に凹線を巡らし注目される資料である。

図65の119は口縁部～胴上部まで復元できた資料である。口縁部をやや外反させ肩部の張りが弱い大型の土器である。口唇部に5カ所に凸起を有し頂部に凹点を施す。口唇部直下に丸み帯びた粘土帯を巡らし斜位の沈線を刻む。同様に口唇部にも施す。全体的にみると羽状的に見える。その下位頸部には長さ約8㎝の縦位沈線が約4本を一組として周辺に何組か施す。さらに、その間を羽状の崩れた文様で埋めてゆくが、本文様と縦位沈線が重なり合い一つの文様になっている箇所もある。全体的に文様のバランスが乱れており規格性が見られない。色調は淡い黄褐色で器面はナデ調整であるが徹底せず擦痕がのこる。

ところで246の例は凸帯を２条巡らし器形・文様構図から巨視的には面縄前庭式の範疇に含まれるものである。凸帯上の弧状の沈線から一応本項に含めた。今後、類例資料の追加を待ち検討したい。

249は山形口縁で内湾器形になるものと思われる。肥厚帯の幅が広く約４㎝を測る。文様は肥厚帯と胴部に施文。肥厚帯には斜沈線を胴部には約７本の縦位沈線を一組として、いくつか施すものと思われる。胴部の文様は面縄前庭式の胴部文様と近似しており注目される標品である。250・251は約1.6㎝の狭い肥厚帯をめぐらしシャープな細沈線を施文。肥厚帯下にも見られるが詳細は不明。薄手の土器である。252は口唇に半截竹管文を施し、口縁部に斜沈線を羽状に施文。小破片のため全体の構図は不明。

④ 底部資料

図78に示したものは、本地区で得られた丸底的尖底の一群である。破片で総数47点（内１点は復元土器の底部も含む）の出土をみた。ここで気になる点として丸底的尖底を有する土器として３タイプ（面縄前庭式・仲泊式・その他の資料）があるが、どのタイプに属するかその明瞭な違いは知りえなかった。ただ、３タイプの出土量の多寡や胎土・器面調整・色調等より、その殆どが面縄前庭式に帰属するものと思われた。また、本型式は器種の細分を行っているが、どの底部がどの器種のものか判別は困難であった。

ところで、成形技法が窺える資料がいくつか得られた。267の例が好資料である。それからすると、約1.0㎝の円板状の粘土帯で底面を成形し、それから順次幅（約５㎜）の細い粘土帯を周辺に積み上げて行く技法が窺える。また、細い粘土帯を積み上げるのは、本型式の大きな特徴である薄手の土器を成形する上に不可欠のものだと思われる。以下、略述する。

253に示したものは、底面の内側をやや平坦に形成し、開きぎみに立ち上がるものである。色調は淡黄褐色で雲母・石英・石灰質砂粒を含む。また、器表面にはその混入物が露出して手触りがザラザラする。これらの特徴より本資料は仲泊式の底部になると思われる。

265～285に示した資料は、その特徴より面縄前庭式の底部と思われるものである。その立ち上がりの形状より底面が尖り底で急に立ち上がるもの（125・254～262）と底面が丸みを作り開きぎみに立ち上がるもの（263～285）の２種に分けられる。前者は円板状の底面を比較的厚手に成形する。256の例は面縄前庭式の胴部文様である縦位沈線文の末端部が外面に施されている。

ところで、125は底部～胴上部まで接合された資料で底面に凹点がみられる。そこから、急に立ち上がり胴部の張る器形である。外面に縦位沈線を施すが、その間を『V』字状の沈線を段違いに何組か施す。器表面はナデ仕上げであるが、混入物が露出しており手触りがザラザラする。

後者は比較的多く得られ本型式の一般的な底部と考えられる。267は厚手のがっしりした底部で底面はナデが徹底して滑択を有する。

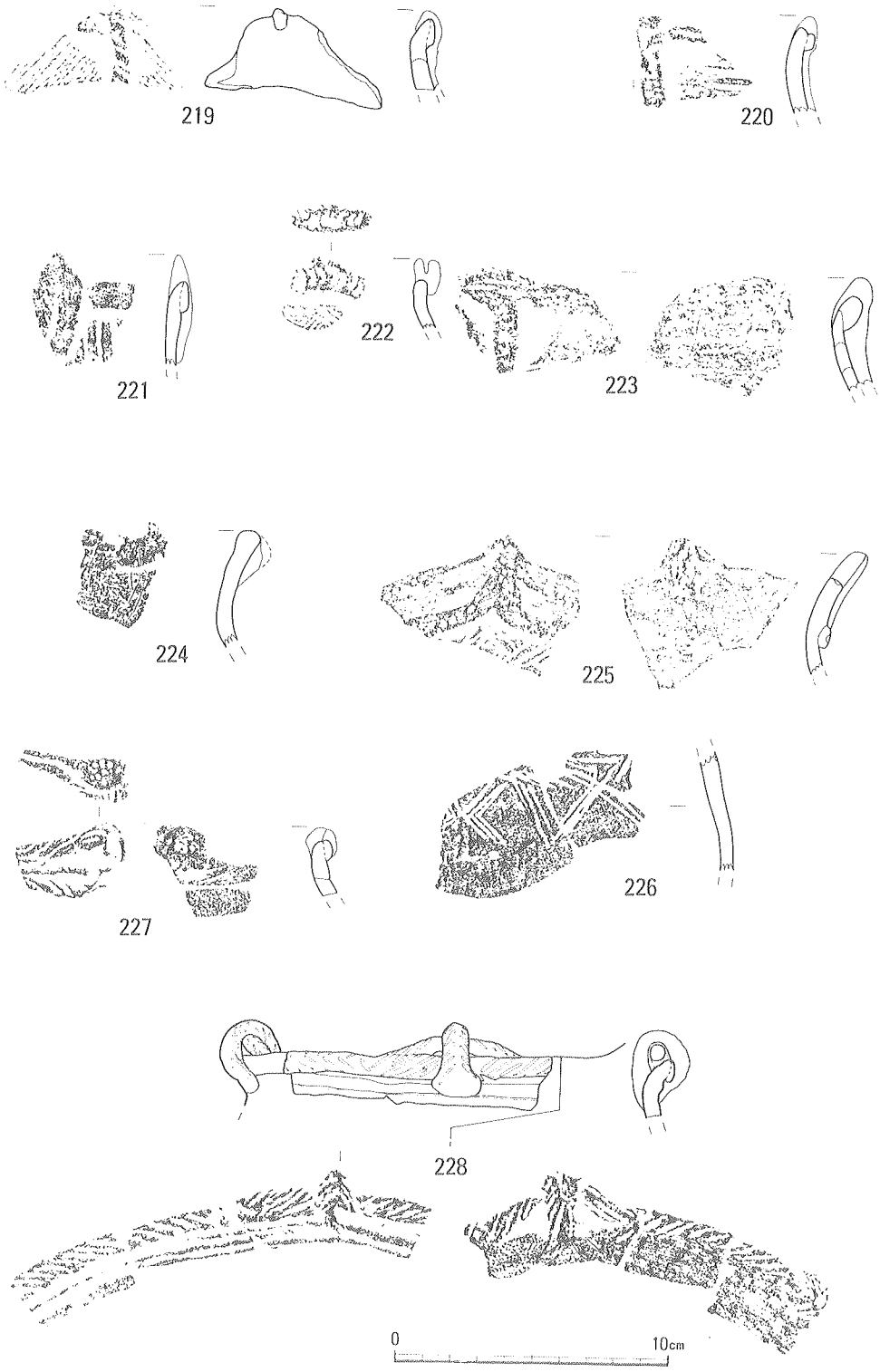


図75　A：面縄前庭式の要素が多いもの

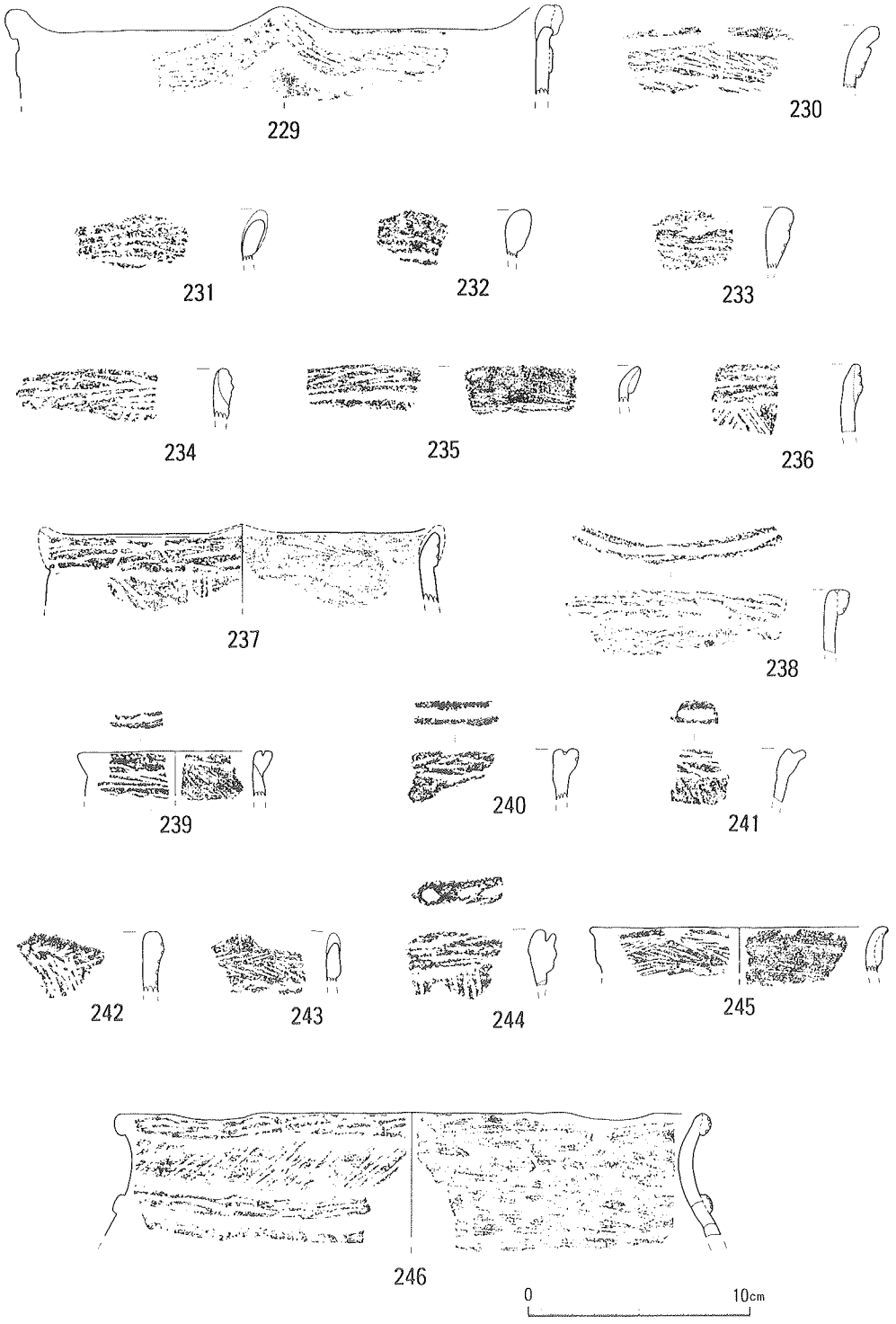


図76　B：仲泊式の要素が多いもの

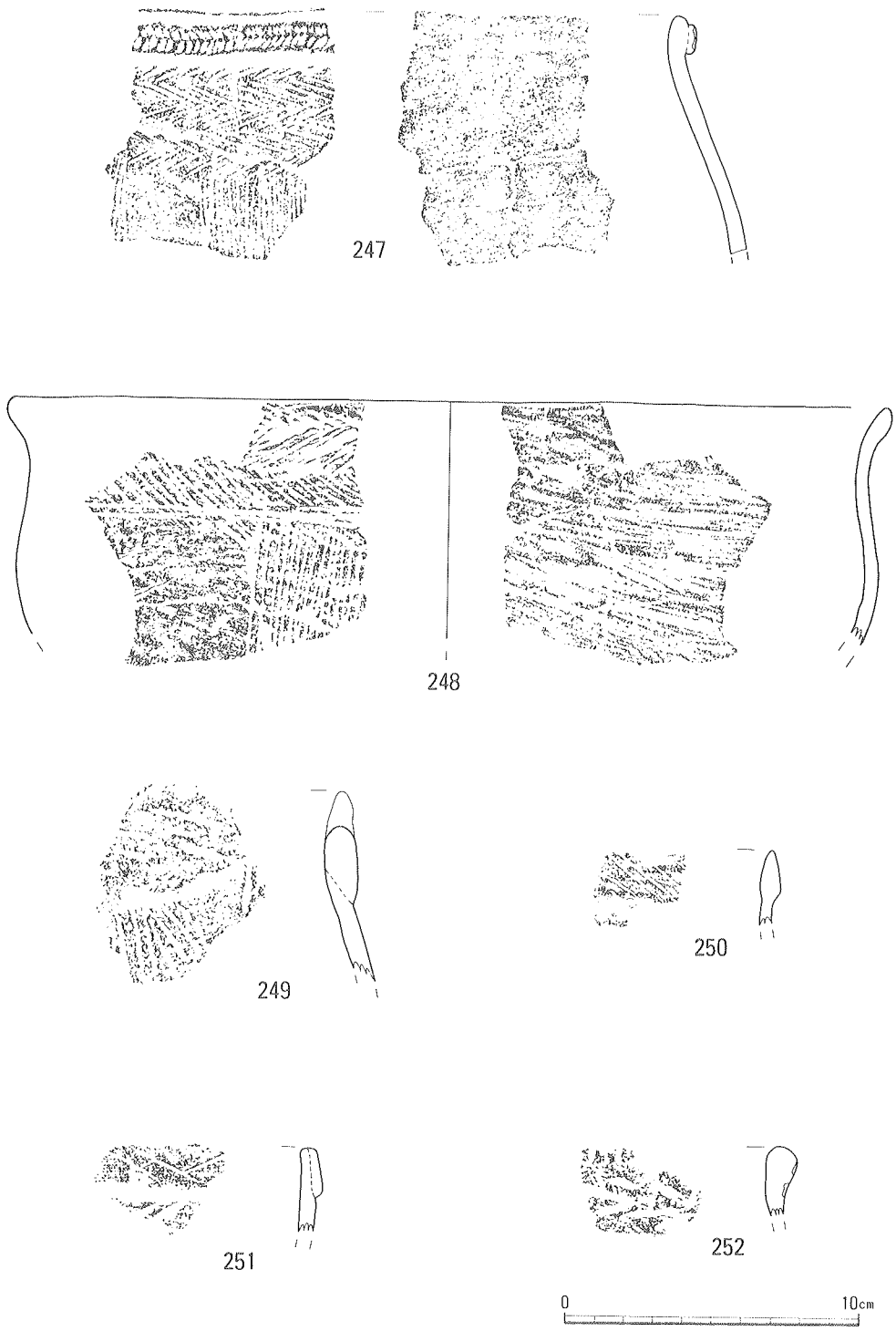


図77　A：面縄前庭式の要素が多いもの(247、248)　B：仲泊式の要素が多いもの(249～252)

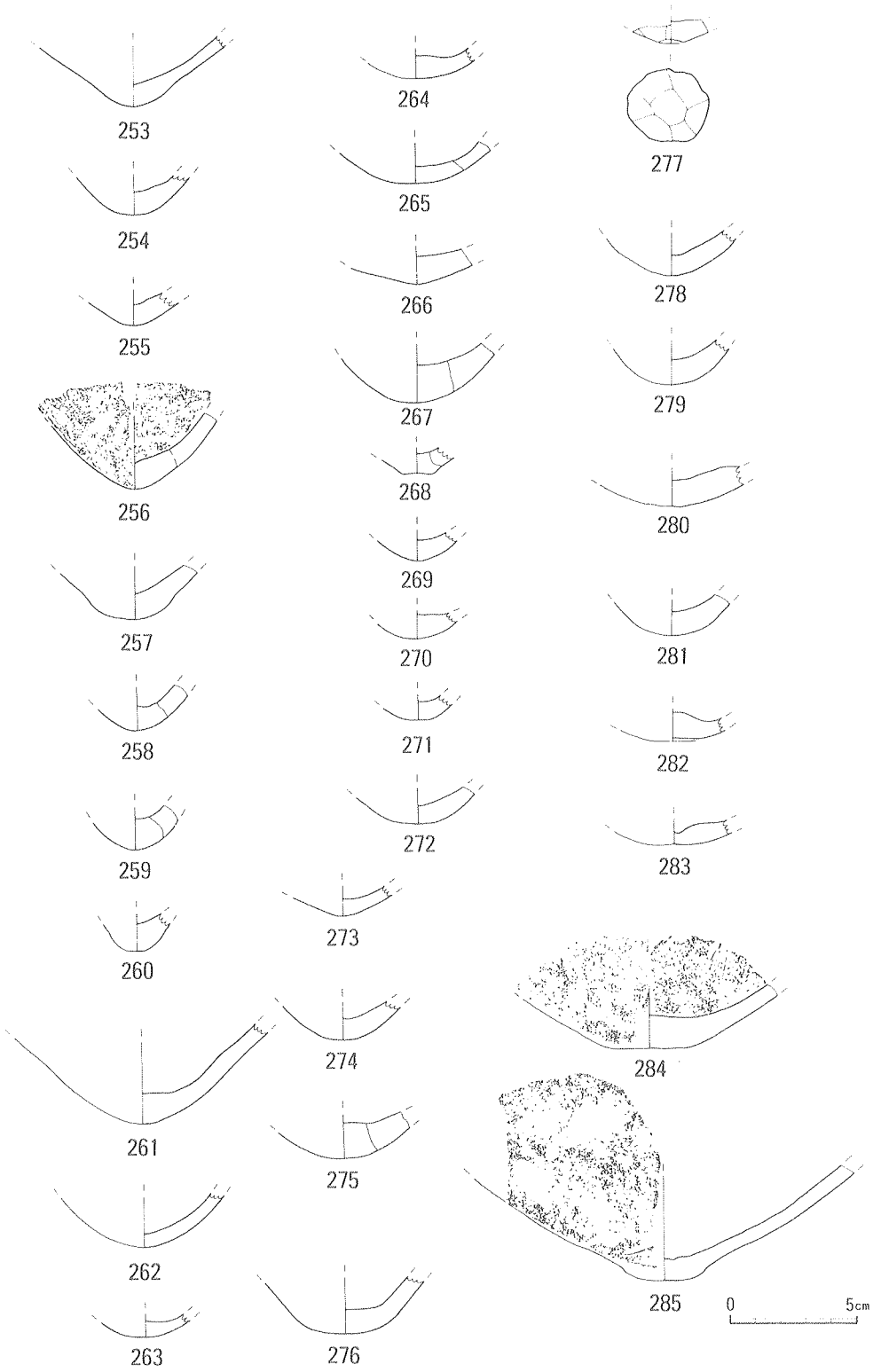

253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
0
5cm

図78　底部資料

表14－1　第Ⅰ群復元及び図上復元観察一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	器形	文様	法量(cm) 口径	胴径	器高	器量	特徴
図56 1	A－94		壺	Ⅰ	a	3.0			0.4～0.6	赤褐色で混入物に石英、石灰質砂粒、チャート等を混入する。器表面はナデが徹底するが剝落が著しい。文様は凸帯上に弧文、その下位は無文である。
〃 2	い－94	Ⅵb	〃	Ⅰ	i	5.4			0.4～0.5	赤褐色で、石英、石灰質砂粒、チャート等を含む。表裏ともナデ調整。文様は凸帯に三角状刺突文を施文、本地区では唯一の例である。
〃 3	い－93	Ⅵc	〃	Ⅰ	d	5.5			0.3～0.4	淡黄褐色で雲母、石英、石灰質砂粒、石灰岩の小礫を混入。ナデ調整。文様は凸帯にハの字状文、その下位に鋸歯文（？）を施す。
〃 5	C－95	Ⅶ	〃	Ⅰ	e	3.5 3.2			0.4～0.5	赤褐色で雲母、石英、石灰質砂粒を含む。ナデ調整、口縁部が直口し、肩の張る器形である。文様は口縁部十字を4ケ所に配する凸帯間は空白。
〃 6	E－94	Ⅶb	〃			3.5			0.4～0.5	黄褐色で、雲母、石英、石灰質の小礫チャート砂粒を含む。ナデ調整、裏面において幅約4㎜の輪積み痕がある。
図57 7	う－93	Ⅵb	〃	Ⅱ	b	7.1			0.5～0.6	口縁部付近は表裏面とも黒褐色、その他は淡茶褐色である。雲母、石英・チャート・石灰質砂粒・石灰岩の小礫を混入。ナデ調整。文様は凸帯を3条巡らし、凸帯を押圧するように、叉状刺突文を施す。その間は鋸歯文で埋める。
〃 10	C－74	Ⅶb	〃	〃	d	10.6			0.4～0.5	口唇内面～表面は灰褐色、裏面の下位は淡茶褐色、混入物は同図7と同じ。ナデ調整であるが、裏面は擦痕が残る。文様は凸帯を3条配し、叉状のハの字状文を施文、その間は鋸歯文で埋める。
図58 18	き－92	Ⅲ	〃	〃	e	7.0			0.5	赤褐色で、石英、チャート、石灰質砂粒を混入。器面は剝落が著しい。文様は口唇部と一体化し斜位沈線を施す。その下位は斜沈線を施文。
〃 19	A－95	Ⅵb	〃	〃	b	8.3			0.6	淡黄褐色で雲母、石英、チャート、石灰質砂粒を混入。ナデ調整をていねいに施す。凸帯を2条巡らし叉状刺突文、凸帯間は7条1組の鋸歯文を配す。
〃 24	あ－94	Ⅵb	〃	Ⅲ	e	5.9			0.3～0.4	灰褐色を呈す。ナデ調整。雲母、石英、石灰質砂粒、石灰岩の小礫を含む、凸帯を2条を配し、凸帯間はせまい。
〃 26	F－95	Ⅵb	〃	〃	f	8.7			0.4～0.5	淡い茶褐色でナデ調整。上記のものと同じ。凸帯間に、鋸歯文、その下位に沈線を施す。
〃 27	A－95	Ⅵ	〃	Ⅱ	e	6.0	9.5		0.5	茶褐色、ナデ調整。上記と同じ混入物を含む。凸帯を4条巡らし、凸帯上の沈文は交互に施文。胴下半部の縦位沈線文は5組になる。
〃 28	B－95	Ⅵ	〃	〃	e	7.3			0.4	淡茶褐色。ナデ調整、雲母、石英、チャート、石灰質砂粒を混入。凸帯を切るように斜位の沈線を施文。凸帯の沈線逆に施す。薄手の土器である。
図59 31	あ－95	Ⅵb	〃	Ⅲ	e	13.8			0.6	白黄褐色、雲母、石灰岩の小礫、石英、チャートを含む。混入物が器表面に露出しており、手触りがザラザラする。凸帯は口縁部に2条配し、さらに縦位にも2本みられる。凸帯間には鋸歯文を施文
〃 32	E－95	Ⅵb	〃	〃	e	8.2	15.5		0.4～0.5	色調、混入物、手触りは上記に同じ。裏面の肩部付近に輪積み痕がみられる。凸帯間の鋸歯文はバランスが崩れているのが観察される。
〃 33	D－94	Ⅶb	〃	〃	e	11.6	21.3		0.5	白黄褐色、胴下半部は褐色を呈する。混入物は上記に同じ。ナデ仕上げ。壺形の中で最大のものである。
図60 37	A－94	Ⅵb	深鉢形	Ⅲ	a	18.7			0.4～0.6	淡茶褐色で雲母、石英、石灰質砂粒、石灰岩の小礫、チャートを含む。凸帯上に幅広の弧文を施し凸帯間は鋸歯文。その下位は縦位沈線。
〃 38	F－94	Ⅵb	〃	Ⅱ	a	12.6			0.6～0.8	黒褐色で裏面はやや淡い茶褐色を呈する。雲母は含まず、石灰質砂粒、石灰岩の小礫、石英を混入。凸帯間は鋸歯文ではなく縦位沈線を施文。本型式の中では厚手の土器である。

表14－2　第Ⅰ群復元及び図上復元観察一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	器形	文様	法量(cm) 口径	胴径	器高	器量	特徴
図60 50	C－95	Ⅵb	〃	Ⅲ	a	15.7	17.0		0.5	黒褐色で丁寧なナデ仕上げ。雲母、石灰質砂粒、石灰岩の小礫を含む。凸帯間、胴部は無文である。
図61 67	い－94	Ⅵ	〃	Ⅱ	b	21.9	23.0		0.4～0.6	口縁部、胴部で部分的に黒褐色を帯びるが全体的には淡赤褐色である。石英・石灰質砂粒・石灰岩の小礫、チャートを含む、凸帯間は鋸歯文と縦位沈線文の組み合わせで施文。
図62 71	B－94	Ⅵb	〃	Ⅳ	c	20.0			0.4	暗褐色、石灰質砂粒、石英、チャートを混入。凸帯上の文様は幅広い刻目を施す
〃 81	う－93	Ⅵb	〃	Ⅲ	c	20.1			0.4	赤褐色で裏面は灰褐色を呈す。石英、石灰質砂粒、チャート、石灰岩の小礫を含む。凸帯上の刻目はギザギザが顕著にみられる。ナデ調整であるが裏面においては擦痕が消えきらず残る。
図63 82	E－94	Ⅶb	〃	Ⅳ	d	19.1			0.6	淡茶褐色、雲母、石英、石灰岩の小礫、チャート。
〃 88	B－93	Ⅳ	〃	Ⅱ	d	14.0			0.4～0.6	淡茶褐色。混入物上記に同じ。器面はナデ調整が徹底、丁寧である。単筵工具によりハの字文を施文、凸帯は力強くシャープに鋸歯文を施文。
図64 104	B－93	Ⅵb	〃	Ⅲ	e	19.6			0.4	灰褐色、混入物上記に同じ。表裏面ともナデ仕上げで丁寧な作りである。文様は凸帯上に斜位に2方向から施文、下位の沈線が深い。凸帯の両脇をつぶす形で施文。凸帯間は6本の短沈線をくの字状に施文。
図65 117	あ－93	Ⅵb	〃	Ⅵ	e	25.2	28.6		0.5～0.6	本型式にみられる特徴的な色調で暗褐色と淡茶褐色のものである。胎土に雲母、石英、石灰質砂粒を含む。ナデ調整であるが擦痕が消えきらず残る。凸帯を3条巡らすが縦位凸帯も1本目より付けている。刻目は凸帯を押圧する施文。
〃 118	い－94	Ⅵb	〃	Ⅳ	c	30.2	33.3		0.5～0.6	暗褐色、石英、石灰質砂粒、石灰岩の小礫を含む、ナデ仕上げであるが裏面胴下半部は明瞭に擦痕がのこる。凸帯の他の土器に比べて幅広い、また胴下半部は121に類似している。
〃 119	う－93	Ⅵb	深彫			30.3	31.5		0.5～0.6	淡黄褐色、雲母、石英、石灰質砂粒、石灰岩の小礫、チャートを含む。ナデ調整。凸起を5つ有するものと思われ、頂部に凹点を施す。文様は口唇部～胴下半部へ沈線を施文。
図66 120	い－93	Ⅵb	深彫	Ⅲ	e	14.0	20.0		0.5～0.6	黒褐色。雲母は含まれず、石英、石灰質砂粒、石灰岩の小礫を混入。ナデ仕上げであるが内面の胴下半部で横位の擦痕が顕著。凸帯は下位のものが上位のものと延びて重なる。凸帯間は鋸歯文、その下位は縦位沈線と斜位沈線を組み合わせている。さらにその間に弧状の沈線を垂らす。
〃 121	B－95	Ⅵ	〃	Ⅲ	c	13.8	16.7		0.4～0.5	赤褐色で雲母を含まず、石灰の小礫、砂粒、石英を含む。凸帯間に鋸歯文を施文するが、バランスを崩して斜沈線になっている部分もある。凸帯下は縦位沈線である。
〃 122	あ－94	Ⅵb	〃	Ⅲ	e	14.5	15.7		0.5～0.6	黒褐色内面は淡黒褐色。混入物は上記に同じ。ナデ仕上げであるが裏面は擦痕が残る。凸帯は2条めぐらすが、1カ所で上位の凸帯が下位の凸帯に延びる。凸帯上は浅くシャープな短沈線を施文。凸帯間の鋸歯文はバランスさを失って縦位の沈線もみられる。
123	か－92	Ⅵb	〃	Ⅳ	e	24.8	28.0		0.4～0.5	赤褐色で石灰質砂粒、石灰岩の小礫、石英、チャートを混入。凸帯上は斜位の刻目文を施すが、上位の凸帯では部分的に縦位の刻目文もみられる。ナデ仕上げであるが器表面に混入物が露出してザラとする。
図67 124	A－95	Ⅵb	〃	Ⅱ	e	25.6	29.6	29.3	0.5～0.6	淡茶褐色、暗褐色、混入物、器面調整は117に同じ。凸帯を2条巡らすが縦位凸帯が、1本と2本のケ所が、それぞれみられる。凸帯間は鋸歯文、胴下半部は縦位沈線を垂らす。底部は乳房状を呈する。
〃 125	A－94	Ⅶb	底部				33.9		0.5～0.6	117・124と諸特徴は近似する。底面から急に立ち上がるタイプである。文様を胴部～底部付近まで施文。底面に凹部がみられる。
図68 126	E－95	Ⅶb	深彫	Ⅰ	e	14.8	23.5		0.5～0.6	淡茶褐色、石英、石灰質砂粒、石灰岩の小礫を含む、器面はナデ調整。表裏面とも擦痕が消えきらずのこる。文様は凸帯を2条巡らすが、1カ所コの字状のコーナーを設ける。凸帯間は鋸歯文、その下位はやや斜位に沈線を垂らす。
〃 127			〃	Ⅱ	e	18.9	23.7		0.4～0.5	淡黄褐色、手ざわりザラとして混入物（雲母、石英、石灰質砂粒、石灰岩の小礫）が露出。ナデ調整。斜位の刻目は凸帯を縄目状に切る形で施文。

表14－3　第Ⅰ群復元及び図上復元観察一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	器形	文様	法量(cm) 口径	胴径	器高	器量	特徴
図68 128	B－95	Ⅵb	〃	Ⅲ	b	17.5	21.0		0.5～0.6	茶褐色で石英・石灰岩の小礫・石灰質砂粒を含む。器表面はナデ調整で裏面はナデが徹底せず擦痕が残る。
〃 129	い－93		〃	Ⅳ	e	19.9	20.5		0.5～0.6	黒褐色。雲母は含まず石英、石灰質砂粒、チャートを混入。ナデ調整であるが裏面は擦痕が消えきらず残る。凸帯間に3ケ所孔がみられる。いわゆる補修孔と思われる。
図69 134	A－93	Ⅵb	〃	Ⅳ	f	17.7	19.2		0.4～0.5	黒褐色。雲母、石灰質砂粒、石英チャートを混入。ナデ仕上げであるが、裏面は擦痕が残る。凸帯は2条巡らし、上下とも刻目文であるが下位の凸帯は途中でｅの文様に変わる。また凸帯間は縦位沈線を施す。
図70 144	A－94	Ⅵb	〃	Ⅱ	g	18.6			0.6	口唇部付近は黒褐色、その他は淡茶褐色。ナデ仕上げ。チャート、石英、石灰質砂粒、石灰岩の小礫を混入。凸帯間は無文であるが、輪積み痕が顕著。凸帯上は後背部に押圧。
図71 169	き－92	Ⅵb	〃	Ⅱ	h	21.7			0.4～0.5	赤褐色。石灰岩の小礫、石灰質砂粒、チャート、赤色の小礫を混入。ナデ仕上げである。裏面は剝落が著しい。凸帯間の幅が他の土器と比して狭い。篦状工具で凸帯を押しつぶす形で施文。
〃 172	A－95	Ⅵb	〃	Ⅲ	h	17.9			0.5～0.6	色調・混入物は上記と同じ。器面はナデ仕上げであるが裏面は擦痕が顕著。凸帯上の方形文は左→右へやや垂直ぎみに施文。
図72 173	い－93	Ⅵb	〃	Ⅲ	b	14.2			0.4～0.5	茶褐色。石灰質砂粒、石英、チャートを混入。ナデ仕上げ。凸帯間は擦痕が消えきらず残る。凸帯を2条巡らすがコの字状にコーナを有する。上下の凸帯を把手によってつなぐ。
〃 178	D－94	Ⅶb	〃		e		27.0		0.5～0.7	暗褐色で裏面は淡黄褐色を呈する。雲母、チャート、石英、石灰岩の小礫、石灰質砂粒を混入。ナデ調整。文様は凸帯と把手に斜沈線、把手の直下に瘤を貼り付け頂部に凹点を設ける。口縁部は破損しているがわずかに斜沈線が観察される。
図73 200	A－94	Ⅵ	〃			19.9			0.6	198.199と同一固体。灰褐色を呈し、肥厚帯に、貝殻の後背部を用いて押圧、施文。頸部に羽状文を施文。
図74 218	A－94	Ⅵb	〃			22.0			0.8～0.9	赤褐色、チャート、角礫、石灰質砂粒を含む。凸起を有し、肥厚帯に斜沈線を施す。
図75 228	う－94	Ⅵb	〃		e	16.0			0.5～0.6	淡赤褐色。雲母、石英、チャート、石灰岩の小礫、砂粒を含む。混入物が器表面に露出し手触りがザラザラする。
図76 229	A－95	Ⅵb	〃			24.5			0.5～0.6	淡赤褐色。雲母を含まず、石英、チャート、石灰岩の小礫、砂粒を混入。ナデ調整。文様は凸帯と頸部に浅い斜沈線を施す。
〃 237	E－94	Ⅵb	〃			18.0			0.5	色調、器面、胎土は上記に同じ。ナデ仕上げ。肥厚帯に弧状の沈線、その下位にも斜・縦位の沈線が観察される。
〃 239	E－93	Ⅶb	〃			8.7			0.5	黒褐色で雲母、石英、チャート、石灰岩の小礫、砂粒を含む。ナデ調整。文様は口唇に凹線、頸部に沈線を施文。
〃 245	A－95	Ⅵb	〃			13.1			0.4～0.5	黒褐色。石灰質砂粒、石英、小礫を含む。ナデ調整。口唇部を折り曲げ肥厚帯に羽状文を施文。その下位にも沈線が観察される。
〃 246	F－95	Ⅶb	〃			25.9			0.6～0.7	赤褐色で他は219に同じ。凸帯を2条巡らし、凸帯に弧状の沈線を施文。凸帯間は斜沈線、さらに凸帯下にも沈線を施こすナデ仕上げであるが裏面は擦痕がのこる。
図77 248	い－93	Ⅵb	〃			29.3			0.4～0.3	赤褐色。雲母を含まず。石英、チャート、石灰岩の小礫、砂粒を混入。凸帯はなく頸部に沈線を2条めぐらすが上記の文様構図に類似する。沈線は浅い。ナデ仕上げであるが裏面に擦痕がみられる。薄手の土器である。

表15－1　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量 器壁
図56 4	E－95	Ⅶb	壺Ⅰ	e 凸帯文 鋸歯文	石 石英	赤褐色	ナデ	0.5～0.6
図57 8	き－92	Ⅵb	壺Ⅱ	図57の7と同一個体			〃	0.6～0.7
〃 9	あ－94	Ⅵイ	〃	b 凸帯文－2条 鋸歯文－縦位	雲母 石英 石	茶褐色	〃	0.6
〃 11	あ－95	Ⅵb	〃	a 凸帯文－2条 鋸歯文	雲母 石英 石	黒褐色 茶褐色	ナデ 擦痕	0.5～0.7
〃 12	／	／	〃	e 凸帯文－2条 鋸歯文	〃	黒褐色 黄褐色	ナデ	0.5～0.6
〃 13	F－95	Ⅵa	〃	e 凸帯文－2条 鋸歯文、縦位沈線文	〃	〃	ナデ 擦痕	0.7～0.8
図58 14	E－93	Ⅶb	壺Ⅲ	f 凸帯文 斜沈線文	〃	淡黄褐色	ナデ	0.4
〃 15	い－95	〃	〃	a 凸帯文 鋸歯文、縦位沈線文	チャート 石 千枚質	茶褐色	〃	0.5
〃 16	あ－95	Ⅵa	〃	a 凸帯文－2条 沈線文	雲母 石英 石	淡黄褐色	〃	0.6
〃 17	E－96	Ⅶb	〃	e 凸帯文	チャート 石 石英	赤褐色	〃	0.5～0.6
〃 20	C－94	Ⅶ	〃	c 凸帯文 鋸歯文、縦位沈線文	〃	黒褐色	ナデ 擦痕	0.5～0.6
〃 21	C－94	ⅦB	〃	d 凸帯文	〃	黄褐色	〃	0.5
〃 22	／	／	〃	f 凸帯文 斜沈線文	〃	〃	ナデ	0.3～0.5
〃 23	E－93	Ⅶb	〃	f 凸帯文 縦位沈線文	石 チャート	黒褐色	ナデ 擦痕	0.6～0.8
〃 25	あ－95	Ⅵb	〃	e 凸帯文－2条、鋸歯文 縦位沈線文－2本	雲母 石英 石	暗褐色	ナデ	0.4～0.5
〃 29	D－94	Ⅶb	〃	e 凸帯文－2条 沈線文	雲母 石英 石	淡黄褐色	〃	0.5 0.7
図59 30	D－94	Ⅵb	〃	a 凸帯文－2条、鋸歯文 縦位沈線文	石英、チャート 石、石灰	淡褐色	ナデ 擦痕	—
図60 34	B－94	Ⅲ	深鉢形	a 凸帯文、鋸歯文 縦位沈線文	雲母 石 石灰	黄褐色	ナデ	0.4
〃 35	い－94	Ⅳ	〃	〃	石、石英 チャート 石灰	赤褐色	ナデ 擦痕	0.4
〃 36	あ－94	Ⅵb	〃	〃	雲母、石英 石灰、石 チャート	灰褐色	ナデ	0.4～0.6
〃 39	E－95	Ⅵb	深鉢形	a 凸帯文 鋸歯文	雲母、石英 石、石灰 チャート	暗褐色	〃	0.5

＊　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－2　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量 器壁
図60 40	う－93	Ⅵb	深鉢形	a 凸帯文 斜位沈線文	雲母、石灰 石、石英 チャート	黒褐色 灰褐色	ナデ 擦痕	0.5
〃 41	A－95	Ⅵb	〃	a 凸帯文、鋸歯文 斜位沈線文	石、石灰 石英 チャート	赤褐色	〃	0.6
〃 42	い－93	Ⅲ	〃	a 凸帯文 鋸歯文	〃	黒褐色	ナデ	0.5
〃 43	あ－93	Ⅵb	〃	〃	〃	灰褐色	〃	0.4～0.5
〃 44	あ－94	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	〃	0.4～0.5
〃 45	あ－94	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	〃	0.4～0.5
〃 46	あ－94	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	〃	0.4～0.6
〃 47	C－96	Ⅱ	〃	a 凸帯文 弧状の沈線文	石、石英 石灰	黒褐色 赤褐色	ナデ 擦痕	0.4
〃 48	あ－95	Ⅵb	〃	a 鋸歯文	石、石英 日礫	灰褐色	〃	0.3～0.4
〃 49	D－94	Ⅶb	〃	〃 凸帯文	石、石英	淡黄褐色	ナデ	0.6
図61 51	O－94	Ⅶb	〃	b 凸帯文 鋸歯文	雲母、チャート 石英、石灰 石	黒褐色	ナデ	0.5
〃 52	い－95	Ⅵb	〃	〃	〃	淡黄褐色	ナデ	0.4～0.7
〃 53	A－95	Ⅵb	〃	b 凸帯文 縦位沈線文	〃	〃	〃	0.4
〃 54	あ－94	Ⅵb	〃	b 凸帯文 鋸歯文	〃	茶褐色	〃	0.3～0.4
〃 55	F－94	Ⅶb	〃	〃 縦位沈線文	石英 石 角礫	赤褐色	〃	0.3～0.5
〃 56	う－92	Ⅵb	〃	b 凸帯文－3条 縦位沈線文	チャート 石英、石灰 石	〃	〃	0.3～0.4
〃 57	あ－94	Ⅵb	〃	b 凸帯文 鋸歯文	〃	〃	〃	0.6
〃 58	か－92	Ⅵb	〃	b 凸帯文 縦位沈線文	石、石英 チャート	黒褐色 黄褐色	ナデ 擦痕	0.4～0.5
〃 59	あ－94	Ⅵb	〃	b 縦位沈線文	〃	赤褐色 黒褐色	〃	0.5～0.6
〃 60	F－93	Ⅶb	〃	b 鋸歯文	雲母、チャート 石英、石、石灰	黒褐色	ナデ	0.5～0.7
〃 61	E－93	Ⅶb	〃	b 凸帯文 鋸歯文	〃	淡黄褐色	〃	0.6

＊　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－3　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量 器壁
図61 62	う－92	Ⅵb	〃	b 縦位沈線文	石英、チャート 石	黒褐色	〃	0.6
〃 63	う－93	Ⅵb		b 凸帯文 鋸歯文	雲母、チャート 石	赤褐色	〃	1.0
〃 64		Ⅵ	〃	b 凸帯文 鋸歯文	石、石灰	〃	〃	0.5
〃 65	B－94	Ⅵ	〃	〃	雲母、石 チャート	暗褐色	〃	0.5
〃 66	い－92	Ⅵb	〃	b e 凸帯文－3条、鋸歯文	雲母、石 チャート、石英	赤褐色	〃	0.5
図62 68	A－95	Ⅳ	〃	c 凸帯文 鋸歯文	石、石英 チャート	暗褐色	ナデ	0.6
〃 69	F－93	Ⅶa	〃	〃	石、石灰 チャート	黒褐色 淡茶褐色	ナデ 擦痕	0.5
〃 70	A－93	Ⅵb	〃	〃	石、石英	赤褐色	〃	0.5
〃 72	F－93	Ⅶb	〃	〃 縦位沈線文	雲母、石 石英、チャート	黒褐色 淡黄褐色	〃	0.5
〃 73	D－96	Ⅱ	〃	〃	〃	黒褐色 淡茶褐色	〃	0.6
〃 74	い－94	Ⅵb	〃	c 凸帯文 縦位沈線文	石、石英 チャート	暗茶褐色 暗褐色	ナデ 擦痕	0.5
〃 75		Ⅶb	〃	c 凸帯文 鋸歯文	石、石英	明茶褐色	〃	0.5～0.6
〃 76	あ－95	Ⅵb	〃	〃 縦位沈線文	石、石英 チャート 石灰	黒褐色 暗赤褐色	〃	0.4～0.5
〃 77	A－94	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	ナデ	0.5～0.6
〃 78	A－95	Ⅵb	〃	c 凸帯文 鋸歯文	〃	灰褐色	〃	0.4～0.5
〃 79	D－94	Ⅶb	〃	〃	〃	赤褐色	ナデ 擦痕	0.5
〃 80	う－93	Ⅵ	〃	c 凸帯文 鋸歯文	〃	赤褐色 灰褐色	〃	0.4
図63 83	E－94	Ⅶb	〃	〃 d 縦位沈線文	〃	暗茶褐色	〃	0.4
〃 84	A－94	Ⅶb	深鉢形	d 凸帯文 縦位沈線文	石、石英 チャート 石灰	淡黄褐色	ナデ 擦痕	0.5
〃 85	F－93	Ⅶb	〃	〃	雲母、石英 石、石灰	〃 茶褐色	〃	0.6
〃 86	A－95	Ⅰ	〃	d 凸帯文	〃 チャート	淡黄褐色	〃	0.4～0.5

＊　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－4　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量器壁
図63 87	あ－94	VIa	〃	〃 縦位沈線文	〃	〃	ナデ 擦痕	0.4 ～ 0.5
〃 89	A－94	VIb	〃	d 斜沈線文	〃	黒褐色 暗茶褐色	〃	0.4
〃 90	F－93	VIIb	〃	〃	〃	明黄褐色	〃	0.4
〃 91	D－94	VIb	〃	〃	〃	黒褐色	〃	0.4
〃 92	あ－94	VIb	〃	d 斜沈線文	〃	淡黄褐色	〃	0.5
図64 93	A－95	VIb	〃	e 凸帯文 鋸歯文	雲母、チャート 石英 石、石灰	黒褐色 淡黄褐色	ナデ	0.5 ～ 0.7
〃 94	い－93	VIb	〃	〃	〃	茶褐色	〃	0.5前後
〃 95			〃	e 凸帯文 鋸歯文	雲母、チャート 石英 石、石灰	黒褐色 茶褐色	ナデ	0.5前後
〃 96			〃	同一個体	〃	〃	〃	〃
〃 97	C－93	VIIb	〃		〃	〃	〃	〃
〃 98	A－94	VIIb	〃	〃	〃	淡黄褐色	〃	〃
〃 99	F－95	VII	〃	e 凸帯文 斜位沈線文	〃	茶褐色	〃	0.6 ～ 0.7
〃 100	E－94	VIb	〃	e 凸帯文 鋸歯文	〃	〃	〃	0.6前後
〃 101	E－93	VIIb	〃	〃	〃	黒褐色 桃褐色	ナデ 擦痕	0.4前後
〃 102	C－93	II	〃	〃	〃	〃	ナデ	0.6前後
〃 103	E－94	VIIb	〃	〃	〃	茶褐色	〃	0.5前後
〃 105	A－95	VIb	〃	〃 縦位沈線文	〃	淡茶褐色	〃	〃
〃 106	う－93	VIb	深鉢形	e 凸帯文	雲母、チャート 石英 石、石灰	黒褐色	ナデ 擦痕	0.4前後
〃 107	F－94	VIb	〃	〃	〃	白黄褐色	ナデ	0.5 ～ 0.6
〃 108	E－93	VIIb	〃	〃 鋸歯文 縦位沈線文	〃	黒褐色 黄褐色	ナデ 擦痕	0.3 ～ 0.4
〃 109	き－92	III	〃	〃 鋸歯文	〃	黒褐色 黄褐色	ナデ	0.4前後

＊　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－5　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量 器壁
図64 110	D－94	Ⅶb	深鉢形	鋸歯文	〃	〃	〃	0.5前後
〃 111	き－92	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	〃	0.5前後
〃 112	き－92	Ⅲ	〃	〃	石英 石 石灰	赤褐色	〃	0.5前後
〃 113	A－95	Ⅵb	〃	〃	雲母、石 チャート 石灰	淡黄褐色	〃	0.6
〃 114	B－95	Ⅰ	〃	凸帯文 刻目	雲母、石英 チャート、石灰 石	淡黄褐色	〃	0.4前後
〃 115	う－94	Ⅵb	〃	〃 鋸歯文	〃	白黄褐色	〃	0.4 ～ 0.6
〃 116	E－94	Ⅶb	〃	凸帯文 刻目	〃	茶褐色	〃	0.5 ～ 0.6
図69 130	F－94	Ⅶb		f 凸帯文 縦位沈線文	〃	淡茶褐色	ナデ 擦痕	0.5 ～ 0.7
〃 131	う－94	Ⅶb	〃	〃	〃	黒褐色	〃	0.4 ～ 0.7
〃 132	E－93	Ⅶb	〃	〃	〃	〃	〃	0.4
〃 133	E－94	Ⅶb	〃	〃	〃	〃	〃	0.4
図70 135	あ－94	Ⅵ	〃	g（腹縁部） 凸帯文 鋸歯文	石、石灰 石英、チャート	暗褐色	ナデ 擦痕	0.5
〃 136	あ－94	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃 137	あ－94	Ⅵb	〃	同一個体	〃	〃	〃	〃
〃 138	A－94	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃 139	C－93	Ⅴ	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃 140	A－94	Ⅶb	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃 141	い－93	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃 142	あ－94	Ⅵ	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃 143	あ－94	Ⅵb	〃	g（後背部） 凸帯文 縦位沈線文	〃	〃	ナデ	0.6
〃 145	あ－94	Ⅵb	〃	〃	〃	暗茶褐色 黄褐色	〃	0.6

＊　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－6　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量器壁
図70 146	A－95	VIa	〃	〃	〃	淡黄褐色	〃	0.5
〃 147	う－92	Ⅲ	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	0.4
〃 148	あ－94	VIb	〃	〃	〃	〃	ナデ 擦痕	0.4～0.5
〃 149	あ－94	VIb	〃	〃	〃	〃	ナデ	0.4～0.5
〃 150	い－93	VIb	〃	〃 斜沈線文	〃	〃 淡茶褐色	〃	0.5～0.6
〃 151	E－93	Ⅶb	〃	〃	〃	〃	〃	0.5
〃 152	A－93	Ⅶb	〃	〃	〃	暗褐色	ナデ 擦痕	0.6
〃 153	う－92	VIb	〃	g（後背部） 凸帯文 鋸歯文	〃	茶褐色	〃	0.5～0.6
図71 154	う－93	VIb	〃	h 凸帯文 鋸歯文	石、石灰 チャート	暗褐色 茶褐色	〃	0.6
〃 155	か－91	VIb	〃	〃	石英、石灰 石	暗茶褐色 灰青褐色	〃	0.4
〃 156	A－94	VIb	〃	h 凸帯文 斜位沈線文	石、石灰 チャート	赤褐色	〃	0.4～0.6
〃 157	E－93	VIb	〃	h 凸帯文 鋸歯文	石、石灰 石英、チャート	淡茶褐色 赤褐色	〃	0.5
〃 158	A－95	Ⅰ	〃	〃	〃	灰青褐色 淡茶褐色	〃	0.4～0.5
〃 159	A－95	VIb	〃	〃	〃	赤褐色 淡茶褐色	〃	0.4～0.5
〃 160	あ－95	VIa	〃	〃	〃	淡茶褐色	ナデ	0.5～0.6
〃 161	F－95	Ⅳ	深鉢形	h 凸帯文 鋸歯文	石、石灰 石英、チャート	赤褐色 暗褐色	ナデ 擦痕	0.3～0.5
〃 162	あ－93	VIb	〃	h 凸帯文 縦位沈線文	〃	暗褐色	ナデ	0.4～0.5
〃 163	A－94	Ⅵ	〃	h 凸帯文	〃	赤褐色	ナデ 擦痕	0.4
〃 164	D－94	VIa	〃	〃 鋸歯文	〃	〃	〃	0.5
〃 165	う－93	VIb	〃	〃 縦位沈線文	〃	淡茶褐色	〃	0.5
〃 166	A－94	VIb	〃	〃	石、石灰 石英	暗茶褐色	〃	0.4

＊　混入物は肉眼観察による裏中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－7　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量 器壁
図71 167	う－93	VIb	〃	h 凸帯文 縦位沈線文	石、石灰 チャート 石英	淡赤褐色	〃	0.5
〃 168	く－92	Ⅲ	〃	h 凸帯文 鋸歯文	〃	黄褐色 赤褐色	〃	0.5
〃 170	A－95	VIb	〃	〃	〃	〃 淡茶褐色	〃	0.5
〃 171	い－94	Ⅲ	〃	h 凸帯文 鋸歯文	〃	淡茶褐色	〃	0.6
図72 174	B－95	VIb	〃	174と同一個体	〃	〃	〃	〃
〃 175	C－93	VIIb	〃	斜沈線	雲母、チャート 石英、石灰 石	暗褐色	〃	—
〃 176	C－93		〃	176・177・178 は同一個体	雲母、チャート 石英、石灰 石	暗褐色	〃	—
〃 177	C－93		〃		〃	〃	〃	—
〃 179	い－95	I	〃	沈線文 瘤 又状刺突文	〃	暗褐色 灰褐色	〃	0.3
〃 180	B－93	VIb	〃	瘤 刺突文	〃	〃	〃	—
〃 181			〃	〃	石、石英 角礫	暗褐色 赤褐色	〃	—
〃 182	い－91	Ⅳ	〃	瘤 縦位沈線文	石、石英	暗褐色 淡黄褐色	〃	0.4前後
〃 183	あ－94	VIイ	〃	斜沈線文 瘤	〃	淡黄褐色	〃	0.5
〃 184	あ－94	VIイ	深鉢形	183・184・185 同一個体	雲母、チャート 石英、石灰 石	淡黄褐色	〃	—
〃 185	A－94	VIIb	〃	〃	〃	〃		—
〃 186	う－92	VIc	〃	把手のみ	〃	〃	〃	0.3前後
〃 187	う－93	VIイ	〃	把手 沈線文	〃	暗褐色 淡黄褐色	〃	0.3
〃 188				凸帯文 沈線文	〃	淡黄褐色	〃	0.3 ～ 0.4
〃 189	B－94	VIb	〃	凸帯文 縦位沈線文	〃	〃	〃	0.4 ～ 0.5
図73 190	D－94	VIb	深鉢形	後背部	石、チャート	灰褐色	ナデ	—
〃 191	F－95	VIIb	〃	〃	チャート 石英 石	茶褐色	〃	—

＊　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－8　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量器壁
図73 192	F－95	Ⅵb	深鉢形	後背部	チャート 石英	黒褐色 灰褐色	ナデ	—
〃 193	G		〃	〃	〃	灰褐色	〃	—
〃 194	C－94	Ⅵa	〃	〃	チャート 石英 千枚質	黒褐色 白茶褐色	〃	—
〃 195	D－95	Ⅵb	〃	〃	チャート 石	黒褐色 茶褐色	〃	—
〃 196	A－94	Ⅵイ	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	—
〃 197	C－94	Ⅵb	〃	〃	〃	灰褐色 淡茶褐色	〃	—
〃 198	A－94	Ⅵb	〃	後背部 斜沈線文	チャート 石	灰褐色	〃	—
〃 199	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—
〃 201	E－93	Ⅵb	〃	腹縁部 斜沈線文	石、チャート	灰褐色	〃	—
〃 202	F－93	Ⅶb	〃	腹縁部	〃	白黄褐色		—
〃 203	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—
〃 204	E－93	〃	〃	腹縁部 斜沈線文	〃	黒褐色 白黄褐色	〃	—
図74 205	E－93	Ⅶb	〃	斜沈線文	石 チャート 角礫	黒褐色 茶褐色	〃	—
〃 206	あ－94	Ⅵイ	〃	〃	雲母、チャート 石英	黒褐色 茶褐色	〃	—
〃 207	D－95	Ⅵb	〃	〃	石 チャート	黒褐色 茶褐色	〃	—
〃 208	D－94	Ⅵb	〃	〃	チャート 石英 石	黒褐色 茶褐色	〃	—
〃 209	E－94	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	〃	—
〃 210	F－95	Ⅵb	〃	羽状文	石英、石 石灰、チャート	赤褐色	〃	—
〃 211	A－94	Ⅵb	深鉢形	羽状文	石、石英 チャート	黒褐色 灰褐色	ナデ	—
〃 212	E－95	Ⅵa	〃	〃	雲母、石 石英、チャート	〃	〃	—
〃 213	F－93	Ⅳ	〃	〃	石、チャート 角礫	淡茶褐色	〃	—

※　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－9　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量 器壁
図74 214	A－95	Ⅰ	〃	〃	石、石英	〃	〃	－
〃 215				斜沈線文	チャート 石 角礫	黒褐色 灰褐色	〃	－
〃 216	A－94	Ⅵb	〃	〃	雲母、石英 チャート、石灰 石	淡茶褐色	〃	－
〃 217	E－94	Ⅶb	〃	〃	雲母、石英 チャート 石	〃	〃	－
図75 219	E－94	Ⅶ	〃	e 凸帯文 斜沈線文	雲母、石英 チャート、石 石灰	黒褐色 暗褐色	〃	0.5
〃 220	A－95	Ⅵb	深鉢形	凸帯文 貝殻文（？）	石、チャート 石英	淡茶褐色	ナデ	0.5
〃 221	B－95	Ⅵ	〃	無文	雲母、チャート 石、石灰 石英	暗褐色 茶褐色	〃	0.4
〃 222	E－93	Ⅶb	〃	b 凸帯文 鋸歯文	雲母、石英 石灰、石	暗褐色 灰褐色	〃	0.4
〃 223			〃	凸帯文 沈線文	石、石灰 チャート	赤褐色	〃	0.3
〃 224	A－94	Ⅳ	〃	沈線文	雲母、石英 チャート 石灰	淡茶褐色	〃	0.5
〃 225	A－95	Ⅵ	〃	凸帯文 刺突文 沈線文	石、石英 チャート	赤褐色	〃	0.4 ～ 0.6
〃 226	あ－94	Ⅵb	〃	沈線	225と同一個体	〃	〃	〃
〃 227	C－94	Ⅶb	〃	凸帯文 刺突文、刻目 沈線文	石、石英	〃	〃	0.4 ～ 0.5
図76 230	F－94	Ⅵイ	〃	肥厚帯 斜沈線文	〃	〃	〃	〃
〃 231		Ⅵb	〃	肥厚帯 弧状の沈線	〃	淡茶褐色	ナデ	0.5
〃 232	B－95	Ⅵb	〃	〃	〃	〃	〃	
〃 233	B－93	Ⅵb	〃	〃	〃	黒褐色	ナデ	
〃 234			〃	〃	〃	淡褐色	〃	0.5
〃 235	C－93	Ⅵb	〃	〃	〃	黒褐色	ナデ 擦痕	0.5
〃 236	E－94	Ⅶ	〃	〃 鋸歯文	〃	淡黄褐色	〃	0.5
〃 238	あ－93	Ⅵイ	〃	凸帯文－沈線 斜沈線文	〃	暗褐色 淡茶褐色	ナデ	0.4

＊　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－10　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量 器壁	法量 底径	法量 底部の厚さ
図76 240	F－95	Ⅵb	〃	〃	〃	淡茶褐色		—	—	—
〃 241	い－93	Ⅵイ	深鉢形	凸帯文 沈線文	雲母、石 石英、石灰 チャート	暗褐色	ナデ	0.4	—	—
〃 242	D－94	Ⅶb	〃	斜沈線文	雲母、石英 チャート、石	淡黄褐色		0.4	—	—
〃 243	あ－94	Ⅵb	〃	肥厚帯 刺突文 羽状文	石、チャート 石英	灰褐色	〃	0.2 0.3	—	—
〃 244			〃	凸帯文 刺突文、有孔 沈線文	雲母、石英 チャート、石 赤色粒	淡褐色		0.4	—	—
図77 247	い－94	Ⅵb	〃	d 凸帯文、羽状文 縦位沈線文	雲母、石英 石、石灰 チャート	暗褐色 淡黄褐色	〃	0.4	—	—
〃 249	お－94	Ⅵ	〃	斜沈線文 縦位沈線文	チャート 石 千枚質	黒褐色 赤褐色	ナデ	0.6	—	—
〃 250	F－95	Ⅵb	〃	斜沈線文	〃	〃	〃	0.4	—	—
〃 251	D－95	Ⅵb	〃	〃	雲母 チャート 石	黒褐色 灰褐色	〃	0.5	—	—
〃 252	C－95	Ⅱ	〃	弧文 斜沈線文	チャート 石英 石	白黄褐色	〃	0.4 0.5	—	—
図78 253	B－95	Ⅵb	底部		雲母 チャート 石英、石	白黄褐色	ナデ 擦痕	0.8	—	—
〃 254	A－94	Ⅶb	〃		雲母 チャート 石英	灰褐色 白黄褐色	ナデ	0.9	—	—
〃 255	D－95	Ⅶ	〃		石 チャート	茶褐色	〃	0.8	—	—
〃 256	い－94	Ⅵb	〃	縦位沈線文	〃	灰褐色 桃褐色	〃	1.0	—	—
〃 257	B－95	Ⅵb	〃		石 チャート	暗褐色	〃	1.0	—	—
〃 258	F－93	Ⅶb	〃		雲母 石	黒褐色	〃	1.2	—	—
〃 259	E－93	Ⅶb	〃		石 千枚質 チャート	赤褐色 暗褐色	〃	0.9	—	—
〃 260	E－94	Ⅵb	〃		雲母、石、石英 石灰、チャート	淡黄褐色	〃	—	—	1.1
〃 261	く－91	Ⅲ	〃		〃	暗褐色	〃	0.5 0.6	—	1.2
〃 262	E－95	Ⅶ	〃		〃	〃	〃	0.4 0.5	—	0.6
〃 263	B－94	Ⅱ	〃		雲母 チャート 石	暗褐色 淡黄褐色	〃	0.6	—	—
〃 264	A－95	Ⅵ	〃		〃	暗褐色	〃	0.5前後	—	0.6

＊　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

表15－11　第Ⅰ群土器出土一覧

挿図番号	グリッド	層序	器種	文様	混入物	色調	器面調整	法量 器壁	法量 底径	法量 底部の厚さ
図78 265	あ－95	VIa	〃		チャート 石英 石	暗褐色 淡黄褐色	ナデ 擦痕	0.7	—	—
〃 266	E－93	Ⅶb	〃		雲母 チャート 石英	黒褐色 赤褐色	ナデ	1.1	—	—
〃 267	E－94	VIb	底部		石 チャート	黒褐色 赤褐色	ナデ 擦痕	1.6	—	—
〃 268	A－94	Ⅶb	〃		〃	灰褐色 茶褐色	ナデ	0.8	—	—
〃 269	お－95	VIイ	〃		雲母 チャート 石	灰褐色	〃	0.8	—	—
〃 270	F－94	Ⅶb	〃		チャート 石 角礫	灰褐色 淡黄褐色	〃	1.0	—	—
〃 271	F－95	VIb	〃		石 チャート	黒褐色	〃	0.7	—	—
〃 272	B－95	VI	〃		雲母 チャート 石	黒褐色 淡黄褐色		0.7	—	—
〃 273	E－94	Ⅶb	〃		〃	淡黄褐色	〃	0.8	—	—
〃 274	い－95	VIb	〃		〃	黒褐色 淡黄褐色	〃	0.7	—	—
〃 275	あ－94	VIb	〃		チャート 石	灰褐色 茶褐色	ナデ 擦痕	1.4	—	—
〃 276	A－95	VI	〃		雲母 チャート 石	灰褐色 淡黄褐色	〃	0.9	—	—
〃 277	F－95	Ⅳ	〃		石、チャート 石英	淡茶褐色	ナデ	—	—	0.7
〃 278	B－95	VI	〃		雲母、石 石灰、チャート 石英	暗褐色 淡黄褐色	〃	—	—	0.7
〃 279	D－94	Ⅶb	〃		〃	〃	〃	—	—	0.9
〃 280	A－95	VIb	〃		石、石灰 チャート、石英	赤褐色	〃	—	—	0.9
〃 281	E－94	Ⅶb	〃		雲母、石英 チャート、石 石灰	黒褐色	〃	—	—	0.9
〃 282	い－95	Ⅰ	〃		〃	淡茶褐色 黒褐色	〃	—	—	—
〃 283	C－96	Ⅱ	〃		石英、石灰 チャート、石	黒褐色 淡茶褐色	〃	—	—	—
〃 284	い－94	VIb	〃		〃	赤褐色	〃	—	—	—
〃 285	あ－94	VIb	〃		雲母、石英 石灰、チャート 石	淡黄褐色 黄褐色	〃	—	—	—

＊　混入物は肉眼観察による表中の略は下記のとおりである。
混入物　石＝石灰質砂粒・石灰＝石灰質の小礫

第２群土器

総数1,300点余りの出土で、出土状況は表11に示した。本群に含めたものは南島独自の地域性の強いもので、現在のところ分布は南島中部圏[註7]に限られる。既に高宮廣衛氏、河口貞徳氏により型式名の設定や編年的な位置づけがなされている（表５）。

今回得られた資料をみると、面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式・嘉徳Ⅱ式・神野Ｅ式・伊波式及び無文口縁の資料が得られている。以下、それぞれについて記す。

① 面縄東洞式

本群で最も多くの出土をみた。ほとんど破片の資料であるが、推定復元や図上復元の可能なものが20点近く得られている。

明確に器種の判明するものは皿形・壺形・深鉢形の３種で、皿形１点・壺形２点の他はすべて深鉢形に属す。器種別に述べる。

・皿形

図79の286に示す１点で、ゆるやかな山形を呈す口縁部の資料である。口唇部は尖がり気味であるが、山の部分では粘土を貼り付け若干厚くなる。粘土は山の両側の裾から頂部へ次第に厚くなるように整形され、山の直下で稜を有す。そのため、その部分はコーナーを形成している。山の部分は粘土の接合面が明瞭に残る。

口縁は断面三角形状で幅約1.5㎝の肥厚を示す。この肥厚部外面はほぼ垂直であるが、その直下から「く」字状を示して直線的に内傾し以下へ続く。破片が小さく下部の状況は不明であるが、このような器形を示すため本項で扱った。

文様は肥厚部外面及びその直下に施されている。比較的先端の平坦なヘラ状工具が使用されており、肥厚部外面には約２㎜幅のもので３条、肥厚部直下では約４㎜幅のもので１条の横位押し引き文がみられる。押し引きは口縁の形状に沿って施され、左から右方向へ深く施文している。

本資料は脆弱で器面が剝がれ落ちた所も多く、また、石灰分の付着も目立つ。そのため、文様も判然としない部分もあり、器面の状況もつかめない。胎土は細かく、混入物としてチャート・石英の微砂粒を密に含む。器色は暗褐色を呈す。Ⅵb層の出土。

・壺形

２点得られており図80に示した。

図80の287に示すものは上面観が長楕円形を呈す口縁部の資料で、断面三角形状の肥厚を示す。しかし、長軸の両端はやや丸味をもって厚くなる。特に、前面部では２㎝以上もの厚さになり、半円状の肥厚部を形成する。肥厚部の幅は右側が約2.5㎝、左側が約３㎝を測る。

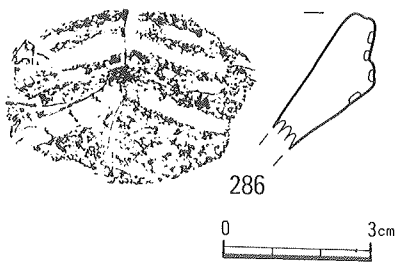


図79　21地区ハ第２群面縄東洞式土器(皿形)

肥厚部は長軸の両端へ細くなり、三日月状に弧を描く。前面部はゆるやかな山形を形成し、つくりは雑で部分的に凹凸を呈す。また、肥厚帯直下では肥厚部を貼り付けた跡も明瞭に残る。肥厚帯下約2㎝の箇所で積み跡から破損しており、以下の状況は不明。

文様は肥厚部外面に見られ、先のやや丸くなったヘラ状工具による押し引き文が横位に認められる。施文はラフで器面を囲繞するものはみられない。概ね肥厚部の形状に沿って施文されている。3～4条の横位押し引き文で、施文方向を交互に変える箇所も見受けられる。

器面の調整はナデ仕上であるが、それほど徹底しておらず肥厚部外面や裏面に擦痕が残る。胎土は細かく、混入物として石英・チャートの砂粒を密に含む。赤褐色を呈し、器厚は5㎜前後である。

本資料は21地区イの3号遺構出土土器（図39）との関連が予想される。

同図288に示したものは胴下半部の近くまであり、その箇所までの器形が窺える資料である。口縁部はほぼ直線的に頸部まで至り、そこからゆるやかに外傾しながら肩部の方へ向う。肩部は若干膨らみをみせて以下に続く。底部の形状は不明。

口縁部には扁平な凸帯による装飾がみられ、その部分は上部へ突出する。その突出部の内面は先端に向かって溝状の凹部がみられる。つまり、円形を呈すものの一端をつまみ出すようにして内面に溝をつくり、中の液体を注ぎやすくするような配慮がなされている。口径は約3㎝。

文様はその装飾用の扁平な凸帯と、その凸帯上に施される先端の丸味を帯びたヘラ状工具による押し引き文がある。

まず、口縁部の一端に両面から扁平な凸帯（長さ約3.5㎝）を合わせ、山形状に突出させる。その下方にも同様な形状を示す凸帯を配し、その2組の凸帯の裾部を押さえるようにU字状の扁平な凸帯を施す。この裾部を押さえる凸帯はそのまま口唇部まで延び、そこから略三角形状を示しながら山形凸帯とU字凸帯の接点に折れ曲る。

これらの凸帯上に施される押し引き文は下方から上方へと施文され、山形になる凸帯上には2条、それ以外では1条認められる。施文は割り合い深く、工具の幅は約5㎜である。

器面調整は丁寧に行われ、表面は滑らかである。裏面も良くナデられているが、擦痕が消えきらずに残る。胎土は非常に細かく、混入物として石英・チャートの砂粒を密に含む他、雲母の破片も多量混入する。器色は表面が赤褐色、裏面が暗褐色を呈し、器厚は7㎜前後である。

・深鉢形

ほとんどが本器種に属するもので図81～87にその特徴的なものを示した。以下に記す。

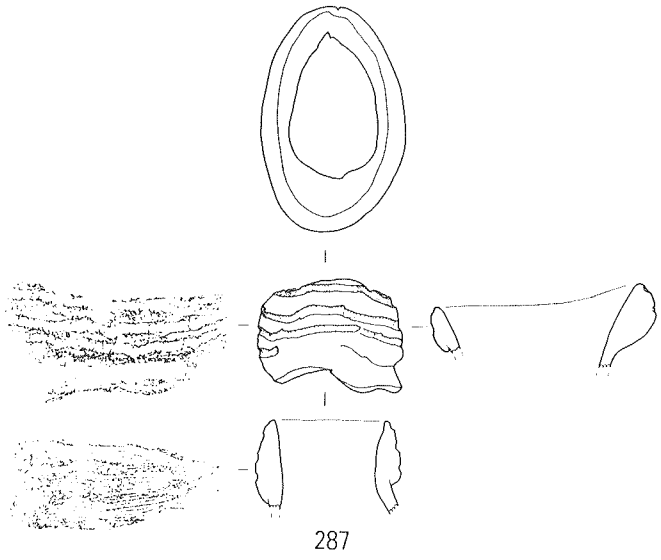
器形

推定復元図を示した18点及びやや大き目の破片をみると、概ね次の4種に分けられる。

イ―胴部がやや膨らみ頸部でわずかにしまり、ゆるやかに外反しながら口縁へ至るもの

ロ―底部からほぼ直線的に開くもの

ハ―基本的にはロと同様であるが、口縁部の外反がきついもの



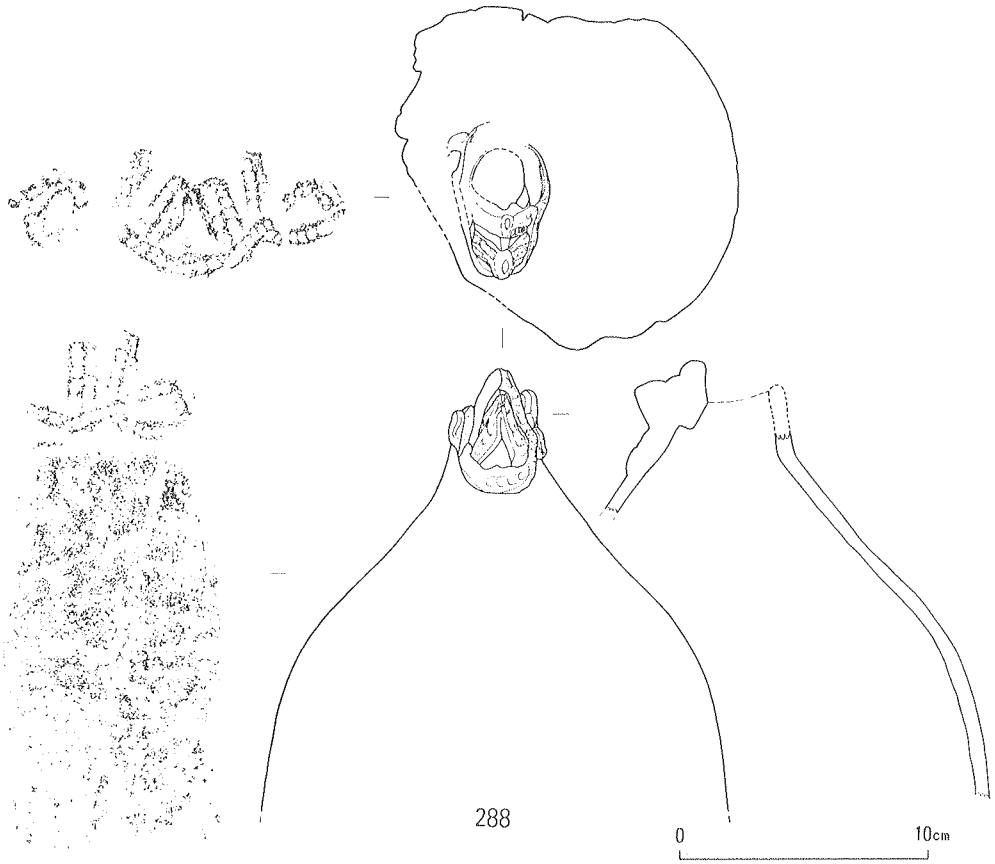


図80　21地区ハ第２群面縄東洞式土器(壺形)

ニ—胴部が若干膨らみ口縁部が直口のもの

で、今回得られた資料をみると、ロ・ハの器形を有すものが多く、イ・ニに属す資料は僅少であった。これからすれば、ロ・ハの器形が本類土器の一般的なものであったかと推察される。

注目されるはニの器形で、図84の332に示したものが典型的な資料である。底部の方からゆるやかな弧を描きながら胴上部まで至り、そこで肥厚してその外面がやや内傾しながら口唇部へ至る。口唇部は尖がっている。4ケ所で山形を形成いると考えられ、山の直下は膨らみをもちその箇所だけ外側へ張り出し、上面観は方形を呈すものと推察される。全体的なイメージとしては市来式を想起させる。

次に口縁部の状況であるが、山形を呈すものとそうでないものがみられる。量的には平口縁のものが多く得られているが、破片の中には完形において山形口縁の一部をなす資料もあったかと推察される。

これを器形と関連させてみるとハの器形を有すものに山形を示す資料が多く、イ・ロの器形を示すものにはほとんど見受けられない。

山形頂部を有するものの形状をみると①低平な山（頂部と裾部の差が1㎝前後）、②高い山（頂部と裾部の差が2㎝前後）、③口縁部の一部を一段高くしたものの3種が見受けられ①の資料が圧倒的に多く得られている。①に属するものは図83の315、図84の333、図86の339などで、②に属するものは図84の332、③に含まれるものは図87の361である。

山形の部分においてコーナーを有する資料はほとんど見受けられない。今回の資料では図84の332に示した資料が明確にコーナーを有す資料で、図83の312も若干のコーナーを形成する。また、図87の367は低平な山の直下に上方が約5㎜、下方が約10㎜の厚さを有する断面方形状の凸帯を1条縦位に配している。そのため、その部分でコーナーを形成する。

図84の333に示したものは5ケ所に山を設ける珍しい資料で、今回得られた唯一のものである。低平な山形をつくり、頸部から口唇部へはゆるやかに外側へ膨らんでいる。そのためコーナーは有さないものの、上面観は一辺一辺がゆるやかに弧状を呈す五角形となっている。

他のものは全て4個の山を設けており、それが一般的な山の個数であったと考えられる。

口縁部の状況に目を転ずると、肥厚するものとしないものがみられ前者が圧倒的に多く得られている。図85の334、図86の347・348などが肥厚を示さないものである。

肥厚帯の幅については3㎝、4㎝、5㎝前後のものがみられ、山形口縁においては山の部分で長くなる。この肥厚帯の幅と文様の関連を表16に示した。これをみると、fタイプに幅の狭いものが多く、他の種は幅の広いものが主となる。特にaタイプは4㎝前後のものが多い。

表16　種と肥厚帯の幅

幅＼タイプ	a	b	c	d	e	f	合計
2.0～2.9cm	1					9	10
3.0～3.9cm	2	1		2	3	6	14
4.0～4.9cm	5	2	2	2		1	12
5 cm 以上	1			2	2	1	6
合　計	9	3	2	6	5	17	42

また、断面の形状をみると、幅広い肥厚帯を形成するものは長方形状に若干厚味を増すだけで、それほど明瞭な肥厚を示さない傾向にある。それに対し、幅の狭い肥厚帯を形成するものは、断面が三角形状になり厚さも増し、はっきりそれと判るようなつくりとなっているものが多い。

今回得られた資料の中には、図84の333に示すような2段の肥厚を形成する例も1点得られている。2段ともわずかにそれと判るような肥厚帯を形成している。下段の肥厚部外面は若干内側へ弧を描き凹面をなし、上段の肥厚部外面は若干外側へ弧を描き凸面を形づくっている。略S字状のかたちとなっており、類例の報告はあまり聞かない。

大きさ

完形を示せるものは得られていないが、口径・高さの推測可能な資料が7点、口径のみ推測出来るものが10点得られている。その他に口縁部は欠失するが、肥厚部下端の径が推定可能な資料が1点ある。

これらの資料から口径についてみると、10cm前後のものから30cm前後のものまであり、バリエーションに富む。これを細かくみていくと、10cm前後のものが4点、15cm前後のものが2点、20cm前後のものが6点、25cm前後のものが4点、30cm前後のものが1点である。

これからすれば20cm前後～25cm前後の口径のものを多くつくり、10cm前後の小型のものも比較的多く製作していたかと推察される。

高さについても15cm前後から30cm前後のものまで見受けられる。15cm前後のもの1点、20cm前後のもの3点、25cm前後のもの2点、30cm前後のもの1点の出土となっている。

以上のことからすれば、本貝塚の面縄東洞式は口径・高さとも20cm前後～25cm前後のものが普通に製作されていたと考えられる。

文様

今回得られた資料の施文範囲をみると、口唇部及び肥厚部外面とその直下、口縁部の裏面が対象となり、胴部以下は施文の対象となっていない。裏面に施文するものは図87の364～367の4点だけである。また、図84の332のように肥厚部直下に施文する例も非常に僅少で、両者は施文部位としては稀であったことが窺える。

口唇部に施文するものもそれほど多くはなく、口唇部を割りと平坦に整形しているaタイプ・bタイプ・eタイプに比較的よく見受けられる。口縁肥厚部に施文するが一般的であったと考えられる。

次に使用されている工具及び施文手法をみる。工具では先端の尖がったヘラ状工具及び先端の丸味を帯びたヘラ状工具が主流であるが、aタイプでは先端が叉状に分岐した工具や貝殻を利用したものなどが見られる。押し引き手法が圧倒的で、他の手法はほとんど見受けられない。

文様は上記の工具・手法による沈文を施すものがほとんどであるが、図83の321及び図87の367のように凸帯文を組み合わせる例も非常に稀ではあるが見受けられる。

今回得られた資料を文様の組み合せにより下記のように細分した。

aタイプ―曲線文が組み合されるもの

bタイプ―斜位の押し引き文を主に籠編み状の構図を示すもの

cタイプ―横位文が一部で垂直になる文様を組み合せるもの

dタイプ―横位文が一部で段を有すステップ文が組み合さるもの

eタイプ―横位文とステップ文以外の組み合せのもの

fタイプ―横位文のみの施文

の6種で、この他にこれら6種のいずれに属せしめられるものか判断のつかない小破片も多く得られている。

量的にはaタイプに属するものが多く、bタイプ・fタイプと続きcタイプが最も少ない（表17）。層位的には第Ⅵ、第Ⅶ層と下位の層で大半が出土し特に第Ⅵb層で多かった。

＜aタイプ＞

曲線文が組み合されるもので、他種との大きな違いは使用される工具にみられる。即ち、先端が二・三叉に分岐した工具が多く用いられ、対をなす点による文様となっている。今回の資料をみると二叉のものが多い。また、図82の306・307は貝殻による施文かと考えられる。

本種は使用する工具が違うものの、押し引き手法が多く採用されていることから本項で扱った。

図81・82に特徴的なものを示した。施文部位は口唇部及び口縁部で、胴部以下はその対象になっていない。口唇部に施文するものは図81の290・294で口縁部と同様な工具による押し引き文を施している。

肥厚部外面に施文するのが普通で、289～292はゆるやかな曲線が認められる。イメージとして籠編み状の構図を想起させる。293は山形状の文様を組み合せる。294～296はUターンする押し引き文が認められ、297は最上段に上向きの弧状文を連続して施している。

301は先端が丸味を帯びた単ベラ工具を使用している。この種の工具は本種においては少ない。押し引き文により袋状の曲線を描き、その中に横位の押し引き文を1条配す。398～300・302も同様な構図を有していたかと推察される。

図82の303は波を抽象化したようなイメージを抱かせる押し引き文を連続的に施し、器面を囲繞させる。

304・305も同様な文様配置であったかと考えられる。

同図306・307に貝殻による押し引

表17　種別出土状況

種 / 層序	a	b	c	d	e	f	合計
Ⅰ				1		2	3
Ⅲ	6	1				2	9
Ⅳ	1	1				2	4
Ⅴ	4	1			1		6
Ⅵa	9	3		3		4	19
Ⅵb	20	13	4	10	5	19	71
Ⅶa	1					1	2
Ⅶb	5	4	2	1	3	8	23
合　計	46	23	6	15	9	38	137

図81　21地区ハ第２群面縄東洞式

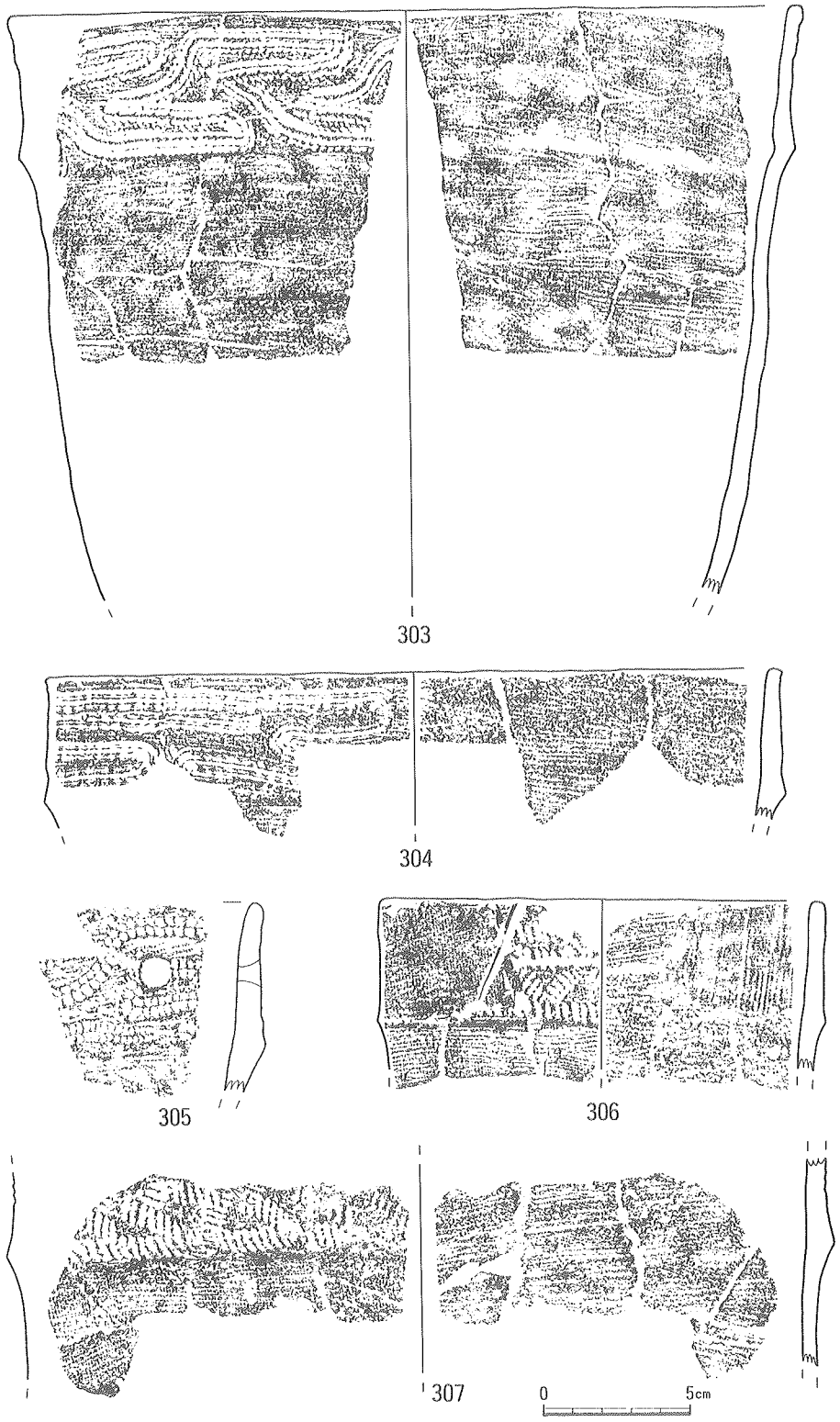


図82　21地区ハ第２群面縄東洞式

き文を施す資料を示した。貝殻を約1㎝幅にして工具としている。文様は斜位方向、横位方向の押し引き文を組み合せるが、全体的な構図は不明。貝殻を施文具として用いていることからここに示した。

＜bタイプ＞

特徴的なもの5点を図83の308～312に示した。308・309・312に示したものは口唇部・肥厚部外面に施文するもので310・311は口唇部無文である。308は山形頂部を平坦にするように、その部分だけに先端の尖がった工具による押し引き文がみられる。312は破片の全面に308と同様な文様を配しており、それからすれば口唇部全面に施文していたかと考えられる。309は先端の分岐した工具による押し引き文を配すが、全面に施したかどうかは不明。

口縁部の文様をみると310以外は先端が三角形状に尖がった工具による押し引き文で、施文は深い。工具の幅は308・311が5㎜・309が4㎜、312が7㎜である。308は右から左へ、他の3点は左から右の施文である。310は棒状工具を使用している。施文は深く文様の下部で押し引きの凹凸がみられるものの、拓影では沈線のようになる。左から右方向へ施文。

＜cタイプ＞

上部の横位文と下部の横位文が一部で垂直方向への施文となり、カギ状にフックする形の文様となる。出土量は最も少なかった。3点を図示した。

図83の313～315がそれで313・314は同一個体の可能性もある。いずれも上・下段には1条の横位文を配している。

313・314は3㎜幅の315は4㎜幅の先端三角形状のヘラによる押し引き文が施される。左から右方向へ施文しており、施文は深く明瞭である。314は3条の押し引き文が1組でカギ状になっており、全体のイメージとしてうず巻き状になる。315は約4㎝の押し引き文が単位となり、ステップ状の文様を想起させる。

＜dタイプ＞

特徴的なものを図83の316・317、図84の329～333に示した。図84の332だけが肥厚部直下にも施文している。他は肥厚部外面のみを施文の対象としている。ただ、図84の333は2段の肥厚を示す資料で、その2段の肥厚部外面が施文の対象となっている。

図83の316・317、図84の329・330の4点は上・下段に1条づつの横位文を施し、その間に比較的長い押し引きを単位とするステップ文を配している。図84の329をみると、水平方向の押し引き文が約5㎝の所で1段下がり、そこから水平方向へ約5㎝施して1単位としている。

4点とも先端の尖がったヘラ状工具が使用されており、図83の317が3㎜幅で他の3点は5㎜幅のものが使用されている。施文は深く明瞭で左から右へ施文している。

図84の331はステップが2段になるものを口縁の上部に配し、下段は横位文を2条施している。先端の尖がった工具であるが、その下端がわずかに分岐したようになっている。施文は深く明瞭で、左から右へ施している。

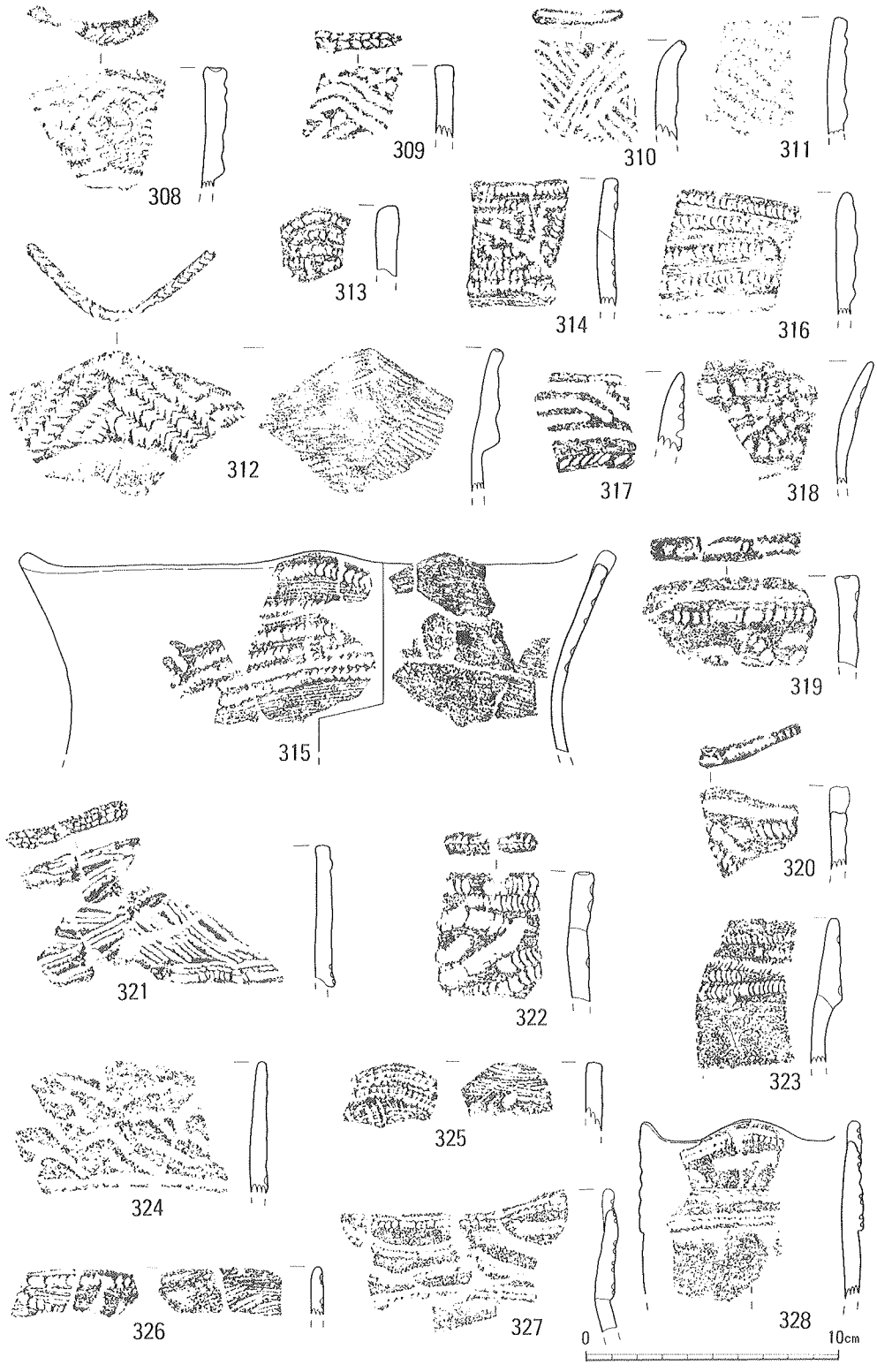


図83　21地区ハ第２群面縄東洞式

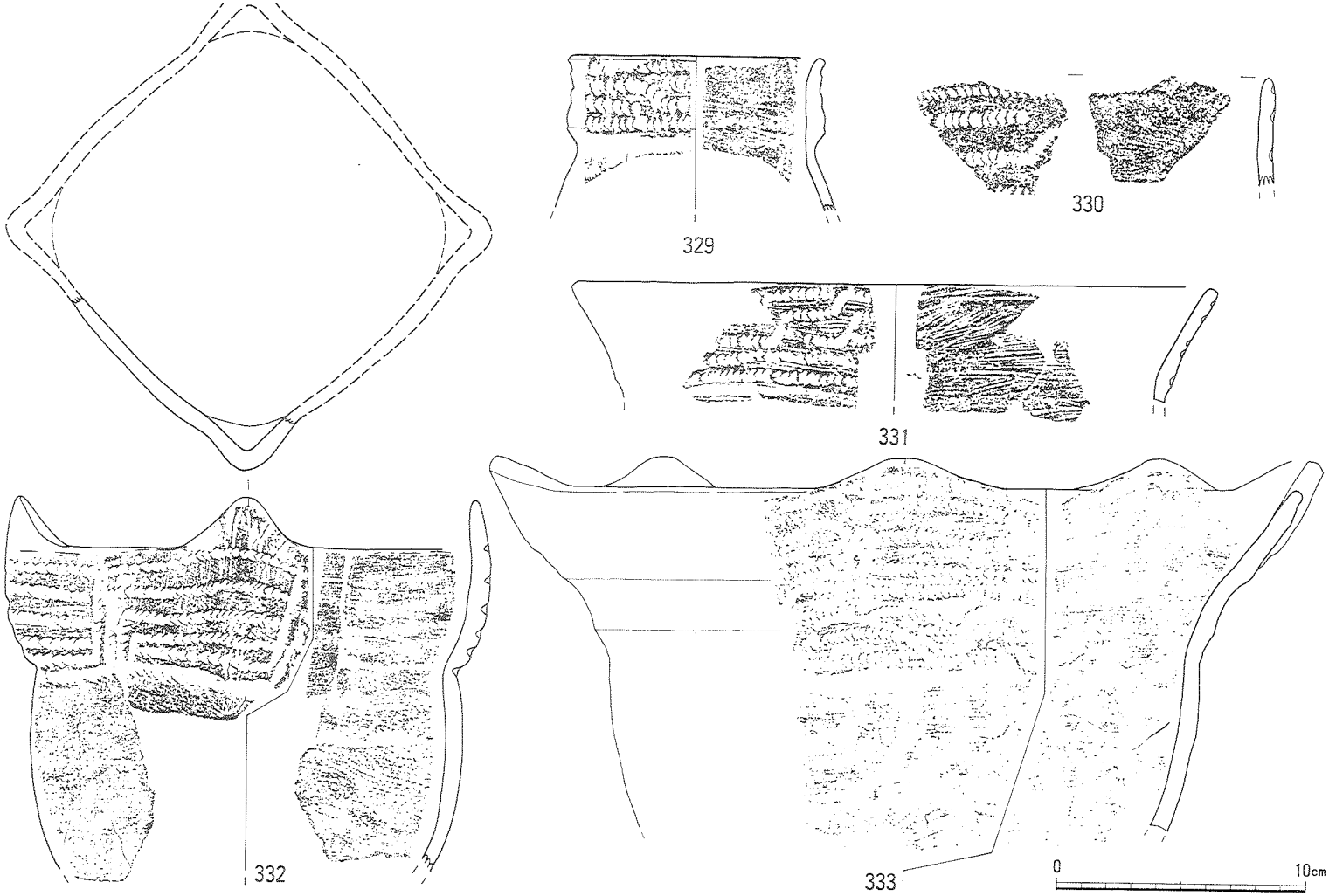


図84　21地区ハ第２群面縄東洞式

同図332は肥厚部外面を区画するように口縁上端から肥厚部下端までの大きなステップ文を幾つか配し、その間をそのステップに沿った文様で埋めている。肥厚部直下に横位押し引き文を1条配す。4㎜幅の工具が使用されており施文は深い。左から右へ施文している。

343は2段の肥厚部外面に横位文・ステップ文を交互に配している。つまり、口縁部上端と1段目の肥厚部下端に横位押し引き文をそれぞれ1条施し、1段目の肥厚部の中段及び2段目の肥厚部をステップ文で埋める。施文は深く明瞭であるが、ラフなタッチで施文する。4㎜幅の工具を使用し、左から右へ施文している。

＜eタイプ＞

図83の318～328に示した11点が本種に属す資料である。口唇部・肥厚部外面が施文の対象となっている。口唇部に施文する319～322の4点は口唇部が平坦に成形されている。口唇部文様も押し引き文であるが、320の資料は山形頂部に1個の刺突文が見られる。また、使用されている工具をみると、322は口縁部の工具と異なる工具を用いているが、他の3点は同様な工具が利用されている。

次に口縁部の文様であるが、横位文に挟まれた部分の文様構図はほとんど判然としない。ただ、斜位方向の押し引き文が多く採用されているが、337の資料はゆるやかな弧を描く押し引き文、324は山形文などを組み合せている。

また、321の資料は押し引き文の一方でアクセントをつけるように若干の段がみられ、あたかも凸帯を付したようなイメージをだかせる。

使用されている工具をみると、321が三叉工具、327が叉状工具を用い、他の資料は単ベラ工具が使用されている。321・327の2点は前述したaタイプとの関連でとらえるべきものかも知れない。325も先端が若干分岐したヘラ状工具が用いられている。単ベラ工具は3～5㎜幅のものがみられる。

施文の方向はほとんどが一定方向へ押し引きするが、322・323は1条1条施文の方向を変えている。施文は深く明瞭である。

＜fタイプ＞

本種に属すかと考えられる資料を図85～図87に示した。図87の365・367は山形直下で垂直方向へ折れ曲がる部分もみられるがとりあえずここに示した。

施文部位は肥厚部外面（口縁部）・口唇部・内面がその対象となっている。内面に施文するものは図87の364～367で364と367は器形的な面からすれば、口唇部施文と同じような意味をもつものかも知れない。

口唇部に施文するものは口唇部を平坦にするものがほとんどで、押し引き文が施される。

口縁部の文様は肥厚部外面が文様帯となる。ただ図85の334、図86の347・348は外反を示すだけで肥厚しない。この3点は外反する部分が文様帯となっている。

今回得られたものの主流は押し引きが途中で切れ、器面を囲繞しないものである。押し引き

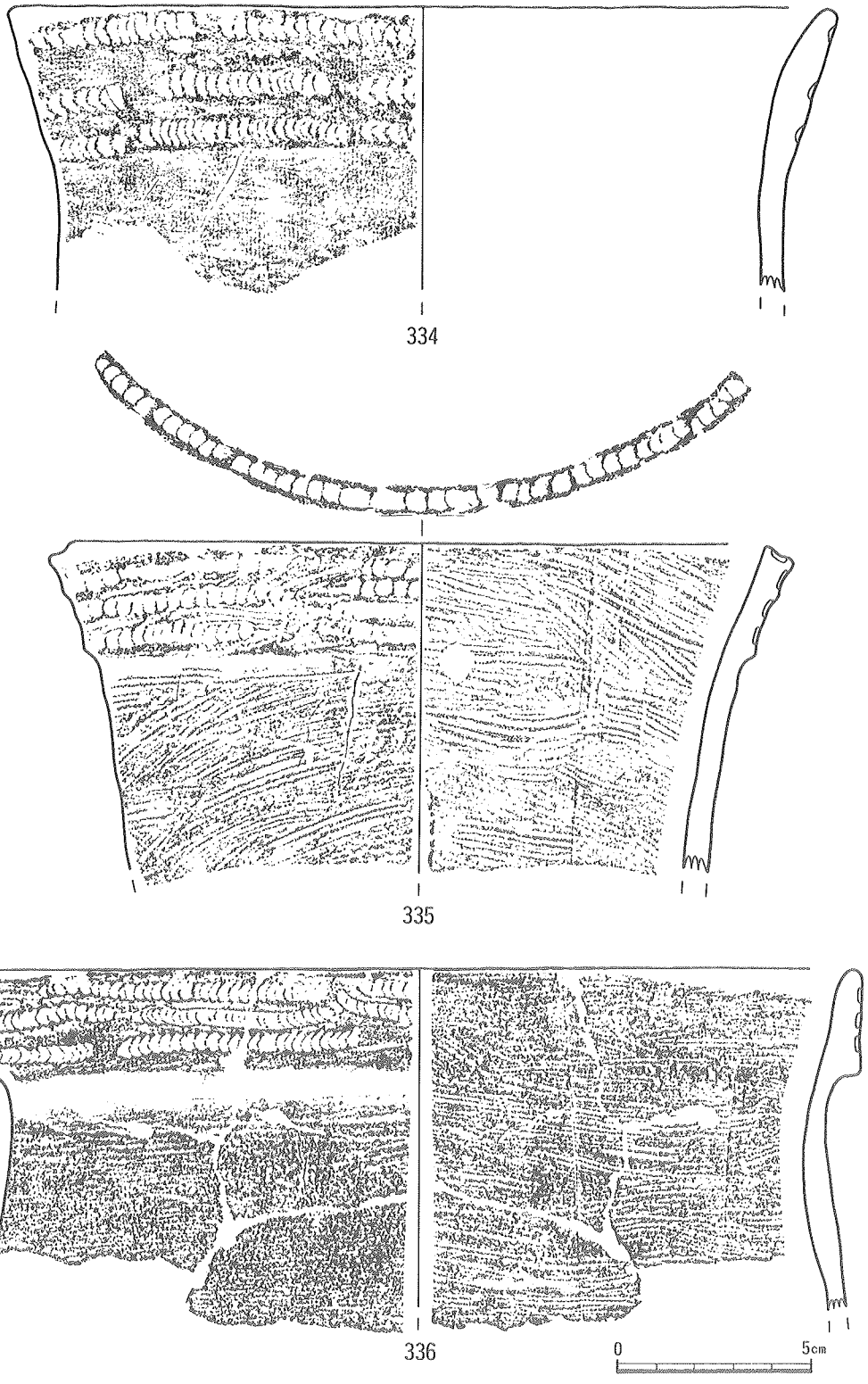


図85　21地区ハ第２群面縄東洞式

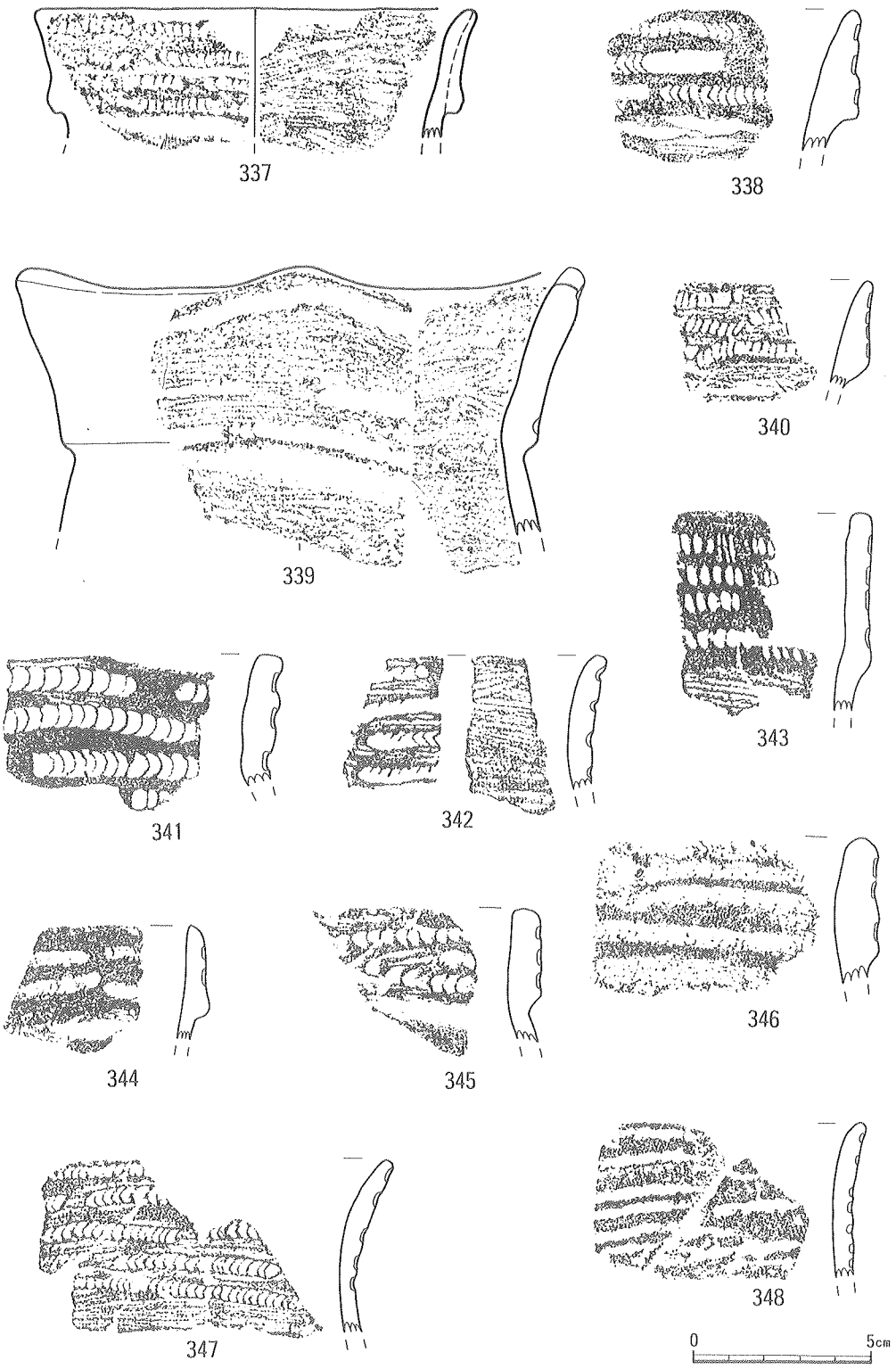


図86　21地区ハ第２群面縄東洞式

文が器面を囲繞するかと考えられるものは、図87の358に示す資料などである。押し引きの単位が判明する6点をみると、2～10㎝で単位にそれほど統一性はみられない。

使用されている工具をみると、先端が尖がり三角状を呈すもの（図85の334、図86の339）、先端が丸味を帯びるもの（図85の335・336）、及び平坦なもの（図86の341）などが見受けられる。施文は深く力強い。施文の方向は図86の341のように右から左へ施すものもみられるが、左から右方向へ施すものが普通である。

図87の363は肥厚部外面に横位の刺突文を密に施すものである。施文手法やその配置及びその他の特徴（器表面は丁寧なナデ調整・混入物に雲母片を密に含む）などからも他の資料とは異なり、留意される。また、同図366は凹点を有する凹線や、先端の尖がった工具による押し引き文を2・3残して他を凹線でつぶした箇所も見られる。市来式との関連で注目される。

同図367は山形直下に縦位の凸帯を配し、下方には横位凸帯を廻らし断面三角形状の肥厚部を形成する。この凸帯により山形部での外側への張り出しや、コーナーをより強調している。器形からすれば、浦添貝塚出土の市来式を想起させる。

文様をみると、口唇直下・下方の凸帯直上に横位押し引き文、縦位凸帯上には下から上への押し引き文を配している。その縦位凸帯を挟んで、両側へ3㎝前後の長さで押し引き文を施す。この押し引き文は粗く深いが、他の押し引き文は細かく浅い。他の土器に比べ焼きがしっかりしており、堅致である。

その他の特徴

ここでは前記した器形・文様以外の特徴（器面調整・器色・胎土・混入物）について述べる。

まず、器面調整についてみると、表・裏面ともナデ調整を施すものがほとんどで、擦痕を残すものは少ない。擦痕を残す場合は両面に残すものが多く、次いで裏面にのみ残すものが続き、表面にのみ残るものは非常に少ない。つまり、ナデ調整を施す場合には表面に重点がおかれていたと考えられる。

文様との関連でみると、c・dタイプは擦痕の残るものが多い。資料が少ないという弱点はあるものの、1つの留意点としてげられる。この2種以外はナデ調整を施したものが圧倒的に多く得られている。

次にこれら資料の器色についてみる。暗褐色・黒褐色・赤褐色・黄褐色・灰褐色の5種みられるが、後2者は非常に稀れである。今回得られた資料からすれば、暗～黒褐色を呈すものが本型式の一般的なもので、それに赤褐色を呈すものが加わる。非常に数の少ない黄褐色と灰褐色を呈すものは、前者がbタイプ（2点）、eタイプ（2点）、fタイプ（1点）、後者はbタイプで1点の出土となっている。

最後に胎土・混入物であるが、ほとんどのものが胎土は細かい。混入物としてはチャートの破片や石英粒などを密に混入するものが普通である。b・d・fタイプにおいては数は非常に少ないものの、雲母片を多量混入するものもあり注意される。

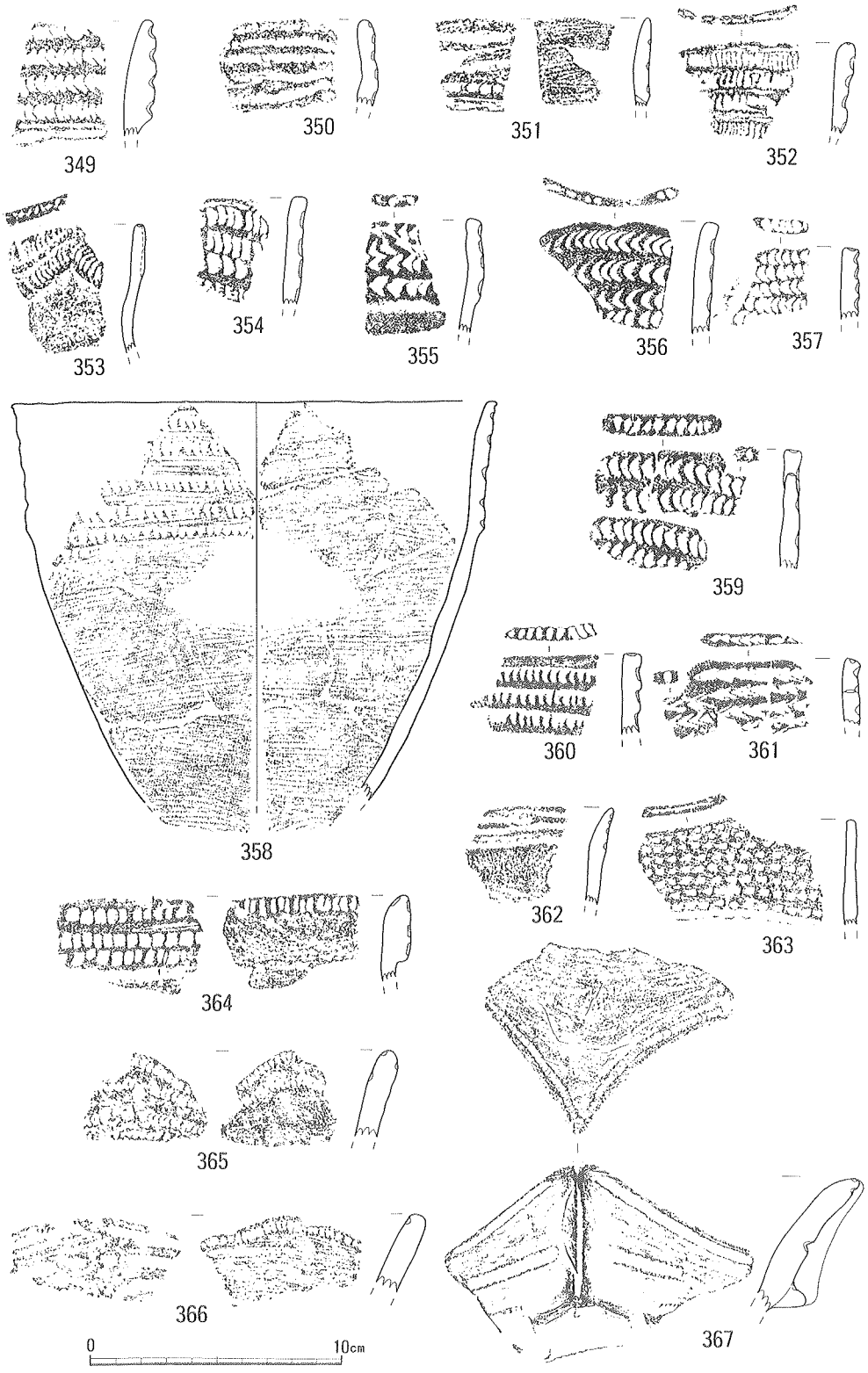


図87　21地区ハ第２群面縄東洞式

表18－1　復元土器観察一覧

図番号	タイプ	推定口径 推定器高 (cm)	口縁部の形状	肥厚帯の幅 (cm)	口唇部の文様	器面調整	器厚 (cm)	出土層位
図81 289	a	10.5 15	平口縁	4	なし	表・裏面とも横位の擦痕が残る。	0.5	Ⅶb
図81 301	a	19 不明	平口縁	3	なし	両面とも丁寧なナデ調整	0.6	Ⅶb
図82 303	a	26.5 31	平口縁	4.8	なし	ナデ調整 裏面の一部に横位の擦痕	0.6	Ⅵb
図82 304	a	25 不明	平口縁	4.1	なし	ナデ調整 表・裏面に擦痕わずかに残る	0.5	Ⅵb
図82 306	a	15 不明	平口縁	4	なし	ナデ調整 肥厚部直下と裏面に擦痕残る	0.5	Ⅵb
図82 307	a	肥厚帯下部で 27	胴部	不明	なし	肥厚部直下と裏面に擦痕わずかに残る。	0.5	Ⅵb
図83 315	c	23 不明	波状 (低平な山)	5	なし	表・裏面とも擦痕残る。 山の直下を明瞭	0.5	Ⅵb
図83 328	e	9 14	波状 (ゆるやかな山)	山 4.5 低 3.5	なし	ナデ調整 表・裏面とも滑らかである。	0.4	Ⅶb
図84 329	d	10 不明	平口縁	3	なし	ナデ調整 裏面ヘラによる調整痕残るが表面なめらかな仕上げ	0.4	Ⅶb

表18－2　復元土器観察一覧

図番号	タイプ	推定口径 推定器高 （cm）	口縁部の形状	肥厚帯の幅（cm）	口唇部の文様	器面調整	器厚（cm）	出土層位
図84 331	d	25.5 不明	平口縁	4	なし	表・裏面とも擦痕残り、裏面で著しい。	0.5	VIb
図84 332	d	長径19 短径14.5 21.5	波状 （傾斜が急）	山 7 低 5	なし	ナデ調整 表・裏面とも擦痕残る部分もあり。	0.6	VIb
図84 333	d	33 25	波状 （低平な山が5個）	山 低 一段目 4.3 3.3 二段目 6.3 5.3	なし	表裏面とも擦痕が著しい。	0.7	VIb
図85 334	f	21 不明	平口縁	3.5	なし	ナデ調整 表面に擦痕が残る。	0.6	VIb
図85 335	f	19 18	平口縁	2.5	先端の尖がった工具による押し引き文が全面に施される。	表・裏面とも擦痕が明瞭に残る。	0.6	VIb
図85 336	f	22.5 25.5	平口縁	2.7	なし	ナデ調整を施すが徹底せず、表裏面に擦痕が残る。	0.7	VIb
図86 337	f	12.5 不明	平口縁	3	なし	裏・表面に擦痕が残こり、特に裏面は顕著に残る。	0.5	VIIb
図86 339	f	16.5 不明	波状 （低平な山）	山 5 低 4	なし	器面は剥落している所がみられるが、残存部は表・裏面とも擦痕が残る。	0.6	VIb
図87 358	f	19.0 20.0	平口縁	5	なし	両面とも軽くナデているだけで、擦痕は顕著に残る。	0.5	VIIb

② 嘉徳Ⅰ式

今回の調査により240点余り得られている。第2群の中では面縄東洞式に次いで多く出土しており（表11）、面縄東洞式とともに本群の中核をなす。ほとんど小破片の資料であるが、図92の396に示した資料は1部ではあるが口縁部から底部まで接合出来、全形の窺える資料である。その他にも口縁部から胴部にかけて推定復元を試みたものや口縁部から胴部までの図上復元を試みた資料も10点余り得られている。

今回得られた資料は総て深鉢形に属し、明確に他の器種を示すものは得られていない。特徴的なものを図88～図97に示した。以下、これらを中心に本型式の特徴について概略を述べる。

器形

推定復元図を示した13点の資料及び比較的大き目の破片をみると概ね次のように分けらける。

イタイプ―底部からほとんど直線的に開きながら口縁部に至るもの

ロタイプ―口縁部が外反し、頸部がしまり、胴部の膨らむもの

ハタイプ―口縁上端が若干外反するものの、以下は胴部も張らず直線的に底部へ向うもの

以上の3種である。量的にはイタイプに属すものが多く、一般的な器形であったかと推察される。イタイプに属するものは図90の384、図92の395・396、図93の399などで、図92の396は低部でくびれ、胴部が若干脹る。ロタイプに属すものは図89の382で、図95の425・436なども本種に類するものとみてよい。ハタイプに属すものは図90の383、図91の394、図97の457などで、推定復元図を示した2点（図90の383、図97の457）はいずれも小型に属する資料である。

次に口縁部の状況をみると、山形を示すものと示さないものがある。推定復元図を示したものは、図90の383・図93の398、図97の457の他は総て山形を有す資料である。また、破片の資料でも山形を有すものが割り合い多く見受けられる。これからすると口縁部を山形に成形するものが普通であったかと思われる。そのため、山の形状にもかなりのバリエーションがみられる。

①―なだらかな山を形成するもので、頂部と裾部の差が約2㎝のもの（図89の382）

②―なだらかな山を形成するもので、頂部と裾部の差が約1㎝のもの（図93の397）

③―山の裾部を1段下げるもの（図90の384）

④―山の頂部を1段上げるもの（図90の385）

⑤―口縁部の1部を半円状に盛り上げ山を形成するもの（図92の395）

⑥―口縁部の1部を方形状に盛り上げ山を形成するもの（図95の425）

⑦―口縁部の1部を台形上に盛り上げ山を形成するもの（図88の380）

の7種である。量的には②が若干多く得られているものの、いずれの形状の山が主体をなしていたか明確にし得ない。図92の396は山の部分を欠失するため図90の384を参考に復元した。

これらの資料とは別に図95の433のような例もみられる。口縁部上端に表面から裏面へ折り曲げるように凸帯を配し、その1方を口唇上から突出させ山形をみせる。

また、これら山形を呈す箇所でコーナーを有し、上面観が方形をなすものも見られる。図89の382、図91の389、図92の395が明確にそれと判る資料で、図91の386～388、390・391もこれに類するものである。

これを先述の山の形状との関連でみると、図89の382は①に、図91の386・388～491は②に、図91の387は⑥に、図92の395は⑤に属す。つまり、①・②・⑤・⑥の形状を示す山形口縁の場合、その箇所でコーナーを有す例もあることが判明した。

口縁部の状況をみると、肥厚を示すものと肥厚しないものがある。肥厚の有無が明確に判明する大型の破片をみると、図92の395だけが肥厚を示さない。他は総て肥厚を示すが、非常に微弱な肥厚で判然としないものも見られる。ただ、総て3㎝以上の幅広い肥厚帯をつくる。幅広の微弱な肥厚帯を有すものが、一般的であったかと推察される。

口唇部の形状はほとんどのものが平坦に整形されている。

大きさ

山の裾部から底部まで完形を示せるものが1点、口径・高さの推定出来るものが8点、口径だけが推算出来るもの4点得られており、これらの資料から本型式の大きさについてみる。

まず口径についてみると、最小は約8㎝で最大は約31㎝である。細かくみれば、10㎝前後のものが2点、15㎝前後のもの2点、20㎝前後のもの1点、25㎝前後のもの5点、30㎝前後のもの3点である。25㎝前後のものが多く、本型式の口径の主流であったかと推察される。

高さについては、図92の396が口縁部から底部まで接合出来、明確に高さを示せる資料である。山の頂部を欠失するため、山の裾部までの高さであるが18.7㎝を測る。口縁部が開くためか底径も大きく9㎝を測る。その他の資料をみると、最小の口径を示す図97の457が約10.5㎝で低い。図89の382が口径に比してやや高くなっているが、他は口径とほとんど同様な数値を示す。

このことからすれば、本型式は口径・高さとも25㎝前後のものが多かったかと考えられる。

文様

今回得られた資料の施文範囲をみると、口唇部・口縁部に施文するものがほとんどである。ただ、図94の421に示したものは肥厚部下端にも施文している。裏面に施文するものはみられない。このことから、本貝塚の嘉徳Ⅰ式は口唇部・口縁部の2ケ所に施文するのが普通で、非常に稀れな例として肥厚部の下方にも施文するものがみられる。

施文の際に使用される工具・施文手法をみる。施文具は先端の尖がった工具が圧倒的に優位を占め、僅かに先端の丸味を帯びた工具や平坦な工具が使用されている。いずれの場合も幅には若干の差がみられ、特に前者の場合には約3㎜のものから10㎜前後の幅を有すものまで見られる。

施文の手法としては押し引き手法が普通に用いられているが、刻文的な手法のものもわずかに得られている。

文様は前記の施文具・施文手法により施される沈文がほとんどである。しかし、図95の433は口縁部上端の表・裏面にまたがり、扁平な凸帯（幅約1㎝）をリング状に配す。凸帯上には先端の尖がった工具（幅約6㎜）による押し引き文を1条施している。凸帯を配す資料はこの1点だけである。

本型式は口唇部・口縁部が施文の対象となっており、それぞれについてみる。

図94の405に示すものは口唇上に文様のみられないもので、今回得られた資料の中では非常に僅少な例である。他はほとんど総て口唇部に施文しており、大型の資料からすれば口唇部全面に施文していると考えられる。

文様の種類は比較的豊富であるが、横位押し引き文を左から右へ施すものが圧倒的に他種を凌駕しており、一般的に採用された文様であることが窺える。本種以外のものは、図89の382のような斜位の押し引き文を施すもの、図94の403に示すような斜位の刻目文、図94の404に示すような縦位の刻目文、図94の410のような刺突的な刻文を施すものが見受けられるが、量的には非常に僅少である。

次に口縁部の文様に目を転じると、本型式の特徴は前記の工具による押し引き文と沈線の組み合せにある。今回得られた資料を全体的な構図により下記のように分類した。

aタイプ―籠編状構成を示すもの（くずれた形状のものも含む）

bタイプ――部にステップ状の構図を示すもの

cタイプ―横位方向の文様が主体となるもの

dタイプ―沈線を主に一部に押し引き文を配すもの

eタイプ―沈線による区画の幅が狭く密になり、その間に押し引き文を1条配すもの

fタイプ―上・下端あるいはその一方に押し引き文を配し、間に斜沈線を施すもの

gタイプ―斜沈線と押し引き文を交互に施すもの

以上の7種で量的にはaタイプのものが圧倒的に優位を占める。さらに細分も可能かと考えられるが、ここでは一括した。bタイプ以下のものはいずれも出土量は僅少であった。層位的な出土状況は表19に示した通りである。以下に説明する。

表19　種別出土状況

種＼層序		a	b	c	d	e	f	g	合計
Ⅱ							1		1
Ⅲ		6	1	4	1				12
Ⅳ		3	1				1		5
Ⅴ		1	1				1		3
Ⅵ	a	5	2	3	1	2			13
	b	44	6	16	6	5	15	11	103
Ⅶ	a	2						1	3
	b	14	2	2	5	1	6	2	32
合計		75	13	25	13	8	24	14	172

＜aタイプ＞

最も多く得られており本型式の主体をなす。特徴的なものを図88～図92・図93の397に示した。

大まかにみれば押し引き文と沈線を密に組み合わせるもの、上・下の文様の交点においてわずかな無文空白の箇所を設けるもの、沈線の区画が縦位のステップ状になるもの、山形直下でのみ籠編み状構成をなすものなどが見られる。

図88の368・372・374や図89の382、図90の383・384、

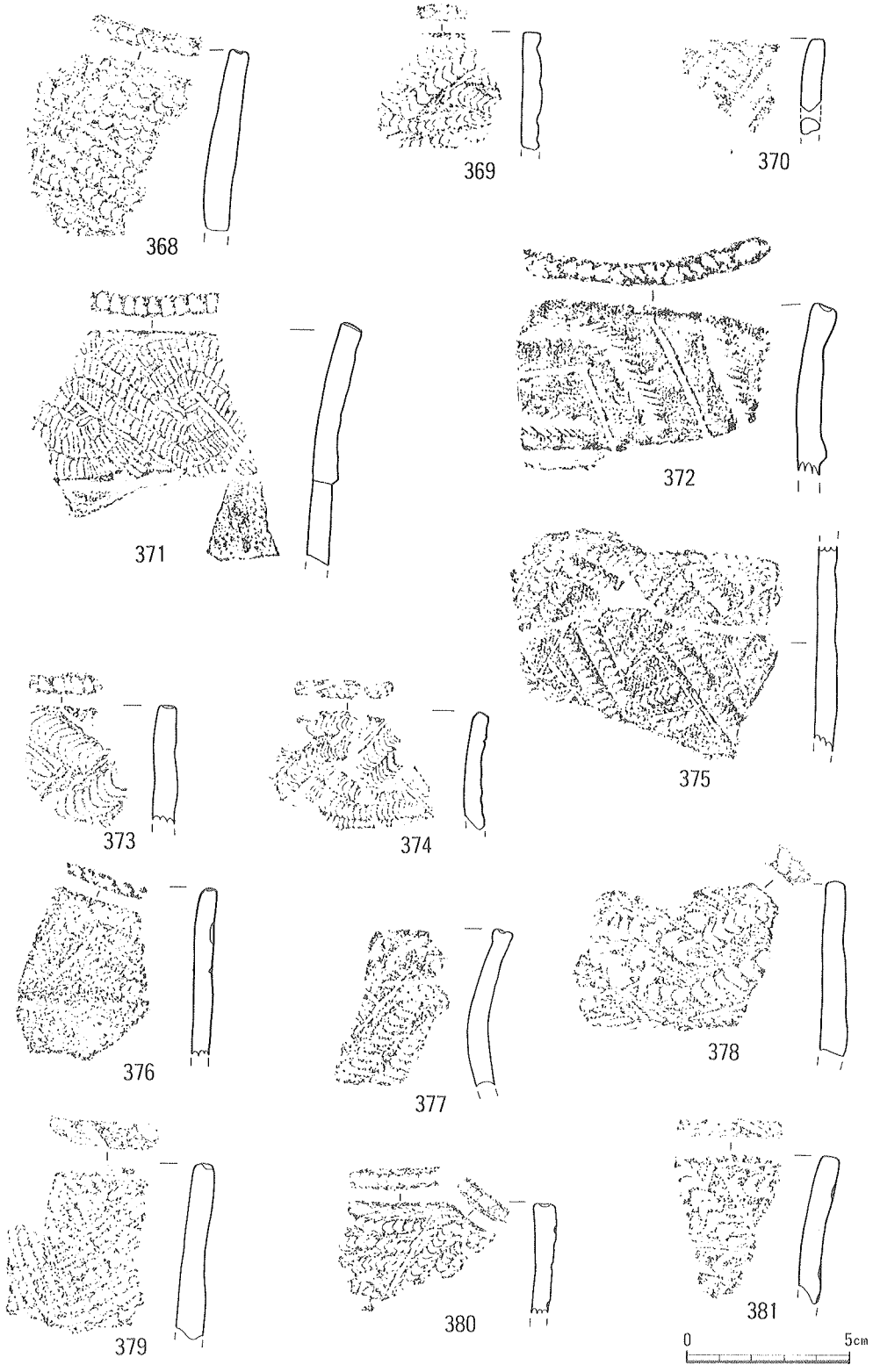


図88　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式

図91の386～390などが密に施すもので、一区画の文様がきっちりと組み合わされて配置される。一区画内の押し引き文の条数は２～４条のものが多くみられるが、図88の372、図90の383は一区画内に１条の押し引き文を施す。比較的ゆったりとした構図になるが、特に図88の372は区画の沈線文と間に施される押し引き文との間に無文の空白部を設けている。

施文工具の幅は３～６㎜のものが多く、押し引き文を１条づつ区画内に配すものは約１㎝を測る。また、一区画の単位が長方形状に小さ目になるもの（図89の382、図91の388～390）は口縁部の上面観が方形を呈している。

また、図88の372、図90の384の資料は口唇下１～２㎝の箇所に小孔を設けるもので、前者が１個、後者が２個認められる。後者の場合２個の小孔の間から破損しており、この小孔はいわゆる補修孔と考えられるが、前者のものについては不明。

図88の371・375及び図90の385に示したものは、区画された文様を組み合わす際その交点において４角のわずかな無文空白部をつくる。

371は先端の平坦な工具を使用している。施文具の幅は前２者が約６㎜、後者は10㎜を越える。一区画内の押し引き文の条数は371が２～３条、375が２条、385が１条である。

押し引き文を区画する沈線を斜位方向のステップ状文を採用し、その間に押し引き文を施して籠編み構成を描出するもので、図91の394、図92の395・396に示すものがこれにあたる。395は先端の平坦な工具が使用され、口縁部の上面観が方形を呈す。

一区画内の押し引き文の条数は395が３条、394・396は２条である。ただ、394の資料は１部で３条になるところも見受けられる。

図93の397に示したものは山の直下において籠編み状構成を示すものの、その箇所以外では水平方向の文様が主となる。先端の丸味を帯びた工具を使用しており、描き出される文様は弧状を呈す。約８㎜幅の工具で、一区画内の条数は２条である。

＜ｂタイプ＞

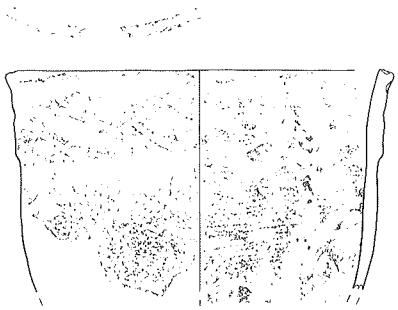
図93の398や図94の400～407に示したものが本種に属す。１部でステップ状の文様がみられるだけで、全体としては水平方向の施文が多くなる。一区画内の押し引き文の条数は１～２条で、１条づつ区画するものが多くなる感を受ける。しかし、ａタイプにみられた１条区画のものと違い、区画内が狭い。

図94の401だけが先端の丸味を帯びた工具が使用されている。

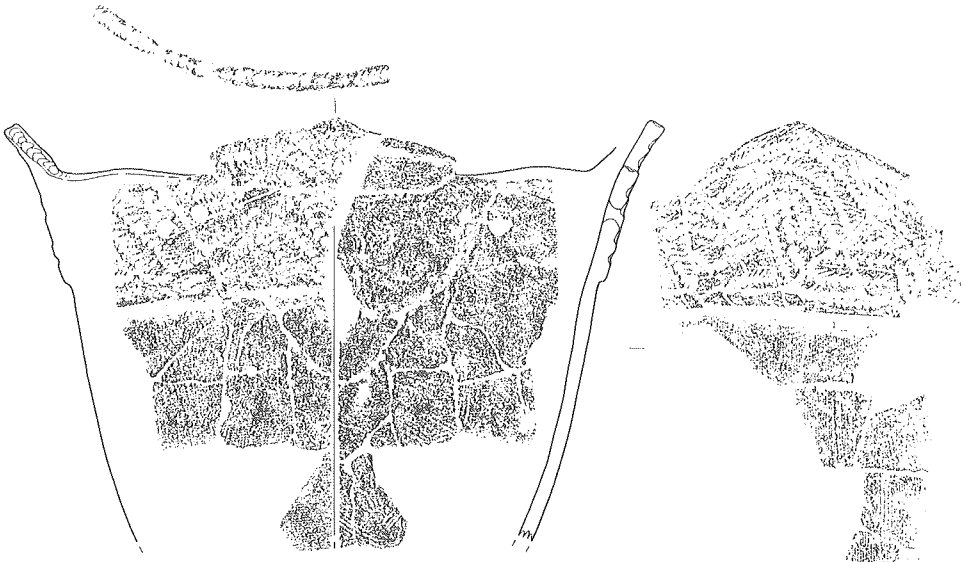
図94の413～424にａタイプ～ｃタイプに含まれる胴部の資料を示した。その中でも421の資料は唯一肥厚帯の下部まで施文するものである。肥厚部外面に籠編み状構成の文様を配し、肥厚部直下に同様な文様を１条横位に施す。その下方に一区画内２条の押し引き文を配す文様を施しているが、全体の状況は不明。押し引き文の工具も肥厚部外面に使用されている工具の半分（約３㎜幅）のものを用いている。

418の資料だけが先端の平坦な工具を使用している。420はｃタイプに属す資料である。

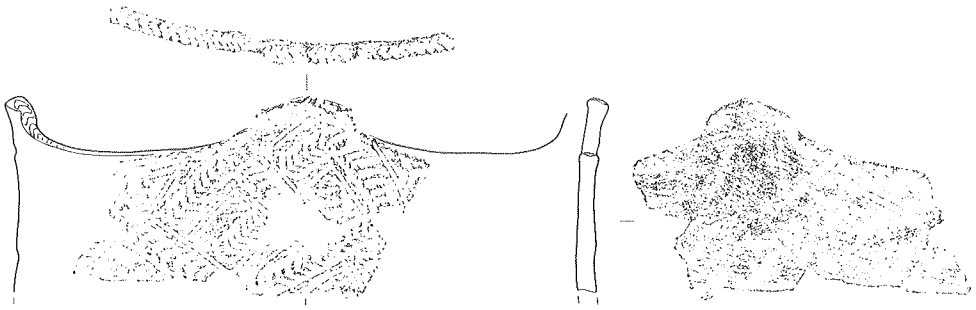
図89　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式



383



384



385

0 10cm

図90　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式

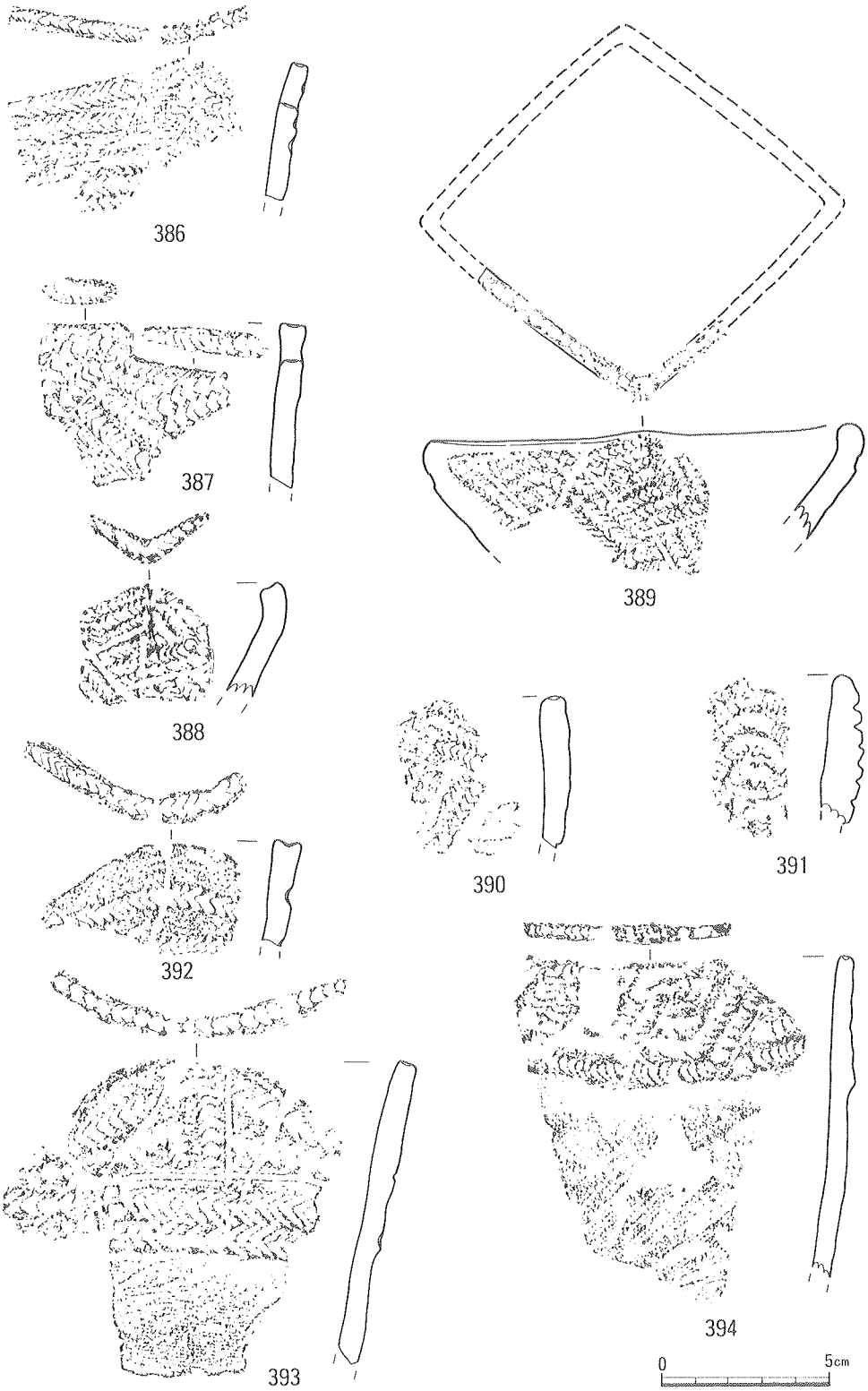


図91　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式

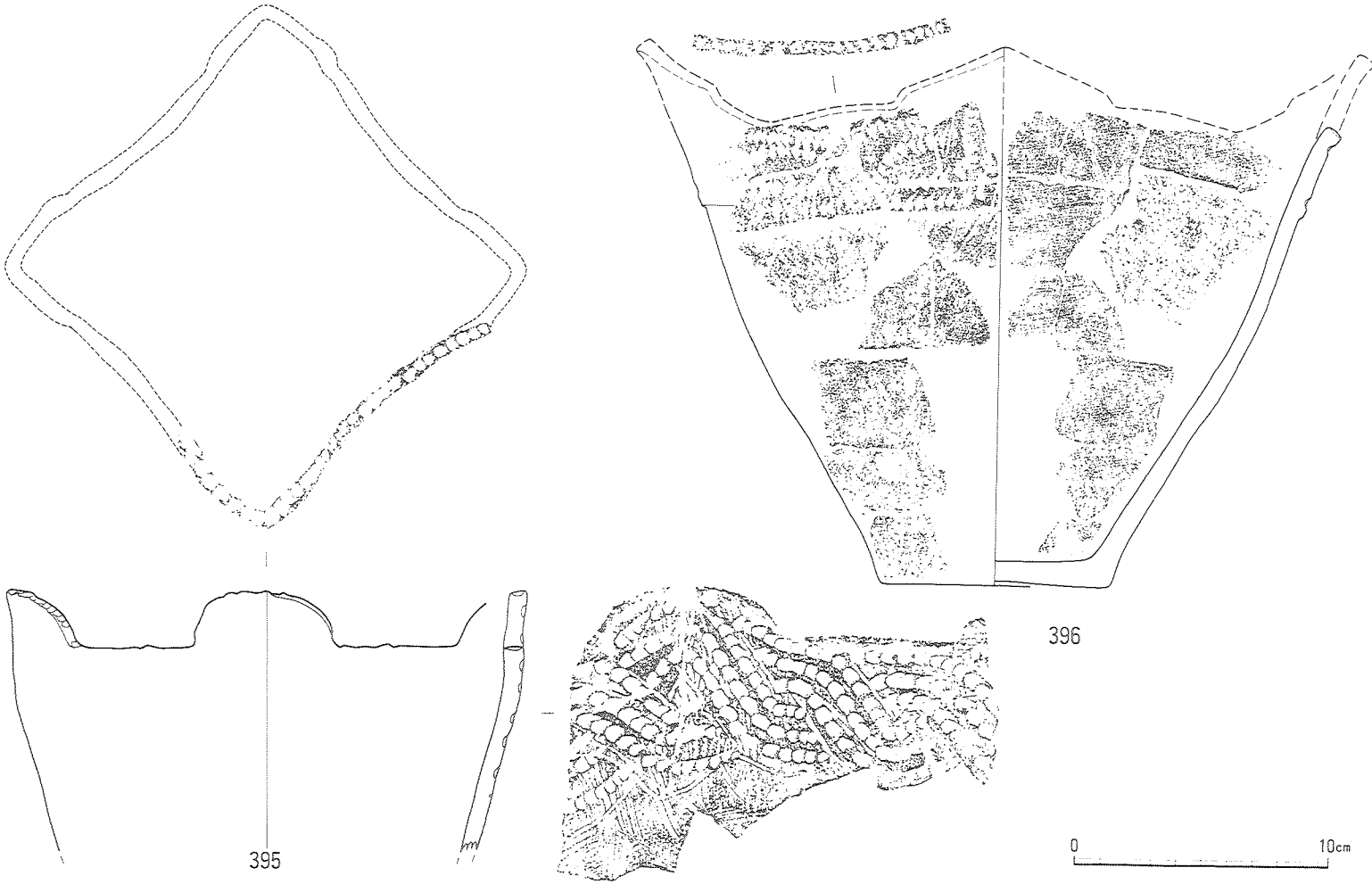


図92　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式

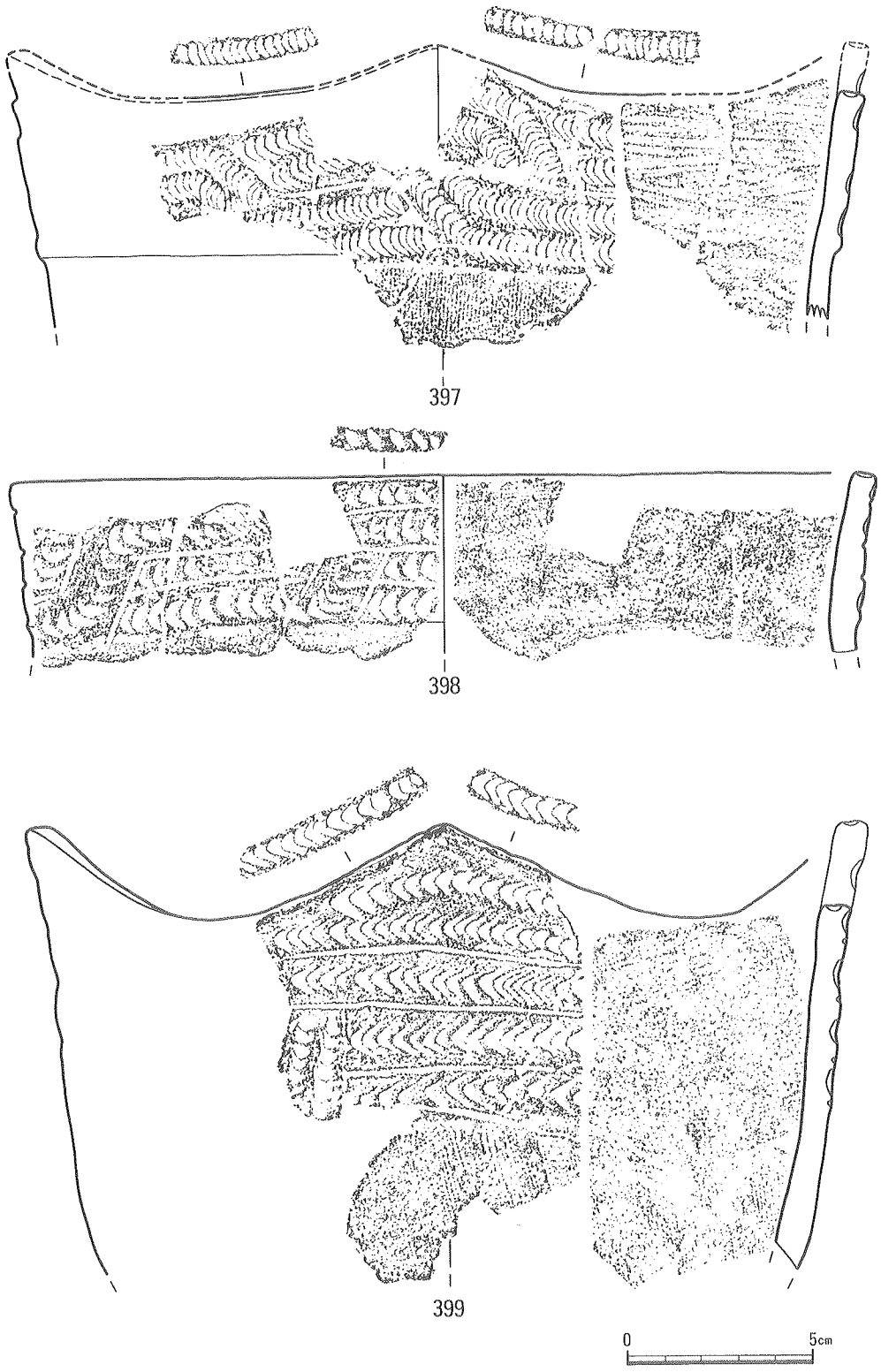


図93　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式

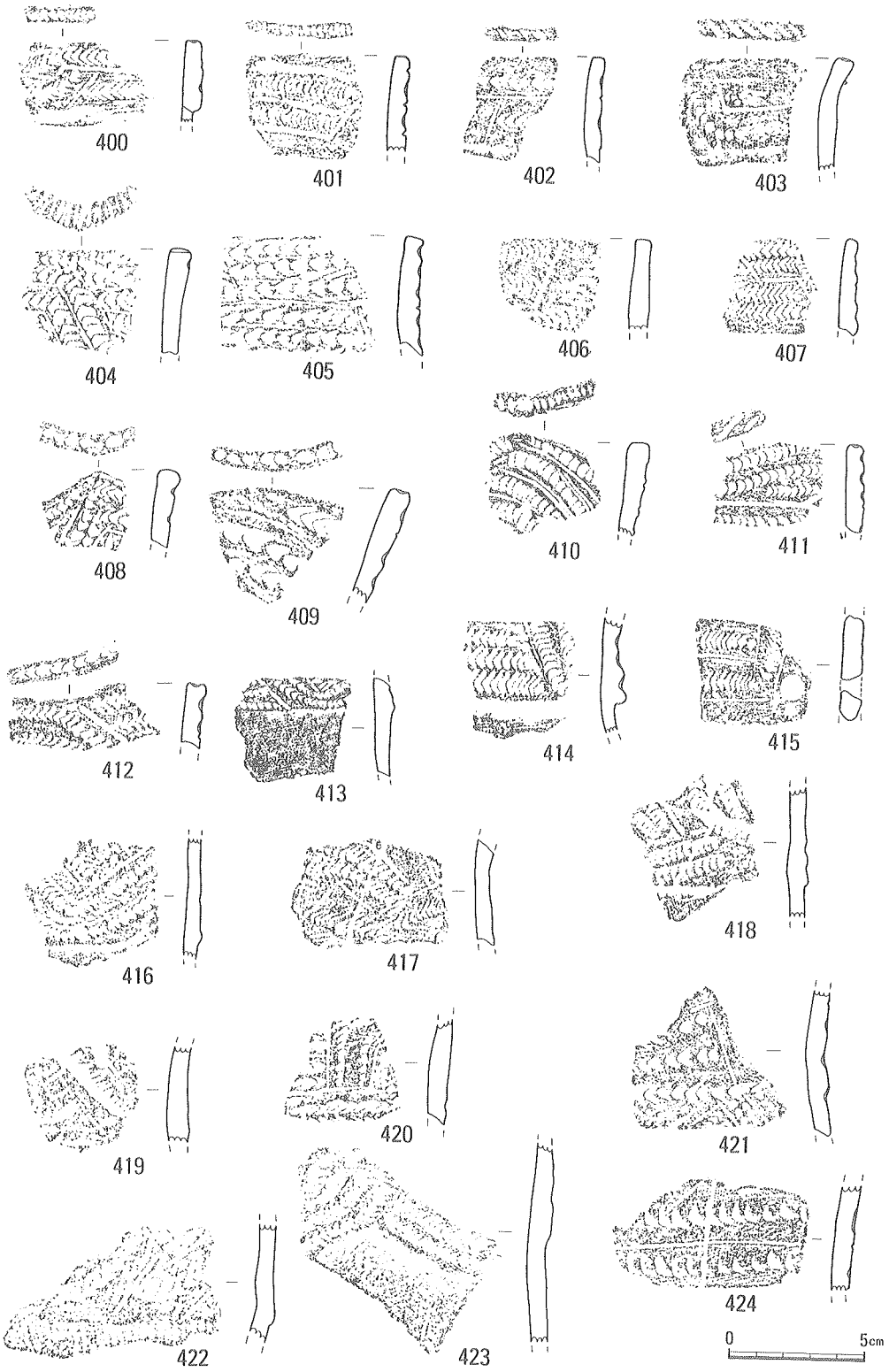


図94　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式

＜cタイプ＞

水平方向の施文が主となるものであるが、一部においては縦位の押し引き文を施す箇所もある。特徴的なものを図93の399、図95の425～436に示した。

図93の399と図95の436は同様な構図を示す資料かと推察される。399の資料をみると、山形直下においては5条となるがそこ以外では4条となる横位押し引き文を区画するようにその間に横位の沈線文を配している。その中央に施される沈線を境にして、上方・下方へ縦位押し引き文とそれを区画する沈線を配す。そのため横位文は器面を囲繞しない。約7.5cmの間隔で下方・上方の縦位文が配されていたかと思われる。縦位文の長さは横位文2条の幅となる。

図95の425の資料は山形部を中心に約7.5cmの幅に9条の縦位押し引き文を配し、その縦位文を横位押し引き文2条を一区画とする横位文で継ぐ。その横位文は途中で斜位の沈線により切られ区画されるが、上2段の斜沈線の位置を逆にした形で下2段に斜沈線を施す。また、横位文は区画の沈線は水平な直線であるが、区画内の押し引き文は若干弧状をなして施される。そのため、押し引き文自体は籠編み状の形状を示す。

山形を中心に施される縦位文は上から下への押し引き文で、区画の沈線は認められない。つまり、沈線による区画文を施す箇所とそうでない箇所があり、本型式の中では特殊な例である。

427の資料は先端の丸味を帯びた工具を使用しているもので、口唇部も同種工具を使用している。428・430はそれぞれ口唇部から約3cmの箇所と約1.5cmの箇所に小孔を有すものである。孔は焼成後に外面から穿たれており、428は外径が9㎜、内径が5㎜を測り、430は外径が12㎜、内径が6㎜である。

また、唯一凸帯を貼り付ける433も注目される。先端の尖がった工具による押し引き文を1条配した扁平な凸帯を、表面から裏面へ輪状に配しており本型式ではあまり類例を聞かない。

＜dタイプ＞

図95の437～439、図96の440で押し引き文と沈線文の比率が逆になる。つまり、沈線文が区画文ではなく、それ自体が文様の主要素となり沈線に沿って1部に押し引き文が施されるものである。

図95の437～439は綾杉状の斜沈線とそれに沿うような押し引き文が部分的に認められる。押し引き文は約2㎜幅の先端が丸味を帯びた工具により施されている。図96の440も綾杉状に配された沈線文の間に押し引き文を施す所が見受けられる。

＜eタイプ＞

特徴的なものを図96の441～445に示した。いずれも斜沈線を鋸歯状に数条配し、その間を押し引き文で埋めている。鋸歯状文を何条配したかは不明。444にはわずかに無文空白の部分がみられる。また、443・445は押し引き文を施さない部分もみられるが、441・442のように沈線間はほとんど押し引き文で埋めるのが普通であったかと考えられる。この鋸歯状文の上・下端には横位押し引き文を2条施すのが一般的なものかと推察される。

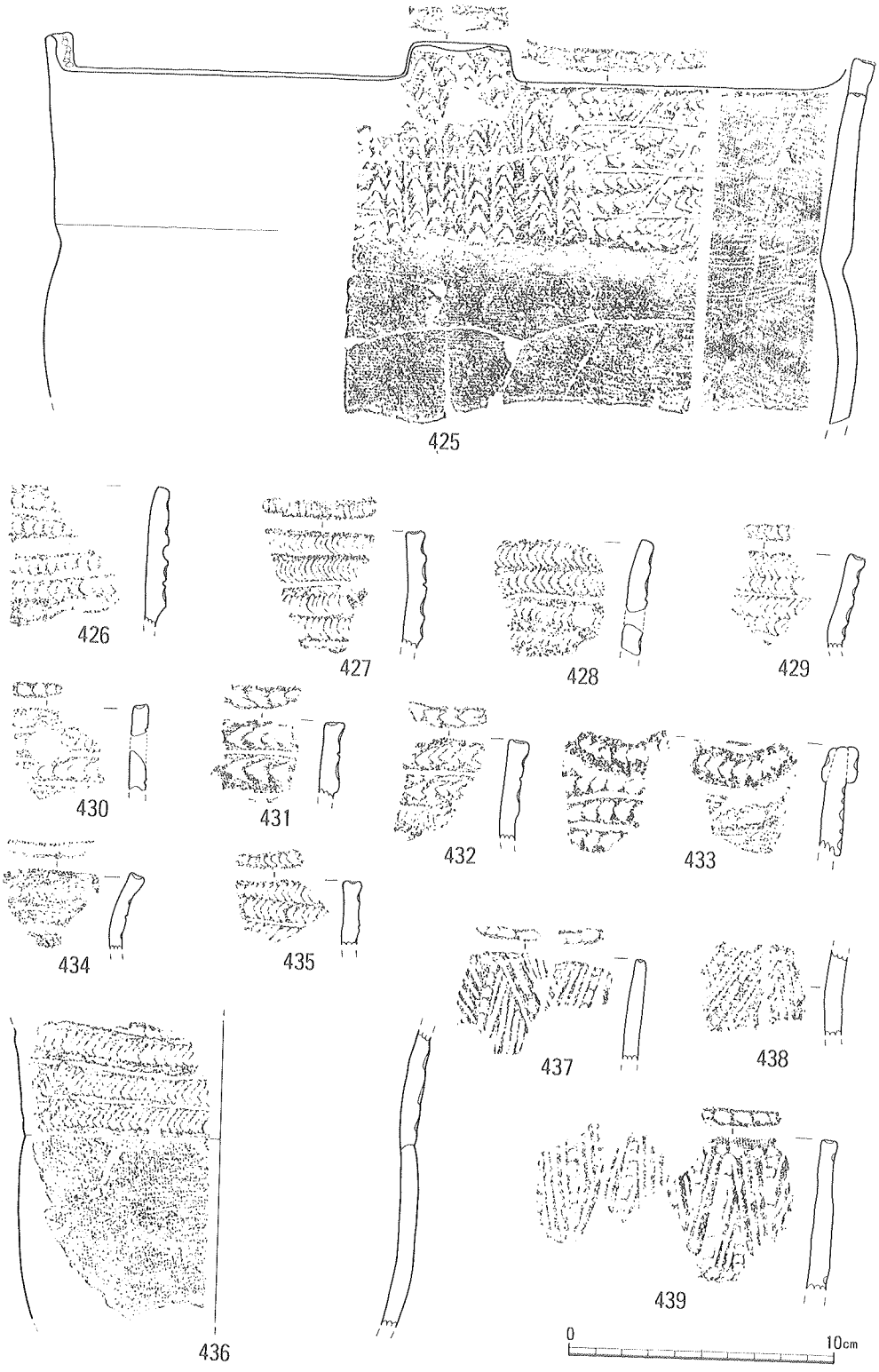


図95　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式

＜fタイプ＞

図96の446～454に特徴的なものを示した。口縁部上端及び頸・胴部の境い目に横位の押し引き文を配しその間に沈線文を施すものであるが、447・448の2点は口縁部上端の文様がみられない。

447の資料は綾杉状、446・448～452は鋸歯状、453・454は羽状の構成を示す。羽状構成を示す453・454の資料は、口唇部が尖がっていることや文様帯の幅が狭いことなど他の資料と異なる点もみられる。

447は7条の斜沈線文が1組かと考えられる。鋸歯状の沈線文を施すものは、446・448・450などのように大きくゆったりとした構図や449のように小さい鋸歯を数条施すもの、452のように間隔をあけて上・下に配すものなどがみられる。

押し引きに使用される工具は447・450が棒状の工具、451は先端の平坦な工具、他は先端の尖がった工具を用いている。沈線はシャープである。

455の資料は斜位の押し引き文とそれを区画する沈線文、さらには無文空白部の組み合せによる構図と考えられるが、全体的な構図は不明である。

456も横位・縦位の沈線と部分的な押し引き文の組み合せによるが、全体の構図は不明。

＜gタイプ＞

斜沈線文と横位の押し引き文を交互に配すもので、図97の457～465に示した。457の資料は胴下半部までは全体の3／4が残るもので、全形の窺える資料である。本資料と465のものをみると、施文の範囲は口唇部と口縁部（胴上部）でそれ以外は対象となっていない。

施文具はほとんどが5㎜幅の先端の平坦な単ベラ工具を用いているが、457は先端がやや尖がり気味の3㎜幅の工具が使用されている。

口唇部と口縁部が施文の対象となっており、まず、口唇部をみる。

口唇部の文様には2種認められる。458～463までの刻目文と457の押し引き文である。押し引き文は5回単位で口唇部全面に施されている。刻目文のものは459のように比較的間隔の広いものと、462のように密に施すものが見受けられる。

次に口縁部の文様をみると、口縁上端には総て斜沈線文が施され、以下横位押し引き文と交互に配す。口縁上端の斜沈線文は右傾のものを多く採用するが、左傾のものも見られる。文様帯の下部を有する457と465からすると、前者のように斜沈線文で締めくくるものと後者のように横位押し引き文で締めくくるものがある。465は下端で肥厚し文様帯を形成する。

また、同一個体内では斜沈線の方向を一定にするが、460のものは横位押し引き文の上・下の斜沈線文の方向が異なる。457は沈線文が雑然と施されており、1部においては横位押し引き文と重なる。横位押し引き文は1条づつ施すものが多く、457の1点だけが2条施している。457は他の資料とは異なる感じである。なお、本資料は口唇下約1㎝の箇所に補修孔を2個穿つ。直径が約6㎜で表面から穿孔している。

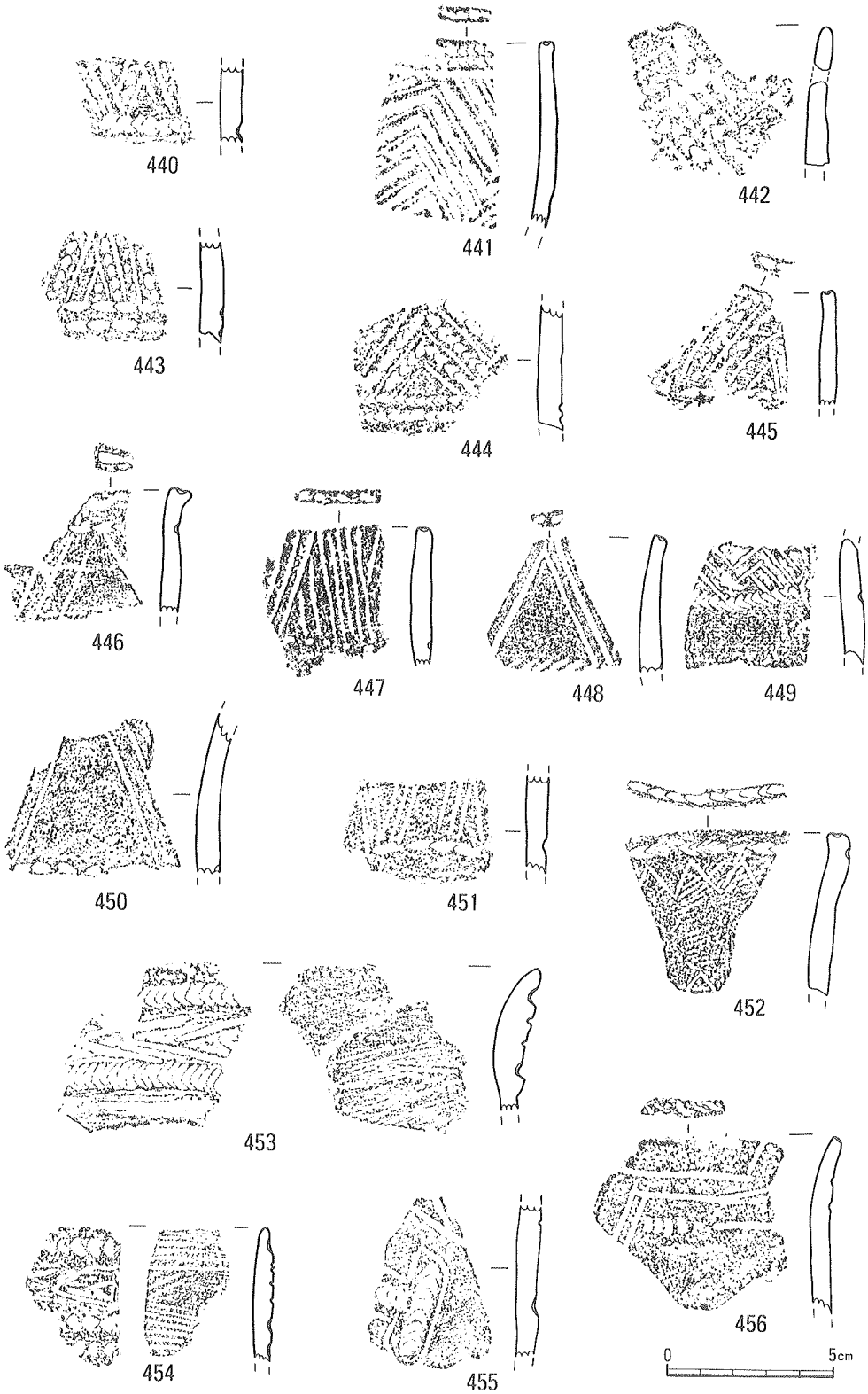


図96　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式

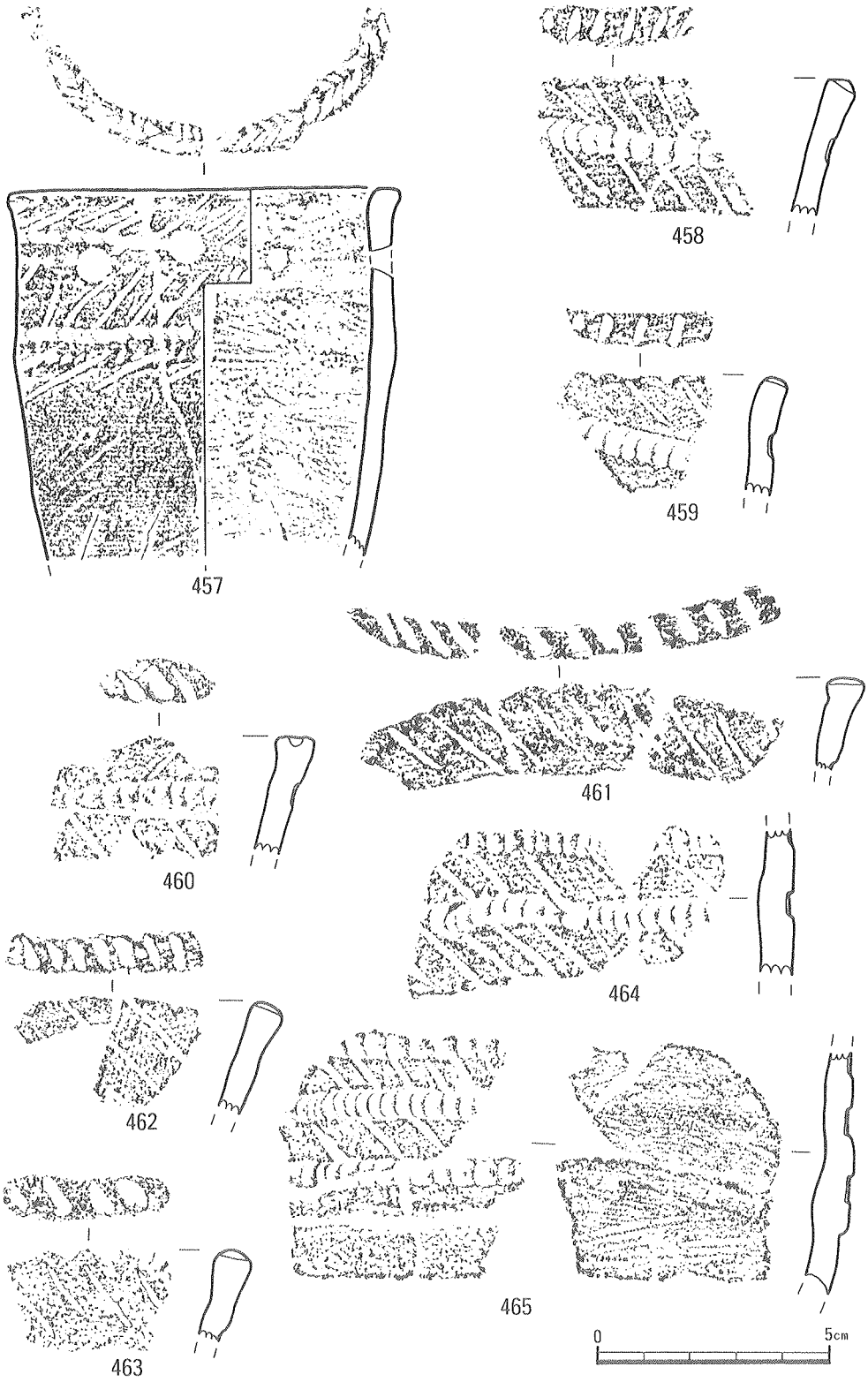


図97　21地区ハ第２群嘉徳Ⅰ式

その他の特徴

ここでは前述した器形・文様以外の特徴について述べる。

器面調整であるがナデ調整を行なうものがほとんどで、擦痕を残すものは少ない。擦痕が残るものはｆタイプに比較的多く見受けられる。また、擦痕は裏面に残るものが多く、器面の調整を行う場合には裏面よりも表面を重点的に調整していることが窺える。

器色は黒褐色を呈すものが多く、次いで赤褐色・黒褐色を示すものが多く見受けられる。僅少ではあるが、黄褐色、灰褐色を呈すものもみられる。

胎土・混入物をみると、胎土は比較的細かなものが多く、混入物としては石英・チャートの微砂粒や粗砂粒を多量混入するものが普通である。稀に雲母片を混ぜるものも見受けられるが、量的には非常に僅少である。

表20－1　復元土器観察一覧

図番号	タイプ	推定口径 推定器高 (cm)	口縁部の形状	肥厚帯の幅 (cm)	口唇部の文様	器面調整	器厚 (cm)	出土層位
図89 382	a	27.5 32	波状 (頂部が丸味帯びる)	山 7.3 低 4.9	先端の尖がった工具による斜位方向の押し引き文を全面に施す。	文様帯を除き擦痕残る。 上部は横位 下部は斜位	0.7	Ⅶb
図90 383	a	15.5 16.5	平口縁	3.2	先端の尖がった工具による押し引き文を全面に施す。	丁寧なナデ調整を施す。	0.6	Ⅵb
図90 384	a	短径=24.5 長径=27 27.5	波状 (山の裾で一段下がる)	山 6.8 低 4.5	先端の尖がった工具による押し引き文を全面に施す。	ナデ調整 一部に擦痕残る。	0.6	Ⅵb
図90 385	a	24 27	波状 (一段盛り上げて山の頂部をつくる)	不明	先端の尖がった工具による押し引き文を全面に施す。	ナデ調整 表裏面に擦痕消えきらず残る。	0.8	Ⅵb

表20－2　復元土器観察一覧

図番号	タイプ	推定口径 推定器高 (cm)	口縁部の形状	肥厚帯の幅 (cm)	口唇部の文様	器面調整	器厚 (cm)	出土層位
図91 389	a	13 不明	波状 (低平なだらかな山)	不明	先端の尖がった工具による押し引き文を全面に施す。	ナデ調整	0.6	Ⅶb
図92 395	a	20 21	波状 (半円形の山)	なし	先端の平坦な工具による押し引き文を全面に施す。	表・裏面に多方向の擦痕が消えきらずに残る。	0.5	Ⅵb
図92 396	b	27 21	波状 (形状は不明)	推定 山 5.5 低 3.5	先端の尖がった工具による押し引き文を全面に施す。	表面丁寧なナデ調整であるが裏面擦痕が顕著。	0.6	Ⅵb
図93 397	b	23 不明	波状 (低平な山)	4	先端丸味帯びるヘラにより押し引き文を全面に施す。	ナデ調整 裏面に擦痕横方向に残る。	0.5	Ⅶa
図93 398	b	23 不明	平口縁	3.8	平坦なヘラによる斜位の押し引き文	ナデ調整	0.6	Ⅳ
図93 399	c	22.5 23	波状 (高い山)	山 7.5	先端の尖がったヘラによる押し引き文を全面に施す。	ナデ調整 表面の肥厚帯直下に擦痕わずかに残る。	0.6	Ⅵb
図95 425	c	31 32	波状 (口縁部の一部を盛り上げる)	山 7 低 6	先端の尖った工具による押し引き文を雑に全面に施す	表・裏面とも擦痕が多方向にみられる。	0.6	Ⅵb
図97 457	g	8 10.5	平口縁	なし	先端の尖がった工具による押し引き文を2cm単位で全面に施す。	表面丁寧なナデ調整。 裏面擦痕が顕著	0.6	Ⅶa

③ 嘉徳Ⅱ式

総数114点の出土でその状況は表11に示した通りである。ほとんど小破片であるが比較的大型の資料も4点あり、それらについてはその部分までの推定復元図を示した。今回得られた資料はほとんどが深鉢形に属するもので、明確に他の器種を示すようなものは見受けられない。

特徴的なものを図98・99・100に示した。以下に簡記する。

器形

胴上部までの推定復元図を示したもの（図98の473、図99の488・589、図100の490）や比較的大き目の資料をみると、概ね次のように分類できる。

イタイプ ― 口縁部が若干外反し、胴部がやや張るもの（図98の473、図99の488）

ロタイプ ― 口縁部上端がわずかに外反し、胴部はほとんど張らずにそのままゆるやかに弧を描きながら底部へ向うもの（図99の489）

ハタイプ ― 口縁部はほぼ直口を呈し、胴部は若干張るもの（図100の490）

以上の3種であるが、いずれの種が主体となるかは判然としない。

口縁部の状況をみるとほとんど平口縁の資料で、山形を呈すものは6点である。図98の466は山形の裾部に小突起を有すもので、左側は破損しているが山の両サイドにあったものと推察される。中央の高い山は急斜をなして形成されている。

図99の488は2種類の山を有しており、相対する山が同じような形状を示す。本資料では急斜をなしてつくられる高い山とそれよりもやや低くなるM字状の山である。高い山の頂部は欠失する。山の直下（M字状の山はその中央部）でコーナーを有するように縦位凸帯を配している。器面になじませるように丁寧に貼り付けており、横断面は三角形状を呈す。高い山の直下に配されるものはM字状の山の直下に配されるものより張り出しが強く、より意識されている。

上面観は菱形の短径になる所の角を切り落した形状を呈し、舟形をイメージさせる。

口縁部は肥厚を示し、幅はM字状の山から5㎝、その裾部から約4㎝を測る。前述の縦位凸帯は肥厚帯で終わり、その下端部で厚くなる。

図99の487はM字状の山の資料で、488に類するような資料かと考えられる。

589に示したものは均整のとれたなだらかな山を形成する。図100の494は低平な山の頂部に粘土を貼り付け、口唇部を広くつくり強調している。497は山形頂部へ移行する資料で、破片のため山の形状を明確にはし得ない。現標品の左側で折れ曲がるような部分があり、それからすると山形直下でコーナーを有する資料かと考えられる。

また、口縁部の肥厚については文様帯で破損しているものが多く確実性に欠けるが、胴上部までを有する図99の488・589、図100の490・499の4点がいずれも微弱な肥厚を示しており、それが一般的であったかと推察される。しかし、文様帯としてそれほど意識されてないのか、文様の下端は部分的に肥厚帯直下まで及ぶ。

口唇部はほとんど総て平坦に成形されている。

文様

まず、今回得られた資料の施文範囲をみると、口唇部と口縁部に限られそれ以外の部位は施文の対象になっていない。口唇部・口縁部に分けてみる。

口唇部に施文するものがほとんどで、文様のみられないものは図100の490や494など僅少である。また、施文しているものをみると図99の488・489のように口唇部全面に施す場合と図100の499のように一部に施文するものがみられる。

文様の種類は比較的豊富である。①刻文、②沈線文、③斜位の刻目文、④押し引き文、⑤斜位の刻目＋沈線文、⑥格子目文、⑦縦位刻目文の７種見受けられ、量的には①と④が多かった。口縁部文様との関係を表21に示した。

次に口縁部の文様についてみると、全体の構図から下記のように分類した。

aタイプ―籠編み状構成を示すもの

bタイプ―山形文を施すもの

cタイプ―綾杉状文を施すもの

dタイプ―羽状文を施すもの

eタイプ―斜沈線文を施すもの

fタイプ―鋸歯状文を施すもの

gタイプ―格子目文を施すもの

hタイプ―斜沈線文と横位沈線文を組み合せるもの

の８種で量的にはcタイプのものが圧倒的に多く得られている。

aタイプに属するのは図98の466、図99の488に示した２点で、前者は３条、後者は２～５条の沈線を１組として施す。施文は深く鮮明で、一部においては沈線が重なる。その場合、上方の文様が下方の文様を切って施すようである。

図98の468はbタイプに属し、3条1組の急傾斜を示す沈線文を施す。施文は深く鮮明である。

cタイプに属するものを図98の467、469～486に示した。469・470のようにほぼ等間隔に整然と施されるものと、473・486のように２～４条を１組として間に無文空白部を設けるものがあり、後者の資料が多く得られている。

dタイプに属すものを図99の489に示した。図100の494～496も本タイプに属する資料かと考えられる。489の資料は肥厚部外面にゆったりとのびやかなタッチで描かれている。

eタイプは図100の490・491に示したもので、右傾の斜沈線文をラフに浅く施文している。

表21　口縁部と口唇の文様関係

口唇部文様 ＼ 口縁部文様	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	合計
a				4		1		5
b	1	1		1				3
c	7	2	4	10	2	1		26
d			1	1				2
g			1				2	3
h				1				1
合計	8	3	6	17	2	2	2	40

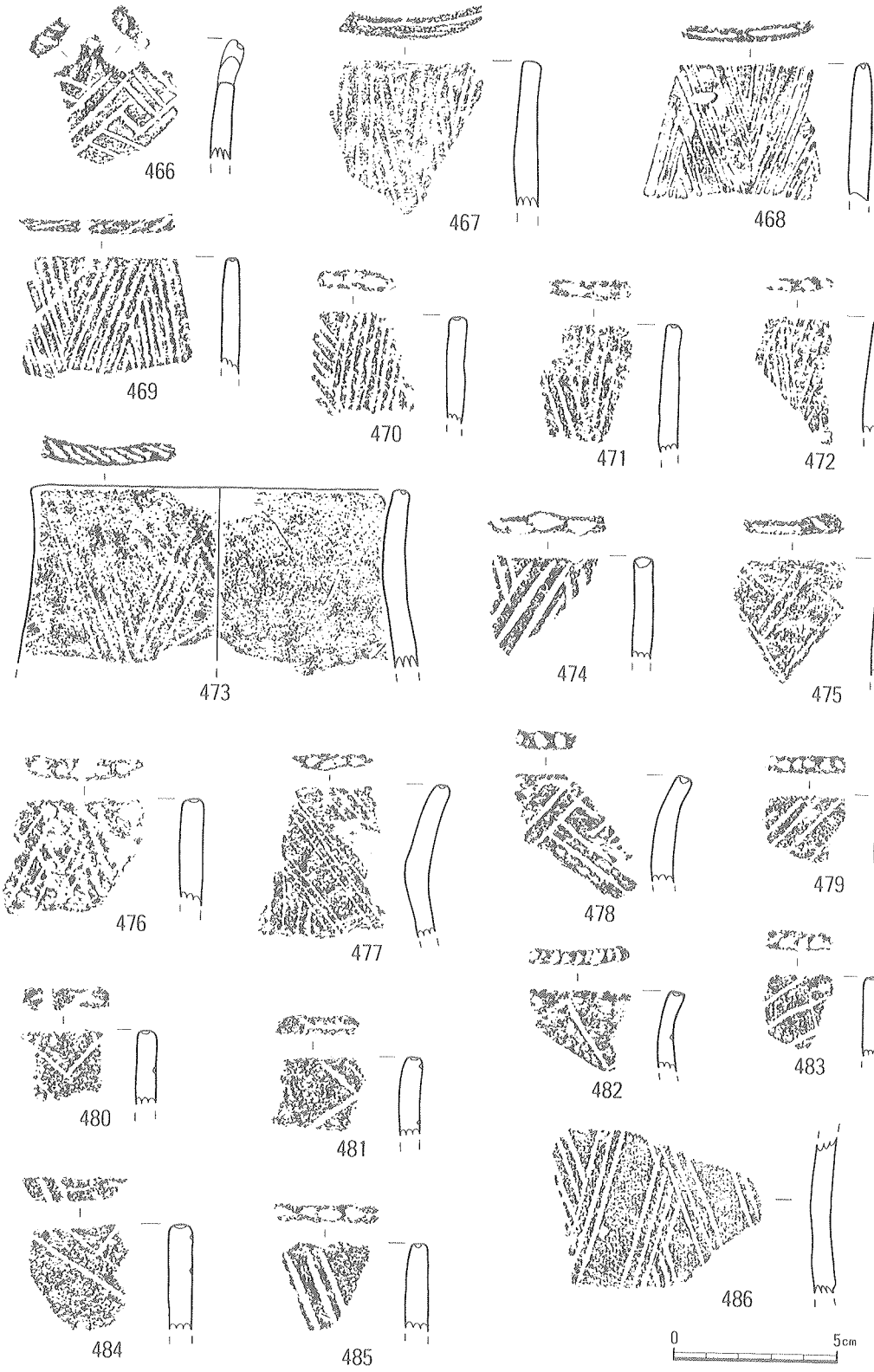


図98　21地区ハ第２群嘉徳Ⅱ式

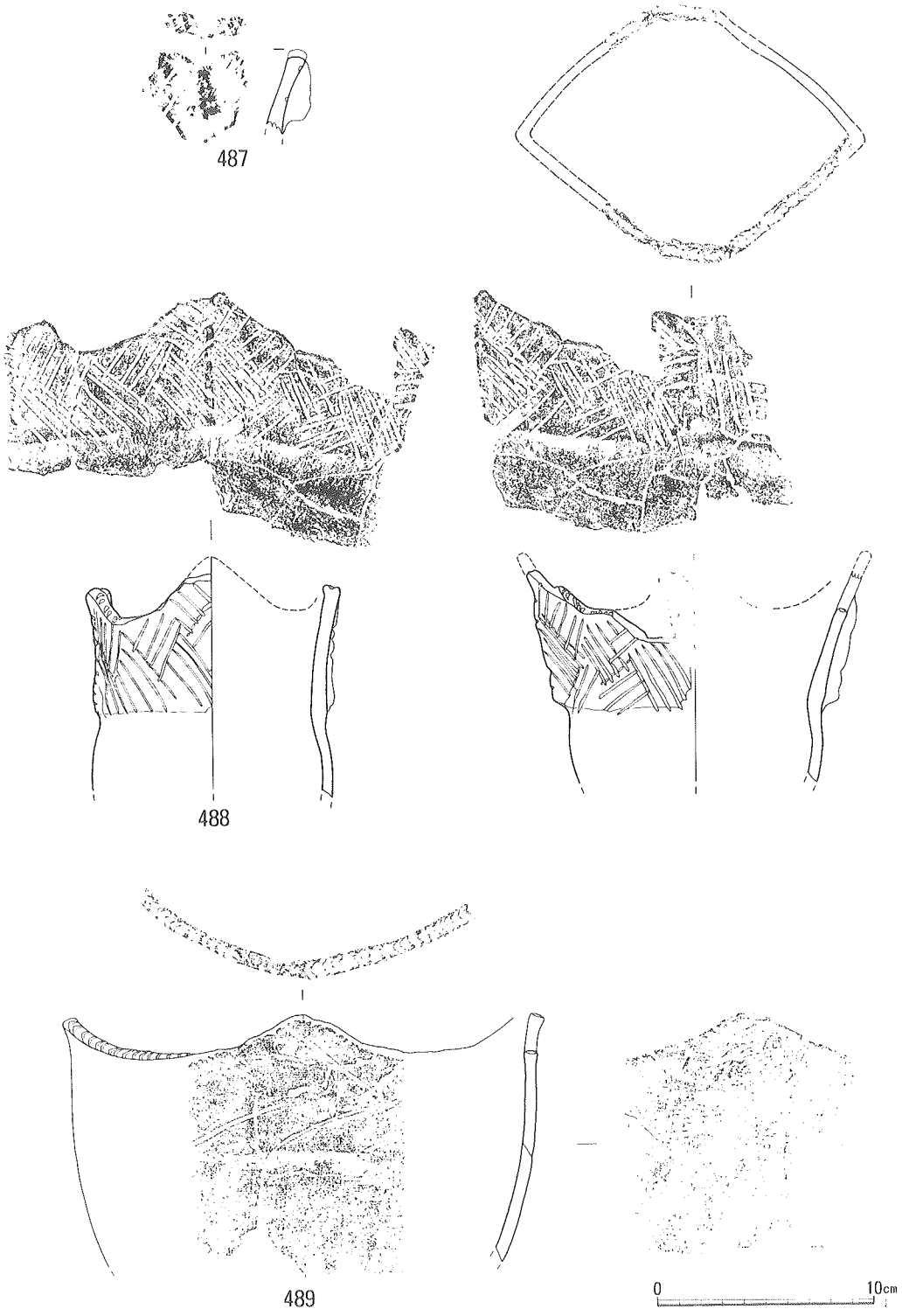


図99　21地区ハ第２群嘉徳Ⅱ式

fタイプに属す2点を図100の492・493に示した。492は方向の異なる斜沈線により描出するもので、連続する文様にはならずに山の部分で切れる。施文は深く力強い。493は492よりもシャープな沈線を施す。

gタイプに属するものを図100の498～501に示した。499が最も広い間隔で施され、501が密に施文する。498・500はその中間の広さである。499をみると肥厚部外面に施したものと思われるが、1部では肥厚部直下まで施文が及ぶ。

hタイプの2点を図100の497・502に示した。497はやや浅目ではあるが、はっきりした沈線を施す。山形に近い部分に斜位の沈線を配し、そこから口唇に沿って5条の沈線を施すが、全体的な構図は不明。502は器面の保持が悪く文様も消えかかっているが、一部に横位沈線の上・下に方向の異なる斜沈線文が認められる。有軸羽状文を構成するかと考えられる。

その他の特徴

石灰分の付着や器面の磨耗などにより器面の状況が窺えないものを除けば、ほとんどがナデ調整であるが、図100の493～5496 502は擦痕を残す。器色は暗褐色・赤褐色を呈すものが主体をなし、わずかに黒褐色を呈すものも見受けられる。また、図98の467・473のように色あせた感じの器色を示すものもみられる。

胎土は細かく、特に図100の498～500は非常に泥質である。混入物は石英・チャートの砂粒を多量含むほか、ほとんどの資料が雲母の粒を含む。

表22　復元土器観察一覧

図番号	タイプ	推定口径 推定器高 (cm)	口縁部の形状	肥厚帯の幅 (cm)	口唇部の文様	器面調整	器厚 (cm)	出土層位
図99 488	a	12×16 18	山形口縁 4個	山 7 低 4	爪形押し引き文 (全面)	ナデ調整を丁寧に施す。	0.5	VIb
図99 489	d	22 18.5	山形口縁 4	山 6 低 4.5	爪形押し引き文 (全面)	ナデ調整を丁寧に施す。	0.6	VIb
図100 490	e	24 25	平口縁	4	無	ナデ調整を施すが、部分的に擦痕残る。	0.7	VIb

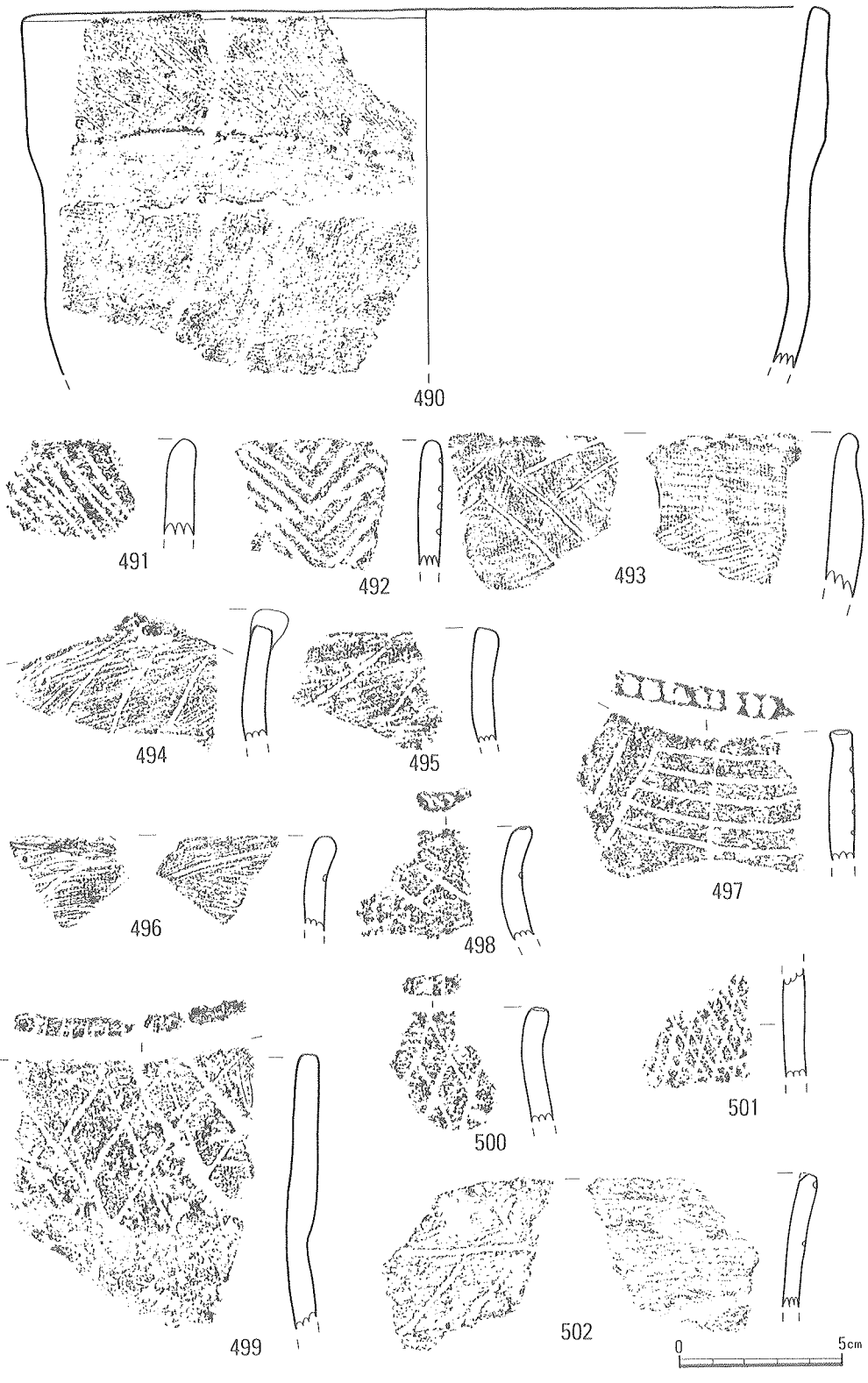


図100　21地区ハ第２群嘉徳Ⅱ式

④ 神野E式

沖永良部神野[注1]貝塚出土のものを標識とする。伊波式の先行型式としてとらえられ、2点1組の点刻文を口縁部の上・下に1組配す所に特徴があるとされる。

本区では総数38点出土しているが、ほとんど小破片で全形の窺えるような資料は得られていない。そのため口縁部の肥厚の有無についても明確にし得ない。

今回得られた資料は縦位区画文を配すものが数点見られるが、ほとんど中段を無文のまま放置するものである。また、横位押し引き文を1条・3条配すものや、2条の横位沈線文を施す資料なども本項で扱った。特徴的なものを図101の503～518に示した。

器種はほとんどが深鉢形に属し、明確にそれ以外の器種を示すものは得られていない。器形は口縁部が外反あるいはほぼ直口状を示し、胴部がやや張り出すものが多いようである。口縁部の形状をみると、山形へ移行する部分も数点見られるが、明確に山形を呈すものは517の1点だけである。低平な山を形成するもので、山形直下ではコーナーを有す。

文様は口唇部・口縁部が対象となっているが、508・509・513・517の4点は口唇部を対象としていない。施文具は叉状工具を用いたものが2点（510・516）、半截竹管状工具を用いたもの1点（512）の他は単ベラ工具を使用している。後者のものをみると、先端の尖がり気味のもの（514・517）、丸味を帯びるもの（503・513・516）、やや平坦のもの（508・509）が見受けられる。また、516は右から左へ施文するが、他は左から右方向へ施文する。

口唇部の文様は押し引き文が4点、刻文が2点、斜位の刻目文が2点、沈線文が1点となっている。口縁部の文様は510・511が2点がペアになるが、他の資料は1組として施される2点あるいは3点がペアになっていない。

503～510に示したものは刻文を施すもので、510は縦位にも施す。縦位の刻文は山形直下に配されたものかと推察される。また、上・下の文様を有すものは503～505・509の4点で文様間の幅は503が約5㎝、504・509が約2㎝、505が約1.5㎝である。

511・512は押し引き文を配すもので、2点とも縦位方向にも施す。511は山と山の間に縦位方向の押し引き文を配す。512は上・下の文様を有し、その間の幅は約1.5㎝である。

513・514は横位の刻文を1条施すもので、513は上・下の文様が認められる。約3.5㎝の間隔を開けて施文している。515は横位沈線文が2条器面を囲繞すると考えられる。516は2条の押し引き文を1組として約1㎝の間隔を開けて施すが、下方のものは最下段の文様なのか判然としない。

517・518は3点を1組とするもので、517は約3㎝の間隔を開けて施している。

器色は赤褐色を呈すものが7点・黒褐色のものが6点、暗褐色のもの3点である。器面の状況をみせると、表・裏面に擦痕が残るもの（503）、表面にのみ残るもの（513・514）、裏面に残るもの（509）などが見受けられる。チャート・石英の砂粒を多量混入する。粒が細かいものと粗いものがみられ、後者はチャートの場合が多い。

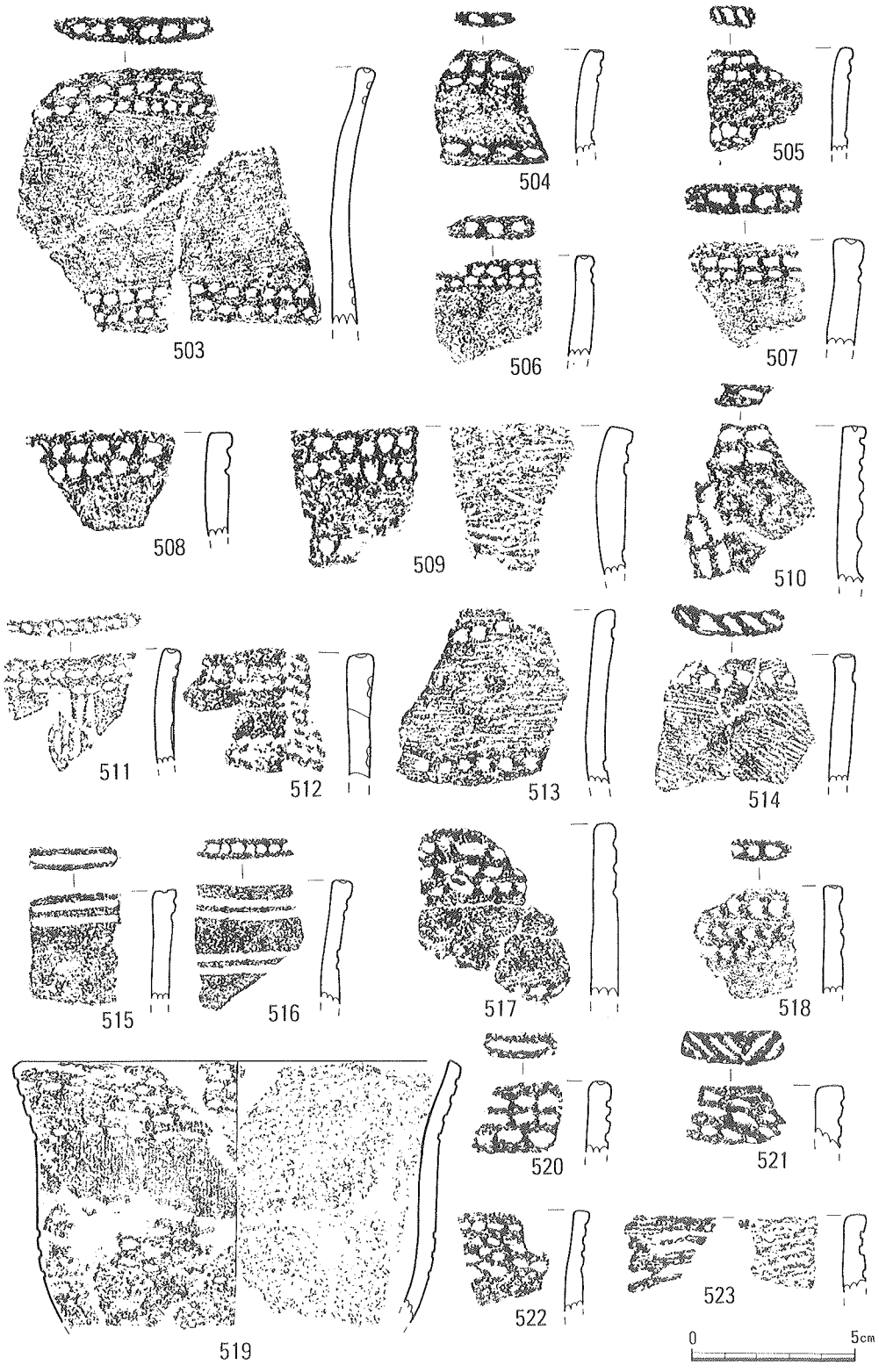


図101　21地区ハ第2群神野Ｅ式、伊波式

⑤ 伊波式

総数140点と量的には多くない。ほとんど小破片の資料であるが、図101の519は比較的大形の破片で胴部までの器形がある程度窺えそこまでの推定復元図を示した。今回得られたものは総て深鉢形に属する。特徴的なものを図101の519～523、図102の524～526に示した。

519に示したものは器形のある程度窺えるもので、口縁部が外反し胴部が若干膨らんで底部へ移行する。径の最大は口縁部にあり、全体として低部から口縁部へ開く形となっている。口径は推算13.5cmを測り、本群の他型式のものと比較すれば小形の部類に属す。他の資料もこれに類する器形を示すと思われるが、図102の524は直口気味である。

口縁部の形状をみると、明確に山形を呈すものは図101の521と図102の526の２点で、前者はゆるやかな低平な山をつくり、後者は一方の傾斜が急な山を形成する。

文様は口唇部・口縁部に施す。口唇部に施文するものは図101の520・521、図102の525の３点である。520は沈線文を、521は山の頂部を境に方向の異なる斜位の刻目文、525は押し引き文を施している。

口縁部の文様はほとんどが叉状工具を使用しており点がペアになるが、図101の522のようにペアにならないものも見受けられる。図101の519～522は点刻文、523・図102の524は短沈線文、526は押し引き文を施している。525は上段の文様を欠失するものかと思われ、ここに示した。現資料では山形直下に配されたものと考えられる縦位刻文だけが認められる。

中段の状況が窺える４点をみると、図102の526は鋸歯文を配し、他は無文のまま放置するタイプのようである。図101の519は上・下の文様間の幅が判明するもので、約2.5cmを測る。

器色は図102の524・525が赤褐色で、他は暗褐色を呈す。チャート・石英の砂粒を多量混入するが、チャートの粒はやや粗い。

図102の527～531に神野E式の532～535に伊波式の胴部（下段の横位文を有すもの）を示した。口縁部と同様に中段を無文のままにした資料である。

537・538は荻堂式の可能性もありここに示した。537は口縁部に横位の押し引き文を密に施し、同種の文様を口唇部にも施す。538は３条の横位押し引き文と鋸歯文を配す。２点とも暗褐色を呈し、チャート、石英の砂粒を多く含む。

⑥ 無文の資料

ここで扱うものは口縁部に文様の認められない資料である。ただ、図104の554、図105の555・556は文様が施されたかどうか不明だが、胴部の大きさを示すものとしてここに掲載した。また、口縁部が肥厚を呈すものは見受けられない。

図105の555の資料は壺形で、口縁部上端と胴下半部を欠失する。現資料からすると比較的頸の長い（２cm以上）もので、ゆるやかな弧状をなして胴部へ至るナデ肩のものである。破片の下端部が胴部の最も張り出した個所になると思われ、全体的な器形は徳利のような形であったかと推察される。破片の上端（頸部）の径が約6.5cm、下端（胴部）が約15cmを測る。

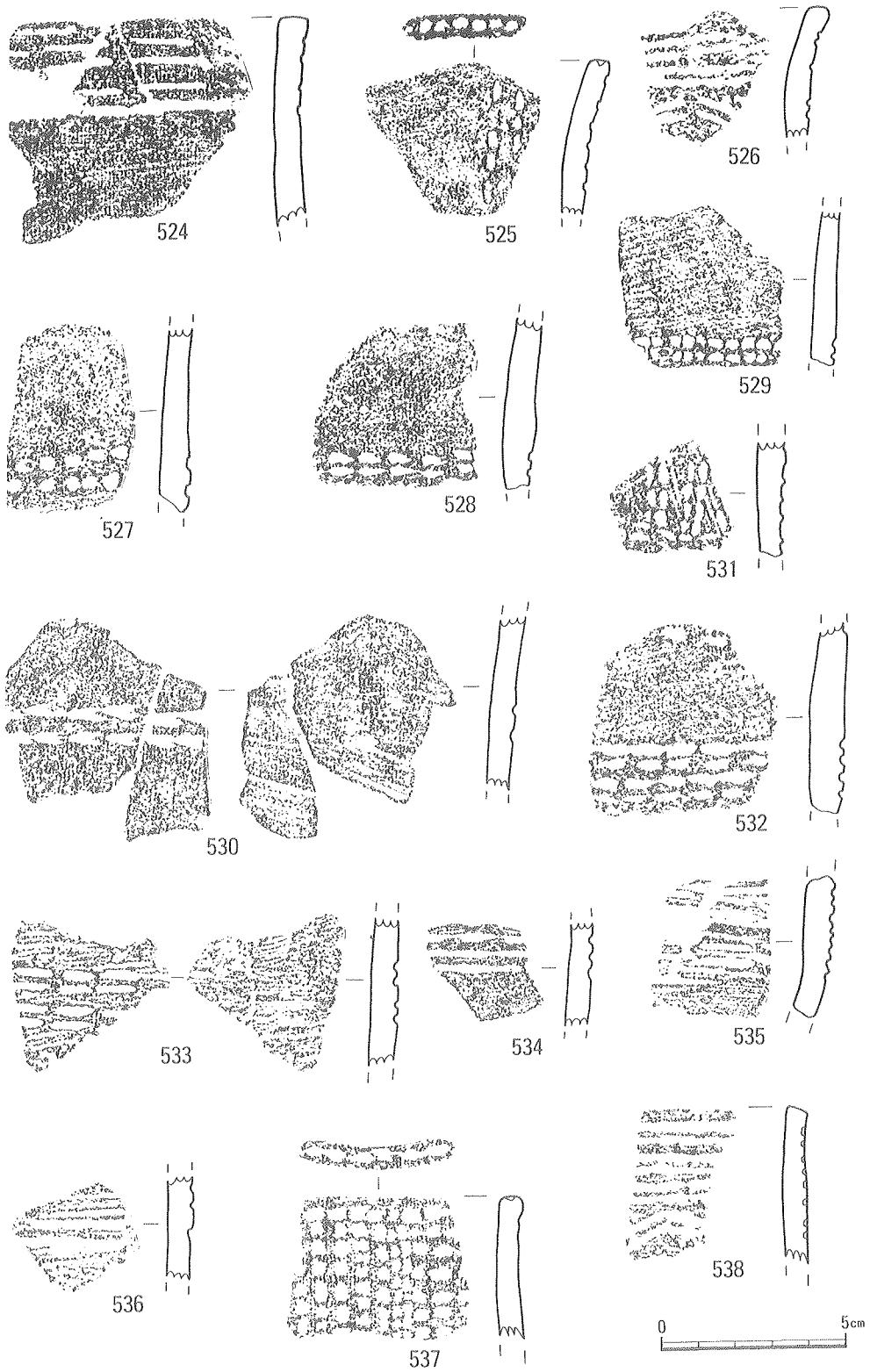


図102　21地区ハ第2群神野E式、伊波式

裏面の上部はナデが施されるものの、裏面の下端部及び表面には雑に施された擦痕が消えきらずに残る。器色は赤褐色を呈すが、部分的に色あせた所もみられる。胎土は細かく、混入物に石英・チャートの砂粒を密に含み、それが器表面に露出する。第VIb層からの出土である。

他は総て深鉢形の資料でほとんど破片であるが、図103の547・548はほぼ全形の窺えるものである。また。図104の554、図105の556は胴部の資料であるが、大型の破片でその部分の推定復元図を示した。

図103の547は全体の90%近くを残すもので、全形の窺える資料である。口縁部がわずかに外反し頸部で若干しまり、胴部がやや脹りそして底部へ至る。口縁部は高い山と低い山を1対づつ配す。山の直下では屈曲しており、上面観は菱形状を呈す。長径の箇所に高い山、短径の箇所に低い山である。口唇部はやや平坦につくる。

長径が約11cm、短径が約9cm、高さが約14.5cm、底径が約5cmを測る。全体的にやや右側へ傾く。口唇部には先端の平たい工具による押し引き文を約1cm間隔で全面に施す。暗褐色を呈し、表・裏面には擦痕がみられ、特に裏面は顕著である。胎土は細かく、石英・チャートの砂粒を密に含む。第VIb層最下部の出土。

548は底面部を欠失するが、底部近くまでの器形が推定出来るものである。底面から約3cmまではほぼまっすぐに立ち上がり、そこから口縁部へ直線的に開きながら至る。口縁部上端がやや直口気味になる。口唇部のつくりは雑で尖がり気味の箇所や平坦の箇所がみられ、若干波打つ。平口縁の資料で口唇部に文様はみられない。底面は推定復元を行った。

口径は推定14.5cmで、高さは推定17cm、底径推算7cmを測る。

器色は暗褐色を呈し、表・裏面ともナデが徹底せず部分的に擦痕が残る。胎土は細かく、石英・チャートの砂粒を多く含む。第VIb層下部の出土。

図103の539～541に示した3点は548に類するような器形を示すかと考えられるもので、539だけが口唇部に先端がやや尖がり気味の工具により押し引き文を配す。539・541は暗褐色を呈し、540は赤褐色を呈す。541は表面に斜位方向の、裏面に横方向の擦痕が明瞭に残る。3点とも石英・チャートの砂粒を密に含む。

図103の542～546、図104の549～553に口縁部が外反するものを示した。山形口縁を示すものは図103の542で、破片の左隅に口唇部が段をなす部分を有している。これからすると、口縁部の一部を盛り上げて台形状の山を形成するものと思われる。右側は山の中央部付近で破損している。

口唇部は平坦につくるものが多く、図104の550のように若干丸味を帯びるものも見受けられる。口唇部に施文するものは5点で、全て先端のやや丸味を帯びた工具による押し引き文である。図104の549は斜方向に施文しているため、口縁上端にはみ出している。約2cmごとに区切って施す。他は横方向への施文である。口唇部全面に施したかどうかは明確にし得ない。

図103の544～546は黒褐色で、同図542及び図104の550・551は赤褐色を呈す。他の4点は暗

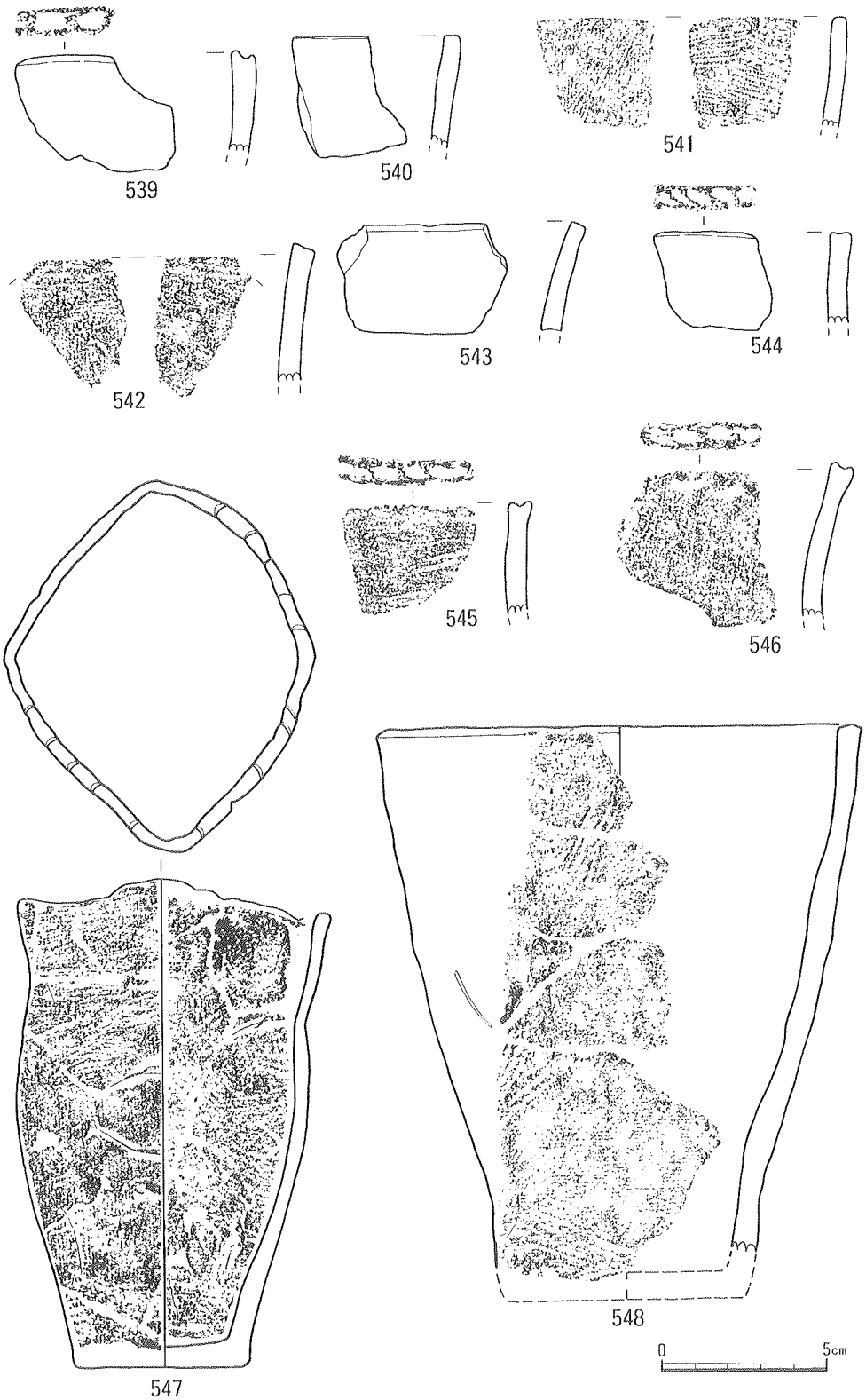


図103　21地区ハ第2群無文の資料

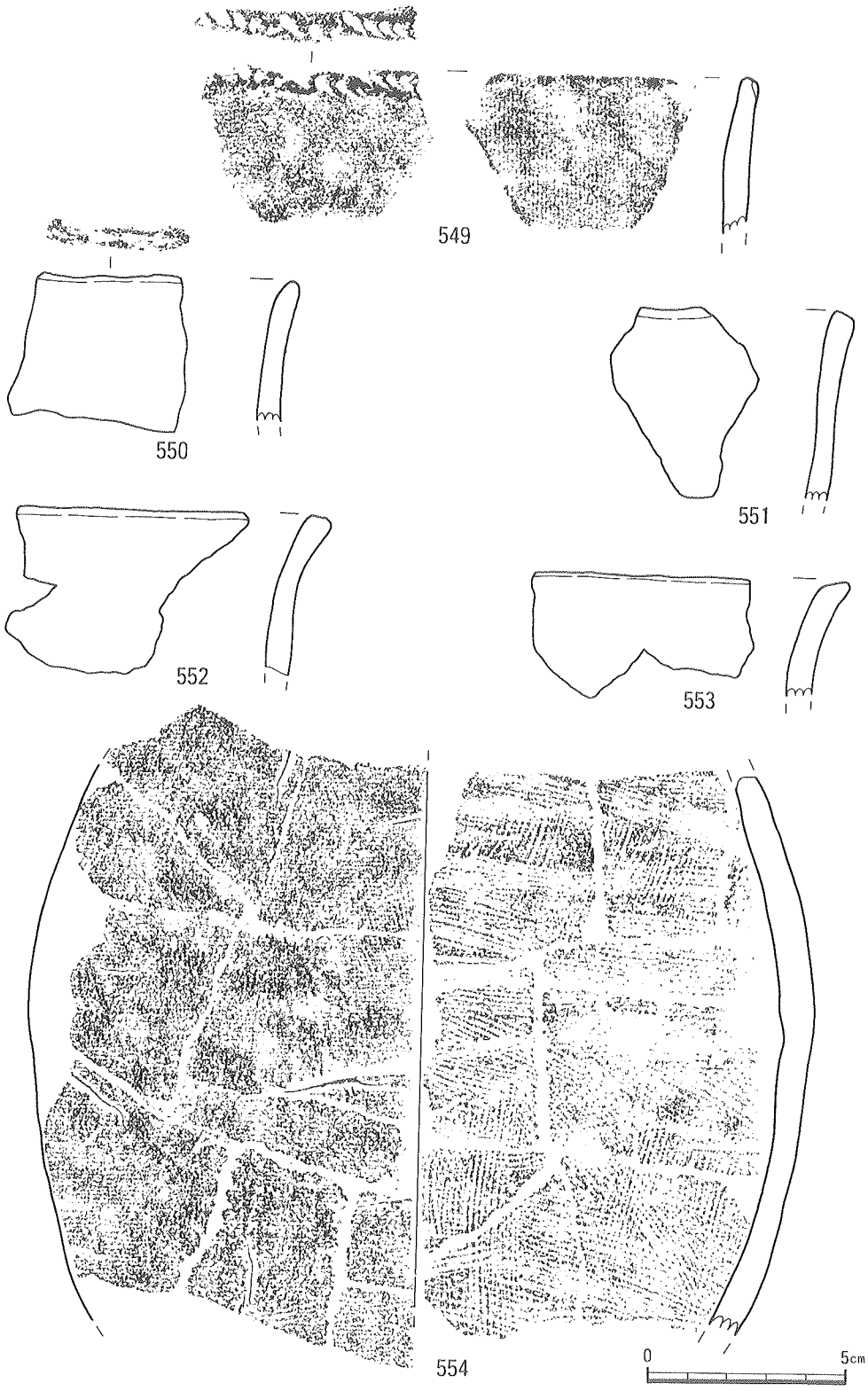


図104　21地区ハ第2群無文の資料

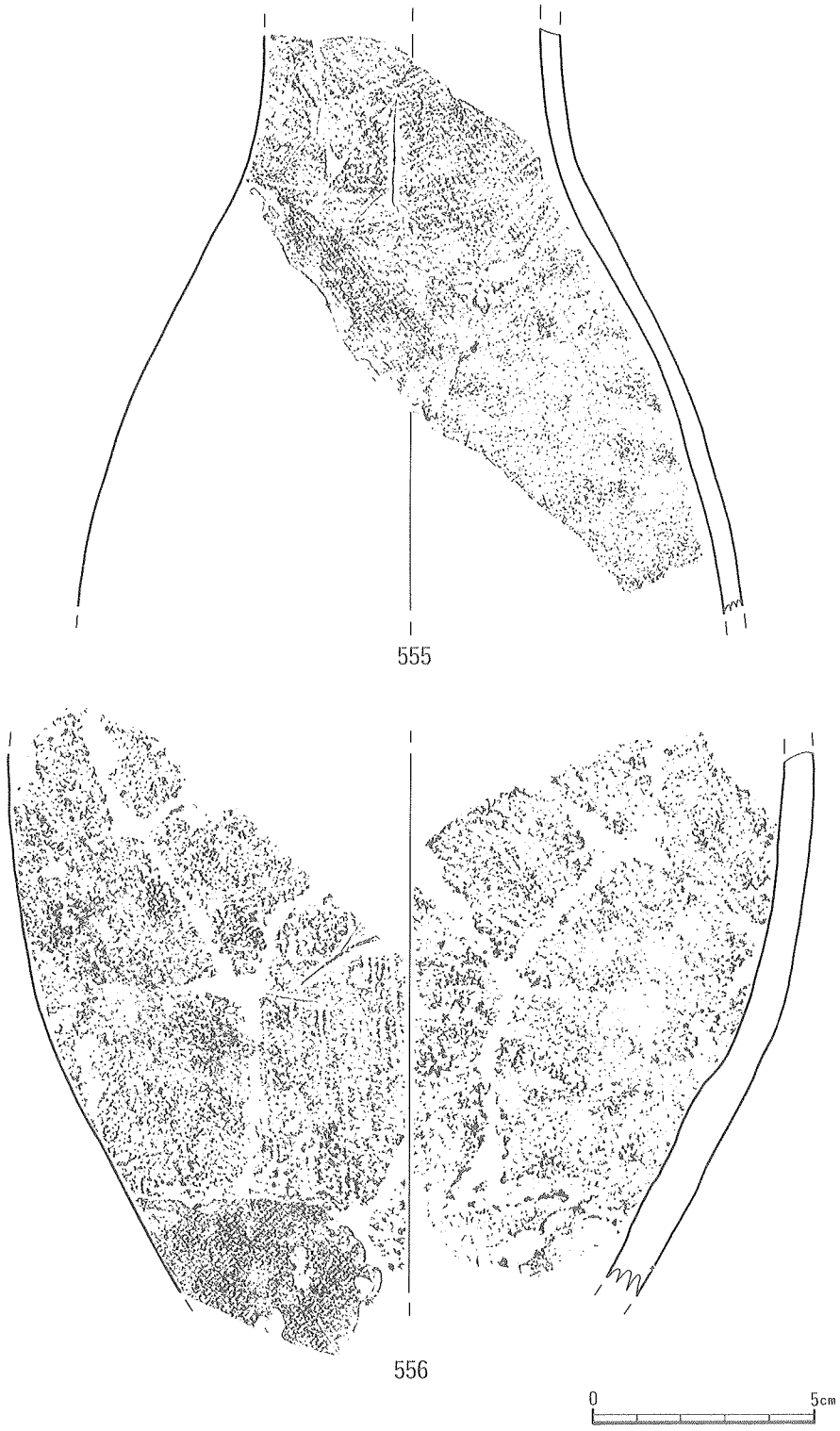


図105　21地区ハ第2群無文の資料

褐色である。器面はナデ調整が施され、擦痕を残すものは図103の545だけである。胎土はやや細かく、混入物は石英・チャート砂粒が主体的であるが、図103の543～546の4点は雲母片も多量混入する。

図104の554及び図105の556に示したものは、胴下半部の資料で前者が推定19.5cm、後者が推定18cmである（いずれも最大部）。554は黒褐色を呈し、表面はよくナデられているものの裏面には多方向の擦痕が顕著に残る。556は赤褐色を呈し、表・裏面に縦位・斜位方向の擦痕が部分的に残る。2点とも石英・チャートの砂粒を混入するが、556は粒が粗く混入量も多い。

⑥ 底部資料

本群に属するものが総数220点余り得られており、特徴的なものを図106～109に示した。特に注目されるものは図106に示した2点で、外面に文様が認められる。

557は底面からゆるやかな弧を描くように開き気味に立ち上がるもので、底面は上げ底状になるかと思われる。その立ち上がり部に先端の丸味を帯びた工具により押し引き文を3条廻らすが、施文は浅く不明瞭である。

右から左方向への押し引き文のみが施されていることから、面縄東洞式に属すかと思われるが、今回得られている皿・壺・深鉢のいずれの器種につく底部なのかは不明。

暗褐色を呈し、器表面に擦痕が見受けられる。チャート・石英の微砂粒を密に含む。

558はいわゆる脚台部の資料で、底面までの高さは約2cmを測る。やや末広がりの脚で、厚さは約1cmを測り、丁寧なつくりである。底面の直下に内面から外面へ斜め上方に孔（直径約1cm）を穿っているが、何個配されたかは不明。

孔は焼成前に穿たれている。

外面の文様は先端の尖がった工具による3条1組の押し引き文を籠編み状に配し、その接する箇所に沈線を施し区画している。嘉徳Ⅰ式に属すと思われ、今回得られた資料からすれば深鉢形につく脚台かと推察される。

器色は黒褐色を呈す所があり、チャート・石英の微砂粒のほか雲母片も混入する。

他は底径の推算可能な資料から特徴的なものを図107・108に示した。底面からの立ち上がり部に注目すれば、①底面からほぼ直線的に外側へ膨らむように立ち上がるもの、②底面から開き気味に立ち上がるもの、③底面からの立ち上がり部で一端くびれるもの、④③のくびれが弱くなるもの

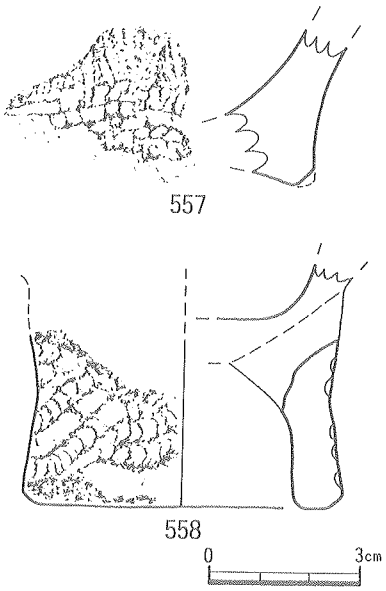


図106　21地区ハ第2群底部

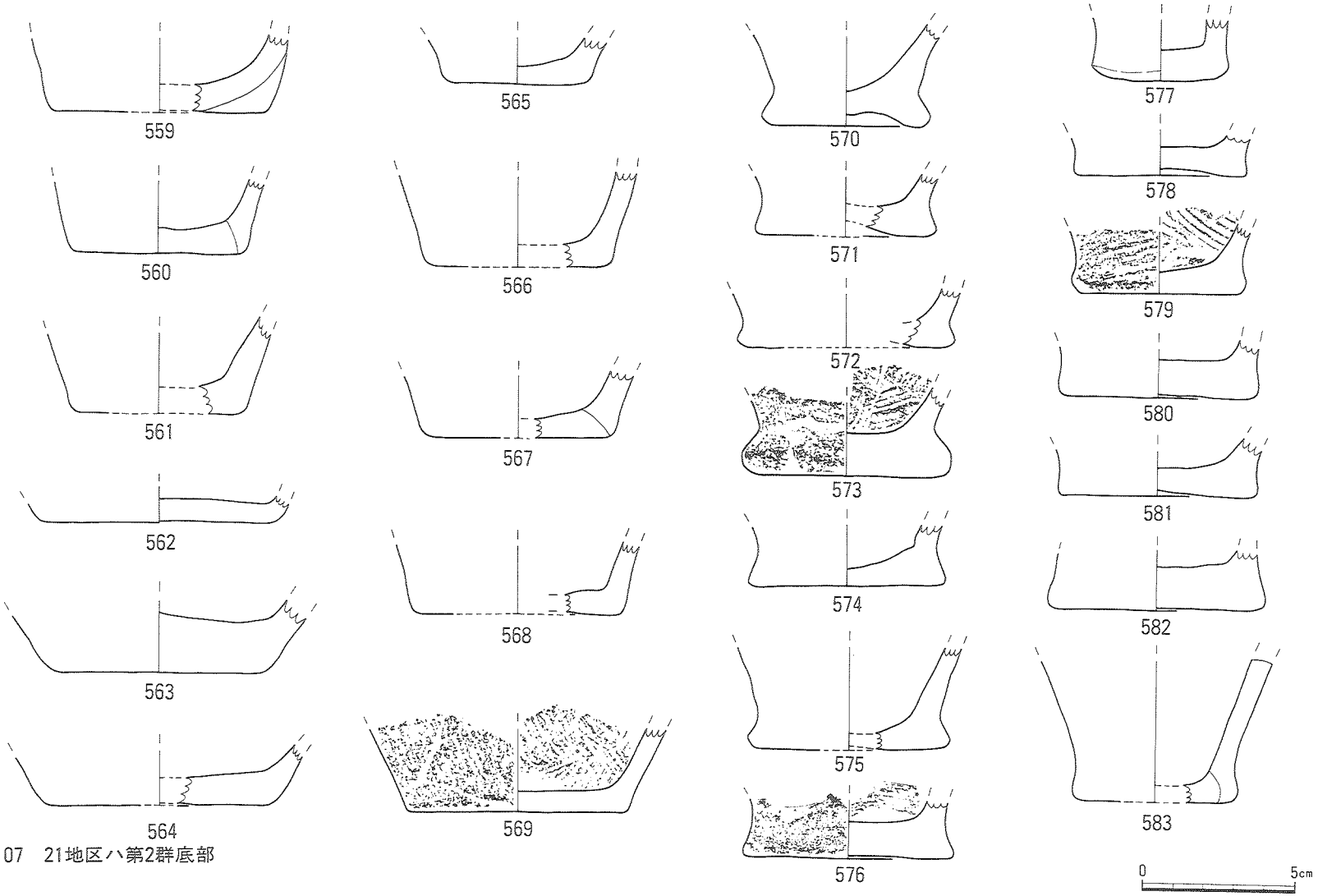


図107　21地区ハ第2群底部

⑤底面から若干直線的に立ち上がり、そこから開き気味に胴部へ移行するものの5種に分けられる。量的には④・⑤が多く、より一般的であったかと推察される。

器面はほとんどナデ調整によるが、②で1点（569）、③で2点（573・576）、④で2点（579・586）、⑤で3点（596、597、601）の8点に擦痕が認められる。②は表・裏面に、③は裏面だけに、④は表・裏面に、⑤は601が裏面だけで他は表・裏面に残る。

混入物はチャート・石英の砂粒を多量混入するが、粗粒・細粒のものがみられる。①のものは粗粒で、②は半々、③は粗粒が2点、細粒が5点、④は粗粒が3点、細粒が12点、⑤は粗粒が3点、細粒が8点である。細粒のものが多い。

器色は暗褐色を呈すものが基調で、赤褐色、黄褐色のものが若干見受けられる。

底径は①のものは約7㎝、②は4.5～7.5㎝のものがあり、7㎝台のものが半数を占める。③は約5.5～7㎝とそれほど幅はみられず、6㎝前後のものが多い。④は約4.4～8.8㎝と比較的幅がみられるが、5㎝・6㎝台のものが多い。⑤も約4.8～7.8と幅がみられるが、6㎝・7㎝台のものが多い。

これらの資料がいずれの型式につくか不明だが、図92の396に示した底部まで接合出来る嘉徳Ⅰ式の資料は⑤に属す。

不明土器

ここで扱うものは器面調整・胎土・混入物などの特徴が第1・第2群に属さないもので、図109に示した。604～606は同一個体かと思われ、按司墓（伊波仲門門中墓）と同様な時期のものかと推察される。

603はいわゆる乳房状尖底の資料である。形態的には第1群の範疇に入るかと考えられるが、胎土が精選され泥質で、混入物はほとんど見受けられず、表・裏ともナデ調整が徹底し、表面が赤褐色、裏面が黒褐色を呈すという今回得られた第1群とは異なる特徴を有すためここで扱った。21地区ハ第Ⅴ層の出土。

604～606をみると、口縁部は得られてないが、器形は底の比較的安定した甕形が想定される。606の底部は推算15㎝。表面は丁寧なヘラナデにより滑らかに仕上げ、裏面も調整は良い。泥質な胎土で赤色粒や石灰質の砂粒が散見される。21地区イ（按司墓東側）の出土である。

註

註1　高宮廣衛・玉城安明・照屋孝・仲村ゆりか・山内盛尚「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報」『沖国大考古』第8号　1985年

註2　河口貞徳「奄美における土器編年について」

註3　高宮廣衛・下地傑・安里和美・大城広江「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その1）」「沖国大考古」第7号　1985年

註4　長野真一「ケジ第Ⅰ・Ⅲ遺跡」鹿児島県教育委員会　1986年

註5　安里嗣淳他「具志川島遺跡群第4次発掘調査報告書」伊是名村文化財調査報告書第6集1981年

註6　当間嗣一・上原静「仲泊式土器」『沖縄考古学会発表要旨』　1981年

註7　国分直一『南島先史時代の研究』慶友社　1972年

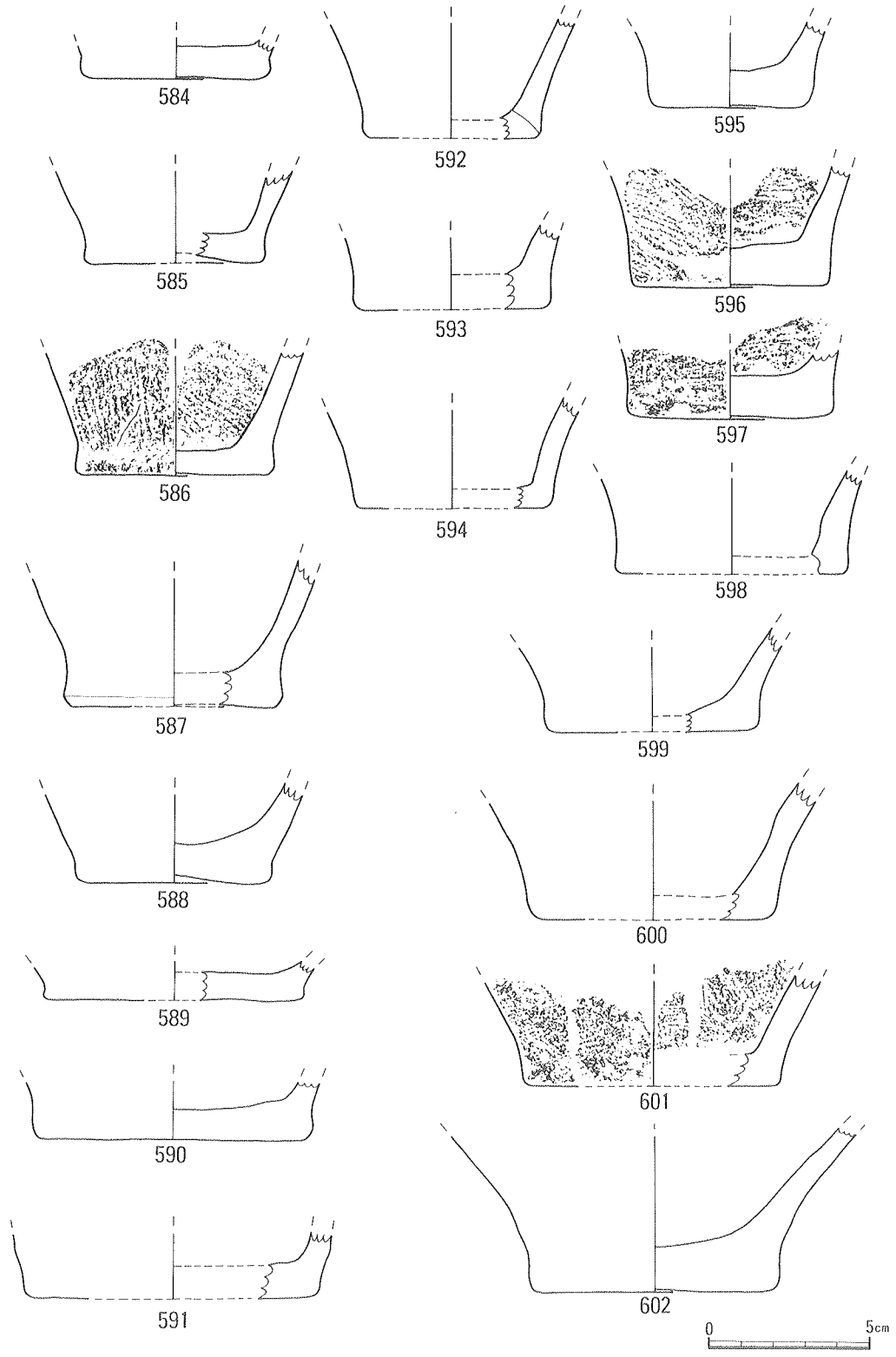


図108　21地区ハ第2群底部

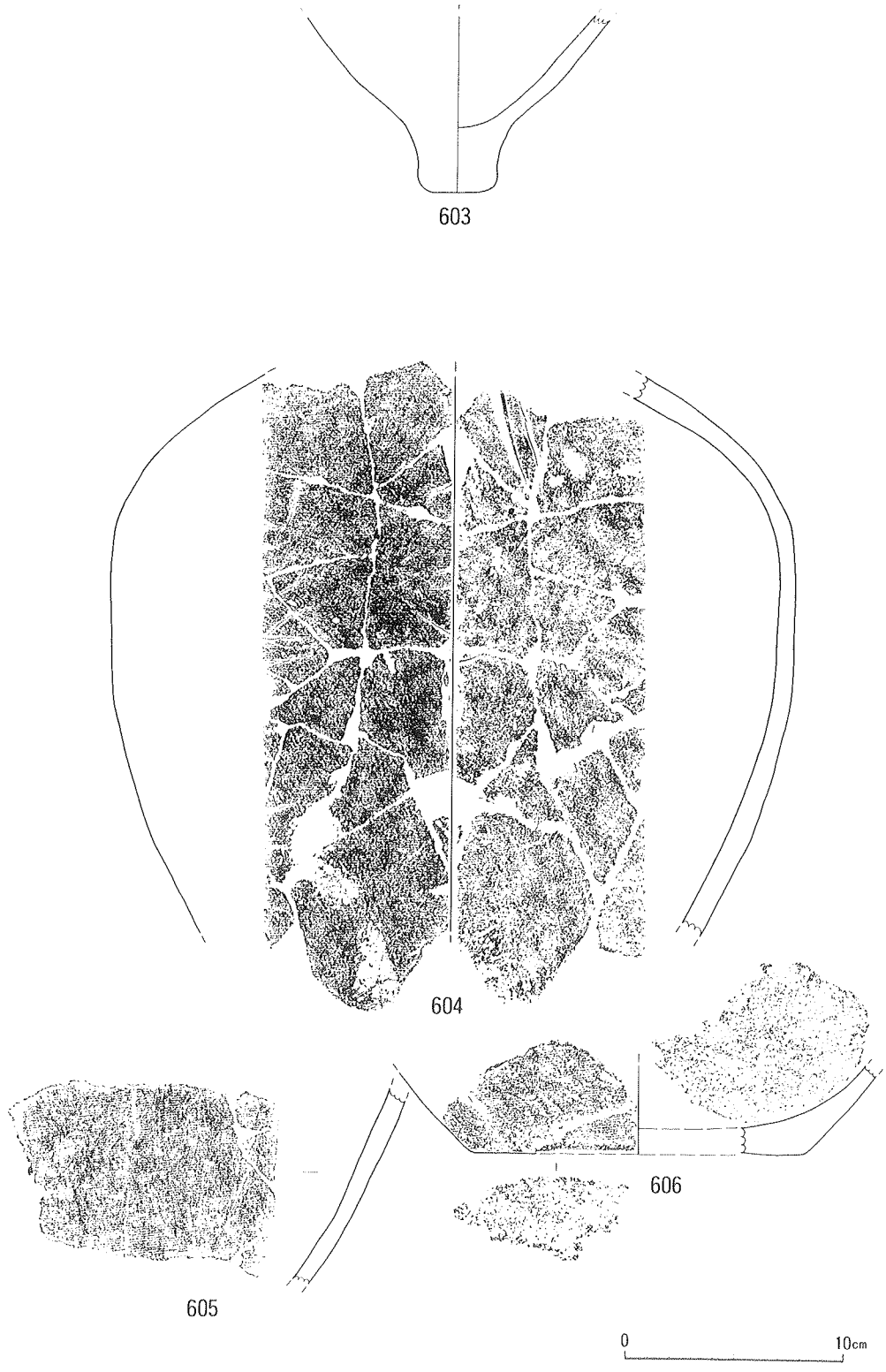


図109　21地区その他の資料

第2節　石器

今回の調査により得られた石器は破片も含めて総数173点あり、うち器種の判別可能なものは石斧・ノミ状工具・敲打器類・すり石・石皿・砥石・器台状石器・チャート製石器の8種類である。

本貝塚は第2章でも述べているとおり、沖縄本島の中央部（石川市）の太平洋に面した箇所に占地し、丘陵部に生活址、崖下に貝塚を形成する典型的な遺跡である。遺跡地一帯の基盤は名護層に属する結晶片岩からなり、その上部を琉球石灰岩が覆い、さらにその風化土から成りたっている。今回得られた石器の材質も一部を除いて遺跡地一帯で簡単に採取できるものではなく、本島北部あたりから持ち込まれたものが多い。14種類みられ、器種との相関関係は下表に示したとおりである。

石質別には砂岩及び砂岩系統が最も多く、次いで緑色片岩、玢岩等がわりと多い。器種別にみると、石斧では緑色片岩が圧倒的で、石材の特質を経験的に知っており、うまく活用していたことがうかがえる。石材としても見受けられない玄武岩製のものがあり、製品として他所から持ち込まれた可能性がある。敲打器類は砂岩が最も多く、次いで緑色片岩玢岩となっており、石器全体と同一の傾向を示す。すり石・石皿・砥石とも砂岩及びその系統の石材がよく用いられている。チャート製の石器はケジⅠ遺跡でも出土しているような剝片石器がみられ、石核も比較的多く得られている。

表23　器種と石質の相関

石質＼器種		石斧	ノミ状工具	敲打器類	すり石	石皿	砥石	器台状石器	チャート製石器	計
堆積岩	琉球石灰岩			2				1		3
	石灰質砂岩			1						1
	細粒砂岩			1		2	1			4
	砂岩	1		71	8		7			87
	片状砂岩	3		1						4
	チャート								2	2
変成岩	千枚岩			3						3
	緑色片岩	34	2	11						47
	頁岩	1					1			2
火山岩	玢岩			8	1	2				11
	石英斑岩			2	1					3
	安山岩			2						2
	玄武岩	1								1
	閃緑岩			3						3
計		40	2	105	10	4	9	1	2	173

1．石　斧

破片も含めて40点得られた。それらを石斧の一生、すなわち製作途上から使用、破損、再製転用、廃棄等により下記の9類に分類した。なお、石斧個々については観察一覧に示したとおりである。

Ⅰ類－打割による工程がみられるもので製作途上品。

Ⅱ類－ほぼ完成された状態を留めているもの。

Ⅲ類－刃部の一部が使用により剝離し、その後再製しているもの。

Ⅳ類－使用の際の打撃により基部上端を欠失しているもの。

Ⅴ類－使用の際の衝撃により刃部の一部が剝離しているもの。

Ⅵ類－使用の際の折損により刃部を欠失しているもの。

Ⅶ類－強い衝撃により剝離した刃部片。

Ⅷ類－大きな打撃により基端及び刃部が欠失したもの。

Ⅸ類－刃部等が破損した後、たたき石に転用したもの。

表24　類別と出土地区の相関

分類／地区	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	計
崖上（22地区）	1	2	4			5	4			16
崖下（21地区）	3	2	4	2	2	1	2	3	5	24
計	4	4	8	2	2	6	6	3	5	40

これら類別と出土区の関係を表24に示した。それからすると、40点出土したうちの60％に相当する24点が崖下から得られており、使用された後に廃棄されたことがうかがえる。Ⅰ類は製作途上のものであるにも関わらず崖下から得られたものが多く、解せない点がある。Ⅵ類は崖上から得られたものが多いが、表採資料もあり、時期的に符号しないのもあると思われる。

それら石斧を形態的にみると、小型のバチ形をなすものや扁平で定角式になっているもの、大型の蛤刃をなすものなどバリエーションに富むと同時にバラつきがみられ、本貝塚の特徴的な石斧のパターンがみられない。そのことは数量的に少ないという点もあげられるが、完全な形で残っている資料もほとんどないこともあげられる。また、前記したように多くは崖下（貝塚部）からの出土であり、時期的な位置関係は判然としない。

2．ノミ状工具

図116の41と42に示した２点である。前者は棒状の礫を用いており、表面は丸味を帯び、裏面は平坦に研磨されている。刃部は両面から砥ぎ出されているが、裏面側からの砥ぎ出しが強く片刃状を呈する。刃先はかなり潰れている。基端も一部に敲打痕を有するものの、表裏側に大きくはじけている。現存長13cm、幅2.8cm、厚さ1.8cm、重さ133gで、21地区ハ（貝塚部）C－96グリッド、第Ⅶ層の出土である。石質は緑色片岩。

後者は棒状の自然礫を用いており、表面と両側辺は自然面を呈す。刃部のみ研磨している。裏面は大きく剝離しているが、その後に刃部のみを若干研磨して再利用していることがうかがえる。現存長8.9cm、幅2.3cm、厚さ1.3cm、重さ40gで、22地区イ（崖上）第２号遺構内覆土からの出土である。石質は緑色片岩。

表25－1　石斧観察一覧(1)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
110－1 128－1	21－ハ E－93 Ⅳ		6.6 4.4 1.7 72	片状砂岩	Ⅰ	表裏面とも割面になっている。周縁部は粗い打割を施した後にトリミング調整を行なっている。石斧の製作過程の一端がうかがえる好資料である。大きさから推して小型の磨製石斧になるものと考えられる。
110－2 128－2	21－ハ F－94 Ⅲ		11.4 4.7 2.6 190	緑色片岩	Ⅰ	裏面の一部に自然面が残っているのみで、他は粗い打割を施している。基部のほぼ中央の両側辺に抉りがみられるが、付柄を意図したものと考えられる。
110－3 128－3	21－ハ A－95 Ⅵa		10.2 3.7 2.3 102	緑色片岩	Ⅰ	風化が著しく判然としないが、周縁部は両側からの打ち欠きによって形を整えている。わりと細身の石斧である。
110－4 128－4	22－ロ く－107 Ⅱ		10.4 5.7 3.2 228	緑色片岩	Ⅰ	表裏面とも自然面である。周縁部は両側からの打割調整を施し、刃部は特に入念である。形態からバチ形になる比較的大型の石斧になると考えられる。
110－5 128－5	21－ハ い－94 Ⅳ		5.3 4.0 1.8 (55)	緑色片岩	Ⅱ	小型の両刃磨製石斧である。河原礫をそのまま用いており基端及び左側辺の刃部が裏面側に大きくはじけている。刃部の平面観は弧状を呈し、正面観は直線になっている。刃先は若干潰れており、使用線条痕は観察できないが、大きさから工作具であることがうかがえる。
110－6 128－6	22－ロ 1号遺構 Ⅱ		(8.2) 5.7 2.7 (192)	緑色片岩	Ⅱ	中型の両刃磨製石斧である。裏面に比して表面の研磨は徹底していない。両側辺は両側から打割を施している。基端は一部剝離し、刃部は若干潰れ、使用線条痕は判然としない。

※（　）内の数値は現存資料の最大値を示す。

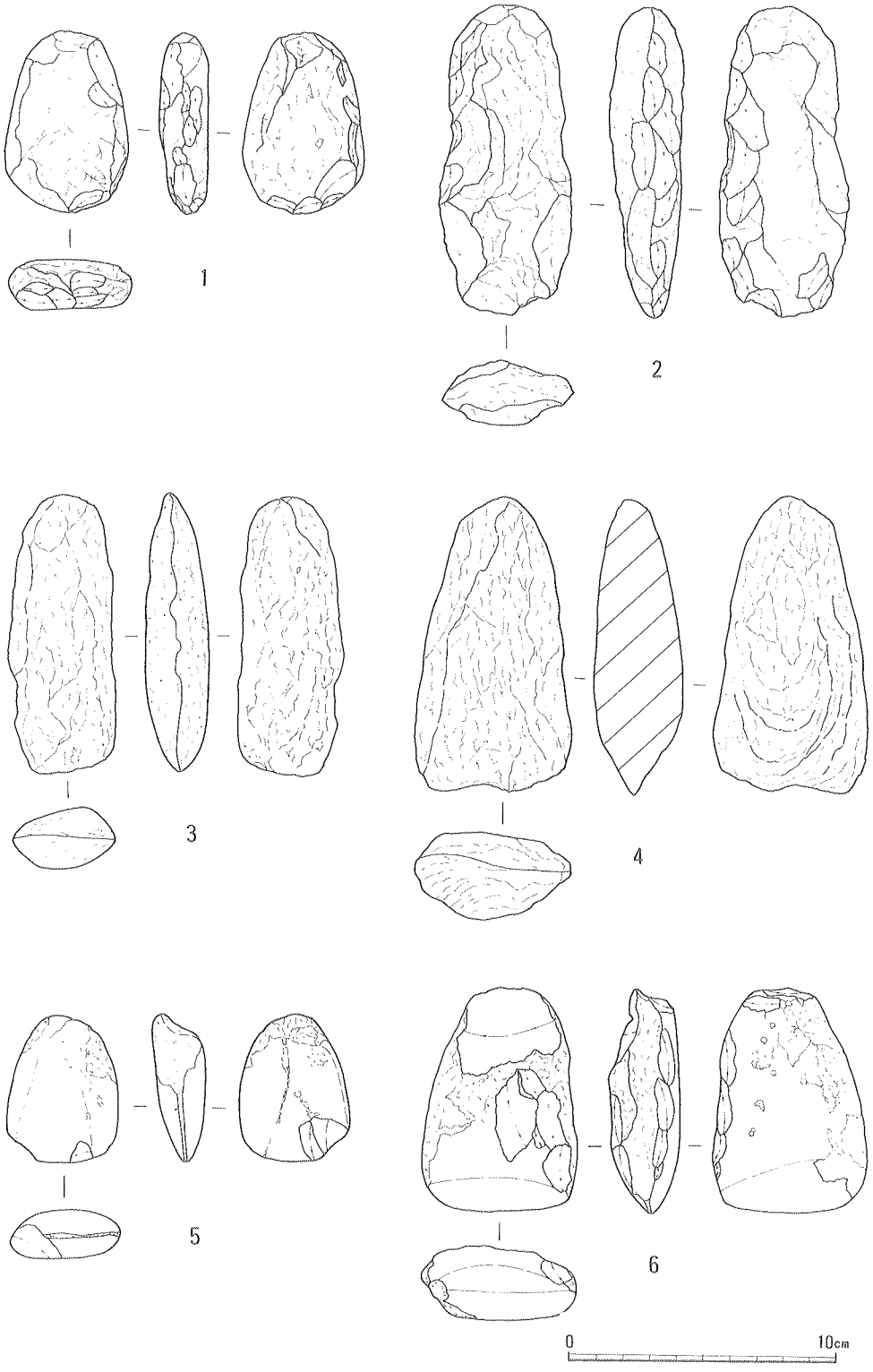


図110　石斧(1)

表25－2　石斧観察一覧(2)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
111－7 129－7	21－ハ D－94 Ⅶ	(10.8) 6.5 2.2 (235)	片状砂岩	Ⅱ	比較的大型の扁平磨製石斧である。板状の礫を用いており両側辺は打割調整を施したあとに磨いている。刃部は片刃になっており、表面側に大きくはじけていることより横斧として使用されたものであることがうかがえる。
111－8 129－8	22－ロ か－108 Ⅲ	7.4 4.6 1.1 62	緑色片岩	Ⅱ	風化が著しく判然としないが、全面磨製の片刃石斧であることがうかがえる。板状の礫を用いており、わりと扁平である。刃部が表面側に大きくはじけていることから横斧として使用されていることがわかる。
111－9 129－9	22－イ T－110 Ⅰ	10.4 5.6 2.5 214	緑色片岩	Ⅲ	自然の河原礫を用いており、両側辺は若干の打割調整を施している。研磨は比較的徹底し、刃部は破損後も砥ぎ直して使われ、偏刃を呈している。刃面に斜位の使用線条痕がみられることより縦斧として使用されている。
111－10 129－10	22－ロ 4号遺構	(8.0) 5.2 (2.3) (158)	緑色片岩	Ⅲ	自然の河原礫を用いている。表面は自然面で、刃部のみ磨いている。裏面は大きく剝離した後に刃面と基部の一部を研磨している。刃先は表面側にはじけとんでおり形状は判然としない。右側辺に緊縛のためのノッチがみられる。
111－11 129－11	21－ハ A－94 Ⅳ	(7.8) 5.6 (1.8) (114)	玄武岩	Ⅲ	表面は自然面、裏面は割面になっている。刃面と裏面の基部の一部に研磨を加えている。刃先は大きく潰れ、形状は判然としないが、片刃状を呈することより横斧として用いられたようである。
111－12 129－12	21－ハ C－93・94 畦	(8.4) (4.9) (1.5) (104)	緑色片岩	Ⅲ	表面は自然面、裏面は割面になっている。右側辺は打割により調整し、左側辺は自然のままである。表面の刃部と裏面の刃部及び基部の一部に研磨を施している。刃先は弧状をなすが、表面側に著しい使用線条痕がみられることから横斧として使用されたようである。

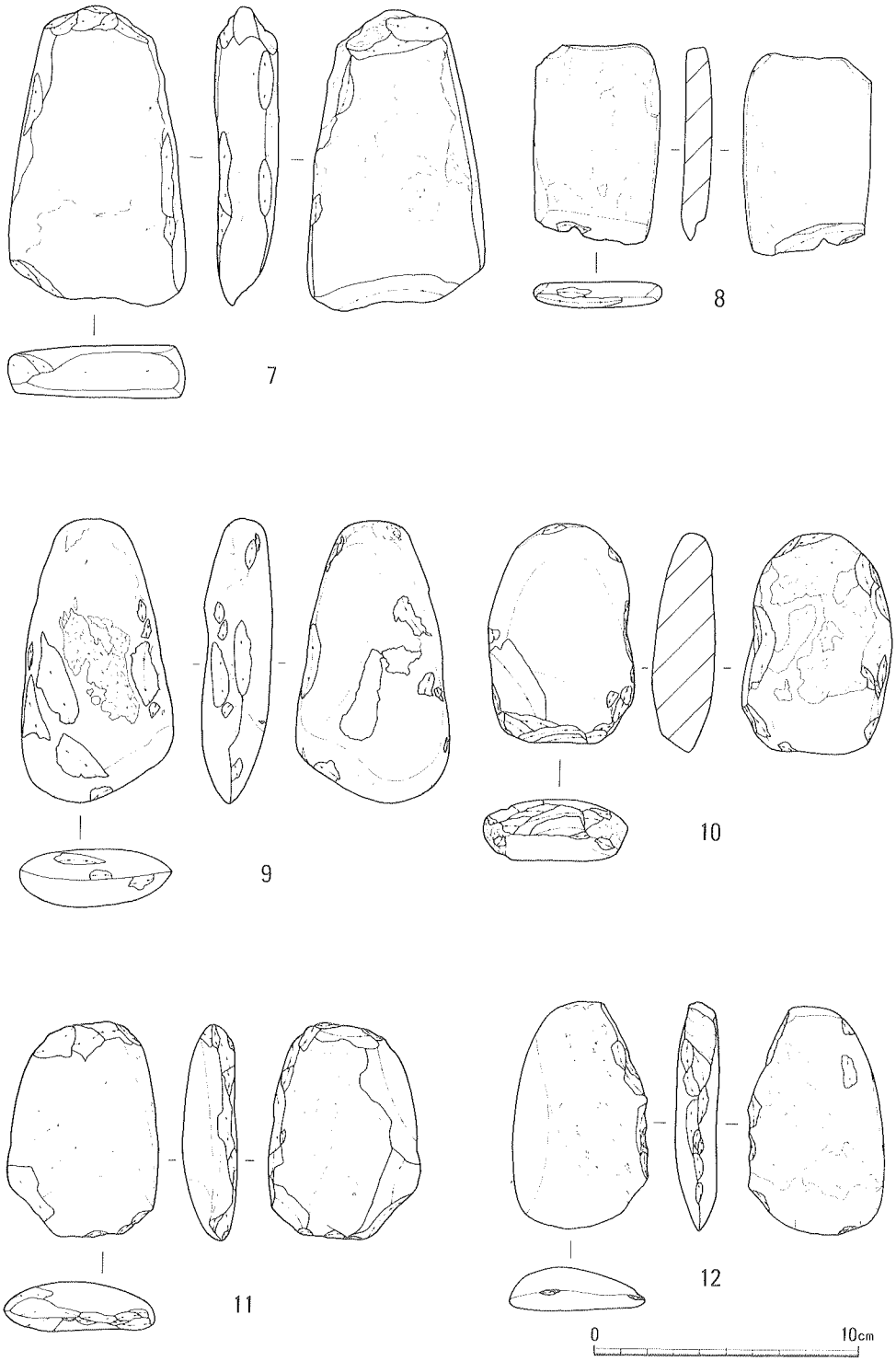
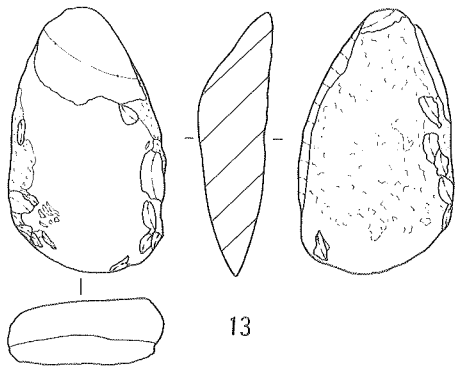
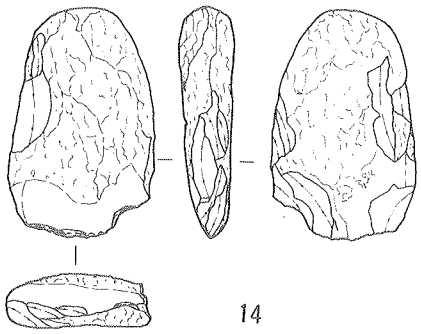


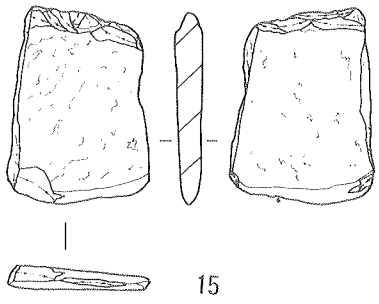
図111　石斧(2)

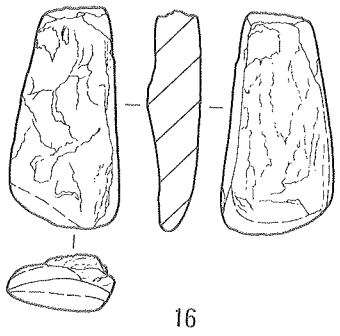
表25－3　石斧観察一覧(3)

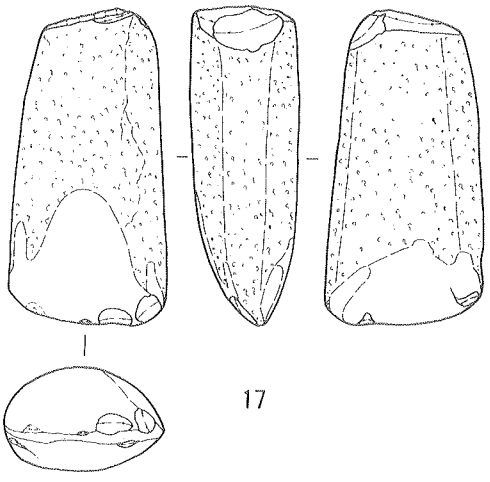
挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
112－13 130－13	21－ハ E－95 V	(8.7) (5.1) (2.2) (140)	緑色片岩	Ⅲ	表面は自然面、裏面は割面を呈する。両面辺は打割調整を施している。基端は表面側に若干剝離している。刃部は表裏面とも比較的丁寧に磨いている。片刃をなすことより横斧として使用されたようである。
112－14 130－14	22－ロ け－112 Ⅲ	(7.5) 4.7 1.7 (91)	緑色片岩	Ⅲ	表裏面とも割面である。両側縁は打割調整により施され、その後に研磨されているが、全面ではなく刃部と基部の一部のみである。刃部は大きくはじけており、形状は判然としない。
112－15 130－15	22－ロ け－108 Ⅳ	(6.2) (4.5) (1.0) (37)	片状砂岩	Ⅲ	表裏面とも割面であるが、身のバランスが悪いことから再利用の可能性がある。刃部と表面の一部は研磨が施されている。基端と両側辺は折損しており、本来は大型の石斧であったことがうかがえる。刃先は潰れており、使用線条痕はみられない。
112－16 130－16	21－ハ C－93 北東	(7.0) (3.5) (1.7) (51)	頁岩	Ⅲ	表裏面とも自然面を呈する。左側辺と基端は折損しており刃のみを磨いているが、それほど入念ではない。
112－17 130－17	21－ハ い－94 Ⅳ	(10.3) 5.2 3.6 (298)	砂岩	Ⅳ	大型の蛤刃石斧である。基部は打割調整を施し、刃部のみ研磨している。基端部は折損している。刃先は潰れており、使用線条痕は判然としないが、縦斧として使用されたようである。
112－18 130－18	21－ハ う－92 Ⅲ	(7.5) 4.8 2.5 (190)	緑色片岩	Ⅳ	太型の蛤刃石斧である。両側辺には敲打によるノッチがみられ、付柄を意図したものである。基部上端は折損している。刃部は潰れており、右側辺の一部が表面側にはじけとんでいる。

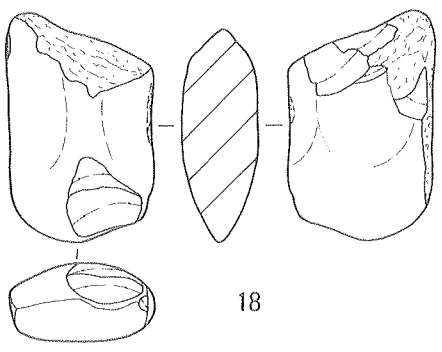












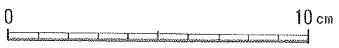
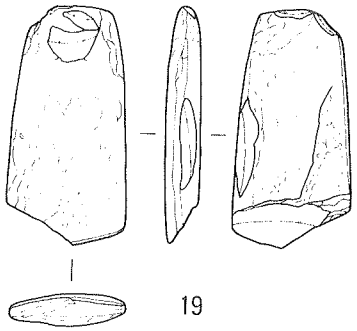
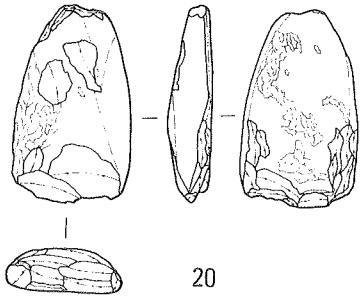


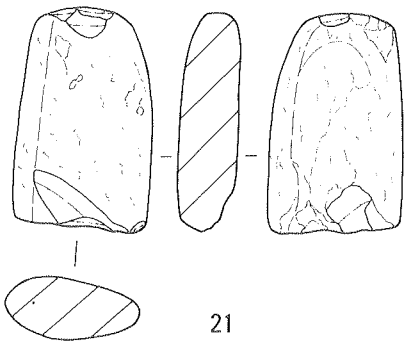
図112　石斧(３)

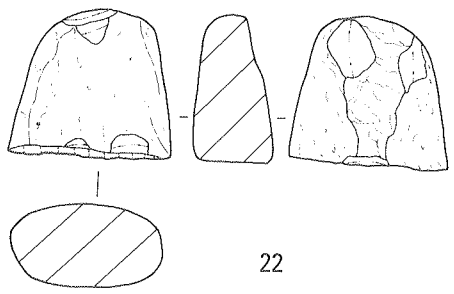
表25－4　石斧観察一覧(4)

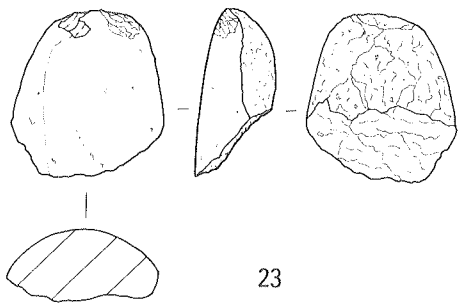
挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
113－19 131－19	21－ハ E－93 Ⅶb	(7.4) 3.7 1.0 (45)	緑色片岩	V	板状の素材を用いている。両側辺及び基端は打割調整を施したのちに研磨している。わりと薄身の石斧で、刃部は裏面側に大きく剝離していることから横斧として用いられたものと考えられる。
113－20 131－20	21－ハ E－96 Ⅵb	(6.1) (3.6) (1.3) (46)	緑色片岩	V	大きく剝離した破片を再利用したものである。裏面は破損した後に研磨が施されている。刃部は表面側に大きくはじけており、横斧として利用されていたことがうかがえる。
113－21 131－21	22－イ S－105 Ⅰ	(6.8) 4.2 2.0 (101)	緑色片岩	Ⅵ	風化が著しく判然としないが、自然の河原礫を用いている。刃部は破損して状況は不明である。基端に敲打痕がみられる。
113－22 131－22	22－イ 2号遺構 Ⅱ	(4.8) (5.0) (2.5) (80)	緑色片岩	Ⅵ	両側辺は敲打により調整を施している。基部の中央付近で折損し、基端には敲打痕がみられる。
113－23 131－23	22－ロ さ－107 Ⅰ	(5.1) (4.7) (2.2) (70)	緑色片岩	Ⅵ	基部上側で折損、研磨は施していない。基端に敲打痕がみられ、両側辺は敲打により調整されている。
113－24 131－24	21－ハ C－93 Ⅳ	(4.7) (5.7) 2.0 (60)	緑色片岩	Ⅵ	表裏面とも割面を呈し、基端の一部に自然面がみられる。両側辺は打剝調整を施し、基部上側で折損している。











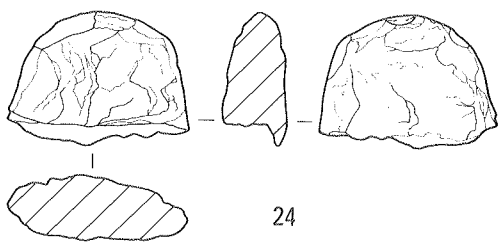
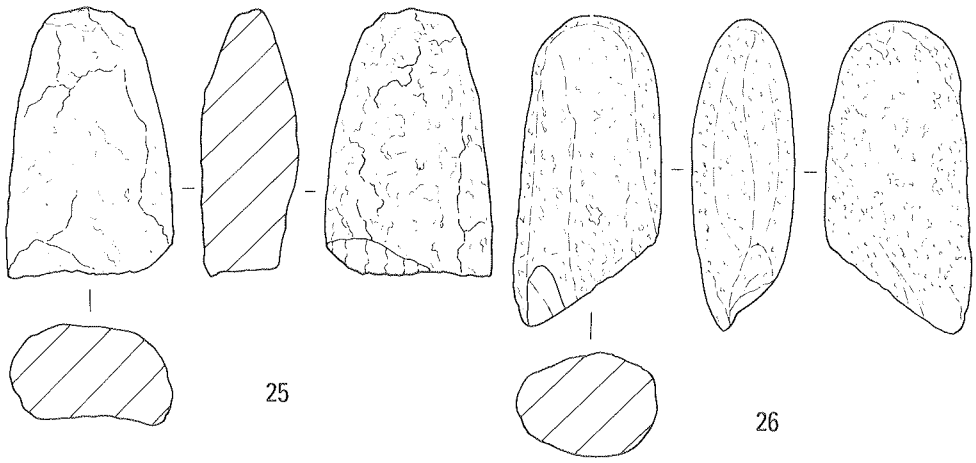
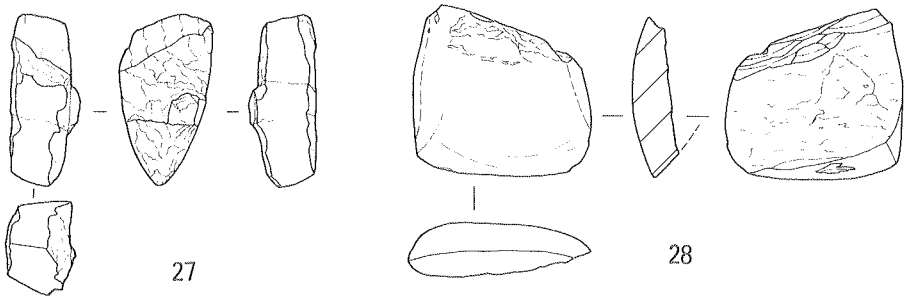


図113　石斧(4)

表25－5　石斧観察一覧(5)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
114－25 132－25	22－ロ 表採		(8.7) (5.4) 3.2 (230)	緑色片岩	Ⅵ	全面とも敲打によって形を整えている。研磨はみられない。刃部はかなり大きな衝撃により破損しており、基端も一部剥離している。
114－26 132－26	22－ロ 表採		(9.0) 4.7 3.4 (210)	緑色片岩	Ⅵ	風化が著しく判然としないが、棒状の礫を用いている。刃部が大きく欠損しており形状は不明である。
114－27 132－27	22－ロ き－110 Ⅳ		(5.5) (2.2) (3.0) (47)	緑色片岩	Ⅶ	太型蛤刃石斧の刃部片、かなりの衝撃により破損している。使用線条痕は判然としないが、形状より縦斧として使用されたようである。
114－28 132－28	21－ハ あ－94 Ⅵb		(5.2) 5.8 (1.2) (63)	緑色片岩	Ⅶ	入念な研磨が施されている。直刃になっていることや刃先に直角の使用線条痕がみられることより横斧として使用されていたようである。
114－29 132－29	22－ロ く－111 Ⅲ		(4.3) 6.3 1.0 (43)	緑色片岩	Ⅶ	板状の礫を用いている。幅に比して扁平であるが、偏刃になっていることより縦斧として利用されたようである。使用線条痕は判然としない。
114－30 132－30	22－ロ い－108 Ⅳ		(4.0) (5.3) (0.8) (24)	緑色片岩	Ⅶ	表面及び刃面とも比較的丁寧な研磨を施しているが、表面の一部に敲打痕が残っている。使用線条痕は判然としない。





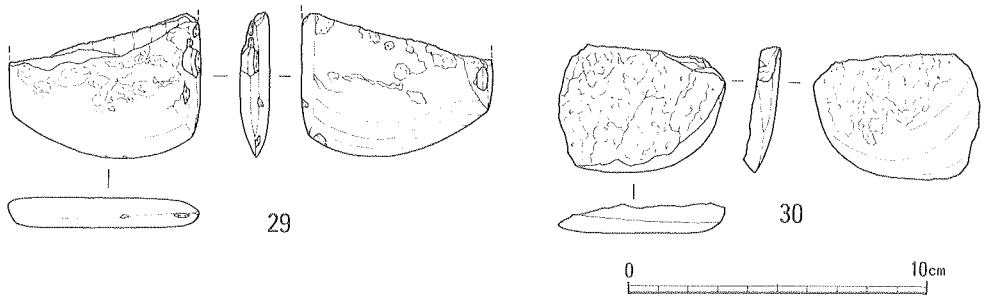
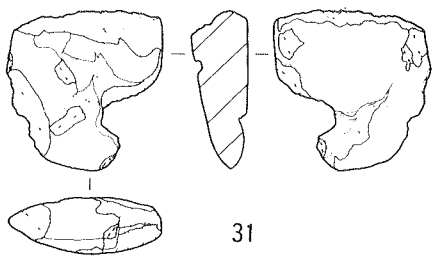
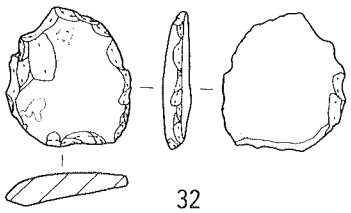


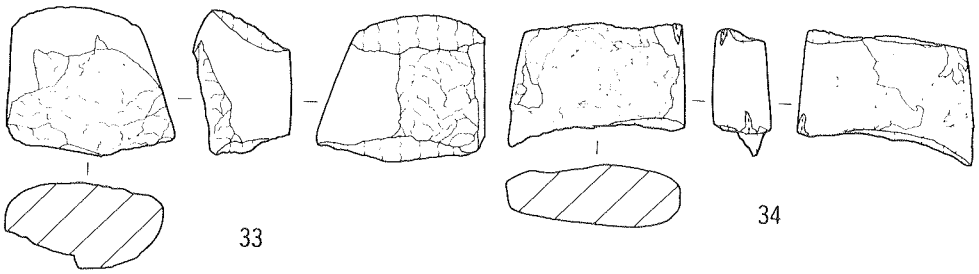
図114　石斧(5)

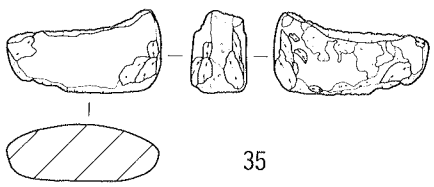
表25－6　石斧観察一覧(6)

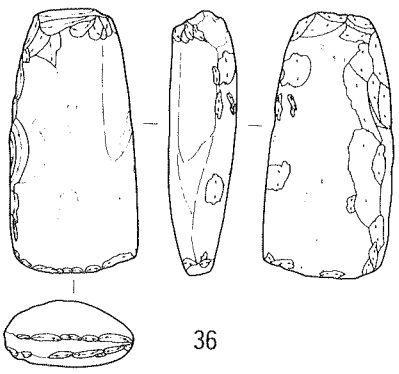
挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
115－31 133－31	22－イ 3号遺構 Ⅱ		(5.5) 5.2 2.9 (70)	緑色片岩	Ⅶ	表裏面ともよく研磨されている。かなりの衝撃により破損しており、全体の形状は判然としない。使用線条痕が斜位になっていることから縦斧として使用されたようである。
115－32 133－32	21－ハ D－94 Ⅵb		(4.9) (4.3) (1.0) (30)	緑色片岩	Ⅶ	表裏面とも比較的よく研磨されている。かなりの衝撃により破損しており、全体の形状は判然としない。
115－33 133－33	21－ハ E－93 Ⅳ		(5.0) (5.6) (3.1) (195)	緑色片岩	Ⅷ	かなり大きな衝撃により基端及び刃部が欠失している。現状から推すと、バチ形を呈する比較的大型の磨製石斧であったことがうかがえる。
115－34 133－34	21－ハ E－95 Ⅵb		(3.5) 6.0 2.0 (80)	緑色片岩	Ⅷ	強い衝撃により基端及び刃部が欠失している。現状から推すとわりと扁平な磨製石斧であったことがうかがえ、両側辺が磨かれており、定角になっている。
115－35 133－35	21－ハ C－93 北　東		(2.0) 5.3 1.9 (50)	緑色片岩	Ⅷ	強い衝撃により基端及び刃部が欠失している。現状から推すと、わりと扁平な磨製石斧であったことがうかがえる。
115－36 133－36	21－ハ E－95 Ⅵb		(9.2) 4.7 2.3 (160)	緑色片岩	Ⅸ	右側辺は自然面、左側辺は打割により調整されている。表面に比して裏面は研磨が入念ではなく、一部に調整痕が残っている。刃部は敲打により潰れているが、現状より両刃の石斧であったことがうかがえる。











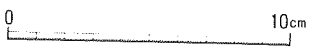
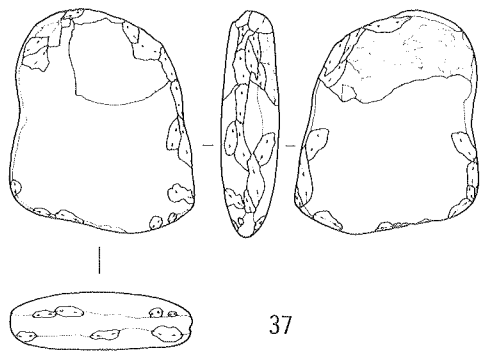
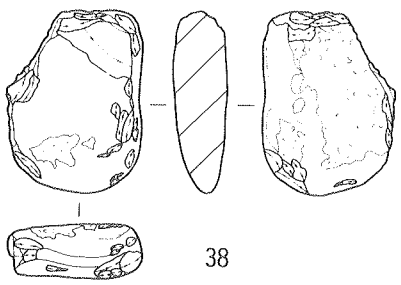


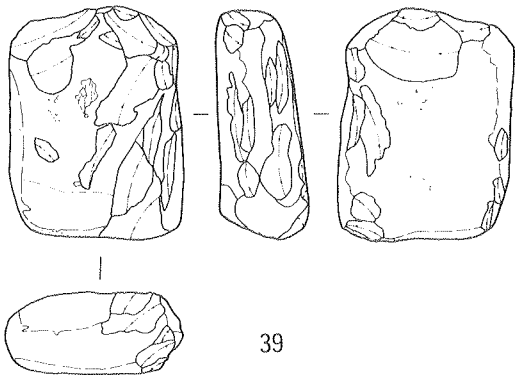
図115　石斧(6)

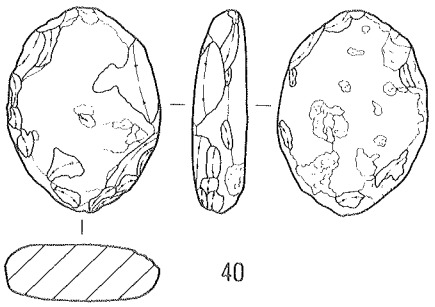
表25－7　石斧観察一覧(7)

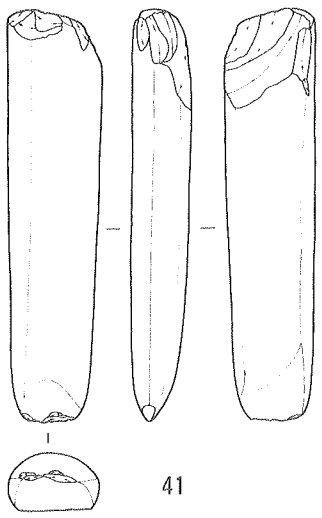
挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
116－37 134－37	21－ハ あ－94 Ⅵ		(6.5) 5.5 1.8 (114)	緑色片岩	Ⅸ	表裏面とも研磨されている。両側辺にノッチがみられることから付柄を意図したものとうかがえる。基端は大きく破損しており、刃部も敲打により潰れている。
116－38 134－38	21－ハ E－93 Ⅳ		(7.2) 5.4 2.6 (190)	緑色片岩	Ⅸ	両側辺は敲打により調整されている。表裏面とも研磨しているが徹底してない。基端と刃部は大きく潰れており、ハンマーとして用いられたことがうかがえる。
116－39 134－39	21－ハ E－95 Ⅴ		(5.8) (4.1) 1.6 (70)	緑色片岩	Ⅸ	右側辺と刃部のみ残っている。基端と左側辺は大きく破損している。右側辺に若干のノッチがみられ、付柄を意図したものとうかがえる。破損後にハンマーとして用いられている。
116－40 134－40	21－ハ F－94 Ⅲ		(6.4) (4.8) 1.7 (80)	緑色片岩	Ⅸ	表裏面とも研磨が施され、石斧であったことがうかがえるが、本来の形は全くとどめてない。周縁部が敲打により潰れていることから、破損後はハンマーとして利用されている。











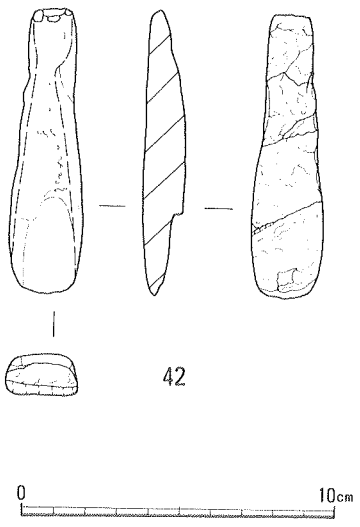


図116　石斧(7)・ノミ状工具

3．敲打器類

今回の調査により得られた石器のなかでは出土量が最も多く、全体の61%（105点）を占めている。それらは自然の河原礫や板状の礫、さらには河原礫の破片を何ら加工を施さずに用いているという共通の要素を持ち合わしているが、形態的な面や使用部位等によって特徴的なパターンがみられ、次の３類に大別できる。出土地区と分類の相関関係は表26に示した。なお、石器個々については観察一覧に示したとおりである。

A類 － 表裏面に敲打によるくぼみを有し、上下端は敲打により潰れ、両側辺に対になるくぼみがみられるもの。

B類 － 表裏面に敲打によるくぼみを有し、両側辺及び上下端に敲打による潰れがみられるもの。

C類 － 左右側辺及び上下端に敲打による潰れがみられるものや周縁部が潰れているもの。

表26　類別と出土地区の相関

類別／地区	A	B	C	計
崖上（22地区）	25	10	11	46
崖下（21地区）	24	16	17	57
不明	－	1	1	2
計	49	27	29	105

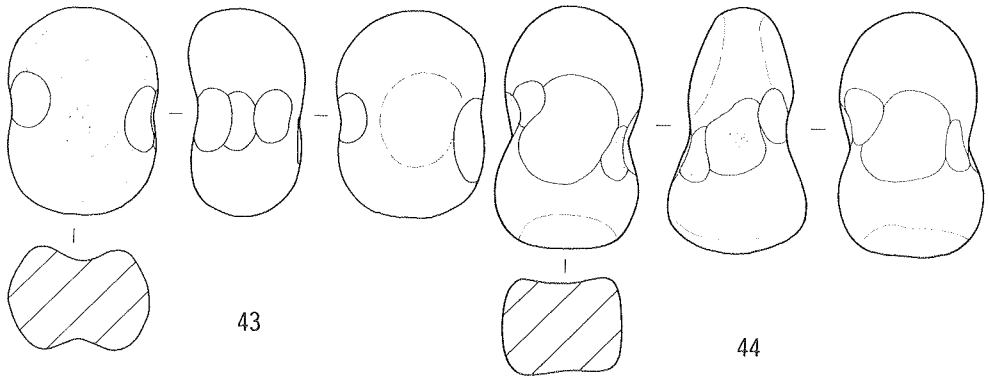
表からみると、A類は僅かながら崖上（22地区）からの出土が多いが、B・C類は崖下（21地区）から多く得られている。ただ、いずれもそれほど差はない。量的にはA類が最も多く（49点）、次いでC類（29点）、B類（27点）となっている。これらの石器はいわゆるハード・ハンマーと称される類で、石斧等の製作時に粗割りや敲打調整用に使用されたことがうかがえるが、すべてのものがそれではない。特にA類は小型のものが多く、左右側辺に対をなすくぼみを有するといったこれまでにほとんど出土例のない資料で、用途に関しては今ひとつ判然としないが、貝・骨製品の製作具や粉食用としての道具であることが考えられる。B類としたものは各時期を通してよく見受けられる六面使用のたたき石で、なかには表裏に磨面を有するものもあり、すり石として兼用されていたことがうかがえる。C類は前二者とは異なり、形態が一定しておらず、棒状の礫や円礫、剝片などを用いたハンマーで、石斧や貝・骨製品の製作具であったことが考えられる。

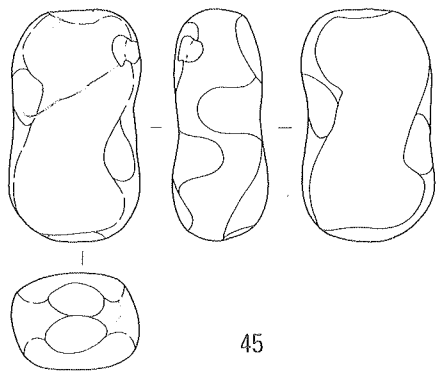
石質別には砂岩が圧倒的に多く、約68%を占めている。次いで緑色片岩（約11%）、玢岩（約７%）となっている。なかには沖縄本島でも産出地があまり知られてない閃緑岩製のものがあり、島外から持ち込まれた公算が大きい資料もある。

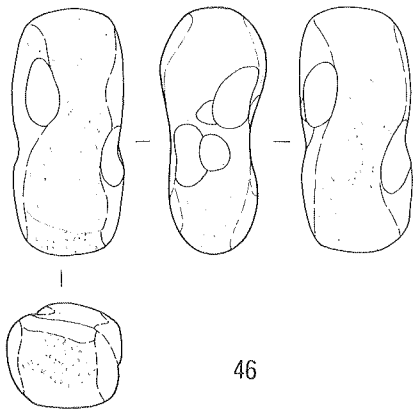
表27－1　敲打器観察一覧(1)

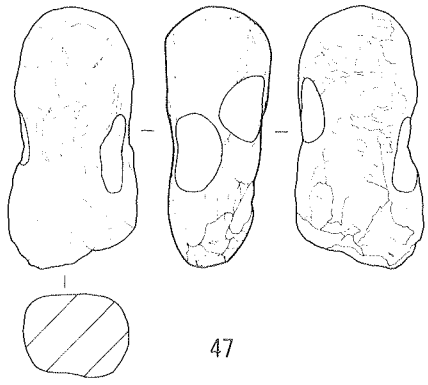
挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
117－43 135－43	21－ハ B－95 Ⅵb	7.1 5.1 3.8 205	砂岩	A	本標品の典型的な資料。卵形を呈した自然の河原礫を用いている。表裏面に比較的深いくぼみを有し、両側辺に対になるかたちで浅いくぼみがみられる。上下端には軽微な敲打痕を有する。
117－44 135－44	22－イ 3号遺構 Ⅱ	8.3 4.6 4.6 243	砂岩	A	本標品も典型的な資料。自然の河原礫を用いている。表裏面に深いくぼみを有し、両側辺に対になるくぼみがみられる。上下端には軽微な敲打痕を有する。
117－45 135－45	21－ハ D－95 Ⅵb	7.9 4.5 3.4 193	砂岩	A	本標品も典型的な資料。長方形をなす自然礫を用いている。表裏面にわりと深いくぼみを有し、両側辺に対になるかたちでくぼみがみられる。上下端には軽微な敲打痕を有する。
117－46 135－46	22－イ 3号遺構 Ⅱ	8.4 3.8 3.6 190	緑色片岩	A	自然の河原礫を用いている。表裏面に浅いくぼみがみられる。両側辺には各二面のくぼみがあり、ねじったような感じになっている。上下端には軽微な敲打痕を有する。
117－47 135－47	22－ロ 6号遺構 Ⅴ	(8.8) 4.3 3.6 (182)	千枚岩	A	自然礫を利用している。表裏面に浅いくぼみを有する。両側辺には各二面のくぼみがあり、ねじれた形状をなす。上下端に敲打痕がみられ、下端は大きく破損している。
117－48 135－48	21－ハ E－94 Ⅵb	7.0 3.8 3.2 118	砂岩	A	自然の河原礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有し、両側辺に対になるくぼみがみられる。上下端には軽微な敲打痕を有する。

※（　）内の数値は現存資料の最大値を示す。









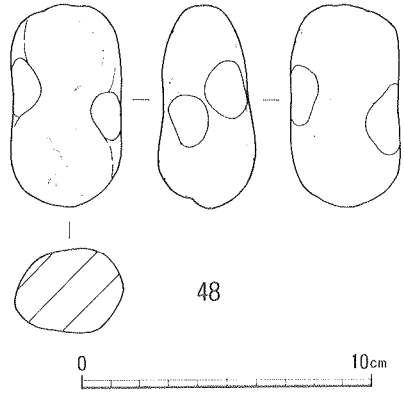


図117　敲打器(1)

表27－2　敲打器観察一覧(2)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
118－49 136－49	21－ハ	8.4 4.2 3.5 153	琉球石灰岩	A	自然礫を用いている。表裏面に比較的深いくぼみを有する。両側辺に対をなすくぼみがみられる。上下端に軽微な敲打痕を有する。
118－50 136－50	21－ハ C－94 Ⅵb	8.1 5.0 3.8 210	砂岩	A	わりと扁平な自然礫を用いている。表裏面に比較的深いくぼみがみられる。両側辺に対をなす各二面のくぼみを有する。上下端に軽微な敲打痕がみられる。
118－51 136－51	22－イ 3号遺構 Ⅱ	5.5 4.3 3.3 115	砂岩	A	小型の円礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみがみられる。両側辺には対をなす各二面のくぼみを有する。上下端に敲打痕を有し、小型のハンマーとして利用されている。
118－52 136－52	21－ハ E－93 Ⅶb	6.9 5.6 3.1 172	琉球石灰岩	A	わりと扁平な礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有する。両側辺に対になる各二面のくぼみがみられる。上下端に若干の敲打痕を有する。
118－53 136－53	22－イ R－109 Ⅱ	6.1 4.5 2.4 93	石灰質砂岩	A	扁平な礫を用いている。表裏面とも浅いくぼみを有する。両側辺は対になる各二面のくぼみがみられ、深いノッチ状を呈する。上下端は敲打により潰れている。
118－54 136－54	21－ハ う－92 Ⅶ	8.9 3.6 3.2 210	砂岩	A	半裁された礫を用いている。表裏面に敲打によるくぼみを有する。左側辺には三面のくぼみがみられ、ノッチ状を呈する。上下端も使用されており、若干潰れている。

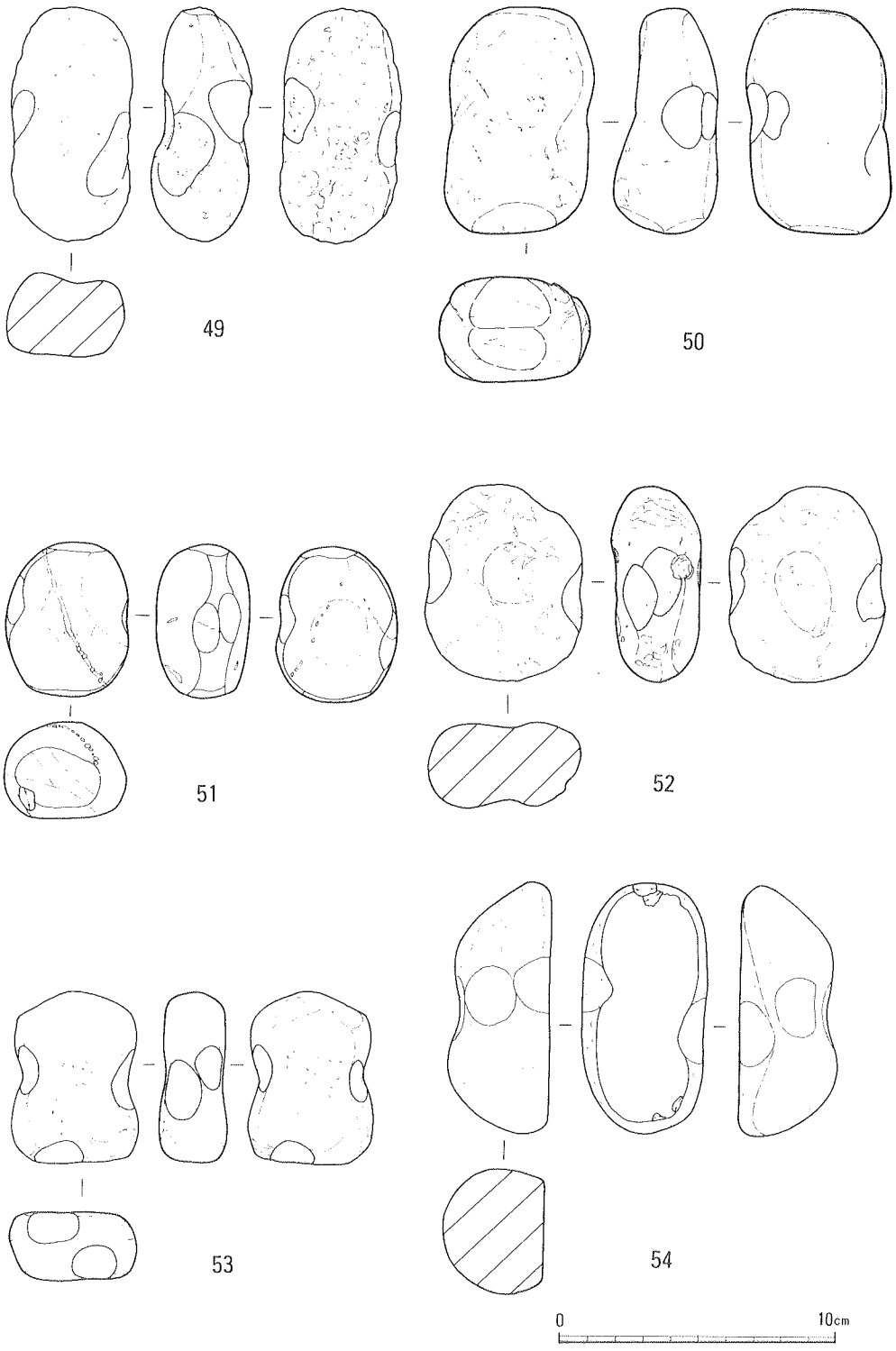


図118　敲打器(2)

表27－3　敲打観察一覧(3)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
119－55 137－55	22－イ 3号遺構 Ⅱ	(5.8) 5.0 4.1 (134)	砂岩	A	表裏面にわりと深いくぼみを有する。両側辺は対になる各二面のくぼみがみられ、ノッチ状を呈する。上端の一部に敲打による潰れがある。下部半分は欠失している。
119－56 137－56	21－ハ E－93 Ⅶb	(5.8) 4.5 2.9 (104)	玢岩	A	表裏面に対になる各二ケ所に比較的浅いくぼみがみられる。両側辺にも敲打による対のくぼみを有する。上端の一部は敲打により潰れている。下部半分は欠失している。
119－57 137－57	22－ロ d Ⅴ	5.5 5.3 2.9 112	石英斑岩	A	わりと扁平な礫を用いている。表裏面に比較的深いくぼみを有する。両側辺及び下端部に対になるくぼみがみられる。上端は敲打により潰れている。
119－58 137－58	21－ハ き－92 Ⅵb	6.0 5.1 3.6 134	砂岩	A	自然礫をそのまま用いている。表裏面に若干の敲打痕を有する。左側辺部に対のくぼみがみられる。上下端は敲打により潰れている。
119－59 137－59	22－ロ こ－109 Ⅲ	(4.6) 3.8 2.5 (59)	石英斑岩	A	自然礫をそのまま用いている。表裏面に比較的浅いくぼみを有する。右側辺に敲打による一対のくぼみがみられる。上端部は若干潰れている。下半分は欠失している。
119－60 137－60	22－ロ C Ⅴ	6.5 5.5 2.9 110	玢岩	A	わりと扁平な礫を用いている。表裏面に比較的浅いくぼみを有する。両側辺と下端部に敲打によるくぼみがみられる。

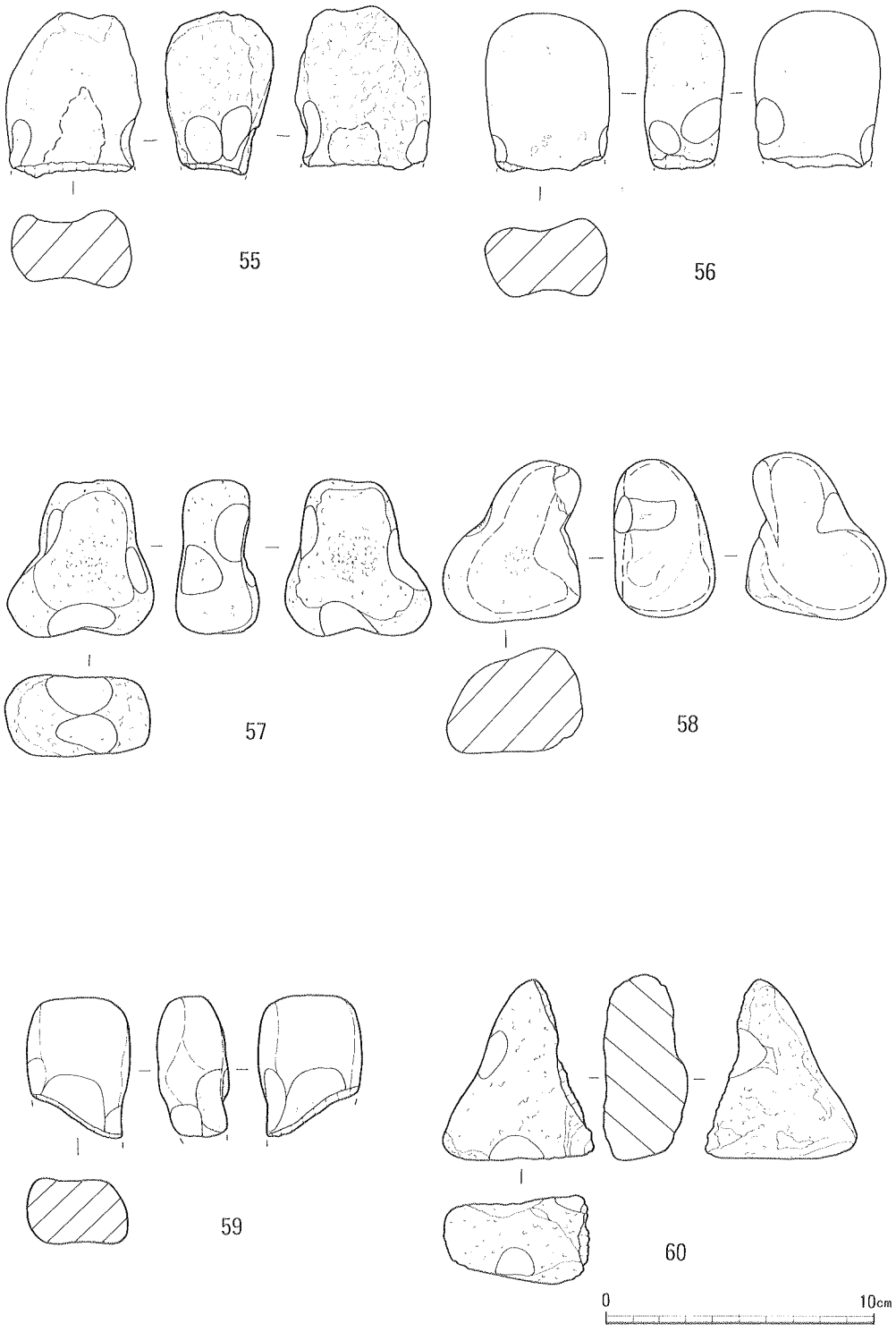


図119　敲打器(3)

表27－4　敲打器観察一覧(4)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
120－61 138－61	22－イ N－109 I		7.3 4.6 2.6 127	砂岩	A	板状の略三角形を呈する礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有する。左側辺に3カ所、右側辺には2カ所に敲打によるくぼみがみられる。上下端に軽微な敲打を有し、上端の一部が剥離している。
120－62 138－62	21－ハ E－93 Ⅶa		(7.1) 4.2 3.8 (172)	砂岩	A	柱状の礫を用いている。表面に浅いくぼみを有する。表面の左右両側辺と裏面の右側辺に敲打によるくぼみがみられる。上下端は著しい打撃により破損している。
120－63 138－63	21－ハ E－93 Ⅶ		6.4 5.1 2.2 98	砂岩	A	板状の礫を用いている。両側辺と下端部に敲打によるくぼみがみられる。上端部には軽微な敲打痕を有する。
120－64 138－64	22－ロ さ－111 Ⅲ		9.2 5.7 3.8 230	砂岩	A	半裁された礫を用いている。表面にわりと深いくぼみを有し、両側面には敲打によるくぼみがみられる。上下端は敲打により潰れている。
120－65 138－65	21－ハ B－94 Ⅵa		(8.2) 5.1 2.3 (130)	千枚岩	A	板状の礫を利用している。表裏面にくぼみを有する。両側辺も敲打によりかなり潰れ、ノッチ状を呈する。上下端は欠損しているが使用によるものと考えられる。
120－66 138－66	22－ロ け－110 Ⅳ		9.6 3.3 2.0 89	砂岩	A	板状の細長い礫を用いている。両側辺には対になるかたちで各2ケ所のくぼみがみられる。上下端に軽微な敲打痕を有する。

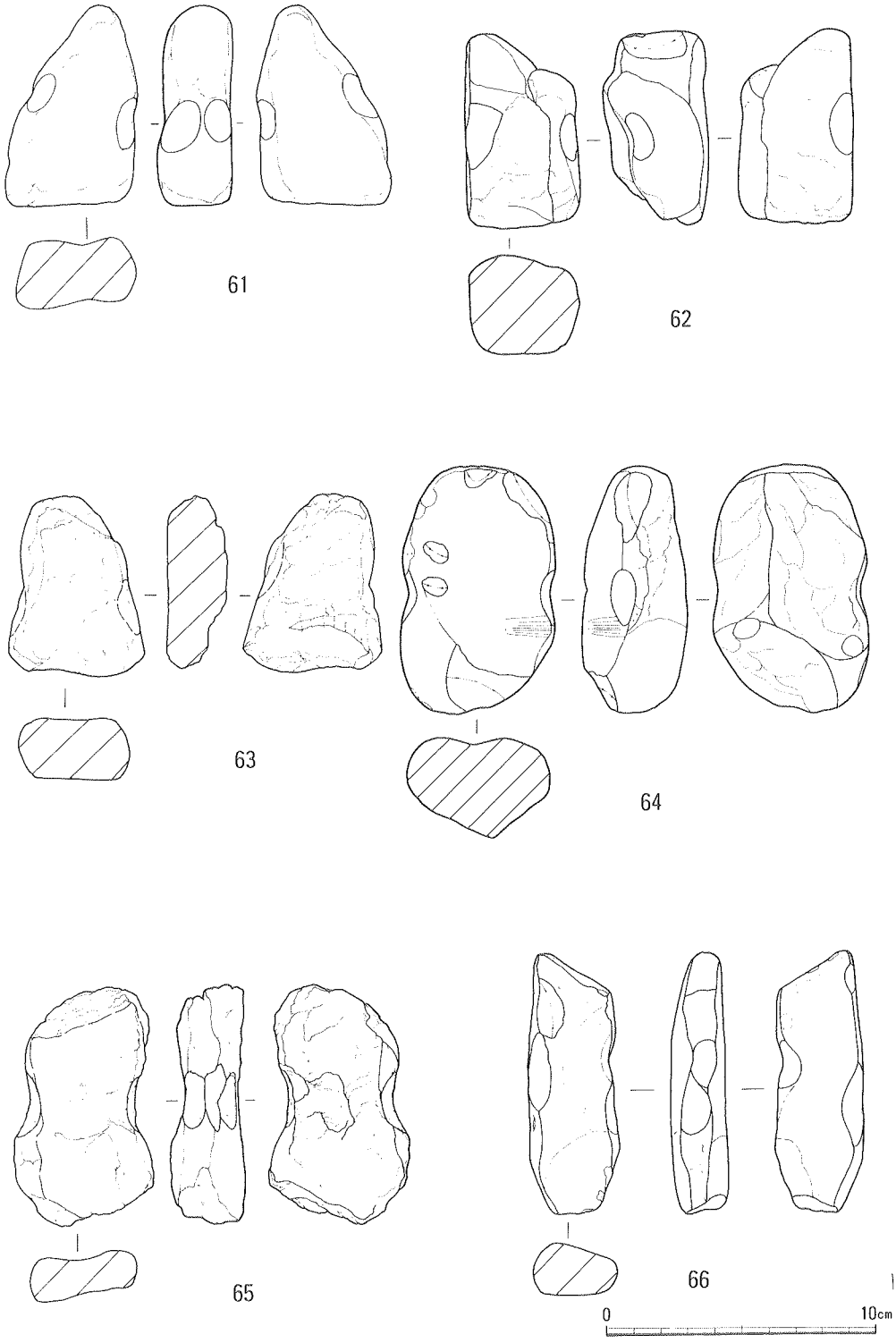


図120　敲打器(4)

表27－5　敲打器観察一覧(5)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
121－67 139－67	21－ハ あ－95 Ⅵb	(8.2) 3.7 2.7 (84)	砂岩	A	板状の礫を用いている。表裏面に比較的浅いくぼみを有する。両側辺にも敲打によるくぼみがみられる。上下端とも破損が著しい打撃によるものと考えられる。
121－68 139－68	21－ハ F－94 Ⅵb	7.9 5.7 3.5 230	玢岩	A	半裁された礫を用いている。表面にわりと浅いくぼみを有する。左右側辺部に敲打によるくぼみがみられる。上端部は敲打により若干潰れている。
121－69 139－69	22－イ 3号遺構 Ⅲ	9.0 6.5 3.7 284	砂岩	A	河原礫を用いている。表裏面に比較的浅いくぼみを有する。両側辺は敲打により各2カ所にくぼみがみられる。上下端とも敲打により潰れている。
121－70 139－70	22－ロ 畦	(8.7) 5.3 4.8 (280)	砂岩	A	自然の河原礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有する。左側辺部は上端及び下端側からの打撃により剥離している。右側辺は敲打により潰れ、裏面の右側辺も同様に潰れている。上下端は打撃により破損している。
121－71 139－71	21－ハ F－93 Ⅶb	(6.9) 5.3 3.0 (130)	砂岩	A	自然の礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有する。両側辺は敲打により対になるくぼみがみられ、ノッチ状を呈する。下端部は折損している。
121－72 139－72	21－ハ F－93 Ⅳ	8.1 6.8 4.4 265	安山岩	A	自然礫をそのまま用いている。表裏面に目立たない程度のくぼみを有する。両側辺に対になるくぼみがみられ、若干ノッチ状を呈する。下端部は敲打により潰れている。

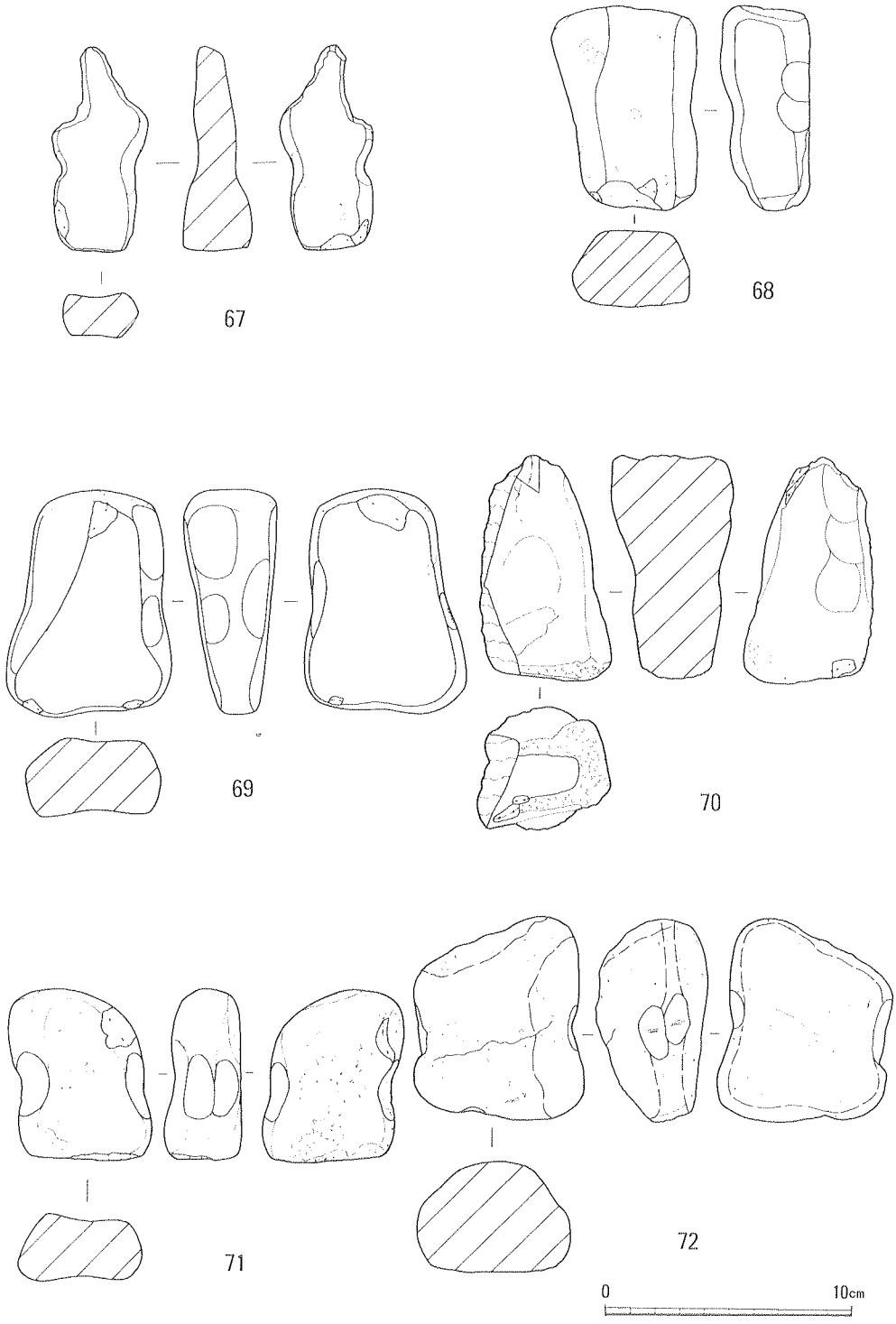
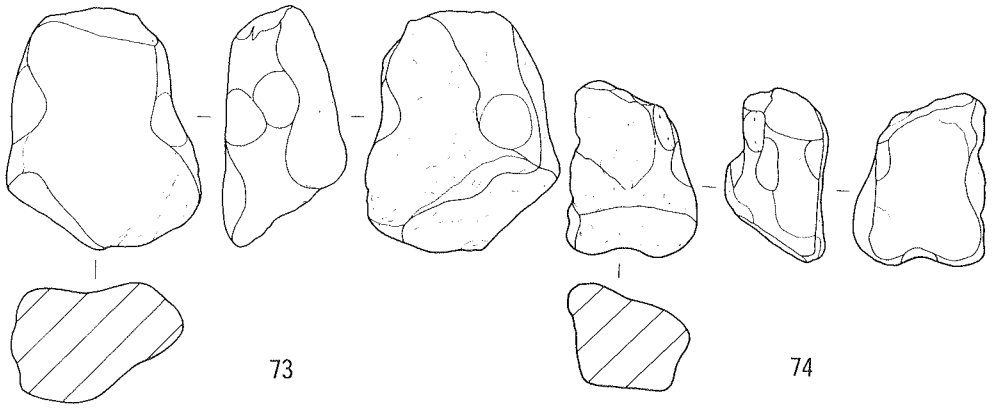
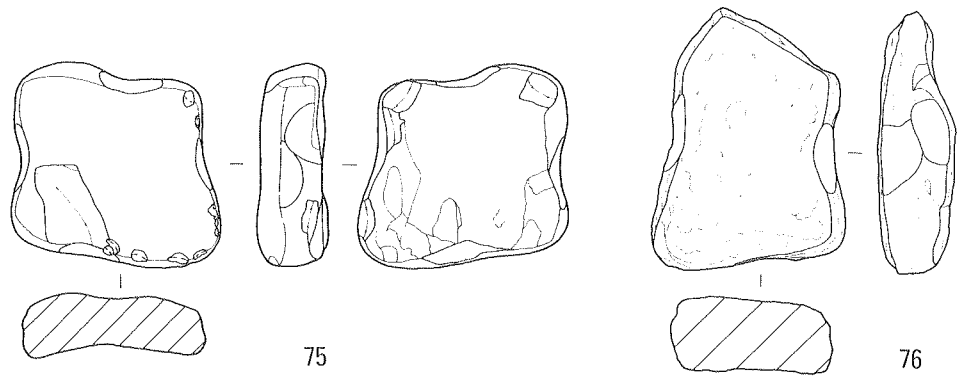


図121　敲打器(5)

表27－6　敲打器観察一覧(6)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
122－73 140－73	22－ロ Ⅳ		8.6 6.9 4.4 263	砂岩	A	自然礫をそのまま用いている。表裏面に比較的浅いくぼみを有する。左右の側辺には対になるくぼみがみられる。
122－74 140－74	21－ハ F－94 Ⅵa		5.7 4.5 3.3 145	閃緑岩	A	剝片を用いている。裏面に目立たない程度のくぼみを有する。左右両側辺には敲打による浅いくぼみがみられる。下端は抉りを有するほど潰れている。
122－75 140－75	21－ハ F－95 Ⅴ		6.7 6.8 2.3 210	砂岩	A	剝片を用いている。わりと薄く、表面にくぼみを有する。左右両側辺と上下端には敲打により、対になる各2面のくぼみがみられる。
122－76 140－76	22－ハ あ－95 Ⅳ		9.3 6.7 2.8 (227)	砂岩	A	扁平な自然礫を用いている。表裏面に目立たない程度のくぼみを有する。左右側辺には敲打により対になるくぼみがみられ、若干のノッチ状を呈する。上下端に軽微な敲打痕がみられ、上端は一部裏面側に剝離している。
122－77 140－77	21－ハ E－95 Ⅵb		8.2 5.3 4.0 225	砂岩	A	破損した礫を用いている。表面に目立たない程度のくぼみを有する。右側辺は敲打により潰れ、2面のくぼみがみられる。上端部も軽微な敲打により潰れている。
122－78 140－78	21－ハ E－94 Ⅵb		11.5 5.5 3.7 314	砂岩	A	自然の河原礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有する。左右側辺は敲打により各2面のくぼみがみられる。上下端は敲打により潰れている。





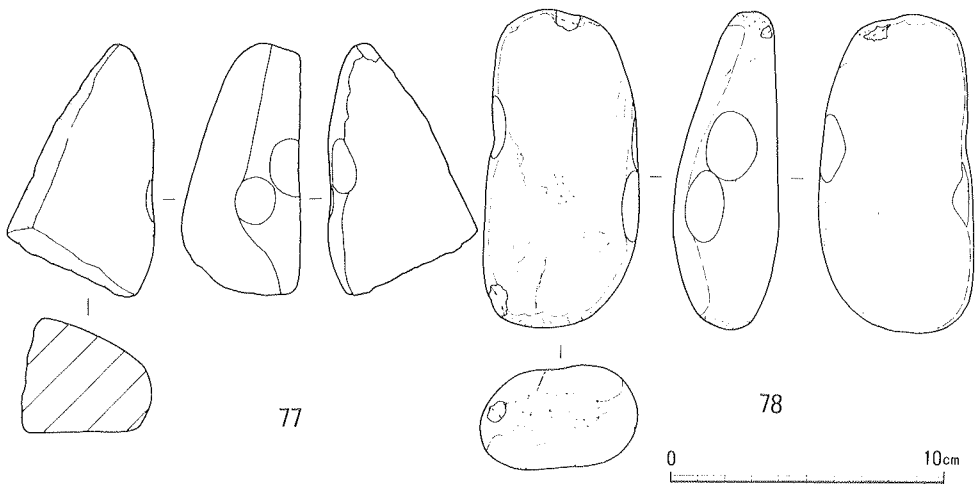


図122　敲打器(6)

表27－7　敲打器観察一覧(7)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
123－79 141－79	22－ロ Ⅳ	9.8 (5.0) 3.7 (200)	砂岩	A	自然の河原礫を用いている。表裏面に比較的深いくぼみを有する。左側辺及び上下端に敲打痕がみられる。上端と右側辺は大きく欠失している。
123－80 141－80	22－ロ こ－109 Ⅳ	8.3 5.8 4.4 275	玢岩	A	自然の河原礫を用いている。表裏面にわりと深いくぼみを有する。左右側辺に対をなすくぼみがみられる。上端は打撃により欠失し、下端は敲打により潰れている。
123－81 141－81	21－ハ う－92 Ⅵ	(8.2) 6.4 3.6 (300)	砂岩	A	自然の河原礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有する。左右の側辺には敲打により対になるくぼみがみられる。上下端は強い打撃により著しく潰れている。
123－82 141－82	22－イ 3号遺構 Ⅱ	8.2 5.9 3.3 182	砂岩	A	自然礫を用いている。表裏面に比較的浅いくぼみを有する。左右側辺には敲打により対になるくぼみがみられる。上下端は打撃により破損している。
123－83 141－83	22－ロ 1号	(8.7) 6.1 4.9 (310)	砂岩	A	自然の河原礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有する。左右側辺も敲打により潰れている。上端も使用されており、敲打痕がみられる。下半分は折損している。
123－84 141－84	21－ハ C－93 Ⅵa	(10.0) 9.6 5.0 (472)	閃緑岩	A	自然礫を用いている。表面に浅いくぼみを有する。左側辺に1カ所、右側辺に2カ所敲打による抉りがみられる。上端に軽微な敲打による潰れが観察できる。下端は折損している。

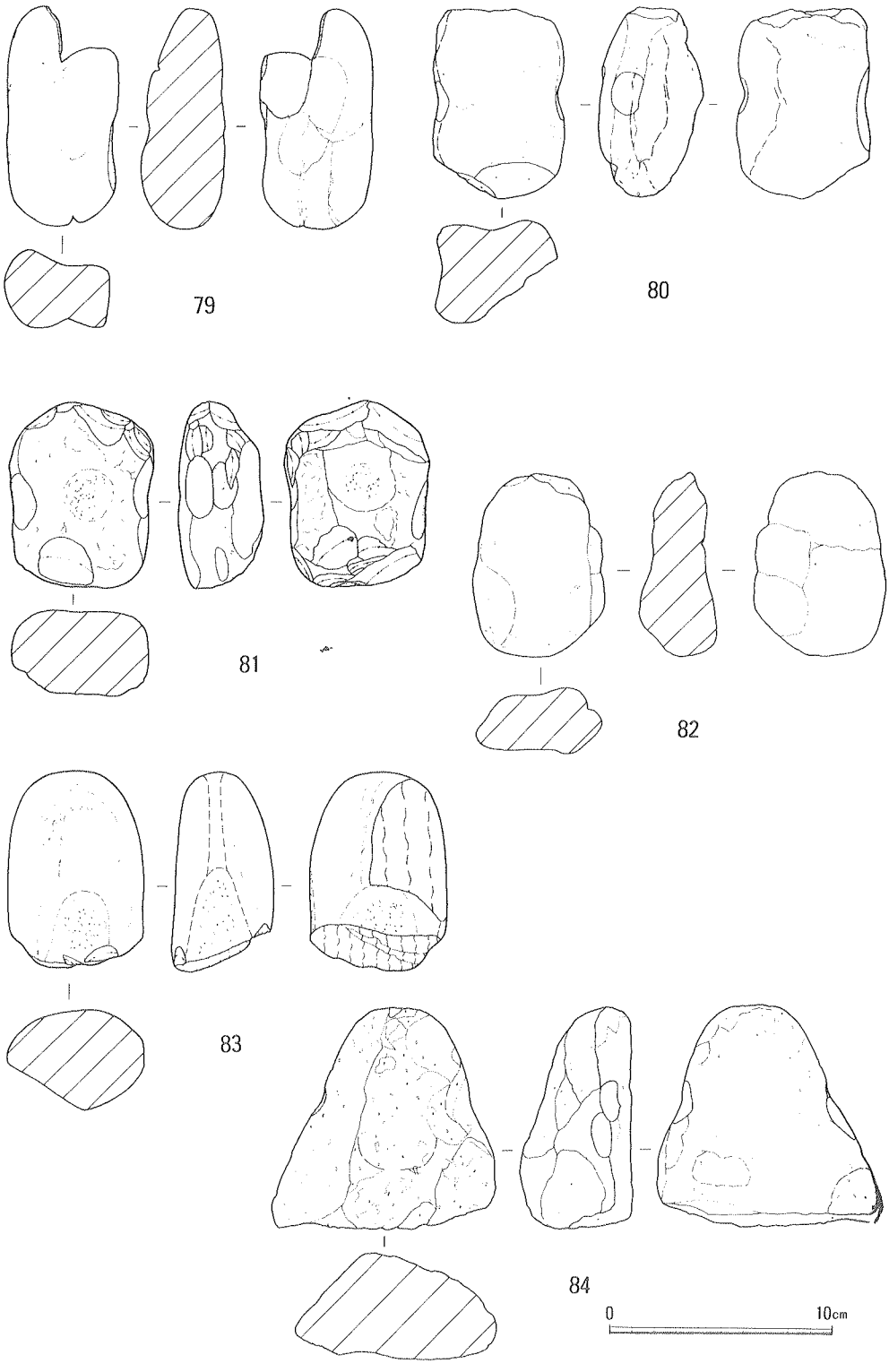


図123　敲打器(7)

表27－8　敲打器観察一覧(8)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
124－85 142－85	22－イ 3号遺講 Ⅱ		9.5 7.6 3.6 (374)	砂岩	A	自然の河原礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有する。左右側辺に対になるくぼみがみられる。上下端に敲打による潰れがみられ、下端部は裏面側に剥離している。
124－86 142－86	21－ハ D－96 Ⅶb		8.2 (3.0) (1.7) (56)	砂岩	A	自然の河原礫を用いている。かなり破損しているので判然としないが表面が僅かにくぼんでいる。左側辺に対をなすくぼみがみられ、上下端とも敲打による潰れがみられることから本類に含めた。
124－87 142－87	21－ハ D－94 Ⅵb		9.6 4.7 3.5 255	緑色片岩	A	河原礫の破片を利用している。表面にわりと浅いくぼみを有する。左右両側辺に対になるくぼみがみられる。上下端は敲打により潰れている。
124－88 142－88	22－ロ く－111 Ⅳ		7.6 5.5 (2.5) (130)	砂岩	A	自然の河原礫を用いている。表面の右側にわりと深いくぼみを有する。左側辺に対になるくぼみがみられる。上下端に若干の敲打痕があり、裏面は大きく剥離している。
124－89 142－89	22－イ 3号遺構 Ⅲ		9.6 6.4 3.0 297	砂岩	A	表面は自然面、裏面は割面を呈する。表裏面の中央部に比較的浅いくぼみを有する。左右側辺には敲打により対になるくぼみがみられる。上下端は敲打により潰れている。
124－90 142－90	22－イ 3号遺構 Ⅱ		5.7 5.0 2.9 154	緑色片岩	A	小型の自然礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有する。左右側辺に対をなすくぼみがみられる。上下端は敲打により若干潰れている。
124－91 142－91	21－イ Ⅱ		11.1 9.5 2.8 475	砂岩	A	板状の礫を用いている。表裏面に比較的浅いくぼみを有する。左右側辺に対をなすくぼみがみられる。上端にも同様な対をなすくぼみを有する。

図124　敲打器(8)

表27－9　敲打器観察一覧(9)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
125－92 143－92	22－ロ 4号遺構		7.4 6.2 4.0 180	玢岩	B	自然礫を用いている。表裏面に斜めのわりと深いくぼみを有する。左右側辺に浅いくぼみがみられ、上下端は敲打により潰れている。
125－93 143－93	21－ハ う－92 Ⅵ		7.5 6.2 4.6 (298)	砂岩	B	自然の河原礫を用いている。表裏面に比較的浅いくぼみを有する。周縁部は敲打により潰れている。上端は一部破損している。
125－94 143－94	22－イ 3号遺構 Ⅱ		9.1 6.0 2.4 (142)	砂岩	B	わりと扁平な河原礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有する。左右側辺及び下端部は敲打により潰れ、若干のノッチ状を呈する。上端は打撃により裏面側に剥離している。
125－95 143－95	21－ハ E－94 Ⅵb		7.6 7.0 2.5 187	砂岩	B	円形で扁平な河原礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有する。周縁部はフルに活用され、敲打による潰れが著しい。
125－96 143－96	21－ハ I－71 I		8.3 6.9 2.9 180	砂岩	B	剝片を使用している。表面に浅いくぼみを有する。周縁部はフルに利用され、敲打により潰れている。
125－97 143－97	21－ハ F－93 Ⅶb		(6.3) 5.3 2.5 (130)	細粒砂岩	B	わりと扁平な礫を用いている。表裏面に比較的深いくぼみを有し、左右側辺は敲打により潰れている。下半分は折損している。

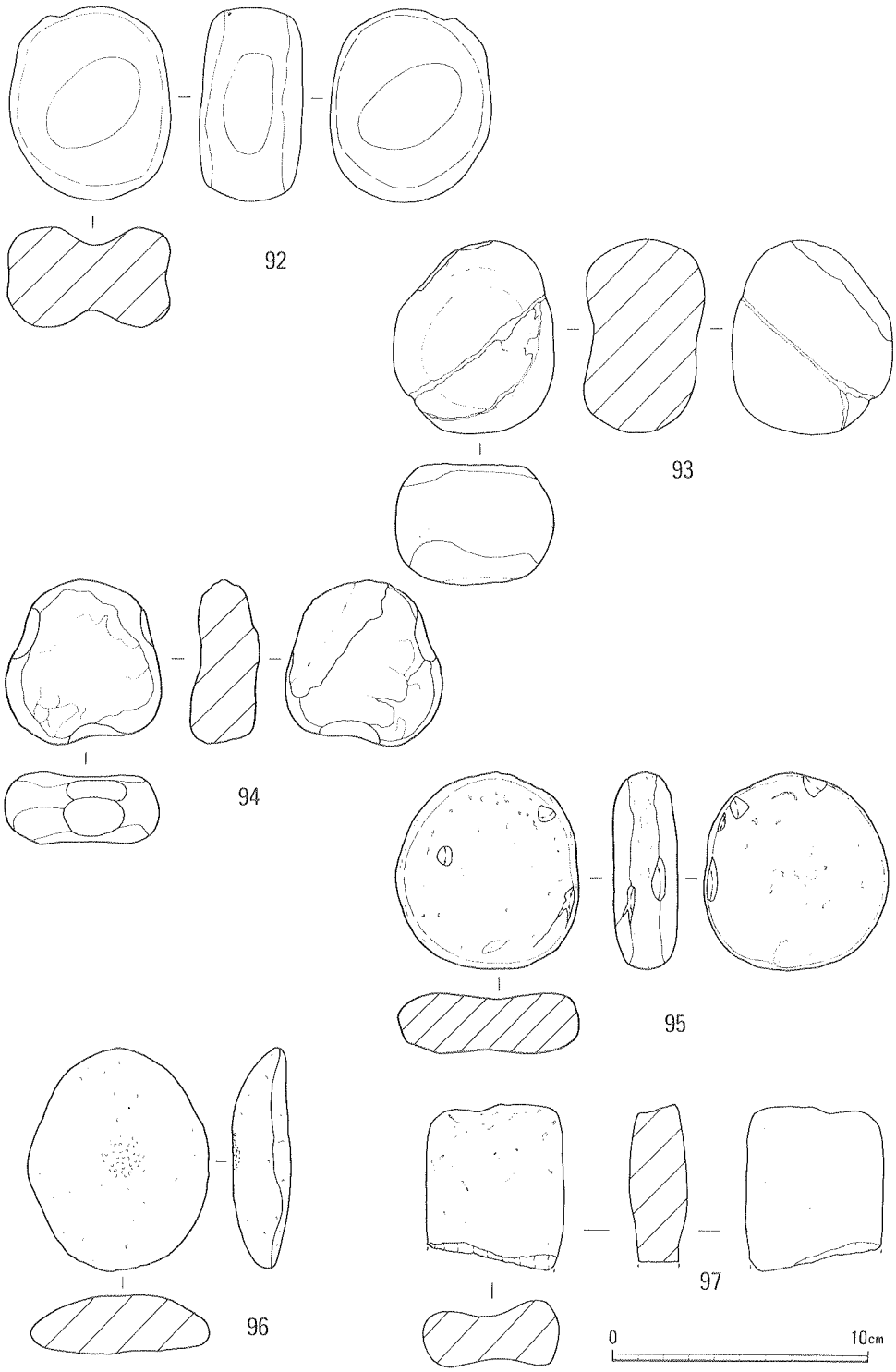


図125　敲打器(9)

表27－10　敲打器観察一覧(10)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
126－98 144－98	22－イ 3号遺構 Ⅱ		11.2 10.4 5.0 900	砂岩	B	円形の河原礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有し、周縁部は敲打により潰れている。表裏に磨面がみられ、すり石としても兼用されている。
126－99 144－99	21－ハ C－93 Ⅶb		13.5 6.0 5.5 1350	砂岩	B	わりと大型の河原礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有し、左右側辺及び上下端は敲打により潰れている。表裏に磨面がみられ、すり石として兼用している。
126－100 144－100	21－ハ A－94 Ⅵb		14.6 11.9 8.1 2200	砂岩	B	比較的大型の河原礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有する。左右側辺と上下端に軽微な敲打痕がみられる。
126－101 144－101	不明		(11.6) 7.8 5.0 (750)	砂岩	B	楕円形の河原礫を用いている。表面に浅いくぼみを有し、左右側辺と下端部に敲打による潰れがみられる。上端は欠失している。表裏の一部に磨面を有し、すり石として兼用されている。
126－102 144－102	21－ハ C－94 Ⅶ		(10.0) 8.8 5.8 (790)	砂岩	B	楕円形の河原礫を用い、表裏面に浅いくぼみを有する。右側辺に2カ所のくぼみがみられ、他は敲打により潰れている。上端に軽微な打痕があり、下端は強い打撃により折損している。
126－103 144－103	22－ロ 3号遺構		10.7 7.8 4.5 (520)	砂岩	B	楕円形の河原礫を用いている。表裏面に比較的深いくぼみを有し、左右側辺及び下端は敲打により潰れている。上端は強い打撃により裏面側に剥離している。

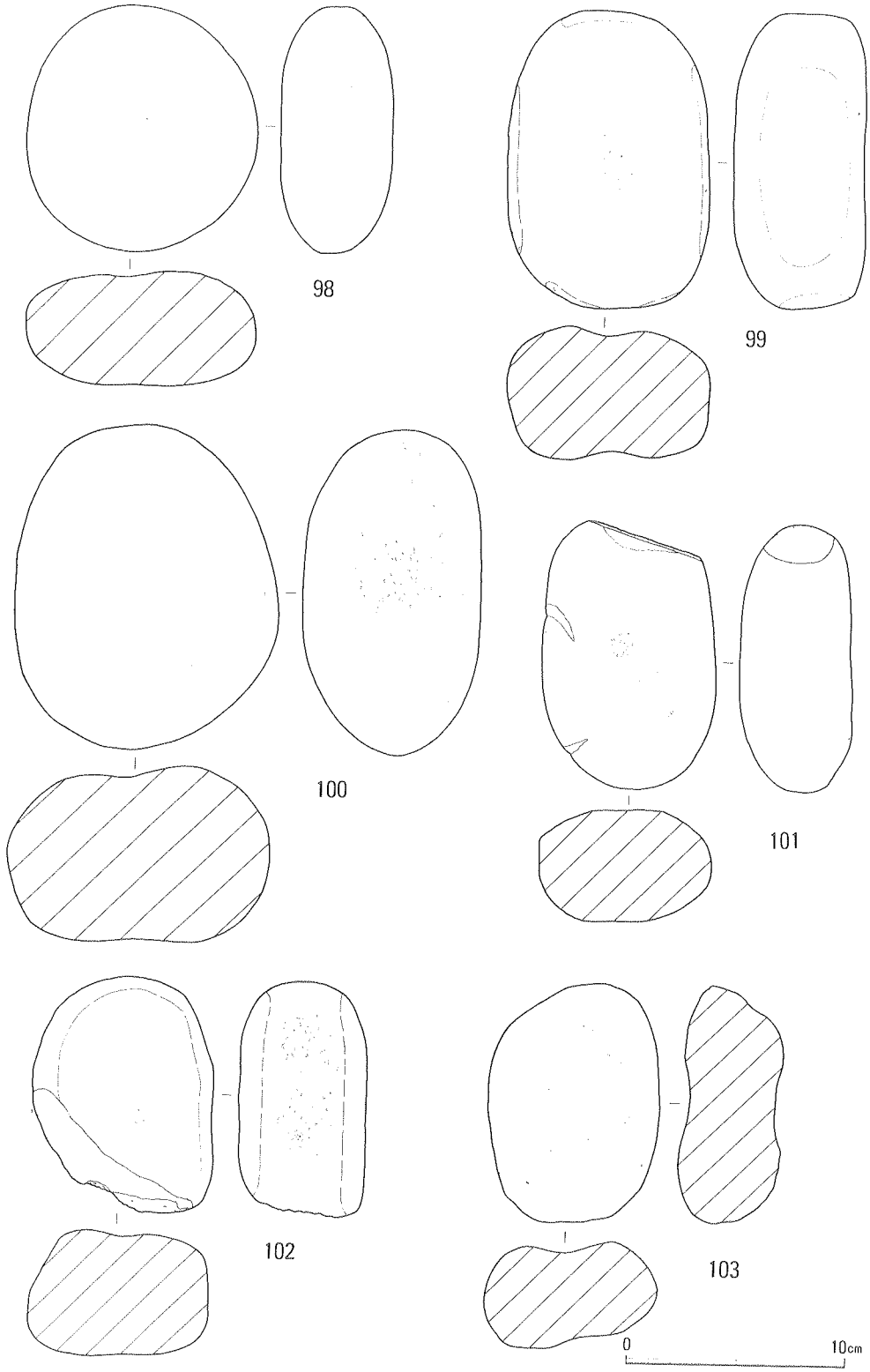


図126　敲打器(10)

表27－11　敲打器観察一覧(11)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
127－104 145－104	21－ハ う－92 Ⅵ	7.8 (5.1) 2.7 (490)	砂岩	B	ほぼ円形の河原礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有する。右側辺及び上下端に敲打による潰れがみられ、左側辺は欠失している。表裏に磨面を有し、すり石として兼用している。
127－105 145－105	22－ロ く－112 Ⅳ	(10.0) 8.5 3.5 (398)	砂岩	B	板状の礫を用いている。表面はわりと深く、裏面に浅いくぼみを有する。左右側辺に軽微な敲打痕がみられる。上端は打撃により破損している。
127－106 145－106	22－イ Ⅱ	14.8 6.4 4.5 480	安山岩	B	わりと細長い河原礫を用いている。表面は比較的深く、裏面に浅いくぼみを有する。左右側辺と上下端に使用による敲打痕がみられる。
127－107 145－107	21－ハ E－94 Ⅵb	9.8 5.2 6.1 412	砂岩	B	半裁した河原礫を用いている。表面と左側辺に浅いくぼみを有する。右側辺及び上下端に軽微な敲打痕がみられる。
127－108 145－108	21－ハ E－94 Ⅶ	13.8 8.9 6.4 1300	砂岩	B	わりと大型の河原礫を用いている。表面はわりと深く、裏面に浅いくぼみを有する。左右側辺には敲打による軽微な潰れがみられる。

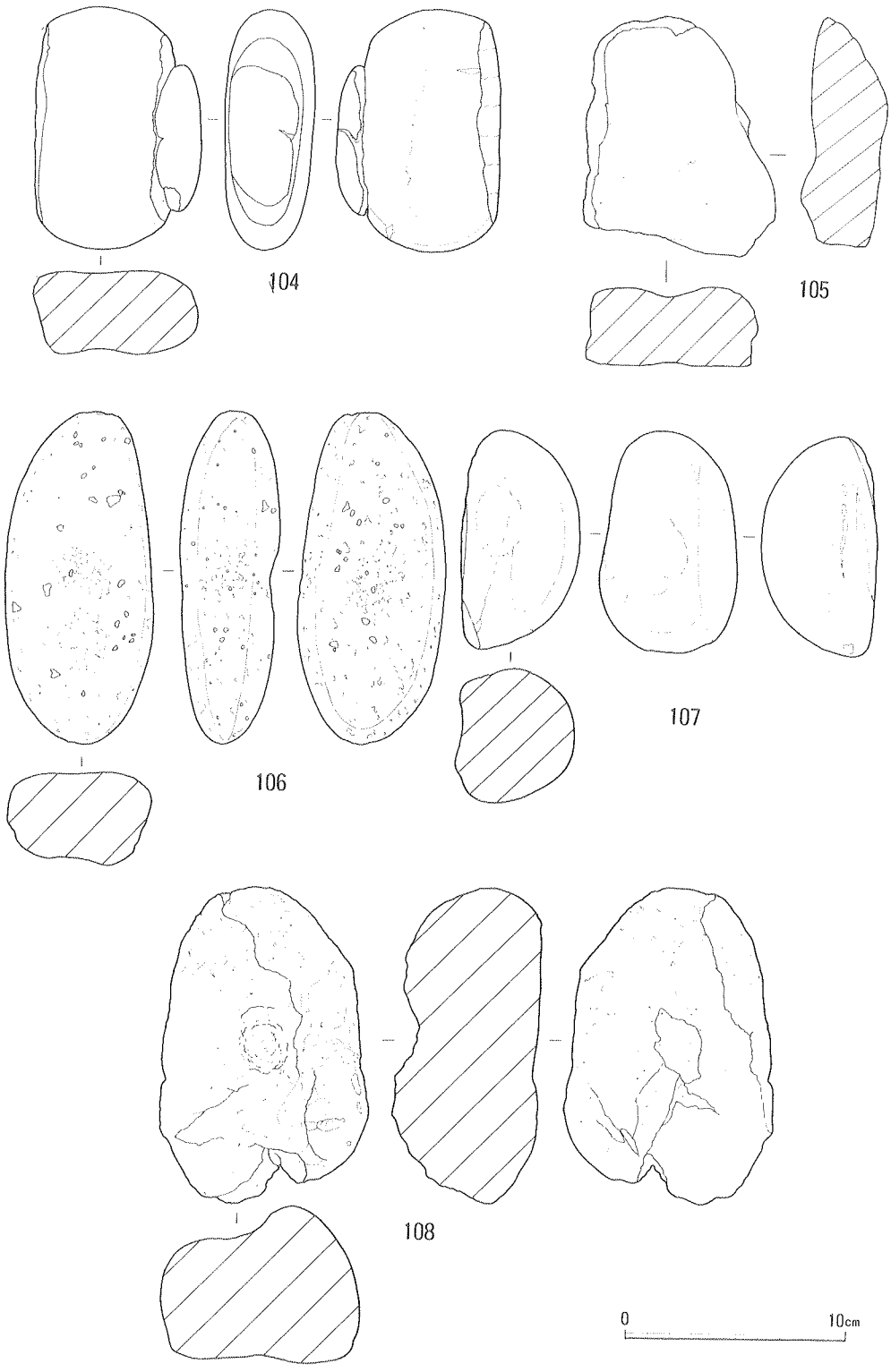


図127　敲打器(11)

表27－12　敲打器観察一覧(12)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
128－109 146－109	22－ロ け－109 Ⅲ	10.0 8.4 (3.4) (340)	砂岩	B	円形の河原礫を用いている。表面にわりと浅いくぼみを有し、左右側辺には敲打による潰れがみられる。裏面は強い衝撃により半裁しているが、形状より本類に含めた。
128－110 146－110	22－イ	7.7 7.0 3.3 (280)	砂岩	B	小型の河原礫を用いている。表裏面に比較的浅いくぼみを有し、周縁部は敲打による潰れが著しい。上下端は強い打撃により剥離している。
128－111 146－111	21－ハ あ－94 Ⅵ	(8.3) 9.3 3.2 (345)	緑色片岩	B	河原礫の剝片を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有し、周縁部には敲打により潰れている。左側辺と下端部は強い打撃により剥離している。
128－112 146－112	21－ハ E－93	(5.8) (7.2) 5.1 (340)	砂岩	B	河原礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有し、右側辺には敲打による潰れがみられる。強い衝撃により左側辺及び上下端が欠失し、全体の形状は判然としない。
128－113 146－113	21－ハ F－94 Ⅵb	14.2 12.2 9.7 (2300)	砂岩	B	比較的大型の河原礫を用いている。表面に浅いくぼみを有し、右側辺と上端は敲打によりかなり潰れている。下端は強い打撃を受けて裏面側に大きく剝離している。

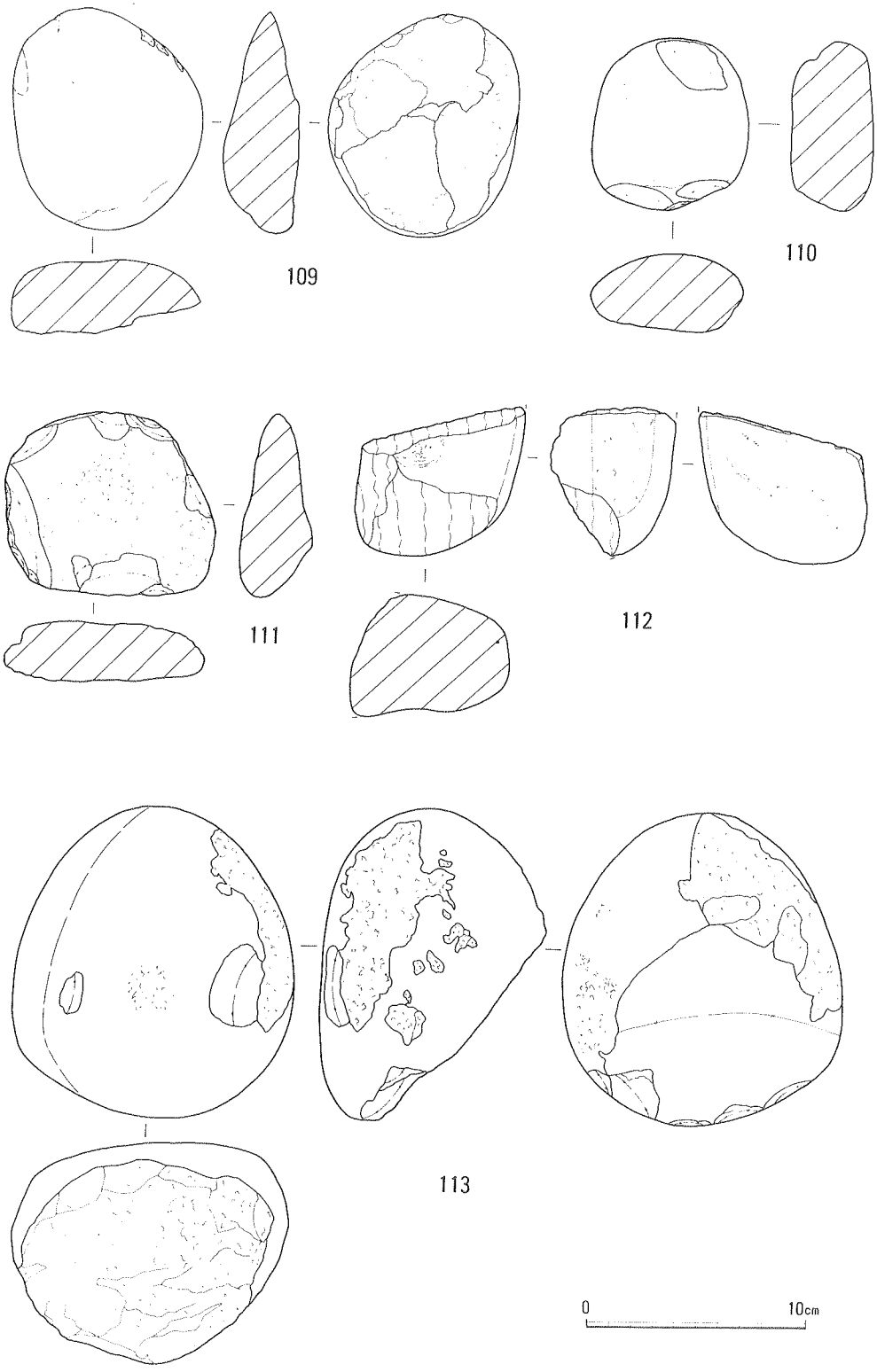


図128　敲打器(12)

表27－13　敲打器観察一覧(13)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
129－114 147－114	21－ハ え－92 Ⅵ	18.4 12.5 9.7 3900	閃緑岩	B	大型の河原礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有し、右側辺及び上下端は敲打によりかなり潰れている。表面の一部に磨面がみられ、すり石としても兼用している。
129－115 147－115	21－ハ E－94 Ⅵb	19.7 10.2 5.6 1750	砂岩	B	比較的大型の河原礫を用いている。表裏面に微弱なくぼみを有し、左右側辺と上下端は敲打により潰れている。
129－116 147－116	22－イ 3号遺構 洞内	(21.5) 13.6 5.8 (2500)	千枚岩	B	大型の三角柱状を呈す礫を用いている。表面にわりと大きく深いくぼみを有する。左側辺は敲打により潰れ、上下端は折損している。
129－117 147－117	21－ハ E－93 Ⅶ	18.7 7.6 6.3 1810	砂岩	B	大型の柱状を呈す礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有し、左右側辺に敲打による潰れがみられる。
129－118 147－118	22－イ 3号遺構 Ⅱ	(14.2) 12.4 8.5 (3200)	砂岩	B	大型の河原礫を用いている。表裏面に微弱なくぼみを有し、左右側辺と下端部に敲打による潰れがみられる。上端は強い打撃により折損している。

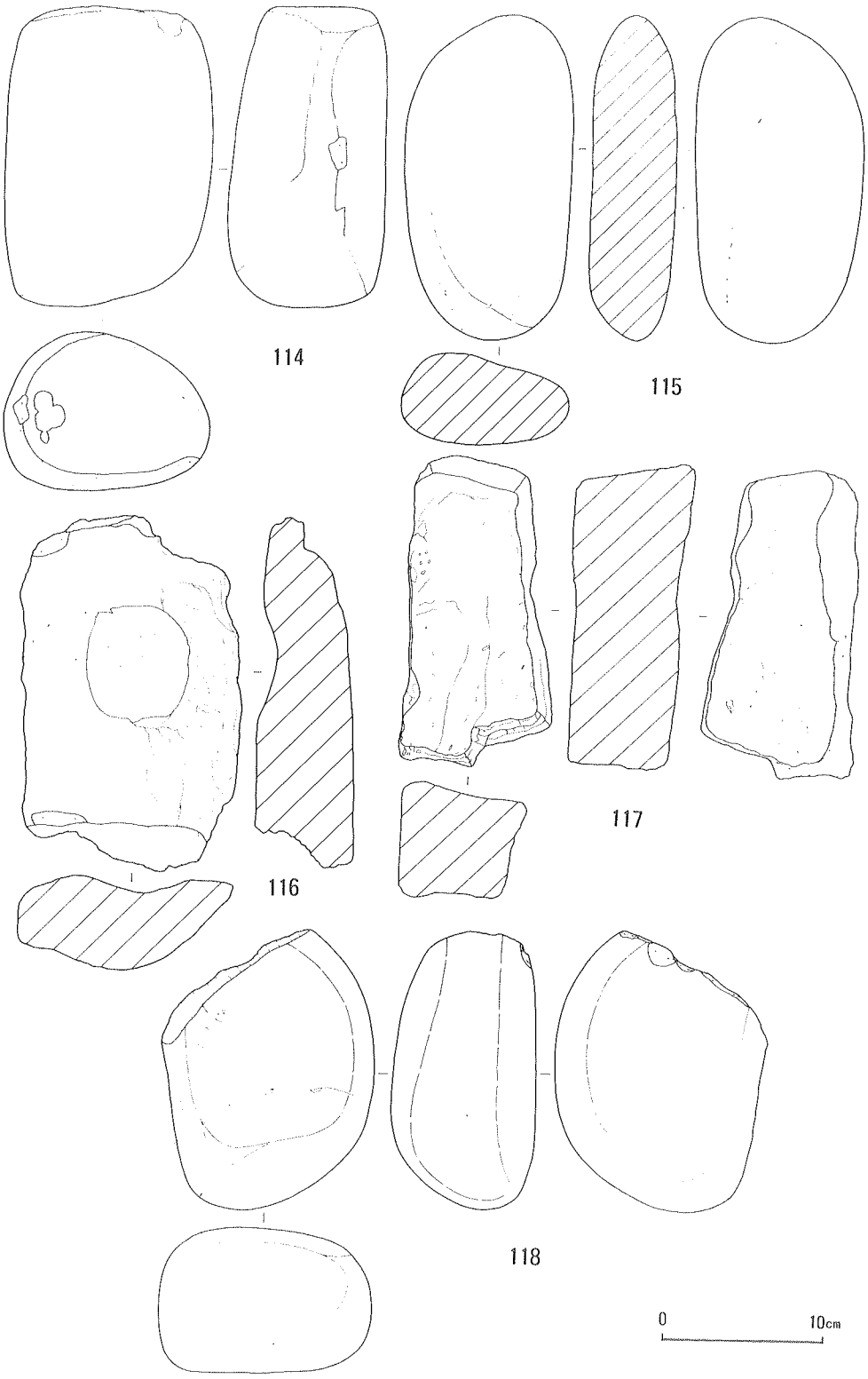


図129 敲打器(13)

表27－14　敲打器観察一覧(14)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
130－119 148－119	21－ハ D－94 Ⅷb	14.1 (7.8) 7.4 (1030)	砂岩	C	わりと大型の河原礫を用いている。表面に敲打による軽微なくぼみを有し、左側辺にも2カ所にくぼみがみられる。上下端はかなり潰れ、裏面及び右側辺は強い打撃により破損している。
130－120 148－120	22－イ 1号遺構 Ⅱ	9.2 7.3 6.0 580	砂岩	C	厚味のある河原礫を用いている。左右側辺に若干の敲打痕を有する。上下端も敲打により潰れている。
130－121 148－121	21－ハ D－95 Ⅶ	12.7 7.7 5.6 780	砂岩	C	楕円形をなすわりと大型の河原礫を用いている。表裏面に浅いくぼみを有し、左右側辺及び上下端は敲打による軽微な潰れがみられる。
130－122 148－122	21－ハ あ－95 Ⅶb	9.8 7.5 5.8 520	砂岩	C	河原礫の破片を用いている。表面は割面、裏面は自然面を呈する。周縁部はフルに使用されており、敲打により潰れている。
130－123 148－123	22－ロ 4号遺構 Ⅱ	9.1 8.0 4.0 452	砂岩	C	自然の河原礫を用いている。表面にわりと浅いくぼみを有し、左右側辺は敲打により潰れている。上下端にも同様な敲打痕がみられる。

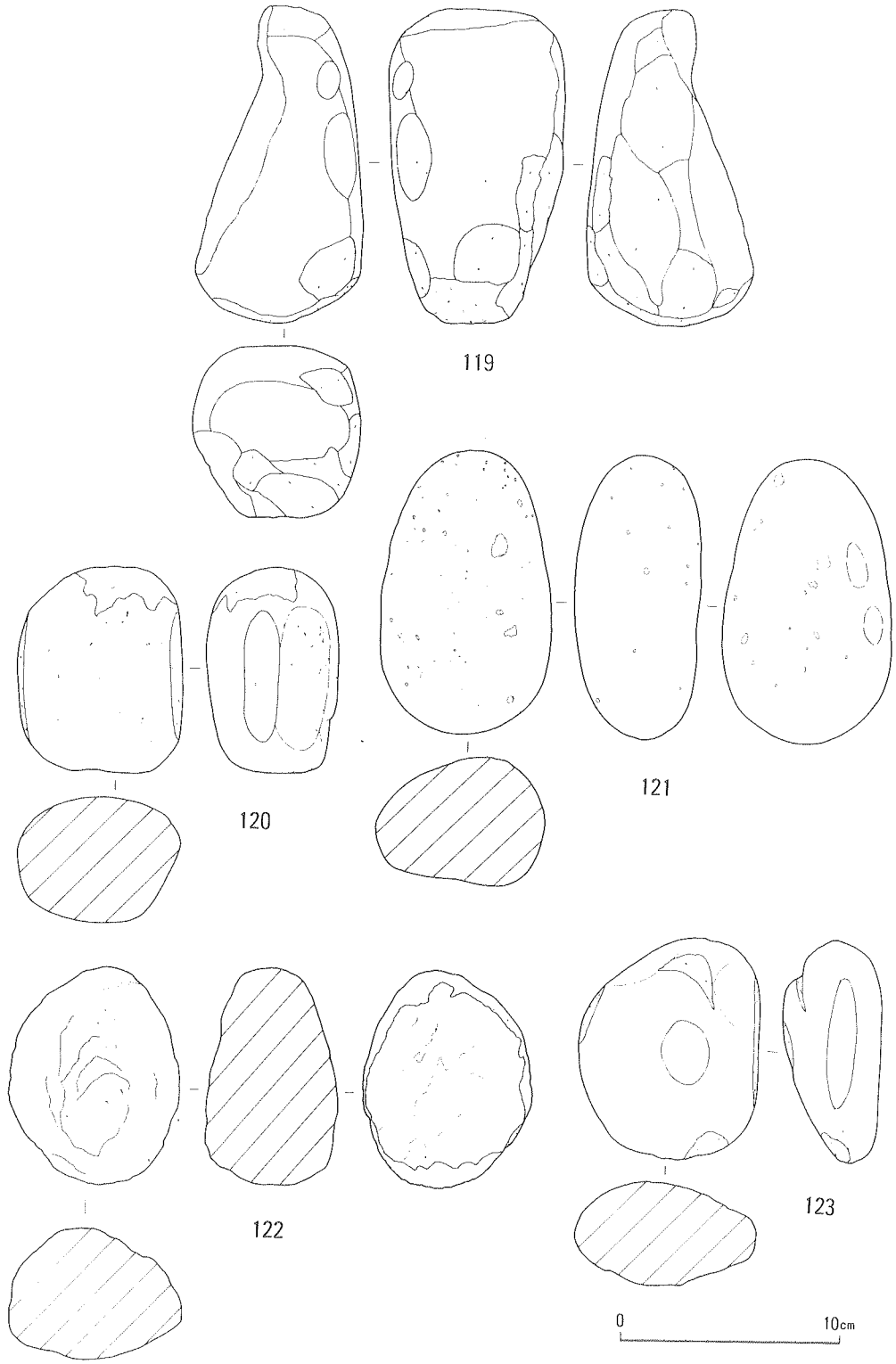


図130　敲打器(14)

表27－15　敲打器観察一覧(15)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
131－124 149－124	22地区 表採	5.6 4.1 4.6 169	緑色片岩	C	小型の河原礫を用いている。左右側辺は若干のノッチ状を呈し、全体的に手なれ様の摩滅がみられる。上下端は敲打による潰れが著しい。
131－125 149－125	22－イ I	7.3 5.5 4.1 235	砂岩	C	わりと小型の河原礫を用いている。左右側辺に軽微な敲打痕を有し、下端は敲打によりかなり潰れている。
131－126 149－126	22－ロ 柱穴 47	9.9 5,2 3.7 (295)	緑色片岩	C	棒状の礫を用いている。風化が著しく判然としないが、上下端は敲打により潰れ、裏面は一部剥離している。
131－127 149－127	21－ハ L－72 I	(8.8) 4.3 3.0 (185)	緑色片岩	C	棒状の河原礫を用いている。上下端とも打撃による剥離が著しい。その他には加工痕はみられない。
131－128 149－128	21－ハ F－93 IV	(11.6) 5.6 4.4 (460)	緑色片岩	C	棒状の河原礫を用いている。表面に浅いくぼみを有し、上下端は強い打撃により潰れ、著しく破損している。表裏に磨面がみられ、すり石としても兼用している。
131－129 149－129	21－ハ A－95 VIb	(9.2) 5.8 2.5 (225)	緑色片岩	C	わりと扁平な河原礫を用いている。左右側辺は敲打により、若干潰れている。上下端は強い打撃により表裏側に大きく剥離している。

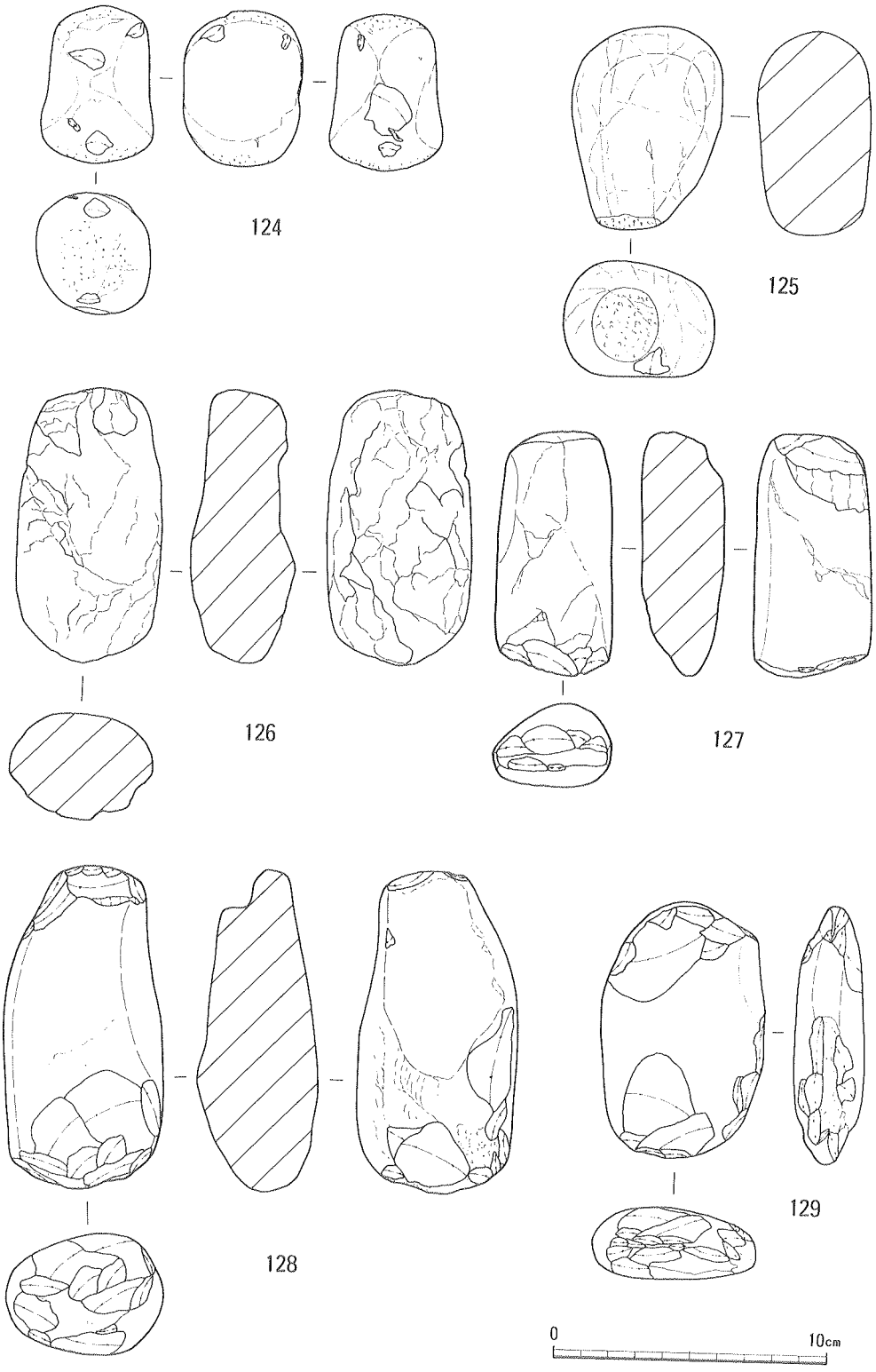


図131　敲打器(15)

表27－16　敲打器観察一覧(16)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅　（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石　質	分類	観　察　事　項
132－130 150－130	22－ロ く－111 Ⅳ		6.4 4.7 2.0 80	砂　岩	C	河原礫の剝片を使用したもので、表面は自然面、裏面は割面を呈する。左右側辺及び上下端は敲打により潰れている。
132－131 150－131	21－ハ F－94 Ⅵa		7.7 5.8 3.0 165	砂　岩	C	河原礫の剝片を使用したもので、表面は自然面、裏面は割面になっている。左右側辺及び上下端は敲打により潰れている。
132－132 150－132	21－イ 0－96 Ⅱ		8.8 6.6 2.3 (158)	砂　岩	C	河原礫の剝片を使用したもので、表面は自然面、裏面は割面を呈する。周縁部はかなり使用されており、敲打による剝離が著しく、上端は一部欠失している。
132－133 150－133	21－ハ E－94 Ⅶ		7.8 5.1 2.7 129	砂　岩	C	河原礫の剝片を用いている。周縁部はフルに活用され、表面の一部に自然面を残す他は強い打撃により表裏側に大きく剝離している。
132－134 150－134	21－ハ C－93 Ⅳ		6.0 5.2 2.5 (92)	緑色片岩	C	河原礫の剝片を用いており、表面に自然面が残っている。周縁部は敲打による潰れが著しく、裏面は大きく剝離している。
132－135 150－135	21－ハ A－94 Ⅵb		6.8 5.1 3.1 (120)	砂　岩	C	表面の一部に自然面を残す程度で周縁部はかなり使用されており、強い打撃による剝離が著しい。下端部は大きくはじけている。

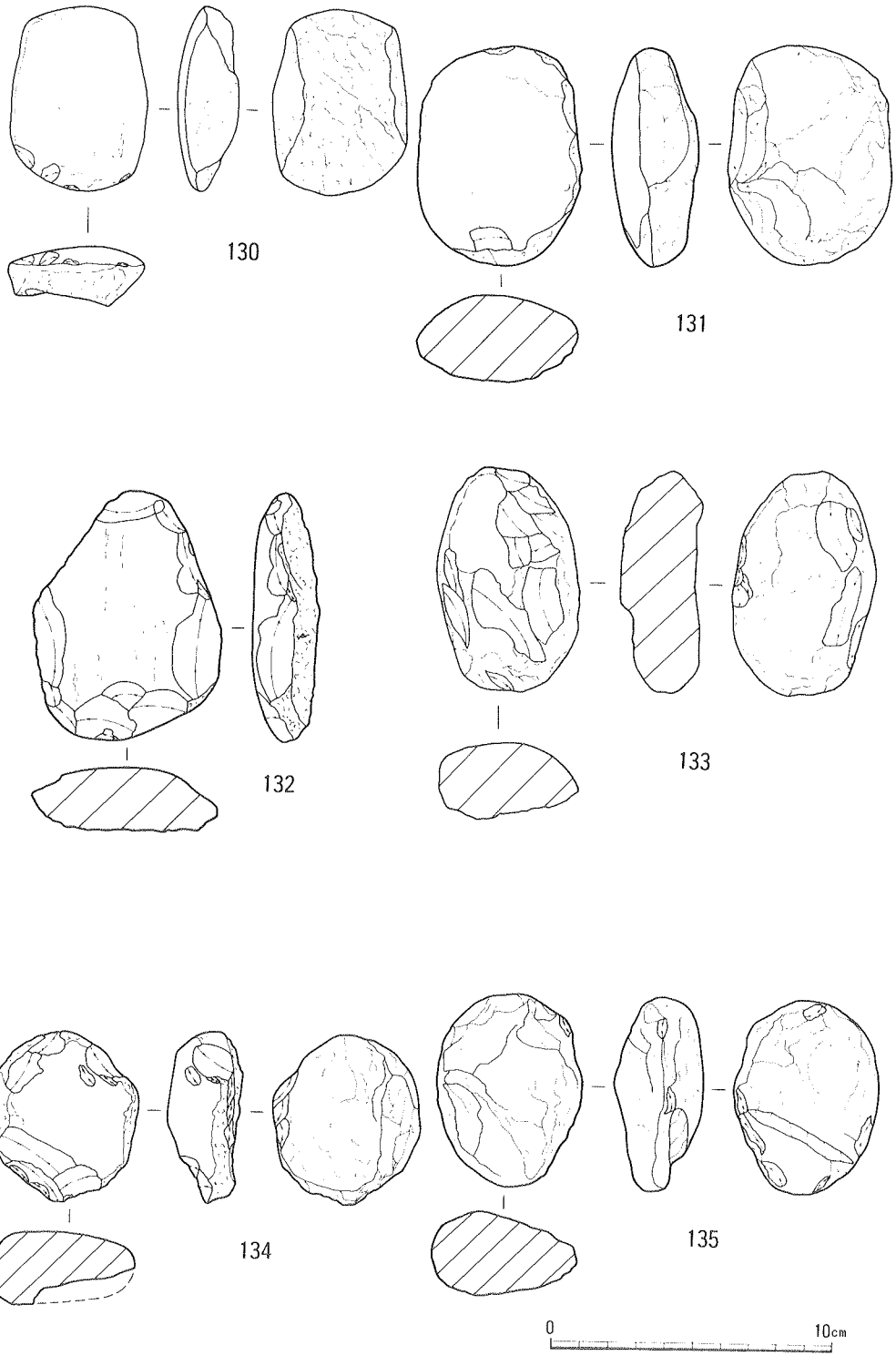
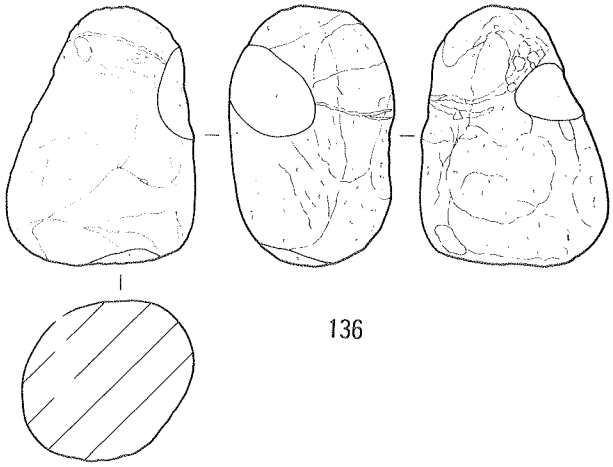
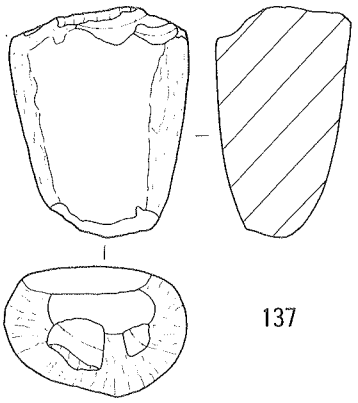


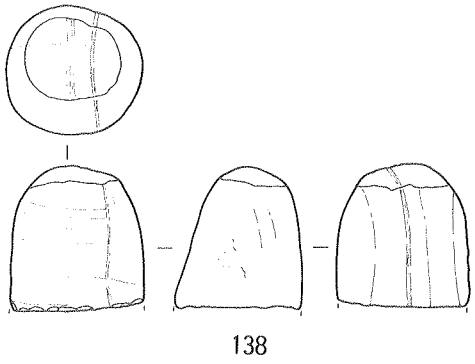
図132 敲打器(16)

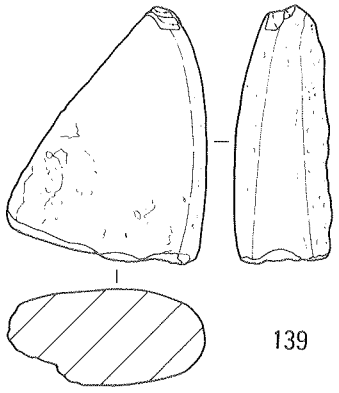
表27－17　敲打器観察一覧(17)

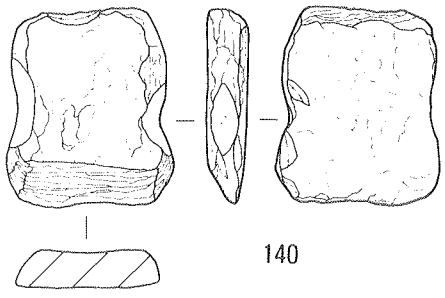
挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
133－136 151－136	22－イ 3号遺構 II		8.5 6.1 5.5 350	砂岩	C	河原礫をそのまま用いている。上端部の左右側辺にくぼみを有し、若干のノッチ状を呈する。上下端は敲打により潰れている。
133－137 151－137	21－ハ D－94 VIb		(7.6) 5.9 4.3 (251)	砂岩	C	棒状の礫を用いており、表面に磨面を有する。左右側辺及び下端部は敲打によりかなり潰れている。上半分は折損している。
133－138 151－138	21－ハ E－94 VI b		(4.8) 4.5 3.9 (130)	砂岩	C	棒状の礫を用いている。上端には敲打による潰れがみられる。下半分は折損しており、本来の長さは判然としない。
133－139 151－139	22－イ M－108 I		(8.3) (6.6) 3.1 (250)	緑色片岩	C	現状からわりと大きな河原礫を用いていることがうかがえ、表面に浅いくぼみを有する。右側辺は敲打により潰れ、表裏に磨がみられることより、すり石として兼用している。
133－140 151－140	22－イ 3号遺構 II		6.3 5.5 1.4 70	砂岩	C	板状の礫を用いている。左右側辺には敲打によるくぼみを有し、ノッチ状を呈する。上端に軽微な敲打痕がみられる。
133－141 151－141	21－ハ E－94 VIa		6.6 3.4 1.2 40	砂岩	C	薄い板状の礫を用いている。左右側辺は敲打により潰れ、若干のノッチ状を呈する。上下端に軽微な敲打痕がみられる。











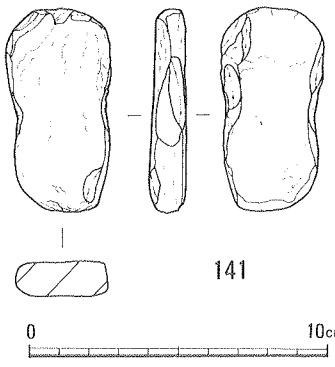


図133 敲打器(17)

表27－18　敲打器観察一覧(18)

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	分類	観察事項
134－142 152－142	21－ハ F－94 Ⅱ	(5.3) (8.7) (3.4) (200)	片状砂岩	C	現状からすると大型の河原礫を用いていたことがうかがえる。下端部に敲打による潰れがみられる。表面に磨面を有し、すり石として兼用としている。
134－143 152－143	22－イ P－106 Ⅰ	(6.0) (4.5) 4.5 (170)	砂岩	C	わりと大きな河原礫を用いていたことがうかがえる。右側辺に若干の敲打痕がみられる。破損後も使用されており、稜線部がかなり潰れている。
134－144 152－144	22－イ 2号遺構 Ⅰ	(6.2) (5.0) 4.7 (165)	砂岩	C	ほぼ円形の礫を用いていたことがうかがえる。右側辺に敲打による潰れがみられる。表裏に磨面を有し、すり石として兼用されている。
134－145 152－145	21－ハ B－94 Ⅲ	(6.8) (5.1) 7.0 (285)	砂岩	C	比較的大きな河原礫を用いていたことがうかがえる。右側辺に微弱なくぼみを有する。破損後も使用されており、上下端とも敲打により潰れている。
134－146 152－146	不明	(8.4) (6.4) (3.4) (185)	砂岩	C	わりと大型の河原礫を用いていたことがうかがえる。表面に浅いくぼみを有する。破損後も使用されており、右側辺及び上下端に敲打痕がみられる。
134－147 152－147	21－ハ D－94 Ⅷb	6.7 5.6 3.5 172	砂岩	C	河原礫の破片を用いている。表面にわりと浅いくぼみを有する。左右側辺は敲打により潰れ、若干のノッチ状を呈する。

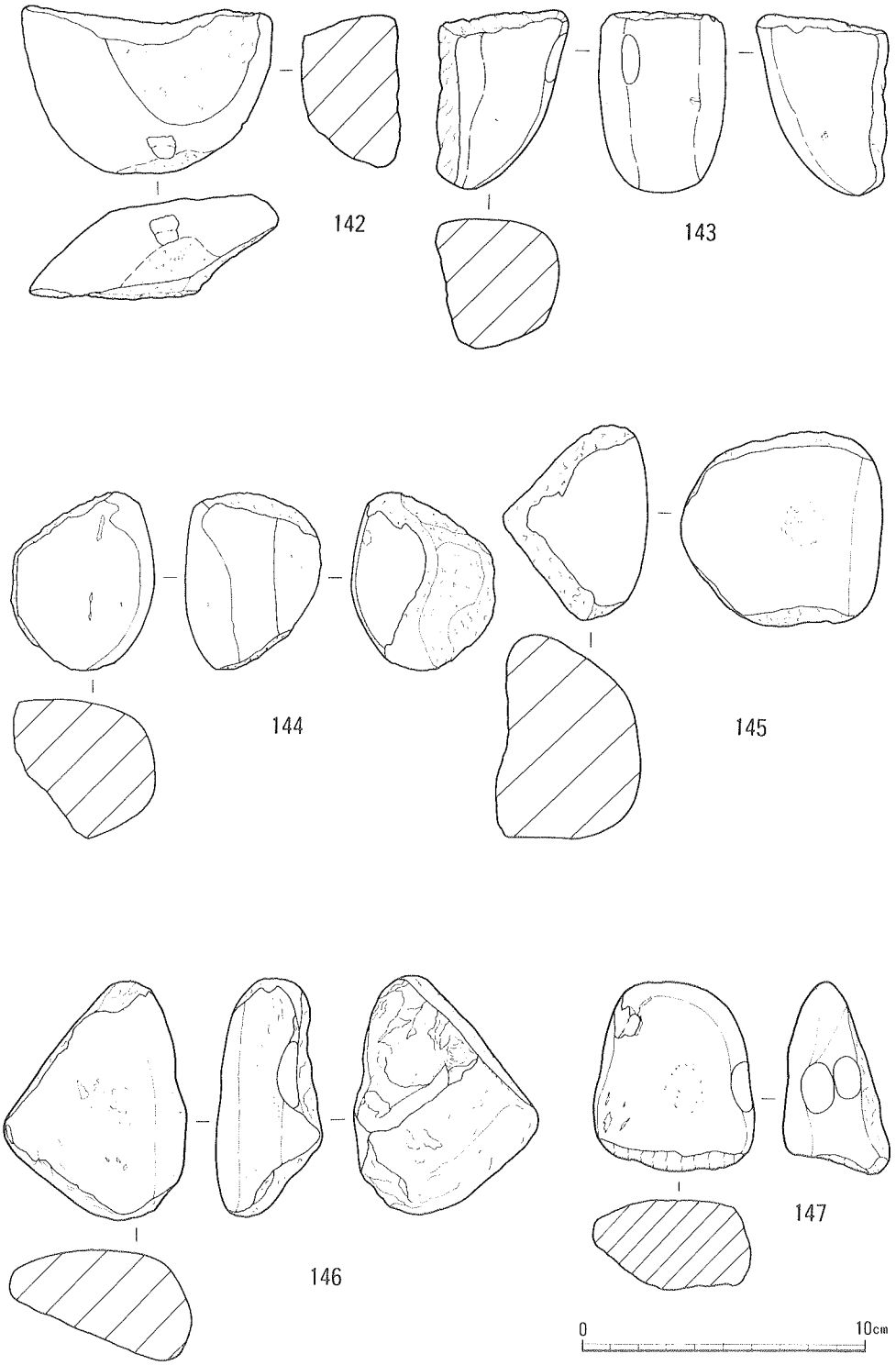


図134　敲打器(18)

5．すり石

出土量は10点と少なく、石器全体の６％を占めるにすぎない。完形で残っているものもほとんどない。形態的にもバラツキがみられ、あえて分類は行なわなかった。各標品については下記の観察一覧に示したとおりである。

表28　すり石観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量 長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	観察事項
135－148 153－148	21－ハ A－95 Ⅵb	14.0 9.6 4.7 940	砂岩	楕円形の河原礫を用いている。表面の半分程に磨面を有する他は風化により剥落している。下端に若干の敲打痕がみられる。
135－149 153－149	22－ロ け－107 Ⅵ	(15.0) 7.7 2.8 (400)	玢岩	わりと扁平な礫を用いている。表裏及び左右側辺に磨面を有し上下端とも敲打により潰れ、下端は大きく剥離している。
135－150 153－150	22－ロ き－110 Ⅳ	15.8 8.5 6.0 1120	砂岩	楕円形の河原礫を用いている。表裏に磨面を有し、上下端と右側辺に若干の敲打痕がみられる。
135－151 153－151	22－イ Ⅰ	14.0 6.9 (3.3) (460)	砂岩	楕円形の河原礫を用いている。右側辺に敲打痕がみられ、表裏面とも大きく剥離しているが、残りの部分に磨面を有する。
136－152 154－152	21－ハ E－95 Ⅵb	6.7 7.5 4.4 265	石英斑岩	わりと小型の河原礫を用いている。左側辺と下端に平坦になるほどの磨面を有し、裏面にも磨り痕がみられる。
136－153 154－153	21－ハ E－94 Ⅵb	(8.2) (6.7) (3.1) (200)	砂岩	大型の河原礫を用いているが、強い衝撃により破損しており、本来の形状は判然としない。表面に磨り痕がみられる。
136－154 154－154	22－ロ 1号遺構	(14.5) (8.9) (3.0) (487)	砂岩	比較的大型の河原礫を用いているが、強い衝撃により縦に半裁している。表面に磨り痕がみられる。
136－155 154－155	22－ロ 4号遺構 Ⅴ	(10.5) (6.8) (4.1) (360)	砂岩	大型の河原礫を用いているが、強い衝撃により破損している。その後も周縁部をフルに活用しており、敲打による潰れが著しい。表面に磨り痕がみられる。
136－156 154－156	21－ハ E－95 Ⅵa	(7.3) (4.7) (2.8) (120)	砂岩	小型の河原礫を用いているが、縦に半裁している。表裏に磨面を有し、右側辺に若干の敲打痕がみられる。
136－157 154－157	21－ハ E－93 Ⅶ	(6.9) (4.9) (1.8) (90)	砂岩	わりと小型の河原礫を用いているが、強い衝撃により破損している。その後も使用されており、周縁部は敲打による潰れが著しい。表面に磨り痕がみられる。

※（　）内の数値は現存部の最大値を示す。

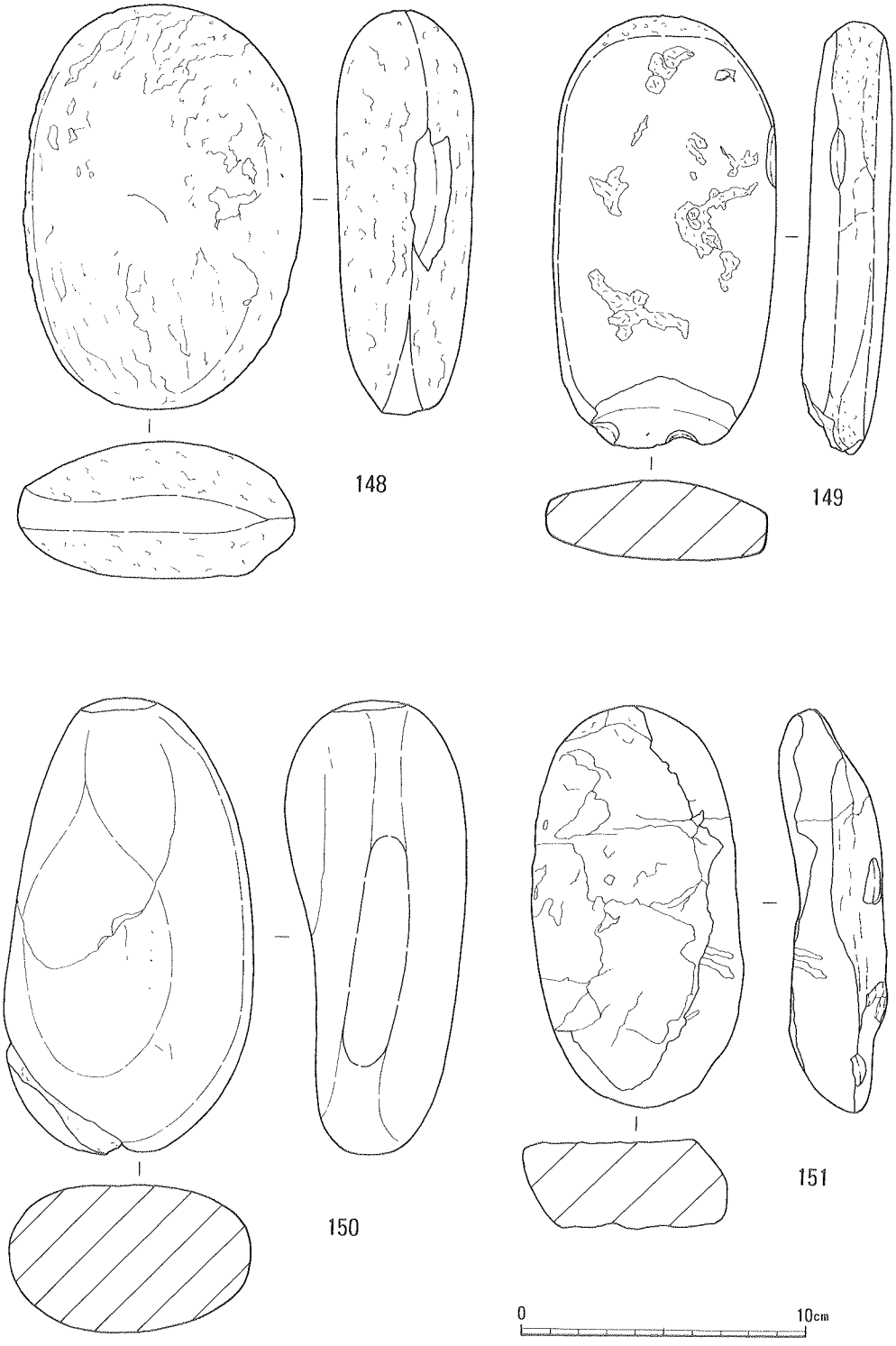


図135 すり石(1)

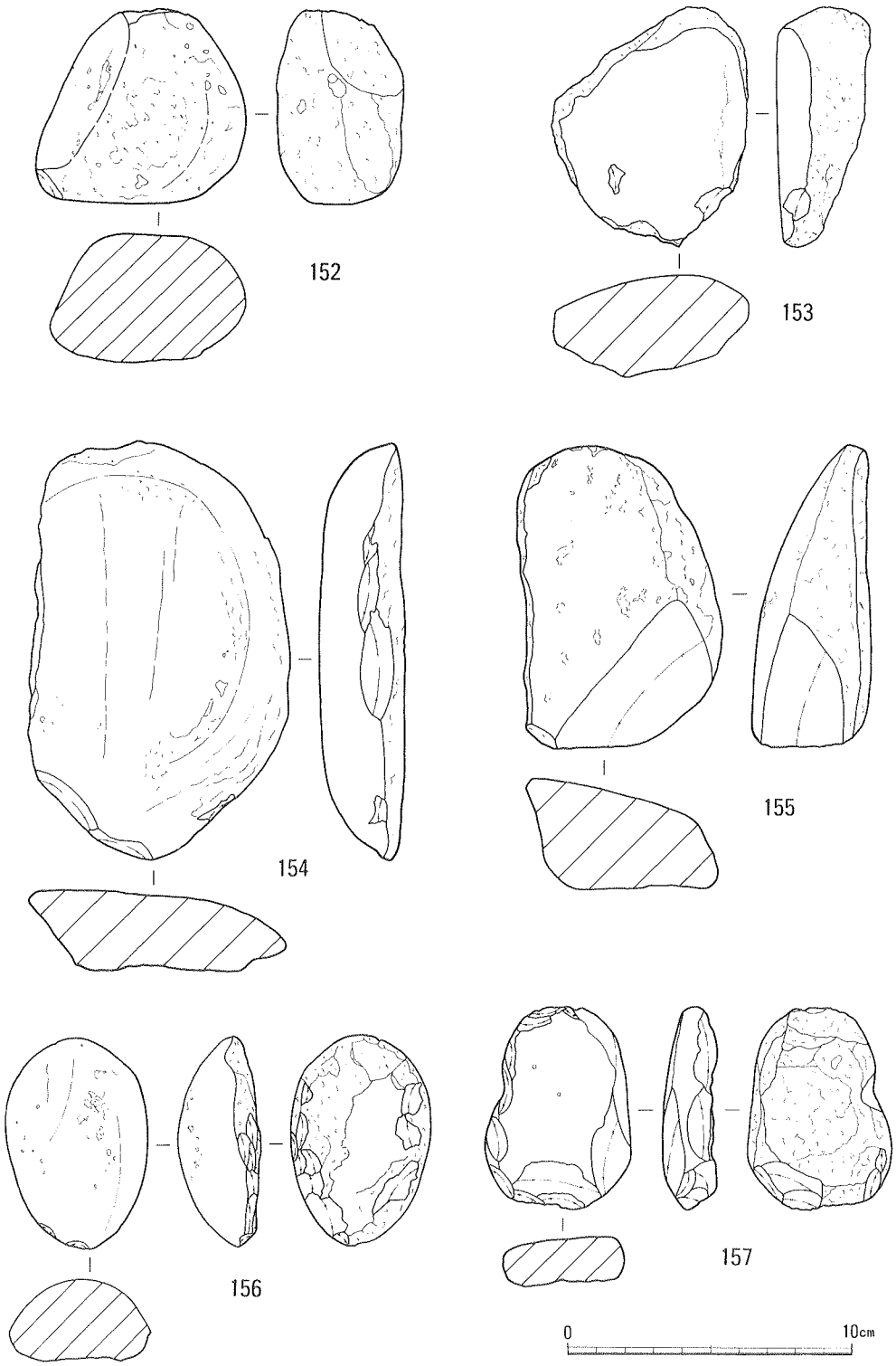


図136　すり石(2)

6．石　皿

図137の158～161に示した4点のみ得られた。いずれも破損品で、全形のうかがえる資料はない。

158は細粒砂岩（ニービ）製で、板状の礫を用いている。表面にわりと広い範囲で凹面を有し、右側辺がわで最も深く、そこで擦り切れたように破損している。裏面は使用されてない。21地区ハのF－93グリッド、第Ⅶ層の出土である。

159も細粒砂岩製で、扁平な礫を用いている。表面に広い範囲で凹面を有し、上端右側で最も深くなり、そこで破損している。形状より158と同一個体である公算が大きい。21地区ハのE－94グリッド、第Ⅶ層の出土である。

160は玢岩製で、かなり大型の礫を用いている。表裏面とも使用されており、表面は挟く、裏面は広めの凹面を有する。縦方向に半裁しており、表面は破損した後に使われたとみえ、ほぼ中央部にくぼみがみられる。21地区ハのあ－94グリッド、第Ⅵ層の出土である。

161も玢岩製で、比較的大型の礫を用いている。表面の右側辺がわにわりと深い凹面を有する。本来はもっと大きめの石皿であったことがうかがえ、右側辺と下端部は破損しており、凹面は3分の1程度しか残ってない。22地区ロ、4号遺構内の出土で、一部に火熱を受けた痕跡がある。

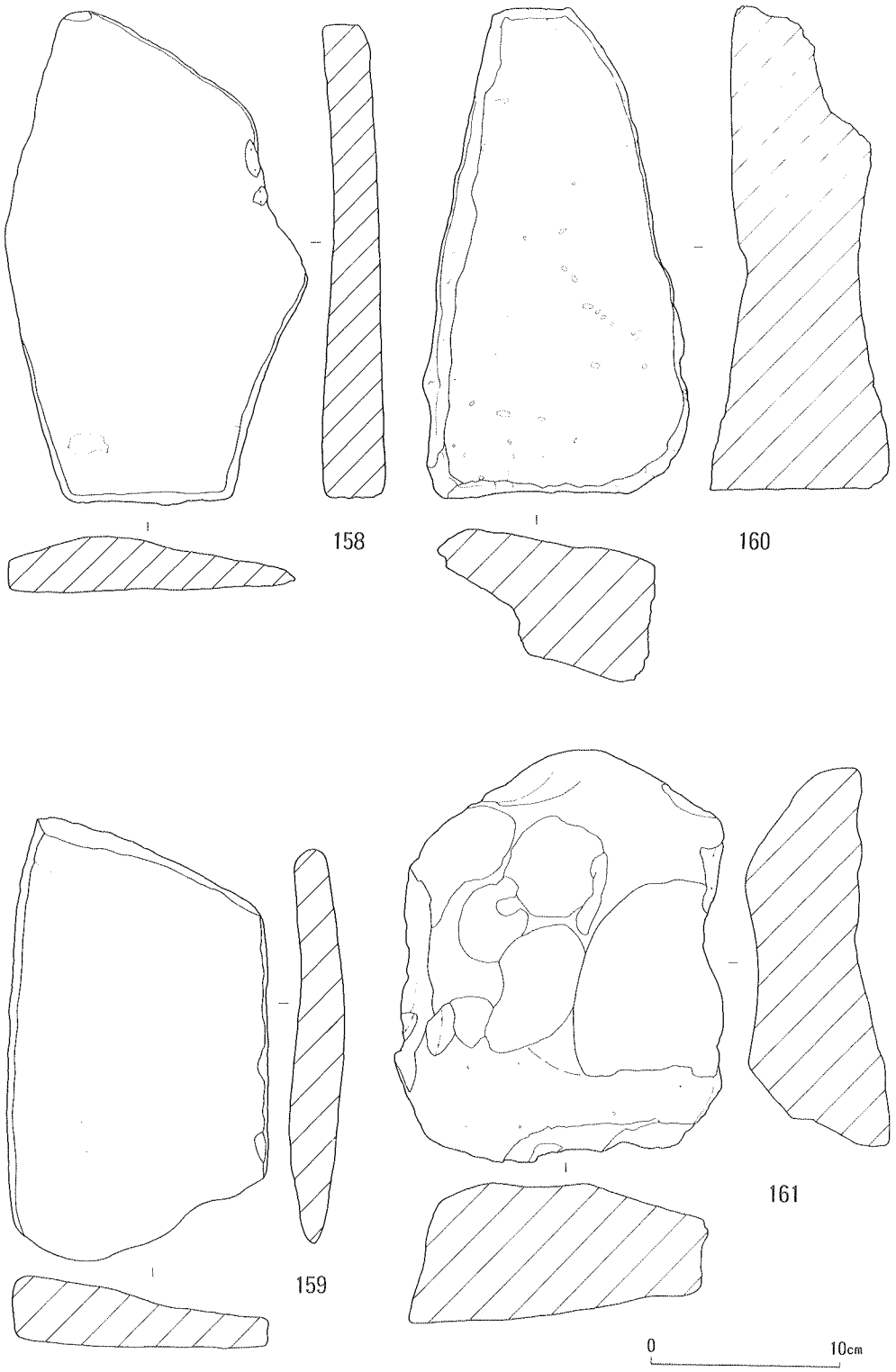


図137　石皿

7．砥　石

9点得られたが、うち1点（図138の162）は表採資料であり、形態等から本遺跡の主体時期に含められるものとは考えられず、中・近世の遺跡においてよく見受けられる手持ち砥石に類似していることより、この時期の産物であることがうかがえる。他の標品は完全な形を留めているものはほとんどない。石器個々については観察一覧に示したとおりである。

表29　砥石観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法量	長さ（cm） 幅（cm） 厚さ（cm） 重さ（g）	石質	観察事項
138－162 156－162	21－イ 表　採		9.6 4.0 1.7 115	頁　岩	短冊形を呈し、表裏面及び右側辺、上端にそれぞれ砥磨面を有する。上端付近に斜めの孔が1個穿たれている。表採であり、形態等から中・近世の手持ち砥石と考えられる。
138－163 156－163	22－イ U－117 I		(7.1) (3.1) (2.7) (92)	砂　岩	表面と右側辺に砥磨面を有する。上下端及び左側辺は大きく欠失しており、本来の形状は判然としない。
138－164 156－164	22－イ 3号遺構 II		(15.6) (9.0) 3.4 (722)	細粒砂岩	扁平な礫を用いている。表面に砥磨面を有し、裏面は自然面のままである。右側辺と下端部は欠失している。
138－165 156－165	22－ロ 4号遺構 焼　土		(12.8) 12.0 9.6 (2200)	砂　岩	柱状のわりと大型な礫を用いている。表裏面と右側辺に砥磨面を有する。下端部は折損している。
138－166 156－166	21－ハ B－44 VII		(17.5) 13.1 5.8 (1400)	砂　岩	大型の河原礫を用いている。表面に2カ所の砥磨面を有し、右側辺に幅4.6cmの磨面がみられる。下端部は欠失している。
138－167 156－167	22－ロ 6号遺構		21.5 12.4 2.8 1065	砂　岩	わりと扁平な礫を用いている。表面に砥磨面を有する他は自然面のままである。
139－168 157－168	22－ロ 4号遺構		24.7 (7.0) 10.0 (2000)	砂　岩	比較的大型の礫を用いている。表面に砥磨面を有し、裏面は自然面である。左右側辺は大きく欠失している。
139－169 157－169	21－ハ F－94 VIb		(21.9) 6.8 6.3 (1500)	砂　岩	柱状の礫を用いている。表面に2カ所の砥磨面を有する他は自然面のままである。下端部は折損している。
139－170 157－170	21－ハ A－95 VIb		(18.4) 19.5 3.3 (2300)	砂　岩	わりと扁平な礫を用いている。表面に数カ所の砥磨面を有する他は自然面のままである。上端部は欠失している。

※（　）内の数値は現存部の最大値を示す。

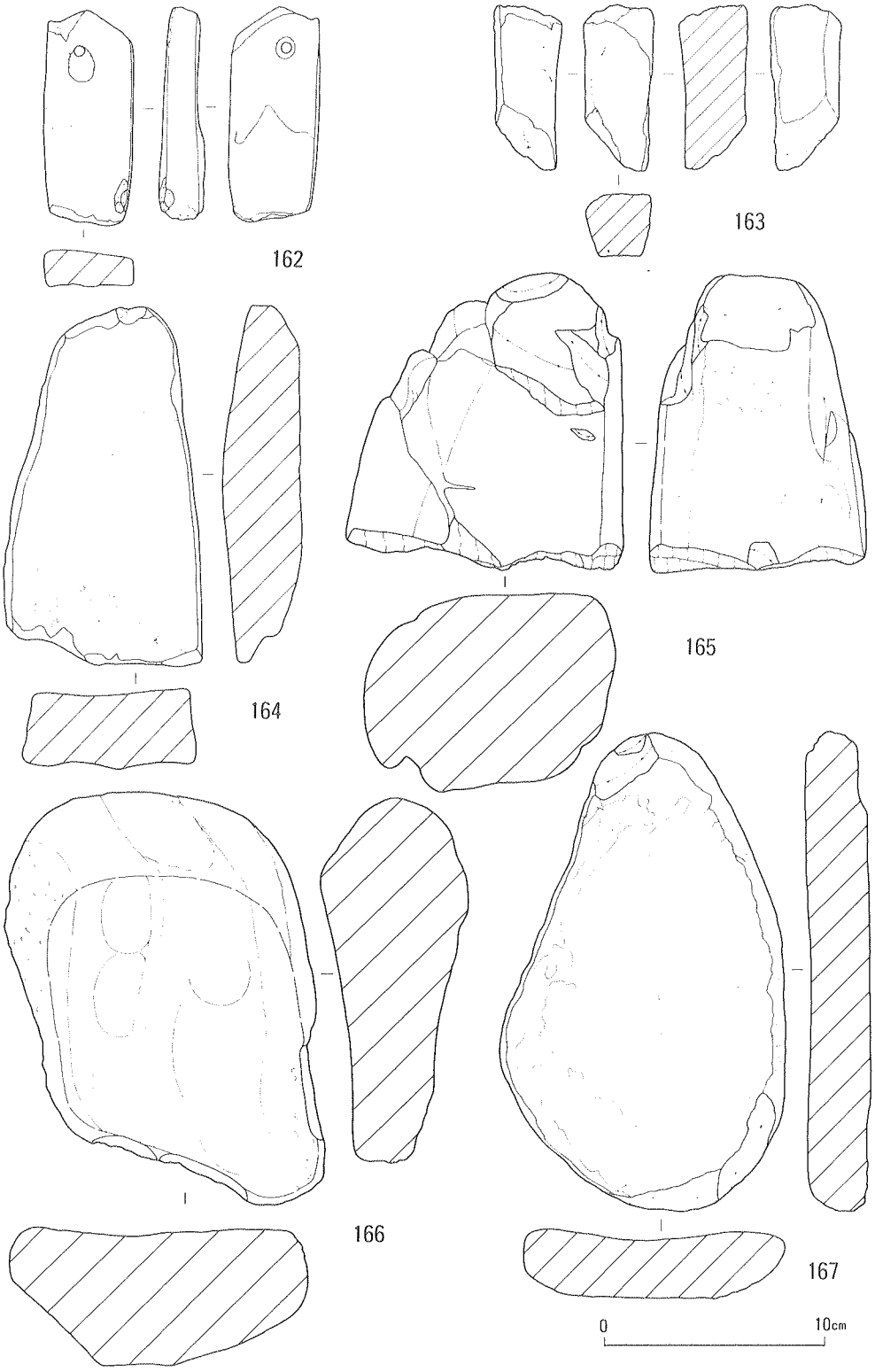


図138　砥石(1)

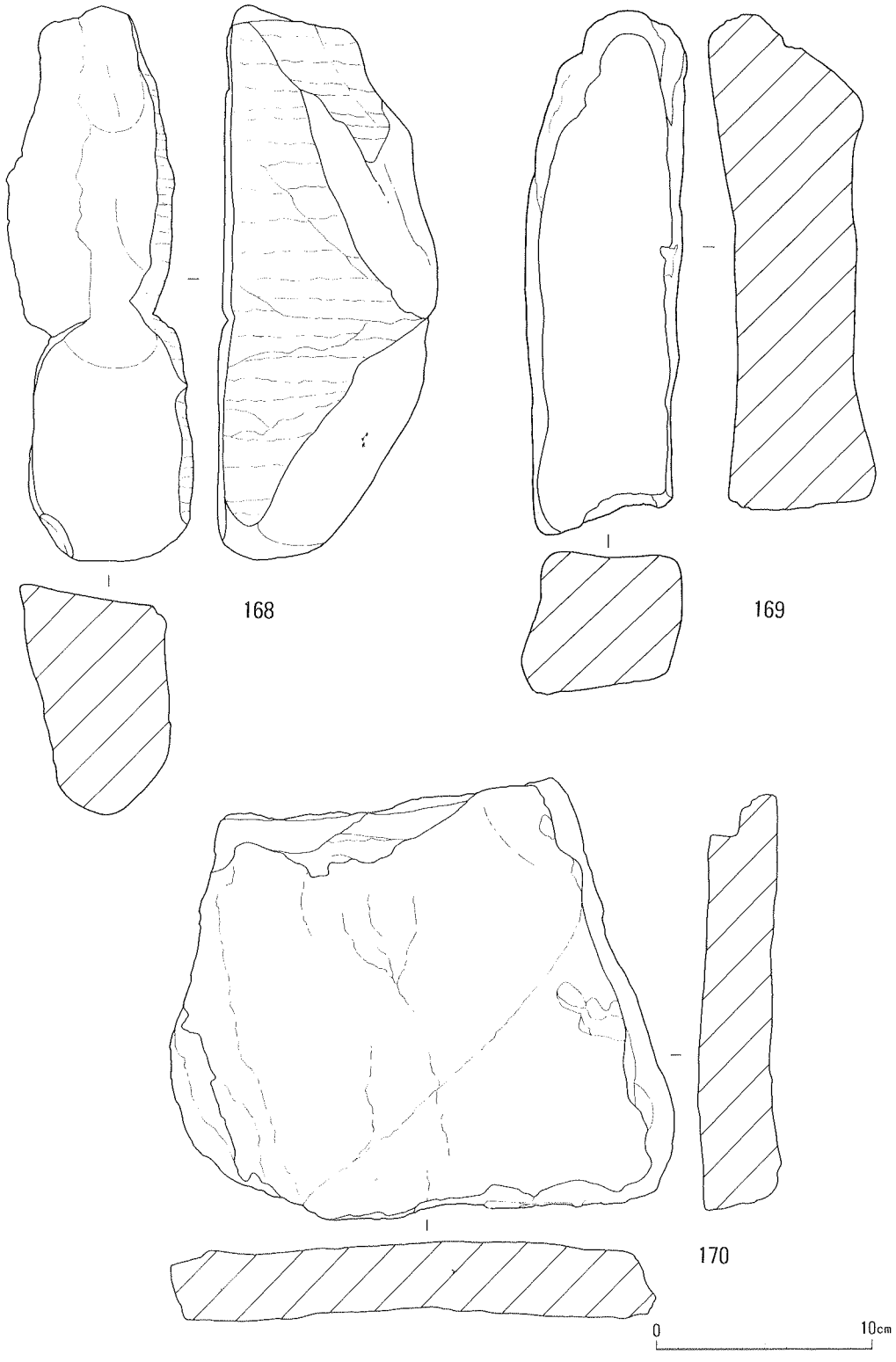


図139　砥石(2)

8．器台状石器

171に示したもので、全体の3分の1程度の破片であるが、現状からすると輪状をなす器台のようなものであることがうかがえる。琉球石灰岩製で、器内外面とも丁寧な研磨を施している。底面に2個の脚を有するが、本来は4個であったことが考えられる。底外径12.5cm、内径7.6cm、上端外径8cm、内径5cm、高さは4cmを測る。僅か1点のみの出土であることや、他に類例品がないことより用途に関して今ひとつ判然としないが、土器などを置く器台と考えられる。21地区ハのE－93グリッド、第Ⅷb層の出土である。

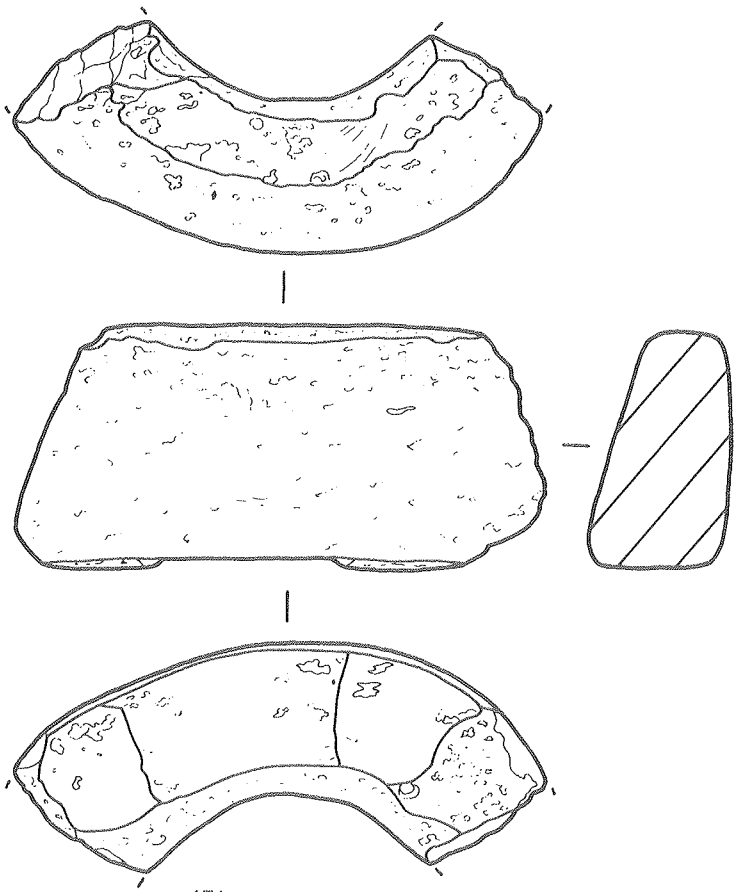


図140　器台状石器

9．チャート制石器

こまかいチップも含めるとおびただしい量のチャートが得られているが、あきらかに加工を施しているものは僅か２例しか確認できなかった。かなり大型の石核や剥片がみられ、意図的に遺跡に持ち込まれたわりには製品が少なすぎる嫌いがある。ちなみにチャートは遺跡地周辺で得られる石材ではなく、産地はより近い場所でも本部半島あたりである。にもかかわらず多量のチャートが得られているということは、単に石器の素材としてのみ持ち込まれたのではなく、他の用途も考えられる。例えば土器製作の際の混和材として用いられていることなどである。地区別の出土状況を表30に示したが、こまかいチップは含めてない。

表30　チャートの地区別出土状況

種別／出土地	製品	石核	剥片	計
22地区	1	27	11	39
21地区	1	18	25	44
計	2	45	36	83

製品として扱ったものは図141の172・173に示した標品で、前者は台形を呈し、下端に細かいチッピングを施して刃部をつくりだしている。後者も前者ほどではないが、下端に若干のチッピングを施して刃部をつくりだしている。いずれも幅1.5㎝程度の小型で、用途に関しては判然としないが、形態的な特徴からナイフもしくはスクレイパーとして使用されたものと思われる。172は22地区ロのく－109グリッド、第Ⅳ層の出土である。173は21地区ハの崩土中から得られたもので、層位は不明。

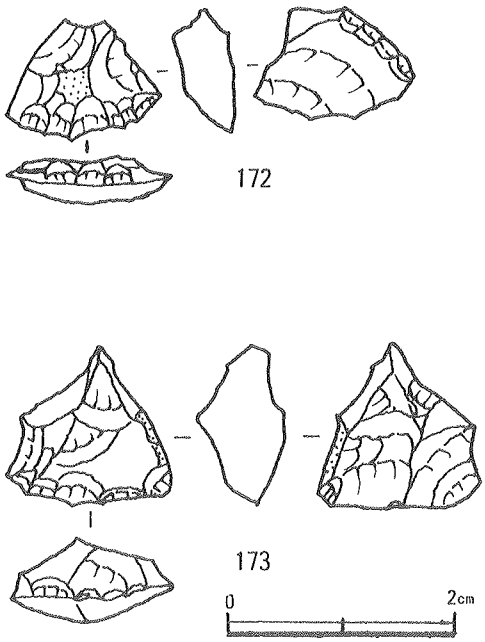


図141　チャート製石器

第3節　貝製品

本貝塚出土の貝製品は実用品と考えられるもの29点、装飾品と考えられるもの133点の計161点が得られた。表31に地区別、製品別の出土状況を示した。地区別の出土状況についてみると、崖上地区では20点（12.4%）の出土でそのほどんどが22地区イの第3号遺構からの出土で、22地区ロからはまったく出土していない。崖下地区では21地区イ－9点（5%）、ロ－1点（0.6%）と少なく、また、両区とも遺物の包含量も少ないことからそれに比例したものであろう。21地区ハ－130点（81.9%）出土したが、この地区の場合、E－94グリッドのⅥ・Ⅶ層の土を3㎜、1㎜のメッシュにかけ、水洗い選別を行なった結果も関係していると思われる。また、製品のほとんどが東区からの出土で西区からは出土していない。以下、各製品について記述する。

表31　貝製品出土状況

出土地＼製品名			実用品							装飾品														合計
			利器			容器			小計	貝輪	ビード	巻貝装飾品					札状		二枚目（研磨）	スイジガイ	その他	化石ツノガイ	小計	
			スイジガイ	螺蓋製貝斧	貝刃	貝匙	ホラガイ	二枚貝有孔				イモガイ	マクラガイ	タマガイ	ノシガイ	タカラガイ	タカラガイ	イモガイ						
22地区（崖上）	イ	Ⅰ																						
		1号																						
		2号									1				1								2	2
		3号		13			2	1	16												2		2	18
		小計		13			2	1	16		1				1						2		4	20
21地区（崖下）	イ	Ⅰ																						
		Ⅱ上	1						1	1	2							1	2				6	7
		Ⅱ下									1				1								2	2
		小計	1						1	1	3				1			1	2				8	9
	ロ	Ⅰ																						
		Ⅱ																						
		Ⅲ																						
		Ⅳ									1												1	1
		小計									1												1	1
	ハ	Ⅰ																						
		Ⅱ																						
		Ⅲ																						
		Ⅳ																						
		Ⅴ																						
		Ⅵ									1												1	1
		Ⅶ		1	2	1	1	7	12	7	73	4	2	9		9	6	4	1	2			117	129
		小計		1	2	1	1	7	12	7	74	4	2	9		9	6	4	1	2			118	130
不明													1									1	2	2
合計			1	14	2	1	3	8	29	8	79	4	3	9	2	9	6	5	3	2	2	1	133	162

1．実用品

実用品と考えられるものは利器－15点、容器－４点、その他－８点の計31点で全体19.3％の出土である。以下、各製品について記述する。

ａ．利器

①．**スイジガイ製利器**（図145、図版163）

図145－13に示した１点のみで若干、風化している。破損品で突起№１（上原 1981に準ずる。）を表面は三方から研磨し、平面形はわずかに丸味を帯びる。裏面は側面から研磨を施す。研磨痕は表面で斜位に認められ、突起の長さは上原氏の計測法に準ずると38.3㎜を計る。21地区イ、Ｏ－96グリッドⅡ層上部の出土である。類例品は、[註1]キガ浜貝塚、[註2]地荒原貝塚等にみられる。

②．**螺蓋製貝斧**（図143、図版161）

本品は貝斧、貝刀、螺蓋製貝斧の名称で、機能とは別に呼ばれ、これまで報告されてきたものである。また、最近では「[註3]螺蓋製敲打器」という名称を与え、敲打器としての意味をもたした名称が使用されている。これは基本的に製品としての概念に相違があり、前者のグループは「蓋の薄い部分を打割して……」に対し、後者の場合は従来、製品として扱わなかった「左縁、右縁のみ」という単発的剝離のものも「製品」とし扱い分類している。しかし、製品の概念及び分類・用途について論ずるのは本項の目的ではないので別の機会にゆずり、ここでは、[註4]面縄第１貝塚に準じ[註5]三島格氏の「螺蓋製貝斧」を使用する。用途について論ずるために実測図の統一（最も厚い部分を上に置く）を提起したい。

本貝塚から出土した製品は表32に観察し、附刃の範囲については図142に示したような方法で表示した。今回、前述した敲打器との関係もあるので剝離のあるものもすべて扱った。地区別の出土状況をみると22地区イの第３号遺構－13点、21地区ハ－１点の計14点で、そのほとんどが22地区イ第３号遺構に集中する。自然貝の出土状況をみると表82によると22地区イ第３号遺構Ⅱ層（殻－20個　蓋－２個）、Ⅲ層（殻－７個）、21地区ハ第Ⅶ層（貝殻－16個、蓋－４個）、21地区イ、ロはそれぞれ殻が１個ずつ得られた。以上のような状況からしても、22地区イ第３号遺構に多くみられる。

図142によると附刃の位置についてみてみると、⑥～⑫の間が70％以上の附刃率を示し、とくに⑦、⑧が80～90％と高い。また、附刃の範囲についてみると２～４段階のものがそれぞれ１個、７～15段階のものが７個あり、附刃の範囲に幅のあることを示す。以上のことから、[註6]国分氏の定義した「薄い部分を打割して……」が製品の可能性が高いことがうかがえる。以下、表32に詳細については観察した。

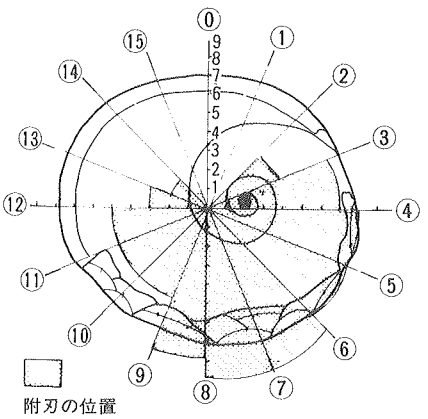


図142　附刃範囲の模式

表32　螺蓋製貝斧出土一覧

単位：mm、g　－：計測不可　○：加工有り

図番号	出土地			法量			附刃の範囲	加工状況
	地区	グリッド	層	縦	横	重量		
3	21－ハ	E－94	Ⅶ	68.4	72.5	120.0	3／8,11／12	蓋自体風化
4	22－イ	3号、	Ⅱ	74.1	81.6	150.5	5／8	附刃の範囲は小さい
5	〃	〃	Ⅱ	61.5	71.9	121.0	4／14	蓋自体風化、附刃は丁寧である
6	〃	〃	Ⅱ	74.3	72.3	165.0	2／15	若干風化、自然？
7	〃	〃	Ⅱ	68.7	77.6	145.0	4／11	風化
8	〃	〃	Ⅱ	68.6	75.5	135.0	3／13	風化、剝離はこまかい
9	〃	〃	Ⅱ	77.7	80.2	190.0	3／5,6／13	剝離の範囲はこまかい、頭部に打痕
10	〃	〃	Ⅱ	70.8	80.2	145.0	5／7	製品としがたい
11	〃	〃	Ⅱ	71.5	81.2	180.0	6／7	自然？
12	〃	〃	Ⅲ	－	－	120.0	10／12	自然？
図なし	〃	〃	Ⅲ	－	－	75.0	○	風化
〃	〃	〃	Ⅱ	－	－	50.0	○	
〃	〃	〃	Ⅱ	－	－	65.0	○	風化
〃	〃	〃	Ⅱ	－	－	15.0	○	

③．貝刃（図143、図版161）

二枚貝の腹縁に押圧剝離によって刃をつけたもので、本貝塚ではシレナシジミとチョウセンハマグリがそれぞれ１点ずつ出土した。詳細について表33に観察した。シレナシジミは本貝塚で多量出土（4376個）しているが、製品が１点というのは少ない。

表33　貝刃出土一覧

単位：mm、g

図番号	出土地			貝種	P／L	残存	法量			加工状況
	地区	グリッド	層				殻長	殻高	重量	
1	21－ハ	E－94	Ⅶ	シレナシジミ	右	破損	35.0	27.0	9.0	細かい剝離を腹縁に施す。
2	21－ハ	E－94	Ⅶ	チョウセンハマグリ	右	完形	43.3	40.6	6.0	ほぼ全腹縁に剝離有。

b．容　器

①．ホラガイ有孔製品（図144、図版162）

ホラガイの内唇近くに１～２個の粗孔を施すものである。本貝塚では３点得られた。本品１孔のタイプと２孔のタイプがあるが、今回出土したものはすべて１孔の穿孔のみである。この穿孔の数について機能的なちがいがあるかは不明である。用途については、民具事例の「ブラヤックゥン」「ブラヤックン」に類すると考えられている。最近の報告例が増え、①殻頂を除去し、丸味をもたしたもの、②外唇部を調整し水平にしたもの、③穿孔は殻頂と殻軸を結ぶ殻口面に施こす、④殻口面の反対側の体層面が火を受けたためもろくなっていることの４つの共通性が認められ、製品の概念及び用途を考える上でより具体性がでてきた。時間的にも貝塚時代、前・中期の遺跡に一般化しつつある。

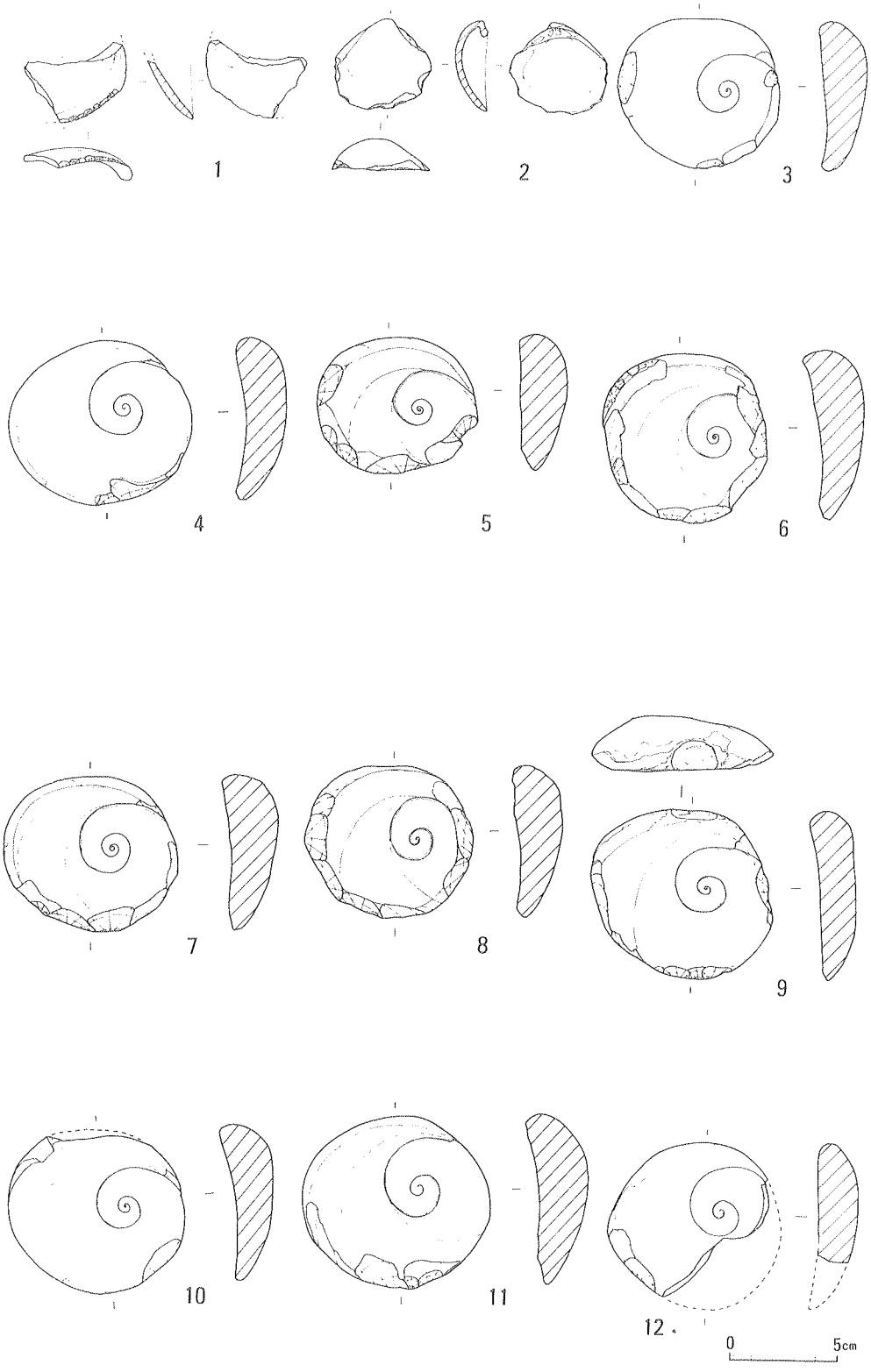


図 143　貝刃、螺蓋製貝斧

表34　ホラガイ有孔製品出土一覧

単位：cm、g

図番号	出土地			法量			孔径		加工状況
	地区	グリッド	層	殻長	殻径	重さ	たて	よこ	
26	21－ハ	C－93	Ⅶ	31,6	16,7	880	26,3	32,3	ほぼ完形、外唇をほぼ水平に調整内唇付近は貝食い虫による風化がみられる。
27	22－イ	3号	Ⅱ	35,2	15,5	770	28,0	34,0	火を受けたためか裏面は破損する。殻頂は丸味をおびる、風化する。
28	22－イ	3号	Ⅲ	29,9	14,7	505	33,0	32,7	破損する、貝殻自体も風化する。

②．夜光貝製匙（図145、図版163）

図145－14の1点のみである。匙の柄の部分と推測される。夜光貝の螺肋を削り、研磨調整を施したものである。ほぼ中央2カ所に小孔の跡が認められる。残存部の最大長59.6㎜、幅30.0㎜、重さ12gを計る。21地区ハE－94第Ⅶ層50～60cmの出土である。同時期の遺跡としては嘉手納貝塚[注7]、キガ浜貝塚[注1]等にみられるが、出土量は各遺跡とも少ない。

c．その他

①．二枚貝有孔製品（貝錘）（図145、図版163）

シレナシジミ－4点、リュウキュウサルボウ－2点、カワラガイ－2点、シャコガイ－1点の計9点が得られた。本品は拝山遺跡でふれたように偶発的に穿孔される場合も考えられるので、次の事項のどれかを満たすものを製品として扱った。1．孔に数回の打割調整を有すること、　2．孔が複孔であること、3．腹縁に調整痕（あるいは使用痕）があること。

重量別には、10～40gに分布するが、量的に少なく傾向はつかめない。また、孔の位置についてみるとほとんどの場合、殻頂近くに穿孔されるが、シレナシジミは表35でも「中、中」に位置し、用途についてリュウキュウサルボウやシャコガイと同様なものか検討が必要である。同様な例は百名第二貝塚[注8]にもみられる。

表35　二枚貝有孔製品（貝錘）

単位：㎜、g

図番号	出土地			貝種	残存	R/L	法量			孔					加工状況
	地区	グリッド	層				殻高	殻長	重量	径	形状	位置	穿孔	腹縁	
18	21－ハ	E－94	Ⅶ	カワラガイ	完形	L	47,7	52,5	13,2	7.8×7,7	円	中中	内	×	
19	〃	〃	〃	シレナシジミ	破損	L	33,3	49,5	6,2	13,0×12,0	〃	上中	〃	不	孔はていねいに調整
20	〃	〃	〃	〃	〃	R	37,6	49,2	7,7	10,4×11,5	複孔	中中	〃	破損	
21	〃	〃	〃	〃	〃	L	38,8	48,0	8,5	12,0×10,5	不定形	中後	〃	〃	
22	〃	〃	〃	カワラガイ	完形	L	44,5	41,4	10,0	16,9×10,4	〃	上後	〃	×	孔は自然的
23	〃	〃	〃	リュウキュウサルボウ	〃	R	44,0	60,3	19,9	16,5×19,7	複孔	上・中	〃	×	
24	22－イ	3号	Ⅱ	〃	〃	R	48,0	70,6	37,4	13,6×24,0	楕円	上中	〃	破損	
25	21－ハ	E－94	Ⅶ	ヒメジャコ	〃	L	60,0	88,7	40,2	8,3× 9,9	不定形	上中	〃	×	孔は風化による？

※　観察事項は「カンドウ原遺跡」（1983）に準じる。

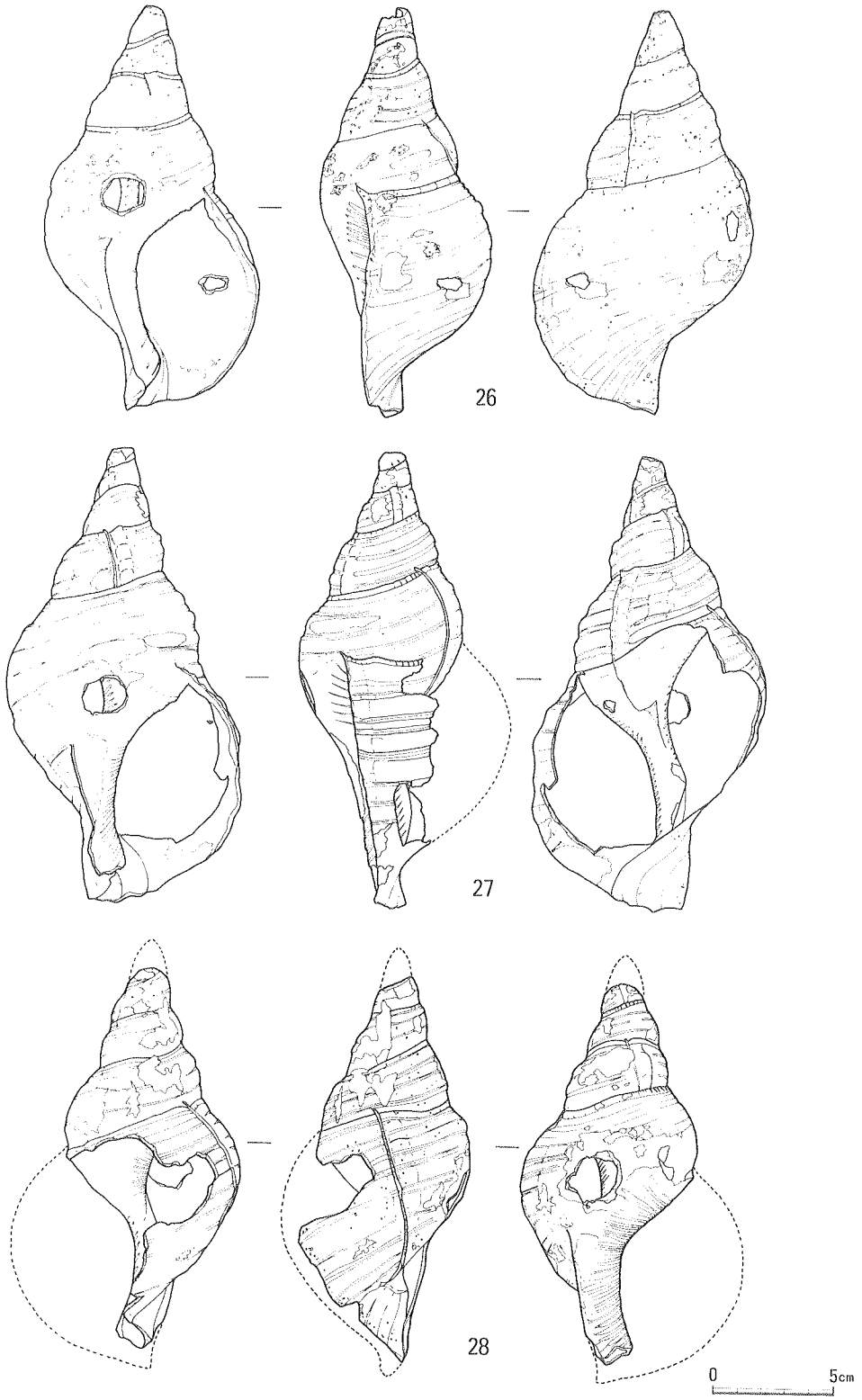


図 144　ホラガイ有孔製品

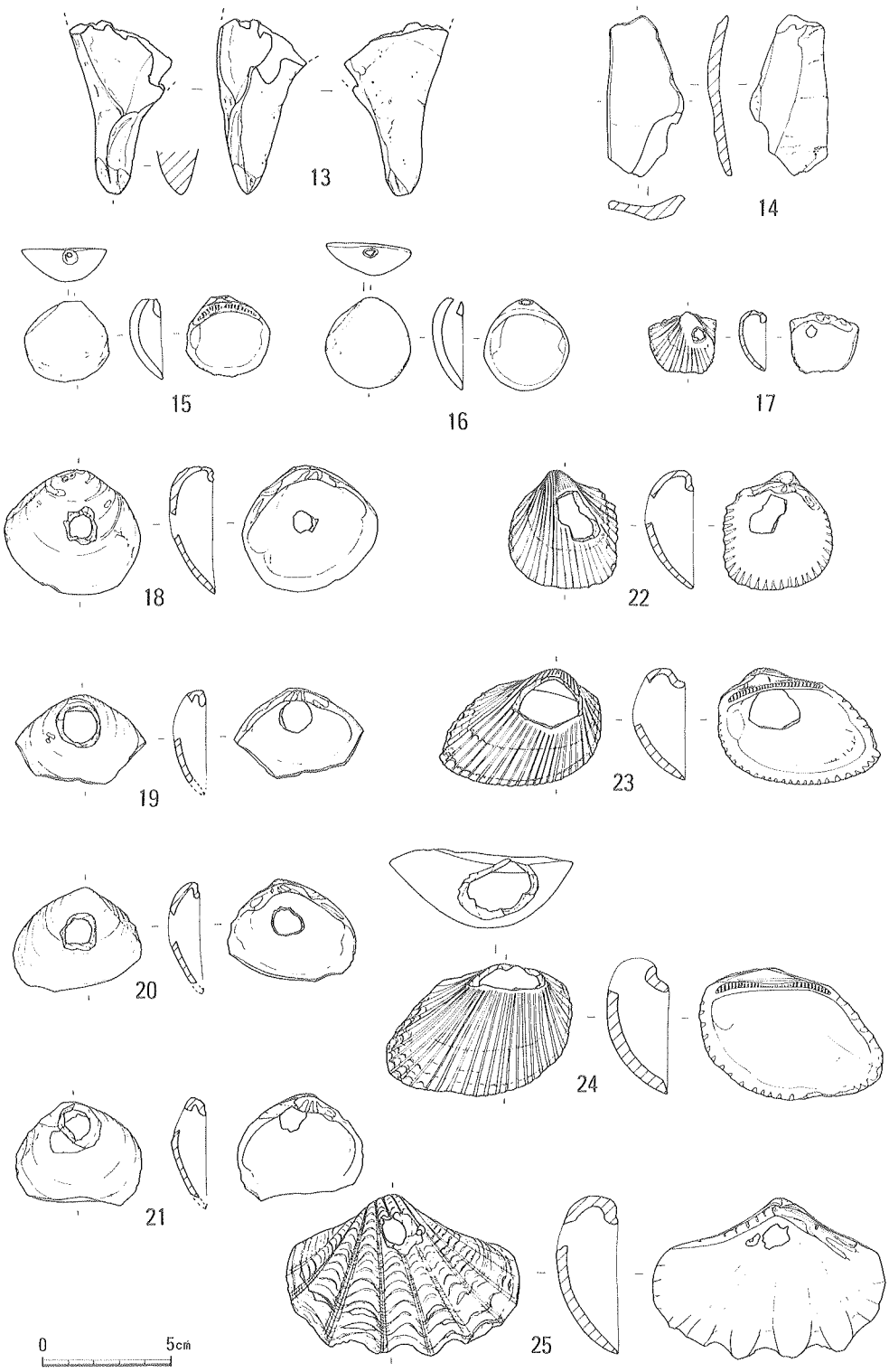


図 145　スイジガイ製品、貝匙、二枚貝有孔製品

2．装飾品

装飾品と考えられるものは貝輪８点、貝製小玉79点、垂飾品27点、札状製品11点、その他８点の計133点である。以下、それについて記述する。

①．貝輪　（図146　図版164）

ゴホウラ１点、サラサバテイ９点、巻貝１点の計11点が得られた。図146－29はゴホウラで、報告例は地荒原貝塚[註9]、シヌグ堂遺跡[註10]、大原貝塚[註11]にあり、抉りを有する点で地荒原貝塚のものに類似する。サラサバテイは同図30は最もていねいに加工したもので一端に小孔の跡があり、複式貝輪になるものであろう。また同図31は地荒原貝塚[註9]のｂタイプに属するものである。

同図34はフジツガイ科の外唇部を用い、半環状にしたものである。現在のところ、他の遺跡での報告例はない。貝輪として用いたか、垂飾品かは判然としないが形状からこの項で扱った。

表36　貝輪出土一覧

－：計測不可　単位：㎜、ｇ

図番号	出土地 地区	グリッド	層	貝種	残部状況	法量 最大長	最大幅	最大厚	重量	断面形	加工状況
29	21－イ	O－97	Ⅱ上	ゴホウラ	破損	－	19.4	6.8	8.6	隅丸	背面利用、内、外縁に抉り有。
30	21－ハ	E－94	Ⅶ	サラサバテイ	ほぼ完形	67.4	6.3	8.2	7.7	－	殻底近くを用いる。打割後研磨。
31	21－ハ	E－94	Ⅶ	サラサバテイ	破損	50.0	9.0	10.7	6.0	L字形	内、外縁を打割調整、外縁はその後研磨する。
32	21－ハ	E－94	Ⅶ	サラサバテイ	破損	40.5	8.2	13.6	5.2	L字形	内縁、打割調整、外縁に研磨。
33	21－ハ	E－94	Ⅶ	サラサバテイ	破損	47.0	7.8	13.1	5.5	L字形	内縁、打割調整、外縁に陵線有
36	21－ハ	E－94	Ⅶ	サラサバテイ	破損	－	－	－	3.2	L字形	〃　〃
35	21－ハ	E－94	Ⅶ	サラサバテイ	破損	51.7	－	14.0	9.5	L字形	自然？
34	21－ハ	C－96	Ⅶ	フジツガイ科	ほぼ完形	69.0	－	22.0	15.7	不定形	外唇を半環状に加工、後溝近くに3.5㎜の孔を両面から穿孔、外縁は丸味を出す。

②．貝製小玉（ビード）（図147～151、図版165～169）

小形のイモガイの螺塔部または、その近くの体層を横位にとり、中央（殻頂）を穿孔したものである。表37に使用部位、地区別の集計を示したが、これによると螺塔部を用いたもの49点、体層部を用いたもの30点で螺塔部を用いたものの方が多い。貝種についてみると、マガキガイ－42点、イモガイ類－36点、サヤガタイモ－１点とマキガイが目につく。地区別の出土状況をみると21地区ハ第Ⅶ層－73点（92.4％）最も多く、他の地区では１～２点の出土である。また、図152に長径と短径を計測し、図化を試みた。これによると５㎜～８㎜の体層のみを用いたグループと1.0㎜2.0㎜殻頂及体層を用いたグループに分かれる。これまでの報告例からは、殻頂を用いたものがほとん

表37　部位出土状況

出土地＼使用部位		螺塔 円形	方形	楕円	他	小計	体層 円形	方形	楕円	他	小計	合計
21－イ	東区Ⅱ						2				2	2
	西区Ⅱ下						1				1	1
21－ロ	う区				1	1						1
21－ハ	Ⅵ						1				1	1
	Ⅶ E93				1	1						1
	Ⅶ E94	8	14	9	7	38	25				25	63
	Ⅶ F93	1		1		2	1				1	3
	Ⅶ F94	2		1	3	6						6
	小計	11	14	11	11	47	27				27	74
22－イ	第２号Ⅱ	1				1						1
合計						49					30	79

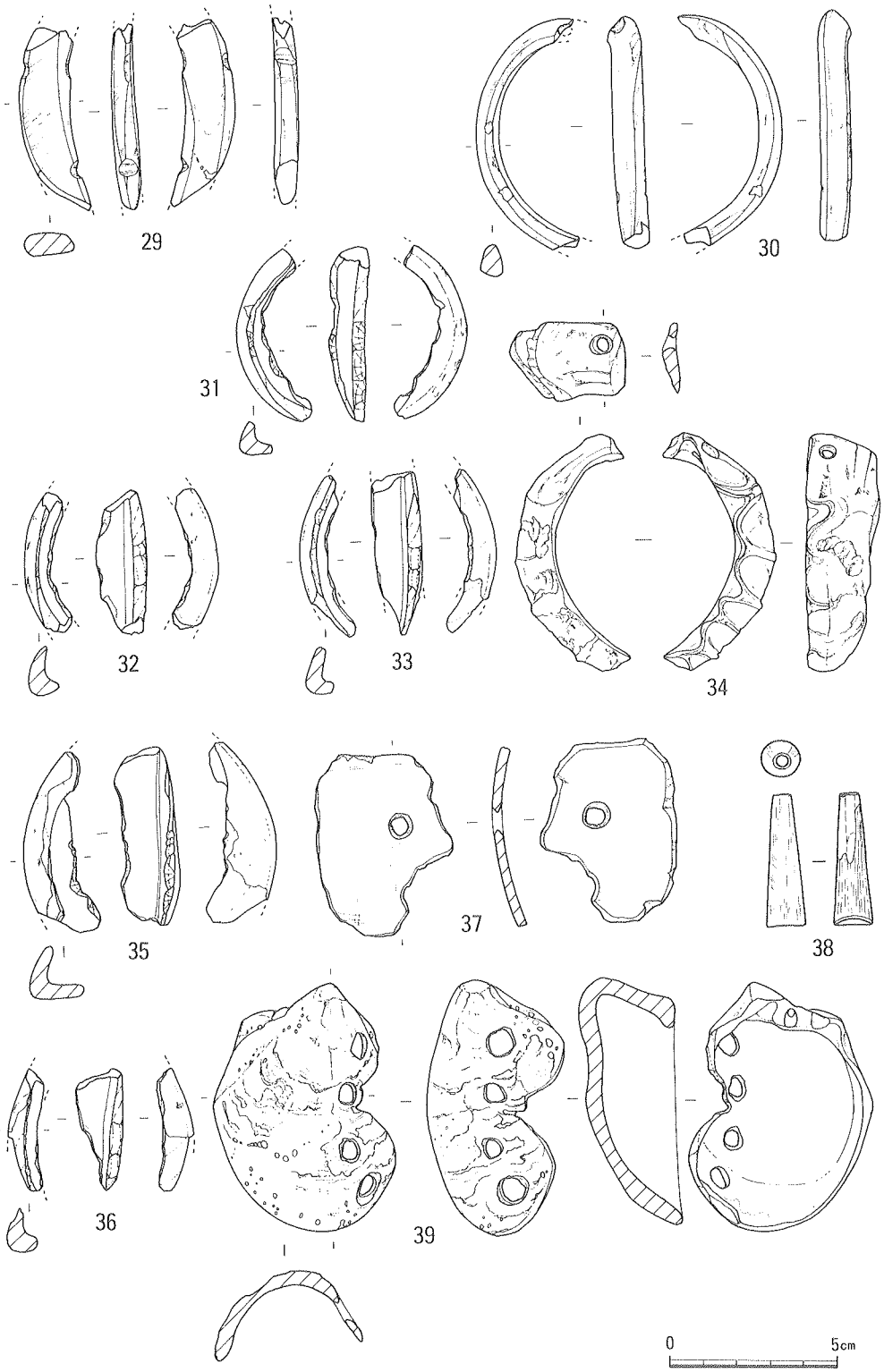


図146　貝輪、その他

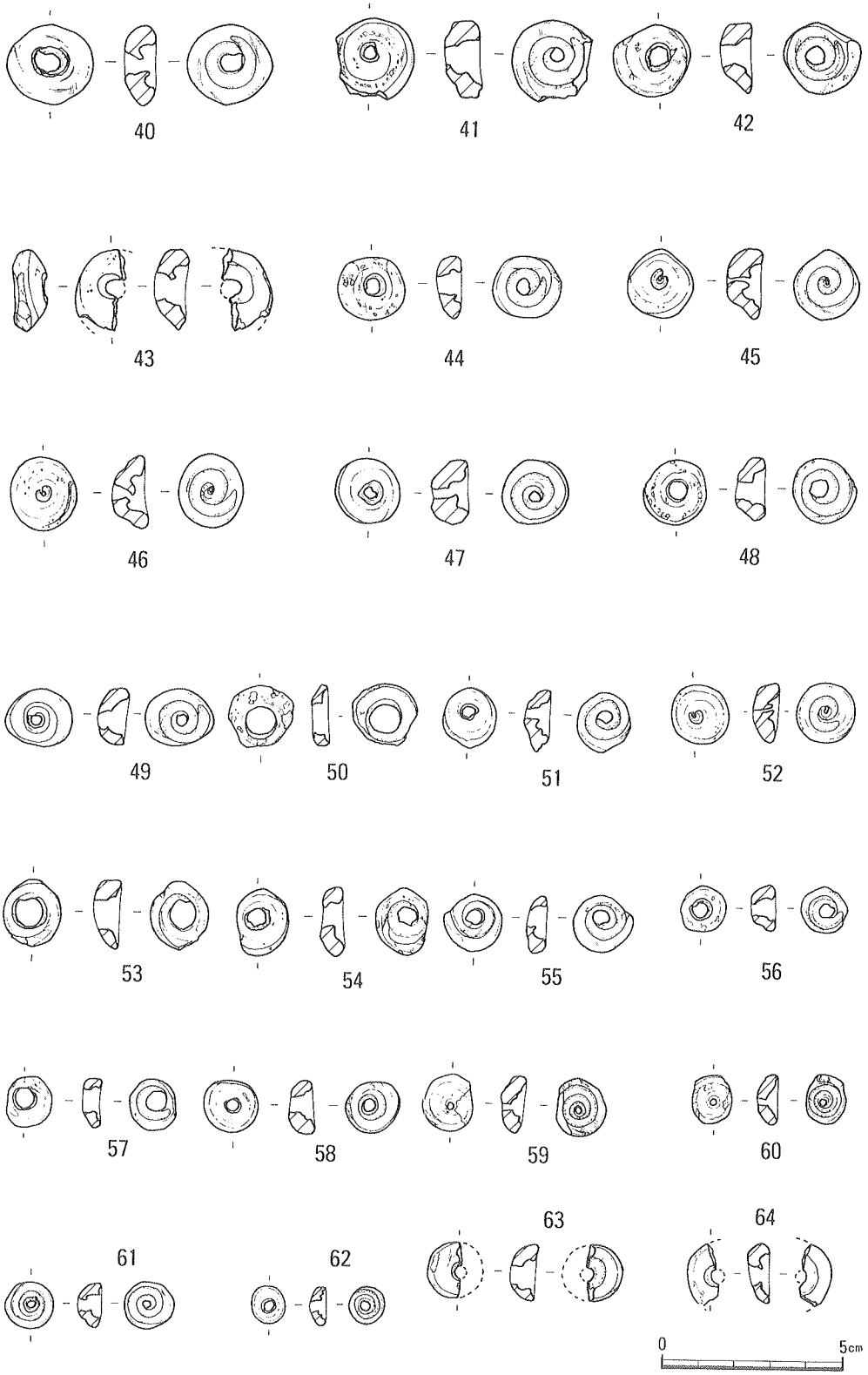

40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
0
5cm

図 147　貝製小玉(1)

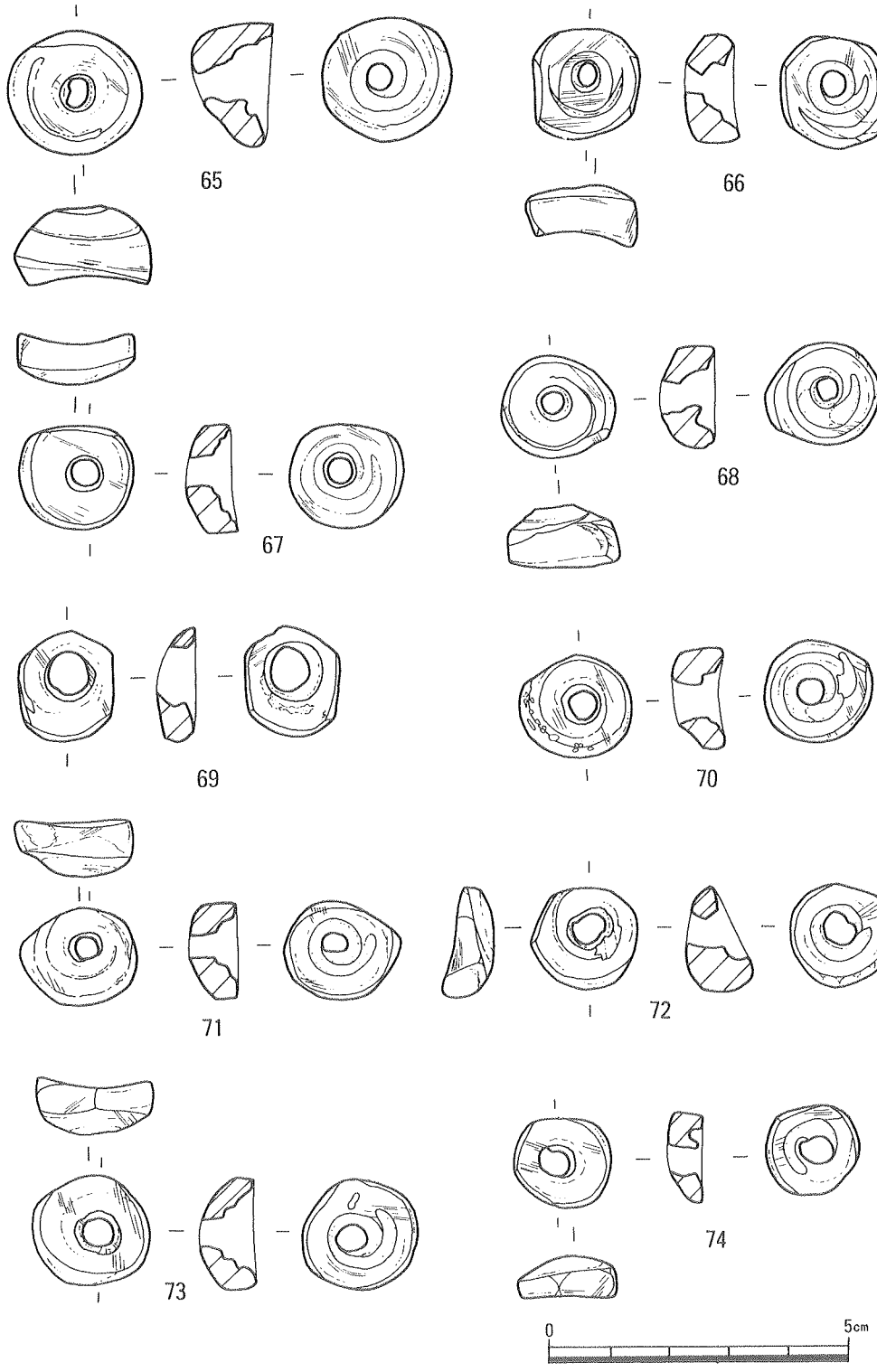


図 148　貝製小玉(2)

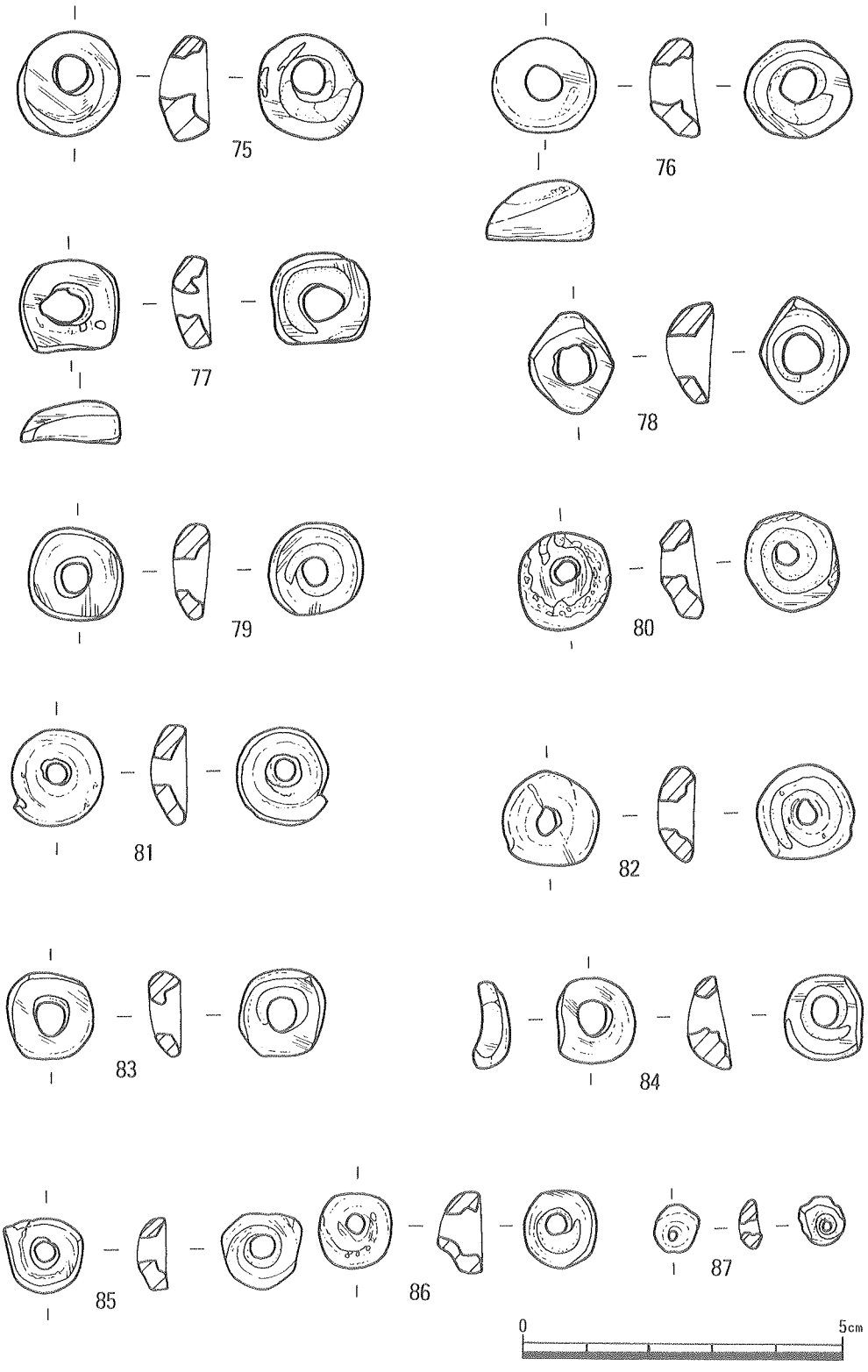


図 149　貝製小玉(3)

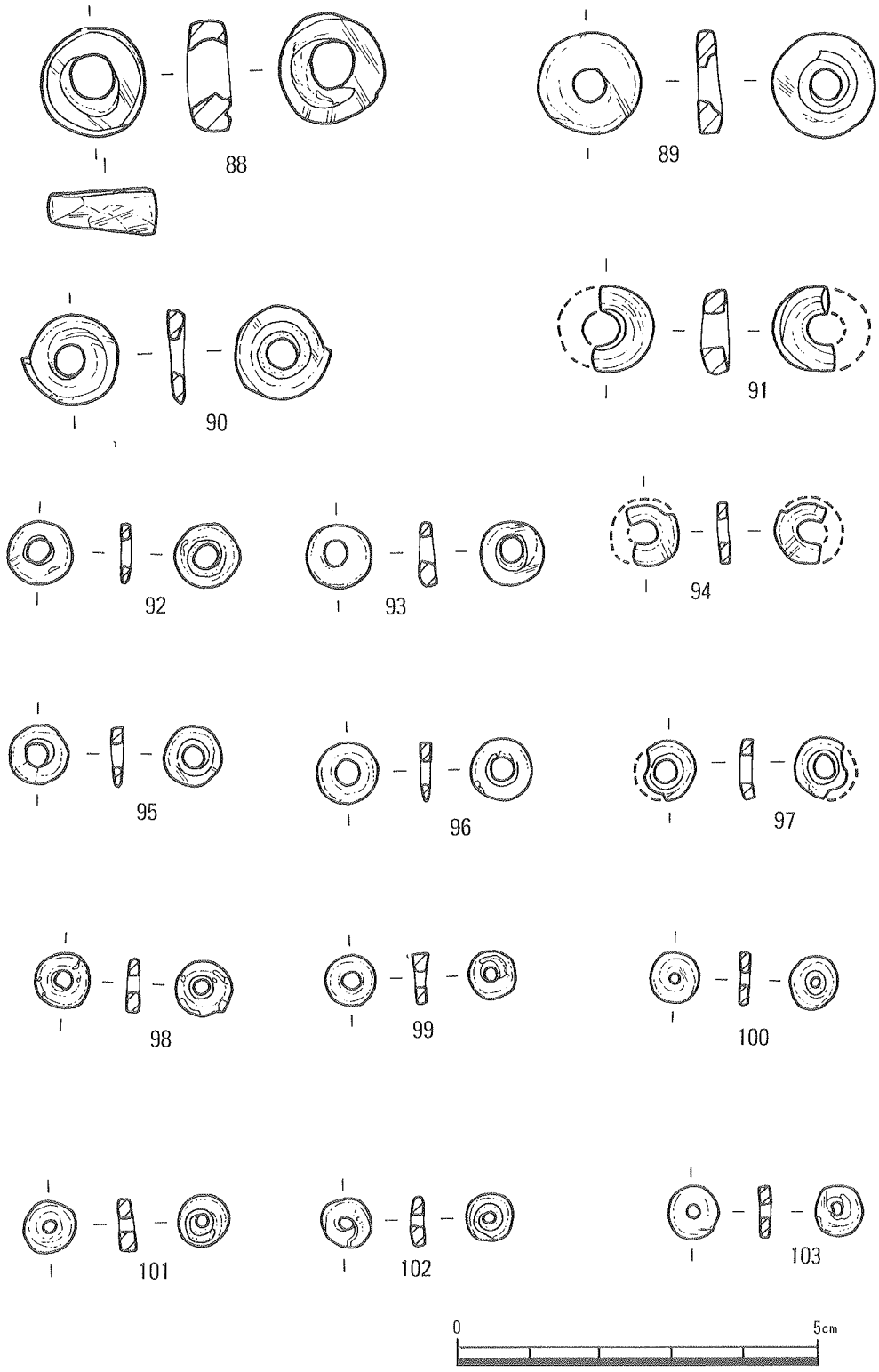


図 150　貝製小玉(4)

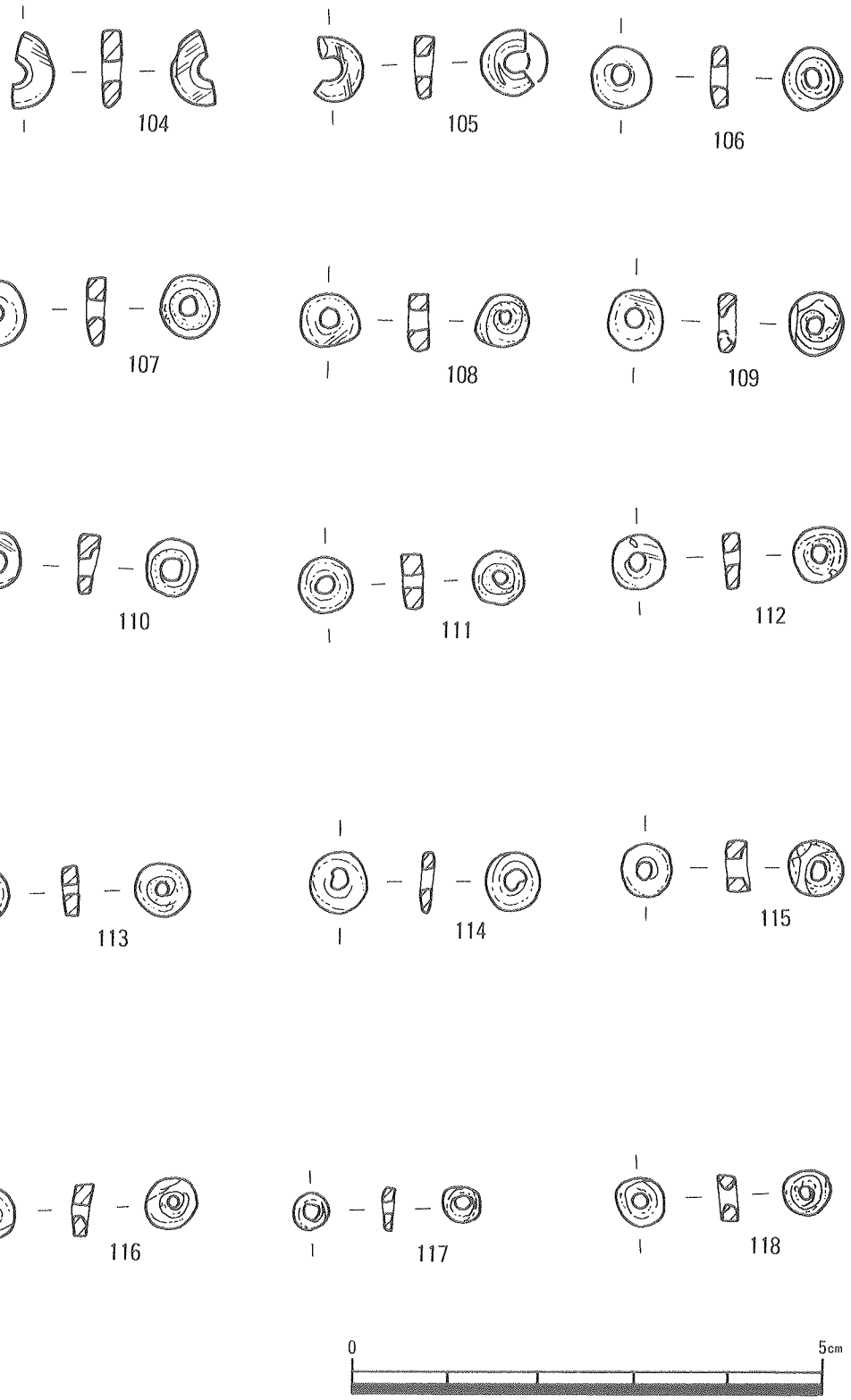


図 151　貝製小玉(5)

表38－(1)　貝製小玉出土一覧

単位：mm・g

使用部位	番号	出土地 地区	グリッド	層	貝種	残存	法量 長径	短径	厚	重量	平面形	孔 長径	短径	形状	研磨状況 孔	殻頂	殻口	体層	図番号
螺塔部	1	21－ハ	E94	Ⅶ1/2	マガキガイ	完形	23.5	22.0	8.5	5.1	円形	7.5	6.7	不定形	○	○	○	○	40
	2	21－ハ	E94	Ⅶ下	マガキガイ	欠損	22.0	21.5	7.8	(5.0)	不定形	5.0	4.6	楕円形	△	○	○	○	41
	3	21－ハ	E94	Ⅶ5/6	マガキガイ	完形	20.5	18.5	8.2	2.5	不定形	6.2	5.8	円形	○	△	△	△	42
	4	21－ハ	F94	Ⅶ下	マガキガイ	半欠	20.5	—	8.4	(2.2)	—	5.4	—	—	×	○	◎	○	43
	5	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	18.4	16.8	6.4	2.5	楕円形	5.5	4.3	楕円形	△	○	△	○	44
	6	21－ハ	E94	Ⅶ1/2	マガキガイ	完形	18.8	17.7	8.5	3.1	方形	5.2	4.8	円形	○	○	△	△	45
	7	21－ハ	E94	Ⅶb4/5	マガキガイ	完形	19.4	17.8	9.8	3.2	楕円形	4.0	4.0	楕円形	×	○	△	△	46
	8	22－イ	2号H0/1		マガキガイ	完形	17.8	17.3	10.0	1.9	円形	4.5	3.9	方形	○	○	○	△	47
	9	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	17.6	16.8	7.1	1.7	円形	6.0	5.5	楕円形	×	○	△	△	48
	10	21－ハ	F93	Ⅶb下	マガキガイ	完形	18.0	15.0	7.0	2.2	不定形	4.0	3.8	楕円形	○	○	○	△	49
	11	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	17.3	16.2	4.9	0.8	不定形	8.7	8.5	円形	○	◎	△	△	50
	12	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	16.0	14.0	6.0	1.1	不定形	4.7	4.2	円形	×	△	△	×	51
	13	21－ハ	E94	Ⅶ?	マガキガイ	完形	15.5	15.5	6.8	1.8	方形	4.8	—	円形	×	△	△	△	52
	14	21－ハ	E94	Ⅶ0/1	マガキガイ	完形	17.9	15.5	7.1	1.2	不定形	8.6	8.3	不定形	×	○	△	△	53
	15	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	18.4	17.5	6.3	1.5	不定形	5.9	5.4	円形	×	△	△	△	54
	16	21－ハ	F94	Ⅶb	マガキガイ	完形	15.2	14.3	4.8	0.8	円形	5.5	5.2	円形	×	○	△	△	55
	17	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	12.3	11.5	5.0	0.5	不定形	6.0	4.5	楕円形	×	○	△	△	56
	18	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	13.8	12.3	4.4	0.7	不定形	6.1	5.7	円形	×	○	△	△	57
	19	21－ハ	E94	Ⅶb1/2	イモガイ類	完形	15.5	15.4	6.0	1.4	楕円形	3.9	3.8	円形	○	◎	○	○	58
	20	21－ハ	E94	Ⅶ	イモガイ類	完形	15.4	13.3	6.8	1.3	不定形	2.4	2.4	円形	◎	△	△	◎	59
	21	21－ハ	E94	Ⅶb	サヤガタイモ?	完形	12.6	10.5	6.5	0.6	楕円形	2.5	2.5	円形	○	○	△	○	61
	22	21－ハ	F93	Ⅶb	マガキガイ	完形	13.1	12.3	6.6	1.2	円形	3.3	3.3	円形	○	△	○	○	61
	23	21－ハ	E94	Ⅶb	イモガイ類	完形	10.1	9.3	3.5	0.3	楕円形	3.1	—	円形	○	◎	△	△	62
	24	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	半欠	14.5	—	6.7	(1.0)	—	4.8	—	—	×	◎	○	△	63
体層部	25	21－ロ	う区Ⅰ		マガキガイ	半欠	16.3	—	7.0	(0.9)	—	5.3	—	—	×	○	△	△	64
	26	21－ハ－	Ⅶ2/3		マガキガイ	完形	21.2	19.9	12.3	6.2	楕円形	5.5	5.3	円形	○	◎	○	○	65
	27	21－ハ	E94	Ⅶ1/2	マガキガイ	完形	18.1	18.1	8.6	3.6	方形	4.3	4.0	円形	△	◎	◎	◎	66
	28	21－ハ	E94	Ⅶ1/2	イモガイ類	完形	18.7	17.3	7.6	3.1	方形	4.6	4.5	円形	△	◎	◎	◎	67
	29	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	18.3	16.3	9.7	3.1	楕円形	3.7	3.5	円形	○	◎	○	○	68
	30	21－ハ	F93	Ⅶb	マガキガイ	完形	17.5	15.0	6.7	1.5	不定形	7.7	6.7	円形	○	◎	◎	◎	69
	31	21－ハ	F94	Ⅶb上	マガキガイ	完形	17.6	16.5	8.7	2.5	不定形	4.8	4.7	円形	○	○	◎	○	70
	32	21－ハ	E94	Ⅶ0/2	マガキガイ	完形	17.4	16.0	8.5	2.6	隅丸の方形	4.7	4.2	円形	○	◎	◎	○	71
	33	21－ハ	E94	Ⅶ0/1	マガキガイ	完形	18.2	16.4	8.0	2.2	円形	6.6	6.4	円形	△	◎	◎	○	72
	34	21－ハ	E94	Ⅶb1/2	マガキガイ	完形	18.5	18.0	8.3	3.4	方形	5.3	4.9	円形	○	◎	◎	○	73
	35	21－ハ	E94－		マガキガイ	完形	15.9	14.3	6.5	2.0	円形	6.1	5.4	円形	○	◎	◎	○	74
	36	21－ハ	E94	Ⅶ1/2	マガキガイ	完形	15.8	14.5	7.4	1.9	楕円形	6.2	4.9	楕円形	×	◎	◎	○	75
	37	21－ハ	F94	Ⅶb下	マガキガイ	完形	15.7	14.4	7.8	1.5	円形	6.1	5.5	楕円形	×	◎	◎	○	76
	38	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	14.8	13.7	6.5	1.2	方形	7.1	5.6	楕円形	×	◎	◎	○	77
	39	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	15.1	12.8	5.2	0.8	菱形	5.6	6.4	円形	×	◎	◎	◎	78
	40	21－ハ	E94	Ⅶb5/6	マガキガイ	完形	14.8	14.2	5.8	1.2	隅丸の方形	4.8	4.6	円形	△	◎	◎	◎	79
	41	21－ハ	E94	Ⅶb	マガキガイ	完形	14.7	13.5	5.0	0.5	不定形	4.2	4.2	円形	○	○	○	○	80
	42	21－ハ	E94	Ⅶ0/2	イモガイ類	若干欠損	14.8	14.0	5.0	(0.8)	円形	3.8	3.5	円形	○	◎	○	◎	81
	43	21－ハ	E94	Ⅶb	イモガイ類	完形	14.5	13.9	4.1	1.1	隅丸の方形	4.1	3.5	円形	○	◎	○	◎	82

表38－(2)　貝製小玉出土一覧

単位：mm・g

備用部位	番号	出土地 地区 グリッド 層	貝種	残存	法量 長径	短径	厚	重量	平面形	孔 長径	短径	形状	研磨状況 孔	殻頂	殻口	体層	図番号
体	44	21－ハ E94 Ⅶb	マガキガイ	完形	12.5	13.3	5.0	1.0	方形	6.0	5.5	円形	螺塔	◎	○	◎	83
	45	21－ハ E94 Ⅶb	マガキガイ	完形	12.8	11.5	4.7	0.7	方形	5.8	4.6	円形	×	◎	◎	◎	84
	46	21－ハ E94 Ⅶ1/2	マガキガイ	完形	11.9	10.9	4.8	0.6	方形	5.0	4.8	円形	×	◎	△	◎	85
	47	21－ハ E94 Ⅶb	マガキガイ	完形	11.3	11.1	6.2	0.7		4.0	3.5	円形	×	○	×	◎	86
	48	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	欠損	(6.7)	(6.0)	2.5	(0.1以下)	不明	1.8	—	円形	×	◎	×	×	87
	49	21－ハ F93 Ⅶb	マガキガイ	完形	14.3	13.9	6.0	1.2	円形	7.5	6.4	楕円形	×	◎	◎	○	88
	50	21－ハ F94 Ⅶ	イモガイ類	完形	13.9	13.7	3.8	0.9	円形	4.6	4.4	円形	○	◎	◎	○	89
	51	22－イ Ⅱ下	イモガイ類	完形	12.6	11.8	2.2	0.3	円形	4.8	4.8	円形	○	◎	△	○	90
	52	21－イ 3CⅡ0/1	マガキガイ	半欠	11.0	—	3.0	(0.3)	円形	5.0	—	円形	○	◎	×	◎	91
	53	21－ハ C94 Ⅵb	イモガイ類?	完形	8.2	8.2	1.4	0.2	円形	4.8	4.3	円形	×	◎	△	○	92
	54	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	8.4	8.2	1.6	0.1	円形	4.0	3.9	円形	×	◎	○	◎	93
層	55	21－ハ E94 Ⅶ	イモガイ類?	半欠	7.8	—	1.1	(0.1以下)	円形	4.0	—	円形	×	◎	×	◎	94
	56	21－ハ E94 Ⅶ	イモガイ類?	完形	7.8	7.8	1.1	0.1	円形	4.7	4.7	円形	×	◎	○	◎	95
	57	21－ハ E94 Ⅶ	イモガイ類?	完形	7.8	7.5	1.2	0.1	円形	4.2	4.2	円形	×	◎	○	◎	96
	58	21－ハ E94 Ⅶ	イモガイ類?	欠損	7.5	—	1.5	0.1以下	円形	4.5	—	円形	○	◎	×	◎	97
	59	21－ハ－Ⅵb	イモガイ類	完形	7.1	7.1	2.6	0.1以下	円形	3.0	3.0	円形	○	◎	◎	◎	98
	60	21－イ 3CⅡ0/1	イモガイ類?	完形	6.5	6.5	1.5	0.2	円形	3.9	3.9	円形	×	◎	◎	◎	99
部	61	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類?	完形	6.6	6.5	1.2	0.1以下	円形	1.7	1.7	円形	×	◎	◎	◎	100
	62	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	6.7	6.7	2.7	0.1以下	円形	2.4	2.4	円形	○	◎	◎	◎	101
	63	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	6.5	6.0	1.8	0.1以下	円形	2.9	2.3	円形	×	◎	○	◎	102
	64	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	6.8	6.8	1.3	0.1以下	円形	2.5	2.5	円形	×	◎	○	◎	103
	65	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	欠損	7.7	—	2.0	0.1以下	方形	3.2	—	円形	×	◎	◎	◎	105
	66	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	半欠	6.1	—	1.8	0.1以下	円形	3.4	—	円形	×	◎	◎	◎	106
	67	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	6.1	5.9	1.7	0.1以下	円形	2.7	2.7	円形	×	◎	○	◎	107
	68	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	6.4	6.1	1.7	0.1以下	楕円形	3.6	3.6	円形	○	◎	◎	◎	108
	69	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	6.1	5.9	2.2	0.1以下	楕円形	2.5	2.5	円形	×	◎	◎	○	109
	70	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	5.9	5.5	2.6	0.1以下	楕円形	2.4	2.4	円形	×	◎	◎	◎	110
	71	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類?	完形	5.4	5.4	2.1	0.1以下	不定形	2.7	2.7	円形	×	◎	△	△	111
	72	21－ハ E94 Ⅵb	イモガイ類	完形	5.3	5.3	2.7	0.1以下	円形	2.4	2.4	円形	○	◎	×	○	112
	73	21－ハ E94 Ⅶ	イモガイ類?	完形	5.4	5.4	1.3	0.1以下	円形	2.7	2.7	円形	○	◎	○	◎	113
	74	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	5.2	5.2	1.2	0.1以下	円形	1.8	1.8	円形	○	◎	◎	◎	114
	75	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類?	完形	5.4	5.4	0.9	0.1以下	円形	2.7	2.7	円形	×	○	×	○	115
	76	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類?	完形	5.2	5.1	2.3	0.1以下	円 形	2.0	2.0	円形	×	○	◎	○	116
	77	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	5.0	4.9	1.5	0.1以下	円形	1.5	1.5	円形	○	◎	○	◎	117
	78	21－ハ E94 Ⅶ5/6	イモガイ類	完形	4.6	4.5	2.3	0.1以下	円形	1.5	1.5	円形	○	○	△	△	118
	79	21－ハ E94 Ⅶb	イモガイ類	完形	3.5	3.5	0.8	0.1以下	円形	1.5	1.5	円形	×	○	△	○	119

（注）

◎……研磨顕著
○……研磨有り
△……不明
×……自然面

} を表す

どである。

本品は、沖縄貝塚時代前期からグスク時代に至るまで、少量ではあるが、一般に出土することが報告されているが、出土量が多いこと、体層を用いていること、入念研磨が施されているのは本貝塚の１つの特徴といえる。

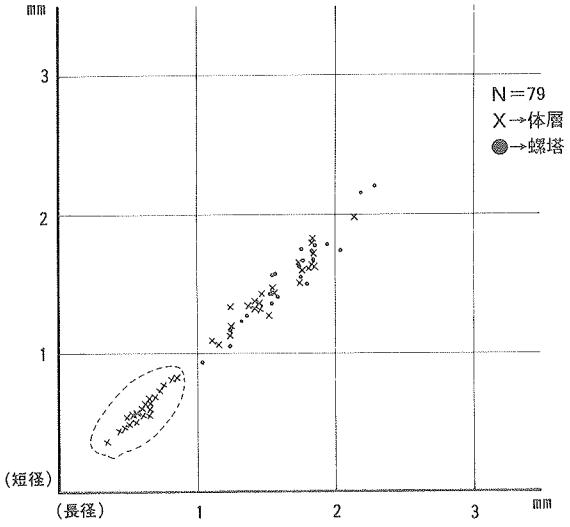


図152　貝製小玉　長径、短径分布

③. 巻貝製加工品

・ イモガイ科（図153　図版170）

イモガイ科の殻頂及び外唇を加工？したものである。本品は殻頂を穿孔するもの（119、122）としないものがある。前者は、広田遺跡[註12]やキガ浜[註1]貝塚等に報告例があり、装飾品の可能性があるが、後者は自然の可能性が高い。[註13]ヤドカリの宿貝としての要素も考えられるが、現在のところイモガイの例は僅少であり、一応ここで記述しておく。

・ マクラガイ科（図153、図版170）

図153の123～125はサツマビナ（マクラガイ科）の殻頂及び体層を穿孔するものである。３点とも体層部は研磨のあとがある。貝の専門家[註14]によれば、「生貝は光沢があり、模様も美麗であるので、装飾品として選択したのではなかろうか。」とのことである。報告例はシヌグ堂[註10]遺跡にある。

表39　イモガイ・マクラガイ製品出土一覧

単位：mm、g

図番号	出土地			貝種	残存	法量			孔径	加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	重さ	(殻頂)	
119	21－ハ	E－94	Ⅶ5/6	マダライモ	完形	16.4	12.7	1.8	1.4	外唇、前水溝は摩耗する。
120	21－ハ	E－94	Ⅶ4/5	サヤガタイモ	完形	18.6	13.8	2.0	無	上記と同様光沢がある。
121	21－ハ	E－94	Ⅶ5/6	マダライモ	完形	21.6	15.3	4.1	無	上記と同様
122	21－ハ	E－94	Ⅶ5/6	マダライモ	完形	23.3	18.2	5.4	1.8	上記と同様
123	21－ハ	E－94	Ⅶ4/5	サツマビナ	完形	30.0	13.8	3.5	3.3	殻頂及び体層部に穿孔体層の孔は長方形（8.2×4.7）
124	21－ハ	E－94	Ⅶb?/3	サツマビナ	〃	30.0	16.9	5.1	7.4	殻頂及び体層面に研磨のあと
125	21－ハ	不明	不明	〃	〃	31.0	18.2	5.5	8.0	焼けた部分あり、加工は上記と同様

・ タマガイ科（図153、図版170）

タマガイ科（トミガイ）の殻口に対向するところに穿孔するもので、加工の仕方は、研磨によるものと、打割によるものがある。９点得られたが、研磨によるもの６例（126～128、131～133）、打割によるもの３例（129、130、134）である。古座間味貝塚[註15]に報告があるが、用途としては、殻口から穿孔面に紐のようなものを通して、装飾品等に用いたと推測される。

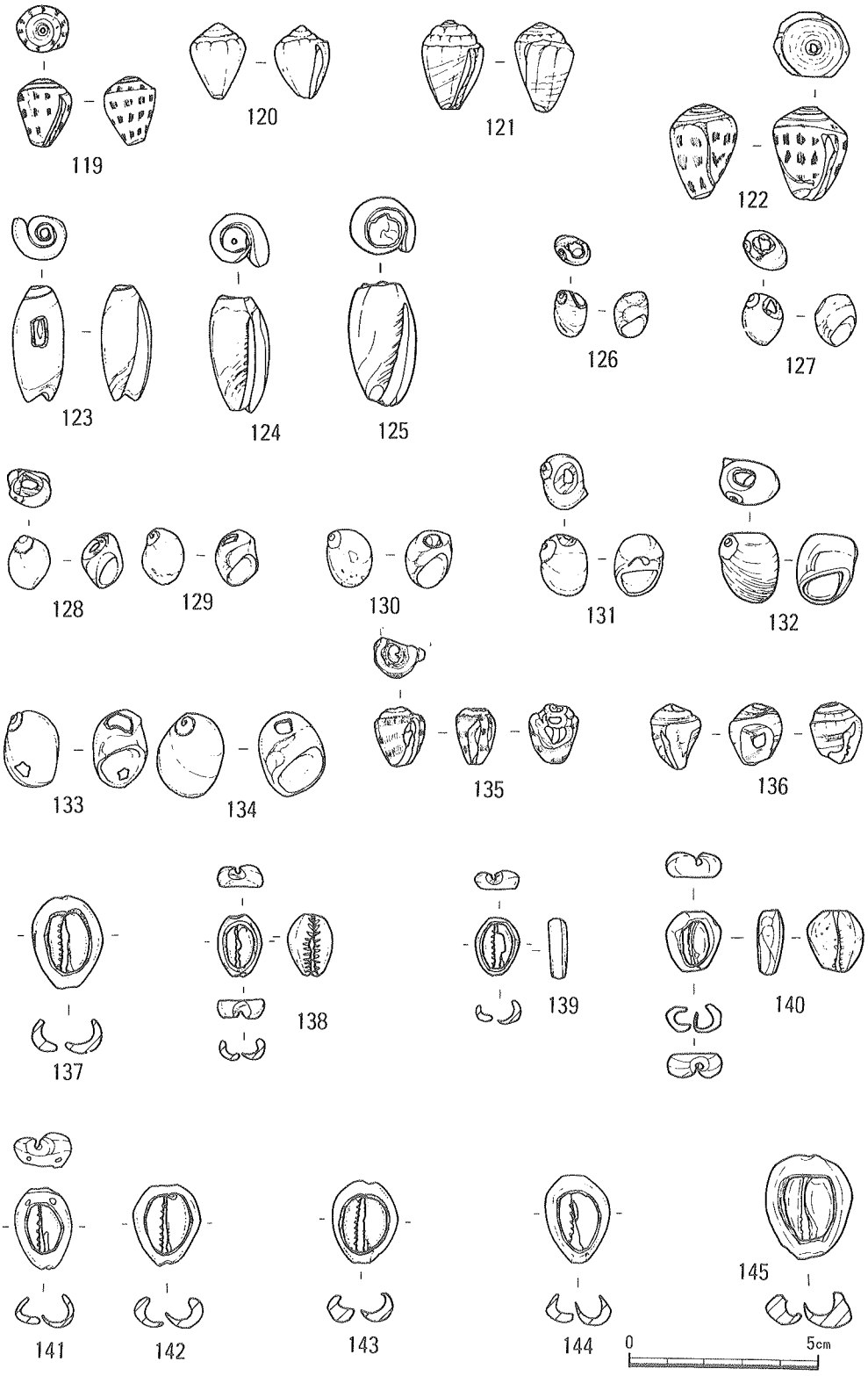


図 153　イモガイ、ノシガイ、トミガイ、タカラガイ製品

表40　タマガイ有孔製品　　単位：㎜・g

図番号	出土地			貝種	残存	法量			孔			加工状況
	地区	グリッド	層			最大長	最大幅	重さ	縦	横	形・加工	
126	21－ハ	E－94	Ⅶ	トミガイ	完形	10.8	8.3	0.3	4.6	3.4	楕円研磨	殻口、孔研磨施される。若干風化する。
127	21－ハ	E－94	Ⅶ	トミガイ	完形	13.7	8.4	0.8	4.5	3.8	不定形研磨	殻口、孔研磨施される。孔の研磨は2面認められる。若干風化する。
128	21－ハ	E－94	Ⅶ	トミガイ	完形	14.0	9.2	1.1	4.2	2.8	楕円研磨	殻口、孔研磨施される。研磨は2面認められる。貝は全体に光沢がある。
129	21－ハ	E－94	Ⅶ	トミガイ	完形	13.8	9.8	0.3	4.8	2.9	楕円打割	殻口は摩耗、貝は風化気味
130	21－ハ	E－94	Ⅶ	トミガイ	完形	14.6	11.3	0.6	5.5	3.9	楕円打割	孔の一担に研磨痕？殻口は摩耗する。
131	21－ハ	E－94	Ⅶ	ホウシュノタマガイ	完形	15.7	11.0	0.6	5.5	3.9	楕円研磨	殻口は摩耗するが大部分は破損する。
132	21－ハ	E－94	Ⅶ	トミガイ	完形	19.4	14.0	2.1	6.4	4.8	楕円打割後研磨	殻口は摩耗、貝は風化気味
133	21－ハ	E－94	Ⅶ	トミガイ	完形	19.4	13.2	1.3	7.6	4.5	楕円研磨	殻口は摩耗、殻口側の孔は破損である。
134	21－ハ	E－94	Ⅶ	トミガイ	完形	21.8	15.0	3.2	4.8	3.8	方形打割	殻口は摩耗、内唇に研磨痕らしきものあり

・ノシガイ（図153、図版170）

殻頂を取り、さらに殻口面に対向する体層面を磨り、穿孔したものである。2点得られた。類例は[註1]キガ浜貝塚にみられるが、加工の状況をみると本貝塚のものは、研磨し、穿孔したのみであるが、キガ浜貝塚のものは殻軸に対して両面から研磨し、均厚に加工する。用途は前述の巻貝加工品と同様、紐にとおすような装飾品と考えられる。

表41　ノシガイ製品　　単位：㎜・g

図番号	出土地			貝種	残存状況	法量			加工状況
	地区	グリッド	層			最大長	幅	重量	
135	21－イ	P－96	Ⅱ下	ノシガイ	完形	14.3	12.3	0.9	殻口、その裏面を研磨し穿孔する。
136	22－イ	2号	Ⅱ	ノシガイ	〃	15.7	13.7	1.8	上記と同様に加工、部分的に風化

④．タカラガイ製品（図153、図版170）

図153－137～145は小型のタカラガイの背面を除去したものである。除去面及び両端を研磨を施こしたものと打割のみのものがある。前者は4点得られ、そのうち3点は腹面に打割調整が認められる。また、後者は、5点得られた。また、図154－141は、後端の背面側に1.5㎜の小孔を2個配し、動物の「目」のような感を受ける。また、腹面に打割調整を加えたものは、[註16]カンドウ原遺跡のタカラガイのBタイプに属することから、同報告書の民具資料（写真B）のような紐の通し方が想定される。報告例は、[註17]城嶽貝塚、[註18]熱田原貝塚、沖之永良部の[註19]犬田布貝塚等の

表42　タカラガイ製品

単位：mm・g

図番号	出土地			貝種	残存	法量				分類	背面	加工状況
	地区	グリッド	層			縦	横	厚	重量			
137	21－ハ	E－94	Ⅶ	ハナビラダカラ	完形	23.3	18.0	7.1	2.6	B3	研磨	殻は摩耗、背面は打割後部分的に研磨
138	21－ハ	E－94	Ⅶ	ハナビラダカラ	完形	15.7	11.8	5.0	0.9	B3		背面及び両端を研磨、中央に打割調整 No. 139 に類似
139	21－ハ	E－94	Ⅶ	ハナビラダカラ	完形	15.1	11.2	5.0	0.6	B3		背面及び両端を研磨、腹面を⅔程打割
140	21－ハ	E－94	Ⅶ	フシダカキイロダカラ	完形	22.5	17.0	8.0	2.6	A3		背面及び腹面を中心に外殻面は研摩調整
141	21－ハ	E－94	Ⅶ	ハナビラダカラ	完形	20.6	14.4	8.3	1.3	B2	打割	殻軸及び背面を打割調整、背面の1部を研磨上部（　）に対し小孔（1.3、1.8）かあり、「日」のようである。
142	21－ハ	E－94	Ⅶ	ハナビラダカラ	完形	20.1	16.8	6.4	1.5	B2		全体に風化切味、軸部は前端側に残るのみ
143	21－ハ	E－94	Ⅶ	ハナビラダカラ	完形	22.5	17.0	8.0	2.0	B2		全体に風化切味、殻軸除去される。
144	21－ハ	E－94	Ⅶ	ハナビラダカラ	完形	21.0	16.5	6.4	1.6	A3		〃　殻軸有、背面の1部に研磨痕
145	21－ハ	E－94	Ⅶ	ハナマルユキ	完形	27.7	22.0	8.3	4.7	A3		〃

註　分類はカンドウ原遺跡（1983）に準ずる。

類例にすぎない。用途については、ていねいに研磨してあること、タカラガイの中でも小型の貝を用いていることから、網の錘というよりに装飾品の可能性が大きい。

⑤．札状製品

巻貝を札状に加工したもので大型のタカラガイと大型のイモガイを用いたものの2種がある。

・タカラガイ（図155、図版171）

ホシダカラ、タルダカラ等を用いたもので貝殻の名称については図154に示した。

貝の外唇面を用い、三カ月形の符状に加工したもので、未製品～完成品を含めて、6点得られた。完成品は図155－146で、前述のように外唇を用い、歯の部分も削り、全面に研磨を施し、中央よりやや片よったところに穿孔する。まるでイヌの犬歯を模したような感を受ける。それ以外に、外唇を三カ月形に型どり、歯を残すもの同図147、148、側面のみを研磨したもの同図149、打割調整したもの同図150、151が検出され、製品の製作過程同図150・151→149→148・147→146、が想起される。しかし、146に至るか、あるいは147、148で完成品とする可能性も考えられる。

また、貝殻の使用部位及び製品のとり方については図154に模式化してみた。詳細の観察は表43に示した。

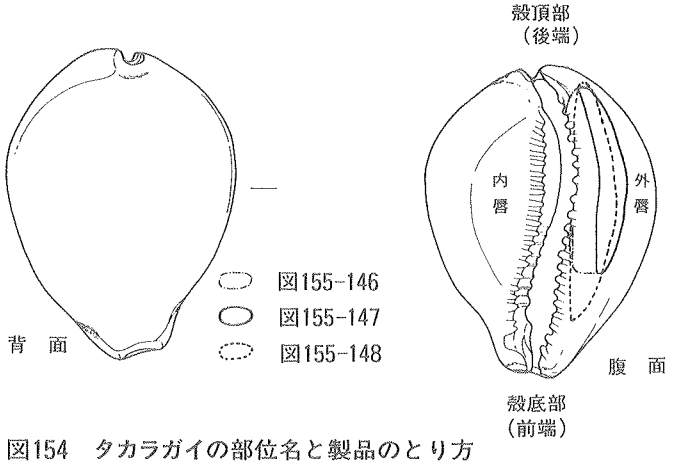


図154　タカラガイの部位名と製品のとり方

表43　タカラガイ札状製品

計測不可：－ 単位：mm・g

図番号	出土地			貝種	法量					重さ	加工状況
	地区	グリッド	層		残存	最大長	最大幅	最大厚	重さ		
146	21－ハ	E－95	Ⅶ	ホシダカラ	完形	58.3	9.8	4.2	6.8	3.0	三ケ月状に型どり、ほぼ全面研磨したものである。
147	21－ハ	F－94	Ⅶ	〃	完形	55.6	16.8	6.7	10.6	4.3	殻底の半分を用い、札中央より上に穿孔する。歯の一部と内殻自然面を残す。
148	21－ハ	F－94	Ⅶ	〃	完形	72.6	12.7	5.5	7.9	3.8	半月状に加工上記と同様中央より片寄ったところに穿孔する。ほぼ全面研磨
149	21－ハ	E－94	Ⅶ	タルダカラ	半欠	42.6	8.2	4.1	2.6	－	殻底を札状に型どる、側面に研磨痕有り。
150	21－ハ	F－94	Ⅶ	ホシダカラ	未製品	76.6	19.5	8.5	29.1	－	殻底を打割調整し、札状にする。未製品？
151	21－ハ		Ⅶ	？	〃	82.2	15.5	4.0	9.6	－	上と同様のものである。

・イモガイ（図155、図版171）

アンボンクロザメ、クロフモドキ等の大型のイモガイの外唇側を幅約1.0cm程の長方形に切り取り、札状に加工したものである。これらは有孔するもの（図155－152）と無孔のもの（同図153、154、155）がある。同図156は未製品と思われる。無孔の報告例は[註1]キガ浜貝塚、[註20]浦添貝塚にある。

表44　イモガイ札状製品

単位：mm・g

図番号	出土地			貝種	残存	法量				加工状況
	地区	グリッド	層			長	副	厚	重量	
152	21－ハ	E－93	Ⅶ	イモガイ？	完形	41.0	8.5	3.3	2.3	長方形に型どり、2孔を穿孔したものである。孔の上、下端に紐ずれ痕。孔の周辺は研磨が丁寧。孔径 3.4 × 3.0、3.2 × 2.9
153	21－ハ	E－94	Ⅶ	イモガイ	半欠	27.6	10.0	2.2	1.6	肩部及び側面に研磨痕が認められる。研磨方向は斜位。
154	21－イ		Ⅱ	〃	〃	27.0	9.3	3.1	1.2	内殻面は平坦にするため、ていねいに加工、1部に自然面、横、縦位に研磨若干風化
155	21－ハ	E－94	Ⅶ	〃	〃	23.6	8.8	2.0	0.7	外唇、前水溝側、表に顕著に研磨痕殻は下方に薄くなる。
156	21－ハ	E－95	Ⅶ	〃	〃	57.4	17.2	3.2	4.0	ほぼ中央に溝状痕、前述の製品から推察すると切断のためと考えられる。

3．その他

①．スイジガイ突起加工品（図155、図版171）

図155－157、158はスイジガイの突起を加工したものである。突起の使用部位は[註21]上原氏に従うと前者がNo.1、後者がNo.4を用いる。このように加工した報告例はなく、用途はあいまいであるが、入念な研磨、穿孔等から装飾品にして便宜上、分類した。

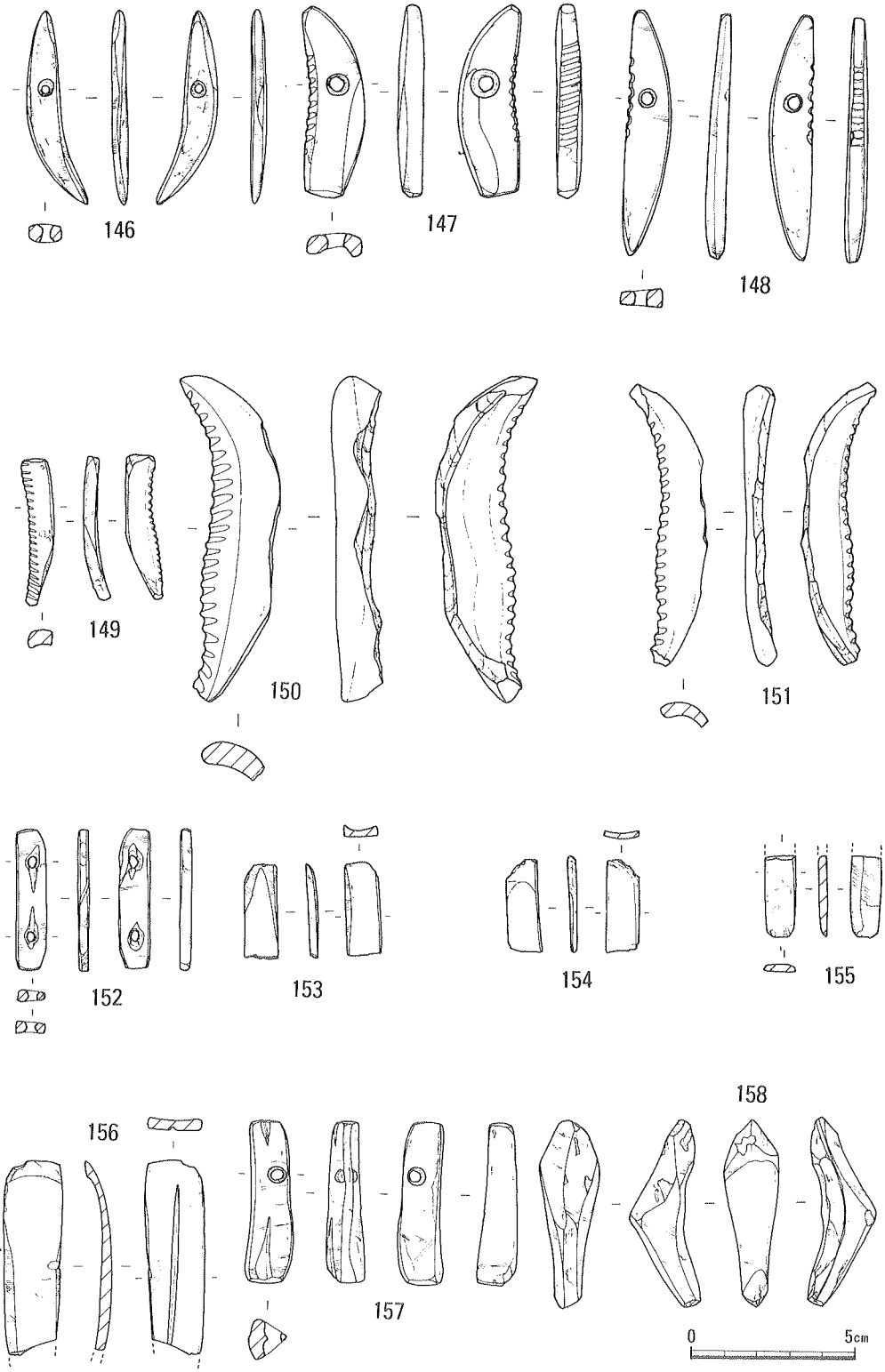


図155　タカラガイ・イモガイ札状製品

表45　スイジガイ加工品　　単位：㎜・g

図番号	出土地			貝種	残存	法量				加工状況
	地区	グリッド	層			最大長	最大幅	最大厚	重さ	
157	21－ハ	F －94	Ⅶb	スイジガイ突起No.1	完形	48.3	13.0	11.0	8.6	孔を有し3.7×4.0をはかる。穿孔の部分は薄手で両面穿孔する。平面形は長方形を呈する。
158	21－ハ	E －94	Ⅶb	スイジガイ突起No.4	完形	54.8	16.0	16.6	16.0	平面はNo.4突起そのままの湾曲をのこす全面研磨され、調整痕縦、横位に認められる。

②．二枚研磨有孔貝製品（図145、図版163）

二枚貝の殻頂及びその近くを磨り、約5,0㎜の小孔を穿ったものである。図145－15、16、17の3点で、貝種はソメワケグリとカワラガイである。前記した「二枚貝有孔製品」と別の用途が、考えられるので、この項にまとめた。類例は[注1]キガ浜貝塚にある。

表46　二枚貝研磨有孔製品　　単位：㎜・g

図番号	出土地			貝種	残存	R／L	法量			孔径	加工状況
	地区	グリッド	層				殻高	殻長	重量		
15	21－ハ	E －94	Ⅶ	ソメワケグリ	完形	R	30.9	32.5	7.5	2.2×2.2	外殻の腹縁は複数の剥離がみられる。内殻の歯は研磨にされる。殻頂に研磨による穿孔。
16	21－イ	3 －c	Ⅱ	〃	〃	〃	33.9	32.6	7.7	2.4×3.4	全体的に摩耗する。殻頂に小孔。
17	〃	0 －97	〃	カワラガイ	破損	L	22.1	25.5	2.4	4.1×4.4	孔の状況から自然の感もある。

③．その他の有孔製品（図146、図版163）

図146－37、38、39は前述した分類に含まれないものである。37、39の2点は報告例はなく、また38のツノガイは、[注12]広田遺跡、[注22]馬毛埋葬址で報告があるが県内でははじめてである。本品は黒住氏によれば「現在、沖縄海域には棲息してなく、化石の可能性が高い」とのことである。

表47　その他　　単位：㎜・g　　－：計測不可

図番号	出土地			貝種	残存	法量				加工状況
	地区	グリッド	層			最大長	最大幅	最大厚	重さ	
39	22－イ	3号	Ⅱ	メンガイ	完形	71.9	49.2	27.6	45.7	貝殻の側縁に縦位に4個の孔を施す殻の薄位部分に。
37	22－イ	3号	Ⅱ	ゴホウラ	破損	－	39.8	－	5.3	若干、風化気味。穿孔は2個あるが、1つは5.1×5.1を計るが他は不明、両面穿孔。
38	不明	不明	不明	ツノガイの一種	ほぼ完形	38.6	11.8	10.6	2.1	殻表及び殻頂をていねいに研磨し、陵線がみられる。

4．考察

以上、各製品について記述したが、ここで製品の種類及び他の遺跡との状況を比較してみたい。まず、実用品のスイジガイ製利器、螺蓋製貝斧、貝刃、貝匙、ホラガイ有孔製品、二枚製

有孔製品は、ほぼ同時期のキガ浜貝塚、シヌグ堂遺跡、地荒原貝塚と類似する。

装飾品は、貝輪は前者の遺跡と同じであるが、貝製小玉の79点は県内では類をみない量であるが、近接する沖永良部神野[註23]貝塚にみられる。また、タマガイ、ノシガイ、タカラガイの加工品は、種子島広田遺跡にみられ、沖縄でも百名第二貝塚やキガ浜貝塚に1～2例出土する。

札状製品のイモガイは浦添貝塚に報告例があるが、タカラガイは県内で初めてである。タカラガイの中では図155－146はイヌの犬歯を模した感を受け、前Ⅳ・Ⅴ期から出土する「サメ歯模造製品」と同様、素材の「置換」を想起させるもので、この時期の装身具の特徴を考えるうえで興味深い。

また、同一丘陵にほぼ同時期の伊波[註24]貝塚があるが、土器は古我地貝塚が面縄前庭式、面縄東洞式、嘉徳Ⅰ、Ⅱ式などの奄美系が主体であるのに対し、伊波貝塚が伊波式土器を主体とすることから、骨、貝製品の種類が異なることも詳細に検討をするとおもしろい結果が得られると思う。

註

註1．沖縄県教育委員会「津堅キガ貝塚発掘調査報告書」『沖縄文化財調査報告書第17集』1977年
註2．多和田真淳、外間正幸、嵩元政秀「地荒原貝塚発掘報告」『文化財要覧』1962年
註3．鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（32）』1985年
註4．鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会「面縄第1、2貝塚」『伊仙町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』1983年
註5．三島格「螺蓋製貝斧」『賀川光夫先生還暦記念論集』1982年
註6．国分直一『南島の先史時代』慶友社　1972年
註7．新田重清、嵩元政秀「嘉手納貝塚発掘報告書」『文化財要覧』1960年
註8．沖縄県教育委員会「百名第二貝塚」『沖縄県文化財調査報告書』第38集1980年
註9．具志川市教育委員会『地荒原貝塚－個人住宅建設工事に係る発掘調査報告』1986年
註10．沖縄県教育委員会「シヌグ堂遺跡－第1・2・3次発掘調査報告」『沖縄県文化財調査報告書第67集』1985年
註11．沖縄県教育委員会「大原－久米島大原貝塚群発掘調査報告」『沖縄県文化財調査報告書第32集』1980年
註12．国分直一、盛園尚孝「種子島南町広田の埋葬遺跡調査概報」『考古学雑誌43巻5号 1958年
註13．黒住耐二「付録2、沖縄県で獲られたオカヤドカリ類の宿貝リスト」『あまん』沖縄県教育委員会1987年
註14．黒住耐二氏の教示による。
註15．沖縄県教育委員会「古座間味貝塚範囲確認調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書第43集』1982年
註16．沖縄県教育委員会「カンドウ原遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）」沖縄県文化財調査報告書第49集』1983年
註17．小牧実繁「那覇市外　城嶽貝塚発掘報告」『人類学雑誌』第42巻8号1927年
註18．C．Wミーヤン・高宮廣衛「知念村熱田原貝塚発掘概況」『文化財要覧』1958年
註19．鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会「犬田布貝塚」『伊仙町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』1984年
註20．新田重清「浦添貝塚調査概報」『南島考古』第1号沖縄考古学会1970年
註21．上原静「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古』第7号1981年
註22．西之表市教育委員会『馬毛島埋葬址鹿児島県西之表市馬毛島椎ノ木遺跡』1980年
註23．高宮廣衛・仲宗根求・宮里信勇「沖永良部神野貝塚発掘調査概報（その3）」『沖国大考古』第9号1987年
註24．大山柏「琉球伊波貝塚発掘報告』1922年

第4節　骨製品

本貝塚出土の骨製品は実用品と考えられるもの57点、装飾品と考えられるもの67点、両者に含まれないもの24点の計148点である。地区別の出土は崖上地区22地区イ－5点、崖下地区の21地区イ－8点、21地区ロ－4点、21地区ハ－131点の計148点で21地区ハが全体の88.5%と圧倒的に多い。これは貝製品と同様、3㎜、1㎜メッシュにかけた結果だと考えられる。以下、表48に骨製品の出土状況を示すが、製品の分類については貝製品と同様、報告のための便宜的なものであり、今後の研究の深化、資料の追加によって変更する可能性もある。

表48　骨製品出土状況

出土地			製品	実用品										装飾品																	その他			合計
				骨針	骨錐			刺突具				ナイフ型	ヘラ状	小計	骨輪		垂飾品			イノシン牙	サメ脊椎	かんざし	札状			棒状		小計	クジラ	ジュゴン	その他			
					イノシシ	ジュゴン	ヤス状 トリ	ヤス状 イノシシ	エイ	クジラ					環	半環	サメ歯	イルカ	イノシン				ジュゴン 有孔	ジュゴン 無孔	その他	シカ	ジュゴン							
22地区（崖上）	イ	I																																
		1号																																
		2号																				1			1			2					2
		3号						1					1				1						1					2					3
		小計						1					1				1					1	1		1			4					5
21地区（崖下）	イ	I																					1					1					1
		II	上	3							1		4			1												1	1				6
			下			1							1																				1
		小計		3		1					1		5			1							1				2	1				8
	ロ	I																																
		II																																
		III																																
		IV		2									2	1		1												2					4
		小計		2									2	1		1												2					4
	ハ	I																																
		II																																
		III																																
		IV		1					1				2																					2
		V					1						1							1								1					2
		VI		8	2	1	1	1	1	5			19	2	4	2	1	1	11	6		2	1	1	3	1	35	3	1	3			61
		VII		9		1	8		1	4	2	2	27	4	2				6	4	2			1	1	3	23	8	5	3			66
		小計		18	2	2	10	1	3	9	2	2	49	6	6	2	1	1	18	10	2	2	1	2	4	4	59	11	6	6			131
合計				23	2	3	10	2	3	9	3	2	57	7	6	4	2	1	18	10	3	3	2	3	4	4	67	12	6	6			148

1．実用品

骨針－23点、骨錐－５点、ヤス状刺突具－24点、ナイフ型骨製品－３点、ヘラ状製品－２点の計57点で全体の38.5%を示める。地区別の出土状況をみると22地区イ－１点、21地区イ－５点、21地区ロ－２点、21地区ハ－49点である。

a．利器

①．骨針（図156、図版172）

本品は軸頂部－１点、中間－12点、先端部－８点、未製品－１点の計23点が得られた。地区別の出土状況は表49に示すように、21地区ハ－18点、21地区イ－３点、21地区ロ－２点で、崖上からの出土はなかった。素材をみる、イノシシの腓骨が主体をなすが、図156－11のようにイノシシの切歯骨を用いるものもある。用途は針としての機能の他にかんざしや補修具としての可能性もある。本品は沖縄貝塚時代前期～後期までみられるが、一般に前期で多く出土する。

表49　骨針出土一覧

単位：㎜・g

図番号	出土地			素材	残存	法量				加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	厚さ	重さ	
1	21－ハ	D－95	Ⅵ	イノシシL 腓骨～dis	軸頂	☆50.4	6.3	3.5	1.6	器体部と軸頂の一部を研磨。軸頂部に４６×3.6の孔を両面から穿孔。
2	21－イ	O－97	Ⅱ	腓骨 Ⓢ R1L不明	先端部	☆36.7	5.2	3.7	0.7	削り痕が先端にみられる。研磨痕は縦位に確認できる。
3	21－イ	－95	－	〃	〃	☆38.7	5.5	3.5	1.0	全体的に光沢がある。先端はていねいに調整する。
4	21－イ	O－96	Ⅱ	〃	〃	☆52.2	4.7	3.3	1.2	先端の削り面は明瞭で陵線を有する。研磨痕は先端、横位、器体一縦位に認められる。
5	21－ハ	F－94	Ⅳ	〃	〃	☆23.0	4.5	3.7	0.4	研磨調整はていねいである。
6	21－ハ	E－9	Ⅶ	〃 四肢骨	〃	☆33.8	7.2	3.3	1.0	ほぼ全面研磨、研磨痕は縦位に認められる。
7	21－ハ	E－94	〃	〃 ～dis	軸頂	☆26.1	14.1	7.3	1.4	骨体側に３～４条の切断痕
8	21－ハ	D－95	Ⅵ	〃 pro～	先端	☆26.0	6.8	3.5	0.3	先端に刃こぼれ有
9	21－ハ	F－95	〃	〃	〃	☆ 4.6	5.1	3.5	0.2	先端に１～２カ所の剥離痕
10	21－ハ	E－95	〃	〃	〃	☆10.6	3.8	2.6	0.1	〃
11	21－ハ	E－94	Ⅶ	イノシシ 切歯	〃	☆24.2	5.7	4.1	0.5	先端にエナメル質の部分を残す。研磨は明瞭である。

注　dis→遠位端、Ⓢ→骨体、pro→近位端、☆→破損

②．骨錐（図156、図版172）

イノシシの肢骨やジュゴンの肋骨を用い、その一端を削り、錐状にしたものでそれぞれ２点ずつ出土した。破損品のみである。

表50　骨錐出土一覧

単位：㎜・g　　☆：破損

図番号	出土地			素材	完/破	法量				加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	厚	重量	
12	21－ハ	E－94	Ⅵ	イノシシ尺骨	破	☆29.8	9.9	6.7	0.6	先端の側面に研磨及削りが顕著にみられる。
13	21－ハ	F－95	Ⅵ	イノシシ肢骨	〃	☆35.4	12.8	2.9	0.8	先端にいくにしたがって研磨調整がていねい。
14	21－ハ	E－95	Ⅶ	ジュゴン肋骨	〃	☆45.7	10.0	8.5	2.9	先端は海綿組織が露出する。刃こぼれ有。断面は円形。
15	21－ハ	E－95	Ⅵ	ジュゴン	〃	☆13.8	5.4	5.4	0.7	研磨痕が縦位に認められる。表面に海綿組織有。
16	21－イ	P－96	Ⅱ	？	〃	☆47.0	10.5	10.4	0.6	荒削り調整、未製品、先端部欠損、クジラかもしれない。

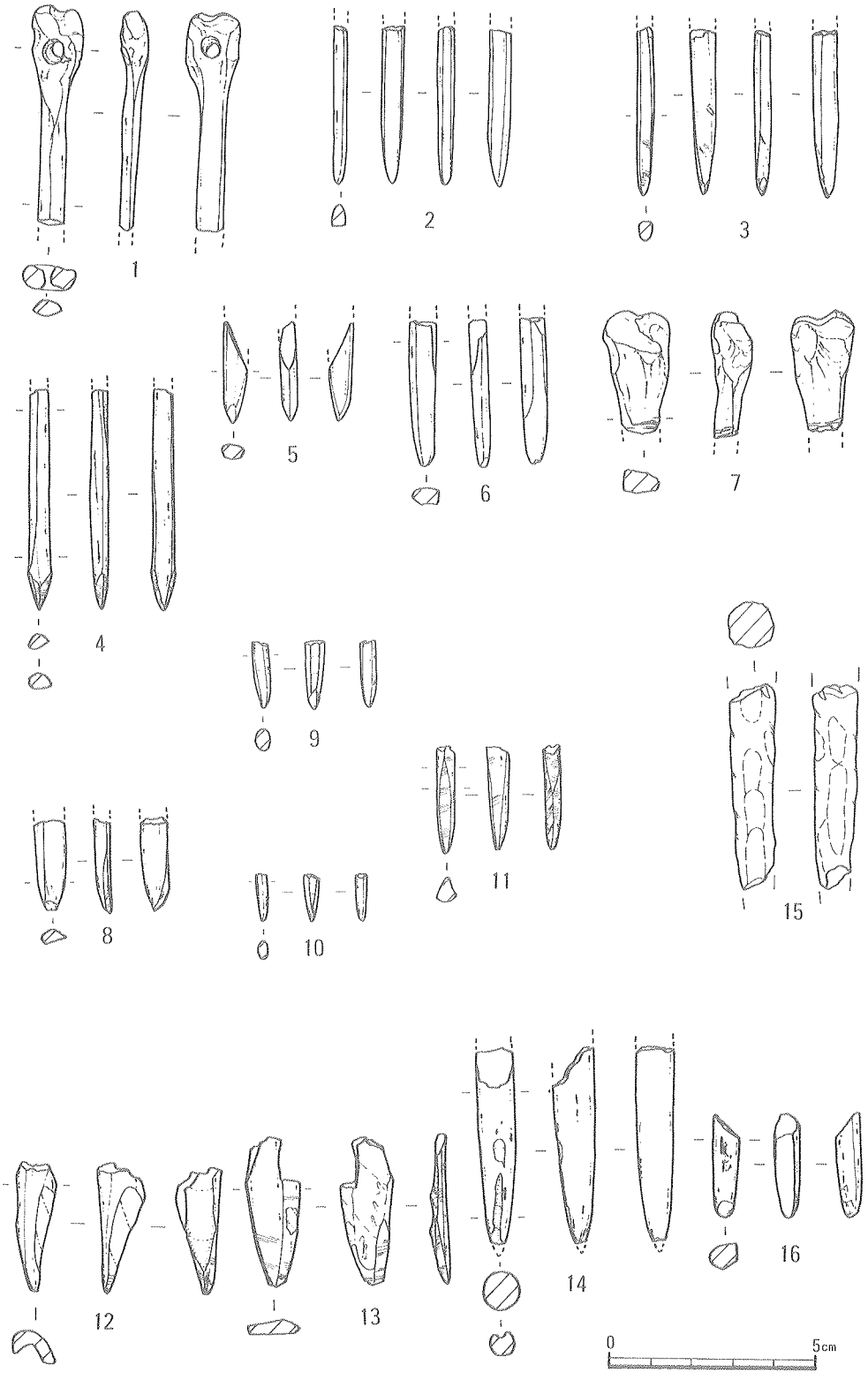


図 156　骨針、骨錐

③. ヤス状刺突具（図157、図版173）

本品は金子氏の「[註1]両端が光かがる棒状の形態を示し、刺突具と着柄部よりなる。……」の概念に酷似するもので「ヤス状刺突具」の名称を与えた。本貝塚ではａ、トリ骨　ｂ、エイ尾棘、ｃ、クジラ、ｄ、イノシシを素材とした４種がみられる。

- トリ骨（図157、図版173）

鳥の長管骨を半截し、ヘラ状に加工したもので先端部－１点、軸部－11点の計12点が得られた。地区別には、21地区ハ－11点、22地区イ－１点で21地区ハに集中する。また同図22、23は、他と異なり、断面は偏平の長方形を呈し、他の用途を想起させるが、全形がなく形状の類似するこの項に含めた。資料の追加をまって、分類を必要とする資料である。また、[註2]シヌグ堂遺跡、[註3]地荒原貝塚で「ヘラ状製品－トリ」としたものもここで分類される。

表51　ヤス状刺突具（トリ）出土一覧　　単位：㎜・ｇ　　破損：☆　　計測不可 —:

図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 層	素材	残存	法量 長	法量 幅	法量 厚	法量 重さ	加工状況
17	21－ハ	E－94	Ⅶ$_5$	トリ	先端部	☆41.7	8.0	2.8	0.6	先端に刃こぼれのための剥離、研磨調整は切断面で横位、外面で縦位に顕著に認められる。
18	21－ハ	E－94	Ⅶ下	〃	軸部	☆58.3	9.7	3.6	1.7	上記と同一個体、研磨は上記と同様顕著にみられる。
19	21－ハ	C－93	Ⅶb	〃	〃	☆49.0	8.2	2.0	0.7	前記２点よりは薄手、外面の研磨は顕著で稜線を作る。下端で横位に２条の溝状痕。
22	21－イ	3　号	Ⅱ	？	〃	☆15.7	10.5	2.7	0.6	No.23と同様板状に加工、裏面に海綿組織を残す。軸肩部に近い。全面研磨。
23	21－ハ	E－93	Ⅵb	イノシシ肢骨	〃	☆44.0	11.0	2.9	1.1	No.22と同様板状に加工、断面は偏平の長方形、横位に調整痕
A	21－ハ	F－94	Ⅶb	トリ	〃	☆31.5	5.2	－	0.3	No.17、18と同一個体？研磨調整、素材等酷似
B	21－ハ	F－94	〃	〃	〃	☆19.3	4.8	－	0.3	
C	21－ハ	－	〃	〃	〃	☆36.0	8.4	4.0	0.4	前記２点に比して薄手、研磨はていねいで、切断面は研磨によって丸味をだす。
D	21－ハ	－	〃	〃	〃	☆18.6	7.7	3.7	0.2	
E	21－ハ	E－96	Ⅶ$_0$	〃	〃	☆26.7	6.7	－	0.3	半截による切断面は研磨によって丸味をだす。前記より偏平である。
F	21－ハ	F－94	Ⅵa	〃	〃	☆17.7	7.0	－	0.3	
G	21－ハ	E－94	Ⅴa	〃	〃	☆11.4	6.6	2.7	0.2	火を受けたためか黒褐色、切断面は研磨により丸味を出す。

注　A～Gは実測未掲載

- エイ（図157、図版173）

図157－20、21、24はエイの尾棘を加工したものである。いずれも破損品で20は金子氏の分類のＣタイプ、21はｂタイプに属するものと考えられる。ｂタイプの出土は沖縄県内では[註4]与那国トウグル浜遺跡、[註5]具志堅貝塚で本貝塚のものが最古の資料となる。

表52　ヤス状刺突具（エイ）出土一覧　　単位：㎜・ｇ　☆→破損

図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 層	素材	残存	法量 長	法量 幅	法量 厚	法量 重量	加工状況
20	21－ハ	F－93	Ⅳ	エイ尾棘	基部	☆19.0	9.0	－	0.8	柄部にあたる部分で、柄部と刃部の境に横位に沈線が認められる。棘を削り、柄とする。灰褐色を呈する。
21	21－ハ	D－95	Ⅵb	〃	先端	☆20.5	7.2	2.4	0.2	刃先を欠損、火を受けたため灰褐色を呈する。研磨調整は外面で縦位にみられる。
24	21－ハ	C－96	Ⅶb	〃	基部	☆19.5	6.5	2.6	0.4	基部と考えられる。片側面に研磨が認められる。

・ クジラ（図157、図版173）

クジラの骨を棒状に加工し、さらに両端を削り、尖らしたものである。完形－3点、先端部－7点、軸部－3点の計13点得られた。すべて21地区ハの出土である。本品は、形状によって⓪基部にエグリを施こすもの⓫基部にエグリのないもの、⓬柄をもつもの、⓭その他不明に分けることができる。このような製品は本貝塚がはじめてである。形状は異なるが、[註6]宜野湾市の新城下原遺跡出土の「離頭状骨製品」に関連する考える。

表53　ヤス状刺突具（クジラ）出土一覧　　単位：㎜・g　☆：破損　－：計測不可

図番号	出土地			素材	残存	法量			タイプ	加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	重量		
26	21－ハ	C－95	Ⅵ	クジラ	完形	66.9	8.5 × 7.7	2.8	a	棒状に加工、両端をとがらす。片端22㎜の長さ削る。調整はていねい。
27	21－ハ	E－95	Ⅵ	〃	完形	74.6	8.7 × 6.6	2.8	b	調整はていねい。部分的削り痕がみられる。
28	21－ハ	E－95	Ⅵ	〃	尖形	48.2	7.2 × －	1.5	b	先端は7㎜程の削りが2カ所にある。
29	21－ハ	E－96	Ⅵ	〃	完形	75.5	8.0 × －	3.6	d	先端は丸味をもつ。他に比して細い。
30	21－ハ	F－95	Ⅶ	〃	尖	☆13.7	7.8 × 6.7	1.1	d	研磨痕縦位、骨質は密である。
31	21－ハ	E－94	Ⅶ	〃	〃	☆26.4	6.2 × 5.5	0.6	d	先端に刃こぼれ有
32	21－ハ	E－94	Ⅶ	〃	〃	☆17.6	5.3 × －	0.4	d	先端は丸味をもつ軸頂？ 研磨は顕著である。
33	21－ハ	D－95	Ⅵ	〃	〃	☆29.9	8.1 × 7.3	1.2	c	軸頂側に抉り、柄の可能性有、先端は剥離する。縦位に研磨痕、中央に傷痕。
34	21－ハ	D－95	Ⅶ	〃	〃	☆17.6	6.7 × 7.5	0.6	c	先端は刃こぼれ？

・ イノシシ（図157、図版173）

同図25は、イノシシの腓骨の遠位端、近位端を尖がらしたものである。21地区イN－96第Ⅱ層下部から出土した。完形品で最大長85.3㎜、幅7.0㎜、厚さ4,0㎜、重さ2.7gを計る。研磨調整は先端部で横位、軸部で縦位に認められる。骨針と同様、イノシシの腓骨を用いているため、破損すると区別がつきにくく、明瞭でないものは前述に含めたため、この製品は今後数が増える可能性がある。類例は、[註7]阿良第二貝塚に出土している。

④．ヘラ状製品（図157、図版173）

図157－35、36はクジラの骨を半截し、骨髄を除去し、ヘラ状に加工したものである。2点得られたが、いずれも21地区ハの出土である。幅は1.1cmと本貝塚より小さいが、[註8]長崎県対馬の志多留貝塚の「骨製箆」に類似する。利器として用いたものであろう。

表54　クジラヘラ状製品　　単位：㎜・g　☆：破損

図番号	出土地			素材	残存	法量			加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	重さ	
35	21－ハ	F－93 E－95	Ⅶ	クジラ	軸頂部	☆72.0	16.1	3.9	研磨面は外面と切断面に顕著に見られる。軸頂の平面形は丸みを帯びる。
36	21－ハ	E－94	Ⅶ	クジラ	軸　部	☆76.0	18.4	5.7	上記と同一個体？

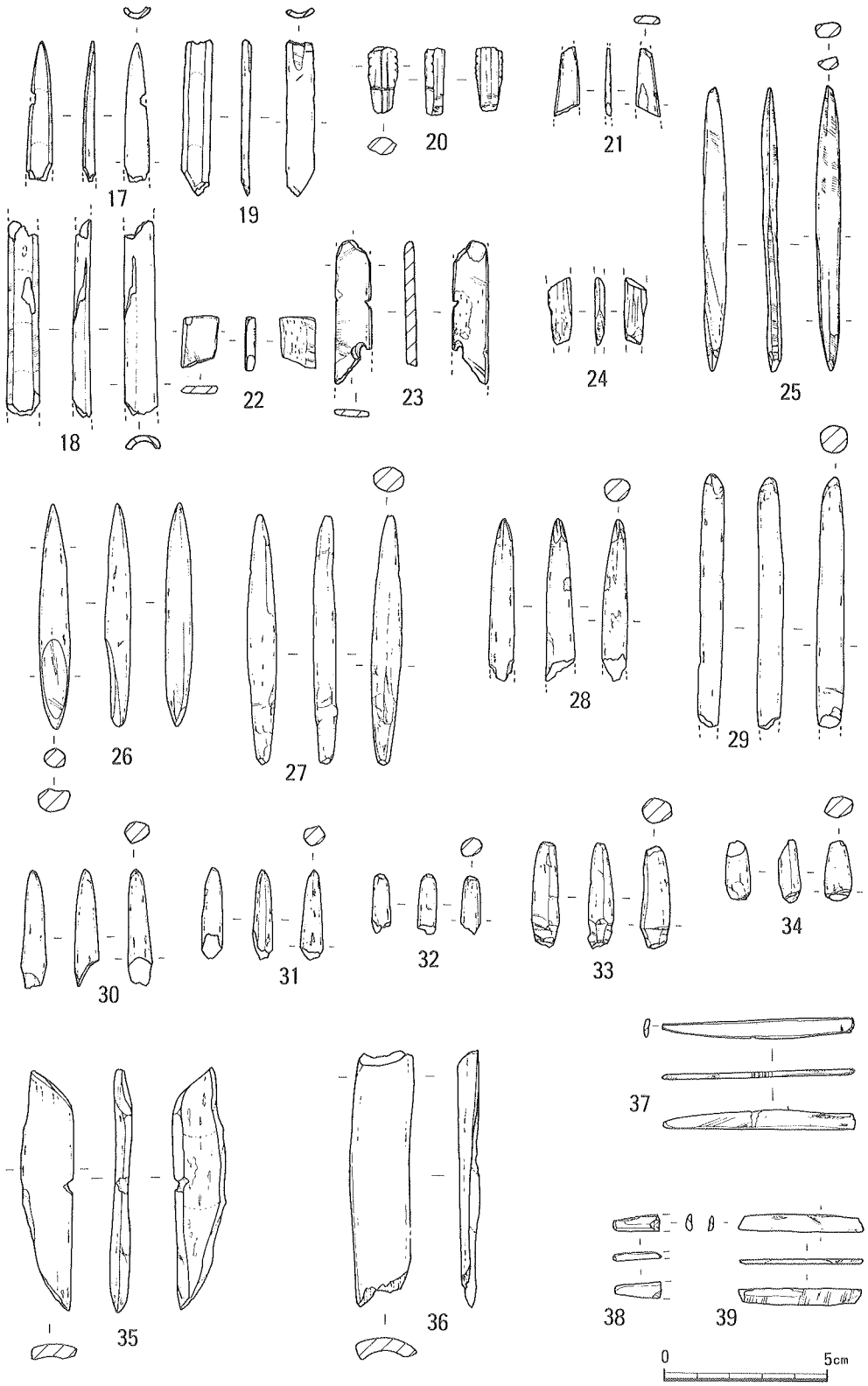


図 157　ヤス状刺突具、ヘラ状製品、ナイフ状製品

⑤．ナイフ形製品（図157、図版173）

トリの長管骨を幅約５㎜、長さ5.8㎜の棒状に加工し、片側を調整して平面形をナイフ形に型どったものである。刃は鈍く、ナイフとして用いたかどうか疑問も残るが、形状から名づけた。３点得られたが、完形は図157－37の１点のみである。報告例は現在のところない。

表55　ナイフ形製品一覧

図番号	出土地			素材	残存	法量				加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	厚さ	重量	
37	21－ハ	E－94	Ⅶ	トリ	完形	58.0	4.8	1.6	0.8	平に加工し、部分的に研磨が認められる。研磨は周縁が横位にある。
38	21－ハ	E－94	Ⅶ	トリ	先端	☆19.0	4.8	1.6	0.2	上記の先端で刃先は方形を呈する。全面研磨
39	21－イ	O－96	Ⅱ上	トリ	軸部	☆37.3	5.1	1.6	0.5	平にするため研磨が顕著にみられる。

２．装飾品

骨輪－13点、垂飾品－７点、サメ脊椎有孔製品－10点、イノシシの牙製品－18点、かんざし－３点、札状製品－８点、棒状製品－８点の計67点が得られた。出土量は骨製品の45.2%を示め、種類も豊富である。

地区別にみると(表48)22地区イ－４点、21地区イ－２点、21地区12－２点、21地区ハ－59点と崖下地区に集中する。

①．骨輪（図159、図版174）

11点得られた。環状のものと半環状のものがあり、素材は前者がクジラ骨、後者はジュゴンを主に用いている。これらの形状は、素材の制約によって生じるものと考える。

図158は半環状のものを組み合わせたものである。（48、49）

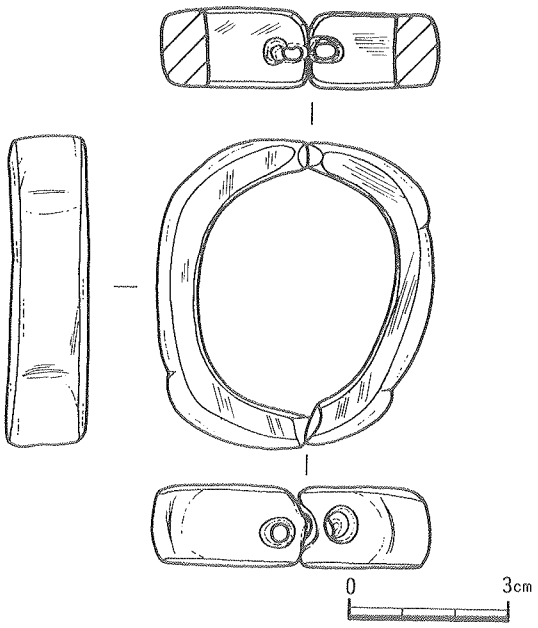


図158　骨輪結合図

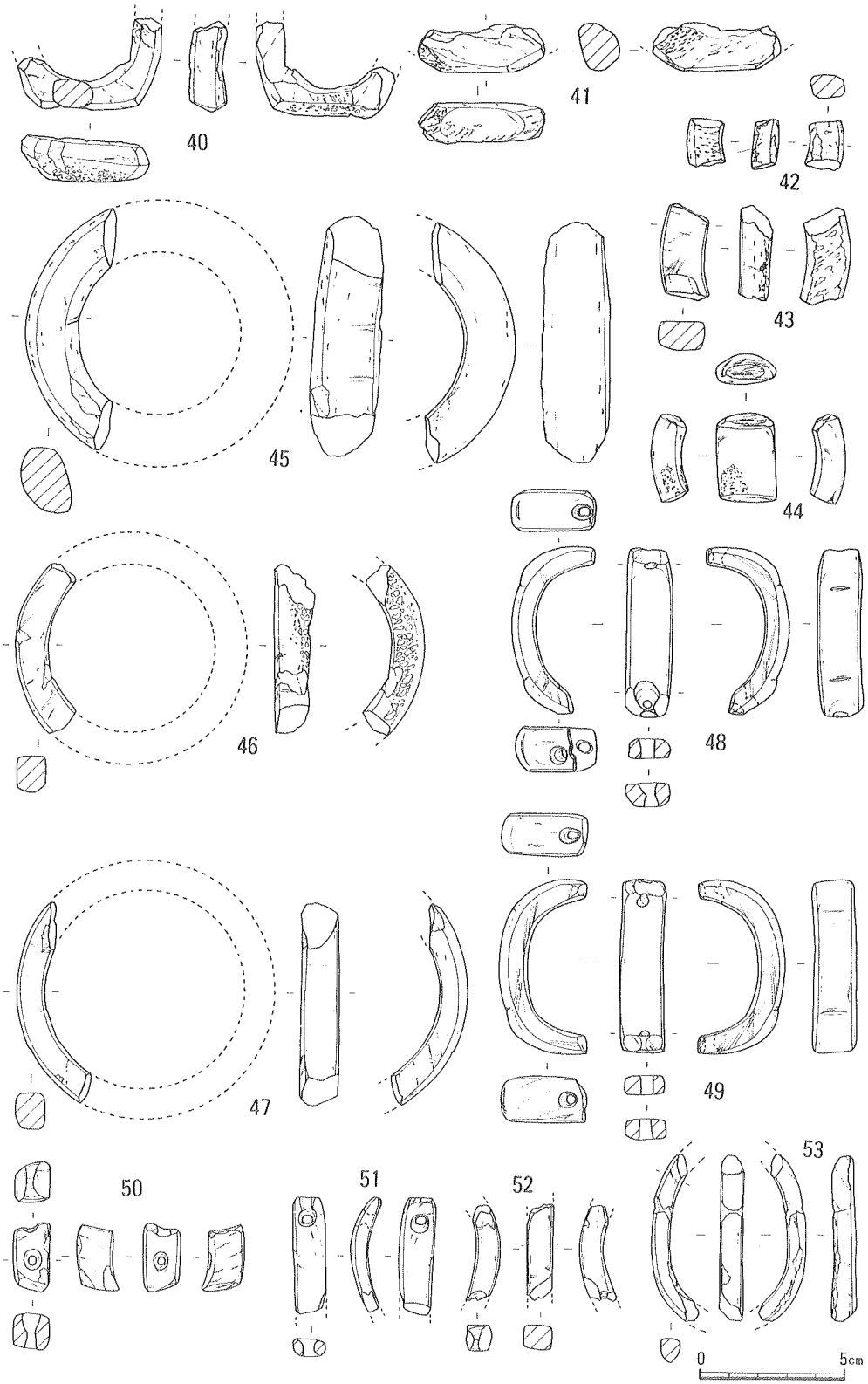


図 159　骨輪

表56　骨輪出土一覧

無孔：×　単位：㎜・g

図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 層	素材	残存	法量 長	法量 内径	法量 幅	法量 厚さ	法量 重量	断面	孔径	加工状況
41	21－ハ	－	Ⅵ	クジラ		☆42.7	…	15.9	3.0	7.1	楕円	×	№40と形状酷似、荒削調整
50	21－ハ	E－94	Ⅶ	〃		18.7	－	11.8	12.5	3.0	力形	6.4×3.1	両面穿孔、全面研磨、端に孔のあと研磨し再利用
43	21－ハ	F－94	Ⅵ	〃	〃	3.0	－	15.5	10.3	5.7	長方形	×	裏面、海綿質かある。研磨ていねい。
44	21－ハ	F－95	〃	ジュゴン	〃	☆28.8	…	10.5	19.8	5.1	楕円	×	1端に切断痕、骨質からジュゴンかも
45	21－ハ	E－93	Ⅶ	クジラ	破損	9.0	55.0	16.8	20.7	20.7	〃	×	全面研磨、海綿組織表－荒、ウラ－細
46	21－ハ	A－94	〃	〃？	〃	56.0	57.0	11.6	12.1	6.1	方形	×	海綿質が露呈
47	21－ハ	D－94	…	〃	〃	－	…	8.4	12.7	8.7	方形	×	全面研磨、骨の密である。№50と素材酷似
40	21－ハ	－94	Ⅶ	〃	〃	13.7	－	10.5	11.8	6.8	楕円	×	表－細、ウラ－海綿質、荒削調整
42	21－ロ	アゼ	…	クジラ？	〃	☆15.1	…	11.1	8.2	1.6	長方形	－	裏面海綿質、研磨はていねい
48	21－ハ	D－95	Ⅵ	ジュゴン	完形	56.1	42.6	7.8	14.6	10.6	方形	3.1、4.5	外縁2か所に刻み、複合骨輪全面研磨
49	21－ハ	D－96	〃	ジュゴン	〃	56.4	46.4	8.3	19.0	12.4	〃	3.8、4.2	1端は孔のあとあわせて加工　〃
51	21－ハ	E－95	〃	〃	破損	☆36.6	…	5.4	10.8	2.6	〃	5.5	全面研磨　薄手
52	21－ハ	…	…	〃	〃	☆31.5	…	8.2	9.3	2.4	〃	〃	糸従位に研磨痕　薄手
53	21－ハ	F－63 E－94	Ⅶ	〃	〃	☆54.6	…	5.6	7.6	4.7	〃	×	全体形は楕円状に推定される。石化し重石の可能性もある。

②．有孔製品（図160、図版176）

サメ歯、イルカ、イノシシ切歯に小孔を有するもので、垂飾品の一種と想定される。サメ歯－4点、イルカ－2点、イノシシ切歯－1点の計7点の出土である。地区別には22地区－イ－1点、21地区イ－1点、21地区ロ－1点、21地区ハ－4点の出土である。

・サメ歯

サメの歯の基部に穿孔するもので、種類はメジロザメ科（Family Carcharhimidae）であるがそのうち2点はイタチザメである。いずれも三島氏分類のbタイプに属する。また、孔は1個と2個、穿孔したものがあり、前者が3点、後者が1点である。報告例は室川貝塚[註9]、地荒原貝塚[註3]等にみられる。

表57　サメ歯有孔製品出土一覧

単位：㎜・g

図番号	出土地 地区	出土地 グリッド	出土地 層	残存	タイプ	法量 長	法量 幅	法量	法量 厚さ	法量 重さ	孔	加工状況
72	21－ロ	あ区	Ⅳ	先端欠損	b	19.2	16.5	16.6	4.8	0.6	1.9	両面穿孔鋸歯は明瞭に残る。其部は平になるように整形。1孔。
73	21－イ	－	Ⅱ	完形	a	13.1	12.7	14.2	2.2	0.2	1.6	両面穿孔、小型の歯である。其部と歯冠部の境を研磨する。1孔。
74	21－ハ	E－94	Ⅵ	破損	a	12.0	－	－	2.5	0.1	1.6	両面穿孔、歯冠部は破損する。1孔。
75	21－ハ	あ－94	Ⅵ	完形	a	26.2	23.8	28.7	5.7	1.8	2.2 2.4	両面穿孔、其部の片側をカットする。2孔。

註　タイプは三島格（1977）による。

・イルカ、イノシシ

イルカ及びイノシシの切歯の歯冠基部に穿孔するもので、前者が2点、後者が1点得られた。前者と同様、垂飾品と考えられる。両者とも県内でははじめての出土である。イルカの報告は

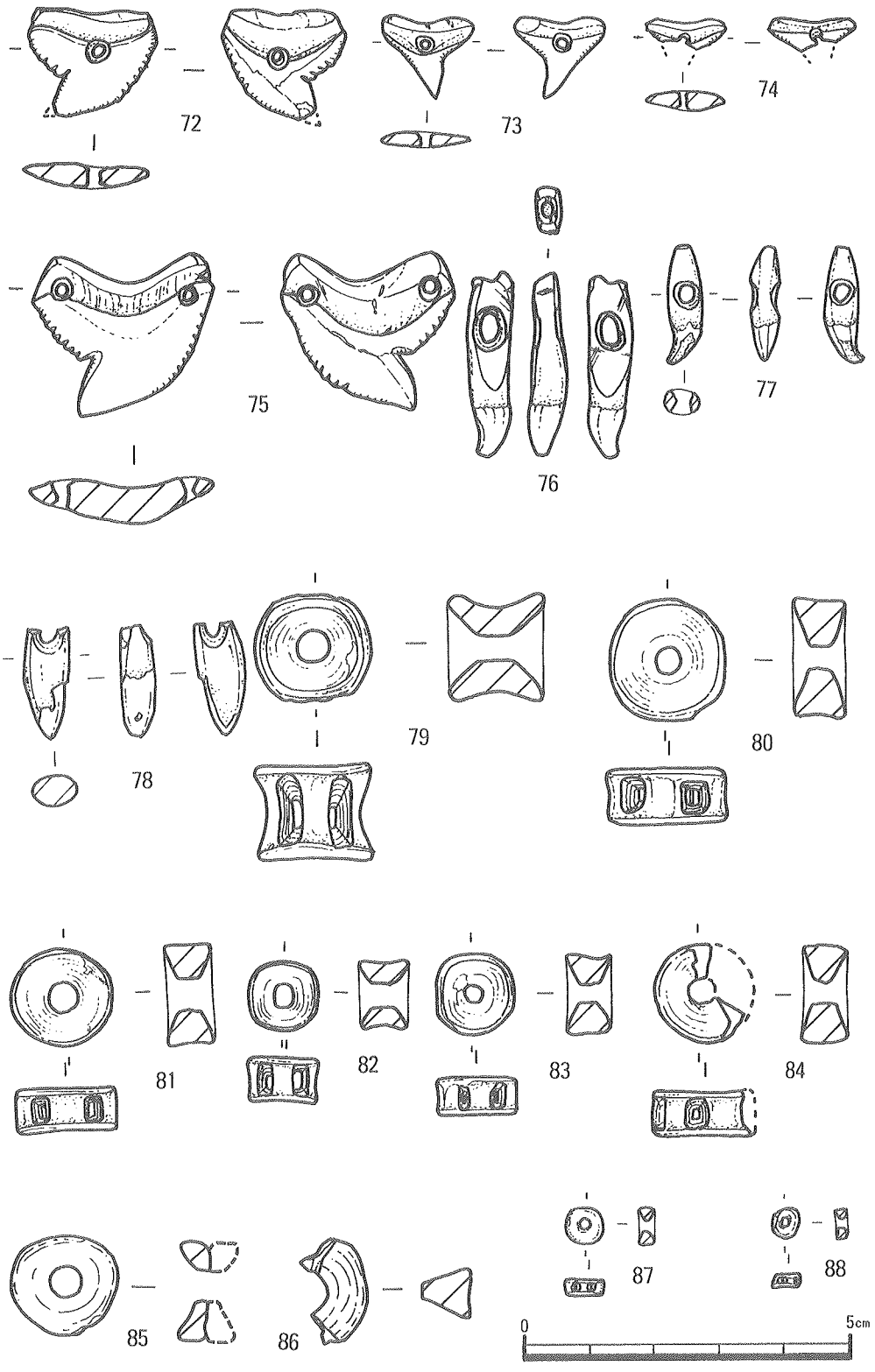


図 160　垂飾品(サメ、イルカ、イノシシ)、サメ脊椎

全国的にみても少ないようである。

表58　イルカ、イノシシ有孔製品出土一覧

単位：㎜・g

図番号	出土地			素材	残存	法量				孔	加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	厚さ	重さ		
76	21－ハ	A－94	Ⅵ	バントウイルカ	完形	27.7	7.2	5.5	0.9	4.5×2.8	歯根部及び歯冠頂部を研磨、両面穿孔。
77	22－イ	3	Ⅱ	〃	完形	17.7	5.2	4.4	0.3	2.8×2.8	歯冠部のエナメル質を1部剥離する。両面穿孔。
78	21－ハ	E－95	Ⅵ	イノシシL13	破損	16.3	6.2	4.6	0.5	不明	歯冠部はかなり研磨される。エナメル質はわずかに残る。

③．イノシシ牙加工品（図161、図版175）

イノシシの犬歯を加工したもので、18点出土した。加工のしかたが異なり、それによって下記のように分類した。

加工の仕方	シヌグ堂遺跡	金子氏分類（註1）
(1)　基部と先端に穿孔するもの（オス、メス）	ハタイプ	B　(1)　①
(2)　部位に半截し、ⓐエナメル質を利用したもの	イタイプ	B　(1)　②
ⓑ下面を利用したもの	なし	
(3)内外縁を研磨調整したものⓐ内縁調整	ロタイプ	B　(1)　②
ⓑ外縁　〃	〃	
(4)　全面研磨したもの	なし	

加工別の出土状況を表59にまとめた。これによるとオスとメスでは、他の遺跡と同様、オスが多い。加工別には(1)のタイプか全体の55.6%で最も多く、次は(2)のタイプで22.2%である。用途は大まかには、装飾品として含まれるが、(1)のタイプがその中でも、オス（下顎犬歯）は札状に、オス（上顎犬歯）はイルカやイノシシの切歯のように垂飾品として用いたものであろう。数種類の加工の仕方があるが、金子[註1]氏によると、(1)のタイプは沖縄に多い加工の仕方で、他のタイプは少ないとのことである。図161の70のようにていねいに加工した例は全国的に少なく、大阪[註10]府に類似の資料（縄文晩期～弥生前期）上顎がみられるが、距離的に遠く、関連性は薄い、どちらともイノシシの犬歯という素材の中で加工の仕方に制約があり、その中では最も完成度の高い製品といえる。

表59　イノシシ加工別出土状況

部位＼分類		(1)	(2)		(3)		(4)	合計
			a	b	a	b		
オス下顎	L	3	2	1				6
	R	4	1		1	2	1	9
	小計	7	3	1	1	2	1	15
オス上顎	L	1						1
	R	1						1
	不	1						1
	小計	3						3
合計		10	3	1	1	2	1	18

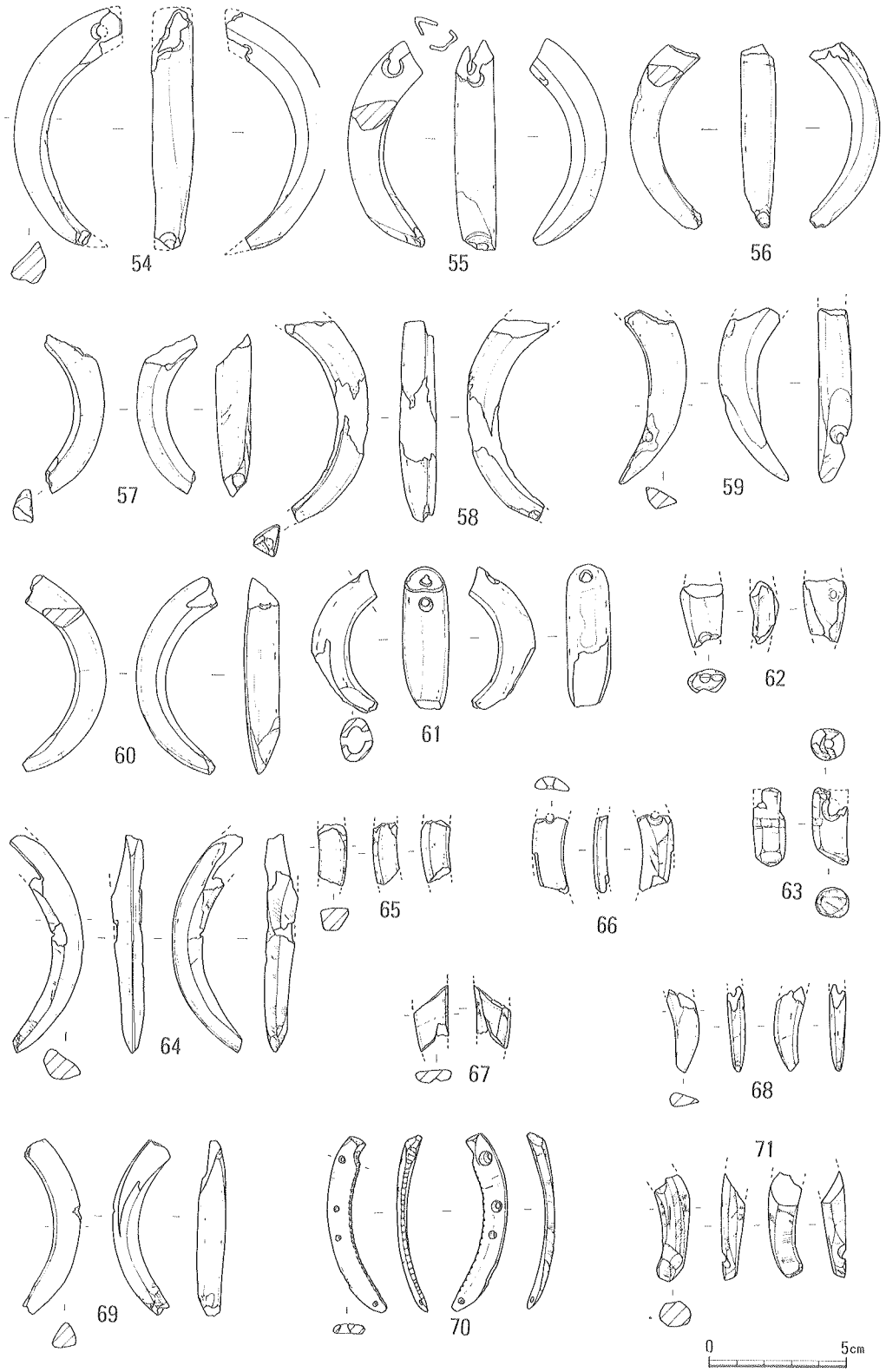


図 161　イノシシ牙加工品

表60　イノシシ牙加工品出土一覧　　単位：㎜・g　　◎→孔有　×→無孔　不→孔不明

図番号	出土地			素材	残存	法量			孔		分類	加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	重さ	其部	先端		
54	21－ハ	D－95	Ⅵ	イノシシL$\underline{\underline{C}}$る	ほぼ完形	85.5	15.3	11.5	3.8	◎	①	内・外縁の先端を削る。研磨調整顕著にみとめられる。
55	21－ハ	E－96	Ⅵ	〃	〃	73.5	15.0	11.9	4.8	◎	①	上記と酷似、先端基部の外縁を削る。先端に穿孔のための溝状痕。
56	21－ハ	A－94	Ⅵ	〃	〃	62.0	8.4	6.2	不	◎	①	先端は丸味をもたせる。エナメル質以外の面を削る。
57	21－ハ	E－94	Ⅶ	イノシシR$\underline{\underline{C}}$る	完形にちかい	☆ 56.9	10.5	5.2	不	◎	①	犬歯の内縁を削る。
58	21－ハ	E－94	Ⅶ	イノシシR$\underline{\underline{C}}$る	完形にちかい	☆ 70.0	12.3	8.9	不	◎	①	中央部風化、外縁の両端を調整する。
59	21－ハ	C－93	Ⅶ	イノシシR$\underline{\underline{C}}$る	其部破損	☆ 62.4	14.0	8.5	不	◎	①	成獣を利用、エナメル質面の内縁に研磨痕。
60	21－ハ	E－94	Ⅵ	イノシシR$\underline{\underline{C}}$る		☆ 70.0	11.7	6.6	3.7	×	①	幼獣
61	21－ハ	E－94	Ⅵ	イノシシL$\underline{C}$る	ほぼ完形	49.9	13.4	8.8	4.4	◎	①	基部、横位に研磨痕、両面穿孔。エナメル質面研磨する。
62	21－ハ	D－95	Ⅵ	イノシシR$\underline{C}$る	破損	☆ 22.2	15.2	2.0	不	◎	①	上記と同様
63	21－ハ	E－94	Ⅵ	イノシシ $\underline{C}$る	ほぼ完形	22.0	11.9	2.7	◎	×	①	全面研磨、孔は3面から穿孔
64	21－ハ	F－93	Ⅵ	イノシシR$\underline{\underline{C}}$る	ほぼ完形	77.8	13.6	5.3	不	不	③	内縁を大きく削り、2面から研磨調整（横位）、先端も研磨。
65	21－ハ	B－93	Ⅵ	イノシシR$\underline{\underline{C}}$る	破損	22.0	9.1	1.0	不	不	③	内・外縁から削る。断面三角形
66	21－ハ	D－94	Ⅶ	イノシシL$\underline{\underline{C}}$る	破損	25.0	4.0	1.5	3.3	不	②	両面穿孔、エナメル質のみを板状に加工、研磨は顕著。
67	21－ハ	E－94	Ⅶ	イノシシL$\underline{\underline{C}}$る	破損		4.1	0.8	不	不	②	半截しエナメル面のみ、切断面は横位に研磨痕。
68	21－ハ	オ－92	Ⅴ	イノシシL$\underline{\underline{C}}$る	破損	19.0	4.5	0.9	不	×	②	外縁のみを用いる。ほぼ全面研磨、先端は丸味をもつ。
69	21－ハ	D－94	Ⅶ	イノシシR$\underline{\underline{C}}$る	破損	62.5	8.1	4.1	不	×	③	基部に切断痕
70	21－ハ	D－95	Ⅵ	イノシシR$\underline{\underline{C}}$る	完形	64.0	4.3	2.4	○	○	②	エナメル面を板状に加工、内縁に鋸歯を施こす。基部に抉りの痕、4つの小孔（基～2.8、2.5、2.3 1.1～先）すべて内側から穿孔、全面研磨、2次加工
71	21－ハ	D－95	Ⅵ	イノシシR$\underline{\underline{C}}$る	破損	☆ 37.4	10.9	2.8	不	○	④	キバの先端を全面研磨、研磨痕顕著に認められる。先端に孔のあと、2次加工？

④. サメ脊椎有孔製品（図160、図版176）

サメの脊椎の臼状凹部に穿孔するもので、10点得られた。すべて21地区ハの出土で、層別にはⅥ層－61点、Ⅶ層－４点でわずかにⅥ層が多い。大きさは、貝製品の「貝製小玉」と同様、小型と中型とグルーピングできる。小型－２点、中型－５点である。

付記：地荒原遺跡、1986.３の報告で「側壁に加工を加えるタイプ」としたのは金子氏により、サメの種類が異なるもので自然面である。という御教示を得たので提正する。

表61　サメ脊椎有孔製品出土一覧　　単位：㎜・g　計測不可：－

図番号	出土地			残存	法量			孔	加工状況
	地区	グリッド	層		径	厚さ	重さ		
79	21－ハ	E－94	Ⅶ	完形	16.9	14.5	1.4	5.3×5.2	孔のみ加工、両面穿孔
80	21－ハ	C－95	Ⅵ	完形	17.8	8.2	1.3	4.3×4.3	〃　〃
81	21－ハ	D－95	Ⅵ	完形	14.6	7.0	0.8	4.6×5.0	〃　〃　方形
82	21－ハ	－	Ⅵ	完形	10.3	6.7	0.4	4.6×4.0	〃　〃　〃
83	21－ハ	－	Ⅵ	完形	11.8	6.9	0.5	3.1×－	〃　〃
84	21－ハ	い－93	Ⅵ	破損	－	6.7	0.6	4.3×－	〃　〃
85	21－ハ	D－95	Ⅵ	半欠	15.8	－	0.5	5.1×4.8	〃　〃
86	21－ハ	C－94	Ⅶ	破損	－	6.9	0.5	－×－	〃　〃
87	21－ハ	E－94	Ⅶ	完形	5.4	2.6	0.1	1.5×－	〃　〃　小型
88	21－ハ	E－94	Ⅶ	完形	4.3	1.8	0.1	1.4×－	〃　〃　〃

⑤. 骨製かんざし（図162、図版177）

大型海獣（クジラ）の骨を棒状に加工し、上部に「冠部」、下部に「身部」を構成するものを「かんざし」としてここに記述する。従来のジュゴン製骨錐と異なり、全体的に偏平で、身部と冠部の幅が明瞭に分かれ、材質も柔（やわ）らかい感を受け、クジラ骨？を用いていることからここまとめた。３点得られた。そのうち図162－89はほぼ完形品である。報告例は[註11]大山貝塚、[註12]熱田原貝塚に報告されている。また、[註2]シヌグ堂遺跡、[註3]地荒原貝塚に冠部が大型化したものと思われる資料がある。

表62　骨製かんざし出土一覧　　単位：㎜・g　破損：☆

図番号	出土地			素材	残存	法量				孔	加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	厚さ	重さ		
89	21－ハ	F－94	Ⅶ	クジラ？	ほぼ完形	☆151.2	16.8	7.3	11.1	4.0	冠部は長方形を呈し、ほぼ中央に直径4.0㎜の孔を穿孔する。孔を中心「×」状の沈線を施し、側面の中央部は突出する。横断面は基部で楕円形、加飾部長方形。
90	22－イ	2号	Ⅱ	クジラ？	未製品	☆122.7	20.2	8.2 7.2	15.5	7.0 8.2	冠部は未完成で20.2×5.3の長方形を呈する。ほぼ中央に細沈線を施こし、その下方に7.0㎜の孔を両面から穿孔する。研磨はていねいであるが、裏面に海綿組織を残す。前者に比して幅が広く，未完成と考える。
91	21－ハ	E－94	Ⅶ	ジュゴン？	冠部のみ	☆26.0	20.5 17.4 17.4	10.9	5.9	4.4	冠部のみで、№89のように側面に突起がみられる。そのほぼ中央に両面から穿孔する。突起部の下に溝状痕があり、そこを境に身部につながると推定される。

⑥. 札状製品（図162、図版）

ジュゴン、及びクジラその他の骨を札状に加工したものであるが、今まで報告例がないのでとりあえずここにまとめた。

・ ジュゴン

ジュゴンの肋骨を用いたもので、ⓐ穿孔したもの、ⓑ無孔のものがある。用途については、前者は紐を調整するために用いるものか、それ以外の用途をもつものかは不明である。後者は前者の未製品がそれ以外の用途をもつかは不明である。報告例は現在のところみあたらない。図162－99以外はすべて21地区ハの出土である。

表63　ジュゴン札状製品出土一覧

単位：㎜・g

図番号	出土地			素材	残存	法量				孔	加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	厚さ	重さ	( )外径	
95	21－ハ	C－96	Ⅵ	ジュゴン	完形	39.7	20.0	13.5	13.9	3.8（6.0） 4.0（6.0）	肋骨を台形状に形どる。長軸方向に両面に凹線を施こし、その中に孔を2つ穿孔する。全面研磨、断面は長方形。
96	21－ハ	E－94	Ⅵ	〃	〃	41.5	18.9 11.5	11.0	8.1	2.5（5.8） 2.5（6.2）	肋骨を略長方形に形どり、両端に2つの孔を両面から穿孔、ほぼ全面に研磨するが、側面に肋骨の自然面を残す。横断面は楕円形を呈する。
97	22－イ	3号	Ⅱ	〃	破損	－	12.0	11.3	2.6	6.9	No.96と同形と思われる。火を受けたためか黒褐色を呈する。
98	21－ハ	う－93	Ⅵ	〃	完形	25.5	20.9	10.9	4.0	無	二等辺三角形状に形どり、研磨を施こす。　裏面に海綿組織がみられる。
99	21－イ	O－96	Ⅰ	〃	完形	28.2	25.4	14.3	10.3	無	上記と同じ素材から加工？　台形を呈し、端は削り丸味を出す。全面研磨。

・ その他（図162、図版178）

3点まで得られた。前者に比べて扁平で、形も方形、勾玉形がある。用途についてはペンダント的要素が考えられる。以下、表64に観察した。

表64　札状製品

単位：㎜・g

図番号	出土地			素材	残存	法量				孔径	加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	厚さ	重さ		
92	22－イ	2号	Ⅲ	カメ	破損	18.8	15.6	2.5	0.8	3.8	板状に加工し、2つの孔を施こす。形状から、平面形は台形になると思われる。裏面は自然のままである。
93	21－ハ	E－94	Ⅵ	イノシシ？	半欠	27.6	13.0 9.0	2.5 4.9	0.8	2.5 2.1	No.94とほぼ同形と考える孔の跡。裏面に幅1.3㎜の溝状が2条施される。
94	21－ハ	F－94	Ⅶ	イノシシ	半欠	17.7	13.0	3.2 4.3	1.5	2.5 × 2.1	板状に加工、1端に穿孔する。研磨調整明瞭、平面形は、三カ月状になると思われる。図165－1石製品に類似。

⑦. 棒状加工品（図163・164、図版178・179）

ジュゴン及びシカを棒状に加工し、穿孔あるいは沈縁などの文様を施したもので、とりあえず装飾品の中に含めた。すべて21地区ハの出土である。

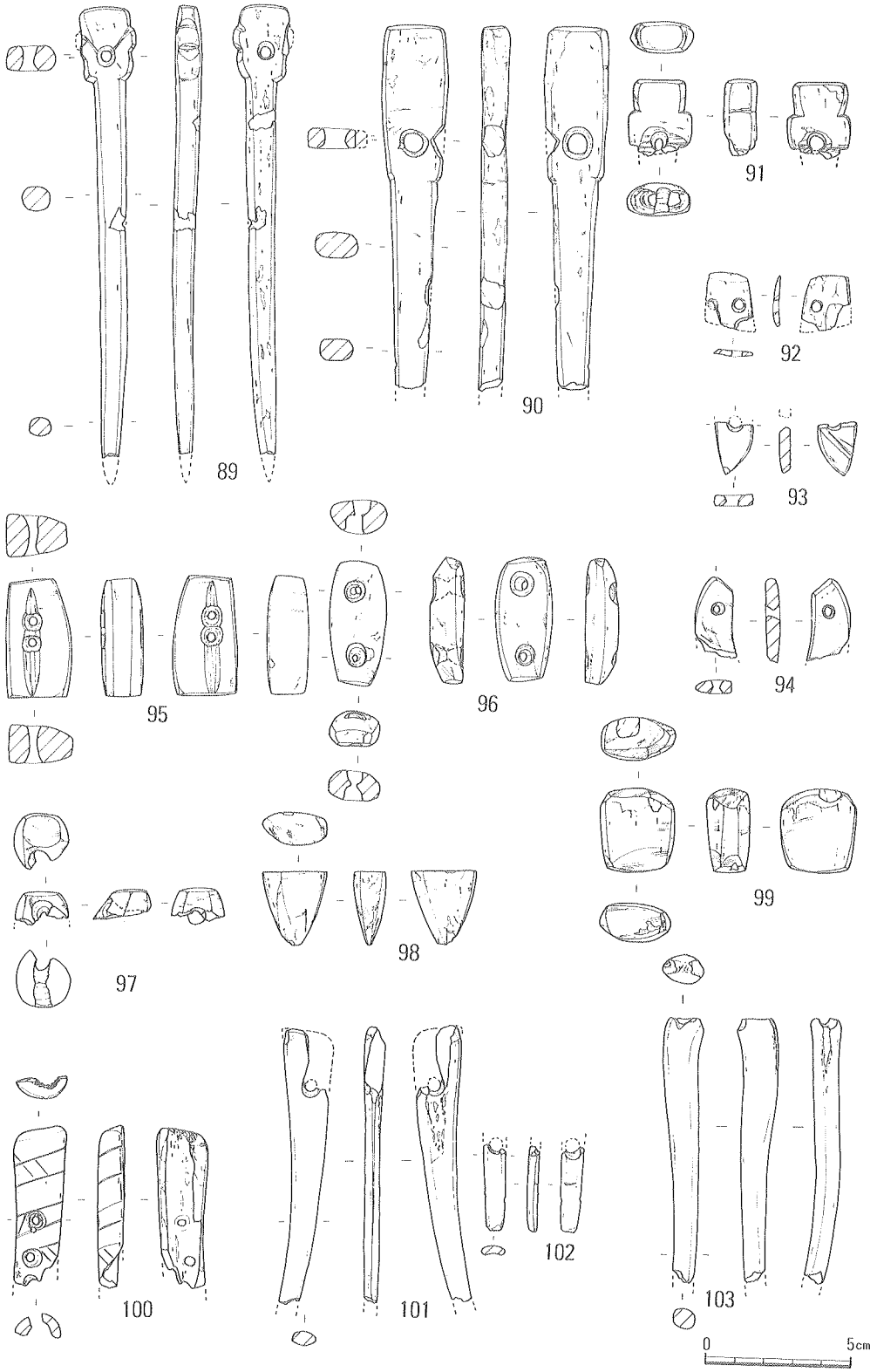


図 162　かんざし、ジュゴン製品、シカ製品

・シカ（図162、図版177）

シカの骨を加工したものは、沖縄先史時代では大山貝塚[註11]、アカジャンガー貝塚[註13]に例がある。当時、シカの生息した可能性は薄く、本貝塚のそれも、本島以外から持ちこまれたものと考える。用途についても、類例をまって、詳細に検討したい。

表65　シカ棒状加工品出土一覧

計測不可：－　単位：㎜・g

図番号	出土地			素材	残存	法量				孔径	加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	厚さ	重さ		
100	21－ハ	い－92	Ⅵ	シカ肢骨	先端欠損	52.8	17.0	7.0	40.0	3.0 3.5	長管骨を半截したもので、3つの孔を施こすが、1孔は欠損する。外面に2条を1組に斜位に沈線を施こす。軸頂は丸味を出す。裏面は海綿部を除去したあとがある。研磨はていねいである。
101	21－ハ	E－94	Ⅶ	シカ肢骨	器体のみ	91.8	15.5 7.4	6.0 4.0	4.0	4.3	上記と同様に加工、先端は除々に細くなり、裏面もていねいに加工する。軸頂近くに穿孔する。器形は上記と同様。
102	21－ハ	E－95	Ⅵ	シカ	先端近く	28.2	7.5 7.0	3.6	0.6	－	上記2点の先端部分と思われる。孔のあとがある。研磨はていねい。
103	21－ハ	A－94	Ⅵ	シカの角	器体	88.3	12.5 9.5	12.5 7.1	7.3	3.3	角を用いる。軸頂近くに穿孔のあと、裏面に海綿組織がみられる。火を受けたためか黒褐色、灰色を呈する。

・ジュゴン（図163、図版178）

ジュゴンの肋骨を棒状に加工したもので、一見「ジュゴン製骨錐」に類似するが、身部にさらに加工を加え、穿孔したり、又状にしたものである。類似資料が増えれば、用途についてもさらに明瞭になると考えられるが、とりあえずここにまとめた。

表66　ジュゴン棒状加工品出土一覧

計測不可：－　単位：㎜・g

図番号	出土地			残存	法量				加工状況
	地区	グリッド	層		長	幅	厚さ	重量	
104	21－ハ	D－94	Ⅶ	破損	79.0	20.0	12.3	12.6	軸頂は幅20.0㎜の長方形の冠部をなし、先端は、二又を呈する。冠部の中央に穿孔する。先端は溝状に研磨して切断したと思われる。研磨調整はていねいである。
105	21－ハ	E－95	Ⅵ	完形に近い	18.7	16.3	16.8	16.8	軸頂より10.0㎜のところに沈線を施こし冠部を作る。ほぼ中央に3面から穿孔し1つの孔にする。先端も中央と同様に穿孔するか、破損し不明。中央の孔は、正面7.8(8.2)、左側面4.6(7.5)、右側4.5(7.5)。（　）内は外径
106	21－ハ	D－95	Ⅶ	完形	54.9	17.2	16.8	11.3	肋骨の近位部近くを用いる。研磨痕が認められる。端部に切断痕。
107	21－ハ	F－94	Ⅶ	軸頂	－	－	9.4	0.8	ジュゴンの装飾品かかんざしの破片と思われる。小破片のため、ここに含めた。冠部に近い。穿孔のあとと、沈線文が認められる。

3．その他（図163、164　図版178、179）

前述の実用品、装飾品に含まれないものをこの項にまとめた。クジラ骨製品－12点、ジュゴン製品－6点、その他－7点の計25点ですべて21地区ハの出土である。

①．クジラ製品（図163、図版178）

クジラの骨を棒状、板状に加工したものである。棒状のものは一次加工の段階のものと考え

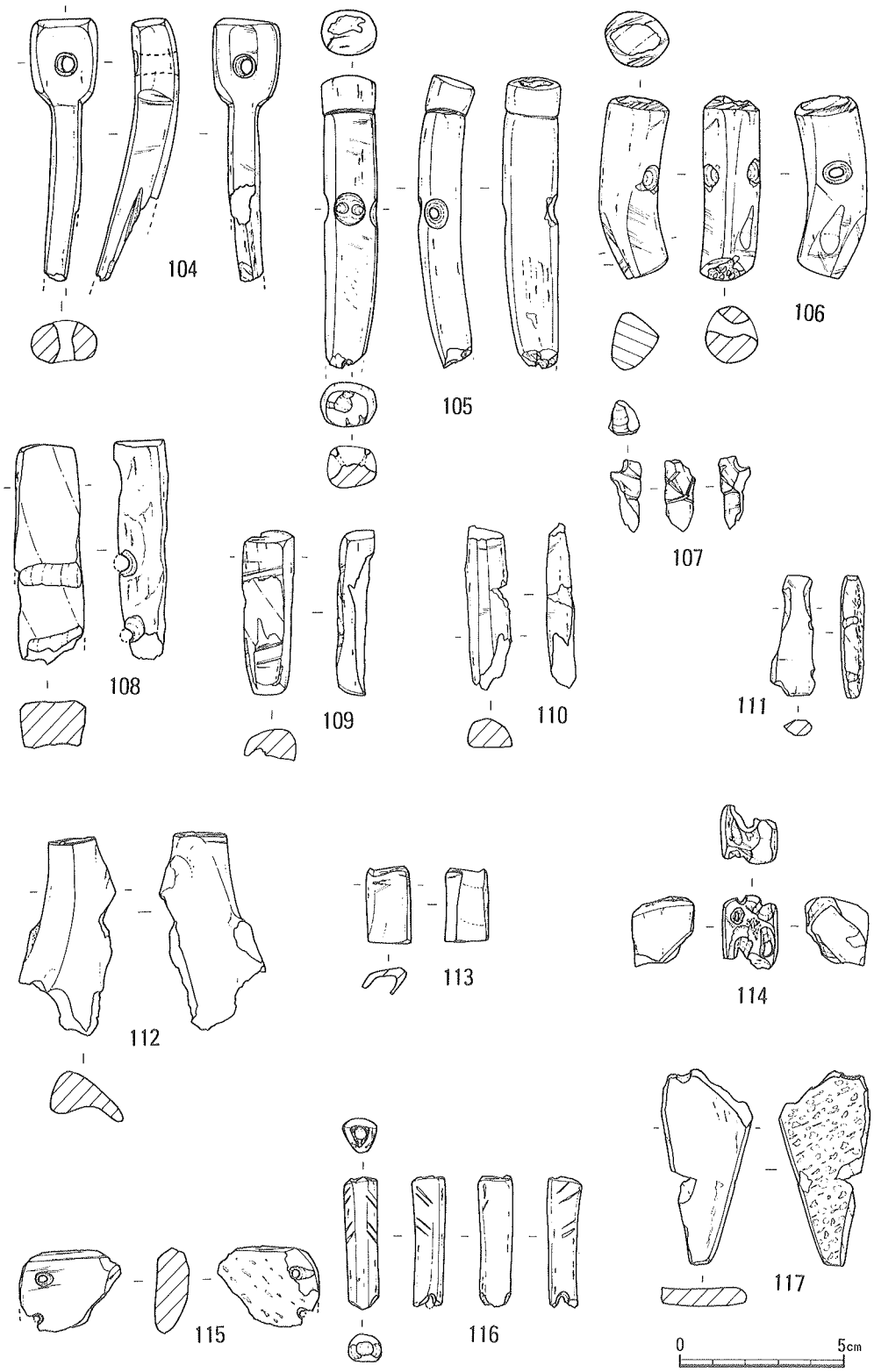


図 163 ジュゴン棒状製品、ジュゴン不明、その他

られ、表以外にも小破片が多数あるが省略した。前者は製品と思われるが、穿孔するタイプ図163－123、124、124、と穿孔しないもの図163－121、126、127、がある。また、穿孔しないものの中には図163－128、129のように、断面が湾曲に加工したものの含まれている。

クジラ骨を加工した報告例は古宇利原遺跡[註14]、渡喜仁浜貝塚[註15]、シヌグ堂遺跡[註2]、地荒原貝塚[註3]等、沖縄貝塚時代前期、中期の遺跡で１～２個程度みられるが、本遺跡のように多量の加工品が出土したのは、初めてである。

表67　クジラ加工品出土一覧

単位：㎜・g　　－：計測不可

図番号	出土地			残存	法量				孔	加工状況
	地区	グリッド	層		長	幅	厚さ	重さ		
118	21－ハ	E－93	Ⅶ	破損	143.3	29.9	33.6	70.8	無	棒状に加工、一端に切断痕がある。他に加工痕なし、表面はなめらかである。
119	21－ハ	F－93	Ⅶ	〃	85.4	45.5	24.6	26.5	無	一端に削り痕、表面は凹凸があり、自然面と思われる。断面は楕円と推定。
120	21－ハ	F－93	Ⅶ	〃	49.6	46.2	16.1	13.4	無	上記と同一個体？　表面はなめらか、内部の海綿部は除去する。
121	21－ハ	E－95	Ⅵ	方形	19.4	16.3	8.1	1.6	無	板状に加工、下端は破損しているが、かんざしの冠部の可能性がある。一部に火を受けたあとがある。
122	21－ハ	E－94	Ⅶ	破損	77.1	76.8	36.0	26.0	無	上、下端に削り痕が認められる。中央の海綿部はくりぬいた感を受ける。
123	21－ハ	E－94	Ⅶ	〃	85.8	83.0	13.0	39.9	17.8	板状に加工、中央に大きく穿孔する。孔は雑に両面から穿孔。全体的に調整は雑である。
124	21－ハ	E－94	Ⅶ	〃	53.9	28.4	8.0	10.8	8.5	板状に加工、前者比して調整はていねいである。両面穿孔、両側は調整によって丸味をおびる。
125	21－ハ	E－94	Ⅶ	〃	58.7	22.4	11.1	7.9	有	板状に加工、縁部に加工痕。孔は打割による調整。骨輪の未製品？
126	21－ハ	E－94	Ⅶ	〃	48.3	30.7	9.8	8.5	無	円板状に加工、周縁を打割調整、未製品？
127	21－イ	N－96	Ⅱ	〃	42.0	20.7	7.9	4.4	無	板状に加工、縁の方に除々に薄くなる。未製品？
128	21－ハ	E－95	Ⅵ	〃	47.0	－	10.0	5.2	無	板状に加工、断面は湾曲し、除々に薄くなる。灰色を呈する。
129	21－ハ	E－95	Ⅵ	〃	35.5	11.5	6.5	2.2	無	No.128と骨質は似る。側面に削り痕、火を受けたため、黒化する。

②．ジュゴン棒状製品（図164、図版178）

ジュゴンの肋骨を主に加工したもので、前述の装飾品－ジュゴン棒状製品に含まないものをここにまとめた。クジラ骨と同様、穿孔するもの図164－108、111と無孔のもの図164－109、110がある。いずれも破損しているため全形はうかがえない。この類の報告例は、現在のところない。

表68　ジュゴン棒状製品（不明）出土一覧

単位：㎜・g　　－：計測不可

図番号	出土地			残存	法量				孔	加工状況
	地区	グリッド	層		長	幅	厚	重さ		
108	21－ハ	F－93	Ⅶ	破損	66.2	14.8	19.1	16.7	5.1	穿孔の跡２カ所、軸長と側面に研磨痕が認められる。
109	21－ハ	E－95	Ⅶ	未製品	49.5	－	15.1	6.0	無	肋骨を長方形に切り取り、研磨加工したもので、側面に調整のための条痕有。

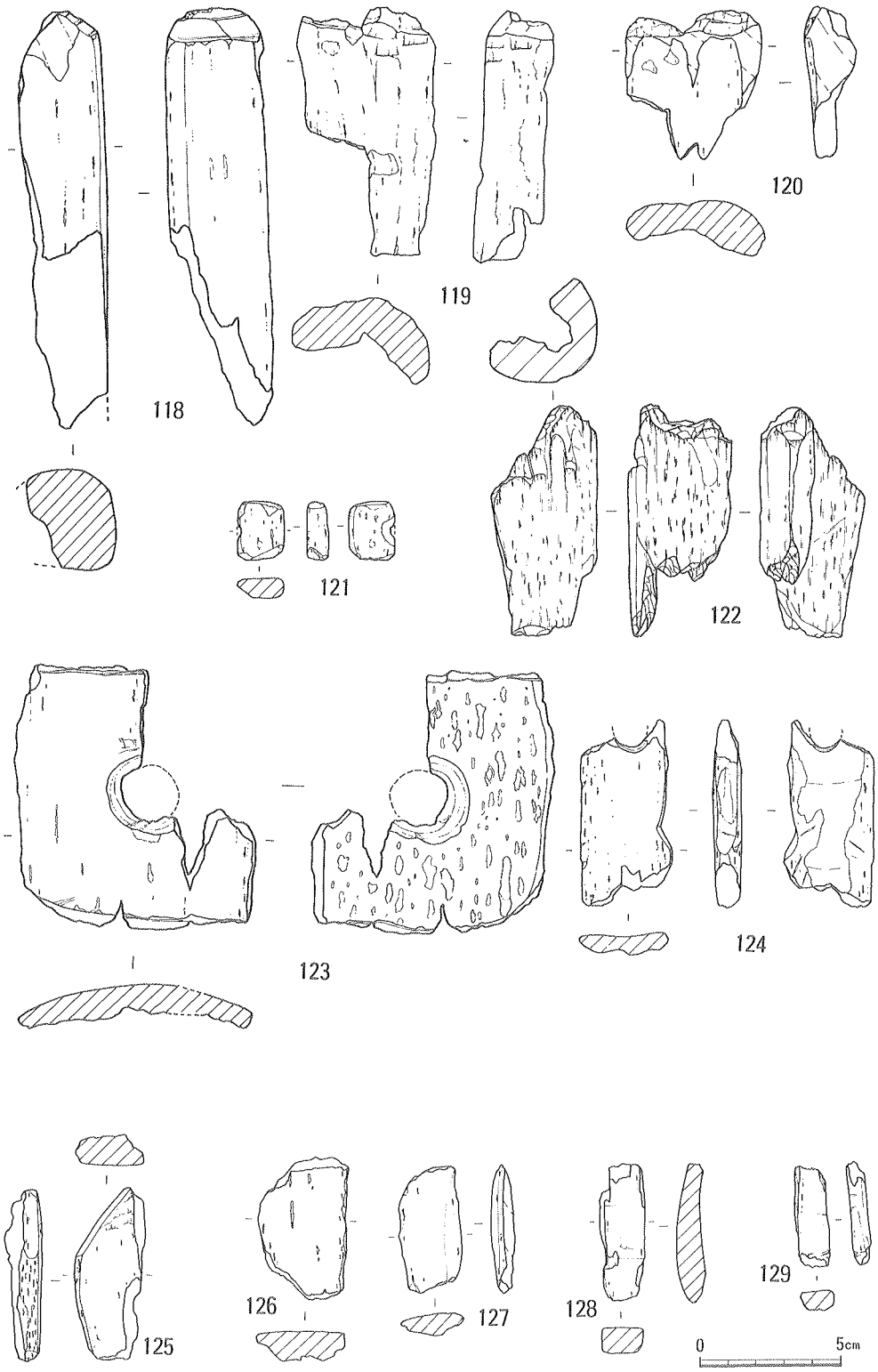


図 164　クジラ製品

110	21－ハ	D －95	Ⅶ	破　損	48.8	8.4	12.4	－	無	表面に研磨痕が認められる。
111	21－ハ	A －95	Ⅶ	破　損	36.2	14.5	6.8	－	小孔	上、下、側面に研磨痕、ほぼ中央に
図なし	21－ハ	A －95	Ⅵ	破　損	20.2	12.7	－	－	－	縦位に３つの小孔
〃	21－ハ	A －94	Ⅶ	破　損	30.1	－	－	－	－	

③．その他（図164、図版179）

トリ、イノシシ、ハリセンボン、ウミガメなどを加工したもので、それぞれ、独自の加工が施され、統一性がなく、用途についても不明瞭であるためここにまとめた。図164－116のイノシシ加工品は文様の形は違うが、シヌグ堂遺跡[註2]の「イノシシ肢骨加工品」に酷似する。また、同図113は沖之永良部島神野貝塚[註16]に類似したものがある。

表69　不明出土一覧

単位：㎜・g　　－：計測不可

図番号	出土地			素　材	残存	法　量				加工状況
	地区	グリッド	層			長	幅	厚さ	重量	
113	21－ハ	A －94	Ⅵ	ミズナギドリ R 上腕骨 上部	破　損	22.3	12.3	7.4	0.8	横に切断、切断面はていねいに研磨する。
112	21－ハ	A －94	Ⅶ	アホウドリ L 上腕骨 近位端～	破　損	58.6	15.1	11.2	6.5	骨体側を横位に切断、他に加工痕なし、上記と同様の製品になるであろう。
114	21－ハ	E －95	Ⅵ	イノシシ R 下顎 M_3 歯根	完形に近い	☆ 24.9	16.6	18.4	3.4	M_3 の歯根部分を残し、方形に加工したもので、ほぼ全面研磨。
115	21－ハ	E －93	Ⅶ	ハリセンボン？	破　損	27.6	29.1	－	3.9	全体形は三角形を呈し、形状はハリセンボンに似る。２つの孔を有し、裏面に横ズレ痕が認められる。
116	21－ハ	E －95	Ⅵ	イノシシ 脛骨 近位端～	破　損	☆ 39.1	10.2	10.4	2.4	脛骨の近位部側を用いる。１端に削り痕、丸味を出し、他方は ℓ = 2.8 ㎜の穿孔のあと。又状の沈線を４カ所に施こす。
117	21－ハ	E －94 ・ E －93	Ⅶ	ウミガメ	破　損	☆ 57.4	☆ 29.9	5.4	7.1	板状に加工、全面研磨される。他に加工痕はない。

４．考察

以上、骨製品に次いで記述した。全体の特徴として、出土量の多いことがあげられる。これまで報告されてきた遺跡の中では、シヌグ堂遺跡[註2]（69点）、地荒原貝塚[註3]（111点）より更に多く、出土総数138点である。用途別には、装飾品が、全体の50％をしめる。

製品の特徴をみると、実用品では、沖縄貝塚時代前期に一般にみられる骨針、骨錐の他にヤス状刺突具が出土したことである。この製品を、漁具として取り扱うならば、これまで、ないとされていた、刺突漁を想起させるものである。ナイフ型骨製品も新しい製品であるが用途は不明である。

装飾品に次いでみると、骨輪の量が13点と多いが、本品は奄美系の土器が出土する伊武部貝塚、浦添貝塚、具志川島遺跡群等にみられる。垂飾品ではサメ歯、イノシシ、イルカの歯を用いたものが出土する。本貝塚の21地区ハの西側で数ヶ所にイヌの顎骨がまとまって出土しているが、イヌの犬歯の加工品が出土しないのが興味深い。イヌに対して親近感が、あったためであろうか。

素材からみるとクジラの骨を使ったものが多い。また、当時沖縄島には棲息ないとされているシカの角を用いた製品が出土しているのも興味深い。化石かそれとも九州や屋久島等から持ち込んだものか今後資料追加と地質面からの詳細な検討が望まれる。

註

註１．金子浩昌、忍沢成視「骨角器の研究　縄文編Ｉ」慶友社1986年

註２．沖縄県教育委員会「シヌグ遺跡－第１・２・３次発掘調査報告」「沖縄県文化財調査報告書第67集」1985年

註３．具志川市教育委員会「地荒原貝塚－個人住宅建設工事に係る発掘調査報告」1986年

註４．沖縄県教育委員会「与那国トウグル浜遺跡－与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査報告沖縄県文化財調査報告第66集1985年

註５．本部町教育委員会「具志堅貝塚」『本部町文化財調査報告書第３集』

註６．宜野湾市教育委員会「喜友名遺跡群」「宜野湾文化財調査報告第５集」1984年

註７．伊江村教育委員会「阿良第二貝塚」1986年

註８．志多留貝塚「対馬の考古学」1976年

註９．高宮廣衛・後仲筋正徳・奥間尚・金城亀信「室川貝塚第４次発掘調査報告概報」『沖国大考古』第６号沖国大考古学研究室　1982年

註10．大阪府教育委員会「水走遺跡－東大阪生駒電鉄建設予定地内発掘調査概要」1984年

註11．賀川光夫・多和田眞淳「大山貝塚調査概報」『文化財要覧』琉球文化財保護委員会1959年

註12．Ｃ・Ｗミーヤン・高宮廣衛「知念村熱田原貝塚発掘概況」『文化財要覧』琉球文化財保護委員会1958年

註13．具志川市教育委員会「宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告」1980年

註14．今帰仁村教育委員会「古宇利原遺跡発掘調査報告書」「今帰仁村文化財調査報告書第８集」1983年

註15．渡喜仁浜原調査団「渡喜仁浜原貝塚」　今帰仁村教育委員会　1977年

註16．高宮廣衛・玉城安明・照屋孝・仲村ゆりか・山内盛尚「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報」（その２）－Ｂトレンチ－「沖国大考古」第８号　沖国大考古学研究室　1985年

第５節　石製品

石製品としたものは６点でこれらは実用品と装飾品にわけられる。

１．実用品

実用品としたものは図２～６の５点である。出土量は装飾品に比べて多く地区別には21地区ハ－３点、22地区ロ－３点である。

ａ．石刃（図166、図版180）

千枚岩の剝片を二等辺三角形にかたどり全辺を研磨によって附刃するものであるが、先端を欠損する。刃縁は三辺とも一～二箇所の剝離をもち、刃先はシャープである。最大幅23.4㎜、厚さ2.2㎜2.1㎜を計る。21地区ハＦ－95第Ⅵｂ層の出土である。用途はおそらく刃器のようなものであろう。

ｂ．有孔石刃（図166、図版180）

◦　ａタイプ

千枚岩を略長方形に形どり、長軸の両端を研磨によって刃部を作り、さらに長軸の中心より片側よりに２つの孔を穿孔する。用途については、小刃のような用途が想定できる。報告例は西長浜原遺跡、室川貝塚にある。

表70　有孔石刃　　単位：㎜・ｇ

図番号	出土地			残存	法量				孔径	加工状況
	地区	グリッド	層		長	幅	厚	重		
5	21－ロ	1号	Ⅴ	完形	40.5	23.9	2.8	3.8	1.7	両端に薄くなる。
6	21－ハ	E－94	Ⅵ	完形	62.3	31.9	3.4	9.8	3.0	上記より小型
7	22－ロ	－	Ⅶ	破損	30.0	26.2	3.0	3.3	－	穿孔の跡があり

◦　ｂタイプ

同図４も千枚岩を用いたもので、前記と同様両端を研磨し、刃状にしたものである。さらに、長辺を両側から抉り、片側に穿孔の跡がある。22地区ロ第Ⅳ層の出土である。大きさは、最大長44.5㎜、最大幅21.4㎜、厚さ2.9㎜、重さ4.1ｇをはかる。前記の製品と関連する可能性もある。

２．装飾品

装飾品したものは図１、７の２例である。それぞれ21地区ハ、22地区ロから１点づつえられた。

ａ．勾玉状石製品（図165、図版180）

千枚岩の剝片を勾玉に型どったものである。完形品で、中央よりやや上方に穿孔（外径6.0㎜内径1.7㎜）し、また、上、下の端部に１～２個の刻みを施す。研磨調整は突出部を滑らかに

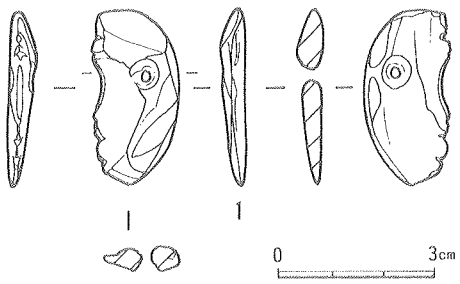


図165　勾玉状石製品

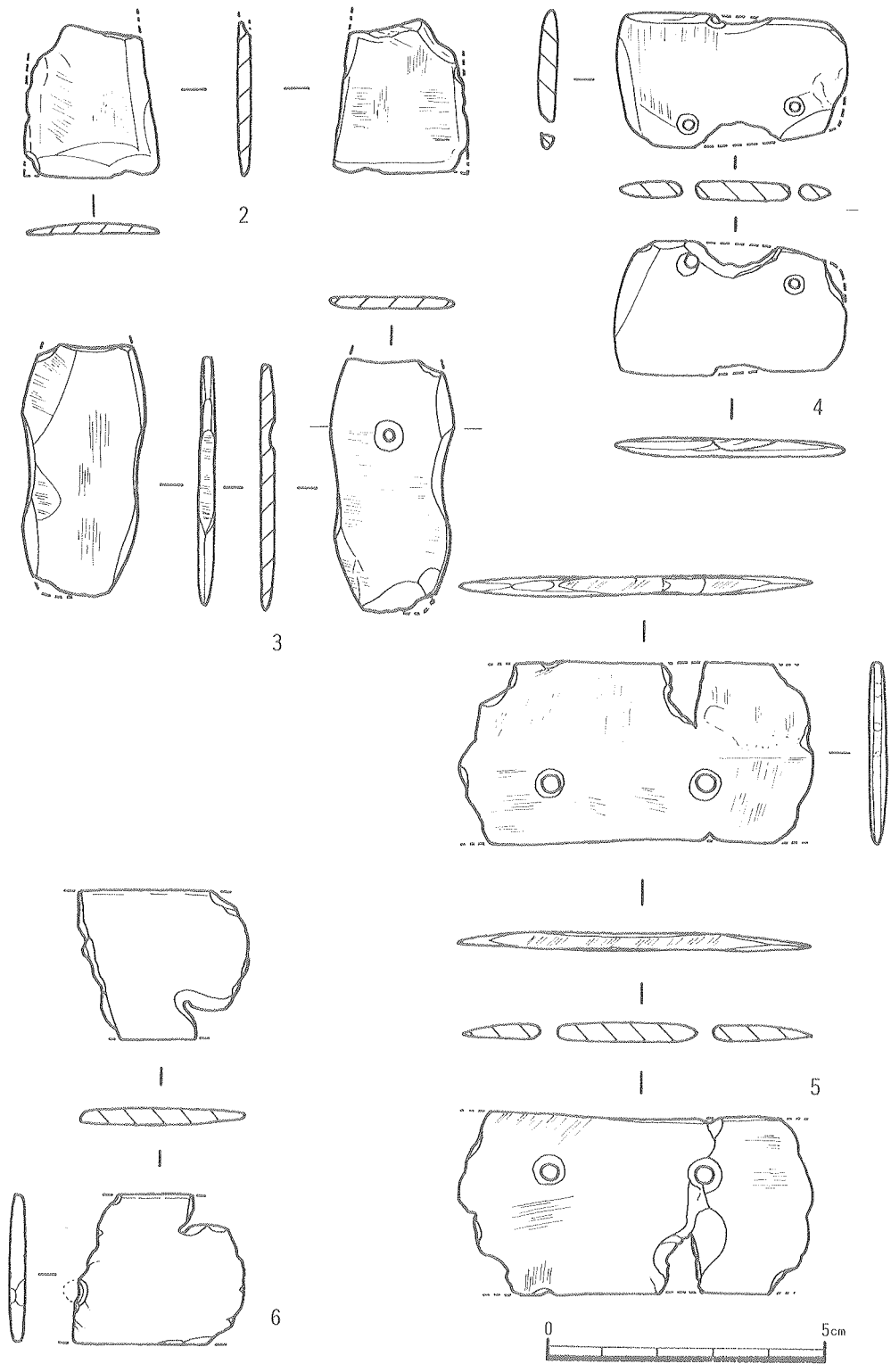


図 166　石製品

するため、部分的にみられる。中央部が厚く、端部に細くなる。22地区ロ第4号遺構の出土で、大きさは、最大長40.5㎜、幅23.9㎜、重さ3.8ｇをはかる。現在のところ報告例はない。

b．彫刻石製品（図167）

千枚岩の板状のものをもちいていわゆる「彫刻骨器」に模したもので、ほぼ完形に近い。大きさは最大長27.8㎜（19.6）、幅37.9（27.7）㎜、重さ7.2ｇで骨製より小振りである。表面は、中央に幅7ミリ程の凹帯を縦に配し、蝶の羽に当たる部分に線刻状の文様の跡が窺える。石質が柔らかいため、ほとんど消えかかっているが、蝶形骨器と類似する文様と考えられる。裏面は上、下に段を有し、やはり模倣したものである。これは崎樋川貝塚[註1]、キガ浜貝塚[註2]、嘉手納貝塚[註3]に「蝶形骨器」に類似するものである。また、模造品としては室川貝塚[註4]に貝製の龍形タイプがある。

3．考察

以上、石製品について記述したが、全体として出土量は少ない。実用品は室川貝塚、西長浜遺跡など沖縄貝塚時代中期にみられるものである。装飾品は県内で初めての出土である。彫刻骨器の模造品が出土したのは特記すべきことである。サメ歯の製品と同様「模造」の意味が製品に対するマジカル的なものか、それ以外の要素をもつものか興味深い。また、勾玉状製品も22地区ロの第4号遺構から出土していることから前記と同様マジカル的な問題を含んでいると思われる。

註

註1　島田貞彦　琉球崎樋川貝塚　『歴史と地理』　1932年

2　沖縄県教育委員会「津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告」『沖縄県文化財調査報告書第17集」　1978年

3　新田重清、嵩元政秀　「嘉手納貝塚発掘報告」『文化財要覧』琉球文化財保護委員会　1960年

4　高宮広衛、知念勇、岸本義彦、佐野一「室川貝塚範囲確認調査報告」『沖縄市文化財調査報告書第1集」沖縄市教育委員会　1979年

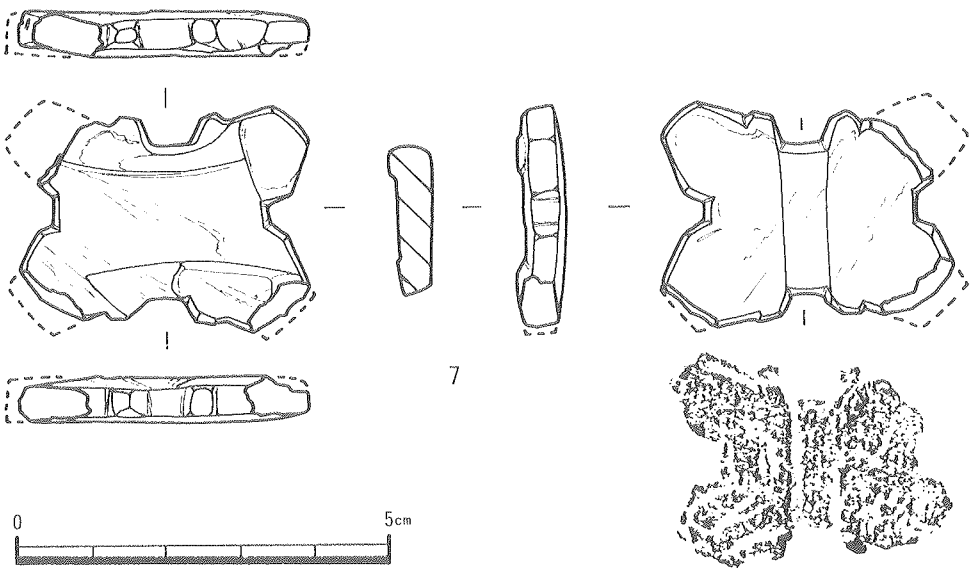


図 167　彫刻石製品

第6節　軟体動物遺存体

1．貝　類　遺　存　体

本遺跡から　39科106種（微小陸産貝を除く）の貝殻が出土した。

21地区ではイ区で15,922個体、ロ区で1,729個体の出土であるが、ハ区出土の貝殻は非常に多いためE－94グリッドに限定して集計を行なった。22地区で貝殻が出土したのはイ区のみで、その中でも第2号・第3号遺構・フィッシャーから貝殻が出土した。

個体数の算出については出土状況表の下に記したとおりである。

貝種については黒住耐二氏に同定していただき、生息地についても彼の分類法を採用した。さらに、この遺跡から多量に出土したウミニナ科の貝殻については、グリッド・層位を限定して、完形の貝殻を無作為に抽出し、部位計測や科で算出した貝殻の種を同定していただき、種の構成比較等も含め計測から得られた結果や自然環境を含んだ考察は別項に詳細に記載されているので参照されたい。また、抽出した貝殻の部位計測の際、その貝殻の中につまった土の中から9種の微小陸産貝が出てきた。いずれも5㎜未満の微小貝で、この貝類の出土状況は表の下段に項目を設けた。この微小陸産貝についても前述の黒住氏の別項に記述されている。

また、採集した貝の大きさを比較するため、二枚貝で出土量の多いシレナシジミガイとアラスジケマンガイの2種の貝殻について21地区のイ区とハ区から出土した完形貝の殻高・殻長の計測を試みた。いずれもcm単位で分類し、貝殻の大きさと、その大きさの貝殻の出土量が一目できるように、1cm方眼の左下を基点とし、縦軸が殻高、横軸が殻長を示す表を作成した。計測は1cm単位で大まかなものだが、出土貝の大小や平均的な大きさ等はこの表でも十分把握できよう。

a．21地区

イ　区

岩下に位置したこの区は、岩陰に3カ所の貝殻集中部があり、その集中部ごとに貝を分類・集計した。またロ区に隣接した仲門門中墓（按司墓）付近ではⅠ層・Ⅱ層上部・Ⅱ層下部の層が確認でき、各層から貝殻が出土したので、層位別に出土貝を分類集計した。

主体貝の構成比較（表73）をみると両者にほとんど差異はない。

いずれもウミニナ科の出土が多く約70%を占めている。次いでシュリマイマイが多く、シレナシジミガイ、センニンガイとつづき、陸域の林内や林縁部に生息するシュリマイマイを除いては、河口干潟・マングローブ域の砂泥・砂礫底に生息する貝が主体を占める。

他に淡水域に生息するカワニナや、イソハマグリやクモガイ・マガキガイ・アラスジケマンガイ等、砂底に生息する貝の出土が多い。

出土量の多いウミニナ科の貝殻については、O－96グリッド第Ⅱ層上部から出土した貝殻（最少個体数に算出した貝殻）の中から無作為に162個体抽出し、種の組成比率を算出した黒住

の種類組成の表（別項表84）をみると、抽出貝殻162個体中、キバウミニナⅠ型が128個体で約80%を占め、キバウミニナⅡ型とマドモチウミニナがそれぞれ17個体で約10%の比率である。イ区全体的にみてもその比率に大差はないと思われる。

また、その貝殻の中につまった土に混って、微小陸産貝のオカチョウジガイが1点得られた。

この区から出土したシレナシジミガイはⅡ層上部で最少個体数が右殻242／左殻248個体（以下、右殻・左殻を略す）中、完形貝は82／97個体で、小さい貝殻で殻高1～2㎝×殻長1～2㎝（以下、殻高・殻長を略す）大きなもので6～7㎝×6～7㎝と出土貝の大きさにばらつきがある。

この層では3～4㎝×3～4㎝×4～5㎝の貝が多く、シレナシジミガイにしてはやや小さめである。

Ⅱ層下部では最少個体数が151／123個体中、完形貝は41／33個体で、完形貝の残存率は低い。3～4㎝×3～4㎝と4～5㎝×4～5㎝の貝が多い。

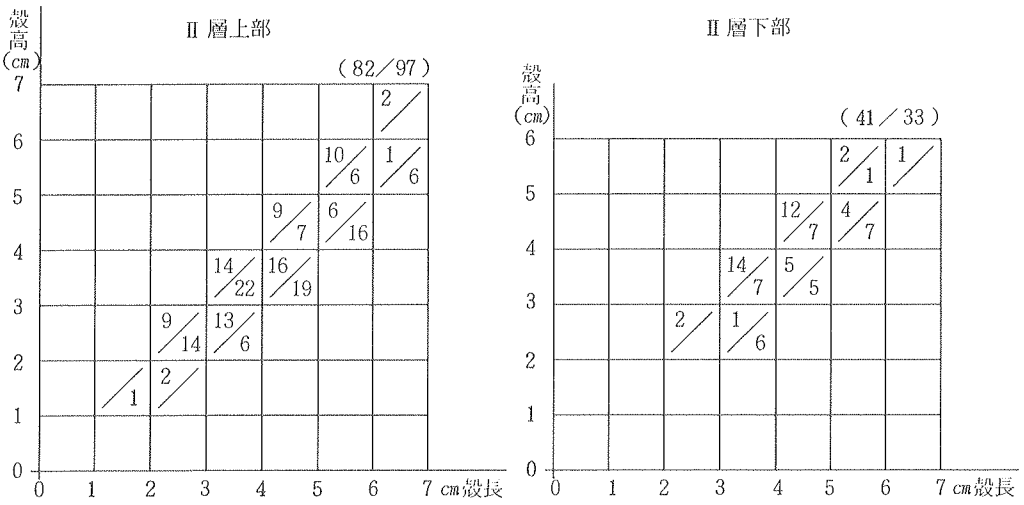
アラスジケマンガイはⅡ層の上部下部とも2～3㎝×2～3㎝から3～4㎝×4～5㎝の大きさの貝殻が出土した。

Ⅱ層上部で60／41個体中、完形貝は33／26個体で、2～3㎝×3～4㎝の貝が多く、2～3㎝×2～3㎝のやや小さめの貝も多い。

Ⅱ層下部では39／44個体中、完形貝は16／18個体で完形貝の残存率は低い。Ⅱ層上部と同様2～3㎝×3～4㎝の貝殻が多く、3～4㎝×3～4㎝のやや大きめの貝も目立つ。

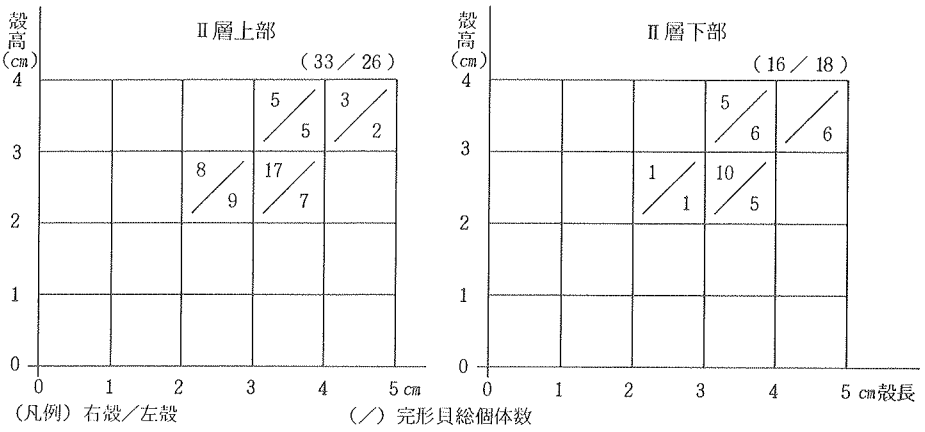
シレナシジミガイは出土量は多いが採集した貝はやや小さめである。それに比べてアラスジケマンガイはさほど小さなものはなく採集貝の大きさはほぼ一定しているようである。

表71　シレナシジミガイの計測相関



（凡例）右殻／左殻　（／）完形貝個体数

表72　アラスジケマンガイの計測相関



（凡例）右殻／左殻　　（／）完形貝総個体数

表73　主体貝構成比較

	岩陰1		岩陰2		岩陰3		小計		Ⅰ層		Ⅱ層上部		Ⅱ層下部		小計		計	
ウミニナ科	1	185	1	170	1	2,565	1	2,920	1	1,269	1	2,814	1	4,366	1	8,449	1	11,369
		67.8%		49.7%		71.7%		69.7%		67.1%		67.5%		77.0%		72.0%		71.4%
シュリマイマイ	2	29	2	106	2	436	2	571	2	183	2	410	2	371	2	964	2	1,535
		10.6%		31.0%		12.2%		13.6%		9.7%		9.8%		6.5%		8.2%		9.6%
シレナシジミガイ	3	16	3	13	3	184	3	213	3	107	3	248	4	151	3	506	3	719
		5.9%		3.8%		5.1%		5.1%		5.7%		6.0%		2.7%		4.3%		4.5%
センニンガイ	4	7	5	7	4	108	4	122	4	62	4	134	3	187	4	383	4	505
		2.6%		2.0%		3.0%		2.9%		3.3%		3.2%		3.3%		3.3%		3.2%
カワニナ科	6	3	5	7	5	53	5	63	5	55	8	43	7	52	6	150	5	213
トウガタカワニナ科		1.1%		2.0%		1.5%		1.5%		2.9%		1.0%		0.9%		1.3%		1.3%
イソハマグリ	6	3	4	8	9	20	7	31	7	27	5	72	6	57	5	156	6	187
		1.1%		2.3%		0.6%		0.7%		1.4%		1.7%		1.0%		1.3%		1.2%
クモガイ		2			6	36	6	38	8	19	6	60	8	51	9	130	7	168
		0.7%				1.0%		0.9%		1.0%		1.4%		0.9%		1.1%		1.1%
マガキガイ				4	10	19	9	23	10	14		17	5	111	7	142	8	165
				0.1%		0.5%		0.5%		0.7%		0.4%		2.0%		1.2%		1.0%
アラスジケマンガイ		1	8	5	7	22	8	28	6	28	6	60	9	44	8	132	9	160
		0.3%		1.5%		0.6%		0.7%		1.5%		1.4%		0.8%		1.1%		1.0%
最少個体数		273		342		3,575		4,190		1,892		4,167		5,673		11,732		15,922
		1.7%		2.1%		22.5%		26.3%		11.9%		26.2%		35.6%		73.7%		100.0%

表の左の数字は層別順位、上段は個体数、下段は層別比率である。

表74　21地区イ区の貝類出土状況

科名	種名	番号	岩陰1	岩陰2	岩陰3	最少個体数	I層	II層 上部	II層 下部	最少個体数	計	生息地
ツタノハガイ	オベッコウカサガイ	1										I－1－a
ニシキウズガイ	クマノコガイ	2										I－1－b
	ニシキウズガイ	3										I－2－a
	ギンタカハマガイ	4						3		3	3	I－4－a
	コシダカギンタカハマガイ	5										I－4－a
	サラサバテイ	6			4	4	14	22	14	50	54	I－4－a
	オキナワイシダタミ	7	1			1	2	4	9	15	16	II－1－b
リュウテンサザエ	ヤコウガイ	8						1／		1	1	I－4－a
	チョウセンサザエ	9	／2			2	3／8	6／26	2／30	64	66	I－3－a
	カンギク	10	2／	1／	10／	13	4／	19／	13／	36	49	II－1－b
	オオウラウズガイ	11						2／		2	2	I－2－a
アマオブネガイ	ニシキアマオブネ	12										I－1－c
	マルアマオブネ	13			8	8	4	5	6	15	23	I－1－b
	ヒラマキアマオブネ	14	2		3	5		5	13	18	23	III－0－d
	イシダタミアマオブネ	15							1	1	1	I－0－a
	マングローブアマガイ	16										III－1－b
	カノコガイ	17					1		5	6	6	III－1－e
	イガカノコガイ	18	3	4	11	18	1	16	34	51	69	III－1－e
	シマカノコガイ	19			1	1	1	2	1	4	5	III－0－d
	ヒメカノコガイ	20							2	2	2	III－1－e
ヤマタニシ	オキナワヤマタニシ	21										V－8
カワニナ	カワニナ	22										IV－5・6
トウガタカワニナ	ヌノメカワニナ	23	3	7	53	63	55	43	52	150	213	IV－5
	アマミカワニナ	24										IV－5
	トウガタカワニナ	25										IV－5
ウミニナ	キバウミニナ（I）	26										III－0－c
	キバウミニナ（II）	27	185	170	2,565	2,920	1,269	2,814	4,366	8,449	11,369	III－0－c
	マドモチウミニナ	28										III－1－c
	センニンガイ	29	7	7	108	122	62	134	187	383	505	III－0－c
オニノツノガイ	オニノツノガイ	30			2	2	3	8	7	18	20	I－2－c
	ヨコワカニモリガイ	31							2	2	2	I－2－c
ソデガイ	マガキガイ	32		4	19	23	14	17	111	142	165	I－2－c
	オハグロガイ	33		1		1	16	12	4	32	33	II－2－c
	クモガイ	34	2		36	38	19	60	51	130	168	I－2－c
	ラクダガイ	35										I－4－c
タマガイ	ヘソアキトミガイ	36										I－2－c
	ホウシュノタマガイ	37	1		2	3	1		2	3	6	II－1－c
タカラガイ	ナツメタカラガイモドキ	38							1	1	1	I－2－a
	ハナビラダカラガイ	39										I－1－a
	コモンダカラガイ	40							1	1	1	I－1－a
	ハナマルユキガイ	41							1	1	1	I－3－a
	ホシダカラガイ	42						3	1	4	4	I－2－c
	ホシキヌタガイ	43										I－2－a
	ヤクシマダカラガイ	44										I－2－a
フジツガイ	ホラガイ	45										I－4－a
	シノマキガイ	46										I－2－a
アッキガイ	ガンゼキボラ	47										I－4－a
	シラクモガイ	48										I－3－a
	アカイガレイシガイ	49										I－3－a
オリイレヨフバイ	アツムシロガイ	50										I－1－a
	チビオリイレムシロガイ	51										II－2－c
エゾバイ	ノシガイ	52										I－1－a
	ウスイロバイ	53					1		2	3	3	II－2－c
イトマキボラ	リュウキュウツノマタガイ	54										I－3－a
	イトマキボラ	55					1			1	1	I－2－a
オニコブシガイ	コオニコブシガイ	56										I－3－a
イモガイ	マダライモガイ	57										I－1－a
	ジュズカケサヤガタイモ	58										I－1－a
	サヤガタイモガイ	59										I－1－a
	クロミナシガイ	60						1		1	1	I－2－c
	アカシマミナシガイ	61										I－2－c
	ヒラマキイモガイ	62										I－2－c
	ロウソクガイ	63										I－2－c
	ヤナギシボリイモガイ	64										I－2－a
	イボカバイモガイ	65						1		1	1	I－2－c
	アンボンクロザメガイ	66	1			1					1	I－2－c
	クロフモドキ	67										I－2－c
キセルガイ	ツヤギセル	68	1	3	18	22	11	25	35	71	93	V－8
ナンバンマイマイ	シュリマイマイ	69	29	106	436	571	183	410	371	964	1,535	V－8
	カツレンマイマイ	70										V－7

科名	種名	番号	岩陰1		岩陰2		岩陰3		最少個体数	I層		II層 上		II層 下		最少個体数	計	生息地
			右殻	左殻	右	左	右	左		右	左	右	左	右	左			
フネガイ	エガイ	71																I－1－a
	カリガネエガイ	72		1		1	2	3	5	3	1	17	16	8	11	31	36	II－1－b
	リュウキュウサルボウガイ	73											1			1	1	II－2－c
タマキガイ	ソメワケグリガイ	74	1				2		3	2	1				1	3	6	I－2－c
ウグイスガイ	クロチョウガイ	75																I－4－a
	ミドリアオリガイ	76																I－1－a
シュモクアオリガイ	シュモクアオリガイ	77	1		5	7			8	1	3	6	3	4	4	13	21	I－2－a
	マクガイ	78																III－1－b
シュモクガイ	ニワトリガキ	79																II－1－b
イタヤガイ	チサラガイ	80																I－4－c
	リュウキュウオウギガイ	81																I－2－c
ウミギクガイ	メンガイ	82									1					1	1	I－2－a
イタボガキ	オハグロガキ	83										1				1	1	I－1－a
	ニセマガキ	84	1		1		17		19	5		42	1	32		79	98	II－1－b
シジミガイ	シレナシジミガイ	85	16	15	8	13	184	177	213	107	89	242	248	151	123	506	719	III－0－c
キクザルガイ	シロザルガイ	86																I－2－a
シャコガイ	シラナミガイ	87					1		1			1	1			1	2	I－2－a
	ヒメジャコガイ	88										2				2	2	I－2－a
	ヒレジャコガイ	89						1	1								1	I－2－c
	シャゴウ	90																I－2－c
ザルガイ	カワラガイ	91	1				1	1	2	2	2	5		3		10	12	II－2－c
	リュウキュウザルガイ	92	1						1	2		2				4	5	II－2－c
マルスダレガイ	スダレハマグリ	93	4				1		5	3	5	7	12	2	3	20	25	II－1－c
	チョウセンハマグリ	94						1	1	1		1				2	3	II－1－c
	サラサガイ	95	2	1			22	18	24	8	7	25	22	17	11	50	74	I－2－c
	アラスジケマンガイ	96	1		5	2	20	22	28	27	28	60	41	39	44	132	160	III－1－c
	オイノカガミガイ	97	1						1	11	10	9	9	1	3	23	24	II－1－c
	ヌノメガイ	98																II－1－c
	オキシジミガイ	99					5	4	5	3	2	3		5	3	11	16	II－1－c
	ヒメリュウキュウアサリ	100					4		4			2		7		9	13	II－1－c
	イオウハマグリ	101								1	1	2	1	2		5	5	II－1－c
チドリマスオガイ	イソハマグリ	102	1	3	8	5	20	7	31	24	27	72	66	39	57	156	187	I－1－c
ナミノコガイ	ナミノコガイ	103		1	4	1	12	14	19	11	4	13	10	7	2	31	50	II－1－c
ニッコウガイ	ヌノメイチョウシラトリ	104																III－1－c
リュウキュウマスオガイ	マスオガイの一種	105						1	1	2		9	1	4	1	15	16	III－1－c
クサズリヒザラガイ	ヒサラガイの一種	106										1				1	1	I－1－a
最少個体数			273		342		3,575		4,190	1,892		4,167		5,673		11,732	15,922	
貝殻中につまった土から得た微小陸産貝																		
ヤマキサゴ	オキナワヤマキサゴ																	V－8
カワザンショウガイ	ヘソカドガイ属の一種																	不明
キセルガイ	ツヤギセル																	V－8
オカクチキレガイ	オカチョウジガイ													1			1	V－8
ベッコウマイマイ	トクノシマベッコウマイマイ																	V－7
ナンバンマイマイ	シュリマイマイ																	V－8
オナジマイマイ	イトマンマイマイ																	V－7
	ウスカワマイマイ																	V－9
ネジレガイ	コメツブタワラガイ																	V－7
計														1			1	

貝の生息地の分類

外洋～内湾		水深		底質	
I	外洋・サンゴ礁域	0	潮間帯上部　（1ではノッチ、IIIではマングローブ）	a	岩板
		1	潮間帯中・下部	b	転石
II	内湾・転石地域	2	亜潮間帯上縁部（Iではイノー）	c	岩礫底、砂泥底、砂底
		3	干瀬　（Iにのみ適用）	d	マングローブ植物上
III	河口干潟・マングローブ域	4	礁斜面およびその下部	e	淡水の流入する礫底
IV	淡水域	5	止水		
		6	流水		
V	陸域	7	林内		
		8	林内・林縁部		
		9	林縁部		
		10	海浜域		
VI	その他	11	打ち上げ物		
		12	化石		

個体数の算出は下記のようにおこなった

1. 巻貝は殻頂部を有する貝と、殻頂は欠損しているが3／4以上残存している完形に近い貝を1個体とした。
   また、リュウテンサザエ科の貝は殻数／蓋数を示し、その多い方を最少個体数とした。
2. 二枚貝は殻頂を有する貝を左右それぞれ集計し、その多い方を最少個体数とした。
3. 巻貝・二枚貝とも、個体数を算出できる貝はなく、殻頂が欠損し破損のいちじるしい貝だけが出土した場合に限り、1片でも数片でも1個体とした。

表75　21地区ロ区の貝類出土状況

科名	種名	番号	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	最少個体数	生息地
ツタノハガイ	オベッコウカサガイ	1							Ⅰ－1－a
ニシキウズガイ	クマノコガイ	2							Ⅰ－1－b
	ニシキウズガイ	3							Ⅰ－2－a
	ギンタカハマガイ	4							Ⅰ－4－a
	コシダカギンタカハマガイ	5							Ⅰ－4－a
	サラサバテイ	6	3		9	7	1	20	Ⅰ－4－a
	オキナワイシダタミ	7							Ⅱ－1－b
リュウテンサザエ	ヤコウガイ	8	1／					1	Ⅰ－4－a
	チョウセンサザエ	9	1／6		2／4	／9	／7	26	Ⅰ－3－a
	カンギク	10							Ⅱ－1－b
	オオウラウズガイ	11							Ⅰ－2－a
アマオブネガイ	ニシキアマオブネ	12				1		1	Ⅰ－1－c
	マルアマオブネ	13							Ⅰ－1－b
	ヒラマキアマオブネ	14							Ⅲ－0－d
	イシダタミアマオブネ	15							Ⅰ－0－a
	マングローブアマガイ	16							Ⅲ－1－b
	カノコガイ	17					1	1	Ⅲ－1－e
	イガカノコガイ	18				1	1	2	Ⅲ－1－e
	シマカノコガイ	19							Ⅲ－0－d
	ヒメカノコガイ	20							Ⅲ－1－e
ヤマタニシ	オキナワヤマタニシ	21							Ⅴ－8
カワニナ	カワニナ	22							Ⅳ－5・6
トウガタカワニナ	ヌノメカワニナ	23	1		4	5	10	20	Ⅳ－5
	アマミカワニナ	24							Ⅳ－5
	トウガタカワニナ	25							Ⅳ－5
ウミニナ	キバウミニナ（Ⅰ）	26							Ⅲ－0－c
	キバウミニナ（Ⅱ）	27	101	5	24	156	1,124	1,410	Ⅲ－0－c
	マドモチウミニナ	28							Ⅲ－1－c
	センニンガイ	29	11		2	5	45	63	Ⅲ－0－c
オニノツノガイ	オニノツノガイ	30				1	1	2	Ⅰ－2－c
	ヨコワカニモリガイ	31							Ⅰ－2－c
ソデガイ	マガキガイ	32	4			5	14	23	Ⅰ－2－c
	オハグロガイ	33	2			6		8	Ⅱ－2－c
	クモガイ	34	1		25	14		40	Ⅰ－2－c
	ラクダガイ	35							Ⅰ－4－c
タマガイ	ヘソアキトミガイ	36							Ⅰ－2－c
	ホウシュノタマガイ	37							Ⅱ－1－c
タカラガイ	ナツメタカラガイモドキ	38							Ⅰ－2－a
	ハナビラダカラガイ	39							Ⅰ－1－a
	コモンダカラガイ	40							Ⅰ－1－a
	ハナマルユキガイ	41				1		1	Ⅰ－3－a
	ホシダカラガイ	42			1	1		2	Ⅰ－2－c
	ホシキヌタガイ	43							Ⅰ－2－a
	ヤクシマダカラガイ	44							Ⅰ－2－a
フジツガイ	ホラガイ	45							Ⅰ－4－a
	ソノマキガイ	46							Ⅰ－2－a
アッキガイ	ガンゼキボラ	47							Ⅰ－4－a
	シラクモガイ	48							Ⅰ－3－a
	アカイガレイシガイ	49							Ⅰ－3－a
オリイレヨフバイ	アツムシロガイ	50							Ⅰ－1－a
	チビオリイレムシロガイ	51							Ⅱ－2－c
エゾバイ	ノシガイ	52							Ⅰ－1－a
	ウスイロバイ	53					1	1	Ⅱ－2－c
イトマキボラ	リュウキュウツノマタガイ	54							Ⅰ－3－a
	イトマキボラ	55			2			2	Ⅰ－2－a
オニコブシガイ	コオニコブシガイ	56							Ⅰ－3－a
イモガイ	マダライモガイ	57					1	1	Ⅰ－1－a
	ジュズカケサヤガタイモ	58							Ⅰ－1－a
	サヤガタイモガイ	59							Ⅰ－1－a
	クロミナシガイ	60							Ⅰ－2－c
	アカシマミナシガイ	61							Ⅰ－2－c
	ヒラマキイモガイ	62							Ⅰ－2－c
	ロウソクガイ	63							Ⅰ－2－c
	ヤナギシボリイモガイ	64							Ⅰ－2－a
	イボカバイモガイ	65							Ⅰ－2－c
	アンボンクロザメガイ	66	1					1	Ⅰ－2－c
	クロフモドキ	67							Ⅰ－2－c
キセルガイ	ツヤギセル	68					3	3	Ⅴ－8
ナンバンマイマイ	シュリマイマイ	69	9		3		5	17	Ⅴ－8
	カツレンマイマイ	70							Ⅴ－7

科名	種名	番号	Ⅰ層		Ⅱ層		Ⅲ層		Ⅳ層		Ⅴ層		最少個体数	生息地
			右殻	左殻	右	左	右	左	右	左	右	左		
フネガイ	エガイ	71												Ⅰ－1－a
	カリガネエガイ	72												Ⅱ－1－b
	リュウキュウサルボウガイ	73												Ⅱ－2－c
タマキガイ	ソメワケグリガイ	74		1								1	2	Ⅰ－2－c
ウグイスガイ	クロチョウガイ	75												Ⅰ－4－a
	ミドリアオリガイ	76												Ⅰ－1－a
シュモクアオリガイ	シュモクアオリガイ	77												Ⅰ－2－a
	マクガイ	78												Ⅲ－1－b
シュモクガイ	ニワトリガキ	79												Ⅱ－1－b
イタヤガイ	チサラガイ	80												Ⅰ－4－c
	リュウキュウオウギガイ	81												Ⅰ－2－c
ウミギクガイ	メンガイ	82												Ⅰ－2－a
イタボガキ	オハグロガキ	83												Ⅰ－1－a
	ニセマガキ	84	1								1		2	Ⅱ－1－b
シジミガイ	シレナシジミガイ	85	12	11	1		5	3	8	8	2	1	28	Ⅲ－0－c
キクザルガイ	シロザルガイ	86												Ⅰ－2－a
シャコガイ	シラナミガイ	87					1						1	Ⅰ－2－a
	ヒメジャコガイ	88	1				1						2	Ⅰ－2－a
	ヒレジャコガイ	89	1				1						2	Ⅰ－2－c
	シャゴウ	90					1						1	Ⅰ－2－c
ザルガイ	カワラガイ	91			1		1	2	1		1		5	Ⅱ－2－c
	リュウキュウザルガイ	92												Ⅱ－2－c
マルスダレガイ	スダレハマグリ	93												Ⅱ－1－c
	チョウセンハマグリ	94	1				1		2	2	1		5	Ⅱ－1－c
	サラサガイ	95		1									1	Ⅰ－2－c
	アラスジケマンガイ	96	2	3			2	1	8	8	4	2	17	Ⅲ－1－c
	オイノカガミガイ	97	1	2						1			3	Ⅱ－1－c
	ヌノメガイ	98												Ⅱ－1－c
	オキシジミガイ	99								1			1	Ⅱ－1－c
	ヒメリュウキュウアサリ	100												Ⅱ－1－c
	イオウハマグリ	101												Ⅱ－1－c
チドリマスオガイ	イソハマグリ	102						1	3	5	4	3	10	Ⅰ－1－c
ナミノコガイ	ナミノコガイ	103	1						3				4	Ⅱ－1－c
ニッコウガイ	ヌノメイチョウシラトリ	104												Ⅲ－1－c
リュウキュウマスオガイ	マスオガイの一種	105												Ⅲ－1－c
クサズリヒザラガイ	ヒザラガイの一種	106												Ⅰ－1－a
最少個体数			164		7		89		241		1,228		1,729	
貝殻中につまった土から得た微小腹足貝														
ヤマキサゴ	オキナワヤマキサゴ													
カワザンショウガイ	ヘソカドガイ属の一種													
キセルガイ	ツヤギセル													
オカクチキレガイ	オカチョウジガイ													
ベッコウマイマイ	トクノシマベッコウマイマイ													
ナンバンマイマイ	シュリマイマイ													
オナジマイマイ	イトマンマイマイ													
	ウスカワマイマイ													
ネジレガイ	コメツブタワラガイ													
計														

※　生息地の記号、個体数の算出については表74と同じ。

口区

仲門門中墓の前庭に設定した６つのグリッドから出土したもので、他の区に比べると出土量は非常に少ない。貝殻は、発掘した第Ⅰ層から第Ⅴ層の各層から出土しており、特に最下層のⅤ層からの出土が区の約70%を占める。

層位別の主体貝構成比較をみると、この区でもウミニナ科の貝殻が主体で81.6%を占める。次いでセンニンガイ、クモガイ、シレナシジミガイと続く、同じような環境の河口干潟・マングローブ域の砂泥・砂礫底に生息する貝が主である。

第Ⅲ層発掘調査中には、サラサバテイ、クモガイやシャコガイ科等の大形貝が目についたが、集計した出土状況の表や主体貝構成比較の表をみると、クモガイが最も多く、ウミニナ、サラサバテイ、シレナシジミガイとつづく。

第Ⅳ層でもクモガイやサラサバテイは多く出土した。

第Ⅴ層では、第Ⅲ層・第Ⅳ層で出土量の多いクモガイの出土はなく、サラサバテイもわずか1点の出土である。また第Ⅲ層・第Ⅳ層では出土量の少ないセンニンガイがウミニナ科に次いで多い。この層では特にウミニナ科の貝が91.5% を占めており、つづくセンニンガイを含めると、河口干潟・マングローブ域の砂泥・砂礫底に生息する貝が95%を占めている。

この区では他の区に比べると、シュリマイマイの出土が少なく構成比率が低い。

表76　主体貝構成比較

貝種名	Ⅰ層		Ⅱ層		Ⅲ層		Ⅳ層		Ⅴ層		計	
ウミニナ科	1	101	1	5	2	24	1	156	1	1,124	1	1,140
		61.6%		71.4%		26.9%		64.7%		91.5%		81.6%
センニンガイ	3	11				2		5	2	45	2	63
		6.7%				2.2%		2.1%		3.7%		3.6%
クモガイ		1			1	25	2	14			3	40
		0.6%				28.1%		5.8%				2.3%
シレナシジミガイ	2	12	2	1	4	5	4	8		2	4	28
		7.3%		14.3%		5.6%		3.3%		0.2%		1.6%
チョウセンサザエ	5	6			5	4	3	9	5	7	5	26
		3.7%				4.5%		3.7%		0.6%		1.5%
マガキガイ	6	4						5	3	14	6	23
		2.4%						2.1%		1.1%		1.3%
サラサバテイ		3			3	9	6	7		1	7	20
		1.8%				10.1%		2.9%		0.1%		1.2%
カワニナ科 トウガタカワニナ科		1			5	4		5	4	10	7	20
		0.6%				4.5%		2.1%		0.8%		1.2%
アラスジケマンガイ	7	3				2	4	8	7	4	9	17
		1.8%				2.2%		3.3%		0.3%		1.0%
シュリマイマイ	4	9			7	3			6	5	9	17
		5.5%				3.4%				0.4%		1.0%
最少個体数		164		7		89		241		1,228		1,729
		9.5%		0.4%		5.2%		13.9%		71.9%		100.0%

表の左の数字は層別順位、上段は個体数、下段は層別比率である。

ハ　区

他の区とは比較にならない程膨大な量の貝殻が出土した。この区では第Ⅶ層（Ⅶb層を含む）で貝殻が層をなして多量に出土した。

第Ⅶ層の発掘調査中はサラサバテイ等の大きめの貝が目立って出土した。掘り下げていく段階でアラスジケマンガイやイソハマグリ、アマオブネガイ科が多くなり、主体が小形貝に変わってきたので、その時点で大形貝の目立つ上層出土の貝殻と区別し、第Ⅶb層として遺物を取り上げた。

出土量の多かったいくつかのグリッドから出土した貝の量は、1グリッドで、他の地区・区（21－イ・21－ロ・22－イ）の総出土量の約3倍にものぼる程である。この区で出土したすべての貝を洗浄してそれを分類し集計するのは多大な人手と時間を要するが、出土量の多いグリッドの出土状況を示すだけでもこの区の出土貝種・主体貝およびその構成比率は十分把握できると思われるので、グリッドをE－94グリッドに限定して出土貝殻の洗浄・分類・集計を行なった。

出土量の多い第Ⅶ層と第Ⅶb層から出土した貝殻の主体貝構成比較の表を作成した。

表77　主体貝の構成比較

科・種名	Ⅶ層			Ⅶb層			全体		
	順位	個体数	比率	順位	個体数	比率	順位	個体数	比率
ウミニナ科	1	15,395	79.9%	1	62,640	85.4%	1	78,057	84.3%
センニンガイ	2	958	5.0%	2	2,183	3.0%	2	3,144	3.4%
シレナシジミガイ	3	669	3.5%	3	1,966	2.7%	3	2,637	2.8%
カワニナ科・トウガタカワニナ科	5	357	1.9%	4	1,893	2.6%	4	2,253	2.4%
シュリマイマイ	9	114	0.6%	5	939	1.3%	5	1,053	1.1%
アラスジケマンガイ	6	215	1.1%	6	618	0.8%	6	834	0.9%
サラサバテイ	4	581	3.0%		142	0.2%	7	723	0.8%
マガキガイ	8	188	1.0%	8	402	0.5%	8	590	0.6%
クモガイ	7	212	1.1%	10	319	0.4%	9	531	0.6%
イソハマグリ		62	0.3%	7	426	0.6%	10	488	0.5%
最少個体数		19,259	20.8%		73,337	79.2%		92,627	100.0%

※　Ⅰ層から1個体、Ⅵ層から30個体出土したが、出土率は0.03%で1%にも満たない。

貝殻の出土数は大形貝の多い第Ⅶ層に比べ、小形貝の多くなる 第Ⅶb層の方が出土が多く、E－94グリッド出土数の約80%を占める。

第Ⅶ層ではウミニナ科に次いでセンニンガイ、シレナシジミガイの出土が多く、発掘調査時に目立って出土していたサラサバテイがつづく。

主体を占める上位3位までの貝は、いずれも河口干潟・マングローブ域の砂泥・砂礫底に生息する貝で、層出土数の88.4%を占める。

第Ⅶb層でも上位3位までの順位は同一で、91.1%を占める。この層ではサラサバテイの占める割合は減少し、シュリマイマイや小形貝が目立つ。

イ区の第Ⅱ層上部と第Ⅱ層下部同様、E－94グリッド第Ⅶ層と第Ⅶb層から出土したシレナシジミガイとアラスジケマンガイの完形貝を計測した。（表78、79）

シレナシジミガイは、第Ⅶ層で666／669個体の出土中完形貝は166／196個体で残存率は30%にも満たない。貝の大きさは小さいもので2～3㎝×2～3㎝、大きめのものは6～7㎝×7㎝以上である。この区でも3～4㎝×3～4㎝の貝が最も多く、3～5㎝×3～6㎝の大きさの貝が主体を占める。

第Ⅶb層では最小個体数が1,966／1,722個体で出土量が多いが、完形貝も663／690個体で残存率は40%に近く、第Ⅶ層より残存率が良い。貝殻の大きさも2～3㎝×2～3㎝から7㎝以上×7㎝以上のかなり大きな貝殻も出土した。この層では4～5㎝×4～5㎝の大きさの貝が最も多く、3～4㎝×4～5㎝の大きさの貝も多い。第Ⅶ層と比較すると大きめの貝が多い。また2～3㎝×3～4㎝のやや小さめの貝の出土も目立つ。

アラスジケマンガイは第Ⅶ層で最小個体数196／215個体のうち完形貝は97／95個体で、2～3㎝×2～3㎝から3～4㎝×4～5㎝の大きさの貝殻が出土した。中でも2～3㎝×3～4㎝の大きさの貝が過半数を占めており、採集した貝の大きさがほぼ一定している。

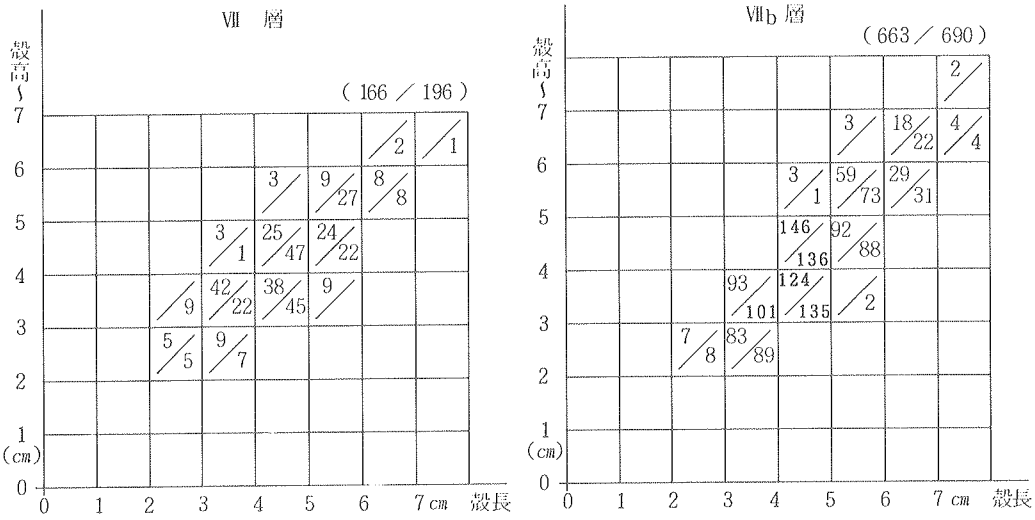
第Ⅶb層では出土貝が多く、572／618個体のうち完形貝でも306／351個体出土している。貝殻は1～2㎝×2～3㎝の小さなものから4～5㎝×5～6㎝のかなり大きなものまで出土しているが、この層でも2～3㎝×3～4㎝の大きさの貝が最も多く過半数を占める。他の大きさの貝の出土比率も第Ⅶ層とほぼ同じである。

第Ⅶb層から出土したウミニナ科の貝殻については、10㎝単位で取り上げたレベルごとに300～400個体の貝（最少個体数に算出した貝殻）を無作為に抽出した。

黒住氏の作成した種の組成比率（表84）をみると、抽出したウミニナ科1,647個体のうちキバウミニナⅠ型が1,239個体で75.2%、キバウミニナⅡ型が333個体で20.2%、マドモチウミニナが75個体で4.6%の比率で、キバウミニナⅠ型が主体である。このグリッドの第Ⅶb層だけでなく、この区のウミニナ科の種の組成比率も大差はないと思われる。

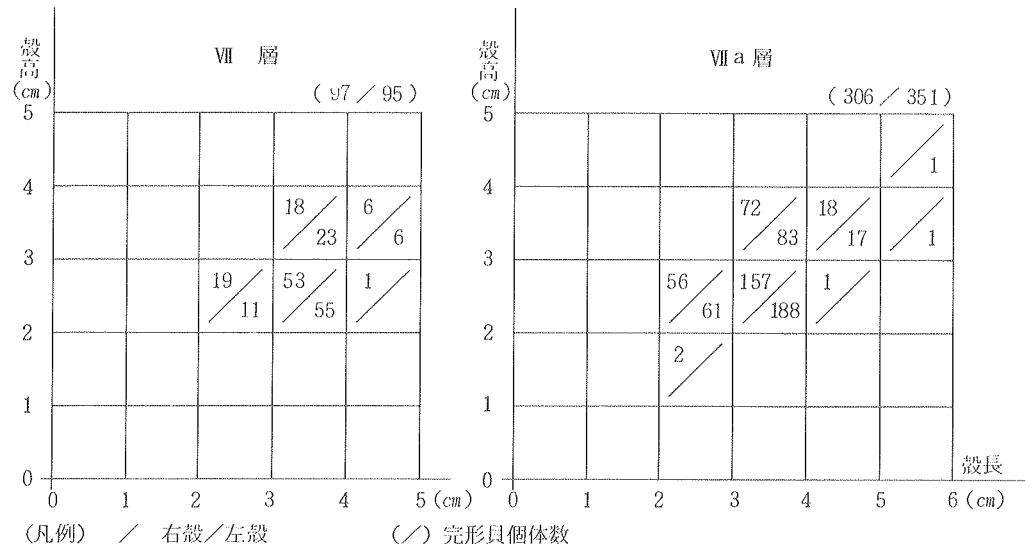
また、ウミニナ科の部位計測の際、その貝殻の中につまった土の中から微小陸産貝が20点得られた。いずれも5㎜未満の微小貝である。この微小陸産貝の科・種や個体数は、出土状況表の下に項目を設けた。

表78　シレナシジミガイの計測相関



（凡例）　／　右殻／左殻　　（／）完形貝個体数

表79　アラスジケマンガイの計測相関



（凡例）　／　右殻／左殻　　（／）完形貝個体数

表80　21地区ハ区　貝類出土状況

科名	種名	番号	E－94グリッド					最少個体数	生息地
			I層	IV層	VI層	VII層	VII b層		
ツタノハガイ	オベッコウカサガイ	1					4	4	I－1－a
ニシキウズガイ	クマノコガイ	2				2	5	7	I－1－b
	ニシキウズガイ	3					2	2	I－2－a
	ギンタカハマガイ	4				5	5	10	I－4－a
	コシダカギンタカハマガイ	5				1		1	I－4－a
	サラサバテイ	6				581	142	723	I－4－a
	オキナワイシダタミ	7					27	27	II－1－b
リュウテンサザエ	ヤコウガイ	8				4／1	12／3	16	I－4－a
	チョウセンサザエ	9				72／105	35／194	299	I－3－a
	カンギク	10				12／18	66／1	84	II－1－b
	オオウラウズガイ	11					2／	2	I－2－a
アマオブネガイ	ニシキアマオブネ	12							I－1－c
	マルアマオブネ	13				8	52	60	I－1－b
	ヒラマキアマオブネ	14					1	1	III－0－d
	イシダタミアマオブネ	15				3		3	I－0－a
	マングローブアマガイ	16				5	67	72	III－1－b
	カノコガイ	17				19	61	80	III－1－e
	イガカノコガイ	18				33	167	200	III－1－e
	シマカノコガイ	19				2		2	III－0－d
	ヒメカノコガイ	20							III－1－e
ヤマタニシ	オキナワヤマタニシ	21					3	3	V－8
カワニナ	カワニナ	22							IV－5・6
トウガタカワニナ	ヌノメカワニナ	23							IV－5
	アマミカワニナ	24				3	357	1,893	2,253	IV－5
	トウガタカワニナ	25							IV－5
ウミニナ	キバウミニナ（I）	26							III－0－c
	キバウミニナ（II）	27				22	15,395	62,640	78,057	III－0－c
	マドモチウミニナ	28							III－1－c
	センニンガイ	29				3	958	2,183	3,144	III－0－c
オニノツノガイ	オニノツノガイ	30					16	37	53	I－2－c
	ヨコワカニモリガイ	31					1	3	4	I－2－c
ソデガイ	マガキガイ	32					188	402	590	I－2－c
	オハグロガイ	33					1	2	3	II－2－c
	クモガイ	34					212	319	531	I－2－c
	ラクダガイ	35					8	22	30	I－4－c
タマガイ	ヘソアキトミガイ	36						16	16	I－2－c
	ホウシュノタマガイ	37					1	2	3	II－1－c
タカラガイ	ナツメタカラガイモドキ	38								I－2－a
	ハナビラダカラガイ	39						5	5	I－1－a
	コモンダカラガイ	40								I－1－a
	ハナマルユキガイ	41					2	3	5	I－3－a
	ホシダカラガイ	42					5	7	12	I－2－c
	ホシキヌタガイ	43					1	1	2	I－2－a
	ヤクシマダカラガイ	44					1	9	10	I－2－a
フジツガイ	ホラガイ	45					3	4	7	I－4－a
	シノマキガイ	46						1	1	I－2－a
アッキガイ	ガンゼキボラ	47					1	1	2	I－4－a
	シラクモガイ	48					1	2	3	I－3－a
	アカイガレイシガイ	49					1		1	I－3－a
オリイレヨフバイ	アツムシロガイ	50								I－1－a
	チビオリイレムシロガイ	51						1	1	II－2－c
エゾバイ	ノシガイ	52								I－1－a
	ウスイロバイ	53					2	17	19	II－2－c
イトマキボラ	リュウキュウツノマタガイ	54					1		1	I－3－a
	イトマキボラ	55					8	2	10	I－2－a
オニコブシガイ	コオニコブシガイ	56					3	9	12	I－3－a
イモガイ	マダライモガイ	57						6	6	I－1－a
	ジュズカケサヤガタイモ	58					1		1	I－1－a
	サヤガタイモガイ	59						2	2	I－1－a
	クロミナシガイ	60					2	9	11	I－2－c
	アカシマミナシガイ	61					1	3	4	I－2－c
	ヒラマキイモガイ	62						1	1	I－2－c
	ロウソクガイ	63						1	1	I－2－c
	ヤナギシボリイモガイ	64					2	3	5	I－2－a
	イボカバイモガイ	65						2	2	I－2－c
	アンボンクロザメガイ	66					15	44	59	I－2－c
	クロフモドキ	67					2		2	I－2－c
キセルガイ	ツヤギセル	68					26	91	117	V－8
ナンバンマイマイ	シュリマイマイ	69					114	939	1,053	V－8
	カツレンマイマイ	70						1	1	V－7

科名	種名	番号	E－94グリッド I層 右殻	I層 左殻	IV層 右	IV層 左	VI層 右	VI層 左	VII層 右	VII層 左	VII b層 右	VII b層 左	最少個体数	生息地
フネガイ	エガイ	71							4	5			5	I－1－a
	カリガネエガイ	72							9	20	107	106	127	II－1－b
	リュウキュウサルボウガイ	73							1		5	3	6	II－2－c
タマキガイ	ソメワケグリガイ	74								1	8	4	9	I－2－c
ウグイスガイ	クロチョウガイ	75												I－4－a
	ミドリアオリガイ	76												I－1－a
シュモクアオリガイ	シュモクアオリガイ	77							2	2	5	3	7	I－2－a
	マクガイ	78												III－1－b
シュモクガイ	ニワトリガキ	79												II－1－b
イタヤガイ	チサラガイ	80									1		1	I－4－c
	リュウキュウオウギガイ	81												I－2－c
ウミギクガイ	メンガイ	82							2	2	1		3	I－2－a
イタボガキ	オハグロガキ	83												I－1－a
	ニセマガキ	84							15	1	85	3	100	II－1－b
シジミガイ	シレナシジミガイ	85	1				1	1	666	669	1,966	1,722	2,637	III－0－c
キクザルガイ	シロザルガイ	86							1		5	2	6	I－2－a
シャコガイ	シラナミガイ	87								4	8	4	12	I－2－a
	ヒメジャコガイ	88							2	1	6	3	8	I－2－a
	ヒレジャコガイ	89							3	6	3	5	11	I－2－c
	シャゴウ	90												I－2－c
ザルガイ	カワラガイ	91							8	9	5	11	20	II－2－c
	リュウキュウザルガイ	92							2		12	12	14	II－2－c
マルスダレガイ	スダレハマグリ	93							2	7	28	14	35	II－1－c
	チョウセンハマグリ	94							80	77	338	339	419	II－1－c
	サラサガイ	95												I－2－c
	アラスジケマンガイ	96					1		196	215	572	618	834	III－1－c
	オイノカガミガイ	97							4	4	15	15	19	II－1－c
	ヌノメガイ	98									3	2	3	II－1－c
	オキシジミガイ	99							24	22	114	111	138	II－1－c
	ヒメリュウキュウアサリ	100							2		16		18	II－1－c
	イオウハマグリ	101							1		4	3	5	II－1－c
チドリマスオガイ	イソハマグリ	102							62	52	405	426	488	I－1－c
ナミノコガイ	ナミノコガイ	103							10	5	51	34	61	II－1－c
ニッコウガイ	ヌノメイチョウシラトリ	104												III－1－c
リュウキュウマスオガイ	マスオガイの一種	105									4	5	5	III－1－c
クサズリヒザラガイ	ヒサラガイの一種	106												I－1－a
最少個体数			1				30		19,259		73,337		92,627	
貝殻中につまった土から得た微小陸産貝														
ヤマキサゴ	オキナワヤマキサゴ										1		1	V－8
カワザンショウガイ	ヘソカドガイ属の一種										6		6	不明
キセルガイ	ツヤギセル										1		1	V－8
オカクチキレガイ	オカチョウジガイ										1		1	V－8
ベッコウマイマイ	トクノシマベッコウマイマイ										3		3	V－7
ナンバンマイマイ	シュリマイマイ										5		5	V－8
オナジマイマイ	イトマンマイマイ										1		1	V－7
	ウスカワマイマイ										1		1	V－9
ネジレガイ	コメツブタワラガイ										1		1	V－7
計											20		20	

貝の生息地の分類

外洋～内湾		水深		底質	
I	外洋・サンゴ礁域	0	潮間帯上部　（1ではノッチ、IIIではマングローブ）	a	岩板
		1	潮間帯中・下部	b	転石
II	内湾・転石地域	2	亜潮間帯上縁部（Iではイノー）	c	岩礫底、砂泥底、砂底
		3	干瀬　（Iにのみ適用）	d	マングローブ植物上
III	河口干潟・マングローブ域	4	礁斜面およびその下部	e	淡水の流入する礫底
IV	淡水域	5	止水		
		6	流水		
V	陸域	7	林内		
		8	林内・林縁部		
		9	林縁部		
		10	海浜域		
VI	その他	11	打ち上げ物		
		12	化石		

個体数の算出は下記のようにおこなった

1. 巻貝は殻頂部を有する貝と、殻頂は欠損しているが3／4以上残存している完形に近い貝を1個体とした。
   また、リュウテンサザエ科の貝は殻数／蓋数を示し、その多い方を最少個体数とした。
2. 二枚貝は殻頂を有する貝を左右それぞれ集計し、その多い方を最少個体数とした。
3. 巻貝・二枚貝とも、個体数を算出できる貝はなく、殻頂が欠損し破損のいちじるしい貝だけが出土した場合に限り、1片でも数片でも1個体とした。

小　結

この地区の出土量をみるとハ区で最も多く、イ区では最小個体数が15,922個体、ロ区で1,729個体の出土であるのに対し、ハ区ではE－94グリッドから出土した貝殻だけでも92,627個体である。このグリッドから出土した貝殻の個体数をみても、ハ区の貝殻出土量の膨大さは要易に把握できよう。　イ、ロ、ハ区とも、ウミニナ科・シレナシジミガイ・センニンガイが多く、河口干潟・マングローブ域の砂泥、砂礫底に生息する貝が主体を占め、この１科２種でイ区では79.1%、ロ区で86.8%、ハ区で90.5%を占める。また淡水域に生息するカワニナ科・トウガタカワニナ科の貝殻の出土も多い。

出土数が10位までの主体貝の貝種はほぼ同じだが、その構成比率は区によって多少変化がみられる。

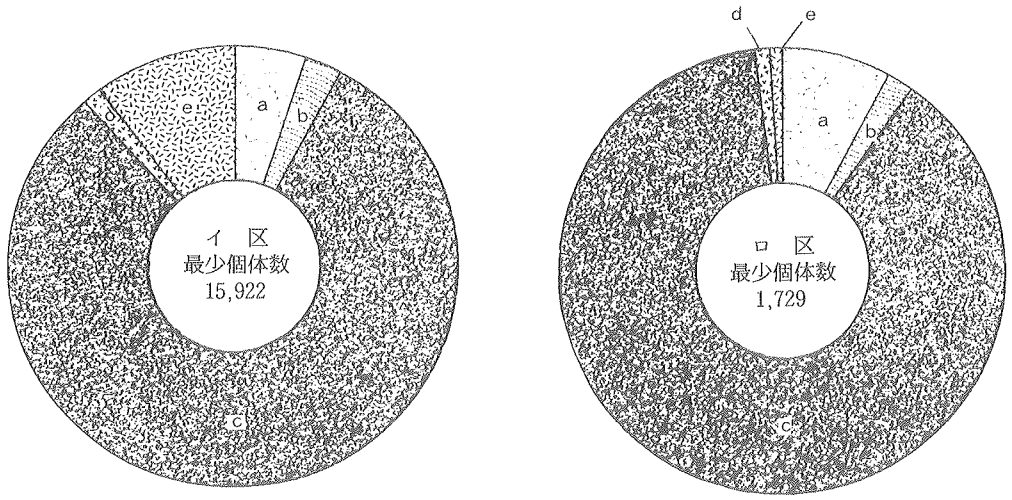
イ区では林内・林縁部に生息するシュリマイマイの出土が多く２位を占め、イソハマグリやクモガイ・マガキガイ等、サンゴ礁海域の砂底に生息する貝も多く出土した。

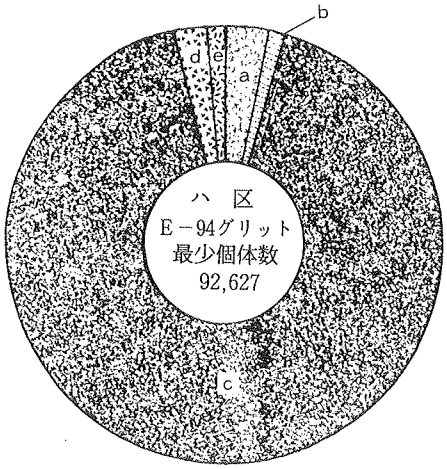
ロ区では、海洋・サンゴ礁海域に生息する貝の出土が他の区に比べると多く、クモガイが３位を占める。またクモガイやマガキガイ等の砂底に生息する貝の他に、チョウセンサザエやサラサバテイ等岩礁に生息する貝の出土も多い。

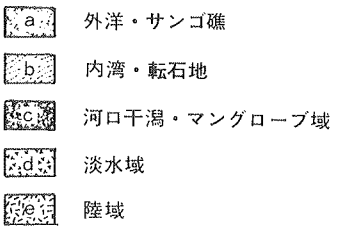
出土貝の多いハ区では、ウミニナ科だけで84.3%を占める。上位３位までの貝は河口干潟・マングローブ域に生息する貝で、次いで淡水域に生息するカワニナ科・トウガタカワニナ科の貝が多い。

地区ごとに生息地別構成比較を円グラフで表示した。（図168）

図168　生息地別　構成比較







シレナシジミガイの計測によって、それぞれの区や層から出土した貝の大きさに多少の差異がみられた。シレナシジミガイの大きさを区別にみるとハ区で大きめの貝殻が多く出土しており、イ区ではやや小さい。さらに層別にみると、同区でも下層の方で大きめの貝が出土する。イ区第Ⅱ層上部で出土する貝殻の平均的な大きさは3×4㎝×3×5㎝、ハ区第Ⅶb層では3～5㎝×4～5㎝の大きさで、ほぼ一まわりの差がある。

アラスジケマンガイは2～3㎝×3～4㎝の大きさの貝が過半数を占め、区、層による差異はみられない。

貝の分類・集計の段階で、左右の殻数や蓋と殻の数量にかなり差がある貝が出土している。前者はイタボガキ科の貝で、後者はリュウテンサザエ科の貝である。

イタボガキ科の貝殻の出土は、右殻が多く左殻はごくわずかである。この科の貝は左殻で岩等に付着して生息しているので、採集した貝はほとんどが右殻で、たまに岩が付着した状態で左殻が出土する。

リュウテンサザエ科のチョウセンサザエは蓋の数に比べ殻の数がかなり少ない。チョウセンサザエが多量に出土する遺跡では、大抵蓋数に比べ殻数は少ない。貝採集の際、採集貝（殻）の重量やその収納用具の大きさ等にもかかわってくるのであろう。

ウミニナ科の貝については、グリッドと層位を限定して貝を抽出し、黒住氏にその組成比率を示していただいた。貝種ではキバウミニナⅠ型が75～80％を占めており、キバウミニナⅡ型やマドモチウミニナの占める割合は低く、全体的にみても同様の比率であると思われる。

この地区のウミニナ科の出土量や、主体貝をみても河口干潟・マングローブ域に生息する貝が圧倒的に多く、シュリマイマイ等の林内や林縁部に生息する貝も多量に出土することから、遺跡の近くにマングローブが繁茂した河川があり、周囲に木々の生い茂った環境があったことを示唆している。

b．22地区

イ　区

第Ⅰ層と第２号・第３号遺構・フィッシャーの第Ⅱ層と第Ⅲ層から貝殻が出土した。各遺構とも第Ⅱ層の方が出土量は多い。

第Ⅰ層から出土した貝殻はわずか20個体で、その中でマガキガイが10個出土しており50%を占める。またウミニナ科の貝殻はわずか１点の出土で非常に少ない。

遺構別にみると第３号遺構出土の貝殻が多く、区出土量の92.8%を占める。中でも第Ⅱ層の出土量は多い。

遺構別の主体貝構成比較表を作成した。

表81　22地区イ遺構別　主体貝構成比較

遺構 / 科・種名	第２号			第３号			フィッシャー			全体		
	順位	個体数	比率	順位	個体数	比率	順位	個体数	比率	順位	個体数	比率
ウミニナ科	1	284	52.2%	1	11,597	75.1%	1	335	52.7%	1	12.217	73.4%
シレナシジミガイ	3	38	7.0%	2	915	5.9%	4	39	6.1%	2	992	6.0%
サラサバテイ	2	42	7.7%	3	733	4.7%	7	8	1.3%	3	783	4.7%
センニンガイ	5	20	3.7%	4	567	3.7%	5	14	2.2%	4	601	3.6%
シュリマイマイ		2		5	401	2.6%	2	128	20.1%	5	531	3.2%
チョウセンサザエ	9	13	2.4%	6	307	2.0%	8	7	1.1%	6	329	2.0%
マガキガイ	4	36	6.6%	7	119	1.3%		4		7	249	1.5%
クモガイ	5	20	3.7%	8	146	0.9%	6	9	1.4%	8	175	1.1%
チョウセンハマグリ		11		9	101	0.7%		3		9	115	0.7%
イガカノコガイ		1			32		3	47	7.4%	10	80	0.5%
最少個体数		544	3.3%		15,443	92.8%		636	3.8%		16,643	100%

出土量の多い第３号遺構でウミニナ科の貝殻が75.1%を占めているのに対し、第２号遺構・フィッシャーでは50%強で出土比率は低い。

第２号遺構では発掘調査時サラサバテイが目立った。そのサラサバテイはウミニナ科の貝殻に次いで多く、砂底に生息するマガキガイやクモガイも多く出土した。

第３号遺構では、発掘調査時からサラサバテイやクモガイ、シャコガイ科等の大形貝が目立っていた。リュウテンサザエ科のチョウセンサザエやヤコウガイの出土も多い。

この区でもチョウセンサザエは蓋が多く、殻が95個体の出土に対し蓋は277個も出土しており、個体数を算出するとほぼ３倍の開きがある。

ヤコウガイは、この区では第３号遺構のみの出土であるが出土量は多く、殻頂部を有する最

少個体数だけでも27個体確認できる。また表では、殻に比べ蓋はわずか2点の出土であるが、製品として取り上げたヤコウガイの蓋（図143・図版161）は14点中13点がこの第3号遺構から出土したものである。ただ、製品として取り上げたやヤコウガイの蓋は径が7～8㎝程あるのに比べ、出土した殻の方は殻口径が4～6㎝程度でやや小さめである。同一個体の殻と蓋と思われる大きさの貝殻は出土していない。蓋を製品に利用し身を食したとすれば、現在算出した最少個体数は14点増えるが、蓋の大きさに対応する殻の出土がなく、身を食したとする明確な手がかりもないので最少個体数には入れなかった。

フィッシャーでは貝殻の出土は少ない。その中で特に陸産貝のシュリマイマイが目についた。またイガカノコガイが集中して出土しており、サラサバテイ等の大形貝は少ない。シュリマイマイはウミニナ科に次いで多く20.1%を占める。集中して出土したイガカノコガイは45個体の出土で、ウミニナ科、シュリマイマイに次いで3位を占めている。

図169　生息地別構成比較

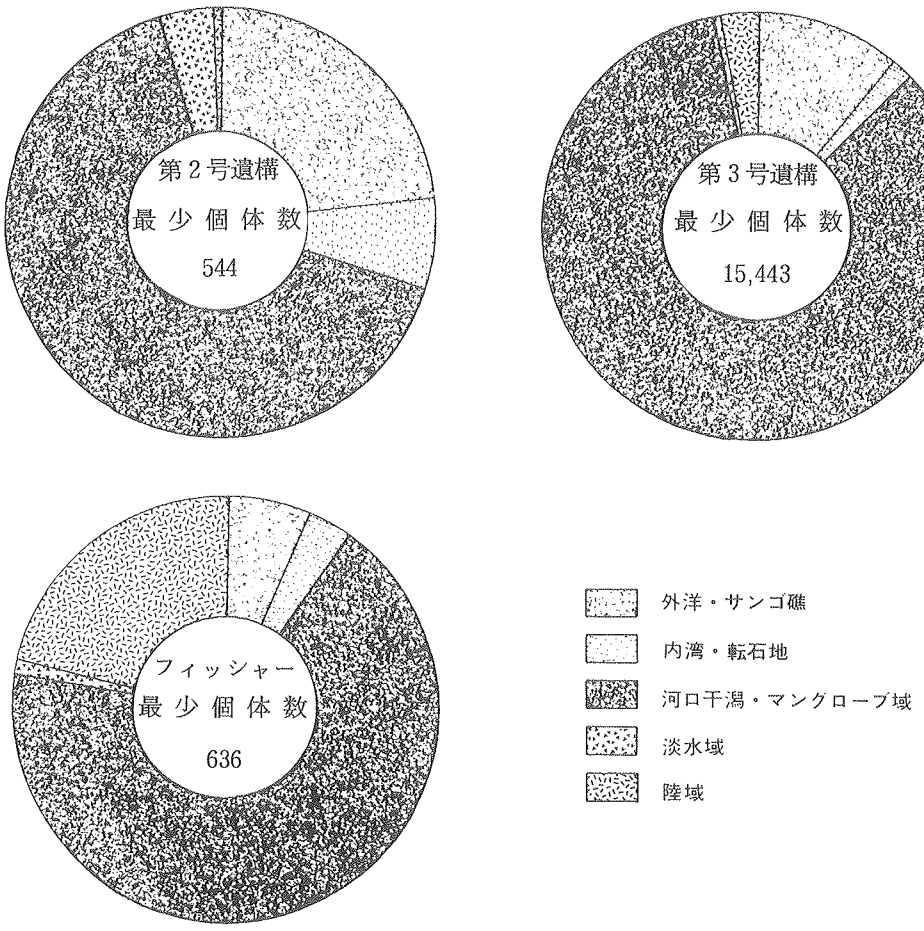


表82　22地区イ区の貝類出土状況

科名	種名	番号	第2号					第3号					生息地
			I層	II上層	II層	III層		II層	III層		II層		
ツタノハガイ	オベッコウカサガイ	1											I－1－a
ニシキウズガイ	クマノコガイ	2			1		1	6	1	7		8	I－1－b
	ニシキウズガイ	3											I－2－a
	ギンタカハマガイ	4						10	1	11	1	12	I－4－a
	コシダカギンタカハマガイ	5						2		2		2	I－4－a
	サラサバテイ	6			42		42	651	82	733	8	783	I－4－a
	オキナワイシダタミ	7						1		1	2	3	II－1－b
リュウテンサザエ	ヤコウガイ	8						20／2	7／	27		27	I－4－a
	チョウセンサザエ	9	2／	2／	9／1	／2	13	95／277	24／30	307	1／7	329	I－3－a
	カンギク	10						23／	2／	25	6／	31	II－1－b
	オオウラウズガイ	11						1／	1／	2		2	I－2－a
アマオブネガイ	ニシキアマオブネ	12											I－1－c
	マルアマオブネ	13						15		15	2	17	I－1－b
	ヒラマキアマオブネ	14											III－0－d
	イシダタミアマオブネ	15											I－0－a
	マングローブアマガイ	16						2	3	5	2	7	III－1－b
	カノコガイ	17											III－1－c
	イガカノコガイ	18			1		1	30	2	32	47	80	III－1－e
	シマカノコガイ	19						1		1		1	III－0－d
	ヒメカノコガイ	20											III－1－e
ヤマタニシ	オキナワヤマタニシ	21											V－8
カワニナ	カワニナ	22											IV－5・6
トウガタカワニナ	ヌノメカワニナ	23	1	4	16		20	22	6	28	6	55	IV－5
	アマミカワニナ	24											IV－5
	トウガタカワニナ	25											IV－5
ウミニナ	キバウミニナ（I）	26											III－0－c
	キバウミニナ（II）	27	1		249	35	284	9,790	1,807	11,597	335	12,217	III－0－c
	マドモチウミニナ	28											III－1－c
	センニンガイ	29			16	4	20	489	78	567	14	601	III－0－c
オニノツノガイ	オニノツノガイ	30	1	1			1	38	10	48		50	I－2－c
	ヨコワカニモリガイ	31											I－2－c
ソデガイ	マガキガイ	32	10	7	22	7	36	149	50	199	4	249	I－2－c
	オハグロガイ	33			1		1				1	2	II－2－c
	クモガイ	34			19	1	20	123	23	146	9	175	I－2－c
	ラクダガイ	35						1		1		1	I－4－c
タマガイ	ヘソアキトミガイ	36						1		1		1	I－2－c
	ホウシュノタマガイ	37						1		1		1	II－1－c
タカラガイ	ナツメタカラガイモドキ	38											I－2－a
	ハナビラダカラガイ	39						1		1		1	I－1－a
	コモンダカラガイ	40											I－1－a
	ハナマルユキガイ	41	1	1			1	1		1		3	I－3－a
	ホシダカラガイ	42			2		2	14	3	17	2	21	I－2－c
	ホシキヌタガイ	43						2		2		2	I－2－a
	ヤクシマダカラガイ	44						1		1		1	I－2－a
フジツガイ	ホラガイ	45						6		6		6	I－4－a
	シノマキガイ	46											I－2－a
アッキガイ	ガンゼキボラ	47						1		1		1	I－4－a
	シラクモガイ	48						1		1		1	I－3－a
	アカイガレイシガイ	49											I－3－a
オリイレヨフバイ	アツムシロガイ	50						1		1		1	I－1－a
	チビオリイレムシロガイ	51											II－2－c
エゾバイ	ノシガイ	52						1		1		1	I－1－a
	ウスイロバイ	53											II－2－c
イトマキボラ	リュウキュウツノマタガイ	54		1			1					1	I－3－a
	イトマキボラ	55						21	2	23		23	I－2－a
オニコブシガイ	コオニコブシガイ	56	1		1		1			1		3	I－3－a
イモガイ	マダライモガイ	57			1		1					1	I－1－a
	ジュズカケサヤガタイモ	58											I－1－a
	サヤガタイモガイ	59											I－1－a
	クロミナシガイ	60											I－2－c
	アカシマミナシガイ	61											I－2－c
	ヒラマキイモガイ	62											I－2－c
	ロウソクガイ	63											I－2－c
	ヤナギシボリイモガイ	64						1		1		1	I－2－a
	イボカバイモガイ	65											I－2－c
	アンボンクロザメガイ	66						7		7		7	I－2－c
	クロフモドキ	67											I－2－c
キセルガイ	ツヤギセル	68						10	1	11	4	15	V－8
ナンバンマイマイ	シュリマイマイ	69			2		2	296	105	401	128	531	V－8
	カツレンマイマイ	70											V－7

科名	種名	番号	I層		第2号 II上層		第2号 II層		第2号 III層		第2号	第3号 II層		第3号 IV層		第3号	II層			生息地
					右	左	右	左	右	左		右	左	右	左		右	左		
	エガイ	71																		I－1－a
フネガイ	カリガネエガイ	72				1					1								1	II－1－b
	リュウキュウサルボウガイ	73										5	4			5	1		6	II－2－c
タマキガイ	ソメワケグリガイ	74											1	2	2	3			3	I－2－c
ウグイスガイ	クロチョウガイ	75																		I－4－a
	ミドリアオリガイ	76																		I－1－a
シュモクアオリガイ	シュモクアオリガイ	77										10	4	1		11	1		12	I－2－a
	マクガイ	78																		Ⅲ－1－b
シュモクガイ	ニワトリガキ	79																		II－1－b
イタヤガイ	チサラガイ	80																		I－4－c
	リュウキュウオウギガイ	81											1			1			1	I－2－c
ウミギクガイ	メンガイ	82	1				1	1			1		2			2	1		5	I－2－a
イタボガキ	オハグロガキ	83																		I－1－a
	ニセマガキ	84					13		1		14	32	1	8		40	5		59	II－1－b
シジミガイ	シレナシジミガイ	85					30	35	3	3	38	789	774	112	126	915	39	31	992	Ⅲ－0－c
キクザルガイ	シロザルガイ	86											1			1			1	I－2－a
シャコガイ	シラナミガイ	87										4	9		2	11			11	I－2－a
	ヒメジャコガイ	88		1				2			2				1	1			4	I－2－a
	ヒレジャコガイ	89										1	2	1		3			3	I－2－c
	シャゴウ	90										1	1			1			1	I－2－c
ザルガイ	カワラガイ	91		1			4	1			4	11	8	4	4	15	1		21	II－2－c
	リュウキュウザルガイ	92					1				1	3	3			3			4	II－2－c
マルスダレガイ	スダレハマグリ	93											1			1		1	2	II－1－c
	チョウセンハマグリ	94					7	9	2		11	93	64	8	8	101	3	2	115	II－1－c
	サラサガイ	95																		I－2－c
	アラスジケマンガイ	96					14	9		5	19	35	36	5	3	41	3	2	63	Ⅲ－1－c
	オイノカガミガイ	97					2				2		2		3	5			7	II－1－c
	ヌノメガイ	98											1			1			1	II－1－c
	オキシジミガイ	99					3				3	16	9	1	1	17			20	II－1－c
	ヒメリュウキュウアサリ	100										3		1		4			4	II－1－c
	イオウハマグリ	101																		II－1－c
チドリマスオガイ	イソハマグリ	102						1			1	21	25	2	3	28	3	3	32	I－1－c
ナミノコガイ	ナミノコガイ	103																		II－1－c
ニッコウガイ	ヌノメイチョウシラトリ	104										1	2			2			2	Ⅲ－1－c
リュウキュウマスオガイ	マスオガイの一種	105																		Ⅲ－1－c
クサズリヒザラガイ	ヒサラガイの一種	106																		I－1－a
最少個体数			20		17		467		60		544	13,063		2,380		15,443	636		16,643	
貝殻中につまった土から得た微小陸産貝																				
ヤマキサゴ	オキナワヤマキサゴ																			
カワザンショウガイ	ヘソカドガイ属の一種																			
キセルガイ	ツヤギセル																			
オカクチキレガイ	オカチョウジガイ																			
ベッコウマイマイ	トクノシマベッコウマイマイ																			
ナンバンマイマイ	シュリマイマイ																			
オナジマイマイ	イトマンマイマイ																			
	ウスカワマイマイ																			
ネジレガイ	コメツブタワラガイ																			
計																				

貝の生息地の分類

外洋～内湾		水深		底質	
I	外洋・サンゴ礁域	0	潮間帯上部　（1ではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a	岩板
		1	潮間帯中・下部	b	転石
II	内湾・転石地域	2	亜潮間帯上縁部（Iではイノー）	c	岩礫底、砂泥底、砂底
		3	干瀬　（Iにのみ適用）	d	マングローブ植物上
Ⅲ	河口干潟・マングローブ域	4	礁斜面およびその下部	e	淡水の流入する礫底
IV	淡水域	5	止水		
		6	流水		
V	陸域	7	林内		
		8	林内・林縁部		
		9	林縁部		
		10	海浜域		
VI	その他	11	打ち上げ物		
		12	化石		

個体数の算出は下記のようにおこなった

1. 巻貝は殻頂部を有する貝と、殻頂は欠損しているが3／4以上残存している完形に近い貝を1個体とした。
   また、リュウテンサザエ科の貝は殻数／蓋数を示し、その多い方を最少個体数とした。
2. 二枚貝は殻頂を有する貝を左右それぞれ集計し、その多い方を最少個体数とした。
3. 巻貝・二枚貝とも、個体数を算出できる貝はなく、殻頂が欠損し殻縁のいちじるしい貝だけが出土した場合に限り、1片でも数片でも1個体とした。

2．出土したキバウミニナ類の特徴、特に破損形態について

今回の古我地原貝塚からは、多数のキバウミニナ類が出土した（表74、75、80）。ここでは、これらの種類組成、サイズ組成および破損形態等についての観察結果を述べる。

出土したキバウミニナ類は、残存部を3つのカテゴリーに区分して数えた。すなわち、

完　形：全体の8割以上が残っている個体

体層部：体層部のみが残っている個体

破　片：体層の一部や螺層部の一部が残っているもの

である。これらの出土数から、完形の占める割合を推定した。

全出土数約10万個体の中から、この完形のものをサンプルとして計測や観察に用いた。それらは21地区イ、O－96グリッド第Ⅱ層上部のもの約200個体と21地区ハ、E－94グリッド第Ⅶb層の20－30cm、30－40cm、40－50cm、50－60cm、60cm以下の各小区分から300－400個体を無作為に抽出したものである。

これらは2種類、キバウミニナ*Terebralia palustris*とマドモチウミニナ*T. sulcata*から成っていた。キバウミニナには殻形態の異なる2つの型が存在した。この両型の相違点に関しては後述する。

キバウミニナ類は、成熟すると螺旋方向の成長を停止し、殻の表面は常に底質を這うために腹面が磨滅して行[註1]く。それで各個体の磨滅度を以下の規定により3段階に区分した。

磨滅度Ⅰ：螺層部を除き磨滅は著しくない。

Ⅱ：体層腹面で螺肋の一部や次体層縦肋上の螺肋は磨滅する。

Ⅲ：体層腹面はほぼ完全に螺肋が見られず、次体層においても縦肋は不明瞭となる。

また、このグループでは体層に縦張肋が形成される。本永[註2]や西平[註3]は、この縦張肋を基準に、これを持たないものを幼貝、縦張肋を持つが外唇が成熟形態を示さないものを亜成貝、さらに外唇が完成している個体を成貝と3つのステージに区別している。

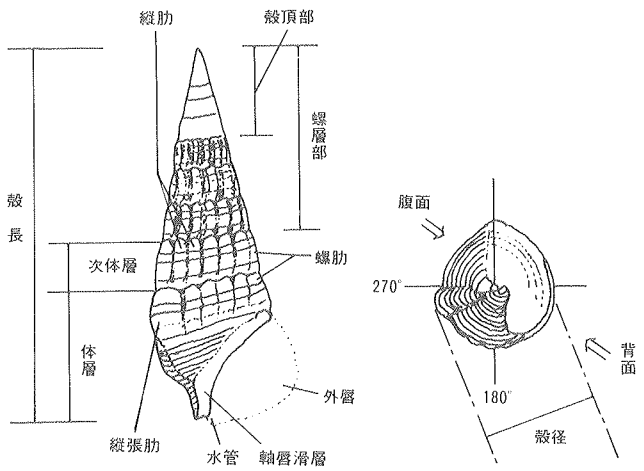


図170　キバウミニナ類の各部の名称と測定部位

今回はこの規定に従い、各個体の成長ステージを記録した。貝殻の各部の各称および測定部位を図170に示した。

サンプルとした完形貝の大部分は、殻口外唇が破損しており、従来計測に用いられる殻長、殻径とも正確に測定することは困難であった。そこで、体層に形成された縦張肋と180°反対側の次体層の幅を測定し、これを殻径と表わした。具体的には、キバウミニナでは上から3本目の、マドモチウミニナでは4本目の螺肋上で測定した。またキバウミニナII型では、明瞭な縦張肋を持たないので、I型相当部分について計測を行った。計測はノギスを用いて、0.05㎜の精度で行った。

今回は、外唇部の破損形態を殻口上縁からの角度によって示した。すなわち底面から見て、水管を中心として殻口上縁部から破損している部分までの角度を右回りに45°ずつに区分して記録した。同時に肉を取り出すための殻頂部の欠損や打ち割られたと考えられる破損部および焼け跡の有無についても記録した。

a．完形貝の出土数の推定

計測・観察は完形貝について行ったので、完形貝の出土割合の推定を試みた。対象とした21地区ハ、E−94グリッド第VIIb層で認められた残存部の各カテゴリーごとの出土数を表83に示した。完形貝が最も多く、体層部のみの個体は少ない。捕獲個体に対する完形のものの割合をいくつかの仮定に基づいて求めてみた。

1．破片は全て別々の個体に由来する。

式①　完形／完形＋体層部＋破片＝0.583

2．破片は、体層部と同数が同じ個体に由来し、残りは別個体から由来する。

式②　完形／完形＋体層部＋（破片−体層部）＝0.662

3．破片は、体層部と同数が同じ個体に由来し、残りのものは1個体の貝から2個の破片が生じる。

式③　完形／完形＋体層部＋［（破片−体層部）／2］＝0.737

4．破片は全て体層部と同じ個体に由来する。

式④　完形／完形+体層部=0.830

これらの仮定の元では、捕獲個体のうち最高83%、最低でも58

表83　キバウミニナ類の部位別出土状況

21地区ハ 第VIIb層	完　形	体層部	破　片
10／20cm	3015	2468	3326
20／30cm	2751	807	2012
30／40cm	2359	249	504
40／50cm	3649	427	1849
50／60cm	16753	2924	8776
60／　cm	4378	509	1488
区分不明	5653	506	1692
総　計	38558	7890	19646

%が完形で出土していると考えられる（式④①）。ここでは中間の仮定２と３により、およそ2／3から3／4が完形貝であると考えておきたい。この結果から、大部分の個体が完形として食用に供されたことが理解される。

以降の解析は、全てこの完形貝を用いて行った。

ｂ．キバウミニナ類の同定

古我地原貝塚のサンプルは、キバウミニナとマドモチウミニナの２種類よりなっていた。さらにキバウミニナは縦張肋、体層および螺肋の形状により２つの型に区別可能であった。図171にこの３つを、そして以下に識別点を示した。

マドモチウミニナ…縦張肋は体層上部と下部で同程度の太さを有し、明らかに認められる。螺層側面は丸みを帯び、全体的に太短い。体層において最上部の螺肋が最も太く、ほぼ下部になる程細くなる。螺肋間は多少開き、彫刻は深い（図171－３）。

キバウミニナ…縦張肋は、認められる場合には体層下部で明瞭であるが上部で広く不明瞭になり、認められない場合もある。螺層側面は直線的で、全体的に細長い。

Ⅰ型…縦張肋は明らかに認められる。体層背面は強く膨れない。体層の螺肋は通常３本目のものが幅広くなる（融合したように見える）。螺肋間は狭い。体層で縦肋は不明瞭（図171－１）。

Ⅱ型…縦張肋は不明瞭であるか存在しない。体層背面は膨れ、丸みを帯びる。体層の螺肋はⅠ型ほど３本目のものが広くなることはない。螺肋間は広く、時には螺肋と同程度となる。体層でも縦肋が認められ、最上部の螺肋はイボ状となる（図171－２）。

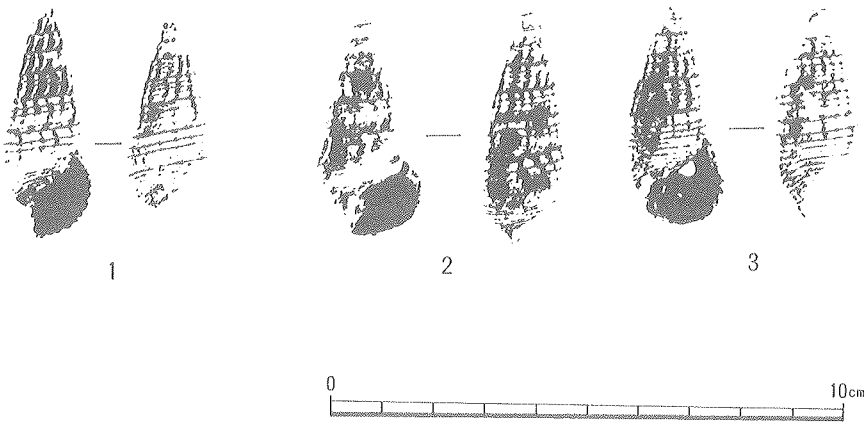


図171　　出土したキバウミニナ類

１：キバウミニナⅠ型　２：キバウミニナⅡ型　３：マドモチウミニナ

いづれも左側は完全個体、右側は破損している個体

キバウミニナⅡ型の一部の個体は、外観がイトカケヘナタリ類に似るが、成貝の軸唇滑層が広がることにより後者と区別される。Ⅰ、Ⅱ型は別種とも考えられるが、中間的な個体の存在することや各特徴の中には推移的なものもあり、ここでは同種としておきたい。

またShokita[註1]らは、タイのキバウミニナを長短の2型に区別し、短い型は成貝のみが見られることを報告している。後述するようにⅠ、Ⅱ型の殻長には差が認められず、彼らの型と今回の型は別のカテゴリーに属するものと思われる。今回のⅠ型の中には太短かく、螺肋間が細長いものより広く、磨滅しているという特徴を持つ個体が一群を形成していたが、細長いものとの間に明確な識別的を見い出すことができず、今回は全てⅠ型として取り扱った。この太短い集団が、Shokitaらの言う短い型に相当するのかもしれない。

c．種類組成

観察を行った各区分ごとの種類組成を表84に示した。キバウミニナⅠ型が、いづれの区分においても最も多く見られた。その割合は71.7%から79.0%とおよそ3／4を占めており、各区分間でその割合の変化は小さい。キバウミニナⅡ型が次いで多く、10.5－26.3%となっている。マドモチウミニナは21地区イを除き、いづれの区分でも10%以下と少なかった。後述するように各種類で破損形態およびその割合が似ていることから、完形貝の割合は種により異なることはないと考えられる。それゆえにサンプルの3つの割合は、貝塚形成時の捕獲比率を表していると思われる。

この種類組成とこの時代のキバウミニナ類の生息量との関係は、

1．この時代の人々の嗜好性による選択的捕獲があったか

表84　各区分ごとのキバウミニナ類の種類組成

	キバウミニナ Ⅰ型	キバウミニナ Ⅱ型	マドモチウミニナ	総計
21地区イ 第Ⅱ層上部	128 (89.1) 79.0	17 (100.0) 10.5	17 (100.0) 10.5	162 100.0
21地区ハ 第Ⅶb層 20／30cm	307 (88.3) 77.9	48 (100.0) 12.2	39 (85.0) 9.9	394 100.0
30／40cm	226 (93.4) 74.8	74 (98.6) 24.5	2 (100.0) 0.7	302 100.0
40／50cm	251 (89.2) 77.7	57 (98.2) 17.6	15 (86.7) 4.6	323 99.9
50／60cm	229 (88.6) 73.2	71 (100.0) 22.7	13 (100.0) 4.2	313 100.1
60／ cm	226 (89.4) 71.7	83 (97.6) 26.3	6 (100.0) 1.9	315 99.9

上段は調査個体数とカッコ内は成貝の百分率、下段は層別の百分率

2．それに伴い捕獲場所が変化したか

といった問題が解決されない限り、出土量の割合＝生息量の割合とはならないと思われる。

ただしキバウミニナは、Ⅰ、Ⅱ型とも現在の沖縄島での生息は確認されておらず[註2、註4]、少なく見積っても、この貝塚から10万個体×0.9＝9万個体以上も出土していることより、過去にはかなりの個体数が生息していたことは確実である。

また表84には、縦張肋を持つ亜成貝以上の成長段階の個体（以下これを成貝とする）の割合も示した。これは、螺層部のみ残っている個体を含めた総標本中の縦張肋を持つ個体の割合を表わすことになり、割られたために成貝と認められなかった個体が存在すると、この値はより大きくなる。つまりここでは成貝の割合が、過小評価されている。それでもキバウミニナⅠ型では約90%、Ⅱ型ではほぼ100%、マドモチウミニナでも最低85%とほとんど成貝によって占められている。現在生息しているキバウミニナ類では、タイでは成貝が多く[註1]、西表島船浦では3／4が幼貝であること[註3]が報告されている。タイで示された割合よりも、この貝塚から出土したものの方が成貝の割合がはるかに高い。それゆえにこの貝塚を利用した人々は、選択的に成貝を捕獲したものと考えられる。

d．サイズ組成

出土したキバウミニナ類の殻径によるサイズ組成の変化を図172に示した。全体としてキバウミニナⅠ型は、15－20㎜の間にピークを持つ単峰型であった。21地区ハでは堆積層の第Ⅶb層は傾斜しているが（図31）、下部から順次サンプリングされている。この下部から上部にかけての変化において、60㎝以下から40／50㎝まで除々に小形になる傾向を示し、30／40㎝で少し大きくなり、また20／30㎝で小さくなっている。21地区イは比較的大形の個体から成っている。

キバウミニナⅡ型は、ピークの幅が14－21㎜と少し広いが、Ⅰ型と同程度のサイズ組成を示す。また下部から上部にかけての殻径の変化も、Ⅰ型と完全に同じで大－小－大－小の傾向を持つ。このようなⅠ、Ⅱ型の殻径頻度の変化の類似や一定した両者の出土割合は、この両型が同一種に属している可能性が高いことを示すものと思われる。

一方マドモチウミニナは16－19㎜にピークを持ち、キバウミニナが示すような下部から上部にかけての変化は、ほとんどみられない。しかしながら、これは調査標本数が少ないことと、殻径がキバウミニナに比べて小さく、その変化が現れにくいことに起因する可能性も考えられる。

貝塚から出土する貝類の研究から、時代とともに乱獲により貝類のサイズが小さくなる場合も知られている[註5]。この問題を考えてみると、キバウミニナⅠ、Ⅱ型に見られる各区分のピークの相違は、下部から上部にかけて殻径が減少するという一定の傾向を示さない。それゆえに乱獲とは別の要因により殻径組成に変化が生じたと思われる。西平[註3]は西表島での観察から、同一マングローブ域においても、各地点で本種の成貝サイズ組成が異なることを示している。下部

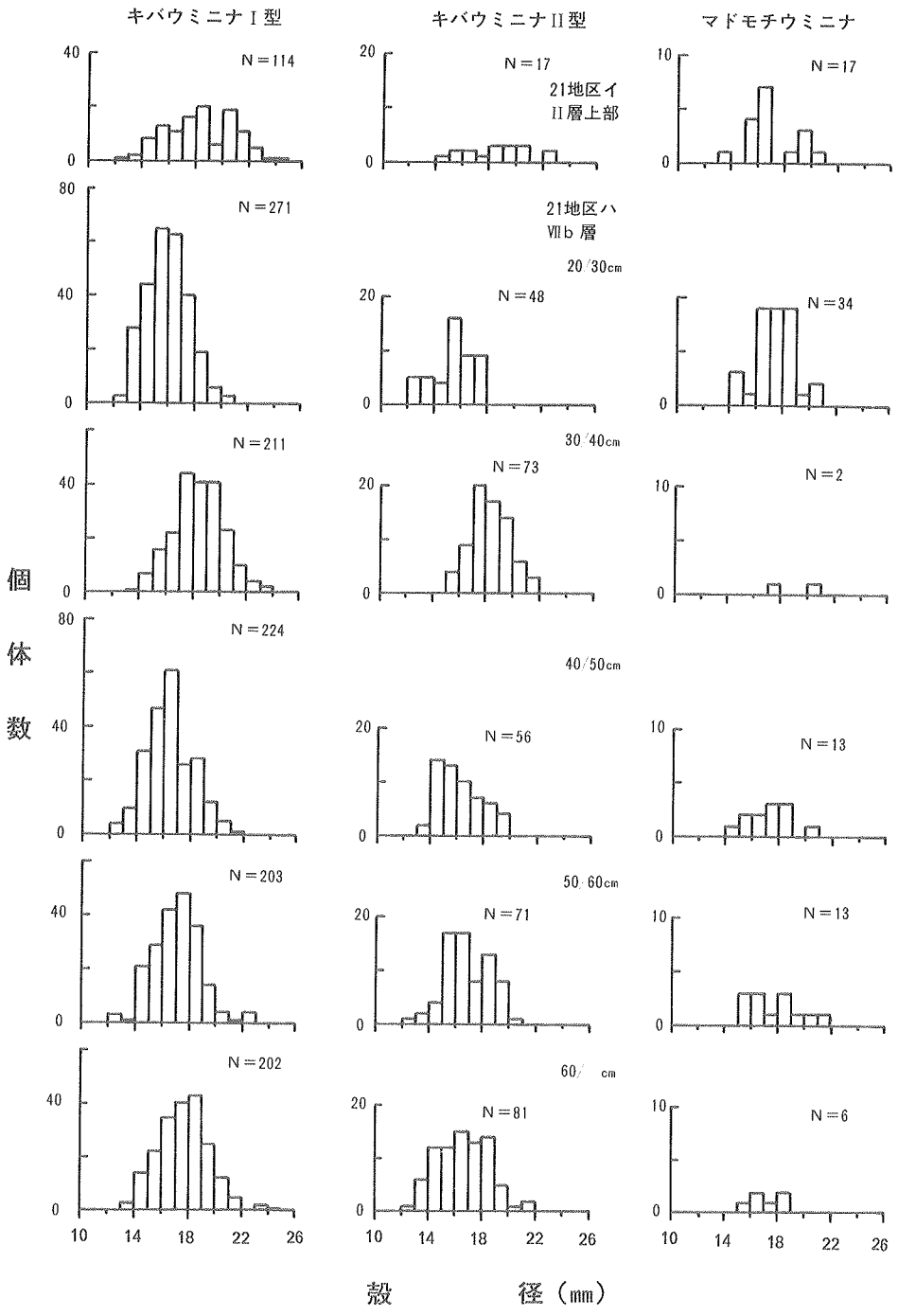


図172　各区分におけるキバウミニナ類の殻径組成

から上部にかけての殻径の変化は、この各地点での殻径の相違が過去にも存在しており、捕獲場所が変化したために生じたのではないかと考えられる。

また現在生息しているキバウミニナ類でも成貝のサイズ組成は、基本的には単峰型であることが知られている[註1、註2、註3]。今回出土した各種も正規分布に近い単峰型となっている。そして後述する推定される殻長に変換したものの範囲は、西表島船浦のもの[註3]と同程度となっている。このことから今回のサイズ組成は、この場所の成貝全体の構成を示すものと考えられる。ゆえに成貝であればその大きさに関係なく捕獲されたことが、この単峰型のサイズ組成に反映していると思われる。

今回出土した個体は、外唇部が破損されており殻長の測定はできなかった。キバウミニナ類のサイズの表示は、一般的に殻長をもって示される。そこで水管部が破損していない一部の個体を用いて、殻長と殻長の相関関係を求め、図173に示した。これらは磨滅による変化を除くために、いづれも磨滅度Ⅰのもののみを用いた。

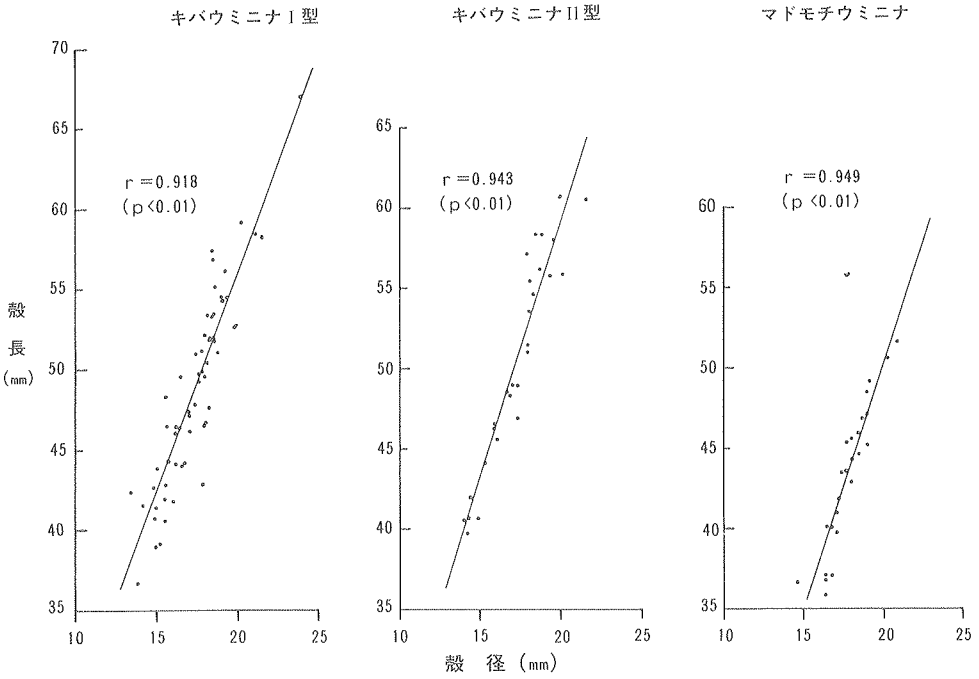


図173　キバウミニナ類の殻径と殻長の相関関係

この回帰直線に基づき、各種の平均的な殻長を求めてみたい。

キバウミニナⅠ型は、L＝2.37W＋1.19（N＝60、Lは殻長、Wは殻径、Nは測定標本数）の回帰式で示される。図172のモード（15－20㎜）から、平均的な殻長は42－56㎜程度であることが解る。

キバウミニナⅡ型では、L＝3.18W－1.19（N＝27）の回帰式で示され、Ⅰ型と同様に考えると殻長40－61㎜となる。

マドモチウミニナは、L=3.07W−11.07（N=24）の回帰式で示され、殻高38−47㎜となる。またいづれの回帰式でも殻径と殻長の相関関係は、0.9以上と高く、有意であった（P<0.01）。

貝塚から出土したものの殻長と現在の個体を比較してみると、キバウミニナでは西表島の平均的サイズは80−120㎜と著しく大きいものとなっている[註3]。タイの個体も80−100㎜とほぼ2倍の大きさを有する[註1]。このように出土した個体は、著しく小形であることが示される。一方、マドモチウミニナの38−47㎜を名護市大浦のもの[註2]と比較してみると、大浦では30−40㎜とキバウミニナほど大きな相違はなく、逆に出土した個体の方が大きい傾向にあった。これらのサイズの違いが何に起因するかは今後の研究を待たねばならない。現在沖縄群島から生息が確認されていないキバウミニナでサイズが小さく、生息しているマドモチウミニナで大きいという現象は、絶滅の過程と考え合わせて興味深い。

e．破損形態

標本として抽出された完形貝は、外唇が破損しているものが大半を占めていた。ここでは外唇の破損角度について検討を行った。調査対象とした個体は、磨滅度Ⅰのもののみを用いた。これは磨滅度が高くなるに従い、破損角度が大きくなることもあると思われたからである。磨滅度に伴い最も大きな相違が見られた22地区イの例を図174に示した。磨滅度ⅠとⅡでは、Ⅱで破損角度が大きくなっている。しかも磨滅度Ⅱでは、破損した辺縁部が白く、明らかに発掘後に欠損が生じたと思われる個体も多く、破損角度は過大評価になっている可能性が高い。それゆえに磨滅度Ⅰのものの方が、過去の状況をより明確に示しているものと思われる。

また成貝の大きさによって破損角度に違いがあるかどうかを、21地区ハの60㎝以下のものに

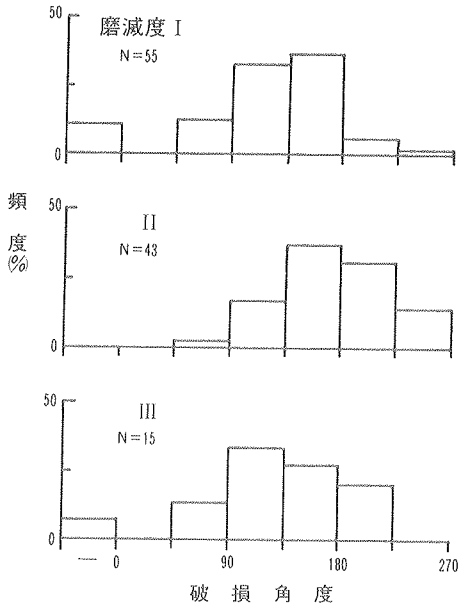


図174　磨滅度による破損角度の相違

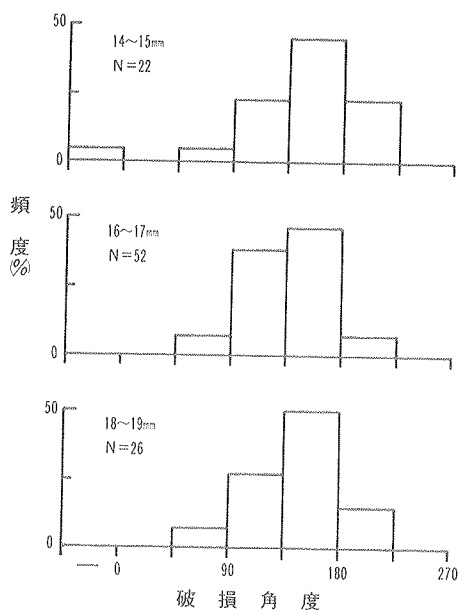


図175　殻径による破損角度の相違

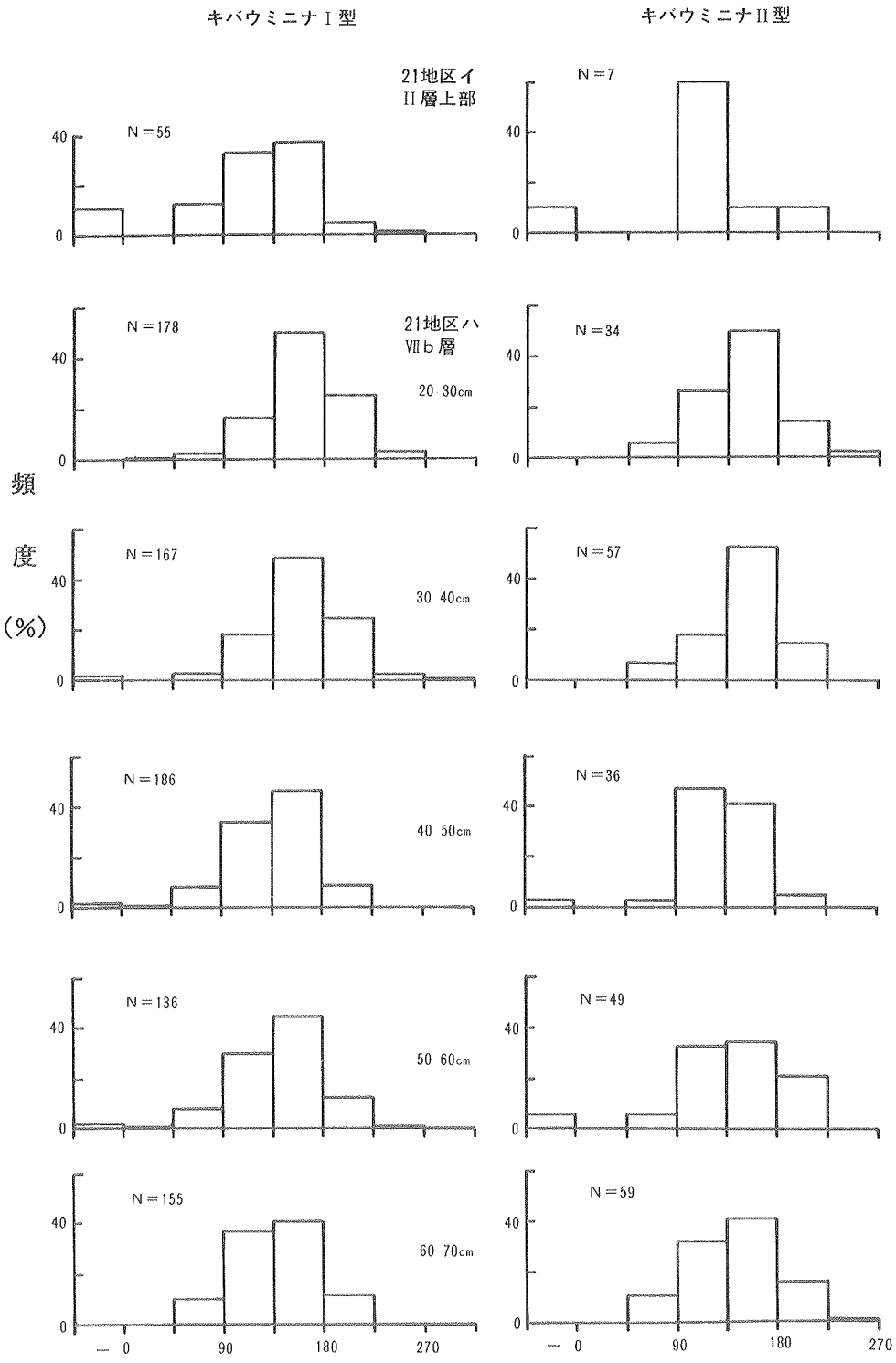


図176　キバウミニナの各区分における破損角度の頻度分布

ついて検討した。個体数の多かった14－15㎜、16－17㎜、18－19㎜の３つのサイズについての結果を図175に示した。いづれのサイズでも135－180°が最も多く、その前後でも頻度が高いという同様なパターンを持っていた。この結果から成貝のサイズによって破損角度に変化が生じるとは考えにくい。

以上の条件を元に、キバウミニナⅠ、Ⅱ型の各区分ごとの破損角度の頻度分布を図176に示した。図の－で示した部分は、破損の見られない個体である。21地区イでⅠ、Ⅱ型とも未破損の個体が約10%を占める他は、このタイプの個体の割合は著しく低い。外唇の破損している個体の割合は全体として、Ⅰ型で89.9－100%、Ⅱ型でも90－100%といづれも９割以上を占めている。その角度はⅠ、Ⅱ型とも135－180°が最も多く、次いで90－135°、そして180－225°の頻度が高い。80－135°の割合が多くなっている区分もあるが、この３つ以外の角度のものは少ない。そしてⅠ、Ⅱ型とも21地区ハでは、下部から上部にかけてこの割合に大きな変化が見られない。それゆえに、これらの区分の堆積期間内に大きな食様式の変化があったとは考えられない。しかしながら21地区イでは、21地区ハに比べて外唇が欠損していないものの頻度が高く、逆に180°を越える個体は少なくなっている。このように21地区イは、貝殻の割り方から21地区ハとは性格の異なる場所である可能性も考えられる。サイズ組成も大型であることは（図172）、このことの一つの現われであるのかもしれない。

次に、この破損角度が何により決定されるか、という問題が生じる。物理的には、殻口に入れる棒状物と軸唇との間のテコの力と外唇部の強度によって決定されることになる。しかしながら機能的な側面として興味ある事実が認められた。それは縦張肋の内部に歯状突起が存在し、さらに殻軸にも一本の軸褶があるために（図177）、この部分で内部が狭くなっていることである。貝を煮炊きした場合、軟体（＝肉）を萎縮させるが、キバウミニナ類ではこの部分でフタが止ってしまうことが考えられる。しかも縦張肋は、基本的に外唇部から240°のところに存在する。このことを考え合わせると、135°程度破損されていれば充分に妻揚子状のものを縦張肋の歯状突起の部分まで到達させることが可能である。

このような機能的な側面により、破損角度が決定されていると考えられる。各種とも出土した個体の大部分が成貝であることを示したが（表84）、成貝では縦張肋が発達し処理しやすいため、選択的に利用されたと思われる。成貝であれば、殻の大きさに関係なく破損角度が同様であるということも（図175）、このことを裏付けている。またキバウミニナⅡ型では、縦張肋の発達は悪いが、Ⅰ型の相当部分には内部に歯状突起を持っており同様と考えられる。

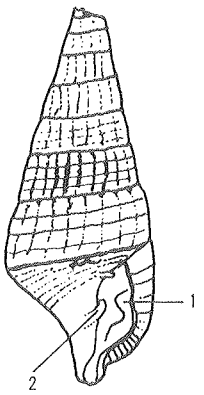


図177　キバウミニナ類の歯状突起

1．歯状突起　2．軸褶

出土したものの大半は成貝であったが、僅かに幼貝と考えられる個体も得られている。マドモチウミニナとキバウミニナⅠ型の磨滅度Ⅰの全ての個体を対象として、幼貝と成貝の破損角度の比較を行った（図178）。マドモチウミニナの出土個体数が少なかったので各区分ごとに示さなかったが、成貝ではやはり135－180°の個体が最も多く、90－225°のものが大部分を占め、キバウミニナと同様である。そして幼貝では225－270°が著しく多い。キバウミニナⅠ型でも明らかに幼貝では破損角度の大きい個体の占める割合が多くなっている。このことは前述した縦張肋内部の歯状突起を持たない幼貝は、軟体をより奥に萎縮させるために、成貝よりも大きく割らねばならなかったものと思われる。この現象は、成貝を選択的に捕獲したことをより強く想定させる。

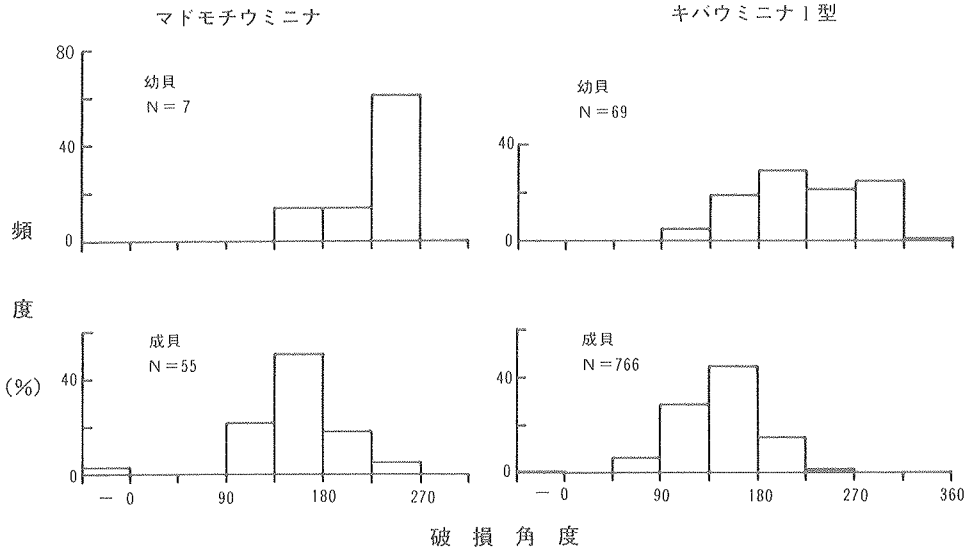


図178　幼貝と成貝の破損角度の比較

そして、このように成貝を選択的に捕獲するということは、別な側面から見るとキバウミニナ類の資源管理ができていたとも言える。しかしながら、ここでは機能的な側面を重視して、意識的な管理があったとは考えにくいことを指摘しておきたい。

ｆ．食様式との関連

キバウミニナ類を含み巻貝類は、殻軸筋という筋肉で殻の中心部に付着しており、生時にはキバウミニナ類では殻口から殻軸筋をはがすことはできない。それゆえに生きた状態で軟体部のみを取り出すには、殻全体を割る以外に方法がないわけである。前述したように完形貝の率が2／3－3／4と高いことから、生食－打ち割り型という方法は用いられなかったと思われる。

今回のように外唇が破損しているということは、貝を焼くか煮炊きするという調理したことの明らかな証明である。このうち焼くという方法では、殻に焼け跡が残り、また殻が破損しやすくなるはずである。殻の破損は上述したように想定しにくい。前者についても、一部には焼

け跡を有する個体も見られたが、その割合は各区分で0－4.0%と著しく低かった。これらのことからこの方法も取られなかったと思われる。

結局、古我地原貝塚の場合には煮るか茹でるという調理法が採用されたと言えよう。そして完形貝の割合を2／3－3／4と見なした仮定と同じプロセスを用いて、体層部のみのもの（殻頂部が欠損している）と破損したものの割合を求めてみた。前者は15%、後者は10－20%程度であった。基本的には、外唇を破損し軟体部を引き出す方法を用い、それが行えない場合に殻頂部を欠損させたり、打ち割ったりしたのではないかと思われる。またウミニナ類では、殻頂部を折って軟体部を吸い出すという食用方法が知られている[註6、註7]。貝塚から出土する大形種でキバウミニナ類と殻形の類似したオニノツノガイでは、殻頂部と体層部が打ち割られている例が多い。殻頂部を割ることは、吸い出すということの他にも、貝殻の中に空気を入れ軟体部を取り出しやすいようにする意味も持っていると思われる。今回の完形貝のサンプル中、軟体部を取り出せるとは考えられない程度に殻頂部が欠損している個体の割合は、0－15.3%と僅かであった。発掘後の欠損も考え合わせると、キバウミニナ類では殻頂部を折り空気を入れる必要はなかったものと思われる。同様にサンプル中の打ち割り痕を持つ率は、0～2.2%と極めて少なく、割った場合の成功率はかなり高かったと考えられる。

また、キバウミニナ類の破損形態を報告した今帰仁村の渡喜仁浜原貝塚[註6]と比較を行った。この貝塚から出土しているキバウミニナ類（オオヘナタリとして図示された標本はキバウミニナと思われる）では、図版17－2－A、Bで示されたような打ち割られたものと、図版15－8、9のように今回多かった外唇の破損しているものが知られている。破損形態の分類方法が異なるので、直接の比較は行えないが、報告書の第16表から再計算してみると、殻頂部が欠損しているものの割合は20%程度と古我地原貝塚より少し高くなっている。渡喜仁浜原貝塚では、キバウミニナ類よりも小形のウミニナ、イボウミニナが前者の約9倍も多く出土しており、これらでは外唇と殻頂部の割れているものも多い。それゆえに殻頂部を打ち割り破損させる方法が、大形のキバウミニナ類にも適用され、破損のパターンが異なることも考えられる。今後、各地の遺跡の詳細な破損形態の観察により、この問題が深まって行くことを期待したい。

g．キバウミニナ類の貝殻内の土壌から得られた陸産貝類

キバウミニナ類の計測中に貝殻内の土壌が得られ、その中に小形の陸産貝類が認められた。得られた陸産貝類は、破片では最大長が1㎝に達するものもあったが、完全なものは全て2.5㎜以下であった。その組成と個体数を表85に示した。ただし破片では同定が不確実である。

各種の生息場所を表中に示したが、林内・林縁部とした4種は現在の林縁部においても林内と同じく多く見られる種である。このように彼らの生息場所を識別することは、当時の周辺環境を復元する指標を得ることになると思われる。8種類のうち林内に限定されるものが3種、林内・林縁部が4種、林縁部のみのものが1種と周囲に森林が存在していたことが理解される。そして小形で林内を生息場所とするトクノシマベッコウマイマイ？とコメツブタワラガイが得

表85　キバウミニナ類の貝殻中の土壌から得られた陸産貝類の種類組成

	21地区イ Ⅱ層上部	21地区ハ 20／30cm	30／40cm	40／50cm	第Ⅶb層 50／60cm	60／cm	生息場所
トクノシマベッコウマイマイ？ *Nipponochlamys subelimatus?*	—	—	1	1	—	1	林　内
コメツブタワラガイ *Sinoennea densecostata*	—	1	—	—	—	—	林　内
イトマンマイマイ *Aegista scepasma*	—	—	1※	—	—	—	林　内
シュリマイマイ *Satsuma mercatoria*	—	—	1※※	1※	—	3※※	林内・林縁部
オカチョウジガイ？ *Allopeas kyotoense?*	1	—	—	1	—	—	林内・林縁部
ツヤキセルガイ *Nesiophaedusa bernardi*	—	—	1※※	—	—	—	林内・林縁部
オキナワヤマキサゴ *Pleuropoma verecumdum*	—	—	—	1	—	—	林内・林縁部
ウスカワマイマイ？ *Acusta despecta?*	—	—	—	1※※	—	—	林縁部
ヘソカドガイ属の一種 *Paludinella* sp	—	3	2	—	—	1	不　明
調査土壌量（cc）	2	12	32	8	8	6	

※ 孵化直後の幼貝　　※※ 幼貝破片

られたことは、移動能力の低いと考えられるこれらの種が見られることから堆積層の周辺は、森林に取り囲まれており開けた空間ではなかったことを想定させる。しかしながら21地区イでは炉跡が検出されており、人間の活動があったことは確実である。オカチョウジガイ？のみしか得られていないので開けた空間の可能性も考えられるが、他の種が確認されれば住居のような場所でなく、海岸で採集してきたものを簡単に調理するような場所であったことも示されるかもしれない。

近年、関東地方を中心とした遺跡では、小形の陸産貝類を指標とした自然環境の復元の研究が進んでいる[註8]。今回の結果は、条件さえ良ければ沖縄においても、この種の研究が可能であることを示している。

蛇足であるが、ヘソカドガイ属の一種としたものは、現在洞穴に生息するホラアナゴマオカチグサガイに最も近いものである。しかしながら殻のプロポーション、サイズ等により別種である可能性が高い。。このグループは、現在日本から僅かに知られているのみであり、この意味からも学術的価値が高いものと思われる。

3．遺跡出土貝類の生息場所類系化の試み

遺跡から出土した貝類の生息場所を明確にすることは、過去の漁撈活動を理解する上で大きな役割を果たすと考えられる。つまり生息場所を採集の場と規定することにより、分業や採集の季節性、漁具の分化等の問題に出土貝類の構成から推論が可能である。そこで、海岸の形態と貝類の生息場所は各地域により様々に変化するが、これまでの調査経験に基づき類系化を試みた。従来もこの側面からの解析が行われており、沖縄の特異性や各地域の特徴が明確にされつつある。今回はさらにこれを細分化し、より詳細な検討の資料としたい。

まず巨視的な類系では海域、淡水域、陸域およびその他に分類できる。海域については、3つの軸について検討を行った。まず第1は、波浪の強さによる外洋－内湾の系列である。第2は、潮位に基づく潮間帯－亜潮間帯上縁部の系列である。第3は岩盤、転石、砂泥といった底質の相違である。

波浪の強弱による海岸の形態を、強いタイプから弱いものへと3つの基本型にまとめた。すなわち、Ⅰ：外洋・サンゴ礁域、Ⅱ：内湾・転石地域、Ⅲ：河口干潟・マングローブ域である。これらの模式図を図179に示し、その地形区分と対応させながら概観してみたい。

Ⅰ：外洋・サンゴ礁域

このタイプは、複雑な地形を有する。岸側には石灰岩に刻まれたノッチがあり、潮間帯の上部に位置している。その下部には、岩盤や砂浜の潮間帯中・下部があり、岩盤上には各種のカニモリガイ類やアマオブネ類、小形のタカラガイ類が見られる。砂浜には、イソハマグリやリュウキュウナミノコガイを中心とした二枚貝が生息している。また貝輪の材料として重要なオオベッコウカサガイは、非石灰岩の海岸に多いが、類系としてはこの潮間帯中・下部に生息するといえる。

潮間帯に引き続いて、干潮時にも干上がらないイノー（礁池；モート）が広がる。イノー内には、塊状のハマサンゴや特に干瀬近くにはエダ状のミドリイシが見られ、砂底や砂礫底から成っていることが多い。砂礫底にはマガキガイ、クモガイといったソデガイ類やアンボンクロザメガイ、アカシマミナシガイのイモガイ類、さらにヒレジャコガイやシャゴウ等が生息している。またニシキウズガイ、メンガイ、ヒメジャコガイ、シラナミは死サンゴの周辺に多い。

サンゴ礁では沖合に白波の立つ、一般にリーフと呼ばれる部分が明らかに認められる。この部分は、地形的な用語として干瀬（ヒシ；リーフクレスト）と言われる。ここは干潮時には水面上に現われ、いわゆる潮間帯の一部をなす。前述した潮間帯中・下部とは波当りの強さ等が異なり、干瀬に特徴的な貝類群としては、チョウセンサザエ、ハナマルユキガイ、シラクモガイ等を挙げることができる。

干瀬の外洋側の縁は礁縁と呼ばれ、さらに急激に落ち込む地形が形成される。この部分が礁

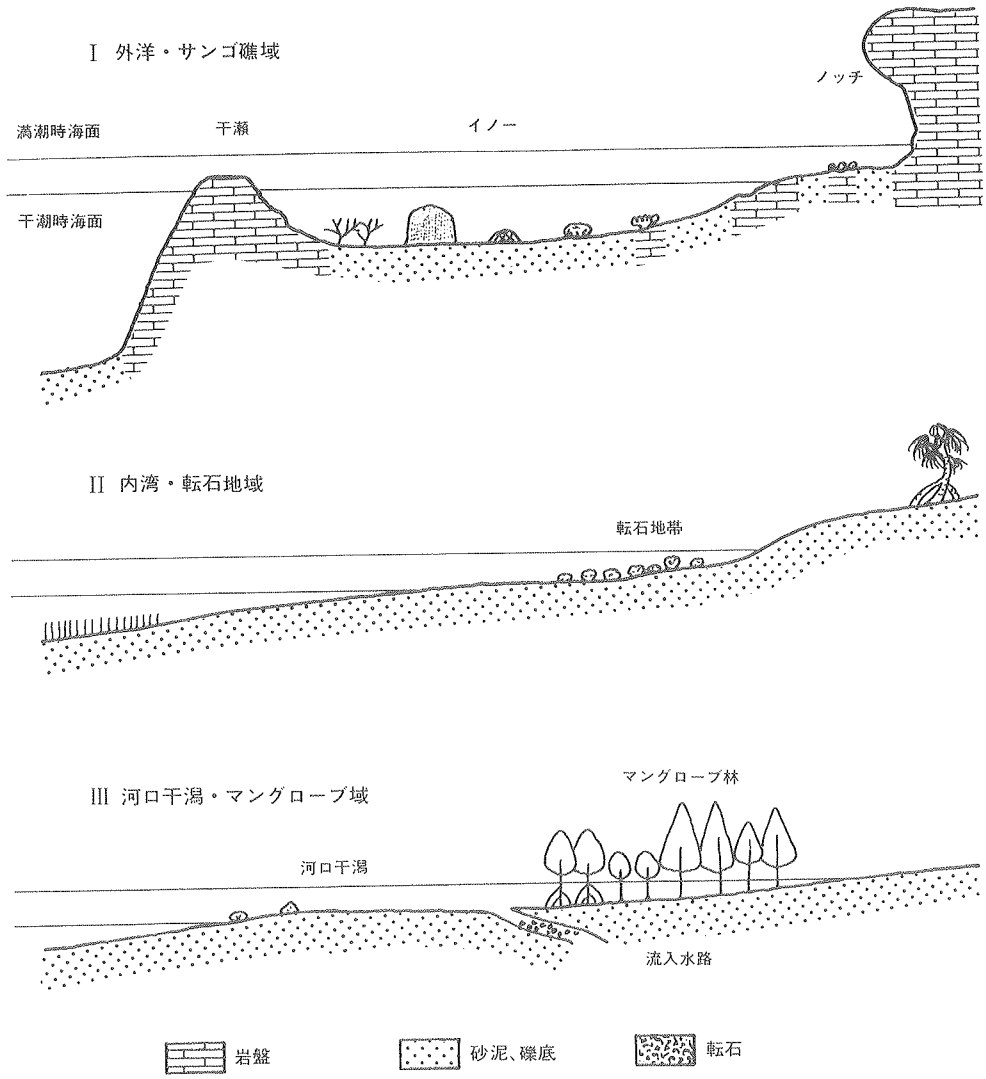


図179　波浪の変化に基づく海洋地形の３タイプ（模式図）

斜面であり、ヤコウガイ、サラサバテイ、クロチョウガイ、ゴホウラ等の大形貝類が捕獲の対象となっている。

ただし外洋・サンゴ礁域では、幅広いイノーを持つ恩納村の各ビーチのようなタイプからイノーをほとんど持たず岸側の潮間帯から干瀬まで岩盤が広がる糸満市のギーザバンタのような海岸、さらには潮間帯が即座に干瀬的な環境になる辺戸岬のような場所まで変化が激しい。このような類系を用いて貝類の組成を検討する場合には、各遺跡の地形的特徴も考慮しなければならない。

II：内湾・転石地域

ここは波の影響の少ない内湾の転石地帯を中心とした海域である。主に頭大から拳大の転石を中心として、砂泥浜で遠浅の海岸となっている。潮間帯中・下部の転石には、カンギクガイ、マルアマオブネ、ニセマガキが多数付着している。またこの場所は、潮干狩りの中心部であり

ホソスジイナミガイ、スダレハマグリ、ヒメアサリ等が砂に潜っている。少し深い亜潮間帯上縁部になると、リュウキュウサルボウやリュウキュウザルガイが見られるようになる。そして場所によっては、その前方がイノーの砂礫底へと続くことになる。

Ⅲ：河口干潟・マングローブ域

現在では比較的大きな河川の河口部に見られる地域で、波静かな海岸となり、底質は泥が中心である。河川に沿ってマングローブの林が形成される。この林は満潮時になると水没し、干潮になると干上がる場所に成立する熱帯・亜熱帯地域に特徴的な林である。その林内には、シレナシジミやキバウミニナが見られる。またヒルギの樹上には、ウズラタマキビガイやヒラマキアマオブネも生息している。林の前面には比較的広い河口干潮が形成され、その泥底中にはアラスジケマンガイ、ヌノメイチョウシラトリガイ等が多い。また満潮時に小さな水路となり、淡水の流れ込む礫底にはカノコガイが群棲している。河口干潟も、転石海岸と同様の亜潮間帯上縁部を経て、イノーの部分に移行している。

以上３つの基本形について概観したが、このような海岸形態は、各場所ごとにそれぞれの中間型や変異を持つことは当然である。しかしながらこのような類系を用い、その漁撈活動の場を規定して行くことは有意義だと思われる。

これらをまとめた１つの試案を提示してみたい（表86）。例えばこの類系を用いて、いくつ

表86　沖縄における貝類の生息場所類系

Ⅰ：外洋・サンゴ礁域	0：潮間帯上部（Ⅰではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a：岩　盤
		b：転　石
Ⅱ：内湾・転石地域	1：潮間帯中・下部	c：岩礫底、砂泥底、砂底
	2：亜潮間上縁部	d：マングローブ植物上
Ⅲ：河口干潟・マングローブ域	（Ⅰではイノー）	e：淡水の流入する礫底
	3：干　瀬（Ⅰにのみに適用）	
	4：礁斜面およびその下部	
Ⅳ：淡　水　域	5：止　水	
	6：流　水	
Ⅴ：陸　域	7：林　内	
	8：林内・林縁部	
	9：林　縁　部	
	10：海　浜　部	
Ⅵ：そ　の　他	11：打ち上げ物	
	12：化　石	

の種の生息場所を示してみると以下のようになる。

チョウセンサザエ　Ⅰ－3－a；　ヤコウガイ　Ⅰ－4－a；　カンギクガイ　Ⅱ－1－b；

マガキガイ　Ⅰ－2－c；　ゴホウラ　Ⅰ－4－c；　アラスジケマンガイ　Ⅲ－1－c；

捕獲場所を検討する場合には、類系の種々のレベルでの解析が可能である。つまり各海岸形態ごとの分類や外洋・サンゴ礁域の中でのイノー、干瀬、礁斜面を区別するといった異なるレベルで表記できる訳である。

また表86には淡水域、陸域、その他に関してもいくつかの細分を試みた。淡水域では水の流れが緩やかな止水に生息するものと、そうでない流水のものを区分した。遺跡の立地が基本的に低地部にあることから、出土しているものの大部分は止水に生息する種である。

陸域は、林に対応して林内、林内・林縁部、林縁部、海浜部の4つに分けた。このうち林縁部は、林と住居地等の開けた場所との境界域である。このような生息場所を持つ種数が多く出土するということは、貝塚の周囲に人為的影響の及んだ場所が広がったことを示す一つの指標となり得るかもしれない。

その他では、打ち上げと化石を区分した。前者は、沖縄近海に生息せずフィリピン等から死後に貝殻だけが漂着するオウムガイのようなものを意味している。後者は、周辺の地層中から得られたと思われる化石である。化石の場合、人間の積極的な持ち込みと周囲の地層からの混入が存在する。本遺跡出土のツノガイ類貝製品などは、持ち込みの例と考えられる。

今後、これらの類系に基づき、遺跡の立地条件との対応や嗜好性と食料資源としての関係等を通して、漁撈活動の理解が深まることを望みたい。

引用文献

註1　Shokita,S., S.Limsakul and C.Karnjanagesorn. Distribution and abundance of the-giant potamidid snail *Terebralia palustris* (Gastropada) in the Thai mangal. Mangrove-Estuarine Ecology in Thailand. Bulletin prepared by grants from Japanese Ministry-of Educatin, Science and Culrure. March, 1985.

註2　本永忠久．マドモチウミニナ及びシレナシジミの分布、個体群構造及び成長について．琉球大学生物学科研究生論文．1978年3月．

註3　西平守孝．西表島船浦のマングローブ湿地におけるキバウミニナ*Terebralia palustris* (Linné) の分布と個体群構造および摂食について．西表島水域漁場開発計画調査結果報告書．沖縄開発庁沖縄総合事務局．1983年3月．

註4　西平守孝．沖縄の潮間帯－1974．琉球大学海洋保全研究会．1975年3月．

註5　宮城県教育委員会．「田柄貝塚．Ⅲ．自然遺物編」『宮城県文化財調査報告書第111集』宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局．1986年3月．

註6　渡喜仁浜原貝塚調査団．「渡喜仁浜原貝塚調査報告書」今帰仁村教育委員会．1977年3月．

註7　張寛敏．台湾山中のイボウミニナについて．ちりぼたん、12：8．日本貝類学会．1981年．

註8　港区伊皿子貝塚遺跡調査団．「伊皿子貝塚遺跡」港区伊皿子貝塚遺跡調査会．1981年．

第7節　節足・脊椎動物遺存体

金　子　浩　昌

古我地原貝塚は沖縄本島中部の石川市にある。本島でも東西幅が最も狭くなった所で、丘陵上に位置しており、近くの金武湾が貝塚形成の自然的条件となっていた。南側の丘陵部は樹木が茂り、近くに湧き水や小川がある。この自然の恵みを豊かに貯え、貝塚時代人たちの狩猟や採集の活動地帯になっていたに違いない。

貝塚からは、多くの貝殻とともに脊椎動物の遺骸が多かった。魚類、獣類は特に種類も多く、量的には他の遺跡を大きく上廻る程であった。これまで、この地域の動物遺骸調査は極く限られたもので知られるのみであったが、今回の調査によって石器時代の動物相の全容をかなりの程度知ることができ、当時の生業を考える基礎資料といえよう。

膨大な資料の整理に当っては、今回もまた島袋春美、花城潤子氏の協力を得、種々便宜を図っていただいた。ここに厚く御礼を申し上げたい。

節足・脊椎動物遺存体種名一覧表

節足動物門	
Ⅰ　甲殻綱	Ⅰ　Class Crustacea
軟甲亜綱	Subclass malacostracea
十脚目	Order Depatoda
短尾亜目	Suborder Brachyura
科・属不明	Fam. et gen. indet.
脊椎動物門	Phylum VERTEBRATE
Ⅰ　軟骨魚綱	Ⅰ　Class Chondrichthyes
1．サメ目	1．Order Lamniformes
科・属不明	Fam. et gen. indet.
2．エイ目	2．Order Rajiformes
Ⅱ　硬骨魚綱	Ⅱ　Class Osteichlhyes
1．ウナギ目	1．Order Anguilliformes
a．アナゴ科	a．Family Congridae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
b．ウツボ科	b．Family Muraenidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.

2．ボラ目
a.カマス科
カマス属の一種
3．スズキ目
a.スズキ科
属・種不明
b.フエダイ科
属・種不明
c.タイ科
ミナミクロダイ
ヘダイ
d.フエフキダイ科
ハマフエフキ
ヨコシマクロダイ
属・種不明
e.サバ科
サワラ
f.ベラ科
カンムリベラ属の一種
属・種不明
g.ブダイ科
ナガブダイ
イロブダイ
ナンヨウブダイ
h.ニザダイ科
属・種不明
4．フグ目
a.カワハギ科
b.ハリセンボン科
ハリセンボン
イシガキフグ

Ⅲ.両性綱
1．無尾目
科・属種不明

Ⅳ.爬虫綱
1．カメ目
リクガメ科
属・種不明

2．Order Mugiliformes
a. Family Sphyraenidae
Sphyraena sp.
3． Order Perciformes
a. Family Serranidae
Ge. et sp. indet.
b. Family Lutjanidae
Ge. et sp. indet.
c. Family Sparidae
Acan Ihopagrus siuicolus
Sparus Sarba
b. Family Lethrinidae
Lethrinus nebulosus
monotaxis grandculis
Ge. et sp. indet.
e. Family Scompridae
Scomperomorus niphonius
f. Family Labrdae
Con′s sp.
Ge. et sp. indet.
g. Family Scaridae
Scarops rubrouiolaceus
Bolbometopom bicolor
Scarus gibbus
h. Family Acanthuridae
Ga. et sp. indet.
4． Order Tetraodontiformes
a. Family Aluteridae
b. Family Diodontiae
Diodon holacanthus
Chilomy cterus affinis

Ⅲ Class Amphibia
1． Order Anura
Fam. et gen.indet.

Ⅳ Class Reptilia
1． Order Chelania
Family Testudinidae
Ge. et sp.indet.

ウミガメ科
アオウミガメ
2.有鱗目（ヘビ亜目）
クサリヘビ科
ハブ
科属不明
V.鳥綱
1.ミズナギドリ目
アホウドリ科
アホウドリ属
2.スズメ目
カラス科
VI.哺乳綱
1.翼牛目
オオコウモリ科
オオコウモリ
2.齧歯目
クマネズミ属の一種
ネズミ科
ケナガネズミ
3.クジラ目
科・属不明
イルカ科
バンドウイルカ
4.食肉目
イヌ科
イヌ
5.海牛目
ジュゴン科
ジュゴン
6.奇蹄目
ウマ科
ウマ
7.偶蹄目
a.イノシシ科
リュウキュウイノシシ
b.ウシ科
ウシ

Family Chelonidac
chelonia mydas
2. Order Ophidia
Family Viperidae
Trimeresurus Flavovidis
Fam. et gen. indet
V Class Aves
1. Order Procellariformes
Family Diomedeidae
Diomedea sp.
2. Order Tasseriformes
Family Corridae
VI Class Mammalia
1. Order Chiroptera
Family Pteropodidae
Pteropus dasymallus
2. Order Rodentia
Rattus sp
Family Murida
Diplothrix legatus
3. Order Cetacea
Fam. et gen. indet.
Family Delphinidac
Tursiops gilli
4. Order Canirora
Family Canidae
Canis familiaris
5. Order Sirennia
Family Dugongidae
Dugong dugong
6. Order Perissodactyla
Family Equidae
Eguus caballus
7. Order Artiodactyla
a. Family Suidae
Suslemcomystax riukiuanus
b. Family Bovidae
Bas taurus

節　足　動　物　門

I　甲　殻　綱

21地区ハ－第Ⅶ層から、カニ類の鉗脚（鋏部）が５点出土した。

十脚目カニ類の遺跡の出土は少なかったが、遺跡の保存の条件にもよるわけであり、一概に捕獲することの少なかったことを結論付けることはできないかと思われる。

脊　椎　動　物　門

I　軟骨魚綱

１．サメ目

メジロザメ科と、その他の科のサメと考えられる歯５点と、椎体57点が出土している。椎体径は最大17.0最少4.0の大きさのもので、貝塚から出土するサメ椎体としては中形から小形のものといえる。

沖縄の遺跡からの出土としてはやや多い方であろう。

２．エイ目

歯板と尾棘の破片と椎体が出土している。他の遺跡のように数は少ない。

表87　サメの脊椎計測一覧　（単位mm）

No.	地　区	グリッド	層	直　径	厚　さ
1	21－イ	P－96	Ⅱ	8.6	4.3
2	〃	O－97	Ⅱ下	9.7	3.8
3	〃	O－96	〃	8.3	4.2
4	〃	O－96	〃	11.4	3.7
5	21－ハ	D－94	Ⅵ	4.0	2.0
6	〃	E－94	〃	6.1	1.5
7	〃	E－95	〃	7.7	3.4
8	〃	E・F－95	〃	12.0	4.0
9	〃	F－94	Ⅶ	8.0	4.8
10	〃	A－94	〃	17.0	7.0

表88　サメ目・エイ目の出土状況

種類（図版181）＼出土地			21地区 イ Ⅱ上層	21地区 イ Ⅱ下層	21地区 イ 小計	21地区 ロ Ⅳ層	21地区 ハ Ⅱ層	21地区 ハ Ⅵ層	21地区 ハ Ⅶ層	21地区 ハ 小計	不明	合計
サメ目	メジロザメ科歯	4						1		1	1	2
	不明	2						5		5		5
	脊椎	1.2	1	3	4	1	1	36	14	60		60
小計			1	3	4	1	1	42	14	66	1	67
エイ目	トビエイ科歯板	6						2		2		2
	アカエイ科尾棘	7							4	4		4
	不明 〃	6				1		3	1	5		5
	脊椎	3		3	3			1		7		7
小計				3	3	1		6	5	18		18

II　硬骨魚綱

１．ウナギ目

a．アナゴ科

アナゴ科と思われるものが小数出土している。不完全な標本であるが大型の個体である。

b．ウツボ科

ウツボ類の骨である。歯列の形状に２型のあることが認められるが、種名は明らかでない。標本は多いが、ブダイ、フエフキダイなどの出土が多いので目立たないようである。大型の個体が捕られている。

２．ボラ目

カマス類　この類と思われる歯骨が１点出土している。カマス類の出土は極めて稀で、その出土する量も少ない。おそらく、礁内に、はいってくることが少なかったことによるのであろう。

３．スズキ目

a．スズキ科

ハタ類と思われるものである。比較的多くの骨が検出されている。これにも数種のものが含まれているのであろうが、今は一括して扱っておく。標本もまた完存するものはなく、全長を復原する上では推測の域を出ないので詳細をのべることはできないが、概要をのべると、出土数の多い前上顎骨で、最も小さくて体長20cm位になるもの、さらに中型の体長25～30cm前後、さらに40～50cm位にまでなる個体のものが最大である。このうち小～中型のものが多い。

b．フエダイ科

この科の出土数は少ない。沖縄における他の遺跡においてもフエダイの出土は少ないようである。しかし、標本にはかなり大型70～80cmになる個体の顎骨もみられ注目される。

c．タイ科

やや目立った存在であった。

ヘダイ：僅かな出土であるが注目される。

クロダイ：他の主要種と比べると少ないが、沖縄での出土はそれなりに注目してよい。クロダイの生息環境との関わりがあるからである。

捕獲されている個体は、ヘダイでは標本が少なく、その変異を知ることができないが、クロダイは大・小の個体が捕らわれており、漁法を考える上からも注目される。すなわち、最少の前上顎骨は顎骨長で14.5mmで、体長は15cm、最大で35.0mmで体長は40cmに近い。大体は体長25～30cm位が復原される。本州の縄文時代貝塚産のクロダイと比べるとやや小さいようである。おそらくこれはミナミクロダイとクロダイとの種間差によるものであろう。

d．フエフキダイ科

本遺跡での重要魚種である。ヨコシマクロダイ、ハマフエフキの他にも数種含まれるであろう。

ヨコシマクロダイ：フエフキダイ中もっとも少ない。

ハマフエフキ：フエフキダイ科の中の主体種である。

捕獲標本の体長のついては、ヨコシマクロダイは標本が少なく、その傾向を知り難いが、前上顎骨長11.0㎜という小さい標本から40㎜を越えると思われる標本がある。ハマフエフキは標本も多く、個体の大きさの差も目立つ。前顎骨長は18㎜から45㎜に達するものがあり、30㎜前後が多いとみてよいのであろう。体長は23cm前後の個体と考えられる。

e．サバ科

サワラ：本種と思われる大型の歯が１点出土したいる。本種の沖縄での検出はこれまでにない。サバ科に属する魚種の出土は稀である。

f．ベラ科

ベラ科にはカンムリベラ属の他数種の含まれることが予想される。下咽頭骨のうちカンムリベラ属と確認できたのは７点で、咽頭骨幅が40.0㎜から15.0㎜のものまでの大・小の個体があった。その他の種類の咽頭骨も、その大きさをみると、最大のもので幅55㎜程になり、それらは稀で、次いで40㎜程になるのと30～35㎜前後のものが少数あり、多くはさらに小さい15～20㎜前後の咽頭歯である。このうち大型になると幅55～40㎜前後の咽頭骨で体長が30～40cm位と考えられるから、咽頭骨幅15～20㎜の24例多くは体長20cm前後からそれ以下の個体であったと思われる。しかし、咽頭骨幅が10㎜以下というのも稀で、体長10cm前後という個体も少なかったことが推測される。

g．ブダイ科

本遺跡での主体魚種である。これらについてもまだ充分に明らかにされていない。ここでは明別される以下の数種について分け、他は一括しておく。

イロブダイ：ナンヨウブダイに次ぐ、大型の個体が含まれる。

ナンヨウブダイ：もっとも多い種類である。中大型のものが多い。

ナガブダイ：少ない種類である。上咽頭骨前端部の幅で70㎜もしくはそれ以上になる例が左側資料総数18例中8例はあり、その他の資料も5.0～6.0㎜位である。従って、体長は30～50cmという、比較的大きい個体であったといってよいであろう。

フダイの骨全体では、前上顎、歯骨などが多く、それには大・小の標本が含まれる。例えば歯骨が特に多く、右側のみ47例中、歯骨の咬合面長35㎜に達するのが1例、30㎜前後３例、20～25㎜前後が10例、15㎜前後が20例、それ以下10㎜前後13例になる。もっとも大きい歯骨で体長50cm、次位が45cm、20㎜前後が30cm、15㎜以下のは20cm以下の体長のものなのであろう。半分以上は体長20cmあるいはそれ以下の大きさである。

ブダイも種類による量差があり、どの種類も同じような傾向にあるわけではないと推定されるが、結果的には上述したような捕獲の状況であったとみることができよう。

表89-1　魚骨の出土状況

種類		図版181	部位	21地区 イ 東	21地区 イ I層	21地区 イ II層上	21地区 イ II層下	21地区 イ 最少尾数	21地区 ロ I層	21地区 ロ II層	21地区 ロ III層	21地区 ロ IV層	21地区 ロ V層	21地区 ロ 最少尾数	21地区 ハ II層	21地区 ハ IV層	21地区 ハ V層	21地区 ハ VI層	21地区 ハ VII層	21地区 ハ 不明	21地区 ハ 最少尾数	22地区 イ I層	22地区 イ II層	22地区 イ I 1号層	22地区 イ II 2号層	22地区 イ III層	22地区 イ II 3号層	22地区 イ III層	22地区 イ 最少層数	22地区 ロ	不明	合計
ウツボ科	A	10	R L			1	2				1							7 / 1 / 15 17 / 4	10 / 6 4				1		1 / 1						1	20 / 1 / 23 24 / 4
		8	鰓骨															1	3													4
	B	12	R L			1		1								1		6 3	2													10 3
		9	鰓骨				1											2	2													6
	小計		R L			1 / 1	2				1					1		7 / 1 / 21 20 / 4	10 / 8 4				1		1 / 1						1	20 / 1 / 33 27
			鰓骨															3	5													10
アナゴ類		14	R L															1 / 2						1 / 1								2 / 1 / 2
ボラ目	カマス	16	R L															1														1
スズキ目	スズキ科 スジアラ	63 / 66	R L	1	1	1 / 1	4 / 7 / 1					1						13 / 7 / 7 / 8	6 / 12 / 8 / 1					1 / 1								23 / 21 / 28 / 19 / 1
	種不明		R L	1	1 / 3 / 1 / 4 / 1	6 / 12 / 5 / 3	66 / 101 / 70 / 73 / 37				1	1			1			144 / 224 / 139 / 233 / 77	133 / 169 / 135 / 203 / 24				1 / 1		17 / 34 / 27 / 29	1	5 / 8 / 4 / 5				1	373 / 514 / 382 / 552 / 141
			鰓骨			1												16	1						14								32
			ma×R/L			2 / 1	1 / 3											21 / 16	6 / 2						/ 1								30 / 23
			口蓋骨				2											1	1				1										5
			関節R/L		/ 1	2 /																											2 / 1
	小計		R L	1 / 1	1 / 3 / 1 / 1 / 5 / 1	6 / 12 / 6 / 4	70 / 103 / 72 / 74 / 37				1	2			1				139 / 201 / 142 / 211 / 25				1 / 1	1	17 / 35 / 28 / 29	1	5 / 8 / 4 / 5				1	395 / 602 / 463 / 571 / 142
	フエダイ科 フエダイ	53	R L															1														1
	種不明		R L															3 / 1 / 3 / 4 / 1	2 / 2 / 4 / 2						2 / 1	1 / 1	1	1 / 1				8 / 3 / 9 / 9 / 1
	小計		R L															3 / 1 / 3 / 5 / 1	2 / 2 / 4 / 2						2 / 1	1 / 1	1	1 / 1				8 / 3 / 9 / 10 / 1
	タイ科 ヘダイ	46 ~ 47	R L		1										1			2 / 3 / 5 / 2	1													3 / 3 / 6 / 3
	クロダイ	48	R L	1	1 / 1	1 / 3 / 1 / 1	4 / 1 / 5 / 4					1			2 / 1		1	18 / 11 / 24 / 7 / 2	18 / 11 / 8 / 11	1 / 1			2		2 / 1 / 5 / 1		1 / 2				1	47 / 28 / 49 / 28 / 3
		50	腎鰓臈		1	7	3									1		70	36													120
					7	3	61											62	114						1		1	1					350
	種不明		R L				1					1						3 / 3	1 / 1 / 13						1 / 1 / 1 / 2			/ 1				2 / 5 / 4 / 2 / 17
	小計		R L	1	1 / 2	1 / 3 / 1 / 1	4 / 1 / 6 / 4					2			2 / 1 / 1		1	20 / 17 / 31 / 9 / 5	20 / 12 / 8 / 11 / 13	1 / 1			2		3 / 1 / 6 / 3		1 / 2				1	52 / 36 / 59 / 33 / 20
	フエフキダイ科 クロダイヨコシマ		R L				4									5		1 / 111	1 / 59													2 / 179
	ハマフエフキ	16	R L		2 / 1	8 / 6 / 6 / 2	15 / 9 / 29 / 9 / 22				1				3		1	68 / 60 / 90 / 47 / 42	59 / 17 / 50 / 21 / 27	2 / 1 / 10 / 2 / 1			3		3 / 3 / 2 / 2 / 3		3					161 / 160 / 191 / 85 / 95
			ma×R/L			1 / 2	/ 1									/ 1		10 / 15	5 / 3	/ 1					1 / 1								17 / 25
	種不明	20 ~ 25	R L				2 / 1 / 1 / 5											16 / 6 / 7 / 2 / 40	10 / 5 / 13 / 5 / 52						1								28 / 8 / 22 / 8 / 97
	小計		R L		2 / 1 / 4 / 2	8 / 6 / 6 / 2	17 / 10 / 31 / 10 / 31				1				3	5	1	85 / 66 / 101 / 49 / 193	70 / 17 / 65 / 26 / 138	2 / 1 / 10 / 2 / 1			3					3					184 / 103 / 219 / 93 / 371

表89-2　魚骨出土状況

種類		図版181	部位	21地区 イ 東	21地区 イ I層	21地区 イ II層上	21地区 イ II層下	21地区 イ 最少尾数	21地区 ロ I層	21地区 ロ II層	21地区 ロ III層	21地区 ロ IV層	21地区 ロ V層	21地区 ロ 最少尾数	21地区 ハ II層	21地区 ハ IV層	21地区 ハ V層	21地区 ハ VI層	21地区 ハ VII層	21地区 ハ 不明	21地区 ハ 最少尾数	22地区 イ I層	22地区 イ II層	22地区 イ I号層	22地区 イ II2号層	22地区 イ III2号層	22地区 イ II3号層	22地区 イ III3号層	22地区 イ 最少層数	22地区 ロ	不明	合計
スズキ目	サバ科 サワラ	54																1													1
	ベラ科	17	R L				2/3 / 9											6|4 / 1|2 / 59	8|1 / 6|9 / 36			1								1	14|8 / 12|17 / 165
		18	R L	2	1	3	11|11 / 36					1	1		1|2	2|2 / 3	1	49|78 / 168 / 1	34|32 / 112	1 / 14			1	1|5 / 12		1|1 / 9			1	1|7	160|131 / 372 / 1
	ブダイ科 イロブダイ	40〜41	R L		1	1|5 / 1|4	1|1 / 1|2									1 / 5		15|9 / 17|30 / 55	4|6 / 12|8 / 7	1		4			1	1	1			6	25|21 / 33|11 / 79
	種不明	38〜39	R L	3|2 / 1	5|3 / 9|3 / 6	10|4 / 10|4 / 12	16|26 / 42|36 / 56				3|2	2 / 1 / 1			6 / 12|17 / 34	1|2		115|62 / 276|281 / 413	67|74 / 174|182 / 244	4|54 / 3|2 / 2			7/2	20|27 / 51|55 / 48	1|1 / 1|2	5|7 / 15|8 / 11	2 / 1 / 1		2	253|267 / 694|696 / 831
	イロブダイ	44〜45	R L		1/3	2|2 / 6	16|11 / 7				1|1	1			1 / 1		1	69|67 / 74	45|44 / 46 / 3	1 / 3|1 / 1			1	2|1 / 4		1|1 / 2				1 / 139|129 / 146 / 1
	ブダイナンヨウブダイ	42〜43	R L	6|2	3|4 / 2	4|7 / 13	91|74 / 53	1				1 / 1	2		1/2	6|2 / 9	1|3 / 3	211|210 / 469 / 25	420|417 / 415 / 41			2|4 / 5		32|21 / 61 / 11	1/5	5|6 / 19	2/1			782|755 / 1.000 / 77
	ブダイナガブダイ		R L		1		5|11 / 16									1		7|7 / 74 / 4	19|20 / 93	1			2	15		5				31|38 / 208 / 4
	種不明		R L	1/2	6	4|6 / 11	43 / 24|1 / 138					2			1/1	1	23 / 22	3|9 / 66	5 / 4|1 / 114		30 / 2		1	1/2 / 2 / 30		3			1	1	104 / 14|20 / 285 / 139
			歯破片		6	6	266		2		6	2			21	43		1.461	878	17			5		37		1			28	2.779
			R L	3|2 / 1	5|4 / 9|3 / 6	10|9 / 11|5 / 16	17|26 / 43|38 / 56				3|2	2/1 / 1			6 / 12|17 / 34	2|2 / 5		131|71 / 253|321 / 468	71|80 / 166|190 / 251	4|54 / 3|2 / 3			4|7 / 2	20|27 / 51|55 / 48	1|1 / 1|2 / 3	6|7 / 15|8 / 11	2/2 / 1		2	278|268 / 637|647 / 910
	小計		R L	7|2 / 2	3|5 / 12	10|15 / 30	43 / 112|97 / 160 / 139	1			1|1	1|4	2		4 / 1	6|2 / 11	23 / 1|3 / 26	290|293 / 623 / 29	5 / 463|482 / 668 / 44	1 / 3|1 / 2		30 / 2	2|5 / 7	1	1 / 36|24 / 110 / 11	1/5	6|6 / 29	2/1		1	105 / 866|942 / 1.639 / 224
	ニザダイ科	68	ウロコ				13								2			35	13					3							66
フグ目	カワハギ	40	R L															1/2 / 2	3/2 / 2												3/2 / 2
		41	歯破片				5											54	5												64
		43	背鰭			1										1		7	1	1										1	12
	ハリセンボン	69〜70	上下 破片		1/2	2/1	2/4				2/2	1/3			2/4	1/3		45/49	9/26			1			1	1/1	1/1			1	64/96 / 135
			棘		12	14	19									3		113	51	2											214
	イシガキフグ		棘			7	1											8	9												25
	フグ類	71〜72	R L								1							2|1 / 1|1 / 3	1 / 1					1							3|1/3 / 1 / 5
その他	不明		R L			1/1	1											2|7	3|3												6|10 / 2
			脊椎	24	17	10	3.821					3			15	2		8.657	9.600			8		16	1	5	2		4		22.185
			尾椎		2	1	86					1						273	310	5	2	14		22							716
			その他				40									1		87	68							1					197

〈凡　例〉　左右不明上顎骨破片

右前上顎骨	左前上顎骨
右　歯　骨	左　歯　骨

左右不明歯骨破片

左右不明上咽頭骨破片

右上咽頭骨	左上咽頭骨
下　咽　頭　骨	

破　片

h．ニザダイ科

尾部の基部につく硬質楯状の鱗が出土している。しかし、内蔵骨を検出するまでに至っていない。精査がゆきとどかないところがあるかも知れない。

4．フグ目

a．カワハギ科

カワハギ：鋸歯をもつ背鱗が12点出土しており、その他に212点の棘片の出土がある。

b．ハリセンボン科

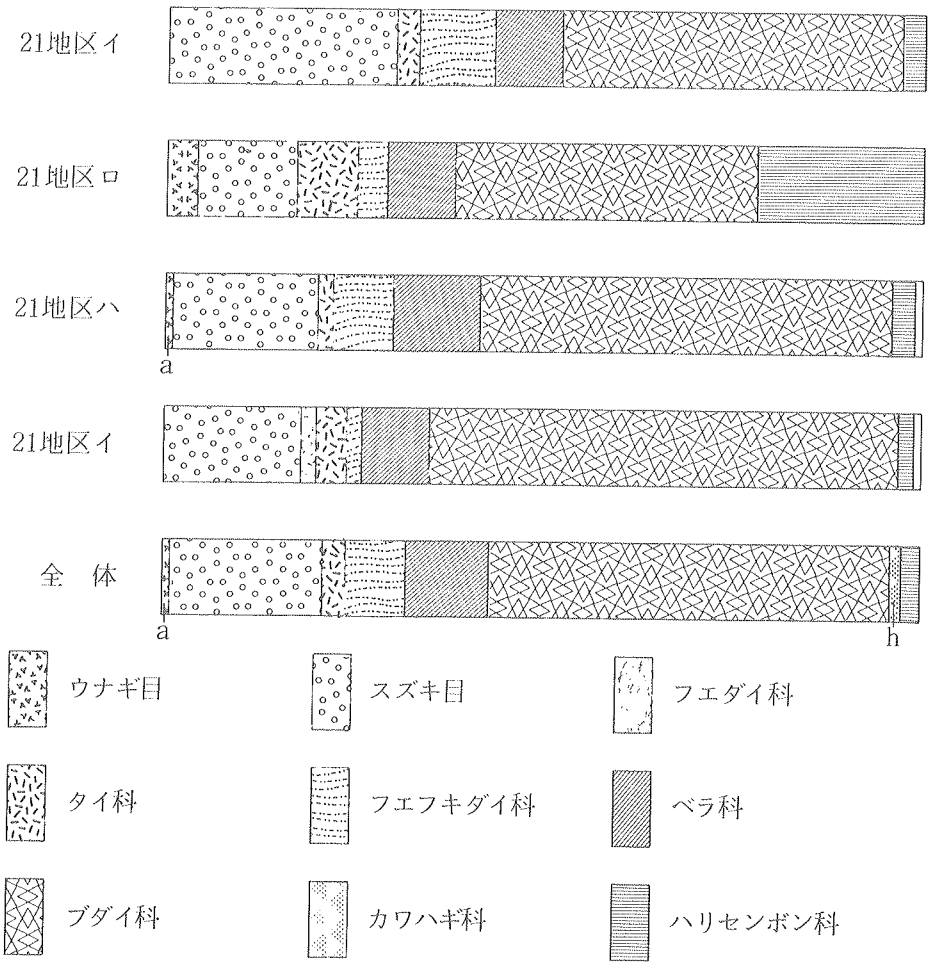
ハリセンボン：多くの標本が出土している。中型及びそれ以上の大きさになる個体が多い。

上・下の歯板の大きさから推定する体長は大型のものが目立つ。上歯板16のうち体長23㎝以下のは3個、下歯板16個中2個位である。その他はおそらく30～40㎝位になる個体のものと思われる。

イシガキフグ：確認したのは棘のみである。棘の数はハリセンボンに比べて少ない。

フグ類：沖縄におけるフグ類の出土は少ない。今回の標本は歯板エナメル質部分の長さは25.0㎜に達するので、かなりの大形のものになったはずである。

図180　出土魚類の構成比較



Ⅲ　両性綱

1．無尾目

カエル類数種の遺骸が出土しているが、その数は少ない。

表90　カエル類骨片の出土状況

図版	21 地区						22 地区			総計
	イ区			ハ区			イ区			
	Ⅱ上層	Ⅱ下層	小計	Ⅵ層	Ⅶ層	小計	2号Ⅱ層	3号Ⅱ層	小計	
182	3	1	4	6	3	9	1	1	2	15

Ⅳ　爬虫綱

1．カメ目（図182）

断片的な標本を加えるとかなりの数の出土であるが、全体をうかがい得るような標本は少なかった。その中で、上腹板については検出することができたので個体数の推定の目安になろう。

表91　爬虫綱（リクガメ・ウミガメ・ヘビ類）の出土状況

科名	部位	層位番号	21 地区 イ区 東	I	Ⅱ上	Ⅱ下	小計	ロ区 Ⅲ	Ⅳ	小計	ハ区 Ⅵ	Ⅵ	Ⅶ	不明	小計	21 地区 イ 第2号遺構 Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	第3号遺構 Ⅱ	Ⅲ	小計	22 地区 ロ	全体不明
リクガメ科	上腹板	2			3		3					19	3	1	23	／2	／6		／3		／11		
	背甲板	5		1			1					7			7								
	腹甲板	4		1		2	3					1	6		7		1		／2		3		
	肋甲					1	1						5		5								
	他		4	12	31	78	125	1	2	3	12	815	1,203	12	2,042	38	998		381	31	1,448	17	
	指骨					1	1																
	小計		4	14	34	82	134	1	2	3	12	842	12,17	13	2,084	40	1,005		386	31	1,462	17	
ウミガメ科	左尺骨	20											1		1								
	上腕骨	19											3／3		3／3								
	大腿骨											1			1								
	指骨	24			1		1					1	2		3								
	末節骨											1		1	2				1		1		
	肢骨片				2		2					7	5		12	1					1		
	上腹片	18																					1
	腹甲板	26											4		4				1		1		
	縁甲板											1	3		4								
	背甲板	23				3	3					38	18	1	57								2
	他											11	5		16								
	小計				3	3	6					60	44	2	106	1			2		3		3
有鱗目ヘビ類	脊椎			1	2	77	80				2	125	517	50	694		13	5	1		19		

※　／　は　右／左

2．有鱗目（ヘビ亜目）

本遺跡からはヘビ類の骨がかなり多量に出土した。沖縄の遺跡の中でもヘビ類の多い有数の遺跡といってもよいのではないかと思われる。その中にはハブ類とその他に数種のヘビが含まれているようである。ハブ類とされる標本には大形になるものが含まれ、左右前関節突起間の幅が13.7㎜に達するものもある。おそらくそれらは全長１ｍ50㎝もしくはそれ以上になる大きさの個体であったろう。それに近い大きさの標本は多数含まれていた。

ハブ以外のヘビ類の椎体も少量含まれているらしい。椎体の破損があるので完全に調べられず、今後の研究に待ちたい。これも左右前関節突起間幅が8.5㎜位になる標本もあり、大形のヘビも含まれることが推定される。これらのヘビ類の骨が、すべて人によって捕えられたものと決めてよいかどうかはまだ問題ののこるところであるが、採集された状況10数個から40～50個というように全身骨格での出土ではない点に、人意的な扱いのあったことを推測させるのである。

Ⅴ　鳥　綱

鳥類の骨は細片まで検出したものの、その数は少なく種名を決めることはできなかった。

表92　鳥類骨の出土状況

目科名	部位		図版	21－イ地区			21－ハ地区						合計		
				Ⅱ$_L$層			Ⅵ層			Ⅶ層			不明					
			182	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	L
ミズナギドリ目	上腕骨	近位部	9	1												1		
		遠位部		1					1							1		1
アホウドリ科	尺骨	骨体	10						1	1						1		1
	脛骨	近位部					1									1		
	小計			2			3			1						6		
スズメ目 カラス科	烏口骨	近位部	11	1		1										1		1
		骨体							1						1			2
		遠位部								1						1		
	上腕骨	遠位部	12									1						1
	尺骨	近位部							1									1
		骨体				1	1		1							1	1	1
		遠位部	16			1												1
	脛骨	遠位部	15				1									1		
	大腿骨	近位部								1						1		
		骨体					1			1						2		
		遠位部	14			1	1									1		1
	中手骨	骨体	13				1									1		
	中足骨	骨体	17	1			1									2		
		遠位部							1									1
	細片									5						5		
	小計			6			10			9			1			26		

〈凡　例〉　R：右　L：左

Ⅵ 哺 乳 類

1．翼手目

オオコウモリ

上腕骨と大腿骨片各１と遊離歯があった。地荒原貝塚とに次いで本遺跡でも検出された。しかし、その検出数は少なく、捕獲数もさして多いものではなかったと推定される。

表93　コウモリ出土状況

部位名＼地区・層位・番号	図版	21地区 イ区	21地区 ハ区			不明	合計
		Ⅱ下	Ⅱ	Ⅵ	Ⅶ		
歯	183	1		6	2	1	10
左上腕骨～遠位端			1				1
大腿骨				1			1
計		1	1	7	2	1	12

2．齧歯目

ネズミ類の遺跡の出土は多かった。層準も土層よりⅦ層に及んだ。多かったのは21－ハではⅥ～Ⅶ層に多く、他の層においても魚骨などと同層準において出土していた。このことから石器時代に捕獲されたものとする可能性があると思われるが、なお今後の調査を必要とするかと思われる。

表94　ネズミ類・ケナガネズミの出土状況

部位名		番号	21地区イ Ⅰ層	21地区イ Ⅱ層上	21地区イ Ⅱ層下	21地区イ 小計	Ⅳ層	21地区ハ Ⅱ層	21地区ハ Ⅵ層	21地区ハ Ⅶ層	21地区ハ 小計	22地区イ Ⅱ層	22地区イ 2号 Ⅱ層	22地区イ 3号 Ⅱ層	22地区イ 3号 Ⅲ層	22地区イ 小計	不明	総合計
			R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L
上顎歯	I¹							1	2		1 2							1 2
	C		1			1			1 2	1	1 3						1	2 5
下顎歯	I_2	10		1 1		1 1	1		1 2	1	2 3							3 4
	C								1	2 2	3 2		1	1		2		3 4
下顎骨				1		1			1 4		1 4	1				1		2 5
上腕骨	P	11																
	S		1	1 1	2	4 1			1 1	3 4	4 5				1	1	1	9／6
	d								1		1							1
橈骨									1		1							1
尺骨		12		1		1			1	1	2							2 1
寛骨					1	1			1 2	1 2	2 4			1		1		3 5
大腿骨	P	14								1	1							1
	S		1	1 1	1	2 3			6 2	2 2	8 4							10 7
	d									1	1							1
脛骨		15		1 4	1	2 4			1 3	3 3	4 6			2 1		2 1		8 11
中手（足）骨		16							1		1							1
基節骨					1	1			1		1							2
破片					1	1			3	4	7							8
合計			4	13	7	24	1	1	39	33	74	1	1	5	1	8	2	108
ケナガネズミ																		
上顎歯	I¹		1		1 1	2 1			2		2	1						1 3
下顎歯	I_2				1	1				1	4							4
		3上下										1 1						1 1
顎歯不明	C		1		3	4			2	1	7	3						10

＜凡例＞　Ⅰ：切歯　C：犬歯　P：近位部　S：骨体　d：遠位部　R：右　L：左

ケナガネズミ

前述のネズミ類に比して極めて少なく、かつ大形の切歯を検出するに留った。これまでもケナガネズミの出土に接したことがあるが、本遺跡のように四肢骨を全欠く例はなかった。

3．クジラ目

断片的な骨が出土している。しかし沖縄島でのクジラ数は骨片でも少ない。本遺跡の例はそうした中ではやや多い出土といえよう。

イルカ科

イルカ類として、バンドウイルカと思われる標本がある。この地域でイルカ類の出土は多くはないし、種名の確認できた例も少ない。

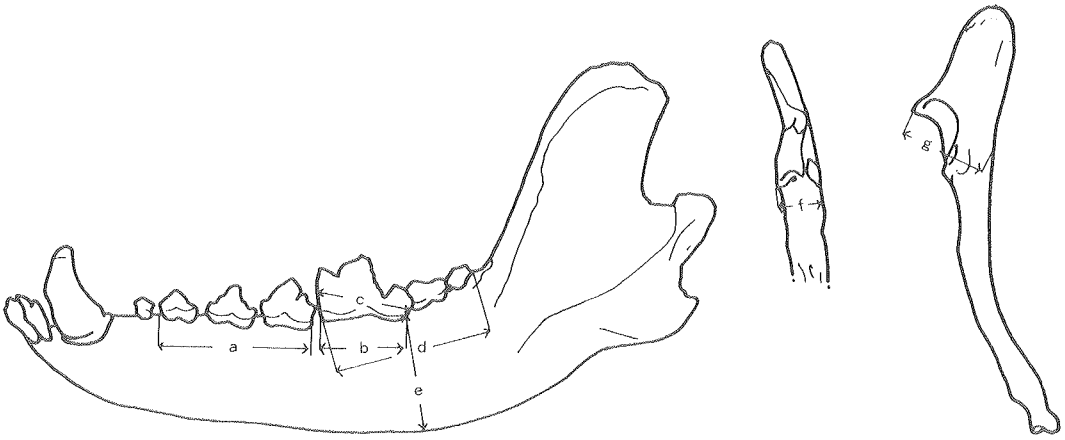
表95　クジラ目の出土状況

科名	種名	21地区イ				21地区ロ			21地区ハ					22地区イ				不明
		Ⅰ層	Ⅱ上層	Ⅱ下層	小計	Ⅳ層	Ⅴ層	小計	Ⅳ層	Ⅵ層	Ⅶ層	不明	小計	Ⅱ層	2号Ⅱ層	3号Ⅱ層	小計	
イルカ科	バンドウイルカ								1				1					
不明	肋骨									2	2		4					
	部位不明	2	8	18	28	2	1	3		85	79	4	168	1	1	3	5	1

4．食肉目

イヌ

本貝塚における唯一の食肉目である。しかもその出土量甚だ多く、最少個体数としても27個体（左C）を数えたのである。出土の層準は、歯牙、四肢骨の場合ともに21地区ハ第Ⅵ、Ⅶ層に集中し、すべて石器時代のものと認めることができよう。



下顎骨　　尺骨

図181　計　測　部　位

表96　イヌの出土状況

部位名		層位	地区	21地区イ			21地区ロ	21地区ハ							22地区イ		総計
				Ⅱ・上	Ⅱ・下	小計	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	不明	小計	2号Ⅱ層	不明	
				R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L	R不L
頭蓋骨				1		1					2 9	2	1	2 11 1			2 12 1
下顎骨							① ①				5 2	4 3		9 5			10 6
脊椎骨	頸椎		2		1	1						1		1			2
	腰椎										2	1		3			3
	環椎		1								4	2	1	7			7
	胸椎		3									1		1			1
	不明			2	1	3		1			1			2			5
肋骨			4	1		1					20	14	2	36			37
上腕骨	骨体										3 1	1		3 2			3 2
	遠位部									1	3	2 6		5 7			5 7
橈骨	近位部										1 1	1		2 1			2 1
	骨体			1		1	1				1 2	2 1		3 3	1		4 5
	遠位部	21									1	1 1		1 2			1 2
尺骨	近位部								1		2	3 2		3 5			3 5
	骨体								1		1 2	1		3 2			3 2
寛骨											1 1	1 2		2 3			2 3
大腿骨	近位部			①		①						②		2			3
	骨体			1		1	1				2 1	3 1		5 2		1	5 5
	遠位部			①		①											1
脛骨	近位部											2		2			2
	骨体	22			1	1					3 3	1 2		4 5			5 5
	遠位部										1			1			1
踵骨	骨体	24									3	1 2	1	1 6			1 6
	遠位部										1			1			1
距骨		23									1 1			1 1			1 1
中足(手)骨	近位部	25															
	骨体										6	1		7			7
	遠位部			1		1											1
指骨	Ⅰ																
	Ⅱ										1	2		3			3
	Ⅲ										3			3			3
破片					2	2					5	3		5 3			2 5 3
合計				9	5	14	4	1	2	1	96	72	5	177	1	1	197

＜凡例＞　R：右　不：左右不明　L：左

遺骸の出土は、先述の左Cの27の他には、右P'17、左$M_1$17が多く、右$M_1$14、左M'11があり、頭蓋はこの程度のものがあったと推定されよう。下顎骨として認められたのは右10、左６である。脊椎骨は18点で検出出来たのは少なかった。四肢骨は完存するものはなく、上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、肢骨などが左右側いづれか５～７点出土しており、四肢骨の保存の少ないことが注目される。

本遺跡のイヌは全くの埋葬の形態をとるものがなかったという。貝層内の散乱骨格の出土はイヌの場合でもみるところであるが、本遺跡程まとまって、このような骨の出土している例も珍しい。

上述のように本遺跡出土のイヌの骨の多くが断片的的であるために、その大きさを計測できた部位が極めて限られる。先ず歯牙でではM、の歯冠長平均18.18。本州産の縄文犬に比べてさらに小型ではないかということをのべたことがあるが、本州縄文犬の雌位の大きさとみてもよいであろう。

四肢骨については、計測の可能であった部分が極めて限られるが、やはり本州縄文犬の小型の雌と比較できるのが、大きい方のものになるとみてよい。

5．海牛目

本遺跡においても、特にジュゴンの骨が多いわけではなかった。

表97　ジュゴンの骨　出土状況

部位	図版183	21－ロ 地区			21－ハ 地区				22－イ地区
		Ⅲ層	Ⅳ層	小計	Ⅵ層	Ⅶ層	不明	小計	3号 Ⅱ層
頭蓋片	4		1	1	6	3		9	1
肋骨	1	1		1	12	7		19	
不明					4	4	1	9	

6．奇蹄目

出土したウマの骨は少なく、わずか3点である。いずれも下顎臼歯で21－ハ地区から出土したもので、Ⅰ層で1点、Ⅲ層で2点の出土である。

7．偶蹄目

a．イノシシ科

多くのイノシシの歯牙、骨類が出土した。それらの部位別の数量を別表に示しておいた。単純な総量についてはそれを参照されたい。例えば、歯牙では最少個体数で下顎犬歯右34（♂）、同19（♀）計53がもっとも多く、臼歯では右M_2の29、右$dm_4$26などが多い。このmd_4は生後1年程までの個体であり、これずM_2の数にみられるように成獣個体の数とほぼ同程度にあることが注目されよう。またM_3については、その数が少なく、3年以上個体の少ないことが予想される。

四肢骨については歯牙よりも多数のものがのこされ、したがって推定される個体もまた歯牙での場合を上廻っている。例えば上腕骨の遠位端は右33、左49、踵骨では右45、左19、距骨右34、左27であった。

昨年報告した波照間島下田原貝塚の出土量に匹敵する量のものとして、沖縄本島における例としては、早期の野国遺跡に次ぐ出土量であった。

表98　イヌの下顎・後臼歯計測

単位：mm

部位	計測部位 a	b	c	d	e	出土地区	層位
R M1	28.0	18.0	19.6		17.7	21－イ	II上
		16.9	18.1			21－ハ	VI層
		18.6	19.0				
		16.8	17.0				
		17.3	18.2				
		17.6	18.3				
		16.7	17.9				
		17.2	18.6				
RM2				30.0		21－イ	II上
L M1		18.3	19.1			21－ハ	VI層
	26.3	17.6	18.0				
		——	17.8				
		14.9	17.9		16.9		
		17.3	18.3				
		16.7	17.2				
		14.6	16.5				
		17.8	18.1				
		17.5	19.6				
		17.7	19.2				
		17.3	18.3				
		18.3	19.0				
L M1		16.0	16.6			21－ハ	VIIb層
		17.2	18.2				
		17.3	18.9			21－ハ	VII層

表99　イヌの尺骨計測

部位	計測部位 f	g	出土地区	層位
R	12.1	——	21－ハ	VI層
	9.0	15.1	21－ハ	VIIb層
	10.6	——		
	9.2	——		
L	11.0	18.0	21－ハ	IV層
	9.5	10.8	21－ハ	VI VI層
	8.2	11.4		
	9.0	9.5	21－ハ	VIIb層

表100　イヌ歯牙の出土状況

部位	地区	層位	R: I1 2 3 C i1 2 3 c m2 3 4	R: P1 2 3 4 M1 2 3	L: I1 2 3 C i1 2 3 c m2 3 4	L: P1 2 3 4 M1 2 3	小計	切歯	不明
上顎歯	21－イ	I層							
		II層上部				1	1		
		II層下部						1	1
		小計				1	1	1	1
	21－ロ	I層			1		1		
		III層							1
		小計			1		1		1
	21－ハ	IV層				1	1		
		V層	①　1	①　1	1	1	6		
		VI層	⑫　6	⑩1　13 8 3①	17	1　9	81		7
		VII層	①　2		8	1 1 1 3	17		
		小計	⑭　7	⑪1　16 8 4	26	1　1 1 11 4	105		7
	不明			1　①			2		
	合計		⑭　7	⑪1　17 8 5	27	2　1 1 11 4	109	1	9

部位	地区	層位	R: I1 2 3 C i1 2 3 c m2 3 4	R: P1 2 3 4 M1 2 3	L: I1 2 3 C i1 2 3 c m2 3 4	L: P1 2 3 4 M1 2 3	小計	合計
下顎歯	21－イ	I層						
		II層上部				1	1	2
		II層下部	1	1 1 2 2			7	9
		小計	1	1 1 2 2		1	8	11
	21－ロ	I層						1
		III層						1
		小計						2
	21－ハ	IV層						1
		V層	1	1　1			3	9
		VI層	10　3　2 1 1	1 1 4 11 3 ①	1 1 1　2 5 10	15 3	72	160
		VII層	4		1　1	1 3	10	27
		小計	10　8　2 1	1 2 1 5 12 3	2 1 1　2 5 11	16 6	99	211
	不明		2　1 1 1				5	7
	合計		11　10　1 3 2	1 2 3 6 14 5	2 1 1　2 5 11	17 6	112	231

〈凡　例〉 ①～～はそのうちのどれか1個　③1→切歯　C→犬歯　P→前臼歯　M→後臼歯
② ○ は右・左不明、原則として右の項に表記した。　④1→第1　2→第2　3→第3　⑤小文字は乳歯

表101 イノシシ出土状況

地区 / 区 / 層位		図版184・185	21地区 イ区 東	21地区 イ区 I	21地区 イ区 II上	21地区 イ区 II下	21地区 イ区 小計	21地区 ロ区 I	21地区 ロ区 II	21地区 ロ区 III	21地区 ロ区 IV	21地区 ロ区 V	21地区 ロ区 小計	21地区 ハ区 II	21地区 ハ区 IV	21地区 ハ区 V	21地区 ハ区 VI	21地区 ハ区 VII	21地区 ハ区 不明	21地区 ハ区 小計	22地区 イ区 II	22地区 イ区 1号 II	22地区 イ区 2号 II	22地区 イ区 2号 III	22地区 イ区 3号 II	22地区 イ区 3号 III	22地区 イ区 小計	22地区 ロ区	不明	総合計 R	総合計 不	総合計 L
部位			R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L	R 不 L			
頭蓋骨				1	3 3 4	1 1	3 4 6								2		11 21 4	15 3		11 38 7	1		1 3			1	2 4			14	44	17
下顎骨		40	1	1	1 2		1 1 3			1 2	1 1		2 3		1		18 23 22	9 10 7	1	27 34 30	2 2 1				5 4 3	3 3	7 9 7			37	17	40
脊椎骨		1－5		1	7	5	13					1	1		4	1	123	33		161	1		2 17	1	5 1	2 1	2 26 2			3	200	2
肋骨			2 1	5	137	29	173 1	4					4	2		1	119	83	1 10	3 213			213		25		38		2	3	430	1
肩	P				1 2		1 2										16 8	12 7		28 15					1 2	1	1 2			30		19
甲	S	9															7 2	8 2 7		15 2 9					1		2			17	2	9
骨	d																1			1											1
上	P				1	1	1 1	1					1	1	1		9 9	9 6	1	20 16			3		2		5			22		22
腕	S	10														1	6 2	1		7 3			1		1		2			9		3
骨	d	11	1	2	1 4		3 5			1		1	1 1				14 22	12 20		26 42			2		1 1		3 1			33		19
橈	P		1	1	1	1	1 3				1		1	1			2 7 10	7 3		14 15			1 1		3		1 4		1	17		23
	S	12			1		1									1 1	3 2	1		5 3			1		1		2			8		3
骨	d																3 1	1 1		4 2					1		1			1		3
尺	P				1		1										5 14	3 5	1 1	9 20		1			1 3		1 4			10		25
	S	13	1		1	1 1	2 1 1										10 9	7 3		17 12					3 1		3 1			22	1	14
骨	d	14															10	4		14												14
中	P																3 4	1 2		5 6					1		1			5		7
手	S	15・16																														
骨	d		1 2			1	2 2								1		4 5	1	1	6 6										8		8
寛	上																1 3	4		1 7						3	3			1		10
	臼	17・18				1	1										4 2	1 6	1	8 10			1		1	1	3			11		11
骨	下																1 1	1		2 1				1		1	1 1			3		2
大	P																1 3	1		1 4			2 1				2 1			3		5
腿	S	19		1			1										2 7	3 3	1	5 11					1	1	1 1		1	7	1	12
骨	d				1		1										4 2			2 4					1	2	2 1			4		6
脛	P							2					2				5 2	1	1	7 6			1		1	1	1 2			8		10
	S	20			1 1	2	3 1							1		1	14 7	4 7	1	19 16					1 1		1 1			23		18
骨	d				1 1	1	2 1				1		1				15 15	7 7	1	23 22	1				1		2			26		25
腓	P																1	4 1		4 2										4		2
	S	21			5	1	6	1			3		1	5		2	32 2	1 18 1	2	1 54 3	1		5	3	1		10			1	75	3
骨	d																	1 2		1 2			1				1			2		2
踵骨		7		1	2	1	4					2	2		1		22 2 11	13 1 4	1	36 3 16			1		2 2	1	3 3		1	15	4	19
距骨		6			2	1	3				1 1		1	1 1 1			26 9	6 10	1	32 20			1		1 1	1	1 3			34	1	27
中	P		1		1		1 1								1		17 1	1 7		1 25 1			2		2		4			2	30	1
足	S	22・23															1	6 1		6 2					1		1				7	2
骨	d				1		1										1 21 2	1 2 1	1	2 24 3										2	25	3
	基節骨		1		1	1	3										42	16		58											61	
	中節骨	24	1	1	2	1	5				1		1	2		1	49	10		60											67	
	末節骨					2	2										19	1	1	21					1		1		1		25	
破片			7	11	163	45	226	5	1	22	27	6	61	31	22	28	1,825	819	24	2,749	22	3	39	2	98	19	213	3	37		3,289	
合計			3 12 5	3 18 4	13 321 18	6 85 6	25 436 33	1 10 2	1	1 29 2	3 28	5 8	10 76 4	8 31 4	3 30 1	2 32 5	2,293	1,023	4 39 8	3,148	2 27 2	3 1	11 77 11	1 6	20 137 25	6 55 10	40 305 49	3	1 41 1	418	4,309	418
																	208 196	117 117		342 331												

〈凡　例〉　P：近位部　S：骨体　d：遠位部　R：右　不：左右不明　L：左

表102　イノシシ歯牙出土状況

出土地			部位	上顎 R	上顎 L	下顎 R	下顎 L	犬歯破片	歯破片	合計
21地区	イ		東		1		1			2
			I			1	1			2
			II上	1 1	1 1 1 1 1	1 1 1 2	1 1 1 1		4	21
			II下		1	1 1			2	5
			小計	1 1	2 1 1 1 1 1	3 2 1 2	1 2 1 1 1		6	30
	ロ		I	1 1		1				3
			II							
			III	1 1 1		1				4
			IV		1/ 1 1	1 1	1 1		1	11
			V							
			小計	1 1 1 1 1	1/ 1 1	2 1 1 1	1 1		1	18
	ハ		II	1		1 1			2	5
			III	1		1				2
			IV		1 1	1 1	1 1	1		8
			V						1	4
			VI	5 2 1/1 3 8 1 1 1 4 13 9 5	6 2 1/3 5 4 2 1 1 1 4 9	21 19 5 27 4 9 5 3 2 14 20 11	16 23 4 1/11 1 21 1 4 3 3 11 6 13	2	75	439
			VII	1 1/ 1 1 1 2 2	1 1/ 2 1 1 1 3 3	4 7 2 6 4 6 2 4 2	4 3 1 2/4 1 2 5 1 1 2 1 1 4	1	7	99
			不明	1 1 1					1	4
			小計	6 2 3/1 4 11 2 1 1 5 17 11 5	8 2 2/3 7 5 1 2 1 2 4 8 9	27 27 7 33 9 17 5 3 2 16 24 13	21 27 5 15/15 1 3 26 2 5 5 3 12 7 17	4	85	557
22地区	イ	2号	I							
			II	1		1 1	1		2	6
			II		1 1 1 1		1 1/ 1 2 2 2 1			14
		3号	II	2 2 2	1	1 2 1 2	1 1			14
			III		1	1 2 2	1/1			7
			小計	3 2 2	1 1 1 1 1 1	1 2 1 1 2 2 2	2 1 1/1 1 2 2 3 1 1		2	41
22－ロ							1/2 1			3
全体不明					1 1	1				
総合計				8 2 3/1 5 11 2 2 1 5 21 13 9	11 3 3/31 1 8 7 2 5 1 5 7 8 10	33 30 7 34 10 19 1 1 5 4 2 18 29 15	25 28 7 15/19 2 3 26 2 6 7 6 15 9 19	4	96	654

〈凡　例〉　①　I→切歯　C→犬歯　P→前臼歯　M→後臼歯　i→乳切歯　m→乳臼歯
②　1→第1　2→第2　3→第3
③　Cの項　オス／メス

ところで、捕獲とれたイノシシの令構成については上述の歯牙数などにもうかがえるが、歯牙の咬耗と萌出によって概略をみると以下のようになる。

表はdm4、M1、M2、M3の上・下左右の歯について、咬耗による数量を示したものであるが、M1萌出以前を示すdm4、M2萌出以前のM1は、咬耗がa～gとみて、そのすべての段階のM1、そしてM2が萌出してからM3が萌出完了する以前の段階のM1のh～j、M2のa～d、M3のa・bのそれぞれの最少個体数推定値、M3の萌出完了以後のM2のe～j、M3のc～nの最少個体数推定値を算出した。

図182　イノシシ　歯の咬耗度

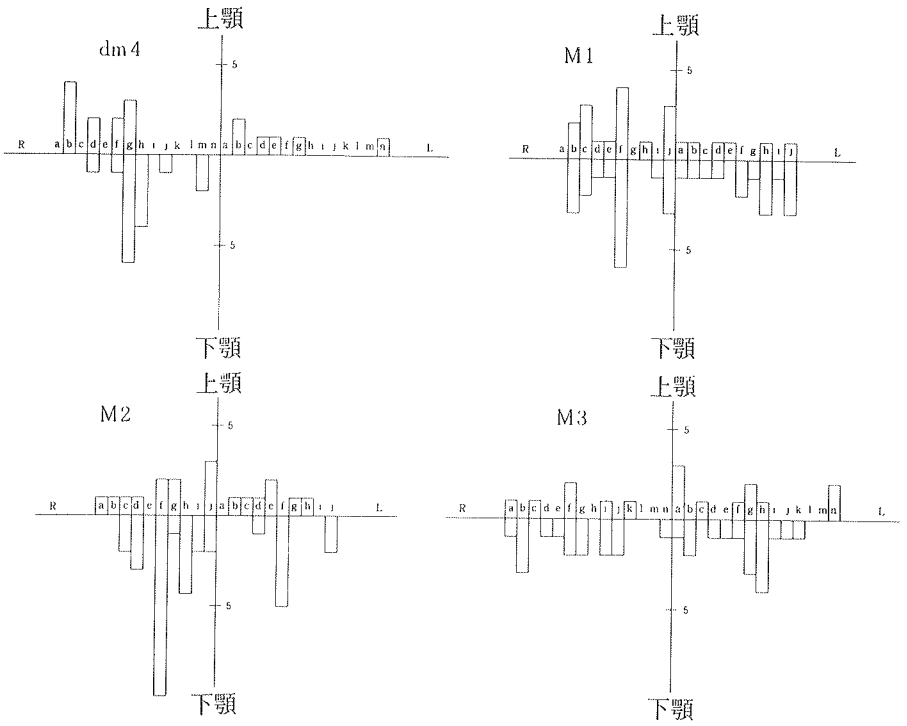


表103　年齢段階別イノシシの最少推定個体数

歯年令		歯	咬耗度	個数		最少推定数
dm4＜M1＞	0.5才未満	dm4	b	4/0 | 2/0	4/0 | 2/0	4
M1＜M2＞	0.5～1.5才	dm4	c～n	7/15 | 4/0	11/15 | 4/7	15
		M1	a～g	11/13 | 4/7		
M1M2＜M3＞	1.5～2.0才	M1	h～j	4/4 | 2/7	4/5 | 3/7	7
		M2	a～d	4/5 | 3/1		
		＜M2＞	a・b	1/4 | 3/3		
M1 M2 M3	2.0才以上	M2	e～j	7/19 | 4/7	7/19 | 7/13	19
		M3	c～n	5/11 | 7/13		
最少推定個体数						45

咬耗状況　dm4、M1、M2の場合

＜＞：未萌出
＋：エナメル質咬耗
＋＋：小窩独立
＋＋＋：同連絡
⊕：全面窩

a：＜＞
b：－－
c：＋－
d：＋＋
e：＋＋　＋
f：＋＋　＋＋
g：＋＋＋　＋＋
h：＋＋＋　＋＋＋
i：⊕・＋＋＋
j：⊕・⊕

M3の場合

a：＜＞
b：－・－・－
c：＋・－・－
d：＋・＋・－
e：＋・＋・＋
f：＋＋・＋・＋
g：＋＋・＋＋・＋
h：＋＋・＋＋・＋＋
i：＋＋＋・＋＋・＋＋
j：＋＋＋・＋＋＋・＋＋
k：＋＋＋・＋＋＋・＋＋＋
l：⊕・＋＋＋・＋＋＋
m：⊕・⊕・＋＋＋
n：⊕・⊕・⊕

この数字は先にみた四肢骨から推定された個体数はと近似する。しかし、あくまで最少個体数であり、実際はこれを上廻る数であることは云うまでもない。そして、その例構成であるが、0.5才未満は10%で少なくM₂萌出以前の若い個体1.0才未満と考えられる個体が30%というのは、先に報告した下田原貝塚に共通するが、2.0才以上の個体の42%と多いのは異なる点である。あるいは、これは島嶼と本島のような狩猟環境を反映しているかと思われる。本島における方がより豊富な個体をもつ猟場が想定され、成熟した大形の個体の捕獲が可能であったということであろう。

b．ウ　シ

出土数は少ない。21地区ハの出土層不明の下顎歯破片1点を除いて、いずれもⅠ層からの出土である。

21地区ロから下顎歯（下顎骨）が4点出土したが、四肢骨は21地区イから大腿骨が1点出土しただけである。

出土層からみても、ウシ骨は貝塚時代のものではなく、現代に近いものと思われる。

表104　ウシの出土状況

部位＼地区・層位		21－イ Ⅰ層 R	21－イ Ⅰ層 L	21－ロ Ⅰ層 R	21－ロ Ⅰ層 L	21－ハ 不明 R	21－ハ 不明 L	22－イ Ⅰ層 R	22－イ Ⅰ層 L	計
下顎歯	$dm_{1\sim3}$			1						1
	$I_{1\sim4}$			1						1
	I_1				1					1
	I_3				1					1
	破片					1				1
上・下顎歯	破片							3		3
大腿骨	～遠位部	1								1
合計		1		4		1		3		9

〈凡　例〉　R：右　L：左

古我地原貝塚出土の脊椎動物遺存体の特徴

古我地原貝塚からは、量、種ともに多くの脊椎動物の遺体が検出された。縄文期の動物骨を知る上で貴重な資料の一つになろう。上述してきた動物について、今その主要なものについて特徴となる点として概要を記すとすれば次のようになる。

節足動物・甲殻類岩礁に多棲するカニ類は食用として有用であり、多獲されたことが予想されるが、普通にはその遺骸をのこすことができない。従って、出土する量は遺骸の保存の条件にかかるので、一概にカニの捕食状況を説明できない。むしろ、海岸線の環境の推定を基に当地のカニ類の捕獲を考えることを今後の課題としたい。

脊推動物

軟骨魚綱：サメ、エイ類の骨は少なかった。南島における場合の特徴である。外海原の魚類の少ないことと符号する。

硬骨魚綱：多数の魚骨が出土している。これ程多くの骨を出土した調査はこれまでになかったであろう。そのために種類もまた多くが知られた。その半ばはブダイ類であって58.2を占め、ハタ類、ベラ類でさらに30%というように強い岩礁性を占めることになる。このハタ類の多い

ことは本貝塚での特徴としてあげられよう。

ハマフエフキ、クロダイなどの砂礫底海域に棲息する魚種は7.1%で内湾的な海での漁となろう。このような魚種構成は、この地域独特のものではなかったかと考えている。

爬虫綱：ウミガメ類があるが、数は少ない。島嶼の場合を除いてウミガメ類は少ないようである。島と本島との食料資源の供給量の違いがあるためと思われ、島嶼程こうした動物にたよることが多かったのであろう。あるいはまた、ウミガメの捕獲を当初からあてにする程の捕獲量が島ではあったと思われる。

ヘビ類の椎体がかなり多い。ただ、1個体で多数の椎骨をもつから、千数百の椎体から推定されね個体数は必ずしも多くはないが本土の塚土と比べれば明らかに多いし、また目立つ個体数については今後詳しい調査が必要であろう。既述のように大型のハブも含まれており、摂取明な捕獲が推測される。

哺乳綱：ケナガネズミ、オオコウモリの出土は南島を特徴付けて興味深いが、特に目立った捕獲量とはいえないようである。しかし当時の捕獲の方法や棲息の状況を考える上で注意すべき資料といえよう。

ジュゴンについては、特にその出土量について注意しているが、今回の調査でも特に目立った出土ではなかった。骨が骨器に利用されたにしても、歯とか骨器利用に不向きの四肢骨などは未加工品として出土することが期待されるが、それも数少なかったのである。やはり捕獲量の多くないことを予測させるのであろう。　イノシシは多くの遺骸を出土していた。犬歯による最少個体数53個体であり、臼歯の萌出状態をみると、M_3萌出後の成獣個体が19個体と最も多く、次いで<M_2>（M_2未萌出）の生後半年（1.5才）の個体が多い。棲息個体数の多い年令の個体が多くとられ、それよりも高年令個体もまた積極的に獲るといった狩猟であったとみてよいであろう。また季節的な差異を示すことも考えられる。こうした傾向は、これまでに筆者がみてきたシヌグ堂、波照間島下田原などの貝塚出土のイノシシについても云えることであり、本州の関東地方貝塚で知られる傾向でもある。

このようなイノシシ猟に欠かせかったのがイヌであろう。本貝塚からは最少推定個体数27個体のイヌの骨が出土している。沖縄の遺跡で最も多くの骨を出土し、狩猟用に飼われていたと考えられる。ただ、これだけのイヌの遺骸で出土したが埋葬例は一例もなかった。沖縄諸島の縄文時代遺跡でのイヌの埋葬例はまだ知られていない。

第8節　貝塚出土のグスク時代・近世遺物

貝塚からは土器、石器、貝製品など当時の遺物の他に、グスク時代や近世の遺物も得られている。これらは、おもに表土層および表採によるものである。遺物の種類としては、須恵器、磁器、陶質土器、陶器、簪、煙管、古銭がある。以下、順に略述する。

表105　近世遺物の出土状況

遺物＼地区	須恵器	磁器（中国産）					磁器（本土産）	陶質土器			陶器（本土産）			陶器（沖縄産）	簪	煙管	古銭	合計
	胴部	皿	碗	小杯	胴部	低部	瓶	把手	壷	蓋	碗	底部	胴部	碗				
21地区	1	1	1		2	1	1				1	1	1	1			1	12
22地区				1		1		1	1	2				2	2	1	3	14
小計	1	1	1	1	2	2	1	1	1	2	1	1	1	3	2	1	4	26

1．須恵器　（図183、図版187）

1は胴部破片である。両面にタタキ目が見られる。表面は半分程ナデ消されている。裏面は格子状のタタキ目である。器色は灰褐色を呈する。21地区、M－65、第Ⅰ層の出土。

2．磁器（図183、図版187）

青磁、白磁、青花（染付）が得られた。中国産がほとんどで、他に本土産（伊万里）が1点ある。

a．中国産

・青磁

2は蓮弁文皿である。口縁部は水平に折まりまげられる。21地区ハ、E－93、第Ⅲ層の出土。

3は底部である。畳付は幅広く、施釉されている。22地区ロ、第Ⅰ層の出土。

・白　磁

4は碗もしくは皿の底部で、底径は53㎝である。21地区イ、C－93、第Ⅰ層の出土。

5は小林の底部で、型づくりによって成形されている。畳付以外は施釉され、細かい貫入が入る。底径は2.3㎝である。22地区イ、S－116、第Ⅱ層の出土。

・青　花

6は唇下に圏線を描く、21地区ハ、D－95、第Ⅰ層の出土。

b．本土産

7は伊万里焼の瓶の胴部片で、網目文を描く。21地区ハ、C－94、第Ⅰ層の出土。

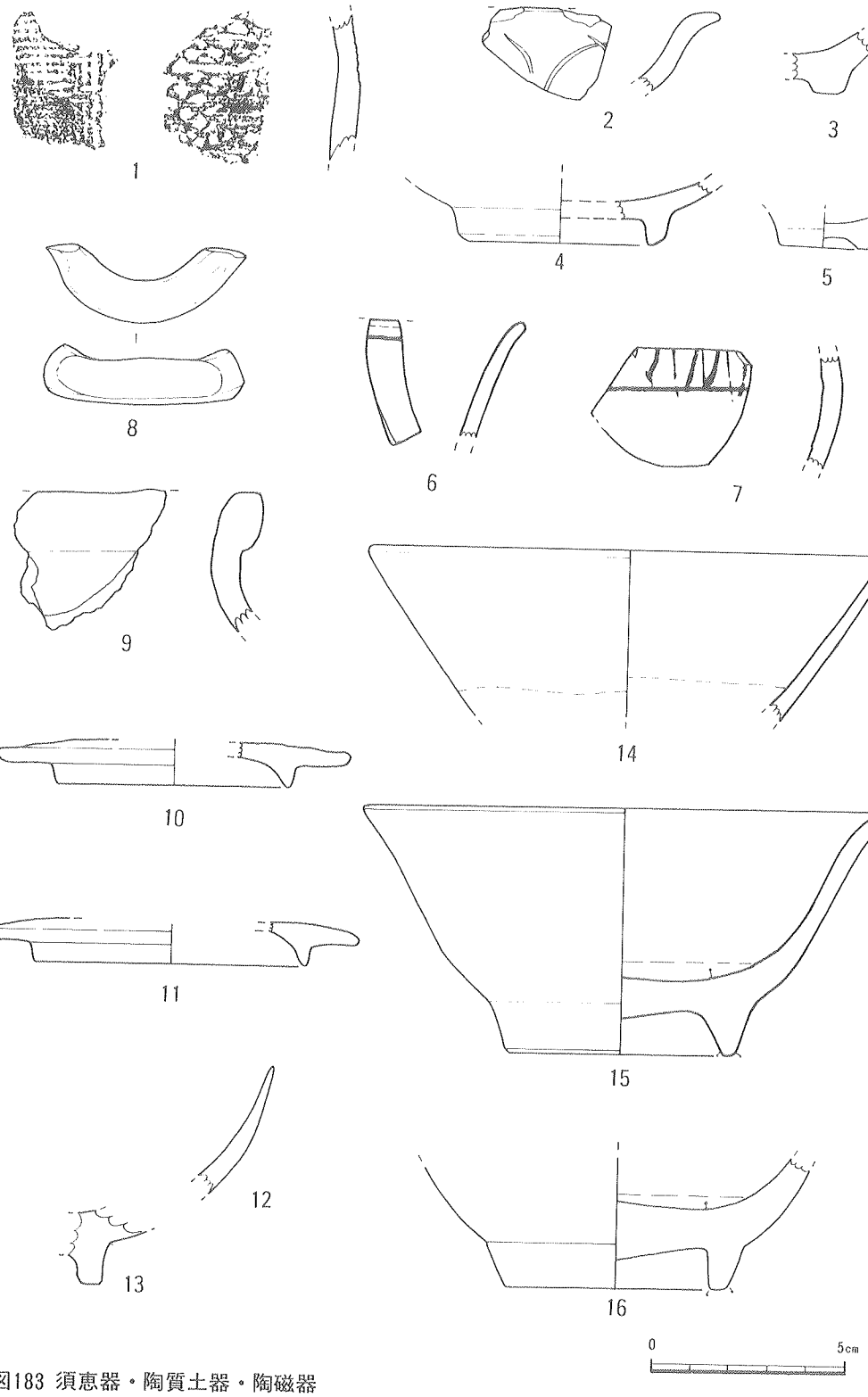


図183 須恵器・陶質土器・陶磁器

3．陶質土器（図183、図版187）

8～11の4点が得られた。胎土は精選され細かく、器色は橙褐色を呈する。

8は土鍋の把手である。22地区イ　S－116　第Ⅱ層の出土。9は壷形で、口縁部は肥厚する。22地区イ第Ⅰ層の出土。10、11は土瓶の蓋である。10はかえり部径9.0㎝、口径6.1㎝。22地区ロ　Q－105第Ⅰ層の出土。11はかえり部径9.6㎝、口径7.0㎝。

4．陶　器　（図183、図版187）

本土産と沖縄産がある。

a．本土産

12、13は接合できないが、同一個体と考えられる。唐津系の銅緑釉掛分碗ある。外面は淡緑色、内面は灰褐色を呈する。高台脇から高台内まで無釉であるが、一部高台下端に釉乗れがある。21地区ハ、い－95・96、第Ⅰ層の出土。九州陶磁文化館の大橋康二氏の御教示によるところの資料は内野山窯（佐賀県嬉野町）で17世紀後半に焼かれたものである。

b．沖縄産

14は灰釉碗で、灰釉をつけ掛けによって施釉する。外面の胴部には削りを施す。口径は13.4㎝である。22地区イ、J－100、第Ⅰ層の出土。

15、16は白釉碗である。15は底部から緩やかな丸味をもって立ち上がり、口縁部へ直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。畳付は無釉で、外面端は釉を削りとる。見込みは重ね焼の際の釉着を防ぐため輪状に削りとっている。両面に粗い貫入が入る。口径13.5㎝、底径6.0㎝、器高6.4㎝。22地区ニ　表採。16は底径5.8㎝である。畳付は無釉で、見込みは重ね焼の際の釉着を防ぐため輪状に削りとっている。両面に細かい貫入が入る。21地区ハ　E－93、第Ⅰ層出土。

5．簪　（図184、図版188）

17は頭部がスプーン状に丸くなる。ムディ、竿とも断面が六角形である。先端は六角錐を作っているが、磨滅した稜は不明瞭である。現存長12.7㎝。22地区ハ、D－115、第Ⅰ層の出土。

18は頭部が細いスプーン状になる。ムディ、竿とも断面は六角形の成形され、先端は六角錐になる。竿は大きく折りまげられている。22地区イV－114、第Ⅰ層の出土。

6．煙管（図184、図版188）

19は煙間の吸い口である。長さ5.5㎝、吸い口部径7㎜。羅字接続部は横から押しつぶされ、楕円形を呈し、直径1.1㎝を測る。22地区イW－114 第Ⅰ層の出土。

7．古　銭　（図184、図版188）

4点得られた。5．6は完形品、6．7は破損品である。いずれも寛永通寶（初鋳年代1636年）

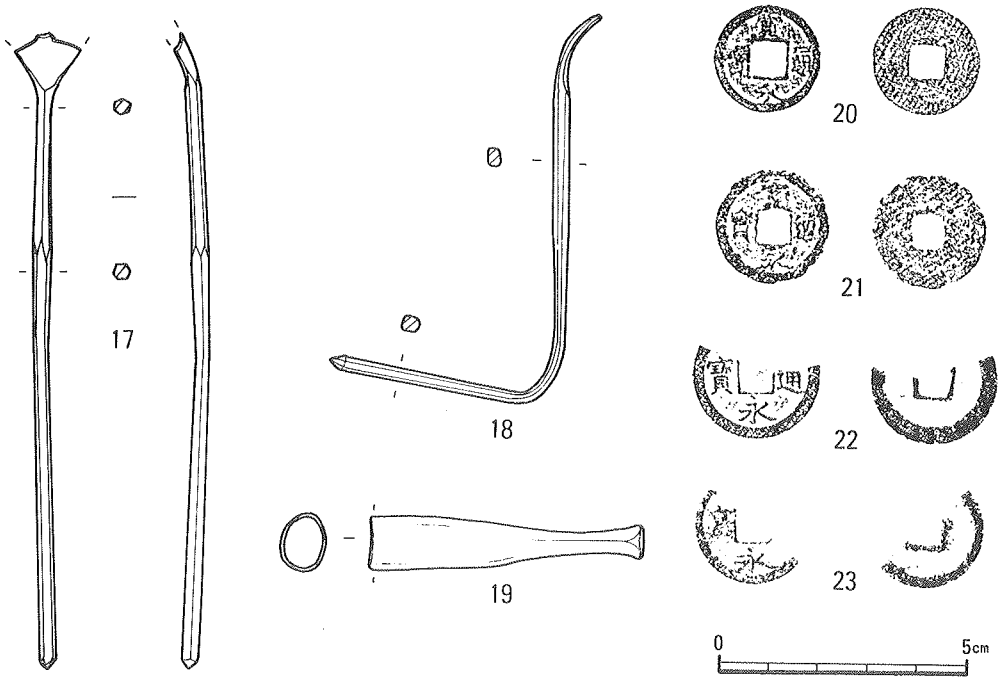


図184　簪、煙管、古銭

である。

表106　古銭観察一覧

遺物番号	直径(cm)	厚さ(mm)	孔 縦×横(mm)	重量(g)	観察事項	出土地区	出土地点	層位
20	2.2	1.1	7.0×7.0	2.4	文字は磨滅している。	22－イ	－	表採
21	2.3	0.9	7.0×6.5	1.6	文字はやや鮮明であるが、銭自体は磨滅している。	22－ハ	D-E-120	1
22	2.5	1.2	□×6.0	1.8	文字は鮮明である。	21－イ	K－67	1
23	2.4	1.1	□×□	1.2	「寶」の字は青銷が付着。	22－ロ	い－107	1

第9節　古我地原貝塚の人骨

21－イ　1，女性 壮年期　小柄 古い形質は認められない

2，女性 年不明　小柄

3，乳児 1年以内

＊大腿骨の中に男性と考えられるものがある。

21－ロ　1，未成年（高齢ではない）歯根は完成、頭蓋骨の縫合は完成せず歯の摩耗

21－ハ　1，幼児乳歯の下に永久歯が埋覆している。

22－イ　1，性別、年齢不明

第7章　収　束

今回の調査成果について前章までに述べた。ここではその成果を踏まえて若干の考察と問題点についてふれまとめとしたい。

本貝塚は台地上に居住地域、崖下に貝塚を形成するという高宮編年前Ⅳ期前半（沖縄貝塚時代前期前半）の時期の一般的な立地のあり方（沖縄本島中・南部）を示すものの、出土土器の大半がこれまで奄美系土器と呼称されてきた一群の土器により占められていることが特徴の1つである。

本県においてこのような状況を示す遺跡の例は少なく、具志川島遺跡群[註1]、浦添貝塚[註2]、隅原遺跡[註3]など数例が知られているだけである。この種遺跡の性格や文化内容などは判然としない部分が多く、諸説に分かれているところでありその検討は今後の課題である。

さて、本貝塚の調査では遺構の検出、多種多様な遺物の出土があり、文化内容の一端を窺うことができた。

まず、遺構についてみよう。22地区の東側（イ区）と西側（ロ区）で竪穴遺構、集石炉、焼土、ピット群などが検出され、21地区では岩陰部の前庭付近や結晶片岩の凹部（ロ区南西側）で焼土が認められた。

22地区イは集石炉（第1号遺構）・竪穴住居跡（第2号遺構）・投棄場（第3号遺構）の3基が10m内外という近接したかたちで検出され、1つのセット関係を示すようであった。これまで該時期の遺構としては津堅島キガ浜貝塚[註4]の竪穴住居・伊武部貝塚[註5]・具志川島遺跡群[註6]の集石炉などが報告され、奄美においてもケジⅠ遺跡[註7]・嘉徳遺跡[註8]・宇宿貝塚[註9]などで遺構の検出が知られているが、本遺跡のような検出例は初めてであり注目される。

22地区ロでは竪穴遺構が3基（第4～第6号遺構）、屋外炉（第7号遺構）、性格不明の遺構（第8号遺構）、焼土群・ピット群が集中して検出された。約14m×16mのほぼ円形状の平面がすり鉢状にくぼんだ底面を中心としてみられ、これまでに類例の報告をきかない。特に一定幅の焼土が壁面を廻る第4号遺構は注目される。

また、3基の竪穴遺構は第6号が第5号を切っており新旧が判明するものの、第6号と第4号は接するような状況で判然としなかった。第6号は北西側（第4号と接する側の反対側）に径約1mの掘り込まれた炉を有す。出土土器からすればほとんど時間差はみられず、これらの竪穴遺構がどのように関連していたのか現段階では明示し得ない。

この凹部の東南側に集中するピット群、点々とみられる焼土などある特定の「場」を想定させる。

21地区の岩陰部前庭近くで検出された焼土はすでに知られているように[註10]、岩陰部を利用していたことが窺われるが、仲泊第三貝塚[註11]のように住居としていたかどうかは判然としない。また、22地区ロの北側崖下になる21地区ハにおいては、第Ⅵ層・第Ⅶ層に比較的広い範囲（大体2m

四方）に焼土がみられたが、包含層にサンドウィチ状に狭まれた包含層の傾斜に沿ってみられることから上方から投げ込まれたものと解された。

ただ、これら遺構の全体的な相互関係をつかむまでには至らなかったが、集石炉については伊武部貝塚や宇宿貝塚などでも検出されており、該時期には普通にあったものと思われる。また、22地区ロの遺構群についてはいわゆる食料残滓（貝、獣魚骨など）が皆無の状態であったことは暗示的で、類例資料の増加を俟って検討したい。

次に出土遺物についてみると、それぞれ特徴的な面を有していた。

土器は前述のとおり、いわゆる奄美系土器が主体をなす。これらは大型の資料にも比較的恵まれ、それぞれの型式でより明確になった点も多々窺えた。

今回得られた資料を尖底、平底のグループに大別した。第1群とした尖底グループには面縄前庭式・仲泊式がある。今回この両者の中間タイプと目される資料も割りと得られており、これまで不明とされていた仲泊式の出自[註12]について一つの可能性を示せたのは大きな成果であった。

面縄前庭式は河口貞徳氏により設定[註13]された型式であるが、沖永良部神野貝塚の調査成果[註15]により、現行編年より古く位置づけられることや細分の可能性が示された。具志川式[註15]・神野C式・面縄前庭式がそれで、本貝塚では面縄前庭式が主体をなす。また、面縄前庭式の壷形の量的な出土は本貝塚の特徴の1つとしてあげられよう。

仲泊式は当真嗣一、上原静の両氏により提唱され[註16]、近年資料も増加してきたが不明な点の多い土器である。今回、面縄前庭式との関連がつかめたが、どのように後に展開していくかは今後の検討課題である。

中間タイプのものはその他の資料として扱ったが、ケジⅠ遺跡などにも見られ今後資料の増加とともに両型式の関係がより明確になっていくものと考えられる。

第2群とした平底のグループには面縄東洞式・嘉徳Ⅰ・Ⅱ式・神野E式・伊波式・荻堂式・無文の資料がある。量的には前2者が主体をなし、他はそれほど多くない。

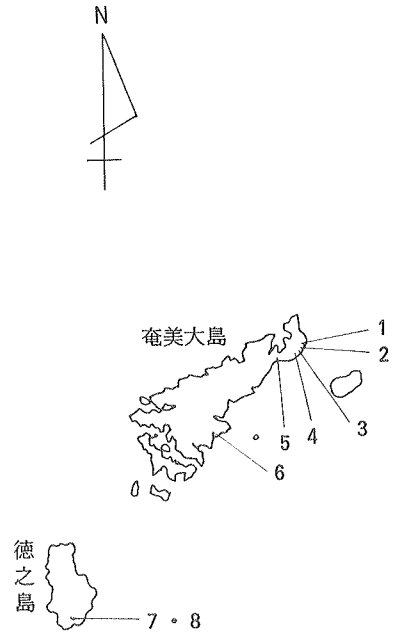
面縄東洞式では図79の296に示した皿形、図39の40、図80の297・298に示した壷形は注目される。前者の器種は市来式土器によく見受けられるものとされ[註17]、市来式との関連が考えられる。後者はほとんど類例資料の報告を聞かないもので、今後の資料の増加を俟ちたい。深鉢形では器形・大きさなどかなり明確になった。図84の343の資料は5個配された山、2段肥厚など初めての資料で注目される。

また、aタイプとしたものは本型式からはずれるものかと考えられ、特に図82の316、317は貝殻を施文具として使用しており、仲泊式との関連も考えられる。

嘉徳Ⅰ式はA・Bに分類されているが、今回は爪形文（押し引き文）＋沈線文で一括した。f、gタイプは伊波式、大山式を思わせるような資料もあり注目される。また、口縁部の上面観が方形を呈するものも目立った。

嘉徳Ⅱ式は量的には多くないが、図99の499は口縁部の上面観が菱形状になり、相対するよ

No.	遺跡名	所在地
1	宇宿貝塚	奄美大島笠利町
2	宇宿高又遺跡	〃 〃
3	下山田遺跡	〃 〃
4	ケジ遺跡	〃 〃
5	ウフタ遺跡	〃 竜郷町
6	嘉徳遺跡	〃 瀬戸内町
7	面縄第3貝塚	徳之島伊仙町
8	面縄第4貝塚	〃 〃
9	神野貝塚	沖永良部島知名町
10	久里原貝塚	伊平屋島伊平屋村
11	具志川島遺跡群	具志川島伊是名村
12	屋那覇島遺跡群	〃 〃
13	浜崎貝塚	伊平島伊江村
14	墨屋原遺跡	屋我地島名護市
15	伊波貝塚	沖縄本島石川市
16	**古我地原貝塚**	〃 〃
17	伊武部貝塚	〃 恩納村
18	仲泊第4貝塚	〃 〃
19	仲泊第2貝塚	〃 〃



No.	遺跡名	所在地
20	隅原遺跡群	〃 具志川市
21	渡具知東原貝塚	〃 読谷村
22	地荒原遺跡	〃 具志川市
23	地荒原貝塚	〃 〃
24	室川貝塚	〃 沖縄市
25	知花遺跡	〃 〃
26	キガ浜貝塚	津堅島勝連町
27	平安名貝塚	沖縄本島 〃
28	東貝塚	渡名喜島渡名喜村
29	浦添貝塚	沖縄本島浦添市
30	川原貝塚	〃 玉城村
31	百名第2貝塚	〃 〃
32	宇和川半洞穴遺跡	〃 〃
33	熱田原貝塚	〃 知念村
34	ザカン原遺跡	〃 具志頭村
35	古座間味貝塚	座間味島座間味村
36	ウタハ貝塚	阿嘉島 〃
37	名城前原遺跡	沖縄本島糸満市
38	喜屋武同村貝塚	〃 〃

図185　奄美系土器出土分布

うに２種類の山を配しており注意される。498もあまり見られない器形である。

神野E式は伊波式に先行するものとされるが、今回は伊波式ともども小破片の資料だけで、詳細については示し得なかった。

無文の資料については上記いずれの型式に伴うか不明である。ただ、図103の558は口縁部の形状（２種類の山が相対するようにみられる）からすれば嘉徳Ⅱ式に近いように思われる。底部では底面近くに押し引き文を施すものや、それに沈線文を加える脚台の資料などが注目されよう。

石器では豊富に出土した敲打器類が本貝塚の特色である。比較的定形化しているようであるが他遺跡からの報告をほとんど聞かない。本貝塚独特のものなのか今後の資料を俟ちたい。

貝製品ではビードの出土量が豊富で、同様な状況を示す沖永良部神野貝塚[註18]との関連が注目される。また、螺蓋製貝斧が22地区イ第3号遺構から集中的に出土し、機能的な面を暗示しているようでもあり注意される。

骨製品も種類・量とも豊富でヤス状の刺突具、クジラ、ジュゴンの骨を利用した骨輪など注目される標品も多い。

石製品では図167に示す彫刻石製品の資料が注目される。骨・貝製の資料との材質の差は何を意味するのか興味深い。

自然遺物は貝類・獣魚骨類が多量に得られたが、22地区ロにおいて皆無であることは発掘途中でも注意[註19]された。どのような意味をもつのかは今後の類例遺跡を俟って検討したい。

最後に本貝塚について考えてみよう。これまでの状況からすれば、本貝塚は具志川島遺跡群沖永部神野貝塚に後続し、ケジⅠ遺跡・面縄第４貝塚[註20]と同様な時期に位置づけられるようであるが、本貝塚ほど嘉徳系（面縄東洞式・嘉徳Ⅰ、Ⅱ式）土器を出土する遺跡はみられない。本貝塚に特徴的な現像なのか今後の検討課題である。

また、本貝塚のような奄美系土器を主とする遺跡は少ないが、奄美系土器を出土する遺跡は比較的多い（図185）。これらの関係が明確になればこの時期をめぐる問題もよりはっきりしてくるとともに、中山清美氏が指摘しているよう[註21]に奄美の遺跡が増加するにつれてより奄美、沖縄の関係がはっきりしてくるものと思われる。

古我地原貝塚の属する時期の様相が判然としない点が多く、現況では本貝塚の特徴だけを示す結果となったが、類例資料、遺跡の増加を期待するとともに、今後さらに高宮氏の分布圏の問題など詳細な検討を重ねることにより、南島の土器文化の状況が解明されてくると思われる。

註

註１　安里嗣淳他「具志川島遺跡群第Ⅰ次調査報告書」『伊是名村文化財報告書第１集』1977年

註２　新田重清「浦添貝塚調査概報」『南島考古』創刊号　沖縄考古学会　1970年

註３　高宮廣衛・他「隅原遺跡発掘調査概報」『沖国大考古』創刊号　沖縄国際大学考古学研究室1976年

註４　金武正紀・比嘉春美「津堅キガ浜貝塚発掘調査報告書」『沖縄県文化財報告書第17集』1978年

註５　上原静・他「伊武部貝塚発掘調査報告書」『沖縄県文化財報告書第51集』1983年

註６　安里嗣淳・他「具志川島遺跡群第４次発掘調査報告書」『伊是名村文化財調査報告書　第６集』1981年

註７　長野真一「ケジ第Ⅰ・Ⅲ遺跡」鹿児島県教育委員会　1986年

註８　河口貞徳・他「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第10号　1974年

註９　河口貞徳・他「宇宿貝塚」『鹿児島考古』第13号　1979年

註10　沖縄考古学会編『石器時代の沖縄』1978年

註11　「仲泊第３・４貝塚」恩納村教育委員会

註12　高宮廣衛「南島文化概論」『縄文文化の研究６　続縄文・南島文化』雄山閣　1982年

註13　河口貞徳「奄美における土器編年について」『鹿児島考古』第９号　1974年

註14　高宮廣衛・下地傑・安里和美・大城広江「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報」『沖国大考古』第７号　1985年

註15　高宮廣衛・安里嗣淳「具志川式土器」『沖縄考古学会発表要旨』1986年

註16　当真嗣一・上原静「仲泊式土器」『沖縄考古学会発表要旨』1981年

註17　河口貞徳・出口浩「草野貝塚」『鹿児島考古』第１号　1952年

註18　ａ．高宮廣衛・玉城安明・照屋孝・仲村ゆりか・山内盛尚「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その２）」『沖国大考古』第８号　1985年

ｂ．高宮廣衛・仲宗根求・宮里信勇「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その３）」『沖国大考古』第９号　1987年

註19　座間味政光・島袋洋・他『古我地原貝塚発掘調査速報』1984年

註20　河口貞徳「面縄第４貝塚」

註21　中山清美「先史時代における奄美と沖縄」『笠利町郷土館報』創刊号1981年

沖縄県文化財調査報告書第84集

石川市古我地原貝塚

—沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事
に伴う緊急発掘調査報告書（6）—

本文編

印刷　昭和62年12月21日
発行　昭和62年12月25日

発行　沖縄県教育委員会
編集　沖縄県教育庁文化課
〒900 那覇市旭町1番地
沖配ビル6階
TEL 0988(66)2731
印刷　〈協〉丸正印刷